

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第59集

よし だ じょう  
吉田城遺跡 II

— 愛知県東三河事務所地点の調査 —

1995

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



調査区上空より吉田城方面をみる



## 序

豊橋市に所在する吉田城は、古くは今橋城と呼ばれ、戦国時代の永正2年（1505）に牧野古白により築城されたといわれています。以後、東三河支配の拠点として、吉田城をめぐる多くの戦いが行われました。

近世の吉田城は、天正18年（1590）に徳川家康の関東移封とともに池田輝政（照政）が入封して、城域を拡大し、本丸・二の丸・三の丸と外堀を組み合わせた様式の城郭と城下町の町割りを計画した。しかし、慶長5年（1600）に関ヶ原の戦いの功績により姫路に転封となり、その後入城した9家22代の譜代大名が財政的にこの計画を実現することができずに、明治に至っている。

このたび、愛知県東三河事務所の建て替えに伴い東三河総合庁舎を建設することが計画され、埋蔵文化財の事前調査が必要となりました。このため、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じ、県総務部より委託を受けて、平成4年度から5年度に発掘調査を実施するとともに、同5年度と6年度には報告書作成事業を実施してまいりました。

調査の結果、江戸時代の遺構・遺物だけでなく、奈良時代や鎌倉時代の遺構・遺物も発見され、この地に古代以来、人々が連綿と生活していたことが確認されました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対して御理解、御協力を賜った関係諸機関、並びに、発掘調査・整理作業に参加協力していただきました多くの方々に厚く御礼を申し上げます次第であります。

平成7年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安部 功

## 例 言

1. 本書は、<sup>あいちけんとはしはつちょうどおり</sup>愛知県豊橋市八町通に所在する<sup>よしだじょういせき</sup>吉田城遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は愛知県総務部が進めている東三河総合庁舎建設に伴う事前調査として、県総務部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査対象面積は、平成4年度が2,600㎡、平成5年度が2,700㎡で、計5,300㎡である。
3. 調査期間は平成5年1月～3月と同年4月～7月であり、調査に引き続き平成5年度・6年度には報告書作成のための整理作業を実施した。
4. 調査担当者は、以下の通りである。  
平成4年度 都築暢也(本センター主査)・杉浦茂(同調査研究員)・小嶋廣也(同)  
平成5年度 水谷寛明(本センター調査研究員)・小嶋廣也(同)
5. 調査に当たっては次の各関係機関から御指導・御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県総務部・豊橋市教育委員会  
豊橋市美術博物館
6. 遺物の整理、製図等については次の方々の協力を得た。  
奥村勝信・伊藤直子(調査研究補助員)・中島たづ子(発掘調査補助員)  
石川倫子・中島由美子・柵木えみ子・和田ちか子・中桐信子・藪田久子・河野実佳子・清水真理子・中西和子・水野多栄・佐野香恵・山本章子(整理補助員)  
朝岡恵美子・稲垣智子・岩崎由美・大羽由加里・河村ひろみ・斉藤夏美・佐藤弘子・志賀三津子  
鈴木智子・鈴木佳江・新美厚子・新美恵子・久永弘子・日和田智世・福田妙子・堀田可代子・森 佳重・山本衣江(整理作業員)  
加藤公代・小里恭子・深見朋子(学生) (敬称略)
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
8. 遺構番号は、次のアルファベットによる分類記号と、グリッド毎に通し番号を付し直して表記している。  
SA: 柵列      SB: 建物・竪穴住居      SD: 溝・堀      SE: 井戸      SK: 土坑  
SS: 石列      Pit: 柱穴      SX: その他
9. 本書の執筆及び編集は、小嶋が担当したが、第Ⅰ章第1節(1)・第Ⅲ章第1節は杉浦茂、第Ⅰ章第2節(1)・第Ⅱ章第1節は水谷寛明、第Ⅳ章第2節(2)は松田訓、第Ⅴ章第1節は(株)パリノ・サーヴェイ、第Ⅴ章第2節は堀木真美子が分担執筆し、文責は各文末に記した。また、遺物の写真撮影は、奥村勝信が行った。
10. 本書をまとめるに当たり、次の各機関・各氏の御指導・御協力を得た。  
愛知大学総合郷土研究所・豊橋市中央図書館・豊橋市美術博物館  
赤羽一郎・岩原 剛・遠藤才文・大橋康二・尾野善裕・金子健一・後藤建一・後藤清司  
城ヶ谷和広・高橋洋充・高橋延年・檜崎彰一・贅 元洋・新田 洋・深井正敏・前川嘉宏  
増山真一郎・松井直樹・松岡敬二・村上伸之・森 勇一・森川幸雄 (五十音順、敬称略)
11. 調査記録は本センターで保管している。
12. 出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

# 目次

第I章 調査概要と基本層序 .....	1		
第1節 遺跡をめぐる環境 .....	2		
1. 地理的環境 ... 2	2. 歴史的環境 ... 4		
第2節 調査概要 .....	6		
1. 調査史 ... 6	2. 調査に至る経緯 ... 8	3. 調査の経過 ... 9	
4. 調査日誌抄 ... 11			
第3節 基本層序 .....	12		
第II章 古代の遺構と遺物 .....	13		
第1節 古代の遺構 .....	14		
1. 概要 ... 14	2. 柱穴列 ... 15	3. 土坑 ... 16	
第2節 古代の遺物 .....	18		
1. 概要 ... 18	2. 出土遺物 ... 19		
第III章 中世の遺構と遺物 .....	21		
第1節 中世の遺構 .....	22		
1. 概要 ... 22	2. 溝 ... 23	3. 竪穴住居跡 ... 24	4. 井戸 ... 25
5. 集石遺構 ... 26			
第2節 中世の遺物 .....	27		
1. 概要 ... 27	2. 出土遺物 ... 28		
第IV章 近世の遺構と遺物 .....	31		
第1節 近世の遺構 .....	32		
1. 概要 ... 32	2. 外堀 ... 34	3. 溝 ... 35	4. 柵列跡 ... 39
5. 石列 ... 41	6. 建物跡 ... 42	7. 井戸 ... 46	8. 土坑 ... 49
9. 明治期以降の遺構 ... 57			
第2節 近世の遺物 .....	58		
1. 陶磁器類 ... 58			
分類 ... 58	統計方法 ... 64	概要 ... 65	
SD101 ... SD129 ... SD102 ... SE106 ... SE104 ... SE107 ... SK180 ...			
SK032 ... SK092 ... その他の遺構 ... 検出 ... その他			
2. 焼塩壺 ... 124	3. 瓦類 ... 127	4. 人形類 ... 132	5. 木製品 ... 135
6. 金属製品 ... 140	7. 石・ガラス製品 ... 143	8. 近代の遺物 ... 146	
第V章 科学分析 .....	147		
第1節 胎土重鉍物分析 .....	148		
1. 焼塩壺 ... 148	2. 瓦類 ... 152		
第2節 中世の井戸出土の自然遺物 .....	160		
第VI章 総括とまとめ .....	161		
第1節 屋敷地の検証 .....	162		
第2節 吉田城遺跡における近世陶磁器類組成と他遺跡との比較 ...	170		
第3節 まとめ .....	194		
付 表 .....	201		

## 図版目次

- 図版 1 遺構配置図 (1)  
図版 2 遺構配置図 (2)  
図版 3 遺構配置図 (3)  
図版 4 遺構配置図 (4)  
図版 5 遺構配置図 (5)  
図版 6 遺構配置図 (6)  
図版 7 遺構配置図 (7)  
図版 8 遺構配置図 (8)  
図版 9 調査区周辺 (空撮写真)  
図版10 吉田城絵図 (1) 「吉田藩士屋敷図」  
図版11 吉田城絵図 (2) 「吉田御城内惣絵図」・「仮吉田城図」  
図版12 遺構 (1) 92年度調査区全景 (空撮写真)  
図版13 遺構 (2) 93年度調査区全景 (空撮写真)  
図版14 遺構 (3) 古代・中世の遺構  
図版15 遺構 (4) 近世の遺構 (1) 外堀・屋敷地境 1 (溝・堀跡)  
図版16 遺構 (5) 近世の遺構 (2) 屋敷地境 2 (溝・柵列)  
図版17 遺構 (6) 近世の遺構 (3) 屋敷地 4 (全景・柱痕・井戸断ち割り状況)  
図版18 遺構 (7) 近世の遺構 (4) 屋敷地 6 (全景・土坑断ち割り状況・遺物出土状態)  
図版19 遺構 (8) 近世の遺構 (5) 屋敷地 7 (建物跡・井戸断ち割り状況)  
図版20 遺構 (9) 近世の遺構 (6) 屋敷地 7 (遺物出土状態)・屋敷地 5 (井戸断ち割り状況・遺物出土状態)・屋敷地 2 (建物跡)  
図版21 遺構 (10) 近世の遺構 (7) 屋敷地 2 (遺物出土状態・建物跡・井戸断ち割り状況)  
図版22 遺物 (1) 古代・中世の遺物  
図版23 遺物 (2) 近世の遺物 (1) 供膳具 1 (椀類 1)  
図版24 遺物 (3) 近世の遺物 (2) 供膳具 2 (椀類 2)  
図版25 遺物 (4) 近世の遺物 (3) 供膳具 3 (椀類 3)  
図版26 遺物 (5) 近世の遺物 (4) 供膳具 4 (椀類 4・小椀類 1)  
図版27 遺物 (6) 近世の遺物 (5) 供膳具 5 (小椀類 2・皿類 1)  
図版28 遺物 (7) 近世の遺物 (6) 供膳具 6 (皿類 2)  
図版29 遺物 (8) 近世の遺物 (7) 供膳具 7 (皿類 3)  
図版30 遺物 (9) 近世の遺物 (8) 供膳具 8 (鉢類)  
図版31 遺物 (10) 近世の遺物 (9) 調理具  
図版32 遺物 (11) 近世の遺物 (10) 貯蔵具  
図版33 遺物 (12) 近世の遺物 (11) 灯火具・火具  
図版34 遺物 (13) 近世の遺物 (12) 化粧具・神仏具・喫煙具・供膳具 9 (皿類 4)  
図版35 遺物 (14) 近世の遺物 (13) 調度具・蓋類 1  
図版36 遺物 (15) 近世の遺物 (14) 蓋類 2  
図版37 遺物 (16) 近世の遺物 (15) 焼塩壺・瓦類  
図版38 遺物 (17) 近世の遺物 (16) 人形類・木製品  
図版39 遺物 (18) 近世の遺物 (17) 金属製品・石製品  
図版40 遺物 (19) 近代の遺物

## 挿図目次

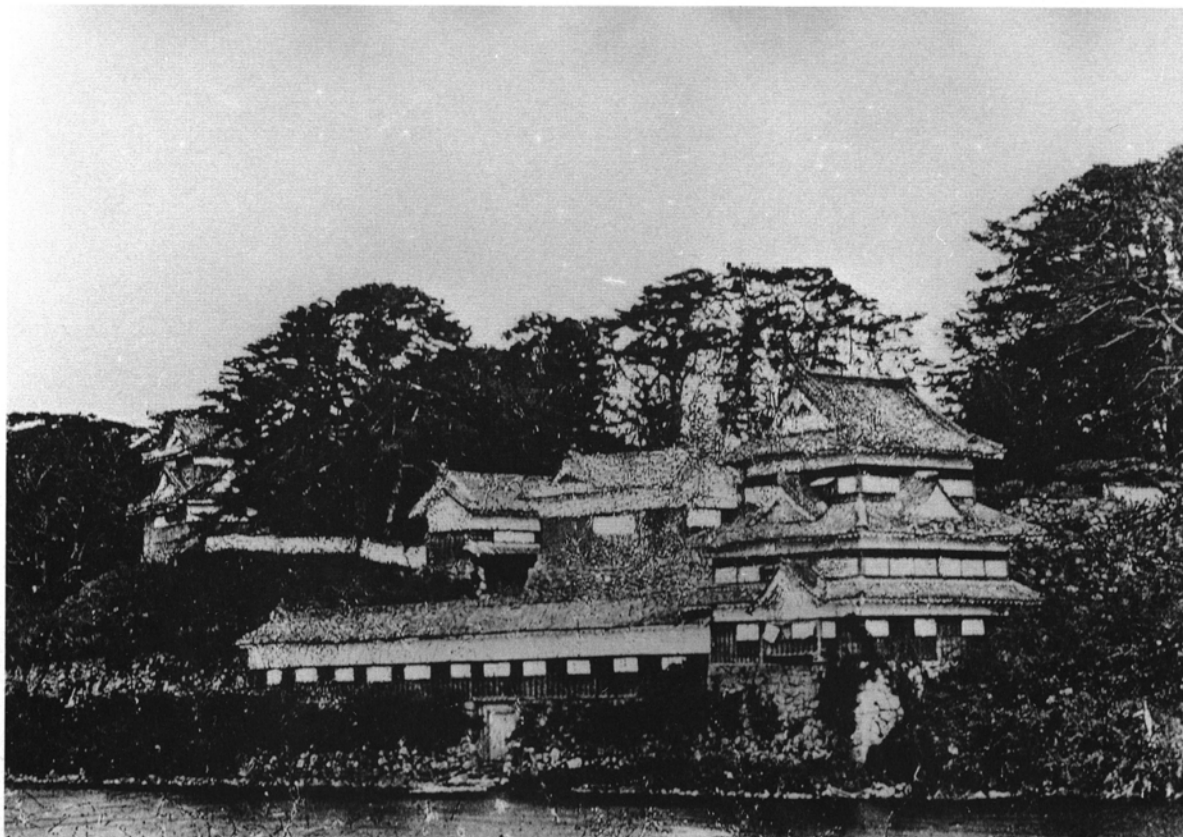
<p>第1図 東三河平野の第四紀層の模式的地質 断面図 ..... 2</p> <p>第2図 吉田城遺跡の自然立地 ..... 3</p> <p>第3図 吉田城遺跡周辺の遺跡分布図 ..... 5</p> <p>第4図 調査区位置図 ..... 7</p> <p>第5図 「吉田藩土屋敷図」 ..... 8</p> <p>第6図 発掘作業風景 ..... 10</p> <p>第7図 現地説明会風景 ..... 11</p> <p>第8図 A区北壁セクション模式図 ..... 12</p> <p>第9図 古代主要遺構配置図 ..... 14</p> <p>第10図 柱穴列(SA001)平面図・断面図 ..... 15</p> <p>第11図 柱穴断面図 ..... 15</p> <p>第12図 SK132・Pit1195平面図・断面図 ..... 17</p> <p>第13図 SK133平面図・断面図 ..... 17</p> <p>第14図 古代遺物分類図 ..... 18</p> <p>第15図 古代の遺物(1) ..... 19</p> <p>第16図 古代の遺物(2) ..... 20</p> <p>第17図 中世主要遺構配置図 ..... 22</p> <p>第18図 溝断面図 ..... 23</p> <p>第19図 SB001・SB002平面図・断面図 ..... 24</p> <p>第20図 SE001平面図・断面図 ..... 25</p> <p>第21図 SX111・SX103平面図・断面図 ..... 26</p> <p>第22図 中世遺物分類図 ..... 27</p> <p>第23図 中世の遺物(1) ..... 28</p> <p>第24図 中世の遺物(2) ..... 29</p> <p>第25図 中世の遺物(3) ..... 30</p> <p>第26図 近世主要遺構配置図 ..... 33</p> <p>第27図 外堀(SD101)断面図 ..... 34</p> <p>第28図 溝断面図(1) ..... 36</p> <p>第29図 SD148・SD149・SA101・SA102平面 図・断面図 ..... 37</p> <p>第30図 溝断面図(2) ..... 37</p> <p>第31図 柵列平面図・断面図 ..... 40</p> <p>第32図 SS101平面図 ..... 41</p> <p>第33図 SB101・SB102・SB103・SA108・ SA109平面図・断面図 ..... 43</p> <p>第34図 SB107平面図・断面図 ..... 44</p> <p>第35図 SB105・SB106平面図・断面図 ..... 45</p> <p>第36図 柱痕平面図・断面図 ..... 45</p> <p>第37図 SE106・SE101・SE103断面図 ..... 47</p> <p>第38図 SE104・SE107・SE107断面図 ..... 48</p> <p>第39図 SK013・SK053平面図・断面図 ..... 49</p> <p>第40図 SK092・SK094・SK095・SK102平面 図・断面図 ..... 51</p> <p>第41図 SK179・SK180遺物出土状態図 ..... 53</p>	<p>第42図 SK226・SK289・SK289・SK340平 面図・断面図 ..... 55</p> <p>第43図 暗渠(SD201)断面図 ..... 57</p> <p>第44図 近世陶磁器類分類図(1) ..... 59</p> <p>第45図 近世陶磁器類分類図(2) ..... 61</p> <p>第46図 近世陶磁器類分類図(3) ..... 63</p> <p>第47図 近世出土陶磁器類の用途組成 ..... 65</p> <p>第48図 近世遺構出土陶磁器類の用途組成 ..... 66</p> <p>第49図 SD101出土陶磁器類の用途組成 ..... 67</p> <p>第50図 近世の遺物(1) SD101① ..... 68</p> <p>第51図 近世の遺物(2) SD101② ..... 69</p> <p>第52図 近世の遺物(3) SD101③ ..... 70</p> <p>第53図 近世の遺物(4) SD101④ ..... 71</p> <p>第54図 近世の遺物(5) SD101⑤ ..... 72</p> <p>第55図 近世の遺物(6) SD101⑥ ..... 73</p> <p>第56図 近世の遺物(7) SD101⑦ ..... 74</p> <p>第57図 近世の遺物(8) SD101⑧ ..... 75</p> <p>第58図 SD129出土陶磁器類の用途組成 ..... 76</p> <p>第59図 近世の遺物(9) SD129① ..... 77</p> <p>第60図 近世の遺物(10) SD129② ..... 78</p> <p>第61図 近世の遺物(11) SD129③ ..... 79</p> <p>第62図 近世の遺物(12) SD129④ ..... 80</p> <p>第63図 近世の遺物(13) SD129⑤ ..... 81</p> <p>第64図 近世の遺物(14) SD129⑥ ..... 82</p> <p>第65図 SD102出土陶磁器類の用途組成 ..... 83</p> <p>第66図 近世の遺物(15) SD102① ..... 84</p> <p>第67図 近世の遺物(16) SD102② ..... 85</p> <p>第68図 SE106出土陶磁器類の用途組成 ..... 86</p> <p>第69図 近世の遺物(17) SE106① ..... 87</p> <p>第70図 近世の遺物(18) SE106② ..... 88</p> <p>第71図 近世の遺物(19) SE106③ ..... 89</p> <p>第72図 SE104出土陶磁器類の用途組成 ..... 90</p> <p>第73図 近世の遺物(20) SE104① ..... 91</p> <p>第74図 近世の遺物(21) SE104② ..... 92</p> <p>第75図 SE107出土陶磁器類の用途組成 ..... 93</p> <p>第76図 近世の遺物(22) SE107 ..... 94</p> <p>第77図 SK180出土陶磁器類の用途組成 ..... 95</p> <p>第78図 近世の遺物(23) SK180① ..... 96</p> <p>第79図 近世の遺物(24) SK180② ..... 97</p> <p>第80図 SK032出土陶磁器類の用途組成 ..... 98</p> <p>第81図 近世の遺物(25) SK032 ..... 99</p> <p>第82図 SK092出土陶磁器類の用途組成 ..... 100</p> <p>第83図 近世の遺物(26) SK092 ..... 101</p> <p>第84図 その他の遺構出土陶磁器類の用途組成 ..... 102</p> <p>第85図 近世の遺物(27) その他の遺構① ..... 103</p>
--	--



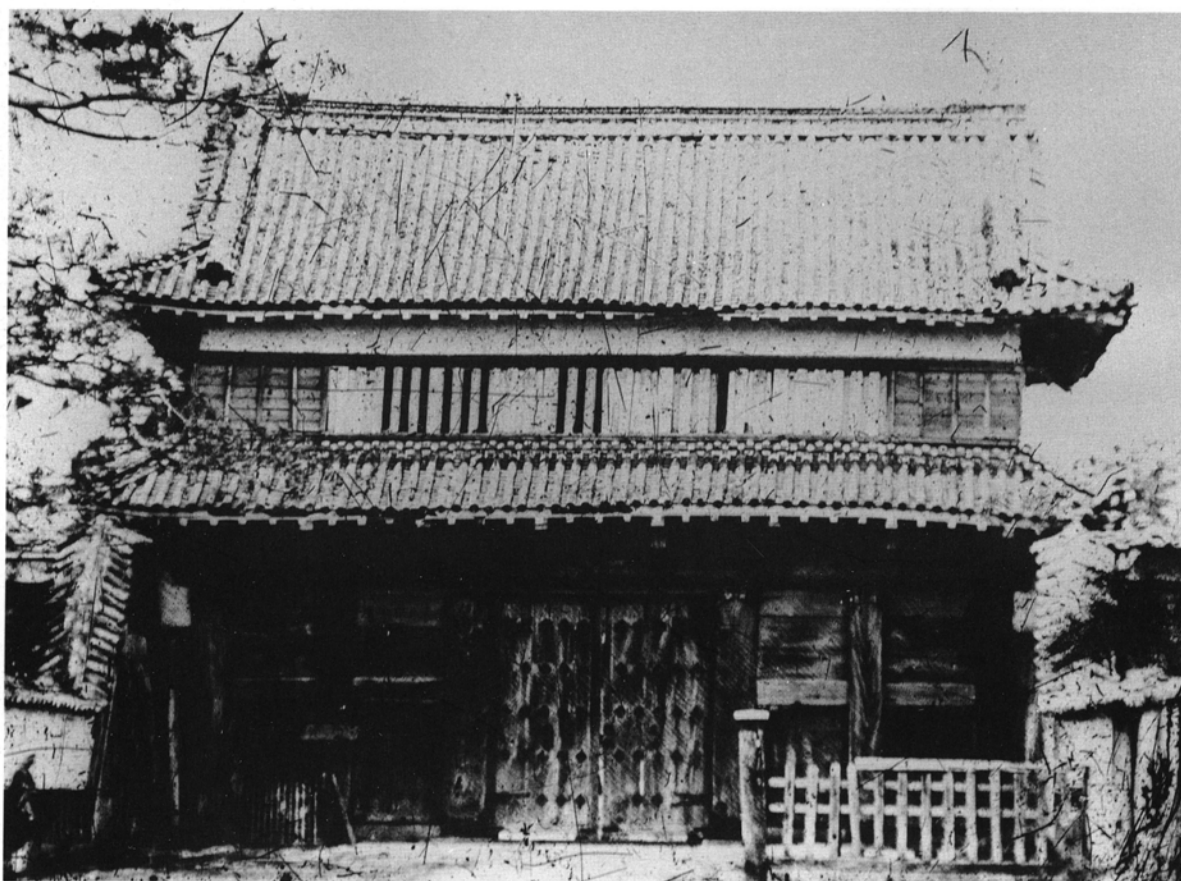
第 86 図	近世の遺物(28)	その他の遺構②	104	第134 図	屋敷地と主要遺構配置図	163
第 87 図	近世の遺物(29)	その他の遺構③	105	第135 図	遺構変遷図	165
第 88 図	近世の遺物(30)	その他の遺構④	106	第136 図	「吉田藩土屋敷図」	169
第 89 図	近世の遺物(31)	その他の遺構⑤	107	第137 図	吉田城遺跡出土陶磁器類の用途組成	171
第 90 図	近世の遺物(32)	その他の遺構⑥	108	第138 図	吉田城遺跡出土陶磁器類の用途組成 2	172
第 91 図	近世の遺物(33)	その他の遺構⑦	109	第139 図	吉田城遺跡出土陶磁器類の材質組成	173
第 92 図	近世の遺物(34)	その他の遺構⑧	110	第140 図	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類の用途組成	175
第 93 図	近世の遺物(35)	その他の遺構⑨	111	第141 図	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類の材質組成	175
第 94 図	近世の遺物(36)	その他の遺構⑩	112	第142 図	名古屋城三の丸遺跡(県警本部地点)出土陶磁器類の用途組成	177
第 95 図	近世の遺物(37)	その他の遺構⑪	113	第143 図	名古屋城三の丸遺跡(県警本部地点)出土陶磁器類の材質組成	177
第 96 図	検出合計陶磁器類の用途組成		114	第144 図	外町遺跡出土陶磁器類の用途組成	179
第 97 図	近世の遺物(38)	検出①	115	第145 図	外町遺跡出土陶磁器類の材質組成	179
第 98 図	近世の遺物(39)	検出②	116	第146 図	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類の産地組成	183
第 99 図	近世の遺物(40)	検出③	117	第147 図	外町遺跡出土陶磁器類の産地組成	183
第100 図	近世の遺物(41)	検出④	118	第148 図	SK248出土陶磁器類の用途組成	184
第101 図	近世の遺物(42)	検出⑤	119	第149 図	SK340出土陶磁器類の用途組成	184
第102 図	その他合計陶磁器類の用途組成		120	第150 図	SK274出土陶磁器類の用途組成	185
第103 図	近世の遺物(43)	その他①	121	第151 図	SK053出土陶磁器類の用途組成	185
第104 図	近世の遺物(44)	その他②	122	第152 図	SK055出土陶磁器類の用途組成	186
第105 図	近世の遺物(45)	その他③	123	第153 図	SK086出土陶磁器類の用途組成	186
第106 図	近世の遺物(46)	焼塩壺①	125	第154 図	SK091出土陶磁器類の用途組成	187
第107 図	近世の遺物(47)	焼塩壺②	126	第155 図	その他の遺構 2 出土陶磁器類の用途組成	187
第108 図	近世の遺物(48)	瓦類①	128	第156 図	吉田城遺跡周辺の地籍図	195
第109 図	近世の遺物(49)	瓦類②	129			
第110 図	近世の遺物(50)	瓦類③	130			
第111 図	近世の遺物(51)	瓦類④	131			
第112 図	近世の遺物(52)	人形類①	133			
第113 図	近世の遺物(53)	人形類②	134			
第114 図	近世の遺物(54)	木製品①	135			
第115 図	近世の遺物(55)	木製品②	136			
第116 図	近世の遺物(56)	木製品③	137			
第117 図	近世の遺物(57)	木製品④	138			
第118 図	近世の遺物(58)	木製品⑤	139			
第119 図	近世の遺物(59)	金属製品①	140			
第120 図	近世の遺物(60)	金属製品②	141			
第121 図	近世の遺物(61)	金属製品③	142			
第122 図	近世の遺物(62)	石製品①	143			
第123 図	近世の遺物(63)	石製品②	144			
第124 図	近世の遺物(64)	石製品③	145			
第125 図	近代の遺物		146			
第126 図	焼塩壺胎土分析試料実測図		149			
第127 図	焼塩壺試料の胎土重鉍物組成		151			
第128 図	瓦類胎土分析試料実測図①		153			
第129 図	瓦類胎土分析試料実測図②		154			
第130 図	瓦類胎土分析試料実測図③		155			
第131 図	瓦類試料の胎土重鉍物組成		157			
第132 図	焼塩壺試料胎土中の重鉍物		158			
第133 図	瓦類試料胎土中の重鉍物		159			

## 表目次

第1表	発掘調査・整理作業工程表	9	第40表	吉田城遺跡出土陶磁器類の用途組成表	192
第2表	近世陶磁器類分類表(1)	58	第41表	吉田城遺跡出土陶磁器類の材質組成表	192
第3表	近世陶磁器類分類表(2)	60	第42表	吉田城遺跡近世陶磁器類の用途組成表2	193
第4表	近世陶磁器類分類表(3)	62	第43表	吉田城関連略年表(1)	197
第5表	近世出土陶磁器類集計表	65	第44表	吉田城関連略年表(2)	198
第6表	近世遺構出土陶磁器類集計表	66	第45表	遺構一覧表(1)	203
第7表	SD101出土陶磁器類集計表	67	第46表	遺構一覧表(2)	204
第8表	SD129出土陶磁器類集計表	76	第47表	遺構一覧表(3)	205
第9表	SD102出土陶磁器類集計表	83	第48表	遺構一覧表(4)	206
第10表	SE106出土陶磁器類集計表	86	第49表	遺構一覧表(5)	207
第11表	SE104出土陶磁器類集計表	90	第50表	遺構一覧表(6)	208
第12表	SE107出土陶磁器類集計表	93	第51表	遺構一覧表(7)	209
第13表	SK180出土陶磁器類集計表	95	第52表	遺構一覧表(8)	210
第14表	SK032出土陶磁器類集計表	98	第53表	遺構一覧表(9)	211
第15表	SK092出土陶磁器類集計表	100	第54表	遺構一覧表(10)	212
第16表	その他の遺構出土陶磁器類集計表	102	第55表	遺構一覧表(11)	213
第17表	検出合計陶磁器類集計表	114	第56表	遺構一覧表(12)	214
第18表	その他合計陶磁器類集計表	120	第57表	遺構一覧表(13)	215
第19表	焼塩壺試料の胎土重鉍物分析結果	151	第58表	遺構一覧表(14)	216
第20表	瓦類試料の胎土重鉍物分析結果	157	第59表	遺構一覧表(15)	217
第21表	SE001出土貝類一覧	160	第60表	遺構一覧表(16)	218
第22表	SE001出土昆虫類一覧	160	第61表	遺構一覧表(17)	219
第23表	屋敷地居住者の変遷	169	第62表	遺構一覧表(18)	220
第24表	SK248出土陶磁器類集計表	184			
第25表	SK340出土陶磁器類集計表	184			
第26表	SK274出土陶磁器類集計表	185			
第27表	SK053出土陶磁器類集計表	185			
第28表	SK055出土陶磁器類集計表	186			
第29表	SK086出土陶磁器類集計表	186			
第30表	SK091出土陶磁器類集計表	187			
第31表	その他の遺構2出土陶磁器類集計表	187			
第32表	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類用途組成表	188			
第33表	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類材質組成表	188			
第34表	名古屋城三の丸遺跡(県警本部地点)出土陶磁器類の用途組成表	189			
第35表	名古屋城三の丸遺跡(県警本部地点)出土陶磁器類の材質組成表	189			
第36表	外町遺跡出土陶磁器類の用途組成表	190			
第37表	外町遺跡出土陶磁器類の材質組成表	190			
第38表	名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)出土陶磁器類産地組成表	191			
第39表	外町遺跡出土陶磁器類の産地組成表	191			



明治初年の吉田城（豊橋市美術博物館所蔵）



明治初年の大手門（閉門の状態，豊橋市美術博物館所蔵）

# 第 I 章 調査概要と基本層序



## 第1節 遺跡をめぐる環境

### 1. 地理的環境

吉田城遺跡は、豊川左岸に朝倉川が合流する地点の南側一帯に位置する。豊川左岸は洪積期に形成された段丘・台地が展開するが、本遺跡の立地面は中でも最も新しい台地面である豊橋面上にある。豊橋段丘は標高10m前後を測り、豊川の沖積平野面との標高差は顕著である。また豊橋面上には、豊橋市役所、豊橋警察署、公会堂、豊橋駅等が置かれ、豊橋市の行政・文化の中心地域となっている。

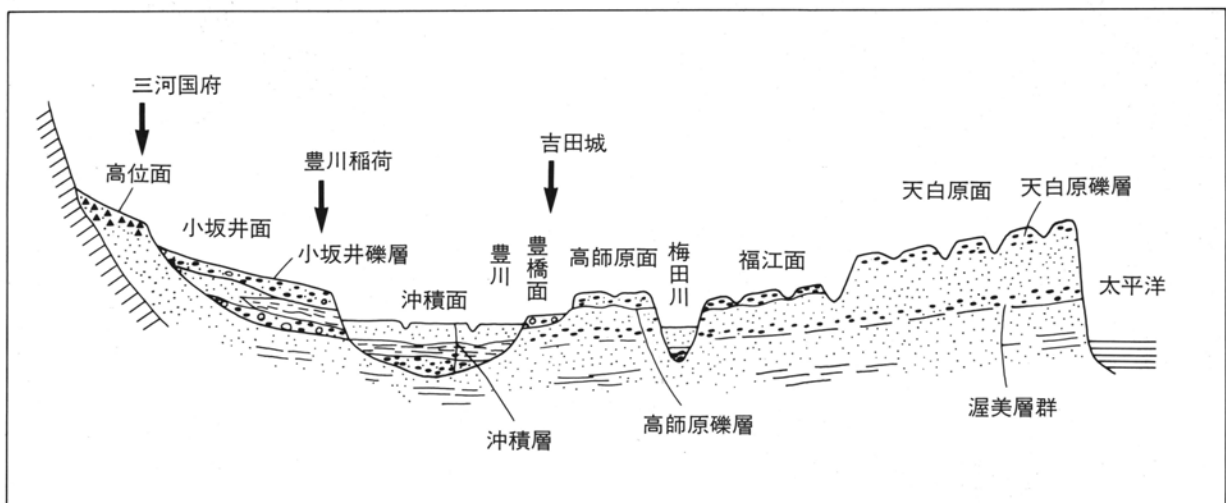
本遺跡は、豊川沖積面と豊橋段丘との境、急峻とも言える標高差8m余りの段丘崖上に位置している。これは、城の築かれた時代の所産にほかならない。『牛窪記』によれば<sup>(1)</sup>、この地域に城を初めて築いたのは永正2年(1505)、今川氏の被官であった牧野古白であったとする。同記録では、築城に際しての背景について以下のように記している。

「豊川ノ流ミナギリメグリ 入江ノ先モサシ入ル処ナレバ 水底深く掘レテ 岸アラウ水ツヨケレバ 川除ノ為ニ入道ガ淵ヲ過半ウメラルベシト詮議アル 古老ノ人曰 カヽル深淵ニハ必主アルモノ也 是ヲナイガシロニスルトキハタヽリサハリヲスルモノナリ 先川社ヲ祭テ 同国吉祥山ノ塊ヲ入レソメ 其後岡ノ土ヲ運ビ埋メ給ハゞ 事安カルベシトイヘバ 尤也ト左法ノ通ニセシカバ 水筋モナグラカニ吉祥廓ハ成就ス」(下線筆者)

これによれば、吉田城の前身は「吉祥山」の土に因んで「吉祥廓」とも呼ばれていたことや、城の直下は豊川の蛇行により深い淵となり「入道ガ淵」とされていたこと等がわかる。水深も深く、流れも速い「入道ガ淵」の大半を埋め立ててまで、この段丘崖に城を築こうとしたのは、戦国期当時の今川・牧野氏側の豊川以西に対する防御上の必要性に起因しているのである。(杉浦 茂)

#### <註>

- 1) 『統群書類従 第二十一輯上』所収 牛窪城主牧野氏の盛衰を記した書。作者・成立年次ともに不明ではあるが、江戸時代初期の成立と考えられる(『群書解題』参照)。



第1図 東三河平野の第四紀層の模式的地質断面図  
(井関弘太郎 『東海叢書24 車窓の風景科学』より一部修正)



第2図 吉田城遺跡の自然立地（1：50,000 沿岸海域土地条件図より作成）

## 2. 歴史的環境

今回の発掘調査において、最初に人々の生活の痕跡を確認できたのは、奈良時代～平安時代である。8世紀前半と10世紀前半の遺構・遺物が証明している。遺構は確認されていないが、弥生時代・古墳時代の遺物も出土している。次いで、鎌倉時代（13世紀代）の遺構・遺物があり、戦国・江戸時代の吉田城下町の時代へと続いている。

吉田城遺跡の周辺に目を広げると、多くの遺跡が存在している。牛川人骨の発見以来、縄文時代の小浜貝塚・大蚊里貝塚・五貫森貝塚・吉胡貝塚等、弥生時代の瓜郷遺跡・篠束遺跡・欠山遺跡・橋良貝塚・車神社貝塚・市杵嶋神社貝塚等、古墳時代には馬越長火塚古墳をはじめ万福寺古墳・権現山古墳・宮西古墳・神山古墳・東田古墳の他、水神古窯等を見ることができる。古代の遺跡として、寺院あるいは官衙施設と推定される市道遺跡をはじめ、大海津遺跡・大西遺跡、三河国国府推定地・国分寺跡・国分尼寺跡等を見ることができる。中世の遺跡として、公文遺跡をはじめ、吉田城（今橋城）・牟呂城・牧野城・一色城・月ヶ谷城・仁連木城・田原城等の中世城館が目立ってくる。

吉田城は、永正2年（1505）に今川氏の被官であった一色城主牧野古白がこの地に今橋城を築城したのが始まりである。その後、戦国時代を象徴するかのようになり、東三河支配の拠点として、領土を拡大しようとする戦国大名である今川・武田・松平氏等により多くの合戦の舞台となっていた。その中で、名も今橋から吉田へと改められている。天文15年（1546）、今川義元が攻略して城代を置いたが、桶狭間の合戦後の永禄7年（1564）には徳川家康の手に帰し、酒井忠次が城主となった。忠次は、城地を三の丸まで拡張したが、天正18年（1590）、家康の関東移封により、池田照政<sup>1)</sup>が15万2千石で入封した。

池田照政は、牧野氏以来の3万石にも満たぬ小大名としての縄張りであったこの城に、新城を築く意気をもって城地の拡張と城下町の整備を計画した。その城域は、東は現在の飽海町から旭町、南は曲尺手町から呉服町、西は関屋町に達する約74万4千㎡（22万5千坪余）に及ぶ広大なものであった。その曲輪配置は、北に吉田川（豊川）を背にした本丸を中心に、その外側に二の丸、更にその外側に三の丸を配した不完全な円郭式縄張りであった。その周囲に巡らした土塁と堀とを隔てて武家屋敷が軒を連ねており、さらに城郭と武家屋敷の外側に外堀を巡らして、町方との区分を厳にしていた。城の大手門は、吉田市街の中枢である札木町において東海道に接し、東西交通の要衝の位置に設置されていた。しかし、10年後の慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの功績により池田照政は姫路に転封となり、計画も中断してしまった。その後、入城した松平氏をはじめとする9家22代の譜代大名たちがいずれも3万石～7万石の小大名であったため、財政的に照政の計画を完成することなく、明治に至り建物等も取り払われている。また、照政によって行われた城下町の整備も、照政以後6代の城主を経て、正保2年（1645）～元禄10年（1697）の間に完成をみている。江戸時代には、東海道の要衝の宿として二川宿とともに吉田宿が置かれ栄えた。

（小嶋廣也）

### <註>

- 1) 照政は一般に輝政と書かれるが、吉田在城時はすべて「照政」と自署しており、姫路に移った晩年になってから「輝政」と称したとされているので、本書ではすべて照政と統一した。



- |            |                 |             |             |             |
|------------|-----------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 吉田城遺跡   | 9. 篠束遺跡         | 17. 馬越長火塚古墳 | 25. 大西遺跡    | 33. 淡洲神社北遺跡 |
| 2. 吉田城跡    | 10. 欠山遺跡        | 18. 万福寺古墳   | 26. 三河国府推定地 | 34. 牟呂城跡    |
| 3. 牛川人骨発見地 | 11. 橋良貝塚        | 19. 権現山古墳   | 27. 国分寺跡    | 35. 牧野城跡    |
| 4. 小浜貝塚    | 12. 見丁塚遺跡       | 20. 宮西古墳    | 28. 国分尼寺跡   | 36. 一色城跡    |
| 5. 大蚊里貝塚   | 13. 伊奈銅鐸出土地     | 21. 神山古墳    | 29. 石堂野遺跡   | 37. 月ヶ谷城跡   |
| 6. 五貫森貝塚   | 14. 水神古窯        | 22. 東田古墳    | 30. 公文遺跡    | 38. 二連木城跡   |
| 7. 吉胡貝塚    | 15. 市杵嶋神社貝塚・同古墳 | 23. 市道遺跡    | 31. 麻生田大橋遺跡 | 39. 田原城跡    |
| 8. 瓜郷遺跡    | 16. 車神社古墳       | 24. 大海津遺跡   | 32. 森岡遺跡    | 40. 二川宿本陣   |

第3図 吉田城遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 100,000)



## 第2節 調査概要

### 1. 調査史

吉田城遺跡関連の発掘調査は、これまで豊橋市教育委員会を中心に行われてきた。最も古い昭和52年度の調査から、最も新しい平成5年度の調査まで計7回を数える。いずれも、本丸・二の丸・三の丸といった城中心部の調査を行っている。また、本センターでも平成2年に行っており、今回と同様の武家屋敷地跡を調査している。ここでは、これらの調査の概略を年代順に述べていくことにする。

最も古い昭和52年の調査は、美術博物館の建設に伴う発掘調査である。この地は吉田城の三の丸(第4図第1地点)に相当し、弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が見つかった。遺物は戦国時代のものが多く、堀も確認されている。この地点は、1年後の昭和53年にも調査を実施している。

次に、同じく昭和52年に、市役所新庁舎建設に伴う発掘調査が行われた。この地も吉田城三の丸(第4図第2地点)に相当する。ここでは、平成5・6年に行われた隣接地の調査でも確認された江戸時代の堀跡等が見つかった。

昭和59年には、三の丸会館建設に伴う調査が行われた。ここも吉田城三の丸(第4図第3地点)に相当する。奈良・平安時代の土坑や中世末から近世初頭のピットと溝、戦国時代の堀、江戸時代の馬場跡・米蔵跡等が見つかった。奈良時代の土坑からは「大一」と墨書された須恵器が、また、平安時代の土坑からは緑釉陶器が出土している。こうした遺物は地方役所や寺院跡等の公共性の高い性格の遺跡から出土しており、付近にこうした遺跡の存在を示すものと考えられる。

平成に入って最初に行われたのは、平成元年の豊橋公園の整備に伴う試掘調査である。場所は江戸時代の本丸(第4図第4地点)にあたり、戦国時代の遺構や江戸時代の本丸御殿の石敷の基礎、石組の井戸等が見つかった。遺構の存在する面は数層におよび、盛土による整地が何度も行われていたことが確認された。また、出土品には戦国時代の連銭や池田照政時代の瓦類等がある。

平成2年の発掘調査は、本センターが実施している。この調査は豊橋警察署建て替えに伴うものであり、江戸時代の武家屋敷跡(第4図第5地点)にあたる。幕末期に作成された絵図「吉田藩士屋敷図」によれば、調査区は家老西村孫次右衛門の屋敷等に相当する。遺構は、古墳時代の竪穴住居や戦国時代の溝、江戸時代の溝や武家屋敷関連と考えられる井戸・土坑多数を検出している。遺物は、須恵器や土師器、戦国時代の遺物、肥前系の陶磁器類、中国・朝鮮製の陶磁器類が出土した。

平成3年には豊城中学校の校舎増築に伴う発掘調査が行われている。ここは吉田城二の丸(第4図第6地点)に相当する。戦国時代の堀や南北20m、東西13mの江戸時代の巨大な瓦溜りが見つかった。戦国時代の堀からは、多量の土師器の皿と少量の陶磁器類が出土しており、吉田城以前に築造された今橋城のものと推測される。巨大な瓦溜りからは、宝永5年(1708)の紀年銘瓦が出土し、土塁上に築かれた雷櫓のもので、宝永4年(1707)の地震によって倒壊した後に再建されていることが分かった。また、この瓦溜りからは鯨の瓦も出土している。

平成5年に入ると、市役所新庁舎および地下駐車場建設に伴う発掘調査が行われている。ここも吉田城三の丸(第4図第7地点)に相当するが、縄文時代から江戸時代までの幅広い複合遺跡である。

特に戦国時代や江戸時代の遺構が多数見つかリ、記録の少ない吉田城の姿を推定する上で、有益な情報を多く与えてくれた。

戦国時代の遺構では、堀、溝、井戸等がある。堀は断面が逆三角形になる「葉研堀」で、幅は平均5m、深さは2.5m～3mである。堀底には仕切りがあり、堀の中での敵の移動を防いだものと考えられる。この堀は西側に向かって突出する部分を持っており、虎口ないしは虎口の防御施設に相当するものと推測されている。溝は、中世によく見られる屋敷地を方形に区画するもので、区画内に掘立柱の建物と井戸を持っている。区画外にはこうした遺構は見られず、通路として利用されていたようである。井戸からは、瀬戸美濃産の折縁皿や中国製の白磁片が出土している。

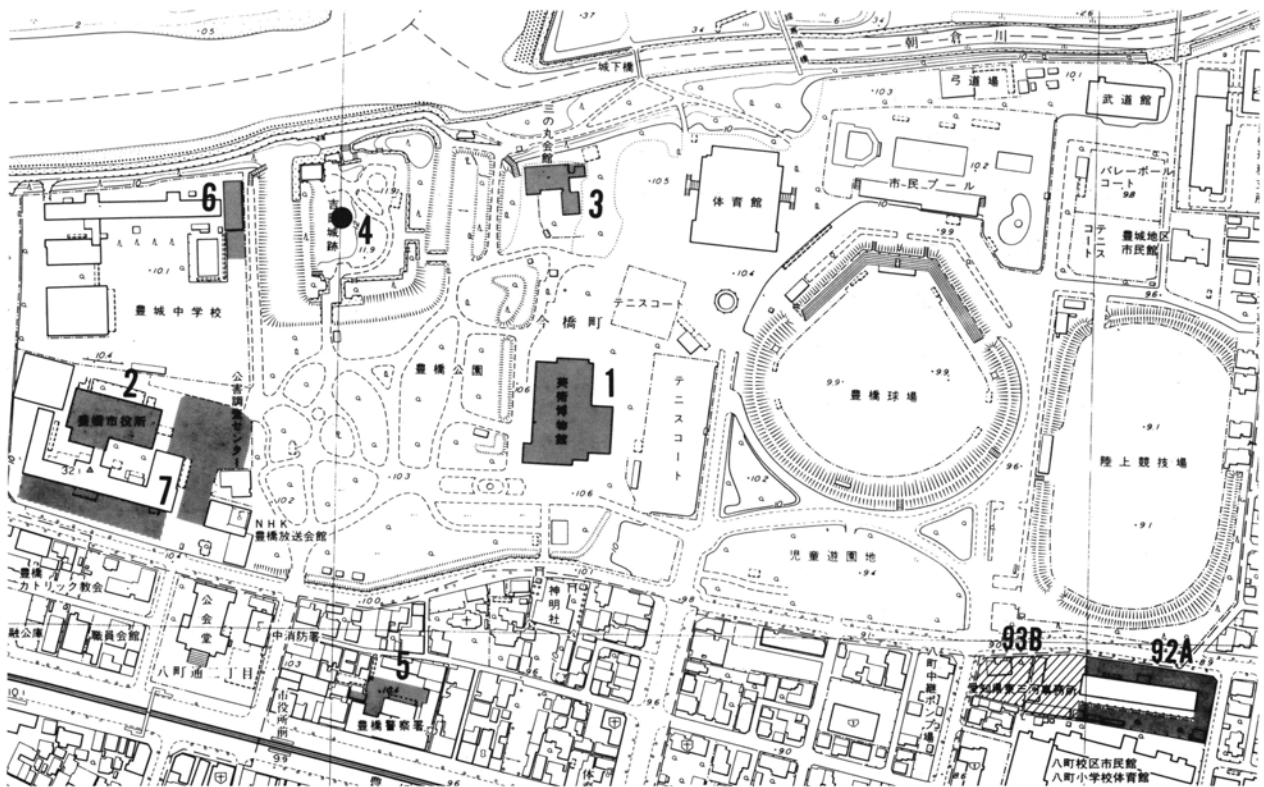
江戸時代の遺構には、堀、溝、井戸、蔵跡、塀跡、大型掘立柱建物跡等がある。堀は二の丸のもので、深さが7mあり底から2m程石垣が積まれており、下部を補強する「腰巻石垣」と考えられる。これまで二の丸の石垣を記したものは、たったひとつの絵図だけであり、文献資料の不備を発掘調査が補った好例といえる。蔵は石を敷いた上に礎石を置き建てたもので、東西30m以上の規模を持っている。塀は通路を仕切るもので、戦国時代の通路が基本的に踏襲されている。遺物は、黄瀬戸陶磁器を含む各種陶磁器類が多く出土している。

これ以外にも、古墳時代の円筒埴輪片や中世の水神祭祀遺構、歩兵十八連隊関係の遺構等が確認されている。(水谷寛明)

<参考文献>

豊橋市教育委員会 『吉田城いまむかし 一吉田城址発掘出土品展一』 1994

(財)愛知県埋蔵文化財センター 『吉田城遺跡』 1992



第4図 調査区位置図 (1:5,000)

## 2. 調査に至る経緯

吉田城遺跡は、愛知県豊橋市八町通五丁目地内に所在する古代から江戸時代にかけての複合遺跡である。その時期的中心は、牧野古白による今橋城築城以後であり、近世吉田城とその城下町(吉田宿)の時期である。吉田城遺跡に関する発掘調査は、これまでに前述した通り豊橋市教育委員会が本丸・二の丸・三の丸地区を中心に7度にわたる調査を、当センターが豊橋市警察署地点(武家屋敷地)の調査をこれまでに実施している。今回の調査地点は、本丸の南東約600m、豊川の左岸、朝倉川と合流する豊橋段丘上に位置しており、標高は約9m前後である。

今回、愛知県では、東三河総合庁舎建設を計画した。その用地は、愛知県東三河事務所及びそれに隣接する社宅地点で、吉田城跡(遺跡番号79393)<sup>(1)</sup>の範囲内ではないが、幕末期に描かれた「吉田藩士屋敷図」(豊橋市美術博物館所蔵)によると近世吉田城の武家屋敷に当たることから、事前に発掘調査を実施し記録保存を行う必要性が認められた。このため、遺跡の発掘調査が計画され、愛知県総務部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査については、平成2年9月に実施された試掘調査の結果、東三河事務所の建物の地下部分は約4mも掘り下げられているものの、建物を除いた部分については明治以降の開発行為による攪乱を受けおらず近世吉田城の城下町の遺構が良好に残存している可能性が高かったため、用地内全面を発掘調査の対象とした。調査面積は、5,300㎡である。調査については、廃土置き場や事務所用地などの諸条件を勘案し、平成4年度(1月～3月)に建物の周辺部分をA区として2,600㎡、平成5年度(4月～7月)には残りの部分をB区として2,700㎡を設定し、発掘調査を実施した。

### <註>

- (1) 愛知県教育委員会 『愛知県遺跡分布地図(Ⅲ) 東三河地区』 1990

### 3. 調査の経過

発掘調査に入る以前から、今回の調査区では外堀と武家屋敷が想定されていた。そのため、外堀や屋敷地を区画する溝、建物、廃棄土坑、井戸等の検出に重点をおき、それらを明らかにすることを念頭に調査を実施した。

発掘調査に先立って行われた、愛知県東三河事務所の建物の取り壊し工事に際し、地下駐車場の土圧の関係で駐車場部分のアスファルトを剥ぎたいとの原因者の要請を受けて、平成5年11月に現地立会いのもとバックホウによる表土剥ぎを実施した。その後、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削し遺構を検出する方法をとった。まず、始めに調査区周辺に土層の確認や排水を目的としたトレンチを掘削した。しかし、このトレンチにおいては明確に遺構が捉えられなかったため、地山である粘質土あるいは砂礫層まで掘り下げて遺構を検出した。掘り下げる土が異常に固く締まっていたことや、外堀や暗渠等の大型遺構が存在したことが、調査期間の後半が梅雨の時期に当たり長雨が続いたこともあって、作業は難航を極めた。

遺構の測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50、1/100、1/200基本平面図を作成したほか、重要部分については手測りによる遺構図を作成した。

また、年度も押し詰まった3月27日には現地説明会を開催し、天候にも恵まれ約400名という多くの方々に御参加いただいた。調査区内に想定される屋敷地の1つに住んでおられた「徳島小左衛門」の御子孫も参加され、多くの貴重な情報を得ることができた。この説明会では、外堀や武家屋敷等の遺構の説明や近世陶磁器類等の出土遺物の展示を行い、今回の調査成果を普及することができた。

全調査区から出土した遺物は、27ℓ入りコンテナ約400箱余に及ぶ。その大半は、近世陶磁器類や瓦類・木製品で占められ、他に金属製品・石製品、中世の山茶碗類・甕・伊勢型鍋、古代の須恵器・古式土師器や灰釉陶器等を見ることができる。出土遺物の整理については、発掘調査と平行して洗浄・注記作業を実施した。平成6年度には、報告書作成に向けて、出土遺物の実測図作成や陶磁器類組成分析のための口縁部計測法によるカウント等の整理作業を実施した。

工程	92		93												94												95						
	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
発掘調査	作業員説明会	■	12/5																														
	資材等搬入		■				■																										
	表土剥ぎ	■																															
	掘り下げ		92A	■	■	■	■	■	■	■																							
	遺構検出			■	■	■	■	■	■	■																							
	遺構掘削			■	■	■	■	■	■	■																							
	空撮																																
	補足調査																																
	現地説明会																																
	埋め戻し																																
資材等撤収																																	
整理	基礎整理			洗 浄 ・ 注 記												遺 物 カ ウ ン ト																	
	報告書作成																																

第1表 発掘調査・整理作業工程表

発掘調査参加者

浅倉 増雄・浅倉 美子・阿部 香織・新井 治郎・荒木サダ子・荒津三佐子・飯田眞理子  
石川はるよ・磯部たみ子・伊藤 直子・伊藤 正義・井上 隆水・今泉 良夫・江坂 朝子  
榎島恵美子・大木美津子・太田 睦美・大竹つや子・大竹富美子・大谷 朝子・大塚 靖隆  
荻野 清・小栗 幸朗・小柳津 昇・粕谷 旬代・神谷 洋子・鴨田 典敏・川澄榮一郎  
木村 悦男・朽名 光子・栗嶋きみ子・小塚 雪江・小林 澄子・小林 正・小林 久典  
権田 利美・佐井 弘正・坂井 國博・酒井 寅蔵・阪井 幹江・坂部 恭子・佐久間泰男  
佐野 栄作・佐野 尚子・篠原 民江・柴田 利恵・白井 政子・杉浦 富雄・鈴木あや子  
鈴木 恵子・鈴木 正・鈴木 富男・鈴木 文雄・鈴木 守・田口 充・竹下 一子  
竹内喜代美・田崎 砂子・田崎 広喜・寺山 博子・戸田美佐子・豊田てる子・鳥居 和子  
中尾 真悟・中嶋 伊助・中島幸三郎・中島たづ子・中村 珠江・中根富美子・長坂 淳子  
夏目 浪江・野口 芳一・秦 紀子・原 宏子・半田三重子・日高美代子・平松千恵雄  
福井 公一・福田美智子・星屋 銀子・蒔田すま子・松本 純子・三浦 和子・三浦 洋子  
三輪加代子・森川光太郎・森野 実・山北チヨ子・山崎 竹代・山田 晃子・山田 稔  
山西 和子・渡辺 恵子 (五十音順・敬称略)



第6図 発掘作業風景

4. 調査日誌抄

- |        |                        |           |                               |
|--------|------------------------|-----------|-------------------------------|
| 11月初旬  | 表土剥ぎ開始                 | 4月7日      | 基準杭設置                         |
| 12月5日  | 作業員説明会（八町校区市民館）        | 4月14日     | 作業開始，清掃・トレンチ掘削<br>調査区北壁にて暗渠検出 |
| 12月25日 | 基準杭設置                  | 4月15日     | 掘り下げ・遺構検出開始                   |
| 1月5日   | 作業開始，清掃・トレンチ掘削         | 5月25日     | 東大埋文調査室安芸毬子氏他2名来訪             |
| 1月8日   | 掘り下げ・遺構検出開始            | 5月31日     | 遺構掘削開始                        |
| 1月18日  | 外堀検出・掘削（2月10日まで）       | 6月10日     | 土木事務所地点試掘調査                   |
| 2月5日   | 遺構掘削開始                 | 6月22日     | 理事長視察                         |
| 3月17日  | 専門委員檜崎彰一先生現地指導<br>空撮準備 | 6月下旬～7月上旬 | 雨天のため作業中止続く                   |
| 3月18日  | 現地説明会の記者発表             | 7月15日     | 空撮準備                          |
| 3月19日  | 空撮                     | 7月16日     | 空撮                            |
| 3月25日  | 県文化財課赤羽一郎氏現地指導         | 7月19日     | 補足調査（23日まで）                   |
| 3月27日  | 現地説明会                  | 7月22日     | 調査区の北側に調査区を拡張                 |
| 3月29日  | 補足調査（4月14日まで）          | 7月26日     | 埋め戻し（29日まで）                   |
| 3月31日  | 埋め戻し（4月9日まで）           | 7月30日     | 完全撤去                          |

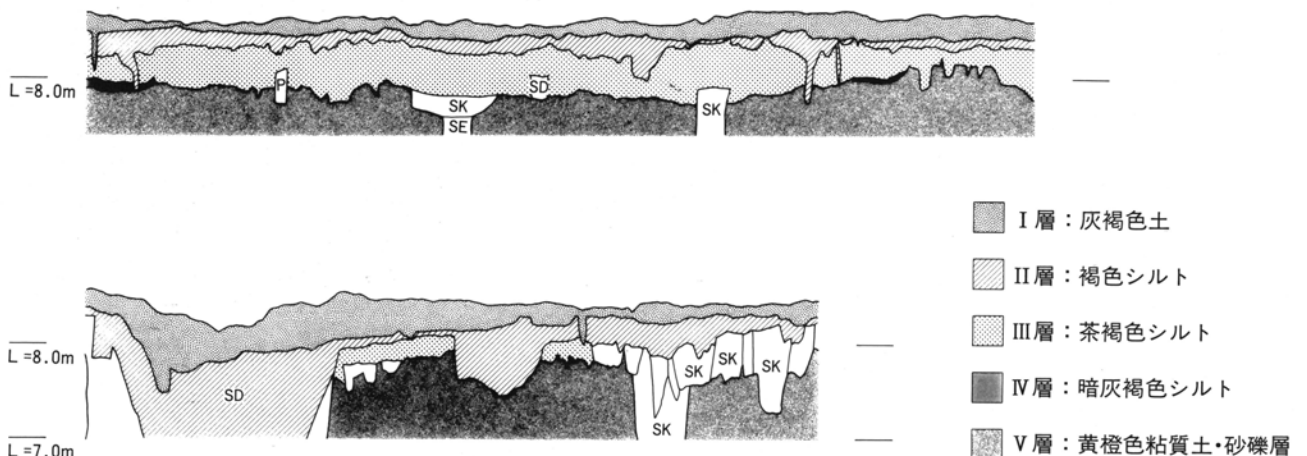


第7図 現地説明会風景

### 第3節 基本層序

愛知県東三河事務所地点における基本層序は、概ね5層からなっている。第I層は、表土で、現地表から20cm程の厚さを有する。その中からは、調査区の全体ではないがバラスを曳固めたような硬い層が確認された。第II層は、明治以降から戦前までの堆積よりなる層で、20cm程の厚さを有する。南壁の東端部分の最上層において、第二次世界大戦の空襲時の焼土層と思われる層も検出された。また、この層から掘り込まれている遺構としては、十八連隊時に構築された煉瓦建物の基礎部分や暗渠、明治期の裁判所の煉瓦造りの門柱跡、戦時中に掘削された防空壕跡等がある。第III層は、茶褐色シルト層で、約20～70cm程の厚さを有する。この層が、近世の包含層であり、東へいくほど深くなっている。これは、後述する第V層である基盤層が西から東に傾斜していることに起因しているものと考えられる。また、この層の上層から近世の遺構が掘削されており、これを近世の地表面＝生活面と想定した。中には、第V層の基盤層をも掘り下げようような、井戸や外堀等の大型遺構も見受けられる。第IV層は、暗灰褐色シルト層で、約5～10cm程の厚さを有する。この層は、調査区の全体から検出されたのではなく、第V層の基盤層の低い所にもみ堆積している。この層からは、中世の遺物の出土が多いが、中には奈良時代や平安時代の遺物も確認されている。近世の段階で削平されている可能性はあるが、この層の上層を、中世以前の地表面＝生活面と捉えている。第V層は、基盤となる地山層であり、明黄橙色粘質土あるいは砂礫層である。調査区が、「豊橋段丘」の東端部分に当たることから、東側にやや傾斜している。各層位の平均的な標高は、第I層が8.9m、第II層が8.7m、第III層が8.5m、第IV層が8.2m、第V層が8.1m前後で、低い所では7.7mとなっている。

本地点における基本層序は以上のようなものであるが、今回の発掘調査では遺構検出を各々の地表面＝生活面で行ってはいない。複雑に交錯する包含層中で遺構を面として捉えることが極めて困難であったため、地山まで掘り下げて遺構検出を行わざるを得なかった。そのため、記録することのできなかった遺構が有り得ることを予め断わっておきたい。しかしながら幸いなことに、近世においては外堀と屋敷地が、古代・中世においても僅かながらに遺構を確認することができ、多くの成果を得ることができた。以下、章を改めて、遺構・遺物の概要を報告したい。(小嶋廣也)



第8図 A区北壁セクション模式図(タテ:ヨコ=5:1)

## 第II章 古代の遺構と遺物





## 第1節 古代の遺構

### 1. 概要

本遺跡から検出された古代の遺構は全体的に希薄であり、遺構より当地域の歴史的事実を引き出したり、役所や特定の建物跡等を想定するまでには及ばない。遺跡の位置からすれば、大宝律令の制定以後に分けられた宝飯・八名・渥美の三郡内の渥美郡の中心地として、古来より注目されていた土地柄であり、渥美郡の郡衙や飽海の神戸跡等への可能性を考えたいところである。しかし、今回の発掘調査の結果からは、そうしたものに言及できるだけの資料は見つかっていない。

本遺跡の古代の遺構について概観すれば、まず92年度調査区においては、93年度調査区に比べ遺構数も少なく、各遺構の規模も小さい。遺構の分布の様子は、大まかに調査区の東と北西の2ヶ所にかたまっており、いずれも小規模な土坑が点在しているだけである。そこには、はっきりとした方向性や共通性は見られず、遺構から出土する遺物も少ない。

93年度調査区は、92年度のそれと比べれば遺物量も多く、分布にも特色が見られる。93年度の調査区を東と西に分割すれば、西に柱穴列が存在し、東に比較的大きな土坑が存在するといえる。

まず、西の柱穴列であるが、今回の発掘調査においては1列の柱穴列と2列の柱穴列の可能性を持つ遺構群が確認されている。このうち後述の2列の遺構群はほぼ2列が平行に並び、もう1列の柱穴列に直交する方向性を持っている。しかし、遺構の大きさも遺構間の距離も様々であり、方向性を持ってかろうじて列をなす程度のものであり、柱根を残すものも少ない。また、これらの柱穴列が何を区画するものであったのか等の列の性格については、出土遺物も少なく各遺構の形状も様々であり、明確にすることはできない。

次に東の土坑であるが、直径1.5m前後の土坑が3つあるが、いずれも江戸時代や明治時代の溝や建物により破壊を受け、残存状態が良くなく土坑の性格を考えるだけの資料とはなっていない。また、93年度調査区の中央部分は、後世に受けた攪乱が多く、遺構の存在すら判明しない。ただ、攪乱よりかなりの数の古代の遺物が出土しており、おそらくは東西部分にも匹敵するだけの遺構が、中央部分にも存在していたらと思うられる。



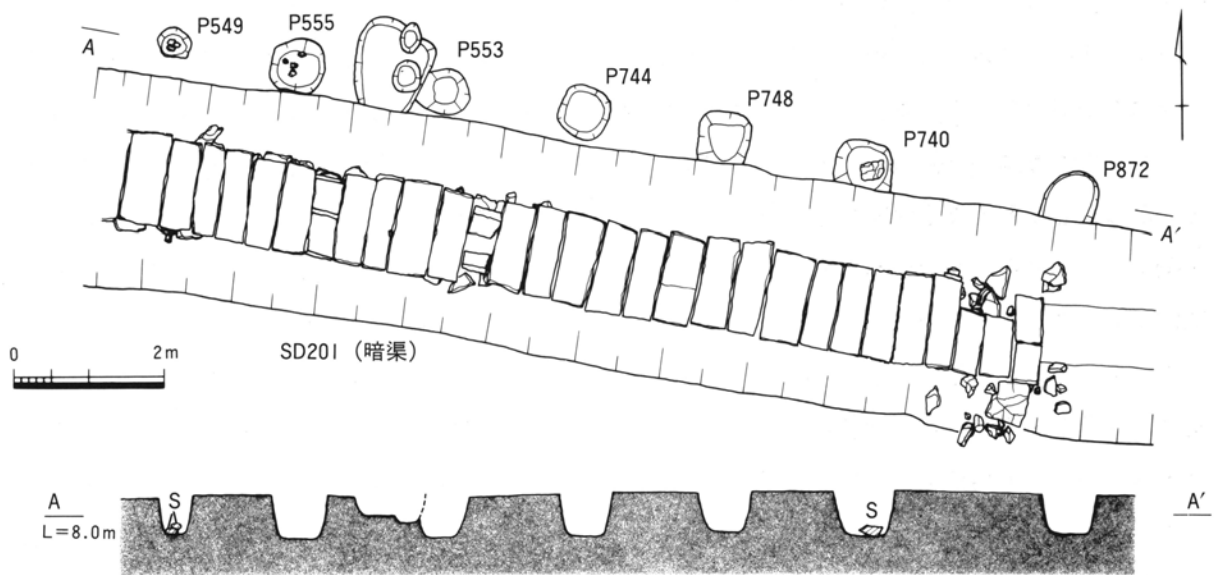
第9図 古代主要遺構配置図(1:1,000)

## 2. 柱穴列 (SA001)

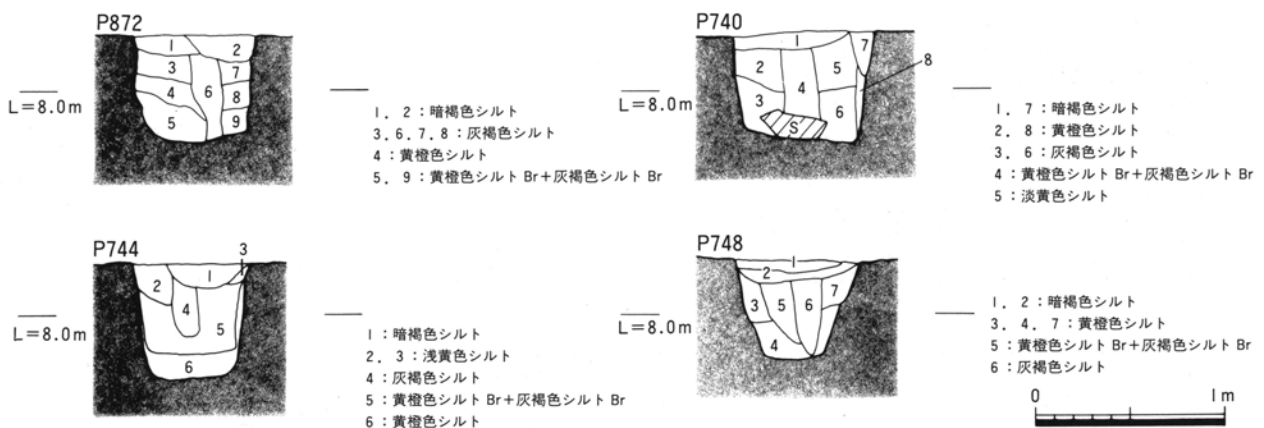
今回の発掘調査において確認された、ほぼ南北に伸びる2列の柱穴列の可能性のある遺構群は、各柱穴の遺構規模が様々であり、遺構間隔も均一でないと言及をしない。ここでは、暗渠の北側にある方向性をしっかりと持った柱穴列についてだけ述べることにする。

この柱穴列は93年度調査区の北端で検出されたもので、石組みを残す暗渠の北側に位置し、方向はN-9°-Eを示している。調査区北端より計7つの柱穴が連続しており、長さ約6mを測る。ただし、列は北端で調査区の外へ伸びている可能性がある。また、この柱穴列は石組みのある暗渠と方向が一致しており、暗渠に平行して位置していると言ってよい。後に述べるように、暗渠は江戸以前の区画溝を掘り返して作られたものであり、古代に敷かれた方向性を江戸を通じ明治の時代まで連綿と受け継いで来た可能性が高いと思われる。

区画の対象物としての建物跡等の位置は、柱穴列の南側に遺構が希薄なので北側に想定することが自然であろうが、北側は1mたらずで調査区外となってしまうのでその実態はつかめない。ただ、暗渠になる以前の江戸期の溝が屋敷の区画を担っているようで、方向性だけでなく区画の性格をも古代のものを踏襲している可能性がある。



第10図 柱穴列 (SA001) 平面図・断面図 (1:100)



第11図 柱穴断面図 (1:40)

遺構はほぼ1mの等間隔で連続しており、各遺構の規模は平均して長径約0.8m、短径約0.7m、深さ約0.5mで、形は隅丸方形型をしているものが多い。また、これらの遺構のほとんどに柱根跡が見られる。セクションから計測できる柱の深さは、0.2m程度である。

出土する遺物は、須恵器や土師器の小片が多く、時期的には7世紀末から8世紀初頭のものである。

**Pit744** 調査区北端より4つ目の柱穴で、柱根を残している。検出段階で長径・短径ともに約0.7mで、隅丸方形を呈している。深さは柱穴列中で最も深く約0.7mを測る。

**Pit740** 調査区北端より6つ目の柱穴で、柱根を残している。検出段階で長径・短径ともに約0.8mで、隅丸方形を呈している。深さは約0.6mとやや浅めではあるが、底部より石が出土しており、柱を支える位置に置かれていたことがセクションから確認できる。

**Pit872** 調査区北端より7つ目の柱穴で、柱根を残している。検出段階で長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約0.5mを測り、楕円形を呈している。暗渠によって南肩を壊されているが、おそらくこの柱穴列の中では最大の大きさのものであろう。

### 3. 土坑

93年度調査区の東に比較的大きな土坑が存在する。また、規模こそ小さいが残りの良い遺物を包含する土坑もある。ここでは、比較的大きな土坑3基と遺物の残存状態の良かった土坑1基を取り上げることにする。

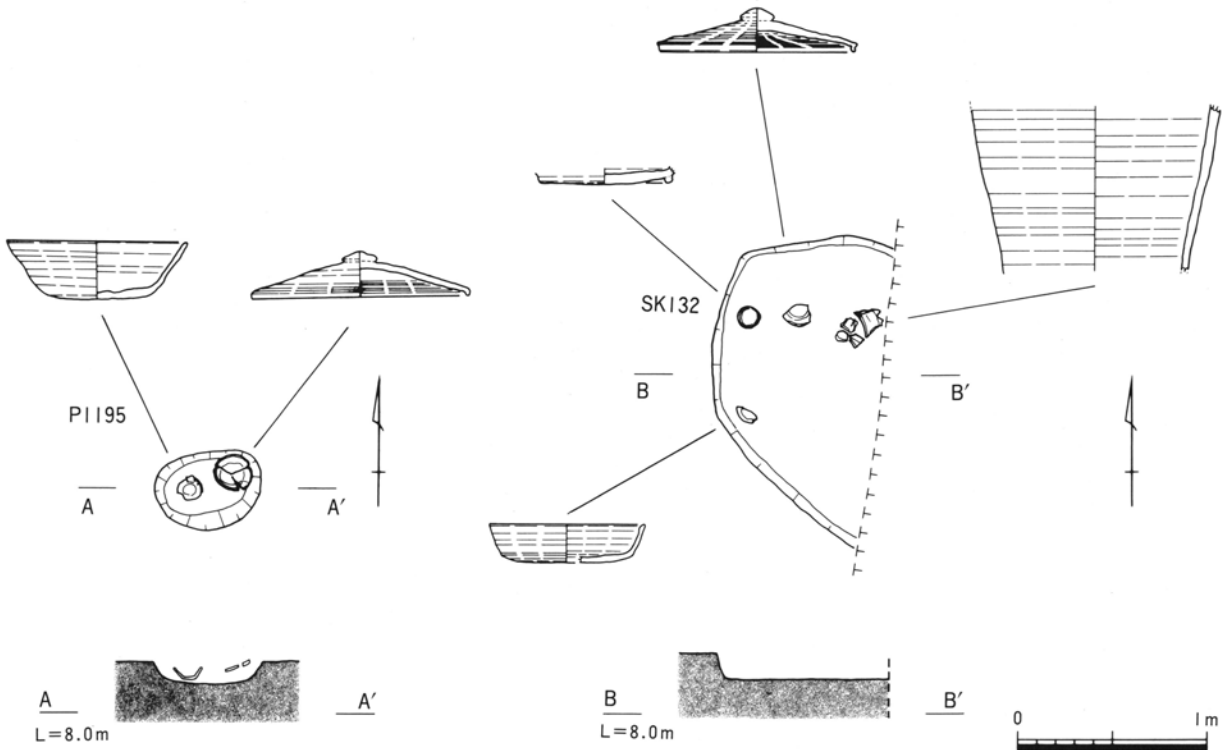
**SK132** 93年度調査区の東南で検出された土坑で、石組みのない暗渠と明治期の煉瓦建物の間に位置する。この煉瓦建物によって、おそらくは土坑の半分を削り取られており、遺構の全貌を明らかにすることはできない。検出段階で南北約1.6m、深さ約0.03mを測り、不定形な形をしている。土坑の上部は煉瓦建物を作る段階で削平され、残された土坑の下部にかろうじて須恵器の杯と杯蓋・甌等の遺物が残ったと考えられる。出土遺物から時期は7世紀末から8世紀初頭頃と思われる。

**Pit1195** 93年度調査区の東で検出された土坑で、石組みのない暗渠が西から大きく南へ曲がる地点の東側に位置する。検出段階で長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.05mを測り、形状は楕円型である。出土遺物から時期は7世紀末から8世紀初頭の頃と思われる。

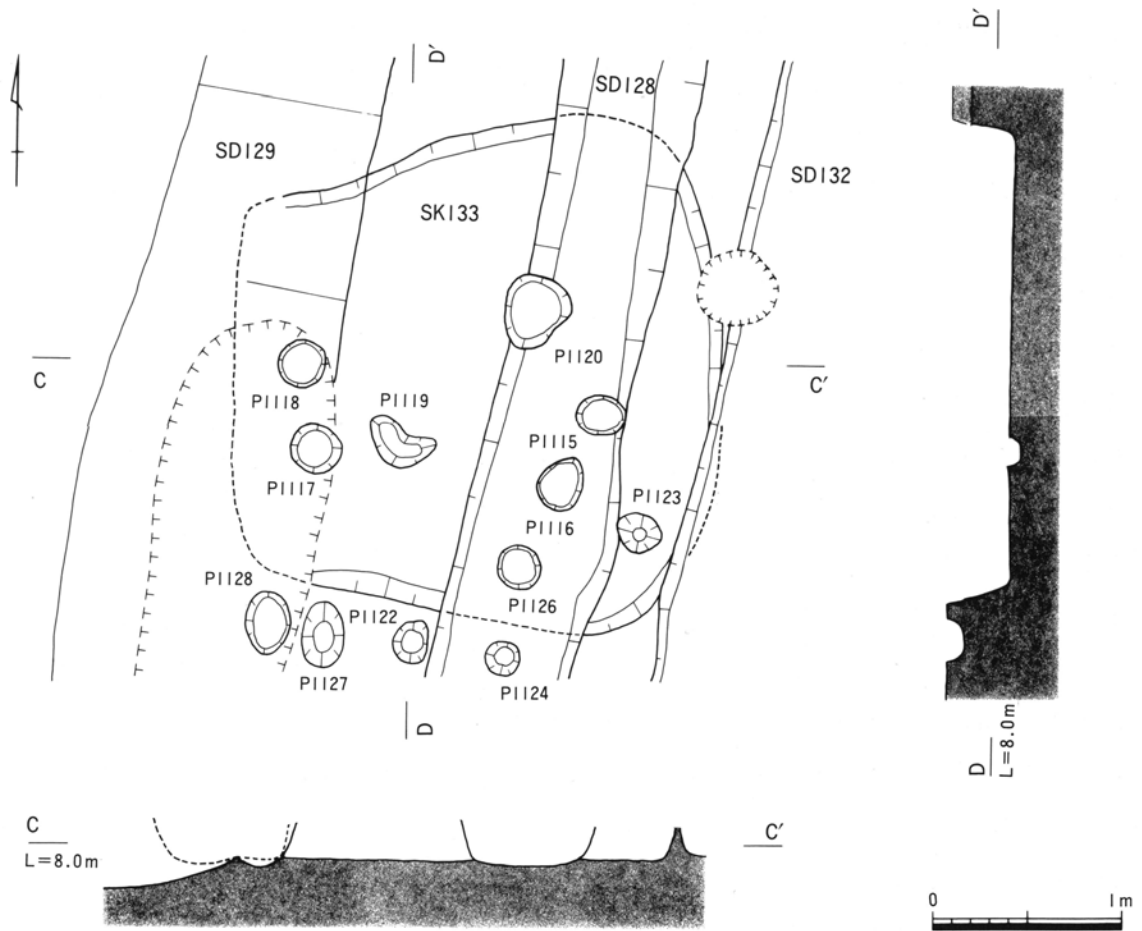
**SK159** 93年度調査区の東で検出された土坑で、明治期の煉瓦建物の中に位置する。煉瓦建物や中世の土坑により土坑の半分を削られており、全体像は明らかではない。検出段階で南北長約2.2m、深さ約0.2mを測る。出土遺物はいずれも小片であり、時期の特定は難しい。

**SK133** 93年度調査区の北東で検出された土坑で、石組みのない暗渠が西から南へ曲がる地点の北に位置する。今回の調査区の中では、最大規模の遺構である。検出段階で長径約2.6m、短径約2.1m、深さ約0.2mを測り、形状は不定形ではあるが方形に近い形を呈している。江戸時代の溝2条と土坑1基により1/3ほど削り取られている。出土遺物は少なくいずれも小片である。この土坑は遺構内に小さな遺構を8つ持っており、規模は長径・短径とも約0.3m程度のものばかりである。これら8つの遺構の分布には、まとまりや方向性等は見られず、土坑の特色はつかめない。ただ、8つの遺構のうち土坑のおよそ中央にあるPit1120からは須恵器が出土している。時期的には土坑SK132と同じ頃で、7世紀末から8世紀初頭である。

(水谷寛明)



第12図 SK132・Pit1195平面図・断面図（1：40）



第13図 SK133平面図・断面図（1：40）

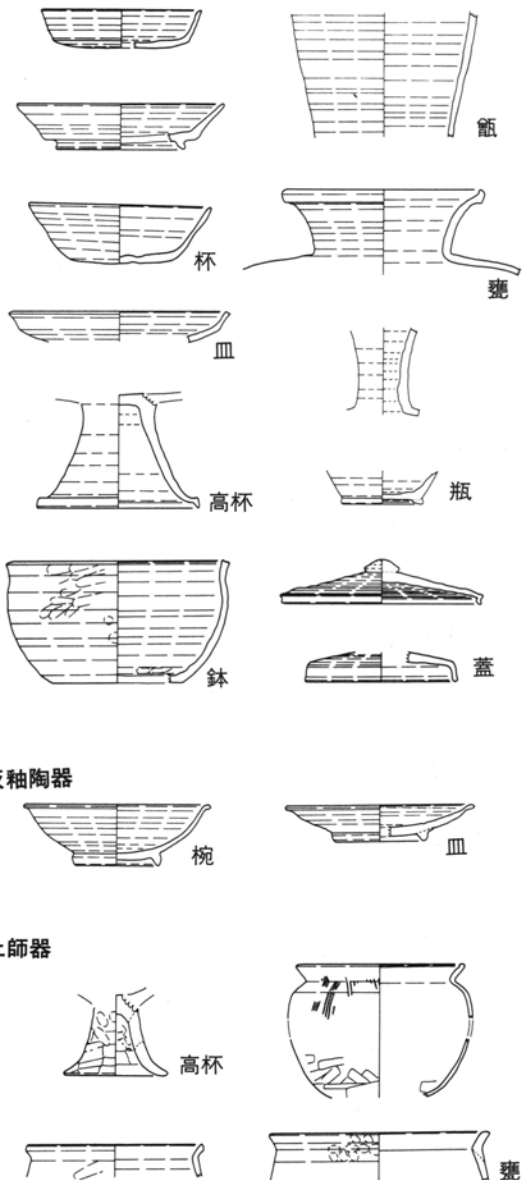
## 第2節 古代の遺物

### 1. 概要

今回の調査区において、前節で述べたように僅かながらに古代の遺構が検出され、その中から須恵器や灰釉陶器等の遺物が出土している。しかしながら、その大半の遺物は、検出段階や近世の遺構埋土の中から出土している例が多い。このため、細かな分類やカウントについては実施していない。これらの古代の遺物を提示する前に、大まかな分類を紹介しておきたい。

- |         |        |          |     |
|---------|--------|----------|-----|
| 1. 須恵器  | 1. 供膳具 | 杯・皿・高杯・盤 | 須恵器 |
|         | 2. 調理具 | 鉢・甑      |     |
|         | 3. 貯蔵具 | 甕・壺・瓶    |     |
|         | 4. その他 | 杯蓋・その他   |     |
| 2. 灰釉陶器 | 1. 供膳具 | 椀・皿・鉢    |     |
|         | 2. その他 |          |     |
| 3. 緑釉陶器 | 1. 供膳具 | 椀・皿      |     |
| 4. 土師器  | 1. 供膳具 | 皿・高杯     |     |
|         | 2. 調理具 | 甕・甑      |     |
|         | 3. その他 |          |     |

出土した遺物の大半は須恵器の杯・杯蓋で、7世紀末～8世紀前半頃の湖西窯のものが中心である。猿投窯等の製品も少量ではあるが確認している。全体的に須恵器の持つ硬質感はなく、低温焼成によるものなのかあるいは二次的に火を受けているのかは不明であるが、軟質のものが多い。他には、10世紀代の灰釉陶器の椀・皿が出土しており、ほとんどが二川窯の製品である。また、緑釉陶器の皿の破片も1点出土している。残りは、土師質製品で、調理具である甕が多く出土している。ただ、三重県の斎宮で出土する甕と同様の甕が出土しており、すでにこの当時から三重県との交流を偲ぶことができるように思われる。(小嶋廣也)

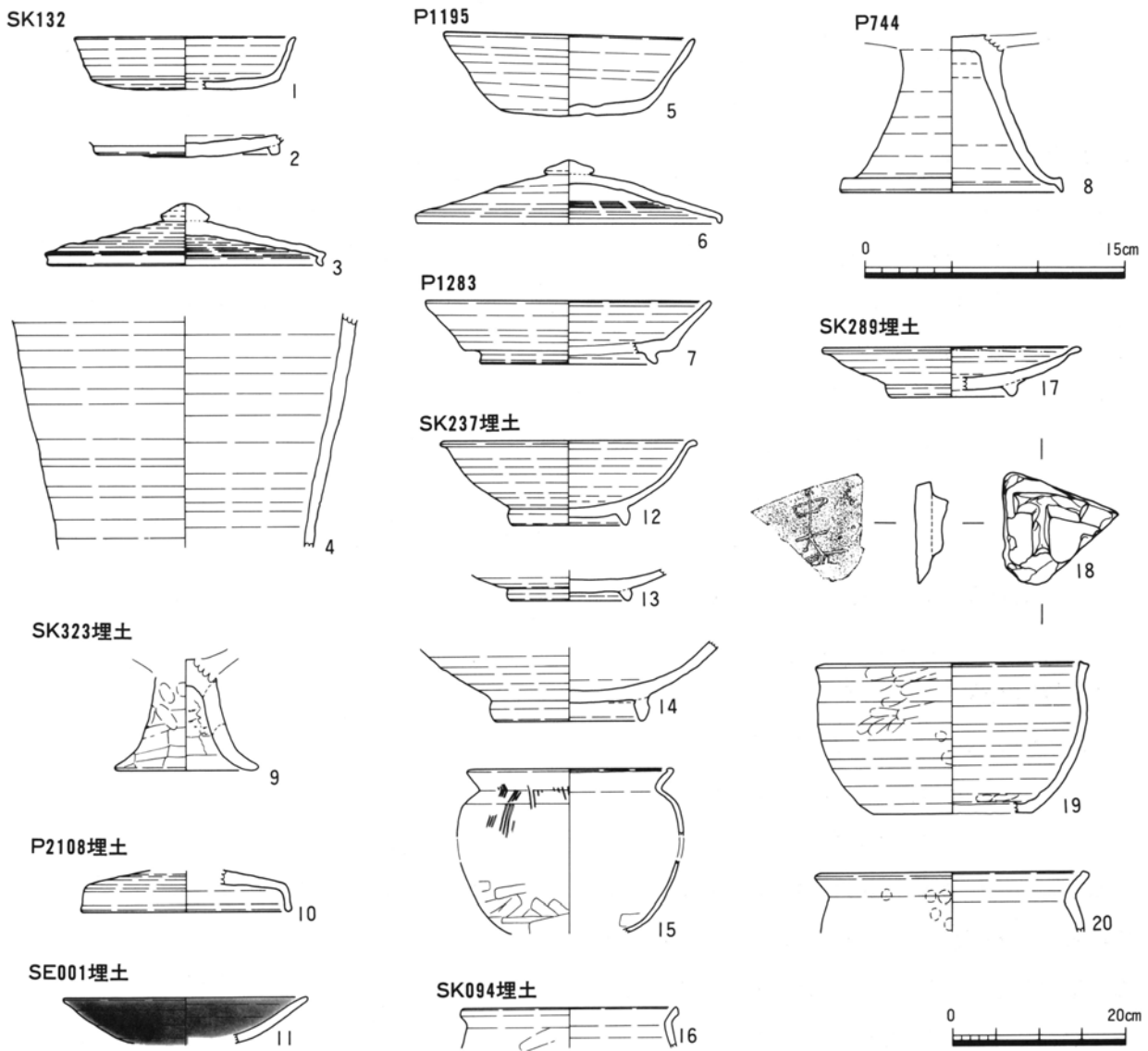


第14図 古代遺物分類図

#### <参考文献>

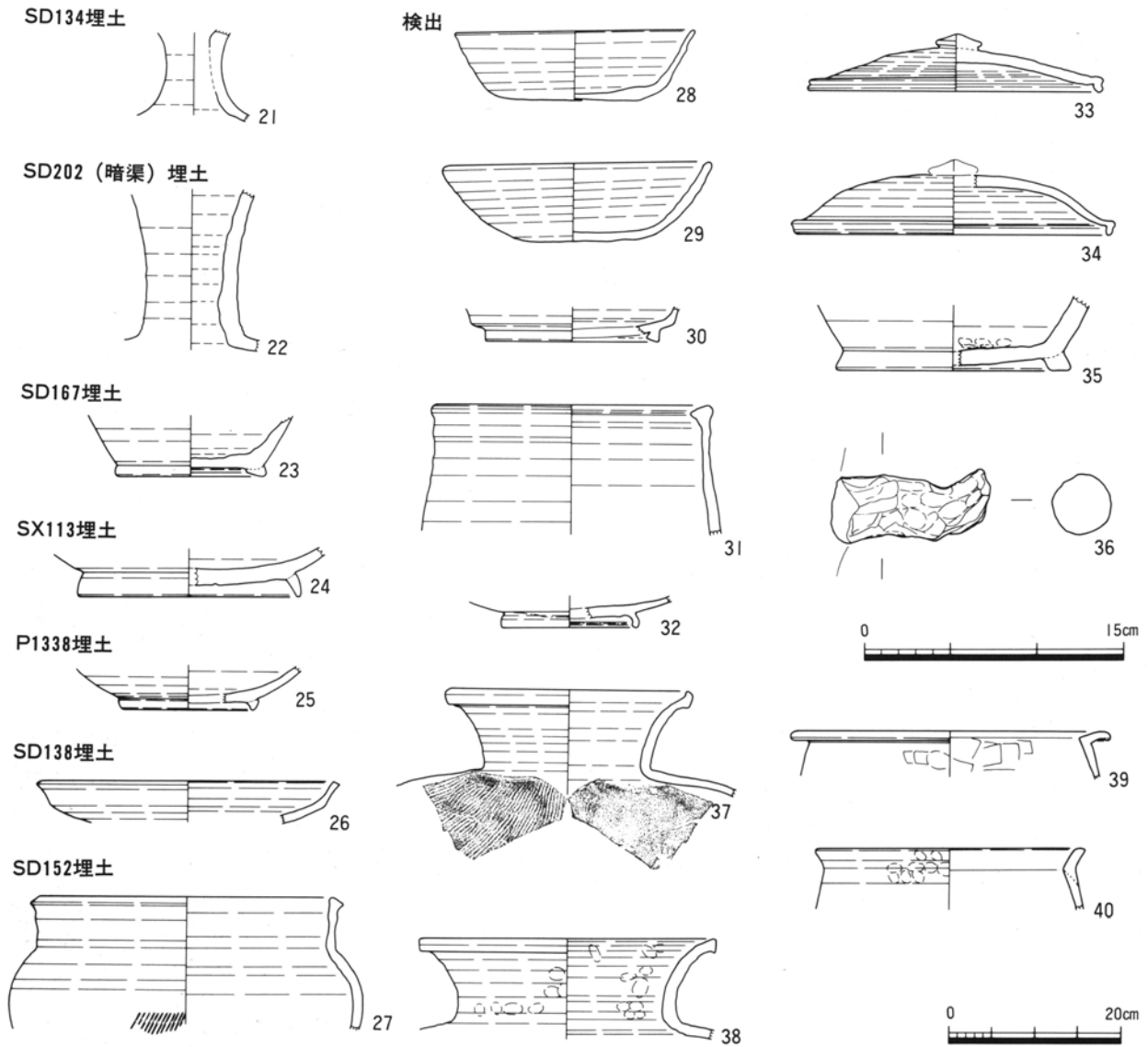
- 後藤建一 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」 『静岡県の窯業遺跡 本文編』 静岡県教育委員会 1989  
 愛知県教育委員会 『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ) 尾北地区・三河地区』 1983

2. 出土遺物



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	種類	用途	器種	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
1	93B	SK132	須恵器	供膳具	杯	(3.0)	(12.5)	-	-	ナデ	ナデ+ナズリ	湖西	内面自然釉・融着物	22	E-001
2	"	"	"	"	"	-	-	-	10.3	"	"	"	"		E-002
3	"	"	"	その他	蓋	3.5	(15.6)	-	-	"	ナデ	"	焼成時に歪んでいる		E-003
4	"	"	"	調理具	甌	-	-	-	"	"	"	"	"	22	E-004
5	"	P1195	"	供膳具	杯	4.6	14.3	-	8.3	"	"	"	焼成不良か	22	E-005
6	"	"	"	その他	蓋	3.6	17.4	-	-	"	"	"	低温焼成か	22	E-006
7	"	P1283	"	供膳具	杯	(3.6)	(16.1)	-	(10.1)	"	"	"	低温焼成か		E-007
8	"	P 744	"	"	高杯	-	-	-	(12.7)	"	"	"	低温焼成か、盤か	22	E-008
9	92A	SK323	土師器	"	"	-	-	-	(7.6)	-	指押え+ナデ	不明	色調：橙色	22	E-009
10	"	P2108	須恵器	その他	蓋	-	(11.8)	-	-	ナデ	ナデ	湖西	肩径(11.2)cm, 外面自然釉	22	E-010
11	"	SE001	緑釉陶器	供膳具	皿	-	-	-	-	緑釉	緑釉	二川	"		E-011
12	"	SK237	灰釉陶器	"	椀	4.8	(14.4)	-	(6.5)	ナデ	ナデ	"	焼成不良か	22	E-012
13	"	"	"	"	皿	-	-	-	(6.8)	"	"	"	見込み剥離痕		E-013
14	"	"	"	"	鉢か	-	-	-	(8.5)	"	"	"	深椀か、焼成不良か		E-014
15	"	"	土師器	調理具	甕	-	(17.2)	(19.6)	-	-	-	不明	色調：浅黄色, 外面煤付着	22	E-015
16	93B	SK094	"	"	"	-	(18.4)	-	-	-	-	"	色調：橙色		E-016
17	92A	SK289	灰釉陶器	供膳具	皿	2.8	(14.6)	-	(7.0)	灰釉	ナデ	二川	見込み・高台に剥離痕	22	E-017
18	"	"	須恵器	その他	-	-	-	-	-	ミガキカ	ナデ	湖西	内面線刻「□中大□」, 瓦塔か陶硯	22	E-018
19	"	"	"	調理具	鉢	(12.9)	(22.3)	(22.3)	(13.8)	ナデ	指押え+ナデ	"	"	22	E-019
20	"	"	土師器	"	甕	-	(22.8)	-	-	"	"	不明	色調：にぶい橙色, 外面煤付着		E-020

第15図 古代の遺物(1) (15・16・19・20は1:6, 他は1:4)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	種類	用途	器種	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
21	93B	SD134	須恵器	供膳具	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	湖西	低温焼成か		E-021
22	"	SD202	"	貯蔵具	瓶	-	-	-	-	"	"	"	外面自然釉		E-022
23	92A	SD167	"	"	"	-	-	-	(8.4)	"	"	"	底部回転糸切痕		E-023
24	"	SX113	灰釉陶器	供膳具	鉢	-	-	-	(12.7)	"	ナデ+ケズリ	二川	見込みに剝離痕		E-024
25	93B	P1338	"	"	皿	-	-	-	(7.4)	"	ナデ	"			E-025
26	"	SD108	須恵器	"	"	-	(16.8)	-	-	"	ナデ+ケズリ	湖西			E-026
27	92A	SD152	"	調理具	鉢	-	(25.4)	(30.8)	-	"	ナデ+タタキ	"	低温焼成か	22	E-027
28	93B	検出	"	供膳具	杯	4.0	13.8	-	(7.0)	"	ナデ	"	低温焼成か		E-028
29	92A	"	"	"	"	4.6	15.2	-	6.6	"	"	"	焼成不良か	22	E-029
30	93B	"	"	"	"	-	-	-	(9.9)	"	"	"			E-030
31	"	"	"	調理具	鉢か	-	(14.8)	-	-	"	"	"			E-031
32	92A	"	灰釉陶器	供膳具	皿	-	-	-	(7.8)	灰釉	灰釉	二川	内面灰釉がとんでいる		E-032
33	93B	"	須恵器	その他	蓋	3.3	16.7	-	-	ナデ	ナデ	湖西	つまみ径2.7cm		E-033
34	92A	"	"	"	"	-	(17.9)	-	-	"	"	"			E-034
35	93B	"	"	貯蔵具	瓶	-	-	-	(13.1)	"	"	"			E-035
36	92A	"	"	その他	-	-	-	-	-	-	指押え	"	甌の取っ手か獣足		E-036
37	93B	"	"	貯蔵具	甕	-	(20.6)	-	-	ナデ	ナデ+タタキ	"		22	E-037
38	"	"	"	"	"	-	(25.3)	-	-	指押え+ナデ	指押え+ナデ	"			E-038
39	"	"	土師器	調理具	甕	-	(26.6)	-	-	ヨコナデ	-	不明	色調：淡黄色		E-039
40	92A	"	"	"	"	-	(22.8)	-	-	ナデ	指押え+ナデ	"			E-040

第16図 古代の遺物(2) (27・37~40は1:6, 他は1:4)

### 第三章 中世の遺構と遺物





## 第1節 中世の遺構

### 1. 概要

中世において、渥美半島から宝飯郡、幡豆郡にかけての三河湾沿岸部は、伊勢神宮の勢力が強く見られる地域である。本遺跡周辺においても同様な傾向が見られ、伊勢神宮の神戸として飽海神戸が置かれたり、吉田御菌や萱御菌等の御菌が設置されている。本遺跡からは伊勢神宮との結びつきを直接に示す遺構・遺物は確認されていないが、当該期である中世の遺構を僅かながらも検出することができた。

以下、本遺跡の中世の遺構について概観してみたい。

92年度調査区は、激しい攪乱や近世の遺構との重複等により、十分な検出ができなかったものの屋敷地を区画すると思われる溝や竪穴住居、井戸、集石遺構等を確認できたことは成果であった。溝に関しては、92年度調査区東部で見られ、屋敷地が展開していた可能性が強い。また、92年度調査区北部には、竪穴住居跡をはじめ、浅い掘り込みによって平坦面を形成している性格不明の遺構が展開している。井戸は全調査区において1基のみの検出であるが、埋土中には山茶椀、甕等の他に貝類や昆虫類、植物遺体等多くの遺物が含まれていた。

93年度調査区では、多くのピットが検出されているが、ピット間のつながりが薄く、掘立柱建物等の想定はできなかった。唯一、調査区南部において、N-13-Eの方向性でPit1112、Pit1114、Pit1098、Pit1024がそれぞれ約1.8m前後の等間隔で並び、柵列の可能性を指摘できるのみである。また、Pit1098からは、蓮弁文をもつ青磁椀が出土している。

全調査区を通じての中世遺構の時代観であるが、出土遺物の分析から12世紀後半から13世紀前半が想定でき、遺構としての近世への連続性も見られなかった。ただ、遺構としては捉えられなかったものの、遺物に関しては戦国期のものが見られることは指摘しておきたい。また、豊橋市教育委員会が行った調査や当センターで実施した豊橋警察署地点の調査で確認された戦国期の遺構が、今回の調査では確認されなかったことは、戦国期の吉田城関連遺構が本地点までの広がりをもっていなかった可能性が考えられる（第1章第2節 1. 調査史参照）。



第17図 中世主要遺構配置図（1：1,000）

2. 溝

遺構としての溝は、近世の遺構や整地、また近代以降の攪乱等で掘削・削平を受けながらも6条検出することができた。これらはすべて92年度調査区において見られ、多くの柱穴を検出したが溝の検出はできなかった93年度調査区と好対照をなしている。

各溝は、一定の方向性をもち、SD167、SD182、SD173は北西—南東方向に、SD187、SD179、SD152は北東—南西方向に掘られている。さらに、SD187とSD179、SD182とSD173は平行するかたちで掘削されているが、これに関しては溝の上部が削平を受けていることもあり同時併存していたのか否かは明確にし得なかった。いずれにしてもこれらの溝は、区画溝である可能性が強く、この区域に屋敷地が展開していたものと考えられる。また、これらの溝の理土は、すべて暗灰褐色シルトである。

**SD187** 92年度調査区東端部で検出された溝で、近世の土坑等により遺構の残存状況は良好とは言えない。形状は箱掘り状を呈しており、検出面で幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。また、方向性は、N—54°—Eを示している。

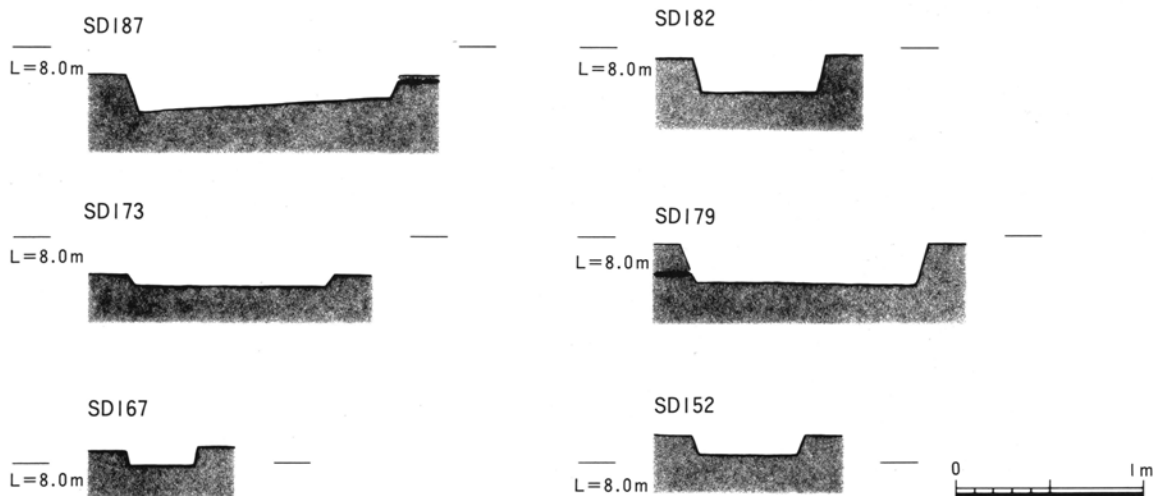
**SD179** SD187のすぐ南に位置し、形状も方向性もSD187と同じである。さらに、検出面で幅約1.4m、深さ約0.3mを測り、その規模も同様のことからSD187と同一の規格で掘削されたことがわかる。

**SD182** 92年度調査区東南部において検出された溝で、N—30°—Wの方向性を示している。検出面において幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、掘り形は箱掘り状を呈している。また、北西部分においてやや屈曲し、その幅も約0.2mにまで収束している。

**SD173** SD182と平行する溝であるが、その規模はSD182を凌いでいる。検出面で幅約1.1m、深さ約0.05mを測り、方向性はN—40°—Wを示し、掘り形は箱掘り状を呈している。また、北西部分において溝が収束していく点についてもSD182と同様で、幅は約0.6mを測る。

**SD167** 92年度調査区東北部で検出された溝で、N—32°—Wの方向性を示している。断面は箱掘り状を呈し、検出面で幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。

**SD152** 92年度調査区南部分において検出された溝で、N—52°—Eの方向性を示している。掘り形は箱掘り状を呈し、検出面で幅約0.6m、深さ0.1mを測る。



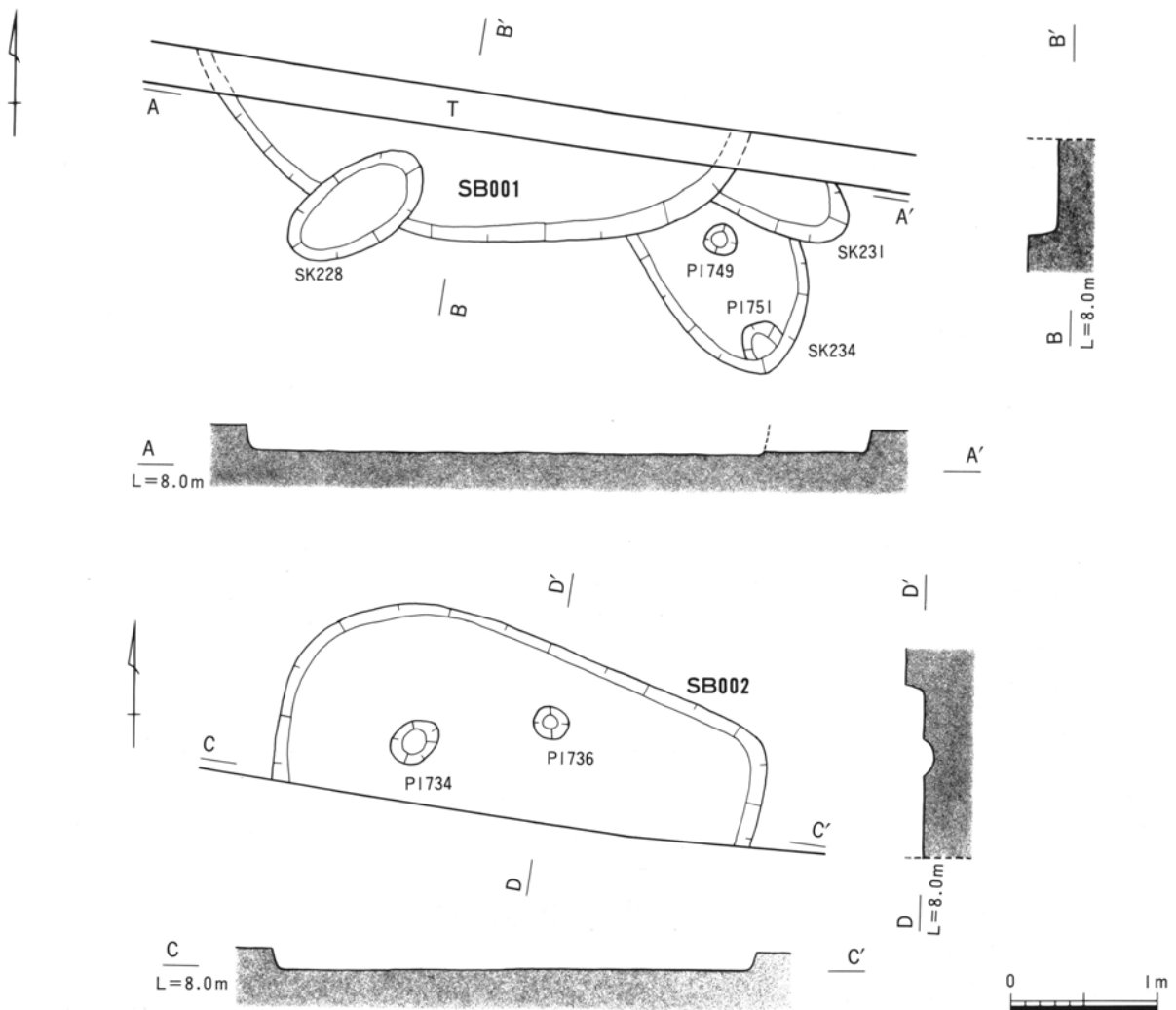
第18図 溝断面図 (1:40)

### 3. 竪穴住居跡

92年度調査区北部において2棟の竪穴住居と竪穴住居と思われる遺構1ヶ所を検出した。しかし、いずれの遺構も過半が調査区外に位置したり、現代の攪乱を受けていたりするために十分な確認ができなかった。とりわけSB002は、その周囲が現代の大きな攪乱を受けている中で偶然残存したという状態であった。

**SB001** 92年度調査区北壁部分にあたる I F 4 h・4 i のグリッド内で竪穴住居の南部分を僅かにではあるが検出した。その規模は、残存部分で南北幅0.8m、東西幅3.9mを測るが、住居の大半は調査区外に展開することからその詳細は不明である。また、掘方比高は0.2mを測り、遺構埋土は前述した溝と同じ暗灰褐色シルトで、山茶碗の細片を含んでいる。

**SB002** I F 4 h のグリッド内で検出したSB002の規模は、残存部分で南北幅約1.4m、東西幅約3.4mを測る。平面形態は、隅丸状の方形が想定できる。また、柱穴と思われるピットも検出され、その径・深さとも約0.4mを測る。残存部分の南北軸線はN-20°-Eを示し、床面積は約3.7㎡であるが、本来は8~10㎡程度であったと思われる。また、掘方比高は0.2mと浅いが、これは後世の削平を受けたことと周囲が大きな攪乱を受けていることに起因しているものと考えられる。遺構埋土は暗灰褐色シルトで、埋土中に山茶碗の細片を含む点からもSB001との共通点があげられる。



第19図 SB001・SB002平面図・断面図 (1:50)

4. 井戸

92・93年度調査区域を通じ、中世の井戸遺構としては1基を検出するにとどまった。その遺構状況は以下の通りである。

**SE001** 92年度調査区の南西部である I F10 a の区画で検出された。径約1.7mを測り、ほぼ円形のプランを呈している。深さは、検出面より約3.5m、標高にして約4.5mまで掘り込まれており、湧水層にまで達していた。また、検出面から1m～2.5mの深さにおいて掘り広げられており、最大幅約2.7mを測る。井戸枠等の構造物や抜き取り痕も確認できなかったことから、素掘りの井戸であった可能性が高い。

また、埋土に関しては5層に区分でき、その状況は以下の通りである。

1層：検出面より1.3mまで、砂礫を含んだ褐色シルトが堆積していた。2層同様に炭化物が多く見られた。

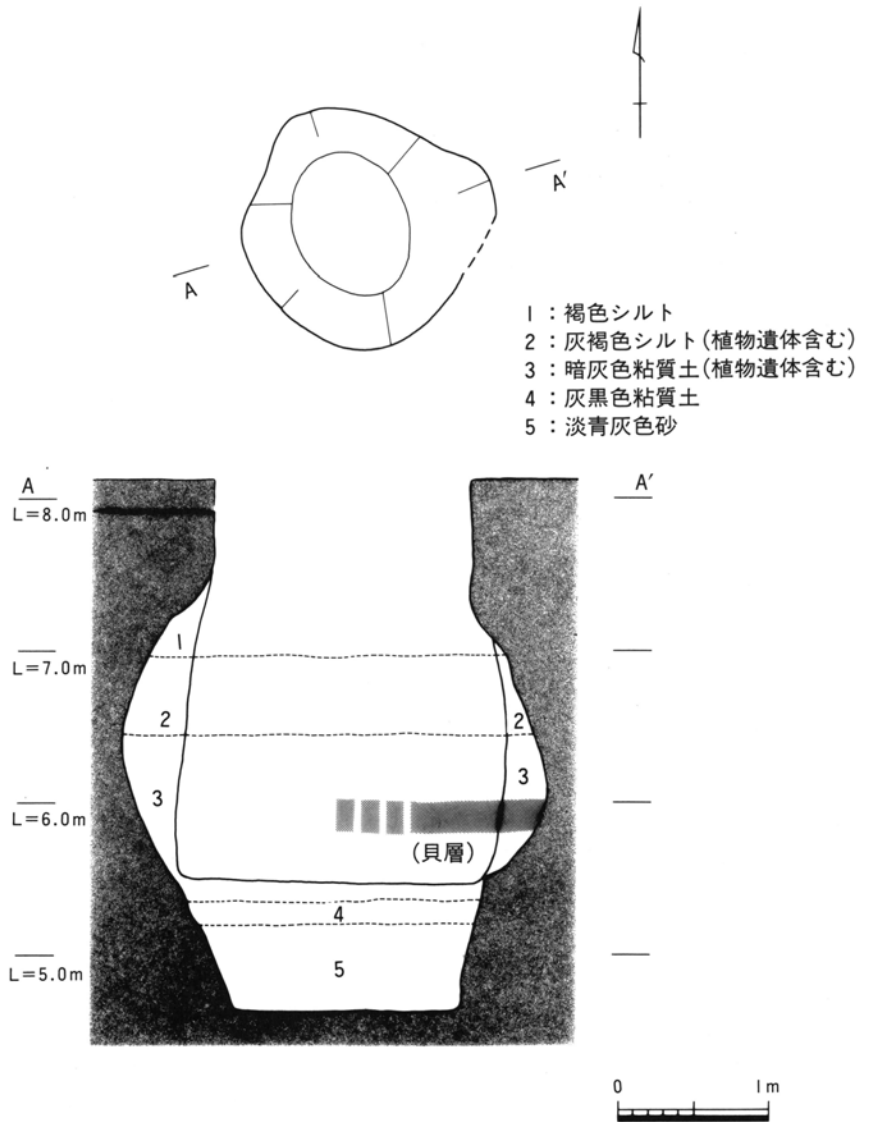
2層：厚さ0.5mのマンガン斑が見られる灰褐色シルトである。第V章第2節で確認された自然遺物である植物遺体等を含んでいる。

3層：厚さ1m余り、マンガン斑が見られる暗灰色粘質土層である。2層同様に植物遺体等が検出されたが、この層の特徴は他の層に比べまとまって山茶碗類や土師器等の遺物が含まれていたことである。また、本層の間に厚さ0.2m程の貝層が確認されている。

4層：0.2m程の厚さで堆積していたマンガン斑を含む灰黒色粘質土層である。

5層：最下層に当たる。厚さは0.6m程を有し、マンガン斑・鉄斑を含む淡青灰色砂である。

本遺構において、各層序における遺物の年代観は確認できなかった。出土遺物より、12世紀後半から13世紀前半の時期が想定され、その後廃絶されたものであろう。



第20図 SE001平面図・断面図 (1 : 50)

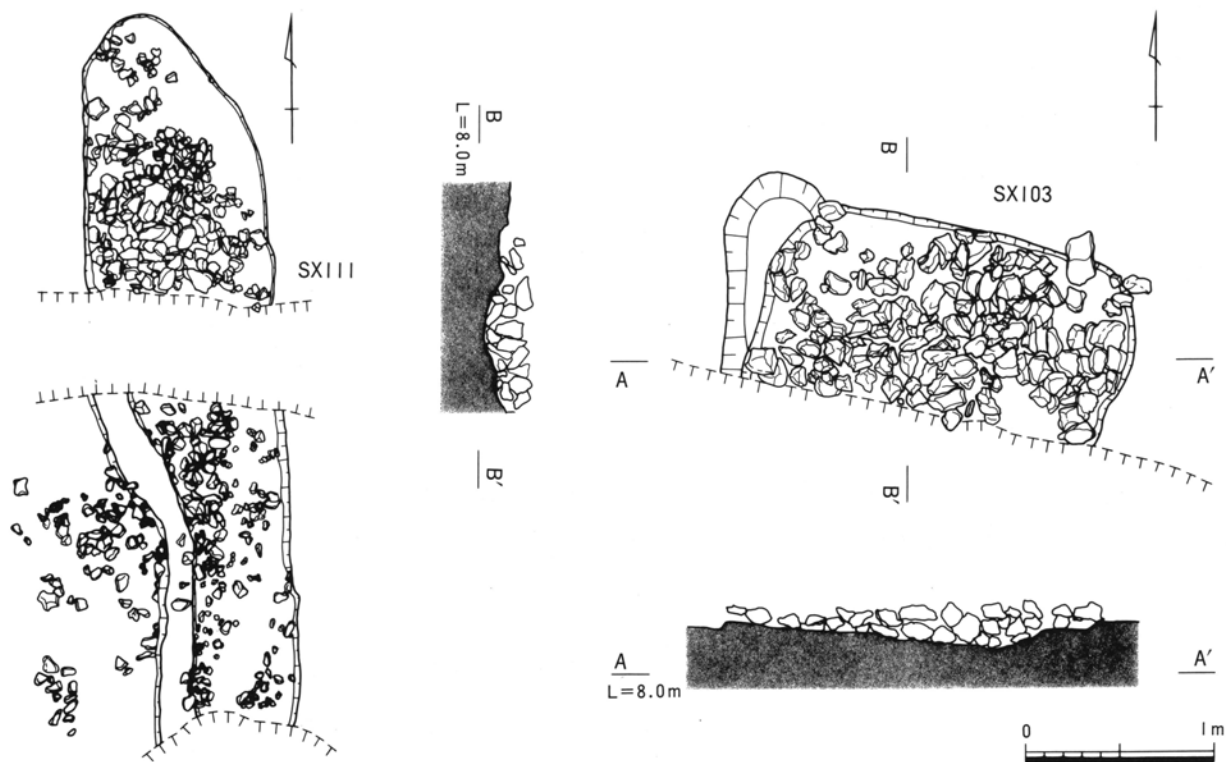
## 5. 集石遺構

92・93年度調査区ともに1ヶ所づつ、計2ヶ所の集石遺構を検出した。その性格については現在のところ不明な点が多く、脂肪酸分析の結果を踏まえながら、その解明は今後の検討課題としておきたい。

**SX111** 92年度調査区域のI F 4 hグリッド内で検出された集石遺構である。径数cm～約20cm程度の河原石が一面に敷き詰められ、山茶碗の細片が礫とともに暗灰褐色シルト中に混じっていた。南北軸はほぼ真北方向を示している。しかし、形状に関しては、南部分が現代の攪乱によってえぐり取られていることと西側部分も近世の整地によって削り取られていることから、原型を推定することは困難である。現存部分で、南北幅約3.7m、東西最大幅約1.2mを測る。

**SX103** 93年度調査区域のI E 4 i・4 j・5 i・5 jグリッドにまたがって検出された集石遺構である。径数cm～20cm余りの河原石が一面に敷き詰められ、上記のSX111同様山茶碗の細片が礫とともに埋土中に混在していた。形状は、南部分が攪乱によってえぐられているためその原型が損なわれているが、方形に近い形が想定できる。南北軸はN-17°-Eを示し、現存部分で南北幅約1.0m、東西幅約1.8mを測る。東に向かってやや傾斜をもたせながら掘り込んでいるため、礫の厚さは最厚部で25cm程となっている。

この他、SX106、SX107、SX109等についても0.1m前後の掘り込みによって平坦面がつくられ、その埋土も山茶碗の細片を含んだ暗灰褐色シルトであった。これらの遺構の性格については、現段階では不明とせざるを得ない。(杉浦 茂)

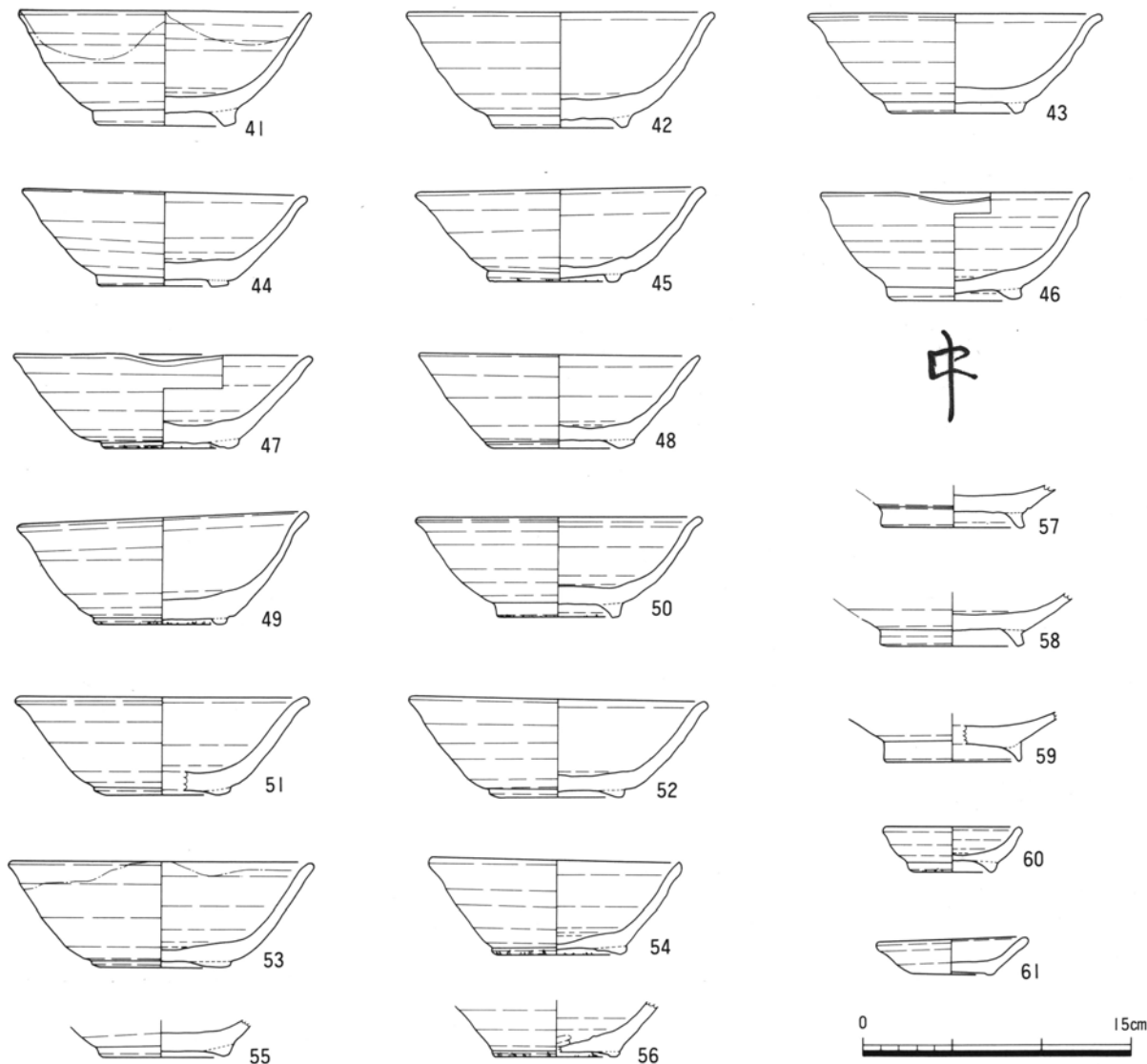


第21図 SX111・SX103平面図・断面図 (1:40)



2. 出土遺物

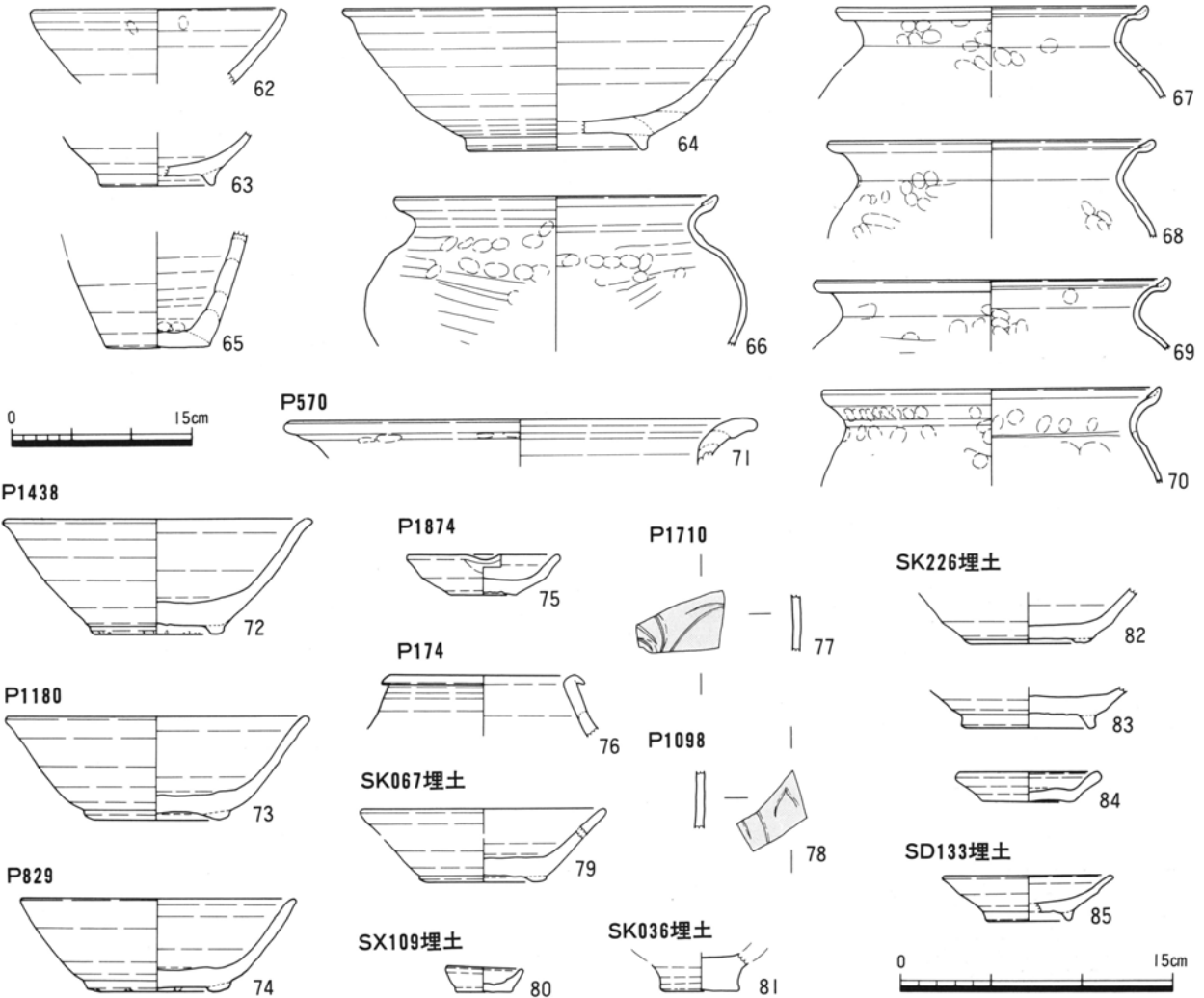
SE001



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	種類	用途	器種	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
41	92A	SE001	山茶碗類	供膳具	碗	6.3	16.0	-	6.9	ナテ	ナテ	渥美	底部回転糸切痕, 口縁部灰釉漬け掛け	22	E-041
42	"	"	"	"	"	6.4	(16.8)	-	6.9	"	"	"	底部回転糸切痕か		E-042
43	"	"	"	"	"	5.5	(16.1)	-	6.7	"	"	"	底部回転糸切痕, 見込み剥離痕, 口縁部自然釉		E-043
44	"	"	"	"	"	5.2	15.6	-	6.4	"	"	"	口縁部内面剥離片融着, 口縁部自然釉		E-044
45	"	"	"	"	"	5.1	15.6	-	6.2	"	"	"	高台内圧痕, 高台粗痕, 内面から口縁部自然釉, 内外面炭化物付着		E-045
46	"	"	"	"	"	6.0	14.8	-	6.7	"	"	"	片口碗か, 高台内墨書「中」	22	E-046
47	"	"	"	"	"	5.2	16.3	-	6.7	"	"	"	片口碗か, 見込み押圧痕・剥離痕, 底部回転糸切痕, 高台粗痕		E-047
48	"	"	"	"	"	5.2	15.4	-	6.8	"	"	"	底部回転糸切痕	22	E-048
49	"	"	"	"	"	5.8	15.7	-	6.6	"	"	"	底部回転糸切痕, 高台粗痕, 内面から口縁部自然釉		E-049
50	"	"	"	"	"	5.6	(15.6)	-	6.6	"	"	"	見込み押圧痕, 高台粗痕		E-050
51	"	"	"	"	"	5.4	(15.8)	-	(6.0)	"	"	"	内外面に炭化物付着		E-051
52	"	"	"	"	"	5.5	16.2	-	6.5	"	"	"	内面から口縁部自然釉, 口縁部内面に剥離片融着		E-052
53	"	"	"	"	"	5.8	(16.5)	-	6.7	"	"	"	口縁部灰釉漬け掛けか		E-053
54	"	"	"	"	"	5.2	13.7	-	6.8	"	"	不明	見込み押圧痕, 高台粗痕, 見込み剥離痕, 常滑か		E-054
55	"	"	"	"	"	-	-	-	6.5	"	"	渥美			E-055
56	"	"	"	"	"	-	-	-	(6.7)	"	"	不明	底部回転糸切痕, 見込み押圧痕, 高台粗痕, 焼成後底部穿孔		E-056
57	"	"	"	"	"	-	-	-	7.4	"	"	渥美	底部回転糸切痕, 見込み剥離痕		E-057
58	"	"	"	"	"	-	-	-	7.2	"	"	"	底部回転糸切痕, 見込み剥離痕, 内面自然釉		E-058
59	"	"	"	"	"	-	-	-	(7.4)	"	"	"	底部糸切痕		E-059
60	"	"	"	"	皿	2.5	(7.4)	-	(4.2)	"	"	"	見込み押圧痕		E-060
61	"	"	"	"	"	2.0	8.2	-	4.2	"	"	"	見込み剥離痕, 内面から口縁部自然釉	22	E-061

第23図 中世の遺物 (1) (1:4)

SE001

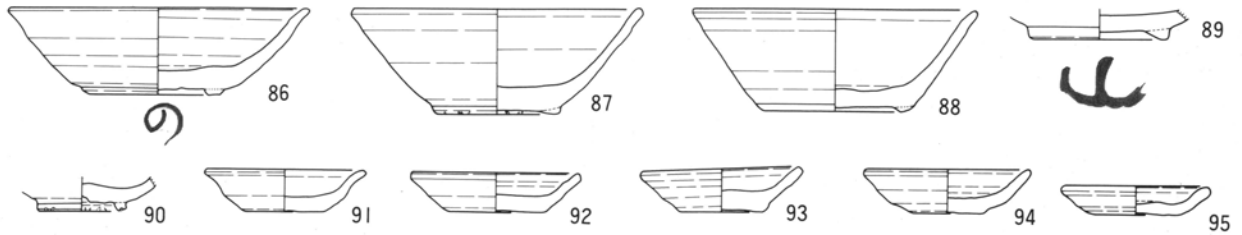


遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	種類	用途	器種	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
62	92A	SE001	山茶碗類	調理具	鉢	-	(20.4)	-	-	ナデ	ナデ	渥美	口縁部剥離片融着		E-062
63	"	"	"	"	"	-	-	-	(9.1)	"	"	"	底部回転糸切痕		E-063
64	"	"	"	供膳具	鉢	11.8	(34.7)	-	(14.2)	"	"	不明	内面使用による摩滅痕, 外面体部植物繊維痕	22	E-064
65	"	"	焼締陶器	貯蔵具	壺	-	-	-	8.6	指押え+ナデ	"	渥美	浜北か, 底部植物繊維痕		E-065
66	"	"	土師器	調理具	鍋A	-	(26.6)	(31.6)	-	"	指押え+ナデ	不明	色調: 浅黄色, 伊勢型鍋, 外面煤付着		E-066
67	"	"	"	"	"	-	(25.6)	-	-	"	"	"	色調: にふい黄橙色, 伊勢型鍋, 外面煤付着		E-067
68	"	"	"	"	"	-	(26.6)	-	-	"	"	"	色調: にふい黄橙色, 伊勢型鍋, 外面煤付着		E-068
69	"	"	"	"	"	-	(28.8)	-	-	"	"	"	色調: 浅黄色, 伊勢型鍋, 外面煤付着		E-069
70	"	"	"	"	"	-	(27.8)	-	-	"	"	"	色調: 浅黄色, 伊勢型鍋, 外面煤付着		E-070
71	93B	P 570	焼締陶器	貯蔵具	甕	-	(38.0)	-	-	"	"	渥美			E-071
72	92A	P1438	山茶碗類	供膳具	碗	6.3	(16.6)	-	(6.2)	ナデ	ナデ	"	高台靱痕		E-072
73	93B	P1180	"	"	"	5.7	(16.5)	-	(6.7)	"	"	"		22	E-073
74	"	P 829	"	"	"	5.1	(15.0)	-	(6.3)	"	"	"	高台内圧痕, 高台靱痕		E-074
75	92A	P1874	"	"	皿	2.2	(8.2)	-	3.6	"	"	"	片口皿か, 底部回転糸切痕, 内面自然釉		E-075
76	93B	P 174	焼締陶器	貯蔵具	壺	-	(10.2)	-	-	"	"	常滑			E-076
77	92A	P1710	貿易陶器	供膳具	碗	-	-	-	-	-	-	中国	青磁碗・画花文	22	E-077
78	93B	P1098	"	"	"	-	-	-	-	-	-	"	青磁碗・蓮弁文	22	E-078
79	"	SK067埋土	山茶碗類	"	"	4.0	(13.2)	-	(5.8)	ナデ	ナデ	渥美			E-079
80	92A	SX109埋土	"	その他	-	1.4	4.1	-	3.0	"	"	"	底部回転糸切痕, ミニチュアか, 内面自然釉	22	E-080
81	93B	SK036埋土	"	供膳具	皿?	-	-	-	3.9	"	"	"	底部回転糸切痕, 底部突出か	22	E-081
82	92A	SK226埋土	"	"	碗	-	-	-	-	"	"	"			E-082
83	"	"	"	"	"	-	-	-	(6.8)	"	"	"	見込み剥離痕	22	E-083
84	"	"	"	"	皿	1.6	(7.6)	-	(4.9)	"	"	"	底部回転糸切痕, 見込み押圧痕		E-084
85	93B	SD133埋土	"	"	"	2.4	(9.0)	-	(4.5)	"	"	"	小碗, 底部回転糸切痕	22	E-085

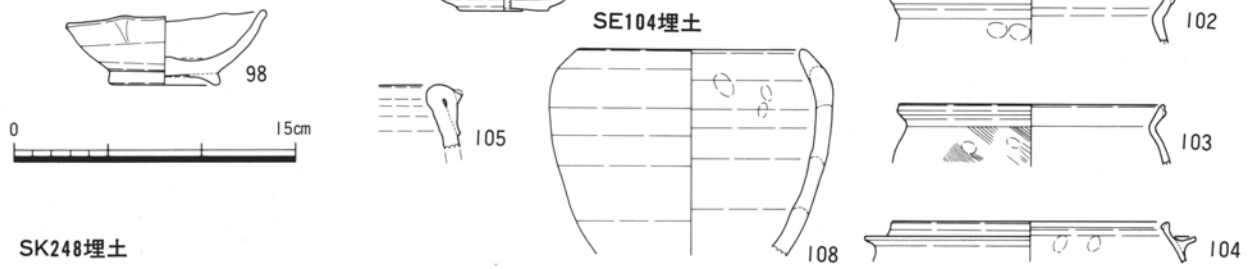
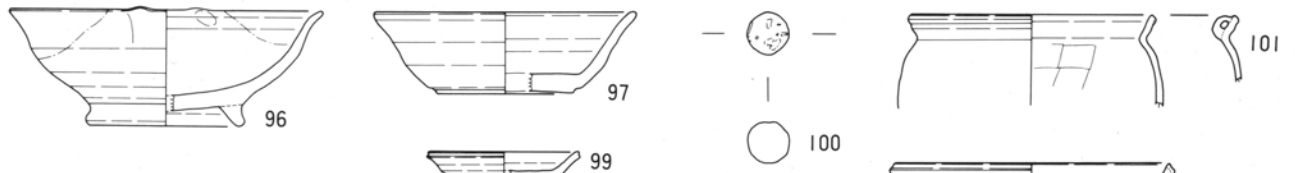
第24図 中世の遺物 (2) (62~70は1:6, 他は1:4)



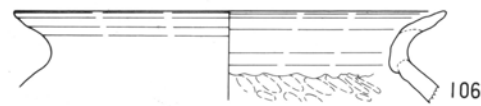
SK289埋土



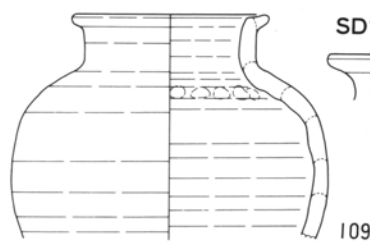
検出



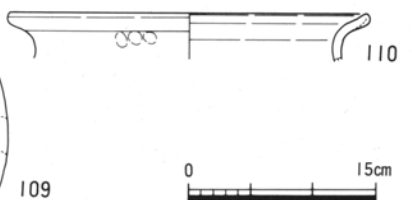
SK248埋土



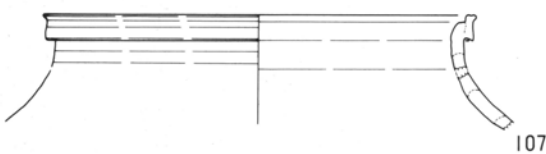
SD102埋土



SD120埋土



SK096埋土



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号	
	調査区	遺構	種類	用途	器種	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
86	92A	SK289	山茶碗類	供膳具	碗	4.6	15.6	-	7.4	ナテ	ナテ	渥美	底部回転糸切痕, 板状圧痕, 高台内墨書「の」	22	E-086
87	"	"	"	"	"	5.6	(15.2)	-	6.0	"	"	"	内面自然釉, 高台靱痕		E-087
88	"	"	"	"	"	5.4	(15.0)	-	7.1	"	"	"	見込み押圧痕		E-088
89	"	"	"	"	"	-	-	-	(6.8)	"	"	"	見込み押圧痕, 高台内墨書「山」か	22	E-089
90	"	"	"	"	皿	-	-	-	4.5	"	"	"	底部回転糸切痕, 内面炭化物付着, 高台靱痕		E-090
91	"	"	"	"	"	2.2	(8.2)	-	(4.1)	"	"	"	底部回転糸切痕, 見込み押圧痕, 口縁部自然釉		E-091
92	"	"	"	"	"	2.1	(8.8)	-	4.7	"	"	"	底部回転糸切痕		E-092
93	"	"	"	"	"	2.3	8.4	-	4.3	"	"	"	底部回転糸切痕		E-093
94	"	"	"	"	"	2.3	(8.6)	-	3.6	"	"	"			E-094
95	"	"	"	"	"	1.5	(7.4)	-	(4.2)	"	"	"	見込み押圧痕, 内面から口縁部自然釉		E-095
96	93B	検出	"	"	碗	6.1	(16.5)	-	(8.0)	"	"	"	輪花碗か, 口縁部灰釉漬け掛け, 底部回転糸切痕		E-096
97	"	"	"	"	"	4.3	(13.8)	-	(7.2)	"	"	"	底部回転糸切痕		E-097
98	"	"	"	"	皿	1.6	(7.7)	-	(4.6)	"	"	"		22	E-098
99	"	"	"	"	"	3.5	10.3	-	5.5	"	"	"	輪花碗か(4ヶ所), 内面自然釉		E-099
100	92A	"	"	その他	陶丸	-	-	-	-	"	"	"	長径2.2cm, 短径2.1cm	22	E-100
101	93B	"	土師器	調理具	鍋B	-	(19.3)	(21.2)	-	ヨコナテ	"	不明	色調: 灰白色, くの字型鍋, 外面煤付着	22	E-101
102	"	"	"	"	"	-	(21.8)	-	-	"	"	"	色調: 浅黄色, くの字型鍋		E-102
103	92A	"	"	"	"	-	(21.0)	-	-	ナテ	"	"	くの字型鍋, 色調: 橙色, 外面煤付着		E-103
104	"	"	"	"	釜	-	(21.8)	-	-	"	"	"	羽釜, 色調: 浅黄色, 鈔径(26.4)cm	22	E-104
105	93B	"	焼締陶器	貯蔵具	甕	-	-	-	-	-	"	常滑			E-105
106	92A	SK248	"	"	"	-	(34.4)	-	-	-	-	渥美	灰釉が吹いている		E-106
107	93B	SK096	"	"	"	-	(34.4)	-	-	指押え+ナテ	指押え+ナテ	常滑	外面自然釉		E-107
108	"	SE104	"	"	壺	-	(17.6)	(22.7)	-	灰釉	灰釉	不明	常滑か	22	E-108
109	"	SD102	"	"	"	-	(15.4)	-	-	指押え+ナテ	ナテ	常滑	口縁部から外面に自然釉	22	E-109
110	"	SD120	土師器	調理具	鍋A	-	(28.5)	-	-	ナテ	指押え+ナテ	不明	色調: にぶい黄橙色, 伊勢型鍋		E-110

第25図 中世の遺物(3) (101~110は1:6, 他は1:4)

## 第IV章 近世の遺構と遺物



## 第1節 近世の遺構

### 1. 概要

本遺跡から検出された多種多様な遺構群が、吉田城の外堀とその城下に整備された武家屋敷地であることは、「吉田藩士屋敷図」等の絵図から明らかである。発掘調査当初から、検出される遺構より屋敷地境や屋敷地内部の構造を明確にすることを主眼に調査を開始したが、遺構の切り合いが激しく、内部構造まで把握することは困難であった。

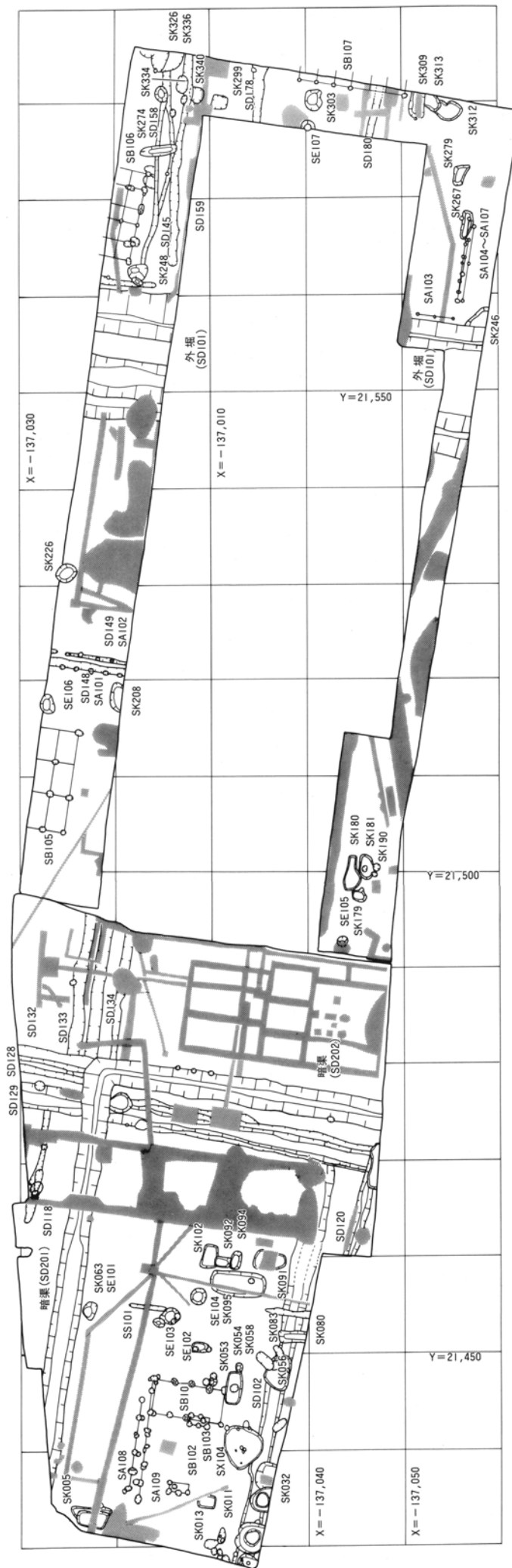
外堀は、92年度調査区の中央よりやや東側で検出された。外堀とは、武家屋敷と町屋とを区分する堀のことで、吉田城本丸より南東に約600m程のところに位置している。これまで、文献や絵図等では確認されていたが、発掘調査において検出されたのはこれが初めてである。残念ながら、その両肩と中央に攪乱を受けてはいるものの、その規模等を推定することはできる。外堀には土塁が付随していたと言われているが、今回の調査においては確認されなかった。時期としては、池田照政以降の譜代大名が小禄で財政的に彼の計画を実行できなかったことを考え合わせると、これだけの土木事業ができるのは池田照政の時期しか想定することができない。

吉田城の曲輪の周囲に巡らしてある堀と外堀との間には、東西南の三方から城を囲むように武家屋敷が位置している。その屋敷割りは、残存している絵図を見る限りほとんど変化することなく踏襲されているようである。そのため、身分・石高に応じて配分された家数は、2軒以上と多く、最も多い者では10軒を超える場合もあり<sup>(1)</sup>、その敷地面積も他の城下町に住む武士と比較してもかなり広いものであったことがわかる。城主の交代時に屋敷割りがよく変更される例が多いが、本遺跡においては大きな変化が確認されておらず、以前の屋敷をそのまま利用していたのと思われる。また、役職が変わったり代替わりすると屋敷替えが行われていたが、これも同様であったと考えられる<sup>(2)</sup>。

また、それぞれの屋敷の周囲には、その境界を示す遺構が存在している。それが溝や柵列或いは塀等、様々なものが利用され、またその幅や深さ等の規模も様々である。しかし、それぞれの屋敷地の境の方向はほぼ一致しており、外堀の軸にほぼ平行或いは直交しているものがほとんどで、何らかの計画性を持った町割りが実施されていることが確認された。しかし、これらの時期を決定できる遺構は確認されておらず、無遺物か廃絶時の時期しか想定することができない状況である。これもやはり外堀と同様に、吉田城の縄張りをした池田照政の時期しか考えられず、この時期か或いは城下町が整備される江戸時代初頭には完成していたものと思われる。

名古屋城三の丸遺跡で見られるような大型遺構は、本遺跡では外堀や井戸以外では確認されていない。出土する遺物から、16世紀末頃～18世紀後半頃までと、18世紀末頃～19世紀中頃までの大きく2つの時期に区分して見ることができる。前者を近世前期、後者を近世後期として捉えておきたい。しかし、これまでに述べてきたように、これらと遺構とを明確に位置づけていくことができない。そこでここでは、外堀・溝・柵列跡・建物跡・井戸・土坑等遺構の種類毎に見ることとし、その遺構の時期や性格付け、絵図における位置、居住者の変遷等については第VI章においてまとめることとする。

上記の他、廃藩置県後の明治初期に十八連隊による接收に伴う移転・廃絶時の一部が明かとなったり、第二次世界大戦中の防空壕跡等が確認されている。



第26図 近世主要遺構配置図 (1/600)

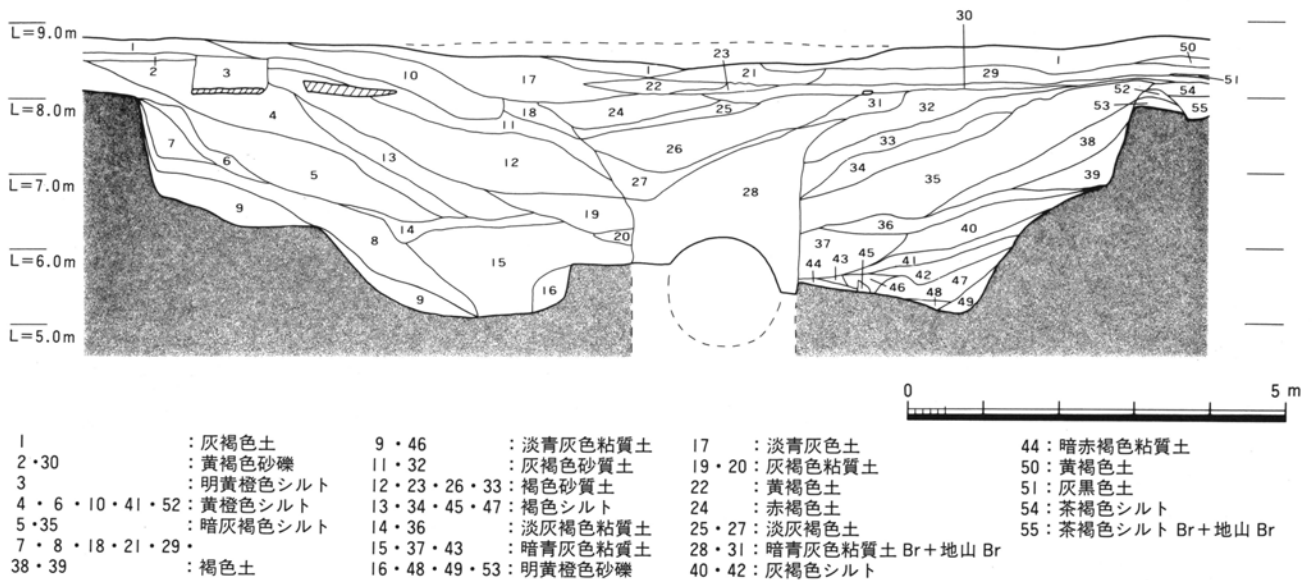
2. 外堀 (SD101)

外堀とは、武家屋敷地の外側に設けられた堀のことであり、町屋と区分する役割を持っている。これまで外堀があることはわかっていたが、その規模等は不明であった。しかし、今回の発掘調査において初めて検出され確認することができた。

検出された外堀は、92年度調査区の中央よりやや東側に位置しており、規模としては幅約14m、深さは約3m余を測り、方向はN-9°-Eを示している。残念ながら、中央部にヒューム管が埋設されており、明確な底は確認できなかったが、堀の内側に幅約2m程の「犬走り」状の段が存在すること、これだけの大規模な土木事業ができるのは池田照政の時期しか考えられず、この時期に外堀が掘削されたこと等が明らかとなった。出土遺物としては、江戸時代を通じて遺構が存在していたために16世紀末頃～19世紀中頃までの全ての時期の遺物がある。しかし、19世紀以降の遺物が大半を占めていることから、多くは吉田城廃城時に廃棄されたものと考えられる。

『豊橋市史 第2巻』によれば、水位の関係で水を引き入れることができずに城郭内の内堀と同様に空堀であったが、承応3年(1654)に郡代長谷川太郎左衛門が吉田東方約2kmの台地向山池(通称大池)を築き、堀割りを造ってこの池の水を導き城下の外堀に水を流入させたと書かれている<sup>(3)</sup>。最下層にはかなり粒子の細かいシルト層が堆積しており、その中より漆椀等の木製品が出土していることから、水堀であった可能性が高いように思われる。

また、外堀の西側ではSD148・SD149辺りまで近世の遺構が希薄になる地域がある。かなりの攪乱を受けていることもあるが、古代・中世の遺構が存在しているのに対し、近世の遺構はSK226等極僅かである。絵図等によれば、この辺りは「馬場」や道路、土塁があったようであるが、今回の発掘調査においてはそれらの遺構を確認することはできなかった。しかし、そのような広い空間が存在していたであろうことは簡単に想定できる。



第27図 外堀 (SD101) 断面図 (1/100)

### 3. 溝 (SD)

今回の発掘調査において、数多くの溝が検出されている。その規模・形状・機能はさまざまである。機能とは、その溝がどのような目的で掘削されているのかということであり、例えば屋敷地と屋敷地との境を示していたり、1つの屋敷地の内側を更に細かく区画したり、排水のために利用されたりと、いろいろと想定することができる。ここでは、個別に溝を見ながら、それぞれの機能を考える手掛りにしていきたいと思う。

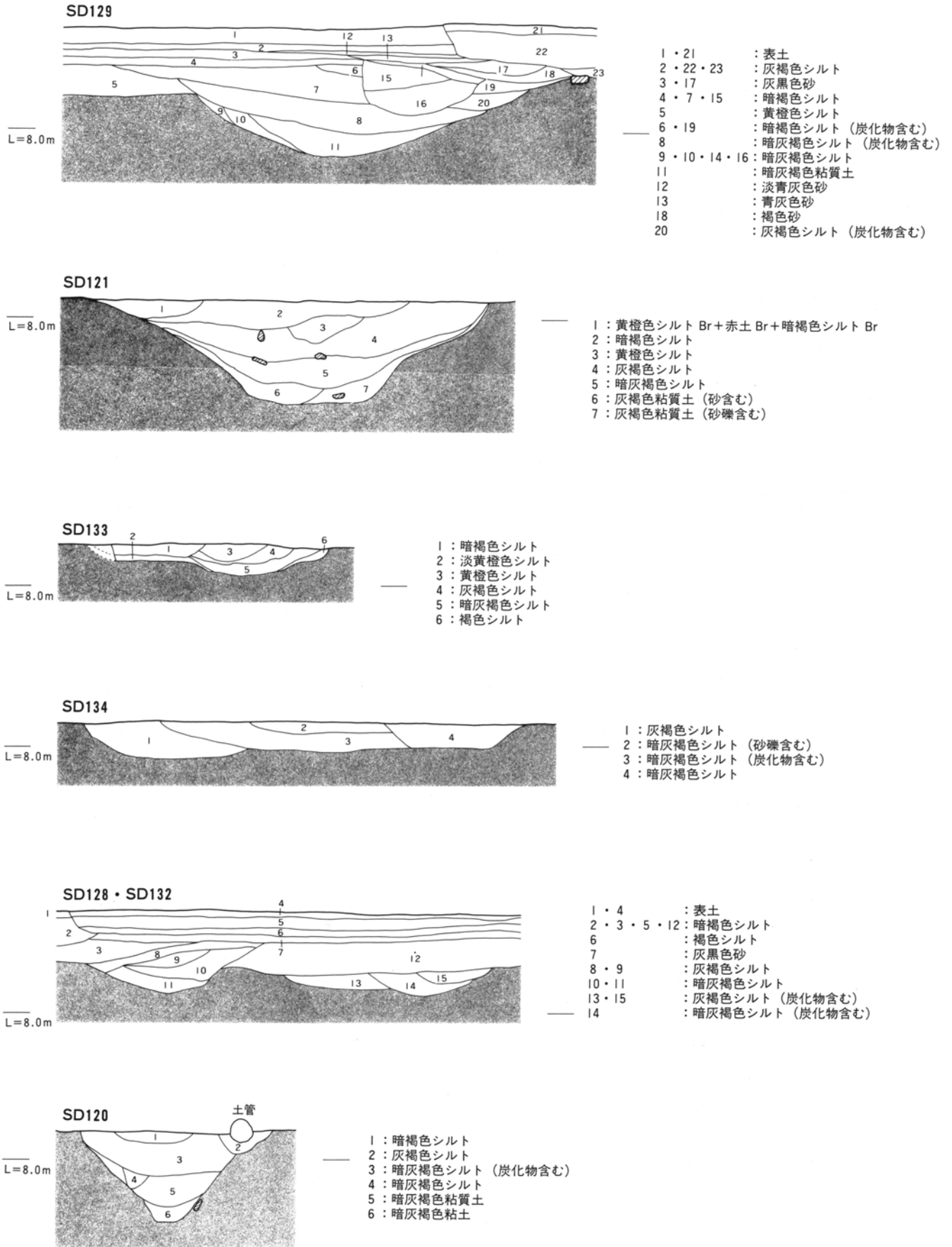
**SD129** 93年度調査区の東側で検出された溝で、断面形態はU字形を呈し、検出段階では幅約2.5m、深さ約0.5mを測り、推定生活面からはほぼ1m程の深さとなる。方向性はN-8-Eを示し、外堀とほぼ平行である。セクションを見てみると、数回の掘り返しを受けているようである。その位置・方向性等から、屋敷地境の溝と考えられる。出土遺物は外堀について多く、何回かに分けて投棄されたようであるが、屋敷廃絶時に一括投棄された廃棄土坑的な性格が強く感じられる。この溝の周囲の空間には廃棄土坑と思われる土坑は数カ所存在するがその出土量は少なく、このような溝や井戸に投棄していたのではないかと想定される。このため、時期としては18世紀中葉までと想定されるが、溝自体の掘削年代は随分と遡ることができそうである。

**SD102** 93年度調査区の南側で検出された溝で、断面形態はU字形を呈し、検出段階では幅約2.4m、深さ0.7mを測る。この溝と同様の機能を持つと思われるSD129よりもやや深い、推定生活面からは1m前後の深さと、ほぼ同規模の溝となる。方向性はE-9-Sを示し、外堀・SD129とは直交している。その位置・方向性等から屋敷地境の溝と考えられる。出土遺物も多く、SD129と同様に廃棄土坑的な性格を持っており、時期も同様かやや新しい時期が想定される。

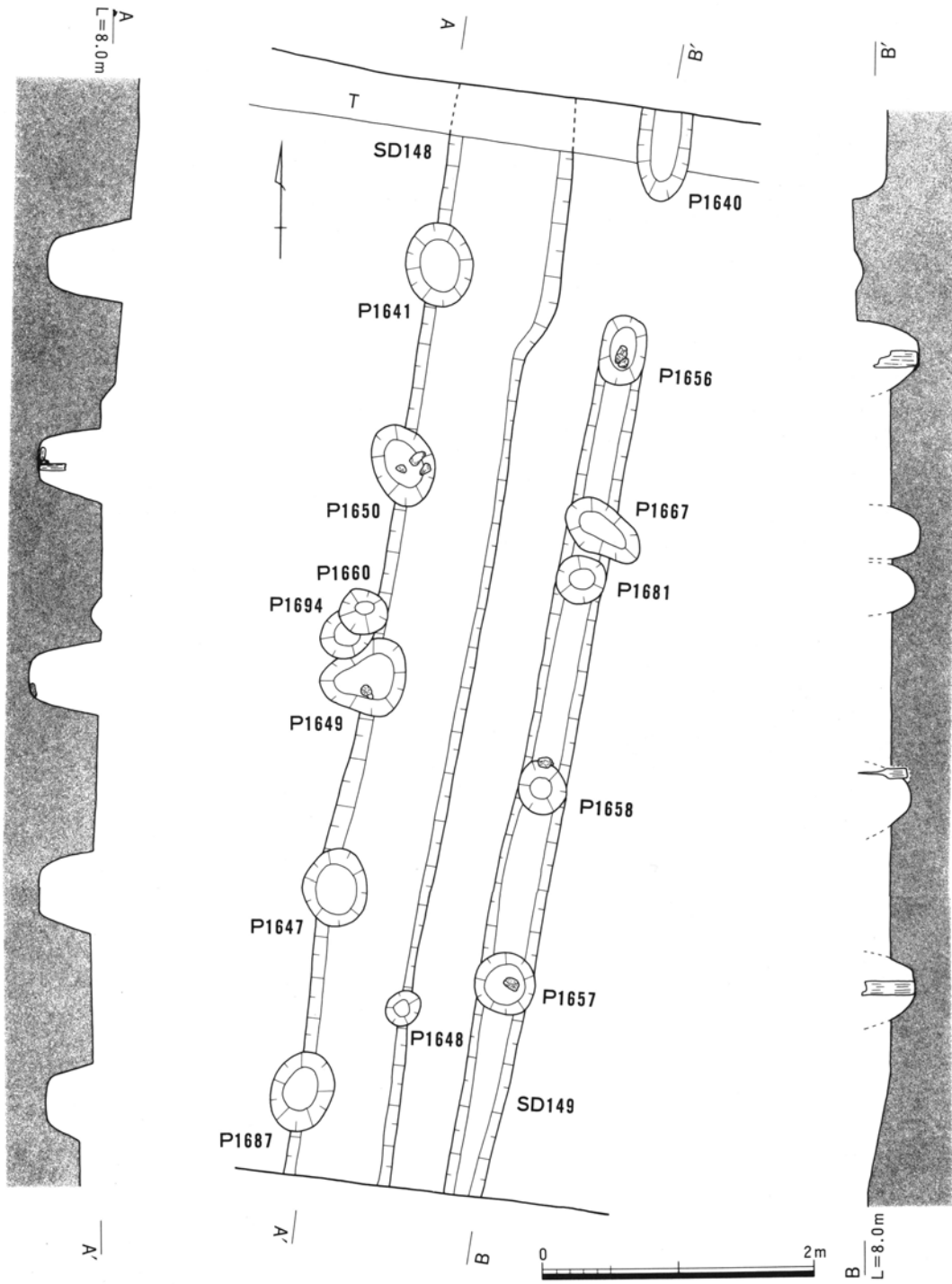
**SD104** 93年度調査区の北端で検出された溝で、断面はU字形に近く、検出段階では幅約1.0m、深さ0.2mとSD129やSD102と比較するとかなり小規模となっている。方向性は、E-10-Sを示し、SD129と直交し、SD102とはほぼ平行である。その規模等から、屋敷地境の溝または屋敷地内を区画する溝ではないかと考えられる。出土遺物としては、土師器皿が多く時期の決定は難しいが、江戸時代前半には掘削され、屋敷の廃絶までには埋められていると思われる。

**SD133** 93年度調査区の東端で検出された溝で、断面形態はU字形に近く、検出段階では幅約1.5m、深さ0.2mと浅く、断面のセクションを見てみると数回の掘り返しを受けており、もとは幅の狭い溝であったことがわかる。方向性は、E-11-Sを示し、SD129とはほぼ直交している。規模としてはSD104と同様であることから、屋敷地境の溝か屋敷地内を区画する溝と考えられる。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、18世紀中葉～後葉頃までと考えられる。

**SD134** 93年度調査区の東端で検出された溝で、SD133の南側に位置している。掘り形はU字形で、検出段階で幅約3.7m、深さ0.2～0.4m程になっているが、断面のセクションを見てみると、北から南へ3回にわたって掘られていることが確認された。それぞれの幅は約1.0m前後となっている。方向性は、E-8-Sとすぐ北のSD133とよく似た数値を示している。出土遺物としては、基石等の石製品の出土が目立ち陶磁器類の出土が少なく、時期の決定は難しいが、19世紀代が想定される。SD133埋設後に掘削された可能性が高く、19世紀前葉～中葉の時期が考えられる。



第28図 溝断面図 (1:40)



第29図 SD148・SD149・SA101・SA102平面図・断面図 (1:50)



第30図 溝断面図 (1:40)



**SD132** 93年度調査区の暗渠の北側で検出された溝で、SD129の東側に位置する。掘り形はU字形を呈し、検出段階で幅約1.9m、深さ0.2m程で、方向性はN-11°-Eと、SD129とよく似た数値を示している。また、セクション図より掘り返しを受けていることが確認され、前述したSD133・SD134とほぼ同規模となり、これらと同様の性格を持つ溝と考えられる。しかし、この溝の南側部分が暗渠となって確認できないため、確実に屋敷境の溝とは断定できない。出土遺物が少なく時期の決定はできないが、遺構の切り合い関係等から想定してみると、SD129埋設後からSD128掘削前となり、ほぼ19世紀前葉頃が考えられる。

**SD128** 93年度調査区の暗渠の北側で検出された溝で、SD129の東隣に位置する。掘り形はU字形で、検出段階で幅約0.8m、深さ0.2mである。方向性はN-12°-Eと、外堀や他の屋敷地境の溝に近い数値を示している。屋敷地境の溝或いは屋敷地内を区画する溝と考えられる。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、遺構の切り合い等からSD132よりも新しい時期が想定される。

**SD120** 93年度調査区の南端で検出された溝で、SD102の南側に位置する。掘り形は断面V字形で、これまでの溝とは形状が異なっている。検出段階で、幅約1.5m、深さは0.6m程、方向性はE-12°-Sを示し、屋敷地境の溝とほぼ同様の規模・方向性を持っており、SD102埋設後の屋敷地境の溝としての可能性が高いように思われる。出土遺物としては、土師質製品である鍋・釜類や皿類が多く年代決定は難しい。

**SD116** 93年度調査区の中央で検出された溝で、SE103の東側に位置する。掘り形は箱掘り形に近く、検出段階で幅約0.4m、深さ0.1m程と極端に浅くなっている。方向性は、N-12°-Eを示している。井戸に隣接することから、排水のための溝と思われる。出土遺物は少なく時期の決定は難しいが、SE103と同様の18世紀中葉までが想定される。

**SD135** 93年度調査区の東端で検出された溝で、SD134のすぐ南側に位置する。断面形態はU字形で、検出段階で幅約0.5m、深さ0.1m程で、規模はかなり小さく、排水のための溝と考えられる。方向性は、N-9°-Eを示している。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SD136** 93年度調査区の東端で検出された溝で、SD135のすぐ南側に位置する。掘り形はU字形呈し、検出段階で幅約0.6m、深さ0.1mを測り、SD135と同規模である。方向性は、E-8°-Sを示し、SD135同様排水のための溝と思われる。出土遺物がなく、時期は不明である。

**SD148** 92年度調査区の北西で検出された溝で、内側に柵列を想定させる柱穴列(SA101)が確認されている。断面形態は箱掘り形で、検出段階で幅約0.9m、深さ0.3m程を測り、前述したSD133等と同規模である。方向性はN-10°-Eを示し、外堀とほぼ平行であることから、外堀と屋敷地を区画する屋敷地境の溝と考えられる。出土遺物から、19世紀前葉までが想定されるが、掘削年代は町割り成立時にまで遡ることができよう。また、遺構の切り合い関係からこの溝が埋没された後、新しい屋敷地境としてSA101が設置されたものと思われる。

**SD149** 92年度調査区の北西で検出された溝で、SD148のすぐ東側に位置する。SA102が溝内に存在し、これとともに板塀跡を想定することができる。掘り形は箱掘り形で、検出段階で幅約0.4m、深さ0.2m程を測り、かなり小規模である。方向性は、N-11°-Eを示し、外堀や隣接するSD148と主軸方向はややずれてはいるが、屋敷地境の溝と考えられる。SD148と同様の性格を持つ溝と考えられる。

時期決定は、出土遺物が極端に少なく難しい。しかし、その掘削年代はSD148同様、かなり遡ることができるであろう。

**SD145** 92年度調査区の北西で検出された溝である。検出段階で幅約0.6m、深さ0.2mを測り、その規模・位置等から、排水のための溝と思われる。方向性は、E-6°-Sを示している。出土遺物は少なく時期の決定は難しいが、江戸後期の時期が想定される。

**SD166** 92年度調査区の北東で検出された溝で、外堀の東側に位置する。検出段階で幅約0.5m、深さ0.2mを測る。その規模・位置等から、排水のための溝と思われる。方向性は不定であるが、ほぼ東西方向を示している。出土遺物が少なく時期は確定できないが、遺構の切り合い関係等から江戸前期の時期が想定される。

**SD158** 92年度調査区の北東で検出された溝で、外堀の東側に位置する。検出段階で幅約0.6m、深さ0.4mを測る。その規模・位置等から、排水のための溝と思われる。方向性は不定であるが、ほぼ東西方向を示している。出土遺物が少なく時期は確定できないが、SD166を切りSK274に切られていることから、19世紀前葉頃と思われる。

**SD159** 92年度調査区の北東で検出された溝で、外堀の東側に位置する。検出段階で幅約1.0m、深さ0.3mを測る。その規模・位置等から、排水のための溝と思われる。方向性は不定であるが、ほぼ東西方向を示している。出土遺物は少なく時期は確定できないが、遺構の切り合い関係からSD158と同様の時期が想定される。

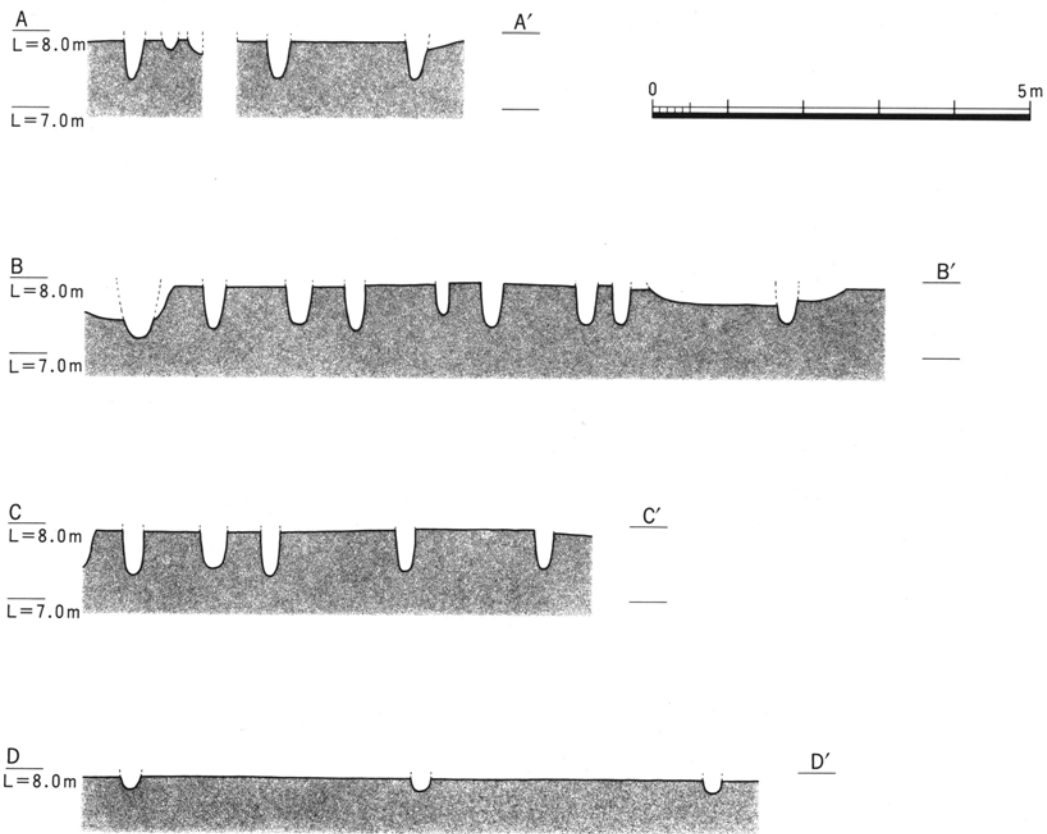
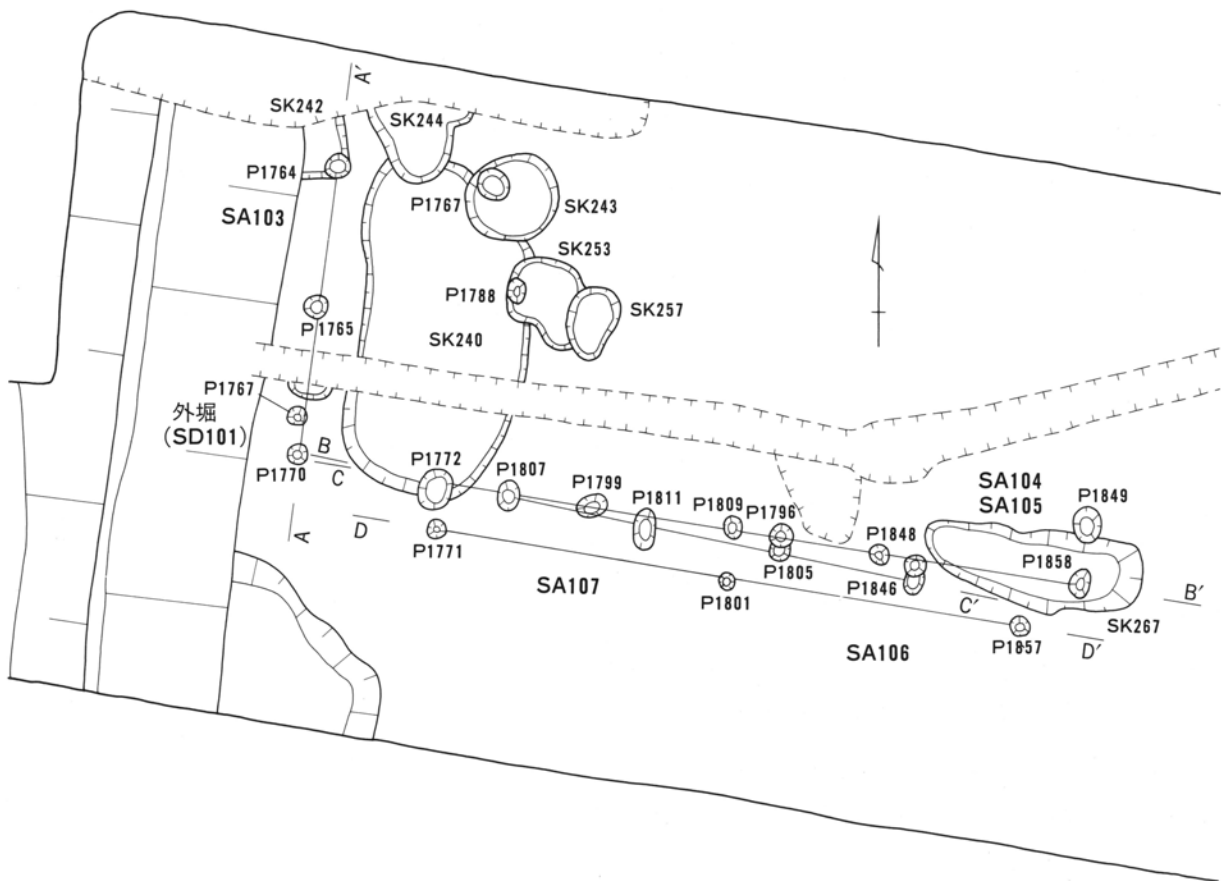
**SD180** 92年度調査区の東端で検出された溝である。掘り形は箱掘り形を呈し、検出段階で幅約0.8m、深さ0.4mを測る。屋敷地境の溝或いは屋敷内を区画する溝とも考えられる。方向性は、E-20°-Sを示し、他の屋敷境の溝とは主軸方向が異なっている。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、江戸前期に属する遺構と思われる。

**SD178** 92年度調査区の東端で検出された溝で、SD180の北側に位置する。断面形態は箱掘り形で、SD180と同形態である。検出段階では幅約1.3m、深さ0.3mを測る。方向性は、E-6°-Sを示し、外堀とほぼ直交する。出土遺物より時期は、19世紀前葉～中葉と考えられる。

#### 4. 柵列跡 (SA)

今回の発掘調査において、数条の柵列が確認されている。これらの柵列においても、規模は様々で、屋敷地境や屋敷地内を区画する施設であったと考えられる。時期については、出土遺物がなく、確定できるものはほとんどない。

**SA101** 92年度調査区の北西に位置し、SD148の西側に遺構を切る形で検出されている。柱穴は5ヶ所確認され、それぞれの径と深さは、南から0.5m×0.4m、0.5m×0.5m、0.6m×0.6m、0.5m×0.5m、0.6m×0.5mであり、底部の標高はほぼ7.5m前後となっている。柱間は心心間でほぼ1.6mとなっている。方向性は、N-10°-EとSD148と同様の値を示している。柱穴の中には、柱痕を残すものも1ヶ所確認されている。時期としては、出土遺物がないため決定できないが、SD148を切っていることから、19世紀前葉～中葉頃が想定される。SD148埋設後、屋敷地境として作られたものと思われる。



第31図 柵列平面図・断面図 (1:100)

**SA102** 92年度調査区の北西に位置し、SD149の中から検出されている。柱穴は4ヶ所確認されており、それぞれの径と深さは、南から0.5m×0.4m、0.4m×0.4m、0.4m×0.4m、0.5m×0.4mで、底部の標高はほぼ7.7m前後となっている。柱間は心心間で1.5mであるが、1ヶ所のみ1.8mを測る。方向性は、SD149と同様である。SD149とともに、板塀を構成していたものと考えられる。柱穴の中には、柱痕を残すものが、3ヶ所確認されている。また、すぐ北側で検出されたPit1640が同一の遺構とすれば、SA102との間が切れてここに出入口を想定することも可能となる。時期は、出土遺物が無いため不明であるが、近世前期の遺構と考えられる。

**SA103** 92年度調査区の南東で検出された柵列で、外堀の東側に位置する。柱穴は3ヶ所確認され、径と深さがそれぞれ0.2m×0.5mと均一で、柱間も心心間で約2.0mを測る。方向性はN-8°-Eを示し、外堀とほぼ平行である。外堀と屋敷地を区画する柵列とも考えられる。

**SA104** 92年度調査区の南東で検出された柵列で、外堀の東側に位置する。柱穴は5ヶ所確認され、それぞれ径0.2~0.4m、深さ0.5mで、柱間は心心間で約2.0mを測る。方向性はE-9°-Sを示し、外堀と直交する。屋敷地境か屋敷地内の区画のための柵列と思われる。

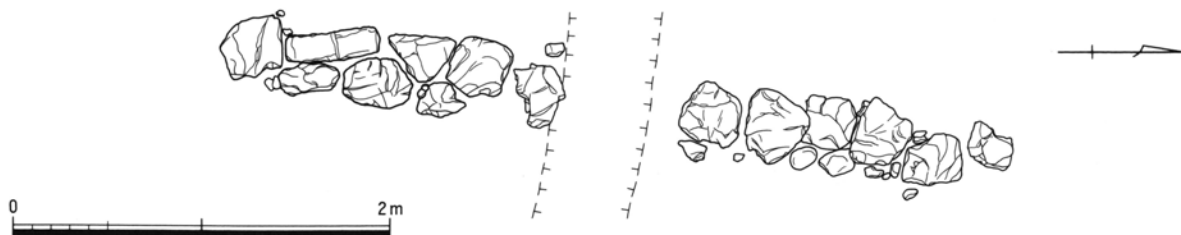
**SA105** 92年度調査区の南東で検出された柵列で、外堀の東側に位置する。柱穴は4ヶ所確認され、それぞれ径0.2~0.4m、深さ0.5mで、柱間は心心間で約1.8mを測る。方向性はE-10°-Sを示し、外堀とほぼ直交する。SA104と同様に、屋敷地境か屋敷地内の区画のための柵列と思われるが、前後関係は明かではない。

**SA106** 92年度調査区の南東で検出された柵列で、外堀の東側に位置する。柱穴は4ヶ所確認され、規模はSA105と同様で、それぞれ径0.2~0.4m、深さ0.5mで、柱間は心心間で約1.8mを測る。方向性はE-11°-Sを示し、外堀とほぼ直交する。SA105に切られる形で検出されており、SA105よりも古い年代を与えることができるが、SA104との前後関係は明らかではない。屋敷地境か屋敷地内の区画のための柵列と思われる。

**SA107** 92年度調査区の南東で検出された柵列で、外堀の東側に位置する。柱穴は3ヶ所確認され、径と深さがそれぞれ0.2m×0.2mで、柱間は心心間で約3.9mを測る。方向性はE-9°-Sを示し、外堀と直交する。屋敷地内の区画のための柵列と思われるが、時期は不明である。

## 5. 石列 (SS)

**SS101** 93年度調査区のほぼ中央で、幅約0.6m、長さ約4.2m、標高8.3m前後の石列が確認された。方向性はN-7°-Eを示し、外堀等とは主軸方向がやや異なっている。どちらかに石の面を揃えるようなことは見られない。屋敷地内を区画していたものと思われる。時期は不明である。



第32図 SS101平面図 (1:40)

## 6. 建物跡 (SB)

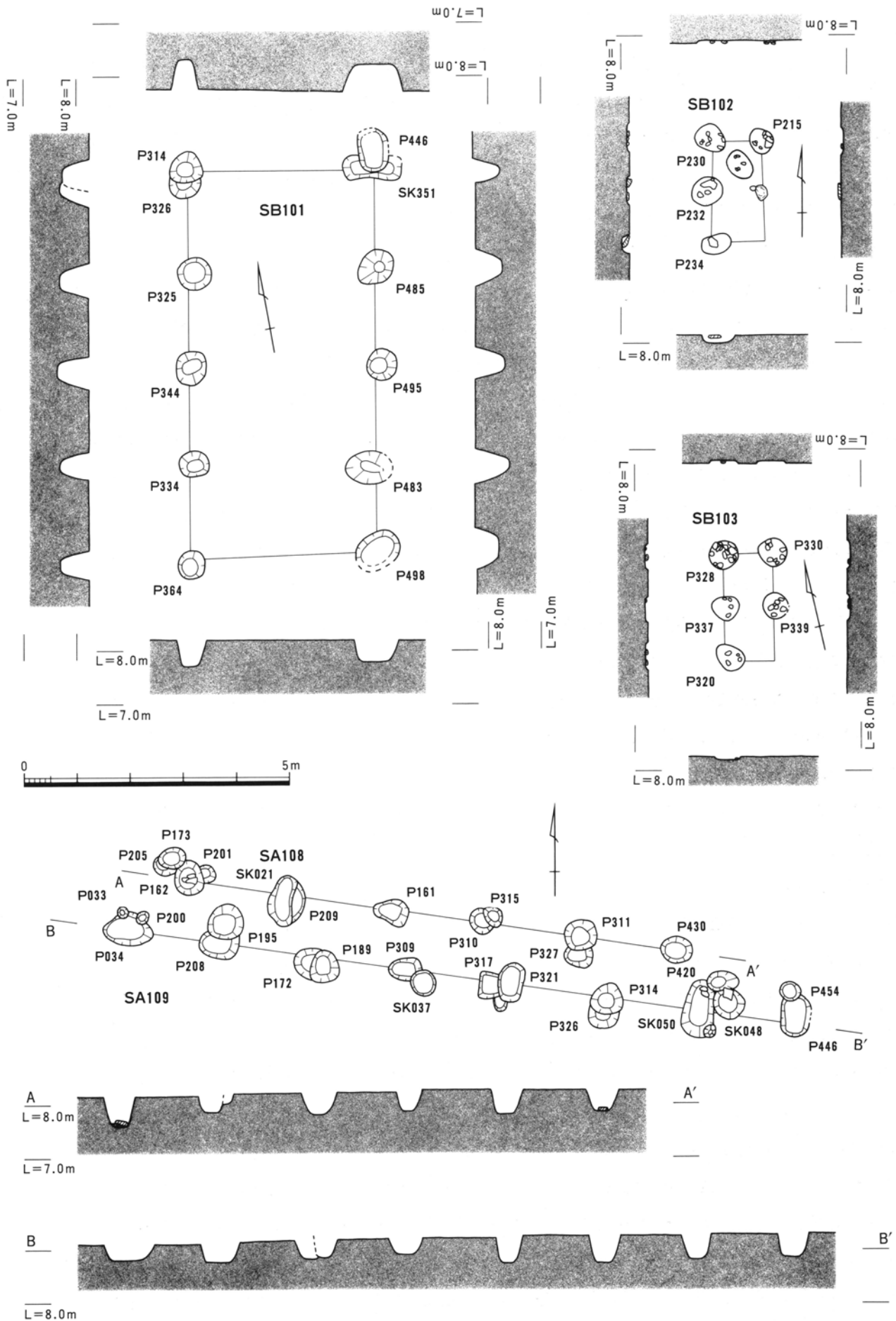
今回の発掘調査において、建物跡と思われるものが7棟確認されている。完全な建物を想定できたものは2棟と少なく、2棟は切り合いが激しく、残り3棟は調査区の端にて検出されその規模については不明な点が多い。その構造から大きく2つに分けることができる。1つは、検出面より50cm程掘り込まれた柱穴の中に礎石や根石が見られるもの、もう1つは、ほぼ検出面に根石と思われる集石の見られるものがある。時期の決定は出土遺物が無く難しいが、前者が江戸前期に属する建物跡、後者が江戸後期の建物跡と考えられる。

**SB101** 93年度調査区の西側で検出された建物跡で、暗渠・SD129・SD102に囲まれた中に位置している。確認された建物跡は、主軸がN-12°-Eを示し、東西方向に1間、南北方向に5間が確認されている。主軸方向は、これまで見てきた外堀や屋敷地境等の方向とはやや異にしている。また、東西と南北の1間の長さが異なっており、東西方向は心心間で3.6m、南北方向は心心間で1.8mを測る。柱穴はそれぞれ、径0.5~0.7m、深さ0.4~0.5m程を測り、ほぼ全てに根石と思われる河原石が確認されている。さらに、この建物跡に囲まれた範囲内には大きな遺構が確認されておらず、地山も砂礫層ではなくシルト層である。しっかりとした作りから、母屋のような建物と考えられる。この両側には、遺構の少ない部分が広がっているため、東西方向にもう3.6mづつ広げた建物を想定してもいいのではないだろうか。時期は不明であるが、近世前期に属する遺構と考えられる。

この周囲には、SA108・SA109という建物に関連しそうな遺構が確認されている。SA108は、SB101の北西に位置している。柱穴の径は0.4~0.6mで、深さは0.5m前後を測る。柱間は心心間でほぼ1.8mで、方向性は、E-10°-Sを示している。一部に根石のような河原石を確認している。また、SA109は、SA108のすぐ南側に位置している。柱穴の径は0.6~0.8mで、深さは0.5m前後を測る。柱間は心心間でほぼ1.8~2.0mで、方向性は、E-10°-Sを示している。一部で根石と思われる河原石を確認している。これらが、単なる柵列とするには、柱穴の規模等からは考え難く、建物に関連する遺構として捉えておきたい。

**SB102** 93年度調査区の西端で検出された建物跡で、暗渠・SD129・SD102に囲まれた中でSB101の西側に位置している。確認された建物跡は、主軸がN-6°-Eを示し、東西方向に1間、南北方向に2間を確認している。主軸の方向は、これまで見てきた外堀や屋敷地境やSB101等とも異にしている。東西方向・南北方向ともに心心間で1.0mを測り、かなり小規模である。柱穴はそれぞれ径0.4~0.5mを測り、地山直上に根石と思われる河原石の集石が確認されている。また、この建物跡に囲まれた北側の1間四方のほぼ中央に甕が埋められており、その甕の内面には糞尿の残槽が付着していることから、便所跡と思われる。時期は、江戸後期に属するものと思われる。

**SB103** 93年度調査区の西端で検出された建物跡で、暗渠・SD129・SD102に囲まれた中でSB101の南側に位置している。確認された建物跡は、主軸がN-6°-Eを示し、東西方向に1間、南北方向に2間が確認されている。東西方向・南北方向ともに心心間で1.0mを測り、かなり小規模である。方向性・規模ともに、SB102と全く同様である。柱穴はそれぞれ、径0.4~0.5mを測り、地山直上に根石と思われる河原石の集石が確認されている。納屋のような建物が想定される。時期は、SB102と同様江戸後期に属するものと思われる。



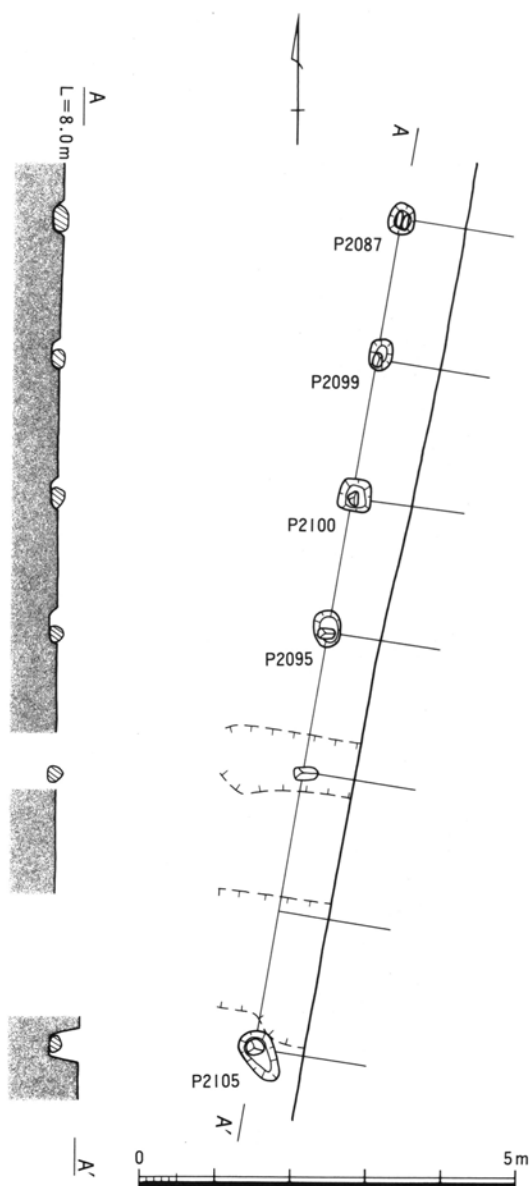
第33図 SB101・SB102・SB103・SA108・SA109平面図・断面図 (1:100)

**SB104** 93年度調査区の北東で検出された建物跡である。他の建物とは構造が異なり、検出段階で幅約0.5m、深さ0.1m程の溝によって三方を囲まれた建物で、その規模は幅4.0m、全長4.5mを測るが、調査区外に広がる可能性を持っている。溝の中には河原石の小礫が無秩序に入っているところから、土蔵のような建物と考えることもできる。

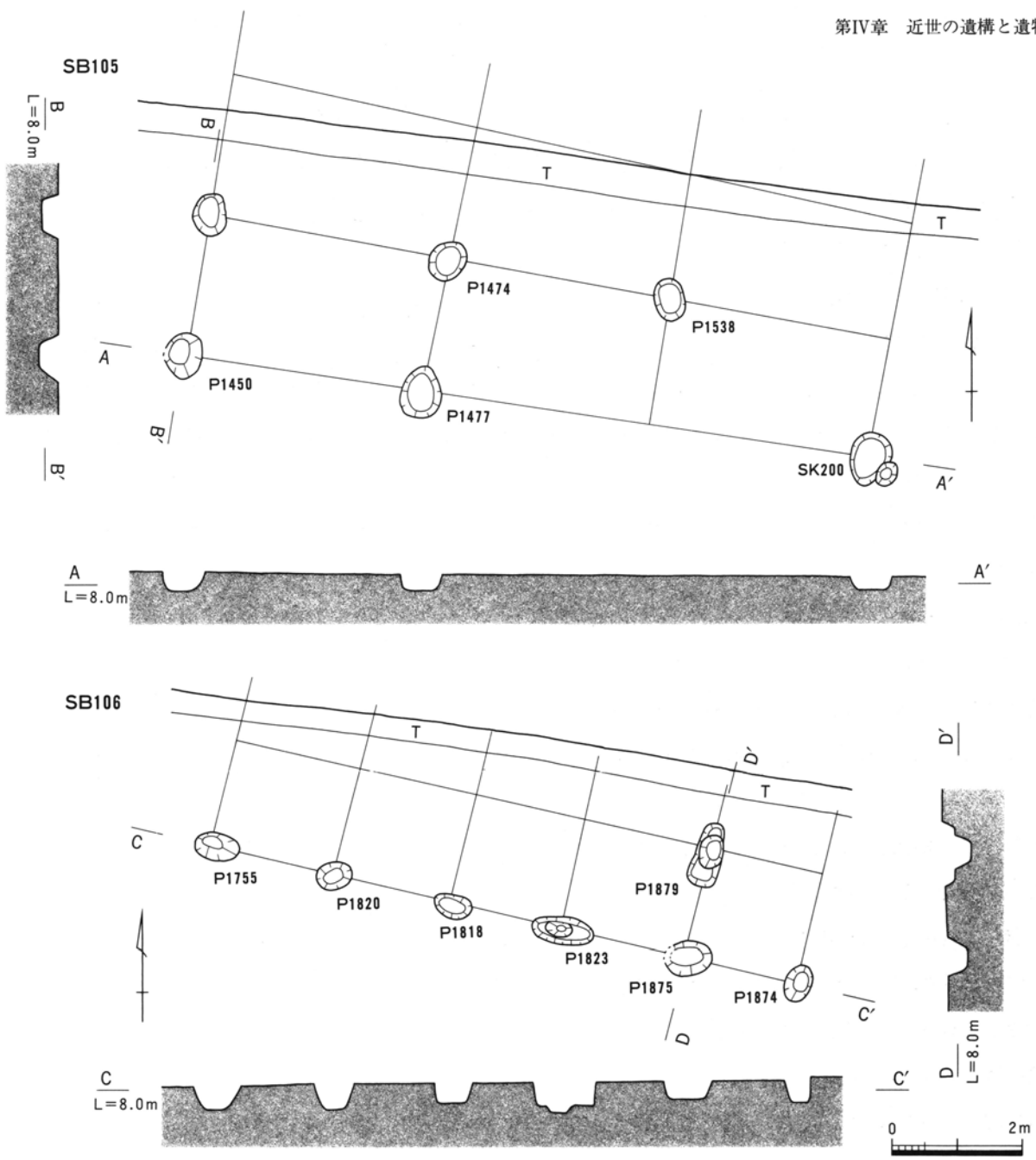
**SB105** 92年度調査区の北西で検出された建物跡で、屋敷地境と思われるSD148の西側に位置する。確認された建物跡は、主軸方向がE-10°-Sを示し、東西方向に3間、南北方向は1間が確認されているが、さらに調査区外に続いているものと思われる。柱間は、東西方向は心心間で3.6m、南北方向は心心間で2.0m、柱穴はそれぞれ、径0.6~0.8m、深さ0.4~0.5mを測る。ほぼ全ての柱穴で根石と思われる河原石を確認している。中でも2つの柱穴においては柱根も検出されており、礎石や根石の構造が明かとなった。屋敷地内の母屋のような建物と考えられる。時期は不明であるが、江戸後期に属するものと思われる。

**SB106** 92年度調査区の北東で検出された建物跡で、外堀の東側に位置する。確認された建物跡は、主軸方向がE-12°-Sを示し、東西方向に5間、南北方向は1間が確認されているが、さらに調査区外に続いているものと思われる。柱間は、東西方向・南北方向ともに心心間で1.8m、柱穴はそれぞれ、径は0.6m前後、深さは0.3m程を測る。ほぼ全ての柱穴で根石を確認している。母屋のような建物と考えられる。時期は不明であるが、江戸後期に属するものと思われる。

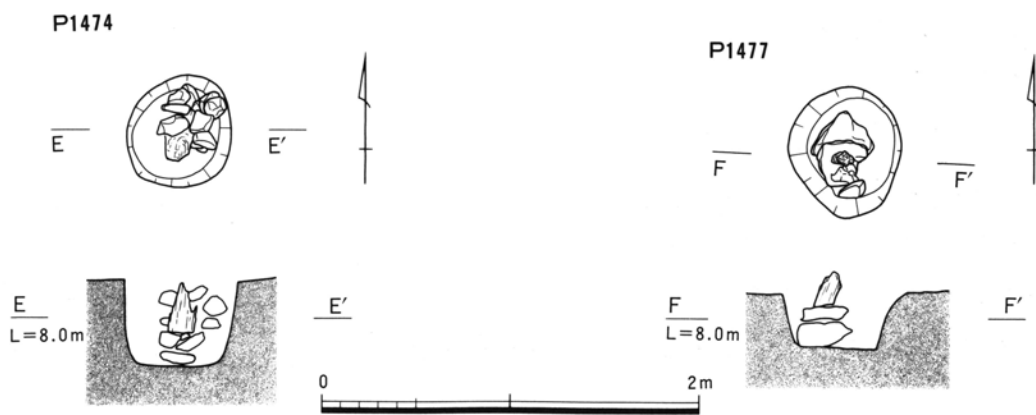
**SB107** 92年度調査区の東端で検出された建物跡で、屋敷地境と思われるSD178の南側に位置する。確認された建物跡は、主軸方向がN-10°-Eを示し、南北方向に6間、東西方向は確認されていないが西側に確認されていないことから、調査区外に続いているものと思われる。柱間は心心間で1.8m、柱穴はそれぞれ、径は0.4~0.5mを測り、深さは確認できなかった。ほぼ全ての柱穴で礎石と思われる石を確認している。母屋のような建物と考えられる。時期は不明であるが、SE107とともに江戸後期に属するものと思われる。



第34図 SB107平面図・断面図（1：100）



第35図 SB105・SB106平面図・断面図 (1:100)



第36図 柱痕平面図・断面図 (1:40)



## 7. 井戸 (SE)

本遺跡で確認された井戸は、全部で10基である。近世前期が5基、近世後期が4基、明治期の井戸が3基である。補足調査として重機による断ち割り調査を実施したが、時間的な制約もあって形態・井桶や井枠等の構造物の有無・底の確認に終始したため、十分な成果をあげることができなかった。

**SE106** 92年度調査区の北端で検出された井戸で、SD148・SD149の西側に位置する。検出段階で、長径約2.1m、短径約1.6m程の楕円形を呈している。掘り形はほぼ円筒状で、検出面より約4.3m程掘り下げられているが、下半部がやや袋状に広がっている。これは、掘削時に崩落したものなのか或いは意図的に掘削されたのかは不明である。井桶・井枠等は確認されていない。出土遺物としては、肥前産陶磁器類・瀬戸美濃産陶器類の他、漆器椀や蓋・曲げ物・下駄・箒等の木製品が大量に出土している。時期は、これらの遺物から18世紀前葉～中葉が想定される。

**SE101** 93年度調査区の北半で検出された井戸で、暗渠の南側に位置する。検出段階では確認されず、SK063の断ち割り調査で初めて確認された。上部をSK063に切られているので細かいことは不明であるが、径約1.0m程の円形を呈し、掘り形は円筒状に、検出面から約4.4m程掘り下げられている。井桶・井枠等は確認されなかった。出土遺物は少なく時期の決定は難しいが、SK063に切られていることから、江戸前期に属する遺構と想定される。

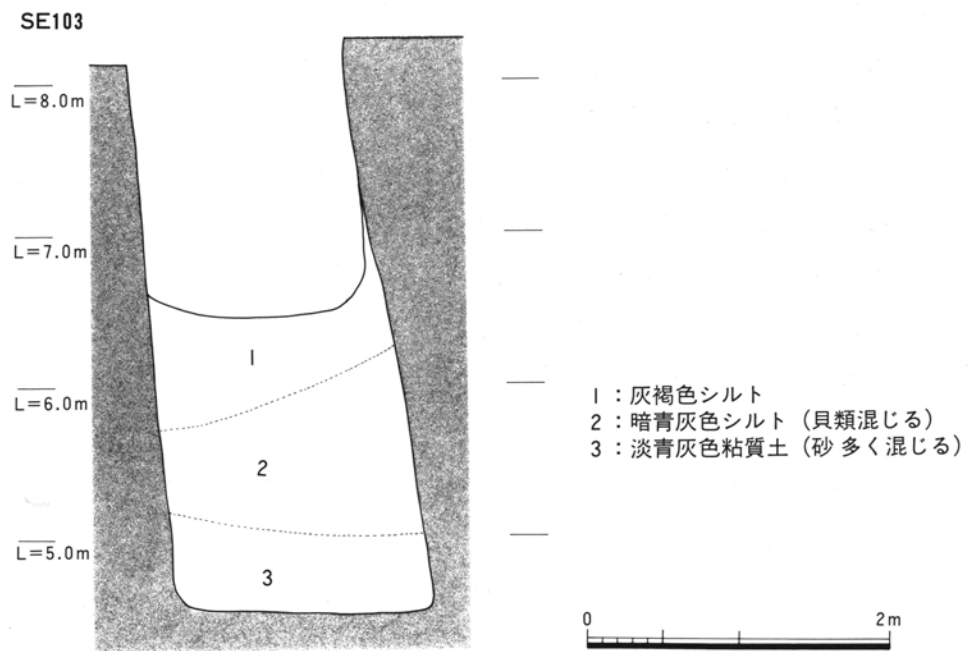
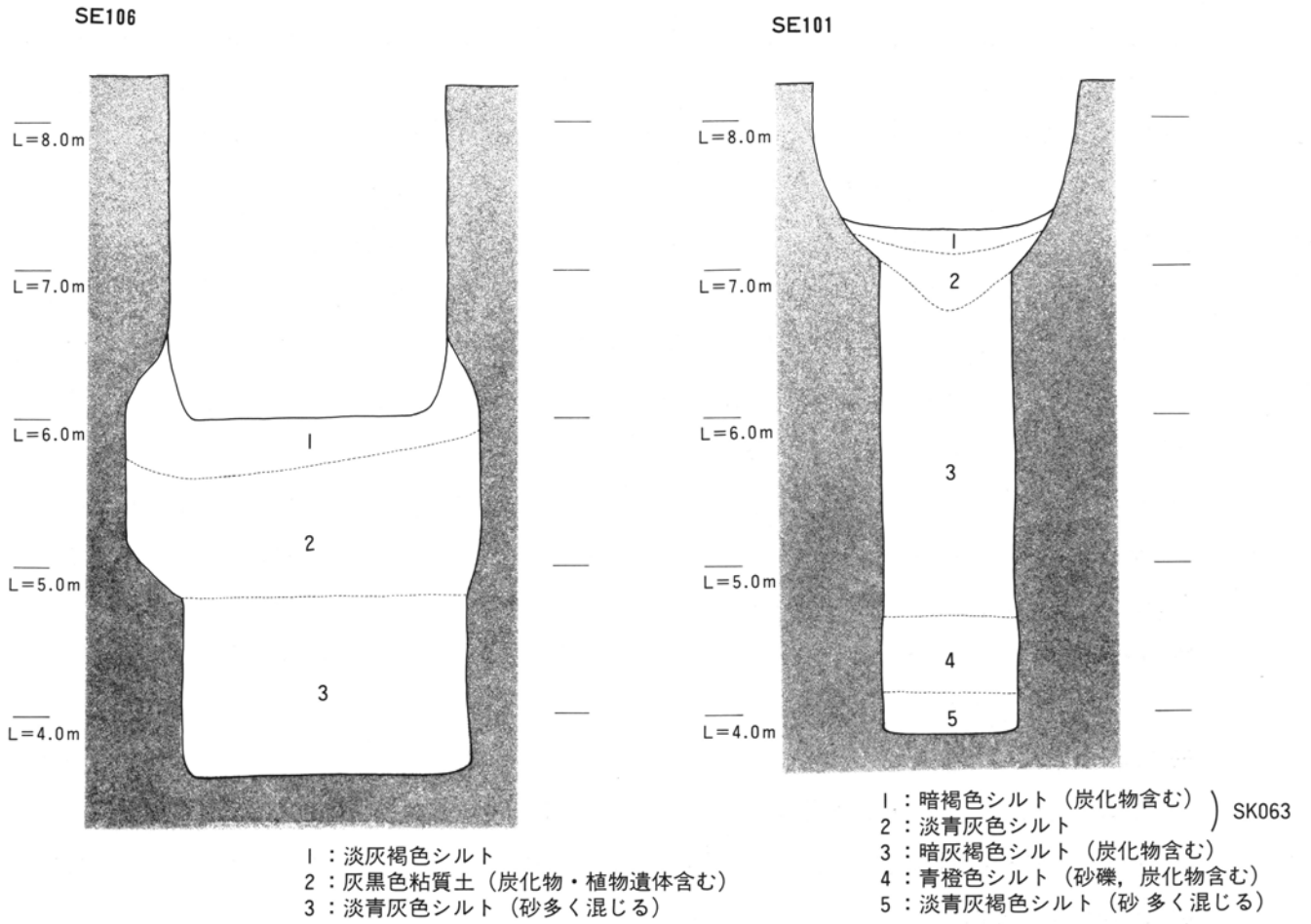
**SE103** 93年度調査区の中央で確認された井戸で、SB101の東側に位置する。検出段階で、長径約2.1m、短径約1.8mを測り、楕円形を呈している。掘り形は円筒状で、検出面から約3.4m程掘り下げられているが、やや南側に傾斜している。井桶・井枠等は確認されなかった。出土遺物から、時期は18世紀後葉が想定される。

**SE104** 93年度調査区の中央で確認された井戸で、SB101の東側、前述したSE103の南東に位置する。検出段階で、長径約1.8m、短径約1.6mを測り、ほぼ円形を呈している。掘り形は円筒状で、検出面から約4.2m程掘り下げられているが、最下部がやや開く形態をしている。井桶・井枠等は確認されていない。出土遺物としては、肥前・瀬戸美濃の陶磁器類の他、漆器椀や蓋・傘の軸部・曲物等の木製品の出土も見られ、18世紀中葉～後葉の時期が想定される。

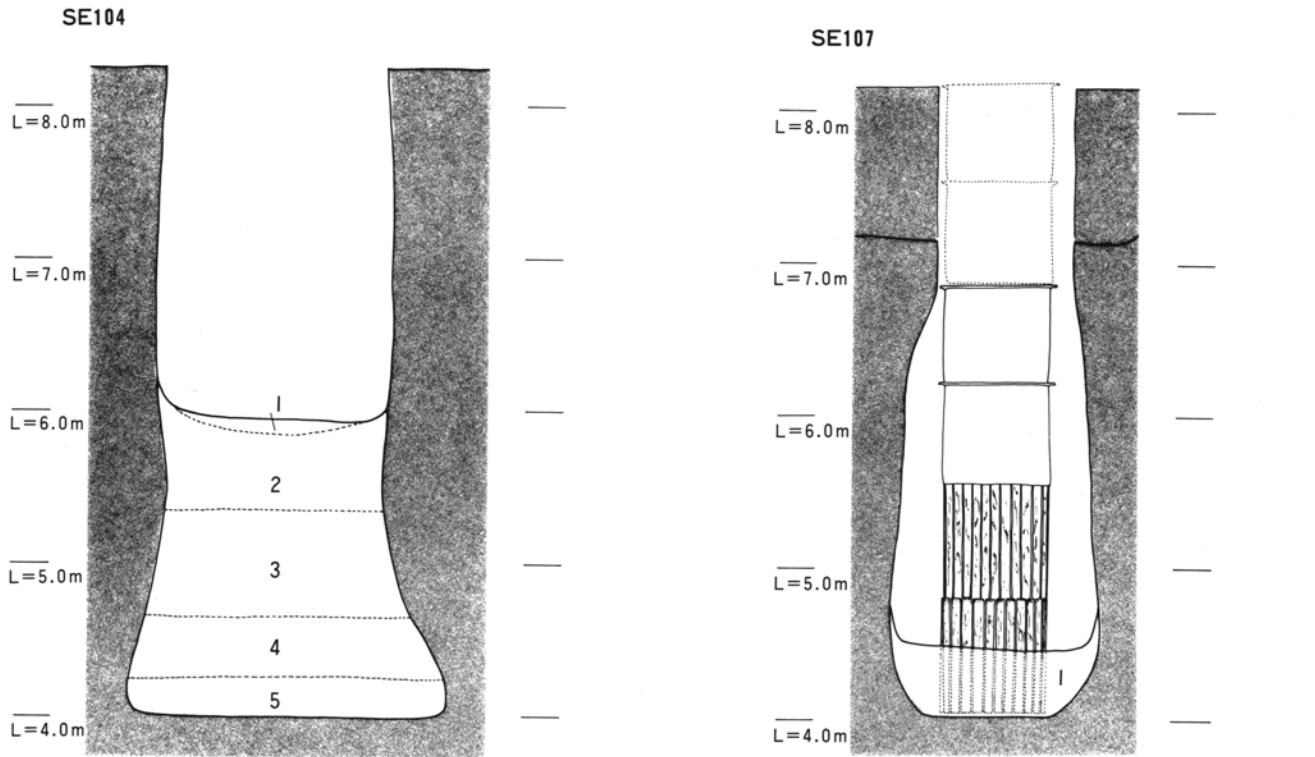
**SE102** 93年度調査区の中央で確認された井戸で、SE104の西側に位置する。検出段階で、長径約1.8m、短径約1.1mを測り、楕円形を呈している。掘り形は円筒状で、検出面より約3.7m程掘り下げられ、下半部片側がやや膨らんだ形状をしている。井桶・井枠等は確認されなかった。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、近世前期に属するものと思われる。

**SE106** 92年度調査区の南端で確認された井戸で、SK180の西側に位置する。検出段階で、径約1.1m程の円形を呈している。掘り形は円筒状で、検出面より約3.7m掘り下げられており、下半部が袋状を呈している。井桶・井枠等は確認されず、時期は19世紀前葉～中葉と考えられる。

**SE107** 92年度調査区の東側で確認された井戸で、SB106の西側に位置する。検出段階で、長径約1.5m、短径推定約1.3mを測り、ほぼ円形を呈している。掘り形は円筒状で、検出面から約4.1m程掘り下げられ、下半部はやや膨らんだ形状を示している。井枠として、常滑の赤物が4段、その下には井桶2段が確認されたが、残存状況は良くなかった。出土遺物としては、瀬戸美濃産の陶磁器類の他、蒔絵の櫛等が出土している。時期は、19世紀前葉～中葉頃と思われる。

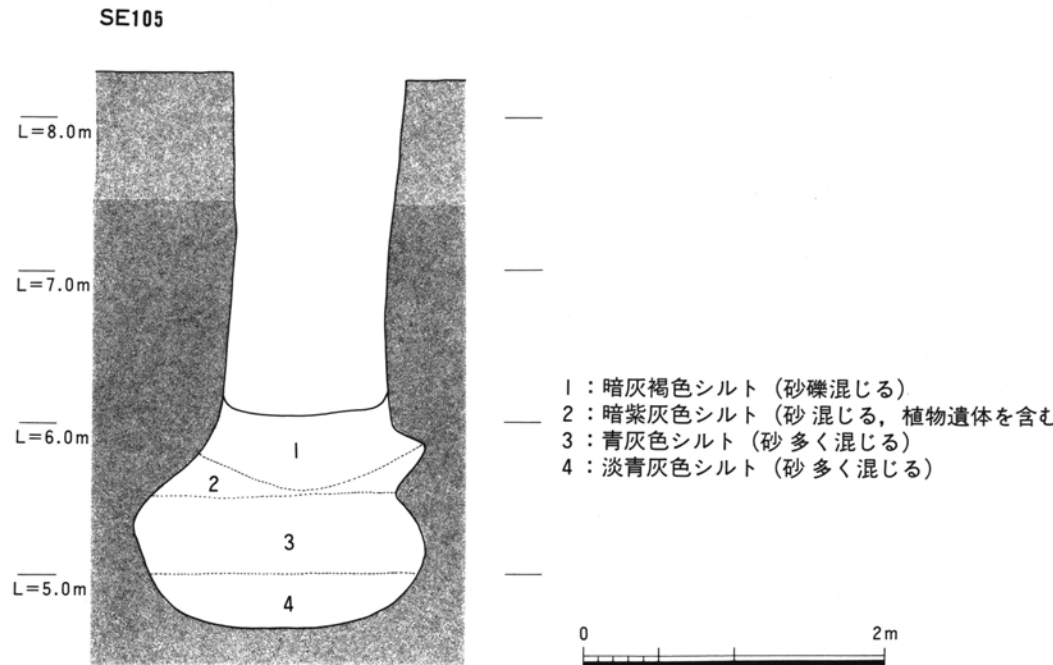


第37図 SE106・SE101・SE103断面図 (1 : 50)



- 1 : 暗紫灰色シルト (植物遺体を含む)
- 2 : 暗青灰色シルト (砂礫・貝類を含む)
- 3 : 青灰色シルト (砂礫を含む)
- 4 : 青灰色粘質土 (砂混じる)
- 5 : 緑灰色粘質土 (砂混じる)

I : 淡青灰色砂 (砂礫多く混じる)



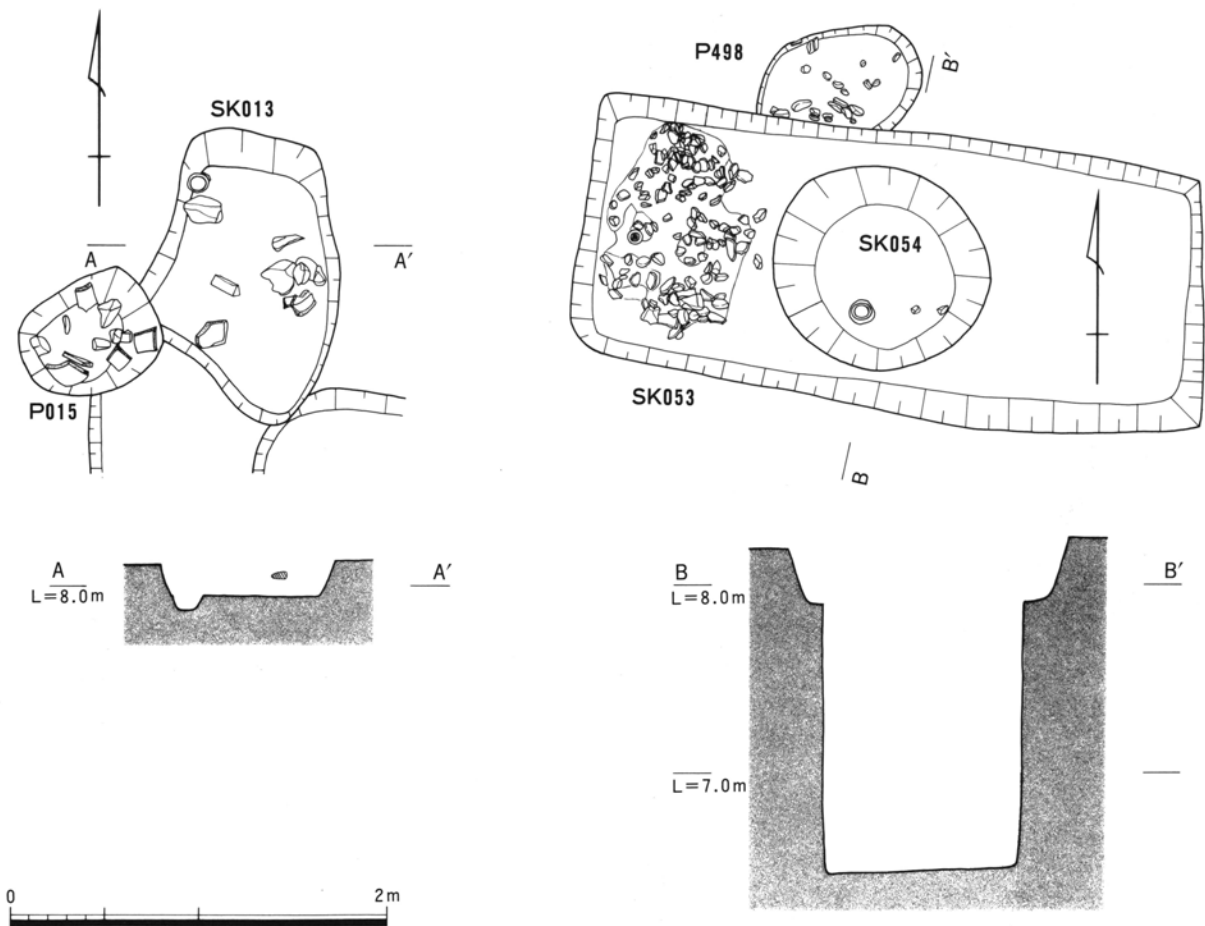
第38図 SE104・SE105・SE107断面図 (1 : 50)

8. 土 坑 (SK)

本遺跡より出土した数多くの土坑は、その規模・深さ等多種多様である。これらの土坑はその機能により、ゴミ穴・廃棄土坑・瓦溜り・用途不明の土坑等に分けることができるであろう。ゴミ穴とは、日常生活で生じた破損物や不要品を廃棄する穴であり、廃棄土坑とは建て替えや屋敷替えの際に破損物や不要品を一括投棄する穴であり、瓦溜りとは建て替え等で不要になった破損瓦を一括投棄する穴のことである。これらの土坑の分布を種類別に捉えていくことが、屋敷地内の土地利用状況を明らかにしていく1つの手立てになるものと考えられる。

**SK013** 93年度調査区の西端で検出された土坑であり、SB101の西側に位置する。検出段階で長径推定1.5m、短径約1.0m程の楕円形を呈し、深さは約0.2mである。この土坑の中より瀬戸美濃産の灰釉皿と石が出土し、地鎮等の祭祀的な意味合いを持つものなのか、或いは動物等のお墓という性格を持つものなのかは不明である。出土遺物から、18世紀前葉の時期が想定される。

**SK053** 93年度調査区の南側で検出された土坑で、SB101の南側に位置する。検出段階で長径約3.4m、短径約1.5mの長方形を呈し、深さは約0.3m程である。中から、径約0.9m程の円形の土坑(SK054)が検出され、井戸と考えられた。しかし、断ち割り調査の結果、1m余りで底が確認されたため、井戸を掘りかけてやめてしまったものではないかと思われる。遺物は小片が多く出土していることから、ゴミ穴として利用されていたと考えてもいいのではないだろうか。時期は、出土遺物から19世紀前葉～中葉頃が想定される。



第39図 SK013・SK053平面図・断面図 (1:40)

**SK005** 93年度調査区の北東端で検出された土坑で、暗渠の南側に位置する。検出段階で長径約4.0m、短径約2.4mを測り、やや丸みのある長方形を呈し、深さは約0.4mである。ゴミ穴か廃棄土坑の1つと思われる。出土遺物等から、時期は18世紀中葉までと考えられる。

**SK061** 93年度調査区の北側で検出された土坑で、暗渠の南側に位置している。検出段階で長径約1.9m、短径推定1.3m程の楕円形を呈し、深さは約0.2mと浅い。用途不明の遺構である。出土遺物も少なく、時期は限定できない。

**SK063** 93年度調査区の北側で検出された土坑で、暗渠の南側、SK061の東側に位置する。検出段階で長径約1.7m、短径約1.4m程の不整楕円形を呈し、調査では井戸と判断していた。しかし、断ち割り調査において、深さ約1.6mであることと、この土坑の下から別遺構である井戸（SE101）の存在が確認された。用途不明の遺構である。出土遺物も少なく、時期は限定できない。

**SK071** 93年度調査区の中央で検出された土坑で、SS101の西側に位置する。検出段階で長径推定約3.0m、短径1.4m程の不整な楕円形を呈し、深さは約0.2mと浅い。笠原鉢の出土が目立ち、時期は17世紀中葉頃が想定される。

**SK074** 93年度調査区の中央で検出された埋め甕土坑で、SE102の上に位置する。検出段階で径約0.6m程の円形を呈し、常滑産の赤物の甕の下半部が埋設されている。口縁部が欠けているために時期の限定は難しいが、井戸埋設後の遺構であることから江戸後期とも考えられる。

**SK049** 93年度調査区の中央で検出された埋め甕土坑で、SE103の西側に位置する。検出段階で径約0.9m程の円形を呈し、常滑産の赤物の甕が埋設されている。時期は、甕の口縁形態や出土遺物等から18世紀後葉の時期が想定される。

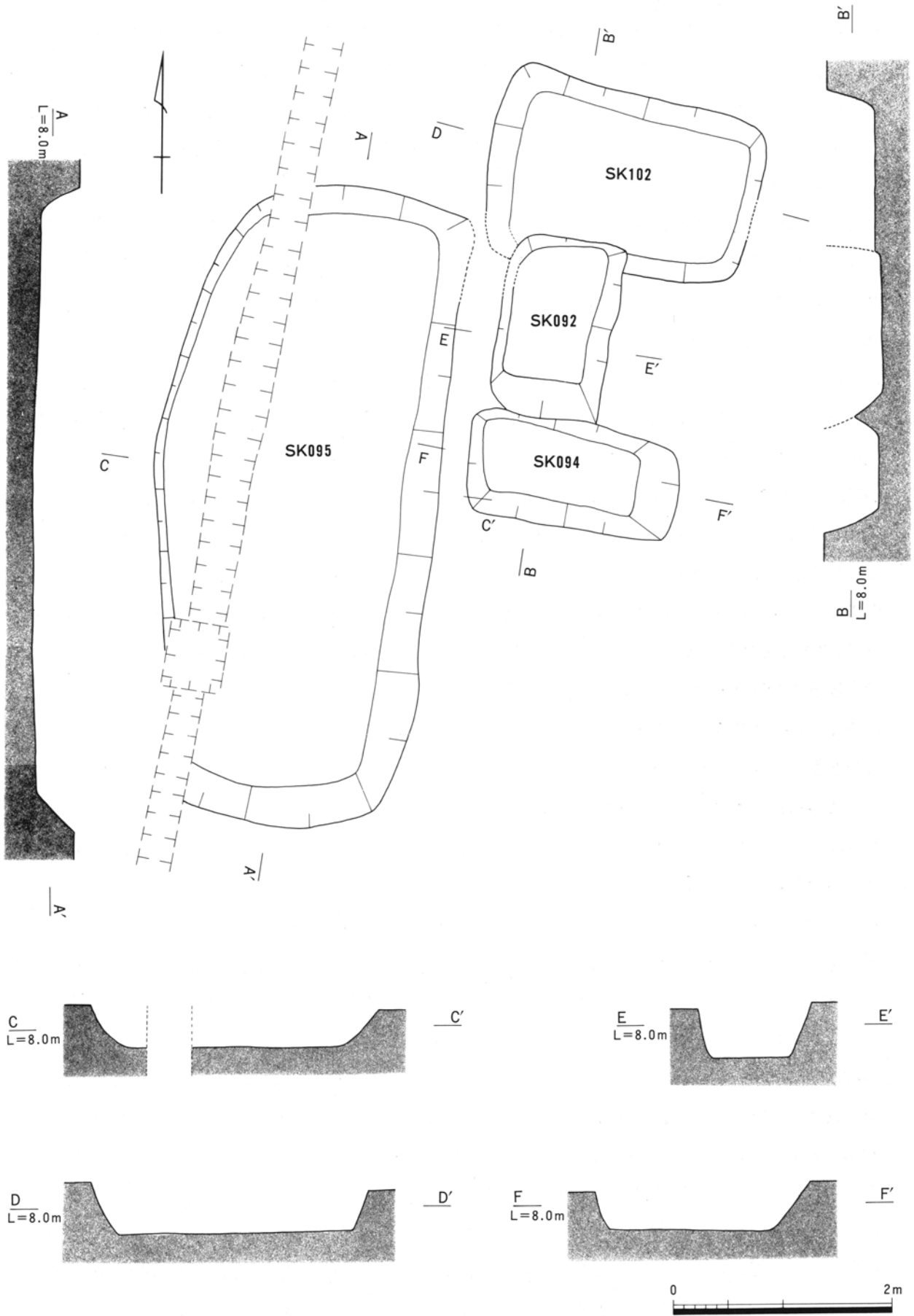
**SK086** 93年度調査区の北側で検出された土坑で、暗渠の南側に位置する。検出段階で径約1.3m程の方形を呈し、深さは約0.4mである。規模の小さい割に出土遺物量が多いことから、ゴミ穴か廃棄土坑と考えられる。時期は、19世紀前葉頃と思われる。

**SK102** 93年度調査区の中央で検出された土坑で、SE104の東側に位置する。検出段階で長径約2.5m、短径約1.8m程の長方形を呈し、深さは0.5mを測る。周囲に同様の土坑が切り合って存在していることから、ゴミ穴と想定される。時期は出土遺物等から、19世紀前葉と思われる。

**SK092** 93年度調査区の中央で検出された土坑で、SE104の東側、SK102の南側に位置する。検出段階で、長径約1.6m、短径約1.1m程の長方形を呈し、深さは約0.4mを測る。SK102と同様に、ゴミ穴であったと考えられる。時期は出土遺物等から、19世紀中葉頃が想定される。

**SK094** 93年度調査区の中央で検出された土坑で、SE104の東側、SK092の南側に位置する。検出段階で、長径約1.9m、短径約1.0m程の長方形を呈し、深さは約0.5mを測る。隣接するSK102・SK092と同規模であり、これもゴミ穴と考えられる。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、SK092に切られていることから、19世紀前葉頃と想定される。

**SK095** 93年度調査区の中央で検出された土坑であり、SE104の東側、SK102・SK092・SK094の西側に位置する。検出段階で長径約5.8m、短径約3.6m程の不整な長方形を呈し、深さは約0.4mを測る。これも前述したゴミ穴の1つと考えられる。出土遺物が少なく時期の決定は難しいが、ゴミ穴という性格を含めて考えると19世紀前葉～中葉頃と想定される。



第40図 SK092・SK094・SK095・SK102平面図・断面図 (1:50)

**Pit644** 93年度調査区の中央で検出された土坑で、SE103の南側に位置する。検出段階で径0.8m程の円形を呈している。遺構からは平瓦が数枚重なった状態で出土しているが、瓦溜り土坑とは考え難く、性格は不明である。他に遺物の出土がなく、時期も限定することはできない。

**SK032** 93年度調査区の南端で検出された土坑で、SD102を切っている。検出段階で径約3.1m程の円形を呈しているが、半分は調査区外に広がるため不明である。深さは約0.4mを測る。その規模から、廃棄土坑の1つと思われる。時期は出土遺物等から、19世紀中葉と考えられる。

**SK056** 93年度調査区の南端で検出された土坑で、SD102を切っている。検出段階で長径約3.7m、短径約2.6m程の不整な楕円形を呈している。その規模から、廃棄土坑の1つではないかと考えられる。時期は出土遺物等から、19世紀前葉～中葉と思われる。

**SK135** 93年度調査区の東側で検出された土坑で、SD129を切っている。検出段階で長径推定約3.0m、短径約2.0m程の楕円形を呈し、深さは約0.5mを測る。ゴミ穴或いは廃棄土坑と思われる。出土遺物や遺構の切り合い関係等から、19世紀前葉が想定される。

**SK181** 92年度調査区の南側で検出された土坑で、SE001の東側に位置している。検出段階で長径約2.6m、短径約1.6m程の不整な楕円形を呈し、深さは約0.2mを測る。遺物の出土量が少なく時期の限定は難しいが、近世前期に属する遺構と考えられる。

**SK190** 92年度調査区の南側で検出された埋め甕土坑で、SK181の南側に位置している。検出段階で径約0.8mの円形の土坑で、常滑産の赤物の甕が埋設されている。甕の口縁形態から、時期は18世紀中葉以降と考えられる。

**SK180** 92年度調査区の南側で検出された土坑で、SK181の北側に位置している。検出段階で長径約3.8m、短径約1.8mの不定形を呈し、深さは約0.3mを測る。出土する近世陶磁器類の量の多さから、廃棄土坑と思われる。時期は廃絶時である幕末期頃と考えられる。

**SK179** 92年度調査区の南側で検出された土坑で、SK180の西側に位置している。検出段階で長径約1.5m、短径約1.4mの不整な楕円形を呈し、深さは約0.4mを測る。陶磁器類以外に礎石と思われる礫が見られることから、廃棄土坑と思われる。時期は、SK180同様に幕末期と考えられる。

**SK226** 92年度調査区の北端で検出されて土坑で、SD148・SD149の東側に位置する。検出段階で長径約2.2m、短径約2.0m程の不整な楕円形を呈している。調査段階で井戸と判断し、断ち割り調査を実施したが、深さは検出面より約2.5mと他の井戸と比較して浅いことから、ゴミ穴とも考えられる。出土遺物は、近世の陶磁器類が僅かに出土していることから近世の遺構と想定してはいるが、中世の山茶碗類や甕・壺類、古代の灰釉陶器類が量的に多く出土していることから、中世まで遡る可能性を十分に持っている遺構である。

**SK221** 92年度調査区の北端で検出された土坑で、SK226の上部を切っている。検出段階で長径約5.2m程の楕円形を呈しているものと思われる。深さは約0.1mと浅い。出土遺物としては、蚊いぶしの身と蓋が集中しており、19世紀前葉～中葉頃が想定される。

**SK208** 92年度調査区の北側で検出された土坑で、SD148の西側に位置する。検出段階で長径約2.7m程の楕円形を呈しているものと思われる。深さは約0.5mを測る。ゴミ穴か廃棄土坑と思われる。出土遺物より、時期は18世紀末～19世紀前葉が想定される。



第41図 SK179・SK180遺物出土状態図（1：20）



**SK188** 92年度調査区の北側で検出された土坑で、SB104の南側に位置する。検出段階で長径約3.4m程の楕円形を呈しているものと思われる。小さな円礫が一面に広がっており、その中に遺物の小片が混入するように出土している。東側に排水溝と思われるSD145の存在から、浄水施設のようなものが想定される。時期は、19世紀中葉頃が考えられる。

**SK248** 92年度調査区の北側で検出された土坑で、外堀のすぐ東側に位置する。検出段階で長径約2.0m、短径約1.7m程の不整な楕円形を呈している。調査段階で井戸と判断し断ち割り調査を実施したが、すぐに底が確認された。掘り形はほぼ円筒状で、深さは検出面より約1.7mを測る。出土遺物から時期は、出土量は少ないが17世紀中葉頃が想定される。

**SK289** 92年度調査区の北端で検出された土坑で、東西方向に数条はしる排水溝の北側に位置する。検出段階で長径約3.6m程の楕円形を呈するものと考えられる。調査段階で井戸と判断し断ち割り調査を実施した。掘り形はU字形で、検出面より約3.6m程の深さを測り、井戸という可能性が高い。出土遺物には猿の人形のついた灯明皿等があり、江戸前期に属する遺構であると思われる。

**SK340** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SD178の北側に位置している。検出段階では長径約1.7m、短径約1.6m程の円形を呈している。この遺構も、調査段階では井戸と判断して断ち割り調査を実施した。掘り形はほぼ円筒状を呈し、深さは検出面より約3.5m程を測り、井戸としての可能性の高い遺構である。出土遺物は遺構の規模の割には少なく、時期は17世紀末～18世紀前葉頃と思われる。

**SK282** 92年度調査区の北側で検出された土坑で、SK289の南側に位置している。検出段階では長径約1.6m、短径約1.2m程の楕円形を呈し、深さは約0.4mを測る。ゴミ穴か廃棄土坑と考えられる。出土遺物が少なく時期の限定は難しいが、近世前期に属する遺構と思われる。

**SK334** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SK340の北側に位置している。検出段階では長径約1.7m、短径約1.2m程の楕円形を呈し、深さは約0.5mを測る。ゴミ穴か廃棄土坑と考えられる。時期は、出土遺物から18世紀中葉～後葉と思われる。

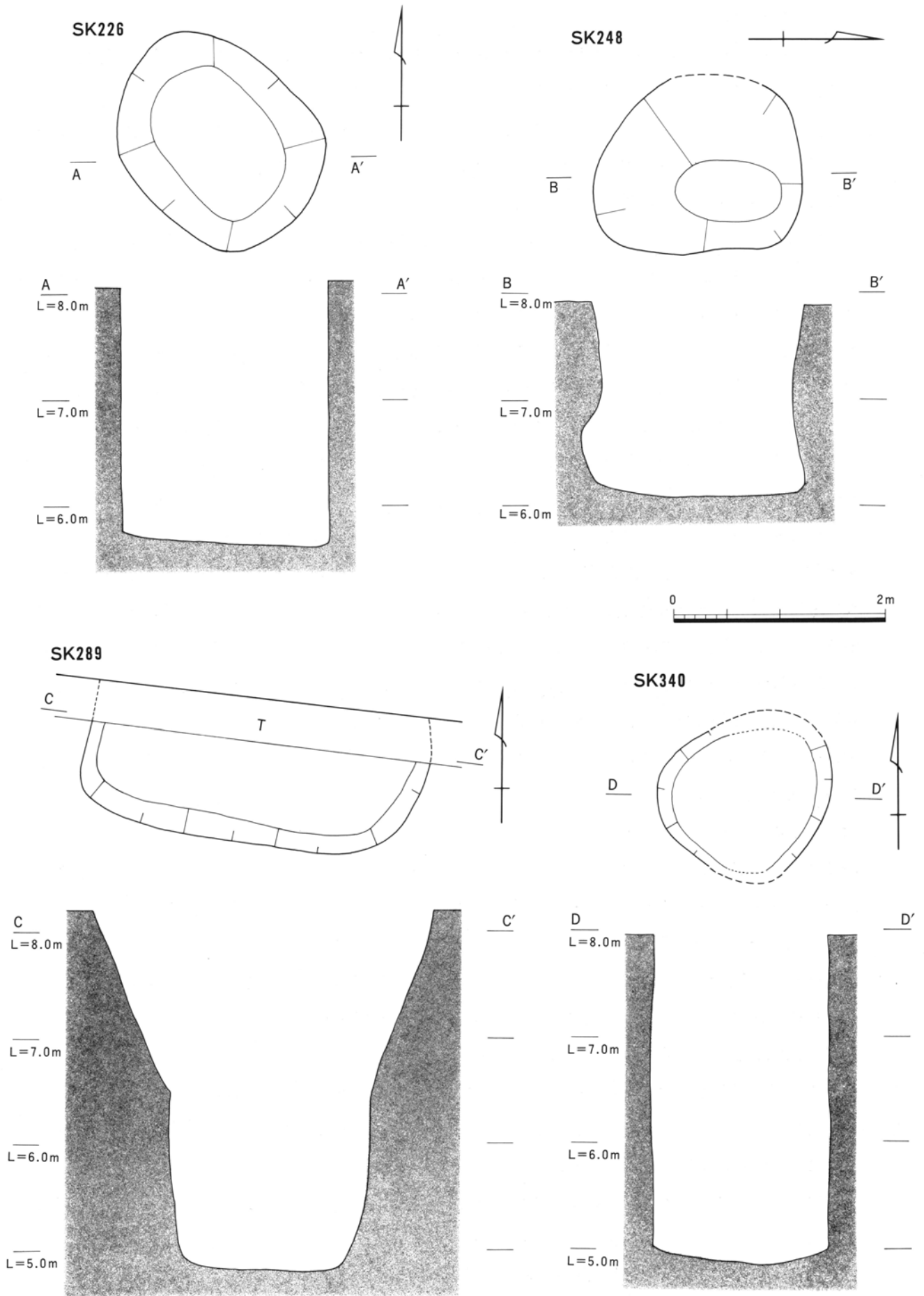
**SK324** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SK334の北側に位置している。検出段階では長径約1.7m、短径約1.4m程の楕円形を呈し、深さは約0.6mを測る。ゴミ穴か廃棄土坑と考えられる。時期は、出土遺物から18世紀後葉～末頃と思われる。

**SK326** 92年度調査区の東端で検出された土坑で、SK324の東側に位置している。調査区の隅で検出されたため規模は不明であるが、径約2.1m程の楕円形を呈しており、深さは約0.4m程を測る。ゴミ穴か廃棄土坑と考えられる。時期は、19世紀中葉と考えられる。

**SK336** 92年度調査区の東端で検出された土坑で、SK326の南側に位置している。SK326と同様で規模は不明であるが、深さは約0.5m程を測る。ゴミ穴か廃棄土坑と考えられ、時期も同様なところから、SK326と1つの遺構である可能性が高い。

**SK274** 92年度調査区の北側で検出された土坑で、SK248の南側に位置している。検出段階では長径約3.8m、短径約1.1m程の楕円形を呈し、深さは約0.6mを測る。大量の瓦類の出土から瓦溜り土坑と思われる。時期は出土遺物や遺構の切り合い関係等から、幕末期が想定される。

**SK299** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SD178の北側に位置している。検出段階では長径約1.6m、短径約1.5mの方形を呈し、深さは約0.4mを測る。出土遺物が少なく、性格も時期も不明である



第42図 SK226・SK248・SK289・SK340平面図・断面図 (1:50)

が、近世後期に属する遺構と考えられる。

**SK345** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SD178の南側に位置している。検出段階で長径約2.5m、短径約1.7mの不整な楕円形を呈し、深さは約0.2mを測る。周囲に土坑が多く切り合いも激しいことから、ゴミ穴と考えられる。時期は、出土遺物等から18世紀中葉～後葉と思われる。

**SK300** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SK345の西側に位置している。検出段階で長径推定1.5m、短径約1.1mの不整な楕円形を呈し、深さは約0.8mを測る。ゴミ穴と思われるが、出土遺物は少なく、時期は17世紀後葉と考えられる。

**SK306** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SB107の西側に位置している。検出段階で長径約2.4m、短径約2.2m程の不定形を呈し、深さは約0.6mを測る。これまでの土坑と比較して、規模の大きい方である。ゴミ穴や廃棄土坑と考えられるが、出土遺物量は規模の割に少ない方である。時期は、18世紀中葉～後葉が想定される。

**SK309** 92年度調査区の東端で検出された土坑で、SK306を切り SB107の南側に位置している。調査区の隅で検出されたため規模は不明であるが、不整な楕円形を呈するものと思われる。深さは、約0.5mを測る。ゴミ穴と考えられ、時期は19世紀前葉～中葉と想定される。

**SK313** 92年度調査区の東端で検出された土坑で、SK309の南側に位置する。調査区の隅で検出されたために規模は不明であるが、楕円形を呈しているものと思われる。深さは、約0.2mを測る。ゴミ穴と考えられ、時期は18世紀後葉頃が想定される。

**SK314** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SK313の西側に位置している。検出段階で長径約1.7m、短径約0.8m程の長方形を呈し、深さは約0.2mを測る。出土遺物が少なく、遺構の性格や時期については不明な点が多いが、近世前期に属する遺構であると思われる。

**SK315** 92年度調査区の東側で検出された土坑で、SK313の南側に位置している。検出段階で長径約1.3m、短径約1.2mの不整な円形を呈し、深さは約0.1mと極端に浅い。出土遺物が少なく、性格や時期についてはともに不明である。

**SK279** 92年度調査区の南側で検出された土坑で、SK314の南東に位置している。検出段階で長径約2.5m、短径約1.3m程の不整な長方形を呈し、深さは約0.4mを測る。ゴミ穴や廃棄土坑が想定されるが、出土遺物量が少なくやや疑問が残る。時期は、19世紀前葉～中葉と考えられる。

**SK267** 92年度調査区の南側で検出された土坑で、SK279の西側に位置している。検出段階で長径約2.9m、短径約1.1m程の不整な楕円形を呈し、深さは約0.4mを測る。ゴミ穴や廃棄土坑が想定されるが、出土遺物量が少なくやや疑問が残る。時期は、19世紀前葉～中葉と考えられる。

<註>

- 1) 豊橋市史編集委員会 『豊橋市史 本文編 第2巻 近世編』 1975
- 2) 豊橋市美術博物館学芸員増山真一郎氏の御教示による。
- 3) 註1)文献に同じ。

### 9. 明治期以降の遺構

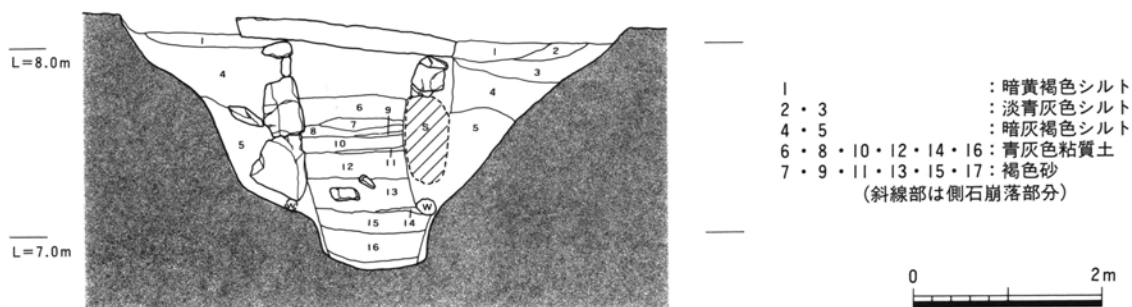
これまでに見てきた近世の遺構以外に、明治期の煉瓦建物跡・暗渠、戦時中の防空壕跡が確認されている。これまでの調査においては、攪乱として取り上げられることはなかったが、一部に気掛りな点があるため、ここで取り上げることにする。

まず、煉瓦建物跡であるが、93年度調査区の東側で検出されている。煉瓦を積んで間にセメントを詰めているようで、その基礎部分が数段確認されている。その規模は、南北に13.4m、東西に9.7~10.6mを測る。建物跡の周囲の土坑からは、布切れや煉瓦が大量に出土しており、歩兵十八連隊時代の縫製工場であった可能性が高いように思われる。

次に、暗渠について見ておきたい。暗渠とは石組等で構築された地下排水溝のことで、豊橋市教育委員会による発掘調査においても数ヶ所検出されており、歩兵十八連隊により設置されたことが確認されている。93年度調査区の北端から東に延び、調査区内で南に屈曲して調査区外へと更に延びていくようである。その規模は、東西方向(SD201)で長さ約45.9m、幅約3.1m、深さ約1.1mで、南北方向(SD202)では長さ約31.5m、幅約3.0m、深さ約1.1mを測る。また、西端から約23.5mまでは、側面の下に丸太を敷きその上に石を2段に組んで間を漆喰で埋めて水が漏れないようにし、さらにその上に花崗岩による蓋石で塞いだ石組遺構が確認されており、検出された全体に組まれていたのか、或いはここまでなのかは不明である。出土遺物としては、明治~昭和期の染付の碗・皿類やガラス瓶の他、江戸時代の時期と思われる土器・陶磁器類も出土している。

ここで気になるのが、今回の調査で検出された暗渠の方向性である。東西方向はE-9°-Sを示し、南北方向はN-10°-Eを示しており、外堀や近世の屋敷地の区画ライン等とほぼ同じ方向を示している点である。また、屈曲する部分には、SD128・SD132・SD133・SD134等の屋敷地境と思われる溝が集中しているのである。これは暗渠を掘る際に、これらの溝を再利用して掘り直しているのではないだろうか、ということが強く感じられるのであるが、それを証拠立てる資料を得ることはできなかった。これからの調査において、明らかにされることを期待したい。

最後に、第二次世界大戦中に構築された防空壕であるが、調査区全体で2ヶ所確認されている。93年度調査区では、SD133の北側で検出され、長さ約8.2m、幅約0.9mと長さ約3.2m、幅約0.8mの2つがTの字状に連結したものである。92年度調査区では、SE105の南側で検出され、残存の長さ約6.5m、幅約0.8mで、卍の字状のものである。深さはともに1.0m前後で、階段状の遺構は確認していない。同様の遺構は、豊橋市教育委員会の調査においても確認されている。 (小嶋廣也)



第43図 暗渠 (SD201) 断面図 (1:40)

## 第2節 近世の遺物

今回の発掘調査で、調査区より出土した近世の遺物は、27ℓ入りコンテナにして約400箱余に及んだ。その大多数を占めているのは、近世陶磁器類と瓦類である。その他に、銭・煙管等の金属製品や、椀・箸等の木製品、硯・砥石等の石製品、焼塩壺、人形類等、その種類の多さに驚かされる。この膨大な遺物の中から近世陶磁器類を取り上げ、その用途・材質組成を明らかにし、さらに、他の近世の遺跡と比較・検討することによって、吉田城遺跡に居住した人々の生活を描写してみたいと思う。

### 1. 陶磁器類

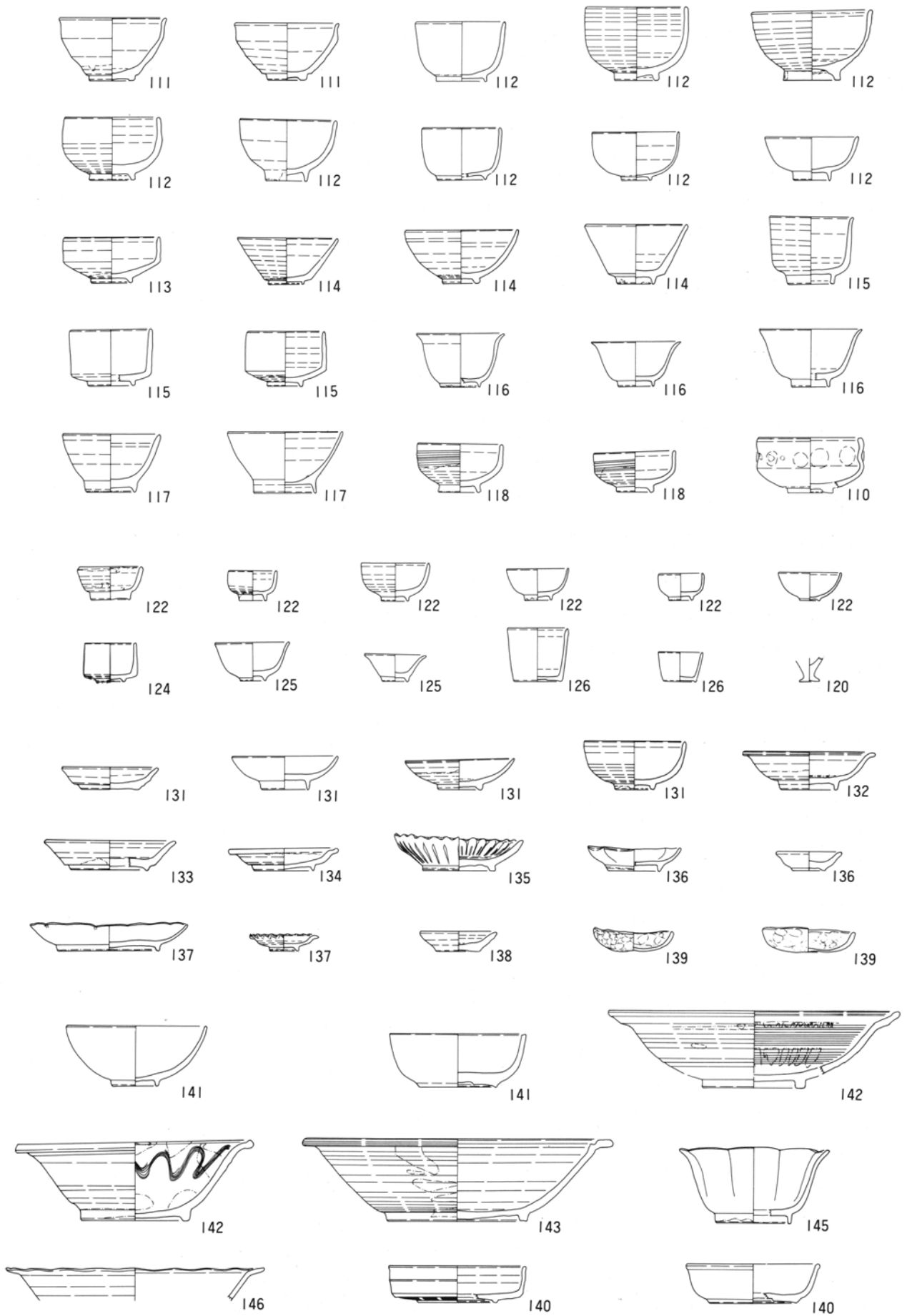
#### 分類

『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』(1993)の分類と同様に、用途による分類を実施した。用途については、1—供膳具、2—調理具、3—貯蔵具、4—灯火具、5—火具、6—化粧具、7—神仏具、8—喫煙具、9—調度具、0—その他に分類し、さらに各々に器種・器形を組み合わせて細分化した。一部は遺物の形態に捉われずに、使用痕の有無を重視し、例えば、皿でも口縁に油煙が付着していれば灯明皿に、火鉢でも口縁部に敲打痕があれば喫煙具に含めるといった具合に、統計処理を行っている。このため、一般に行われている形態による分類と誤差がでてくることを予め断わっておく。

それぞれの用途に基づく分類については、以下の第2表～第4表に示した分類表と第44図～第46図の分類図の通りである。

用途	機種	器形	備考	
1 供膳具	1 椀	1 天目椀	口径8.5cm以上	
		2 丸椀	天目茶椀、段付天目尾呂茶椀、御室茶椀	
		3 腰折椀		
		4 平椀	柳茶椀	
		5 筒椀		
		6 端反椀		
		7 広東椀	広東椀、小杉椀	
		8 腰錆椀		
		0 その他		
		2 小椀 小坏 猪口	1 天目椀	口径8.5cm以下
	2 丸椀			
	3 平椀			
	4 筒椀			
	5 端反椀			
	6 そば猪口			
	0 その他			
	3 皿		1 丸皿	
			2 端反皿	
			3 稜皿	
		4 折縁皿		
5 菊皿				
6 型打皿				
7 ひだ、稜花皿				
8 土師器皿A		ろくろ成形のもの		
9 土師器皿B		非ろくろ(手捏ね)成形のもの		
0 その他		玉縁皿など		
4 鉢	1 丸鉢	口径15cm以上		
	2 端反鉢	大平鉢、黄瀬戸鉢		
	3 折縁鉢	笠原鉢		
	4 平鉢			
	5 型打鉢			
	6 稜花鉢			
	7 織部	向付		
	0 その他	玉縁鉢など		
	0 その他			

第2表 近世陶磁器類分類表(1)



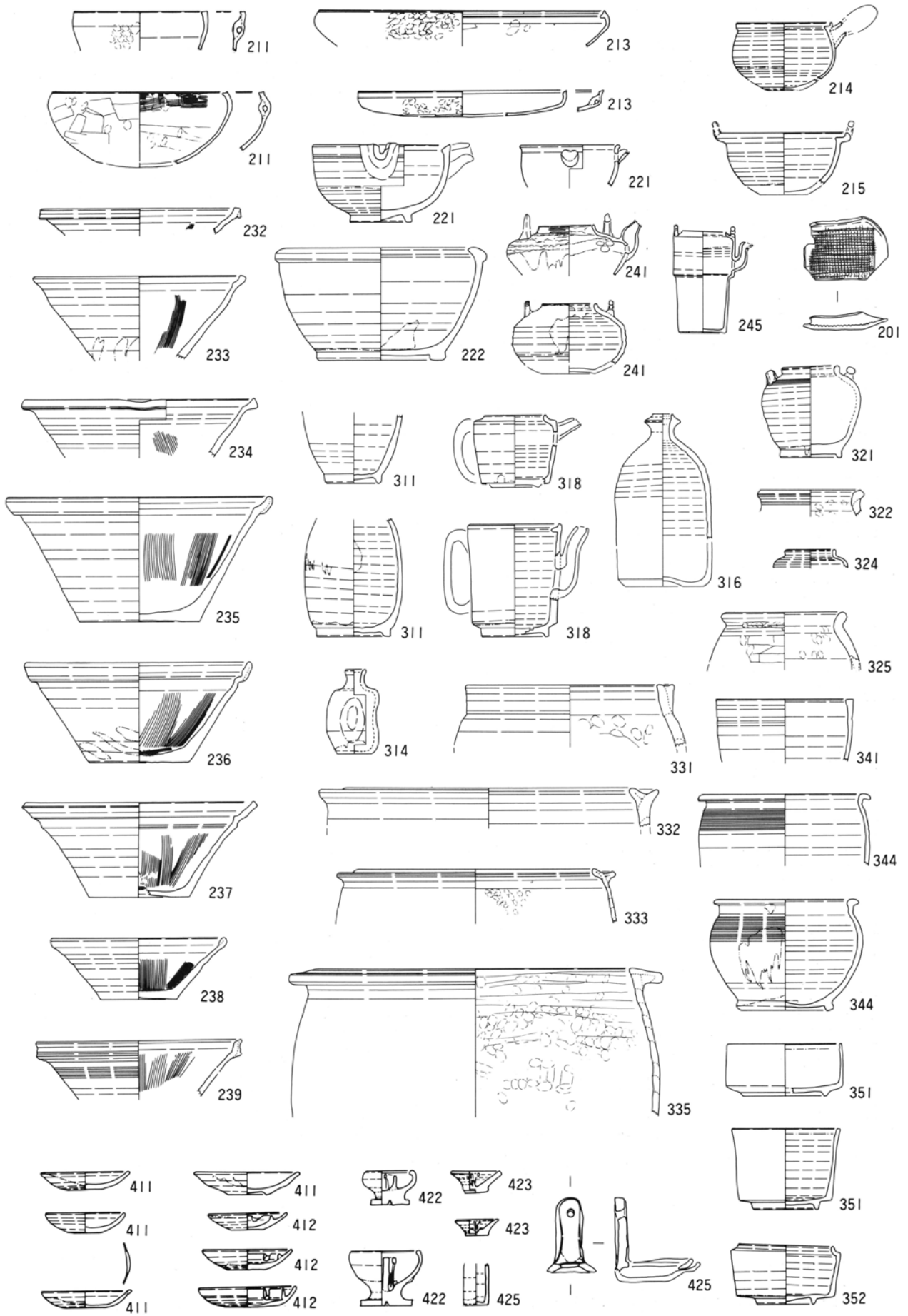
第44図 近世陶磁器類分類図(1)

用途	機種	器形	備考	
2 調理具	1 鍋, 釜	1 内耳鍋		
		2 羽釜		
		3 焙烙		
		4 行平		
		5 鍋	土鍋	
		0 その他		
		2 鉢	1 片口	
			2 捏ね鉢	
			0 その他	
		3 播鉢	1 I類	1 6 C
	2 II類		1 6 C	
	3 III類		1 7 C	
	4 IV類		1 7 C 後葉	
	5 V類		1 8 C 前半	
	6 VI類		1 8 C 後半	
	7 VII類		1 8 C 後葉	
	8 VIII類		1 9 C	
	9 IX類		備前播鉢, 堺播鉢	
	0 その他			
	4 瓶	1 土瓶		
		2 銚子		
		3 急須		
		4 爛德利 A		
		5 爛德利 B	ちろり	
		0 その他		
	0 その他	1 卸皿		
	3 貯蔵具	1 瓶	1 德利 A	高台あり
			2 德利 B	平底
			3 德利 C	断面が三角形のもの
			4 德利 D	断面が四角形のもの
5 德利 E			高田德利など	
6 油德利				
7 汁次 A			丸型	
8 汁次 B			筒型	
9 汁次 C			その他	
0 その他			しびん等	
2 壺		1 蓋付壺		
		2 無蓋壺		
		3 茶壺		
		4 茶入		
		5 土師壺		
0 その他				
3 甕 A		1 I類	常滑産	
		2 II類	N字口縁	
		3 III類	Y字口縁	
		4 IV類	Y字口縁	
		5 V類	T字口縁	
		6 VI類	Γ字口縁	
		0 その他	その他	
4 甕 B		1 半胴 A		
		2 半胴 B	口縁外反	
		3 銭甕		
		4 甕	胴丸形	
0 その他				
5 鉢		1 蓋物 A	蓋受け無	
		2 蓋物 B	蓋受け有	
	0 その他			
0 その他				
4 灯火具	1 皿	1 灯明皿	口縁部に油煙の付着した皿すべて	
		2 灯蓋	受皿	
		3 行灯皿	盤形の皿	
		0 その他		
	2 乗燭	1 I類	受皿と灯芯たてが接合したもの	
		2 II類	脚付きのもの	
		3 III類	タンコロ	
		4 IV類	窓あきの蓋のつくもの	
		5 V類	軟質陶器系のもの	
		0 その他		
	3 瓦燈	1 瓦燈		
	0 その他			
	4 燭台		蠟燭を乗せる台	
	0 その他			

第3表 近世陶磁器類分類表(2)

<分類表・分類図の見方>

分類については前述の通り、用途・機種・器形を3桁の数字で表示しており、例えば、天目茶碗は供膳具(1)・碗(1)・天目碗(1)で、111となる。



第45図 近世陶磁器類分類図(2)

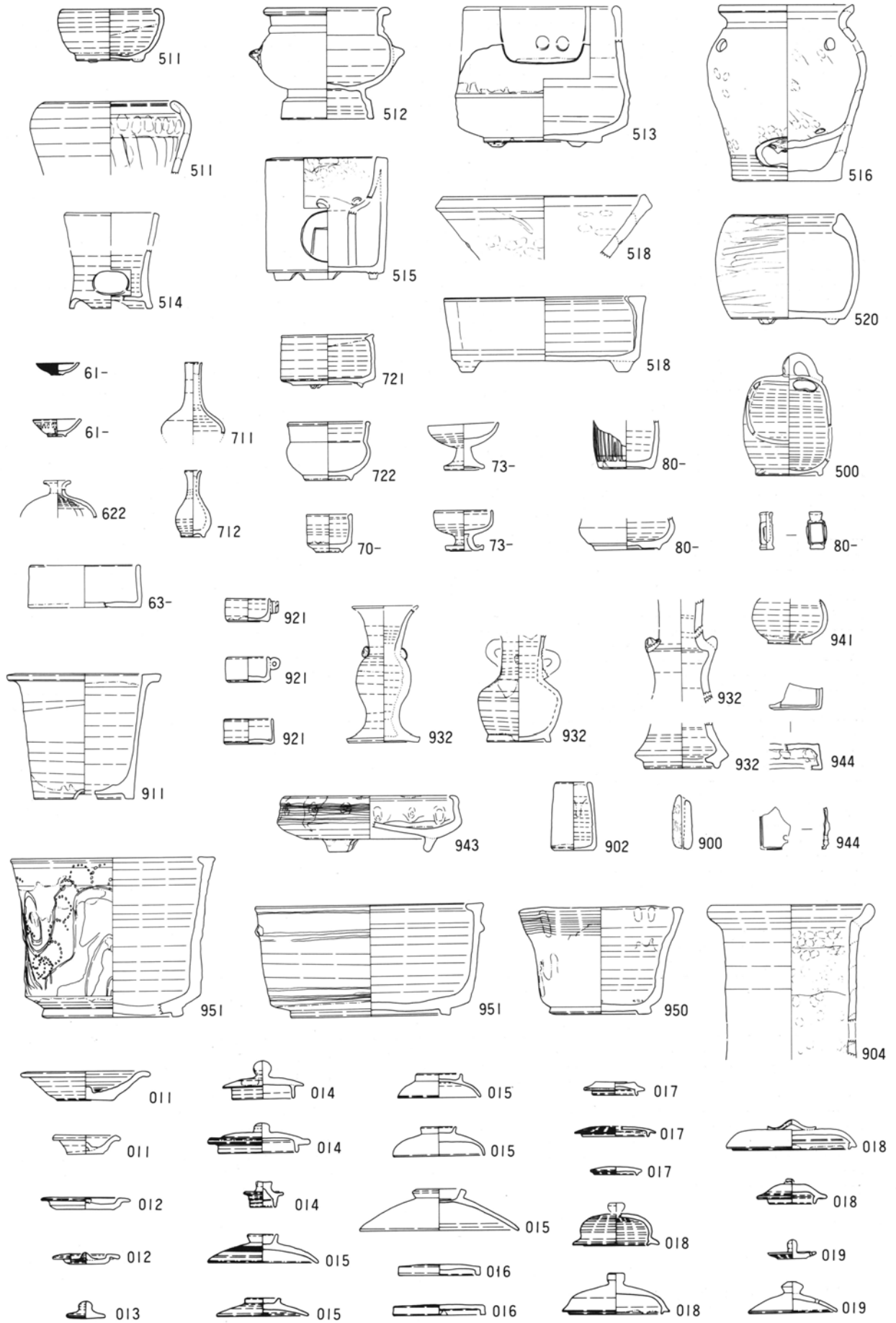


用途	機種	器形	備考	
5 火具	1 鉢	1 火鉢		
		2 瓶掛		
		3 風炉		
		4 こん炉 A	内部構造が一重のもの	
		5 こん炉 B	内部構造が二重のもの	
		6 蚊いぶし		
		7 火容	窓付きのもの	
		8 火桶		
		0 その他		
		2 壺	1 火消し壺	蓋付きの火鉢
			0 その他	
			3 くど	1 くど A
		2 くど B		口唇部がL字に外部へ屈曲するもの
		0 その他	1 五徳	三脚の環状台
			2 十能	
0 その他	さな・七厘五徳・十能・煙突等			
6 化粧具	2 壺	1 お歯黒壺	口縁部の一箇所が鷹口状を呈するもの	
		2 髪油壺		
		3 転用	他器種の転用品	
		0 その他		
	3 びんだらい			
	0 その他			
7 神仏具	1 瓶	1 神酒徳利 A	鶴首	
		2 神酒徳利 B	口唇部外反または玉縁状を呈するもの	
		0 その他		
	2 香炉	1 筒型		
		2 袴腰型		
		0 その他		
	3 仏飯器			蓋物 B の小型製品
		4 香合		
		5 線香筒		
		0 その他		
8 喫煙具	1 火容	1 筒型	口縁部に敲打痕のあるものすべて	
		2 香炉型	小型の火鉢状を呈するもの	
		0 その他		
	2 灰落し			
		0 その他		
9 調度具	1 植木鉢	1 植木鉢		
		2 半胴	半胴製の転用品	
		3 転用	他器種の転用品	
		4 蘭鉢		
		0 その他		
	2 餌鉢	1 餌鉢	環状の摘みのある半筒形の小碗	
		2 餌播鉢	播鉢の小型製品	
		0 その他		
	3 花生	1 筒型	体部から口縁にかけて直線的なもの	
		2 壺型	口縁が外反するもの	
		0 その他		
	4 水指	1 水指	壺型で有蓋	
		2 建水	壺型で無蓋	
		3 水盤	浅鉢状で口縁を折り返しているもの	
		4 水滴		
		5 水注		
		0 その他		
	5 水甕	1 水甕		
		2 手洗鉢	口縁が外反するもの	
		0 その他		
		0 その他		
6 壺	1 唾壺			
	0 その他			
	0 その他	1 柄杓		
		2 筒型		
		3 手桶		
		4 土管		
	0 その他	土錘など		
0 その他	1 蓋	1 蓋 A	落し蓋で折り返しのないもの	
		2 蓋 B	落し蓋で折り返しのあるもの	
		3 蓋 C	扁平蓋でかえりのないもの	
		4 蓋 D	扁平蓋でかえりのあるもの	
		5 蓋 E	環状の摘みが付きかえしのないもの	
		6 蓋 F	摘みがなくかえしのないもの	
		7 蓋 G	摘みがなくかえしのあるもの	
		8 蓋 H	湾曲した傘状を呈するもの	
		9 蓋 I	有孔のものすべて	
		0 その他		

第4表 近世陶磁器類分類表(3)

<「名古屋城三の丸遺跡IV」分類との違い>

土師器皿を411(灯火具・皿・灯明皿)とせず、油煙の付着していないものについては、138(供膳具・皿・土師器皿A)と139(供膳具・皿・土師器皿B)としているところが大きく異なっている。



第46図 近世陶磁器類分類図 (3)

## 統計方法

陶磁器類の統計には、口縁部計測法を用いた。分類に基づく用途・器種・器形別に口縁部の残存率を計測し、個体数を算出する方法をとった。計測は、残存する口縁を接合した後、12分の1単位で行い、12分の1未満を0、12分の1以上で12分の2未満を1とし、以下順次2、3、……、11、12とカウントした。この集計が、接合後口縁残存率である。個体数は、これを12で割って小数点以下第2位まで求めたもの（小数点第3位を四捨五入）である。ここで注意しなくてはならないのは、個体数が遺物組成を目的とした統計上の数値であって、個体識別に基づく数値とは異なり、実体の個体数ではない点である。この数値を利用する際には、この点に留意する必要がある。なお、比較検討のため、接合前の口縁破片点数と総破片数もあわせて集計した。

ただし、器種としての蓋については、身となる器種と一体のものであり、組成の統計処理上ダブルカウントとなるため、独立の用途0として1項をたてて集計し、用途組成図および本文中の比率は、総出土遺物から蓋を除外した数値で表している。

ここで提示した数値は、あくまでも今回の発掘調査で出土した本遺跡における全遺物組成の比率・割合であって、必ずしも一般的な近世の遺物組成を示しているわけではない。以下の個別遺構の記述に際しては、全体の概要で示した比率・割合（第47図・第5表）を本遺跡における近世遺物群のあり方の平均値とし、これに対してどのように変化しているかを中心に見ていくことにする。

なお、本節では、前述の通り遺物組成を主眼としたため、個々の遺物についての記述は極力おさえ、各実測図の下の観察表のみに限定した。また、各遺物の材質については、各実測図の通番の右側に、D：土器、T：陶器、J：磁器、N：軟質陶器、G：瓦質製品というアルファベットで表記してある。また、産地では、瀬戸・美濃の製品を瀬・美と省略してある。各遺構・遺物の時期決定に当たっては、研究の進んでいる瀬戸・美濃産の陶磁器類や肥前産の陶磁器類を手掛りとし、それぞれの年代観については各生産地で明らかになっているものに拠った。

### <参考文献>

- (財) 愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡 (Ⅲ)』 1992  
 (財) 愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡 (Ⅳ)』 1993  
 (財) 愛知県埋蔵文化財センター 『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』 1994  
 瀬戸市史編集委員会 『瀬戸市史 陶磁史編 3～5』 1967・1993  
 瀬戸市歴史民俗資料館 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 V～Ⅷ』 1986～1989  
 有田町史編纂委員会 『有田町史 古窯編』 1988  
 大橋康二 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989  
 大橋康二 『別冊太陽 63 古伊万里』 平凡社 1988  
 井上喜久男 『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社 1992  
 常滑市教育委員会 『常滑市民俗資料館 研究紀要 II～VI』 1986～1994

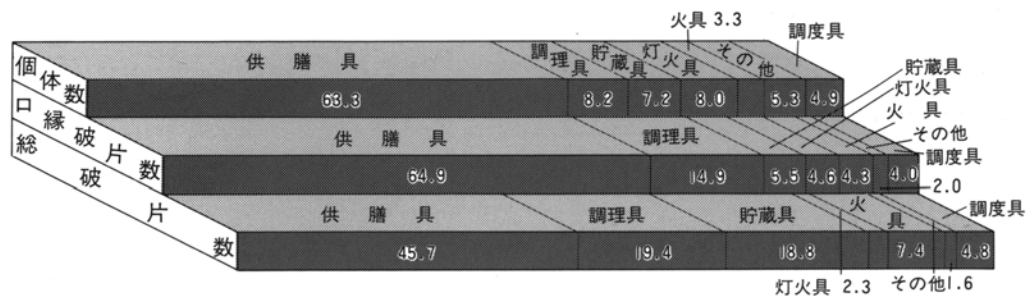
以上の文献を参考にさせていただいたほか、大橋康二・遠藤才文・中野晴久・金子健一の各氏には実地に御指導・御助言をいただいた。記して、謝意を表す次第である。

概要

今回の発掘調査で出土した土器・近世陶磁器類は、総破片数で56,271点である。総個体数で見ると1,232.83個体となり、接合前口縁破片数では16,496点になっている。名古屋城三の丸遺跡と比較してみると、数量的にはやや少量ではあるが、その概要を次のようにまとめることができる。

近世の土器・陶磁器類の最大の特徴は、その出土量の多さとその多様さをあげることができる。今回も、土器・陶磁器類を用途別で便宜的に10に分類したが、極少量しか出土していない用途の遺物もあるが、全ての用途において遺物が出土していることがわかる。用途別にみると、供膳具が63.3%と圧倒的に高い比率を占め、調理具（8.2%）・貯蔵具（7.2%）という3つの用途の遺物で全体の78.6%を占めており、日常的な生活に関連する遺物群の出土が高いように思われる。その他の灯火具・火具・化粧具・神仏具・喫煙具・調度具などの副次的な生活に関連する遺物群が、21.4%を占めている。また、名古屋城三の丸遺跡と同様に、土師器皿を灯火具として算出してみると、供膳具が44.7%と減少し、灯火具が26.5%となり、本遺跡と名古屋城三の丸遺跡においてほぼ同様の組成比率を見ることができる。各種の遺物と対応すると思われる蓋は、総破片数で1,060点、接合前口縁破片数で734点、個体数では108.58個体となっている。

また、用途内の器種組成についてみておきたい。供膳具において、椀類対皿類の比率が1.14：1と



第47図 近世出土陶磁器類の用途組成

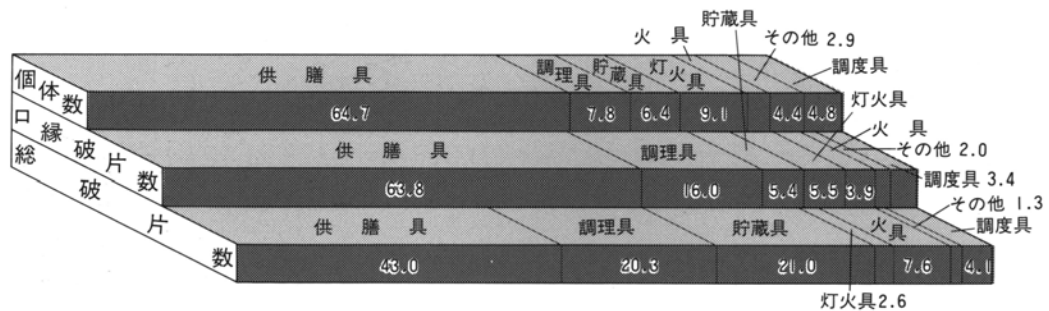
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	0	1030	1530	8	2568	0	1666	2361	5	4032	0	5112	5869	20	11001
	小椀	0	284	1534	0	1818	0	298	1375	0	1673	0	620	2906	0	3526
	皿	2501	703	640	0	3844	2161	910	912	1	3984	4254	2191	2266	3	8714
	鉢	0	140	162	2	304	0	318	213	4	535	0	1210	768	11	1989
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	2501	2157	3866	10	8534	2161	3192	4861	10	10224	4254	9133	11809	34	25230
調理具	鍋、釜	149	125	0	35	309	858	155	0	72	1085	5068	686	0	310	6064
	鉢	4	204	3	0	211	3	331	4	0	338	3	900	13	0	916
	播鉢	0	262	0	0	262	0	686	0	0	686	0	2296	0	0	2296
	瓶	0	181	137	0	318	0	164	60	0	224	1	1090	346	3	1440
	その他	0	5	3	0	8	0	7	2	0	9	0	14	4	1	19
	小計	153	777	143	35	1108	861	1343	66	72	2342	5072	4986	363	314	10735
貯蔵具	瓶	0	287	31	0	318	0	65	7	0	72	0	1712	197	4	1913
	壺	8	174	7	0	189	9	122	4	0	135	73	688	24	0	785
	甕A	0	152	0	0	152	0	279	0	0	279	0	5882	0	0	5882
	甕B	0	124	0	1	125	0	197	0	1	198	11	1413	1	1	1426
	鉢	0	48	135	0	183	0	49	127	0	176	0	150	194	0	344
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
小計	8	785	173	1	967	9	712	138	1	860	84	9846	416	5	10351	
灯火具		458	593	10	12	1073	373	330	8	12	723	644	588	13	48	1293
火具		89	281	2	66	438	188	415	3	68	674	1306	2401	10	348	4065
化粧具		0	44	151	0	195	0	16	42	0	58	0	59	127	0	186
神仏具		0	132	343	2	477	0	92	119	3	214	0	217	332	3	552
喫煙具		0	20	17	0	37	0	32	9	0	41	0	128	42	0	170
調度具		57	562	40	3	662	14	575	33	4	626	76	2347	185	21	2629
蓋		34	747	484	38	1303	7	397	294	36	734	12	584	412	52	1060
合計		3300	6098	5229	167	14794	3613	7104	5573	206	16496	11448	30289	13709	825	56271

第5表 近世出土陶磁器類集計表

ほぼ同等の出土量を示している。名古屋城三の丸遺跡と比較するために土師器皿を引いてみると3.27：1となり、名古屋城三の丸遺跡の2.54：1よりも椀類の出土量が多くなっている。また、皿類対鉢類は、12.64：1と鉢類の出土量が極端に少ないように思われるが、土師器皿を除けば4.42：1となって名古屋城三の丸遺跡の5.19：1に近い数値を示すこととなる。さらに、調理具においても、播鉢対鍋・釜類をみると、1：1.18となっており、名古屋城三の丸遺跡における1：2.95の半数にしかならず、本遺跡における鍋・釜類の出土量の少なさを読み取ることができる。

つぎに、材質組成についてみてみると、土師質製品が24.2%に対して、陶磁器類の方は、陶器製品が39.7%、磁器製品が35.2%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が1.0%となっている。名古屋城三の丸遺跡と比較してみると、磁器製品の占める割合が約20%近く増加しており、その増加分が陶器製品の減少となって現れているものと思われる。土師質製品の76.6%は、土師皿が占めており、灯火具の土師器皿をも含めると90.6%となり、ここでも土師器皿の出土量の多さが際立っていることを読み取ることができる。

このような相違点が、本遺跡における遺物組成の1つの特徴となるが、これがこの地点のみの数値であるのか、吉田城遺跡という地域全体の数値であるのか、単なる時期的な差異に基づく数字であるのかは、各遺構の推移を見ていくことで明かとなっていくものと思われる。



第48図 近世遺構出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	0	530	692	0	1222	0	742	907	0	1649	0	2139	2139	2	4280
	小椀	0	122	719	0	841	0	98	546	0	644	0	210	1338	0	1548
	皿	1903	484	272	0	2659	1387	443	330	1	2161	2735	967	800	2	4504
	鉢	0	80	69	1	150	0	166	85	1	252	0	536	467	7	1010
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	1903	1216	1752	1	4872	1387	1449	1868	2	4706	2735	3852	4744	11	11342
調理具	鍋、釜	101	63	0	8	172	478	66	0	20	564	2882	241	0	98	3221
	鉢	4	117	2	0	123	3	166	2	0	171	3	401	2	0	406
	播鉢	0	164	0	0	164	0	348	0	0	348	0	1118	0	0	1118
	瓶	0	90	39	0	129	0	72	22	0	94	0	486	102	3	591
	その他	0	1	0	0	1	0	3	0	0	3	0	3	2	0	5
	小計	105	435	41	8	589	481	655	24	20	1180	2885	2249	106	101	5341
貯蔵具	瓶	0	127	4	0	131	0	22	1	0	23	0	618	57	3	678
	壺	4	92	5	0	101	3	50	2	0	55	48	238	16	0	302
	甕A	0	118	0	0	118	0	179	0	0	179	0	3861	0	0	3861
	甕B	0	66	0	0	66	0	87	0	0	87	0	593	0	0	593
	鉢	0	20	46	0	66	0	16	41	0	57	0	38	68	0	106
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	4	423	55	0	482	3	354	44	0	401	48	5348	141	3	5540	
灯火具		340	330	1	12	683	235	156	1	10	402	388	277	2	30	697
火具		42	132	1	41	216	76	180	1	33	290	705	1107	4	185	2001
化粧具		0	29	53	0	82	0	10	15	0	25	0	26	47	0	73
神仏具		0	71	161	2	234	0	49	47	3	99	0	104	129	3	236
喫煙具		0	11	4	0	15	0	15	5	0	20	0	30	12	0	42
調度具		52	288	18	0	358	8	235	10	0	253	43	986	51	4	1084
蓋		33	385	210	12	640	5	156	119	17	297	6	232	159	24	421
合計		2479	3320	2296	76	8171	2195	3259	2134	85	7673	6810	14211	5395	361	26777

第6表 近世遺構出土陶磁器類集計表

SD101 本遺構の時期は、16世紀末葉～19世紀中葉である。

92年度調査区で検出された外堀であるが、出土した遺物は総破片数で5,366点、接合前口縁破片数が1,575点、個体数は155.83個体である。第1節で述べたように近世を通じて遺構が生きており、明治期になって埋められているため、全ての時期の遺物を含んでいる。

この内、供膳具が86.25個体・61.4%と過半を占めており、調理具が10.75個体・7.7%、貯蔵具が10.92個体・7.8%、灯火具が14.17個体・10.1%、火具が3.50個体・2.5%、化粧具が2.92個体・2.1%、神仏具が8.58個体・6.1%、喫煙具が0.50個体・0.4%、調度具が2.92個体・2.1%となっている。ほぼ近世の用途組成の平均値に近い値を示しているが、神仏具が約2倍と増えているのに対し、調度具がほぼ半数にまで減少している。蓋類は、総破片数で131点、接合前口縁破片数で91点、個体数では15.33個体出土している。

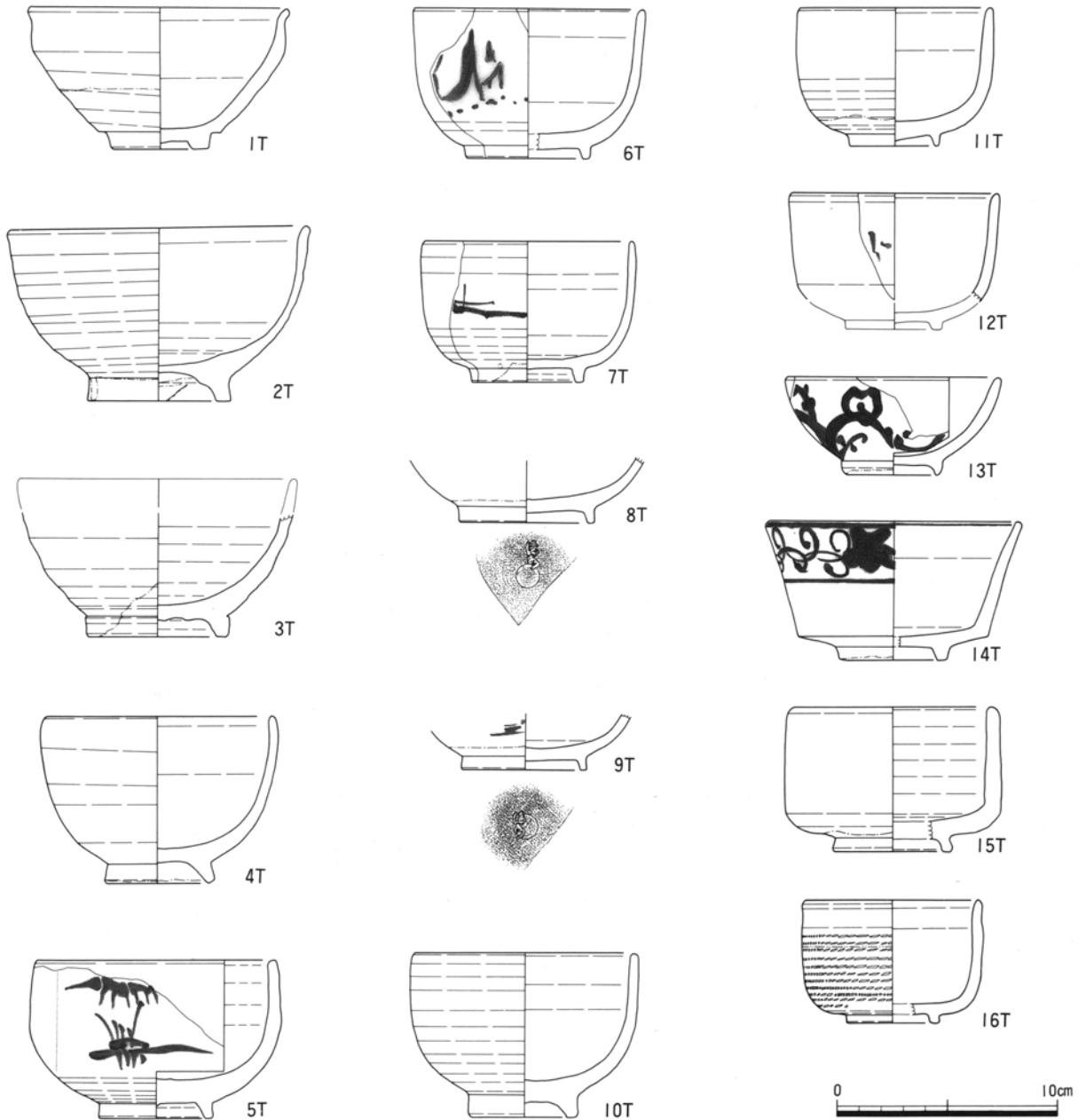
材質面においては、土師質製品が21.2%、陶磁器類においても陶器製品が38.1%と減少しているのに対して、磁器製品が40.5%と増加していることがわかる。これは、江戸後期と考えている時期の遺物が多く出土しているために、磁器製品の占める割合が高くなっているものと考えられる。その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品は、0.2%と極少量出土しているにとどまっている。



第49図 SD101出土陶磁器類の用途組成

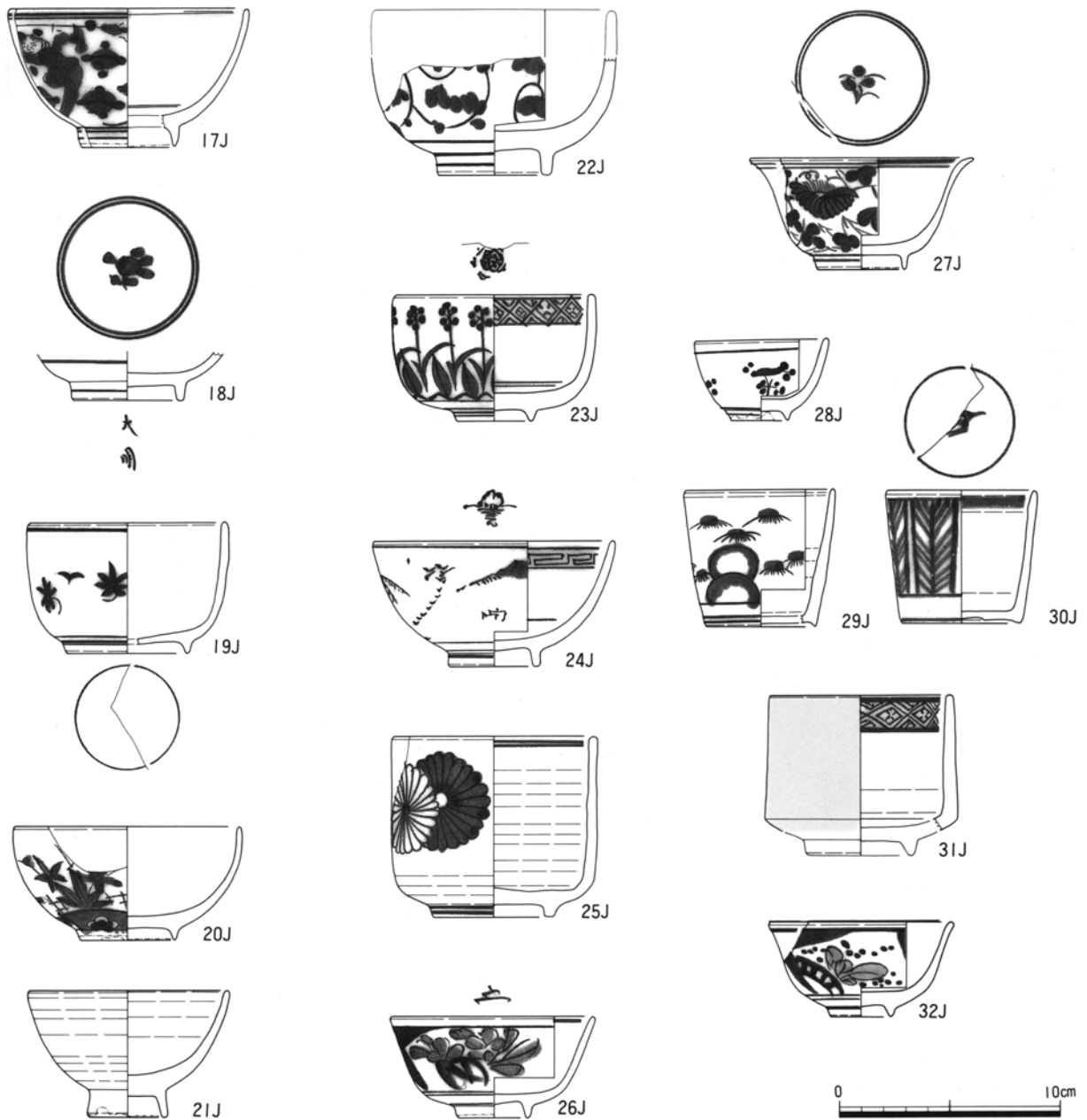
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数			
		土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他
供給具	碗	94	176			133	230			412	570		
	小碗	16	214			14	167			52	670		
	皿	259	124	97		159	73	97		262	154	223	
	鉢		28	27			52	20			140	334	
	その他												
	小計	259	262	514	0	159	272	514	0	945	262	1797	0
調理具	鍋、釜	10	20		1	31	56	22	2	80	184	77	15
	鉢		30			30	38			38	75		
	播鉢		26			26	62			62	161		
	瓶		32	9		41	31	8		39	181	41	2
	その他		1			1	2			2	2		
	小計	10	109	9	1	129	56	155	8	221	184	496	17
貯蔵具	瓶		50			50	6			6	169	24	
	壺		7			7	8			8	12	38	3
	甕A		31			31	35			35	620		
	甕B		13			13	22			22	112		
	鉢		3	27		30	4	17		21	14	20	
	その他					0				0			
	小計	0	104	27	0	131	0	75	17	92	12	953	47
灯火具		81	88	1		170	34	47	1	82	51	78	1
火具		8	31	1	2	42	25	34	1	62	135	127	4
化粧具		5	30			35		3	9	12	7	21	
神仏具		6	97			103		2	26	28	9	60	
喫煙具		4	2			6		7	2	9	8	8	
調度具		34	1			35		32	1	33	1	144	6
蓋		57	126	1		184	31	58	2	91	48	79	4
合計		358	700	808	4	1870	274	658	637	6	1575	645	2628

第7表 SD101出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
1	92A	SD101	供膳具	椀	天目椀	6.3	(11.0)	—	4.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美	17世紀中	23	E-111
2	"	"	"	"	丸椀	7.6	13.0	—	6.3	灰釉	灰釉	不明	削り出し高台, 17世紀前半	23	E-112
3	"	"	"	"	"	—	—	—	6.2	"	"	肥前系			E-113
4	"	"	"	"	"	7.3	(10.1)	—	4.5	"	"	"	高台砂融着	23	E-114
5	"	"	"	"	"	7.0	(11.6)	—	4.8	"	"	瀬・美	呉須絵・笹文, 見込み砂融着, 18世紀代	23	E-115
6	"	"	"	"	"	6.6	(10.2)	—	(5.4)	"	"	"	呉須絵・山水文, 高台にトチン痕	23	E-116
7	"	"	"	"	"	6.3	(9.2)	—	5.0	"	"	"	呉須絵・山水文, 17世紀後半~18世紀前半	23	E-117
8	"	"	"	"	"	—	—	—	(5.9)	"	"	肥前	高台内に押印「清水」, 17世紀後半		E-118
9	"	"	"	"	"	—	—	—	5.6	"	"	"	呉須絵・山水文, 高台内に「清水」, 17世紀後半		E-119
10	"	"	"	"	"	7.8	(9.8)	—	4.7	"	"	瀬・美	高台疊付部分に剥域痕		E-120
11	"	"	"	"	"	6.2	(8.5)	—	(4.0)	"	"	"			E-121
12	"	"	"	"	"	—	(9.3)	—	—	"	"	"	呉須絵		E-122
13	"	"	"	"	"	4.3	9.4	—	4.0	"	"	"	呉須絵・雪輪に梅樹文, 高台にトチン痕	23	E-123
14	"	"	"	"	平椀	6.2	(11.0)	—	(4.8)	"	"	"	鉄絵・花唐草文, 口化粧, 高台にトチン痕	25	E-124
15	"	"	"	"	筒椀	(6.4)	(8.8)	—	(5.2)	"	"	不明	灰釉白泥化		E-125
16	"	"	"	小椀	筒椀	5.5	(7.7)	—	(4.0)	鉄釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	鍍茶椀		E-126

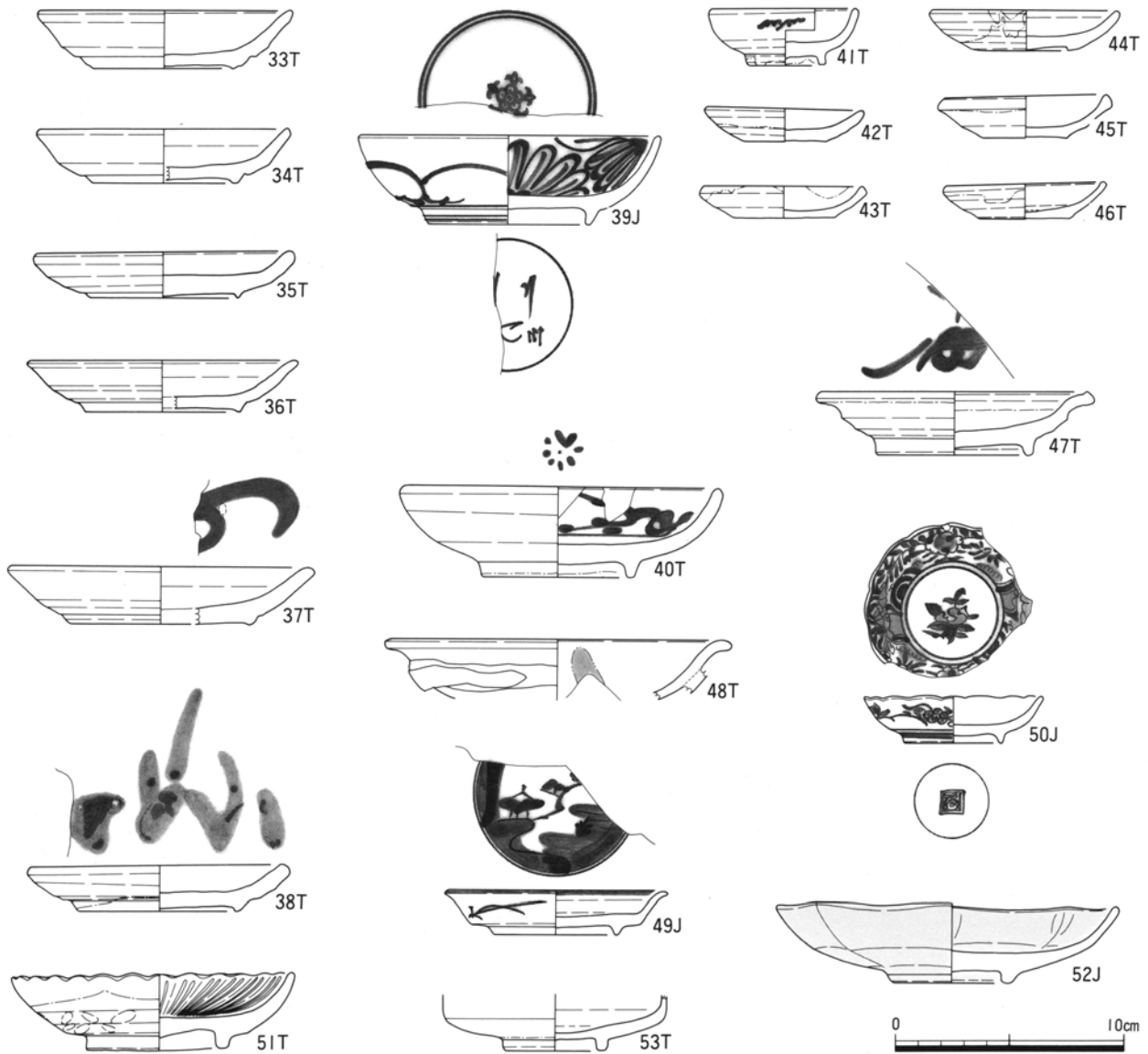
第50図 近世の遺物 (1) SD101① (1:3)



遺物 番号	調査地点 遺構	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
			器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
17	92A	SD101	供膳具	碗	丸碗	6.1	(10.5)	—	(4.1)	—	—	肥前	染付・唐人物文, 1655~1670	E-127	
18	"	"	"	"	"	—	—	—	4.8	—	—	"	染付・花卉文+「大明」, 高台に砂融着, 1650~1660	24	E-128
19	"	"	"	"	"	5.8	(8.7)	—	(5.4)	—	—	"	染付・紅葉文, 1660~1680	E-129	
20	"	"	"	"	"	5.0	(10.1)	—	(4.2)	—	—	"	染付・流水に紅葉文, 18世紀前半~中	24	E-130
21	"	"	"	"	"	5.6	(8.9)	—	3.5	—	—	"	白磁, 高台砂融着	E-131	
22	"	"	"	"	"	—	—	—	(5.0)	—	—	"	陶胎染付・唐草文, 高台盤付に砂融着・刺離痕, 18世紀代	E-132	
23	"	"	"	"	"	5.6	(8.8)	—	(3.4)	—	—	肥前系	染付・草花文+割小菱・五弁葵(手書き), 1780~1810	24	E-133
24	"	"	"	"	"	(5.5)	(10.7)	—	(4.0)	—	—	瀬・美	染付・山水文+岩に波瀾文・雷文 見込みに上子シ模, 1820~幕末	25	E-134
25	"	"	"	"	筒碗	8.0	(9.0)	—	5.4	—	—	肥前	染付・菊花文, 高台に砂融着, 1620~1630	25	E-135
26	"	"	"	"	端反碗	4.5	9.0	—	3.1	—	—	瀬・美	色絵(赤・緑・黄緑・青)・花龍文+水辺に帆掛舟文, 幕末~明治	25	E-136
27	"	"	"	"	"	4.9	(9.6)	—	(3.8)	—	—	"	染付・花卉, 1820~幕末	25	E-137
28	"	"	"	"	小碗	丸碗	3.6	(6.0)	—	2.6	—	肥前	染付・草花文, 高台に砂融着, 17世紀後半	26	E-138
29	"	"	"	"	蕎麦猪口	6.1	6.6	—	4.8	—	—	"	染付・雪持ち笹文, 底部砂融着	26	E-139
30	"	"	"	"	"	5.9	(6.6)	—	(5.2)	—	—	瀬・美	染付・矢羽根文, 焼成不良, 19世紀中	26	E-140
31	"	"	"	"	筒碗	—	(8.0)	(8.4)	—	—	青磁釉	肥前	青磁染付・割小菱, 18世紀後半	E-141	
32	"	"	"	"	端反碗	4.2	(8.1)	—	2.7	—	—	瀬・美	色絵(赤・黄緑・青)・口化粧・八橋文, 幕末~明治	25	E-142

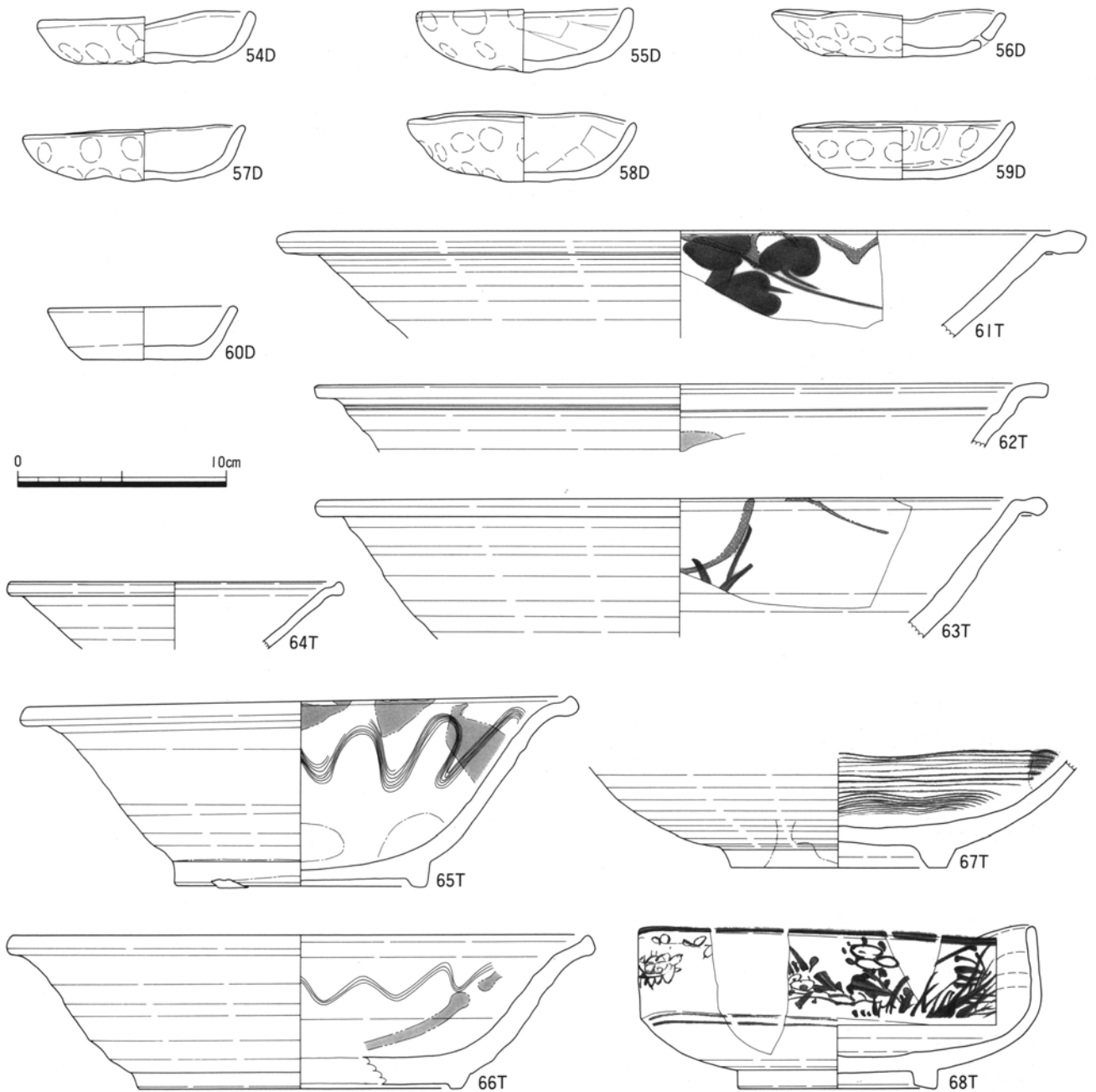
第51図 近世の遺物 (2) SD101② (1:3)





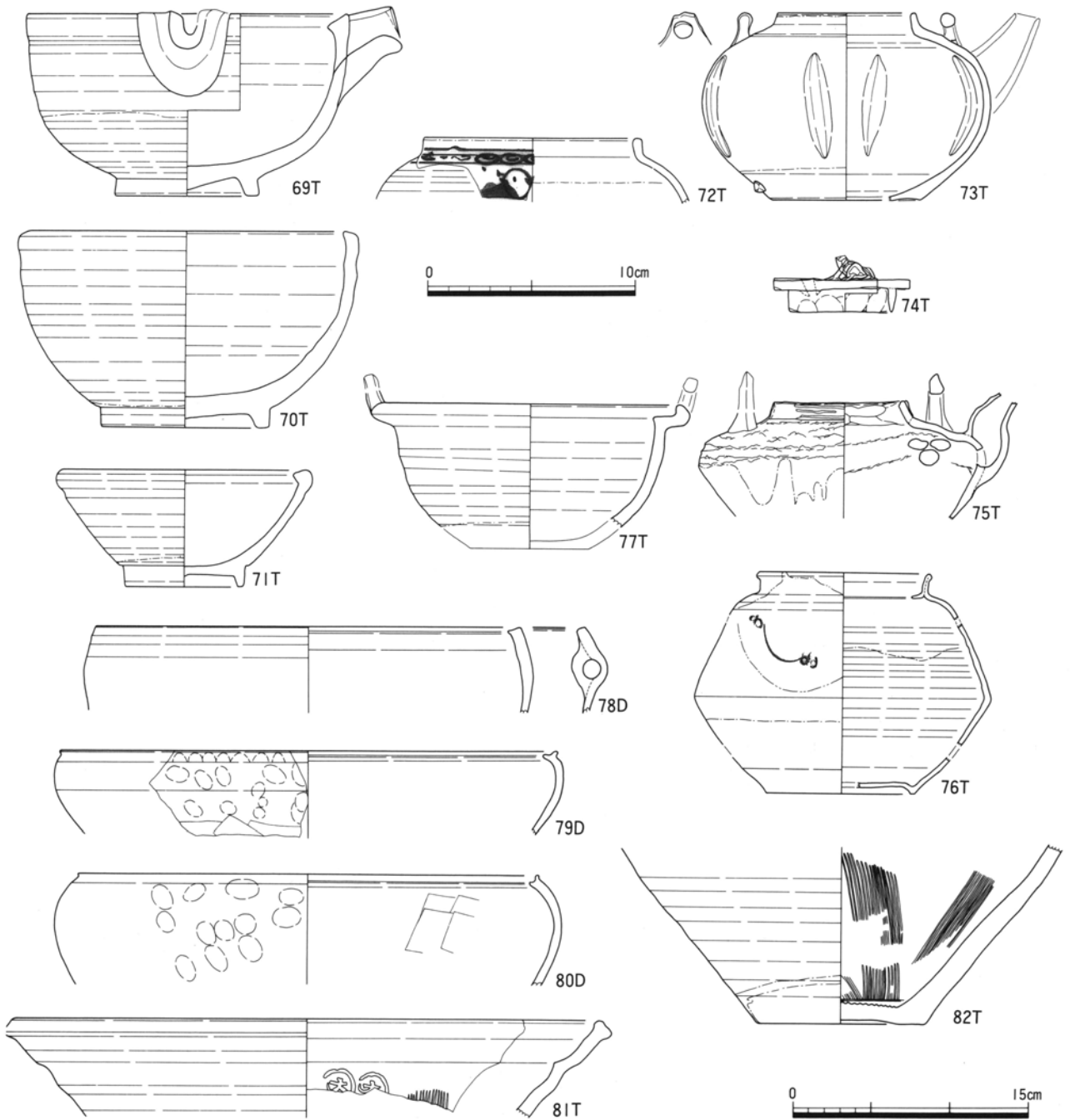
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
33	92A	SD101	供膳具	皿	丸皿	2.5	(10.9)	—	(6.2)	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台内にトチン痕, 高台重ね焼きの剝離痕	27	E-143
34	"	"	"	"	"	2.3	(10.8)	—	(6.3)	"	"	"	見込み・高台内にトチン痕		E-144
35	"	"	"	"	"	2.0	11.0	—	6.5	"	"	"	見込み・高台内にトチン痕, 体部重ね焼きの剝離痕		E-145
36	"	"	"	"	"	2.2	(11.4)	—	(6.7)	"	"	"	見込み・底部トチン痕		E-146
37	"	"	"	"	"	2.5	(12.9)	—	(7.8)	"	"	"	鉄絵・笹文, 見込み・高台内にトチン痕		E-147
38	"	"	"	"	"	2.0	10.8	—	7.0	灰釉	灰釉	"	鉄絵・笹文, 見込み・高台内にトチン痕	27	E-148
39	"	"	"	"	"	3.8	12.9	—	7.0	—	—	肥前	染付・菊花文・五弁花(コンニャク印) + 唐草文, 18世紀前半	28	E-149
40	"	"	"	"	"	3.9	13.5	—	(6.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵・梅樹文・八曜文		E-150
41	"	"	"	"	"	2.4	6.3	—	3.3	—	—	肥前	染付・笹文, 高台内砂融着, 18世紀代		E-151
42	"	"	"	"	"	1.4	6.7	—	3.6	灰釉	灰釉	瀬・美			E-152
43	"	"	"	"	"	1.4	6.9	—	4.4	"	"	"	底部回転糸切痕		E-153
44	"	"	"	"	"	1.8	8.0	—	4.5	"	"	"	碁笥底		E-154
45	"	"	"	"	"	1.8	6.9	—	3.6	"	"	"	底部回転糸切痕		E-155
46	"	"	"	"	"	1.5	6.8	—	3.9	"	"	"	底部回転糸切痕	28	E-156
47	"	"	"	"	折縁皿	(2.7)	(11.4)	—	6.6	"	"	"	鉄絵・笹文	28	E-157
48	"	"	"	"	端反皿	—	(14.6)	—	—	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	"	銅緑釉筆散らしか, 体部に重ね焼きの破片融着		E-158
49	"	"	"	"	"	1.9	(9.2)	—	(5.3)	—	—	肥前	染付・横間山水文・折れ松葉文, 口化粧, 18世紀後半~19世紀前半	28	E-159
50	"	"	"	"	型打皿	2.0	(7.6)	—	4.1	—	—	"	染付・仏手柑文・花唐草文+二角渦福, 18世紀代	29	E-160
51	"	"	"	"	菊皿	3.3	12.3	—	6.2	灰釉	灰釉	瀬・美	ノミで調整, 見込みにトチン痕	29	E-161
52	"	"	"	"	型打皿	3.4	14.4	—	4.9	青磁	青磁	肥前	青磁, 八角皿, 1630~1640	29	E-162
53	"	"	"	"	その他	—	—	—	6.3	灰釉	灰釉	関西	蓋物か, 18世紀代		E-163

第52図 近世の遺物 (3) SD101③ (1:3)



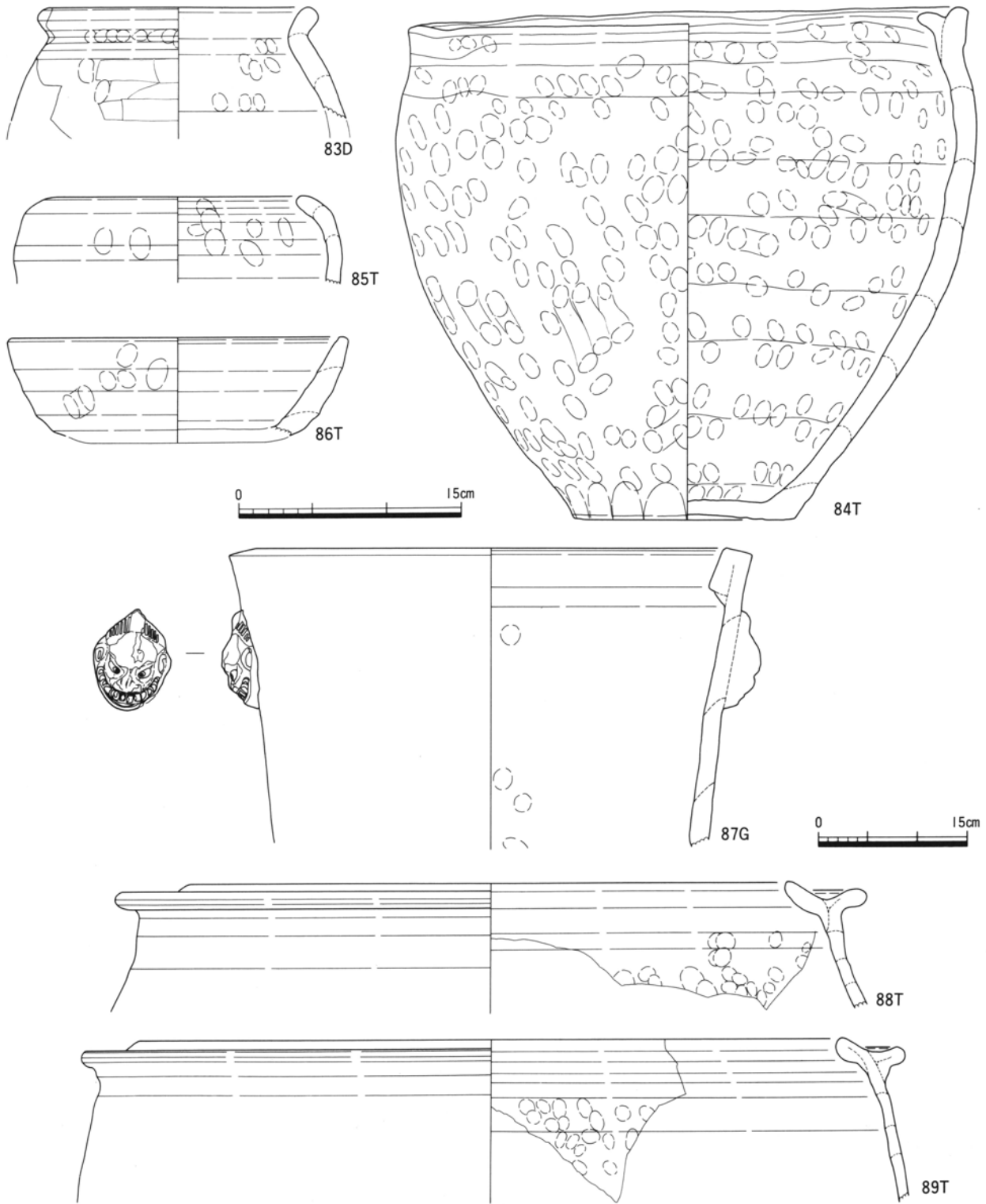
遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
54	92A	SD101	供膳具	皿	土師器皿B	2.5	10.0	—	—	ナデ	指押え	不明	色調：灰白色	34 E-164
55	"	"	"	"	"	3.0	10.1	—	—	"	"	"	色調：淡黄橙色	E-165
56	"	"	"	"	"	2.2	11.0	—	—	"	"	"	色調：淡黄色	E-166
57	"	"	"	"	"	2.1	10.5	—	—	"	"	"	色調：淡黄橙色	34 E-167
58	"	"	"	"	"	3.2	10.6	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	色調：にぶい橙色	E-168
59	"	"	"	"	"	2.7	10.5	—	—	指押え	指押え+ナデ	"	"	E-169
60	"	"	"	"	土師器皿A	3.0	8.9	—	6.0	ナデ	ナデ	"	底部回転糸切痕, 色調：橙色	E-170
61	"	"	"	鉢	折縁鉢	—	(36.6)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・蔦文, 緑釉筆散らし	E-171
62	"	"	"	"	端反鉢	—	(34.0)	—	—	"	"	"	銅緑釉筆散らし	E-172
63	"	"	"	"	折縁鉢	—	(34.0)	—	—	"	"	"	鉄絵・黍文か, 銅緑釉筆散らし	E-173
64	"	"	"	"	"	—	(15.7)	—	—	"	"	"	"	E-174
65	"	"	"	"	"	8.7	25.8	—	11.8	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	"	黄瀬戸鉢, 銅緑釉筆散らし, 見込み釉刺ぎ, 見込みトチン痕	30 E-175
66	"	"	"	"	端反鉢	7.2	(27.2)	—	(15.2)	"	"	"	銅緑釉散らし, 櫛引き, 見込み・高台にトチン痕	E-176
67	"	"	"	"	その他	—	—	—	10.2	白泥+透明釉	ケズリ+ナデ	肥前	二彩唐津, 見込み・高台部分胎土目痕, 17世紀中~末	30 E-177
68	"	"	"	"	"	7.5	18.4	—	9.3	灰釉	灰釉	関西系	鉄絵・草花文か, 見込み刺ぎ, 体部外面トチン痕, 18世紀代	30 E-178

第53図 近世の遺物 (4) SD101④ (1:3)



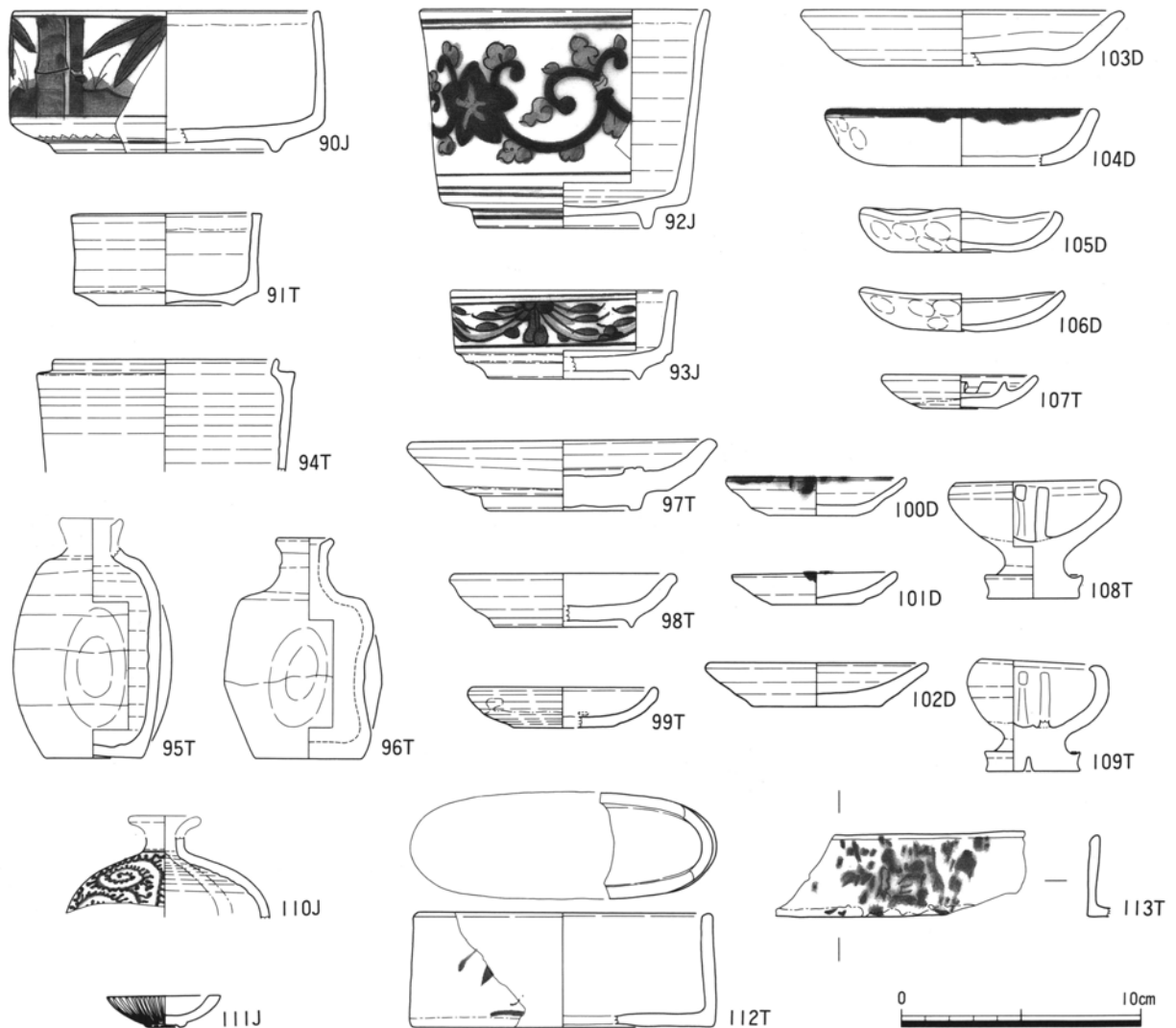
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備 考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
69	92A	SD101	調理具	鉢	片口	8.8	(15.3)	—	(6.7)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕	31	E-179
70	"	"	"	"	"	9.3	(14.8)	—	7.9	鉄釉	鉄釉	"	見込みにトチン痕		E-180
71	"	"	"	"	捏ね鉢	5.5	(11.5)	—	5.5	灰釉	灰釉	"		31	E-181
72	"	"	"	瓶	土瓶	—	(10.2)	—	—	透明釉	白泥+透明釉	関西系	呉須絵・人物文か, 19世紀代		E-182
73	"	"	"	"	"	8.8	(6.2)	(13.6)	(7.0)	緑釉	緑釉	"	外面下部煤付着	31	E-183
74	"	"	その他	蓋	蓋 I	—	6.4	—	—	指押え+ナデ	灰釉	不明	焼き締め, つまみ貼り付け, 備前か	31	E-184
75	"	"	調理具	瓶	土瓶	—	5.8	14.5	—	"	"	"	焼き締め, 備前か	31	E-185
76	"	"	"	"	急須	—	(8.1)	(13.9)	(7.0)	透明釉	透明釉	関西系	白泥+鉄絵+呉須絵		E-186
77	"	"	"	鍋・釜	鍋	—	14.1	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	外面下部煤付着	31	E-187
78	"	"	"	"	内耳鍋	—	(27.0)	(29.6)	—	ヨコナデ	ナデ	不明	色調: 黄灰色, 外面煤付着		E-188
79	"	"	"	"	焙烙	—	(31.4)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	"	色調: にぶい橙色, 外面煤付着		E-189
80	"	"	"	"	"	—	(29.2)	—	—	"	"	"	色調: 明赤褐色, 外面煤付着		E-190
81	"	"	"	搦鉢	VIII類	—	(37.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	押印「大」		E-191
82	"	"	"	"	その他	—	—	—	10.8	錆釉	錆釉	"	櫛目数16本, 1cmに4本, 使用による摩滅痕		E-192

第54図 近世遺物 (5) SD101⑤ (78~82は1:4, 他は1:3)



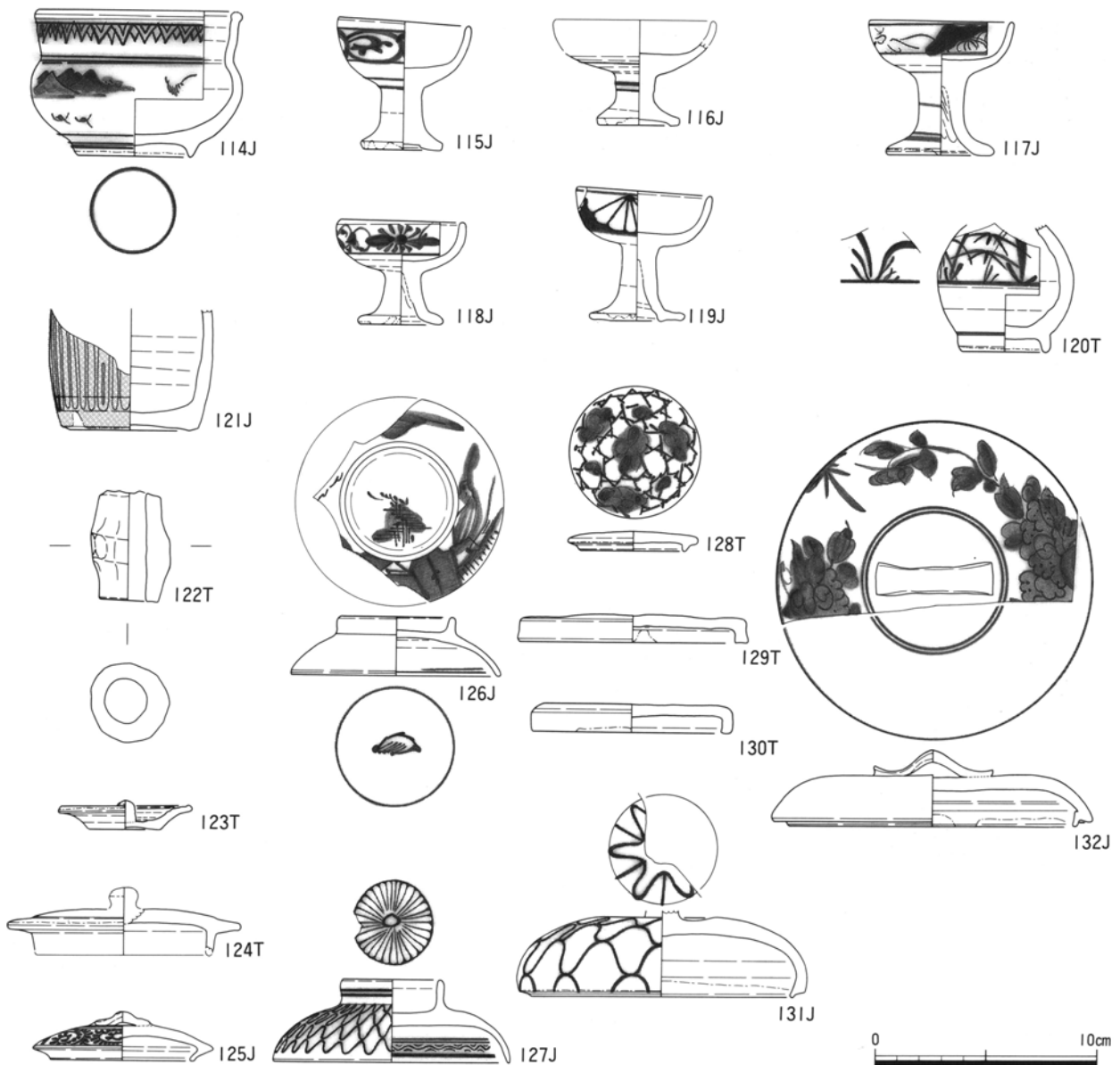
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
83	92A	SD101	貯蔵具	壺	土師壺	—	(17.4)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	色調：にふい橙色		E-193
84	"	"	"	甕 A	II類	33.5	36.6	38.9	14.7	"	"	常滑	焼き締め	32	E-194
85	"	"	火具	鉢	火鉢	—	(16.4)	—	—	"	"	"	色調：赤褐色, 焼き締め		E-195
86	"	"	"	"	火桶	—	(22.4)	—	—	ナデ	"	"	色調：淡黄橙色, 赤物		E-196
87	"	"	"	"	その他	—	(31.4)	—	—	—	—	不明	色調：にふい橙色, 貼り付け, 内外面に煤付着	33	E-197
88	"	"	貯蔵具	甕 A	III類	—	(60.0)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	赤物		E-198
89	"	"	"	"	"	—	(70.4)	—	—	"	"	"	赤物		E-199

第55図 近世の遺物 (6) SD101⑥ (88・89は1:6, 他は1:4)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
90	92A	SD101	貯蔵具	鉢	蓋物 A	5.8	(12.5)	—	(9.0)	—	—	肥前	染付・笹竹文, 18世紀中～末	32	E-200
91	〃	〃	〃	〃	〃	4.8	(7.4)	—	(5.6)	灰釉	灰釉	瀬・美			E-201
92	〃	〃	〃	〃	〃	9.0	(11.6)	—	(7.0)	—	—	肥前	染付・花唐草文, 口縁部軸刺ぎ, 高台砂融着, 1690-18世紀前半	32	E-202
93	〃	〃	〃	〃	〃	3.6	(9.2)	—	(6.3)	—	—	〃	染付・草花文, 18世紀代		E-203
94	〃	〃	〃	〃	蓋物 B	—	(9.2)	—	—	ケズリ+ナデ	灰釉	瀬・美	肩径 (10.6) cm		E-204
95	〃	〃	〃	瓶	德利 D	—	—	6.7	4.2	ナデ	鉄釉	〃			E-205
96	〃	〃	〃	〃	〃	9.0	2.2	6.5	4.5	鉄釉	〃	〃	底部に重ね焼きの剝離痕	32	E-206
97	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	2.8	12.3	—	6.5	灰釉	灰釉	〃	見込み蛇ノ目軸刺ぎ, 見込みに重ね焼きの剝離痕	33	E-207
98	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	(9.2)	—	(5.8)	〃	〃	〃	口縁油煙付着, 高台内に重ね焼きの剝離痕 (径約3.8cm)		E-208
99	〃	〃	〃	〃	〃	1.6	(7.6)	—	(4.1)	鉄釉	鉄釉	〃	見込みにトチン痕		E-209
100	〃	〃	〃	〃	〃	1.5	(7.3)	—	3.6	ナデ	ナデ	不明	色調: 橙色, 口縁部油煙付着		E-210
101	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	6.8	—	3.8	〃	〃	〃	口縁油煙付着, 底部回転糸切痕, 色調: 橙色	33	E-211
102	〃	〃	〃	〃	〃	1.8	(9.0)	—	(5.4)	〃	指押え	〃	口縁油煙付着, 底部回転糸切痕, 色調にふい橙色		E-212
103	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	(13.1)	—	(8.0)	〃	ナデ+ケズリ	〃	色調: 橙色, 内外面油煙付着, ロクロ成形		E-213
104	〃	〃	〃	〃	〃	(2.3)	(11.0)	—	—	〃	指押え	〃	口縁油煙付着, 色調: 淡黄褐色		E-214
105	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	7.8	—	—	〃	指押え+ナデ	〃	色調: 明黄褐色, 内外面油煙付着, 非ロクロ成形		E-215
106	〃	〃	〃	〃	〃	1.8	8.3	—	—	〃	〃	〃	色調: 橙色, 内外面油煙付着, 非ロクロ成形		E-216
107	〃	〃	〃	〃	灯蓋	1.4	6.3	—	3.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内径約3.6cm, 柿釉か, 外面底部軸拭き取り		E-217
108	〃	〃	〃	乗燭	皿類	4.8	6.4	—	3.8	〃	〃	〃	底部回転糸切痕		E-218
109	〃	〃	〃	〃	〃	4.6	4.5	—	3.8	〃	〃	〃	底部回転糸切痕, 底部に穿孔 (径約4mm)		E-219
110	〃	〃	貯蔵具	瓶	その他	—	—	(8.4)	—	—	—	肥前	染付・蛸唐草文, 18世紀末～19世紀前半	32	E-220
111	〃	〃	化粧具	紅皿	—	1.3	4.6	—	1.3	—	—	肥前系	白磁, 型押し成形, 18世紀代		E-221
112	〃	〃	〃	鬘皿	—	4.7	—	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵 (摺絵)・草花文, 長径 (12.1) cm, 短径 (4.2) cm		E-222
113	〃	〃	〃	〃	—	3.4	—	—	—	〃	〃	〃	鉄絵 (摺絵)・草花文	34	E-223

第56図 近世の遺物 (7) SD101⑦ (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
114	92A	SD101	神仏具	香炉	袴腰型	6.4	8.7	9.4	5.1	—	—	肥前	染付・幾何文・山水文、火入れか、17世紀後半～18世紀前半	34	E-224
115	〃	〃	〃	仏飯器	—	5.8	5.8	—	3.4	—	—	〃	染付・蜻蛉草文、高台に砂融着、18世紀後半～19世紀初	34	E-225
116	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	3.6	—	—	〃	染付・雨降文、18世紀前半	—	E-226
117	〃	〃	〃	〃	—	5.9	6.3	—	(4.5)	—	—	瀬・美	色絵(赤・茶)、幕末～明治	34	E-227
118	〃	〃	〃	〃	—	4.7	5.6	—	(3.6)	—	—	〃	染付・花唐草文、1820～幕末	34	E-228
119	〃	〃	〃	〃	—	5.7	(5.9)	—	4.0	—	—	〃	染付・菊花散し文、1820～幕末	—	E-229
120	〃	〃	〃	瓶	神酒徳利 A	—	—	6.0	3.8	ナデ	灰釉	〃	呉須絵・笹竹文か	34	E-230
121	〃	〃	喫煙具	灰落し	—	—	—	—	(5.2)	—	青磁釉	肥前	青磁、底部に砂融着、18世紀代	34	E-231
122	〃	〃	調度具	その他	その他	4.7	1.8	3.4	—	—	指押え+ナデ	不明	焼き締め、色調：橙色、常滑か	35	E-232
123	〃	〃	〃	その他	蓋 A	1.3	3.2	—	—	灰釉	ナデ	常滑	肩径5.7cm・つまみ径8mm	35	E-233
124	〃	〃	〃	〃	蓋 D	—	(7.7)	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	肩径(10.3cm)	—	E-234
125	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	(6.4)	—	—	—	—	肥前	染付・蜻蛉草文、肩径(8.0)cm、18世紀末～19世紀初	—	E-235
126	〃	〃	〃	〃	蓋 E	2.6	(9.1)	—	—	—	—	肥前系	染付・楼閣山水文、つまみ径4.9cm、1780～19世紀前半	36	E-236
127	〃	〃	〃	〃	〃	(3.6)	(10.4)	—	—	—	—	瀬・美	染付・一重網目文・菊花文、つまみ径推定4.3cm、1820～幕末	—	E-237
128	〃	〃	〃	〃	蓋 G	0.9	4.6	—	—	—	—	肥前	染付・氷裂梅花文、肩径5.6cm、18世紀末～幕末	36	E-238
129	〃	〃	〃	〃	蓋 F	1.2	(10.1)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	肩径(9.8)cm	36	E-239
130	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	(8.9)	—	—	ナデ	〃	〃	肩径約9.0cm	—	E-240
131	〃	〃	〃	〃	蓋 H	—	(11.4)	—	—	—	—	肥前	染付・一重網目文、19世紀前半～幕末	36	E-241
132	〃	〃	〃	〃	〃	3.3	(12.8)	—	—	—	—	〃	染付・牡丹文、肩径(14.3cm)、18世紀中～末	—	E-242

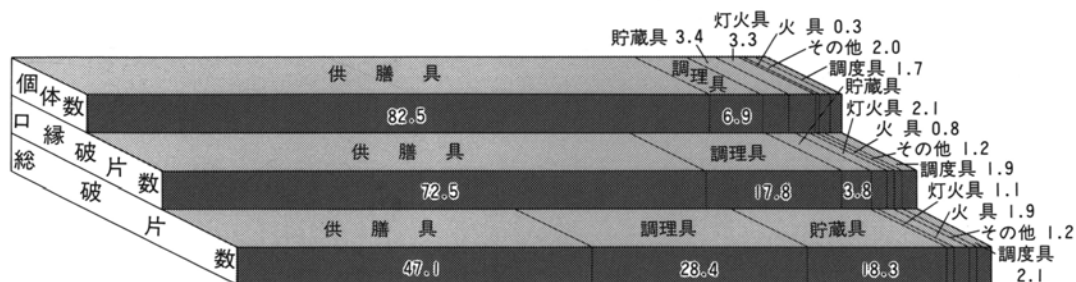
第57図 近世の遺物 (8) SD101⑧ (1:3)

SD129 本遺構の時期は、18世紀前葉～中葉である。

93年度調査区の東側で検出された溝で、屋敷地境を示す溝であると思われる。出土した遺物は総破片数で3,143点、接合前口縁破片数が1,071点、個体数は109.25個体である。第1節でも述べたように近世前期に属する遺構であり、廃棄土坑に近い性格を持つ遺構と考えられる。

この内、供膳具が87.67個体・82.5%とその大半を占め、調理具が7.33個体・6.9%、貯蔵具が3.58個体・3.4%、灯火具が3.50個体・3.3%、火具が0.33個体・0.3%、化粧具・神仏具ともに1.00個体・1.0%、喫煙具が0.08個体・0.1%、調度具が1.83個体・1.7%となっている。供膳具・調理具・貯蔵具という日常的な生活に関連する遺物群で92.7%と出土遺物のほとんどが占められ、その他の副次的な生活に関連する遺物群の出土量が極端に減少しているのが特徴としてあげることができる。供膳具において、椀類：皿類＝1：2.82とその比率が逆転しているように、土師器皿の出土量が多いことが影響しているものと思われる。また、蓋類は、総破片数で26点、接合前口縁破片数で18点、個体数では2.92個体とやはりその出土量が極めて少ない。

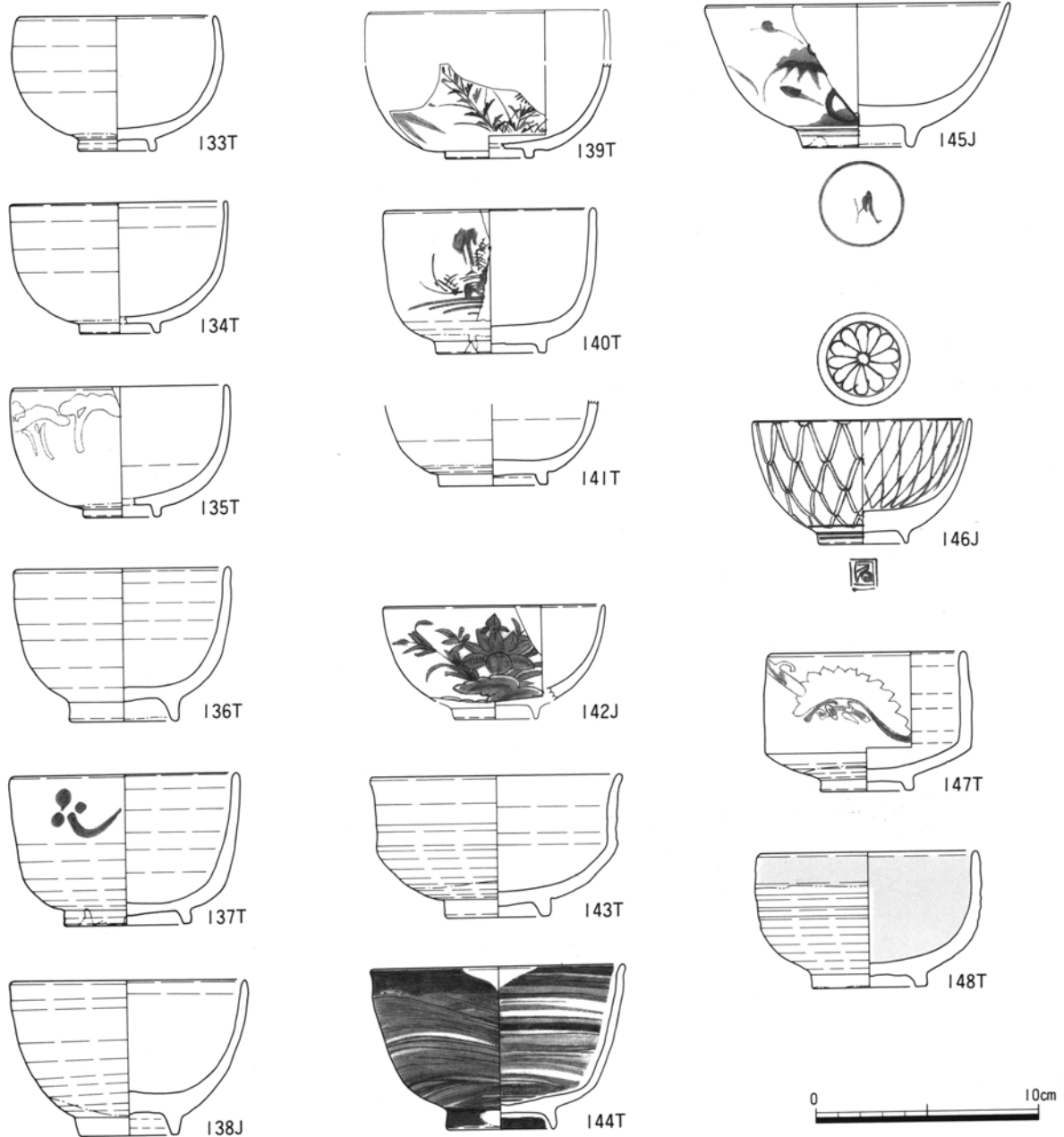
材質面においても、土師質製品が56.5%と異常に高い割合を占めている。土師質製品の内、91.0%を土師器皿が占めており、灯火具のものも含めると、全出土遺物の53.6%にもなっている。これに対して、陶磁器類では陶器製品が24.5%、磁器製品が19.0%と極端に減少していることがわかる。



第58図 SD129出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数							
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		93	63		156		130	78		208		330	197		527	
	小椀		13	102		115		13	70		83		22	107		129	
	皿	656	64	44		764	338	65	40		443	488	153	97		738	
	鉢		9	8		17		16	13		29		53	20		73	
	その他					0					0					0	
	小計	656	179	217	0	1052	338	224	201	0	763	488	558	421	0	1467	
調理具	鍋、釜		37			37	107				1	108	619	19		2	640
	鉢			12		12		19			19		54			54	
	播鉢			31		31		53			53		158			158	
	瓶			8		8		7			7		31	2		33	
	その他					0					0					0	
	小計	37	51	0	0	88	107	79	0	1	187	619	262	2	2	885	
貯蔵具	瓶		6			6		2			2		94	3		97	
	壺		5	5		10		6	2		8		24	11		35	
	甕A		10			10		11			11		364			364	
	甕B		9			9		11			11		53			53	
	鉢			8		8			8		8		3	18		21	
	その他					0					0					0	
	小計	0	30	13	0	43	0	30	10	0	40	0	538	32	0	570	
灯火具		28	14		42	10	12			22	16	19			35		
火具		0	4		4	2	6			8	18	36		4	58		
化粧具			12		12			1		1		1	3		4		
神仏具		12			12		11			11		21	9		30		
喫煙具		1			1		1			1		3			3		
調度具			22	0		22		19	1		20		62	3		65	
	蓋		25	10		35		11	7		18		15	11		26	
合計		721	338	252	0	1311	457	393	220	1	1071	1141	1515	481	6	3143	

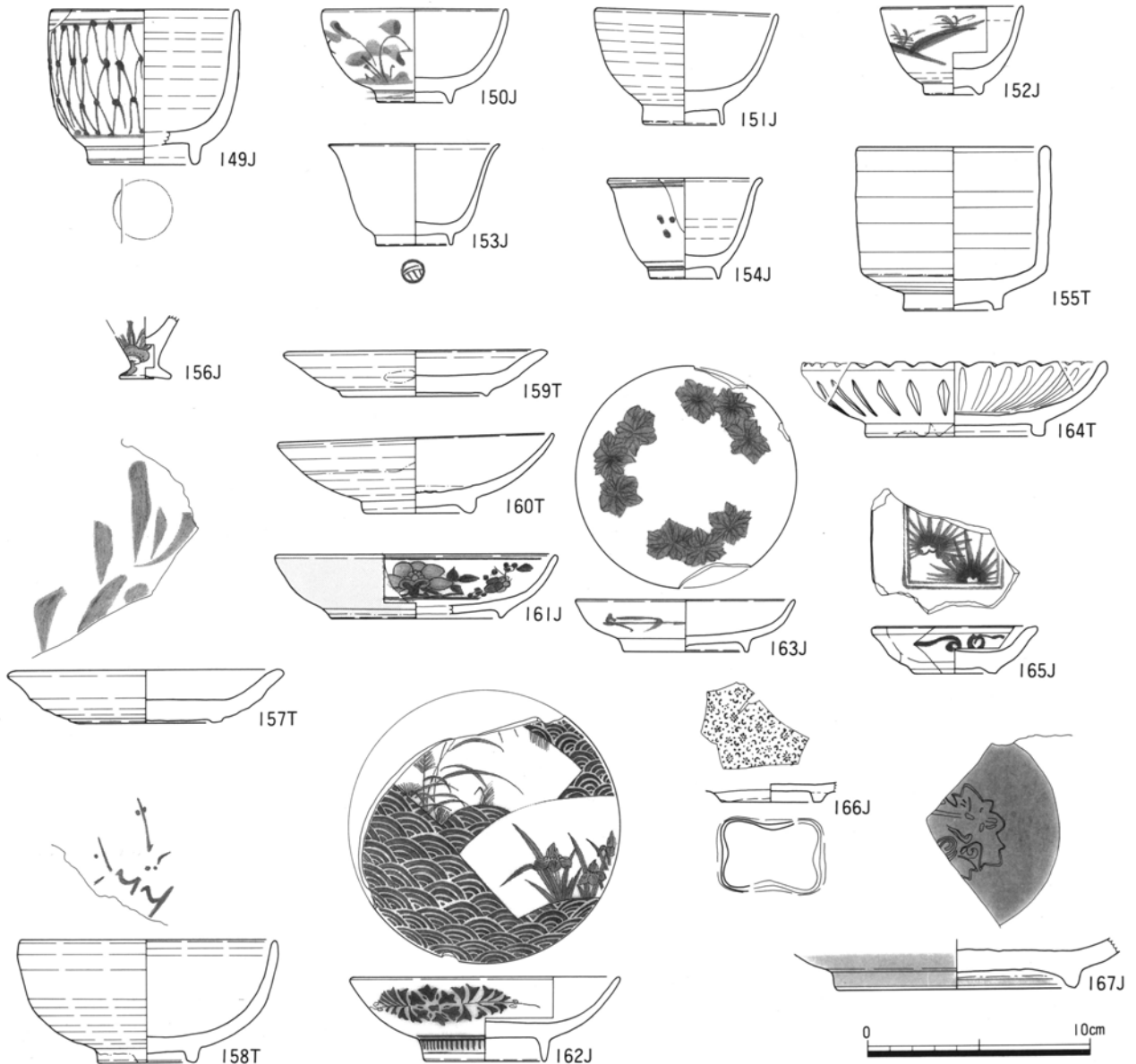
第8表 SD129出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構				器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
133	93B	SD129	供膳具	碗	丸碗	5.9	(8.6)	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美			E-243
134	"	"	"	"	"	5.8	(9.6)	—	(3.5)	"	"	京・信	色絵碗か	23	E-244
135	"	"	"	"	"	(5.7)	(9.5)	—	(3.2)	"	"	関西系	上絵付・三階松文, 18世紀代		E-245
136	"	"	"	"	"	6.7	(9.2)	—	(4.5)	"	"	瀬・美	高台に使用による摩滅痕	23	E-246
137	"	"	"	"	"	6.6	(9.9)	—	(5.2)	"	"	"	呉須絵		E-247
138	"	"	"	"	"	6.9	10.3	—	4.4	—	—	肥前	白磁, 高台無釉, 焼成不良, 1640~1660		E-248
139	"	"	"	"	"	—	—	—	(3.8)	透明釉	透明釉	関西系	鉄絵+色絵(緑)・草花文, 18世紀代		E-249
140	"	"	"	"	"	6.3	(9.2)	—	4.8	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵・山水樓閣文, 17世紀末~18世紀前半	23	E-250
141	"	"	"	"	"	—	—	—	4.8	"	"	瀬・美	高台内に刻印「新山」, 18世紀前半		E-251
142	"	"	"	"	"	—	(9.7)	—	—	—	—	肥前	染付・草花文, 18世紀代		E-252
143	"	"	"	"	腰折碗	6.2	(11.0)	—	4.5	灰釉	灰釉	瀬・美		26	E-253
144	"	"	"	"	端反碗	7.2	11.1	—	4.6	白泥+透明釉	白泥+透明釉	肥前	白泥による刷毛目, 17世紀末~18世紀前半	23	E-254
145	"	"	"	"	丸碗	6.3	(13.4)	—	4.9	—	—	"	染付・雪の輪に草花文+「天明年製」, 高台に砂融着, 18世紀中~末		E-255
146	"	"	"	"	"	5.4	(9.6)	—	3.9	—	—	"	染付・菊花文・網目文+二角満福, 高台に砂融着, 18世紀前半~中	24	E-256
147	"	"	"	"	筒碗	6.1	(8.5)	—	4.0	灰釉	灰釉	瀬・美	上絵付(赤・緑)・松文	25	E-257
148	"	"	"	"	丸碗	6.0	(9.5)	—	4.9	"	灰釉+鉄釉	"	高台にトチン痕, 使用による摩滅痕		E-258

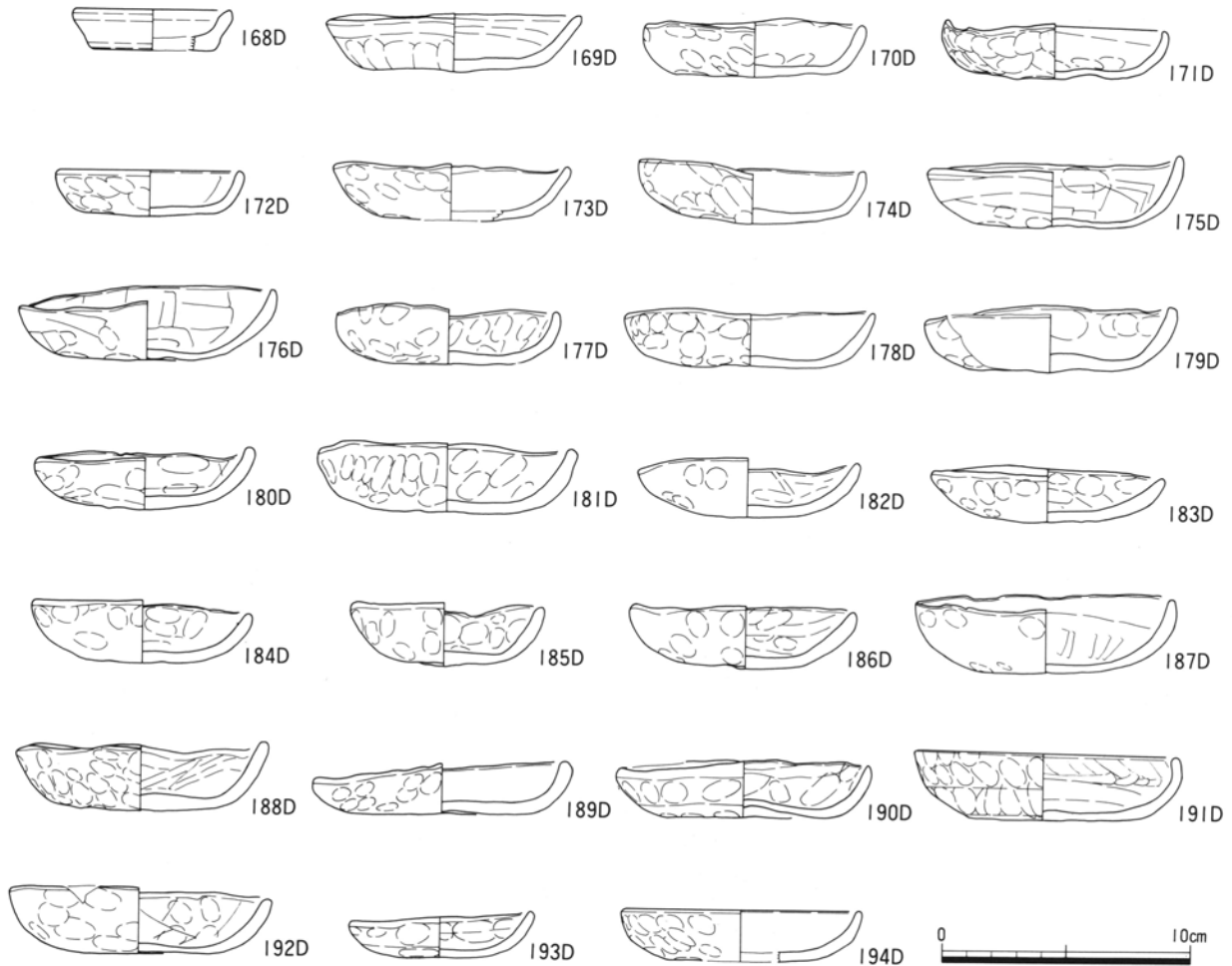
第59図 近世遺物 (9) SD129① (1 : 3)





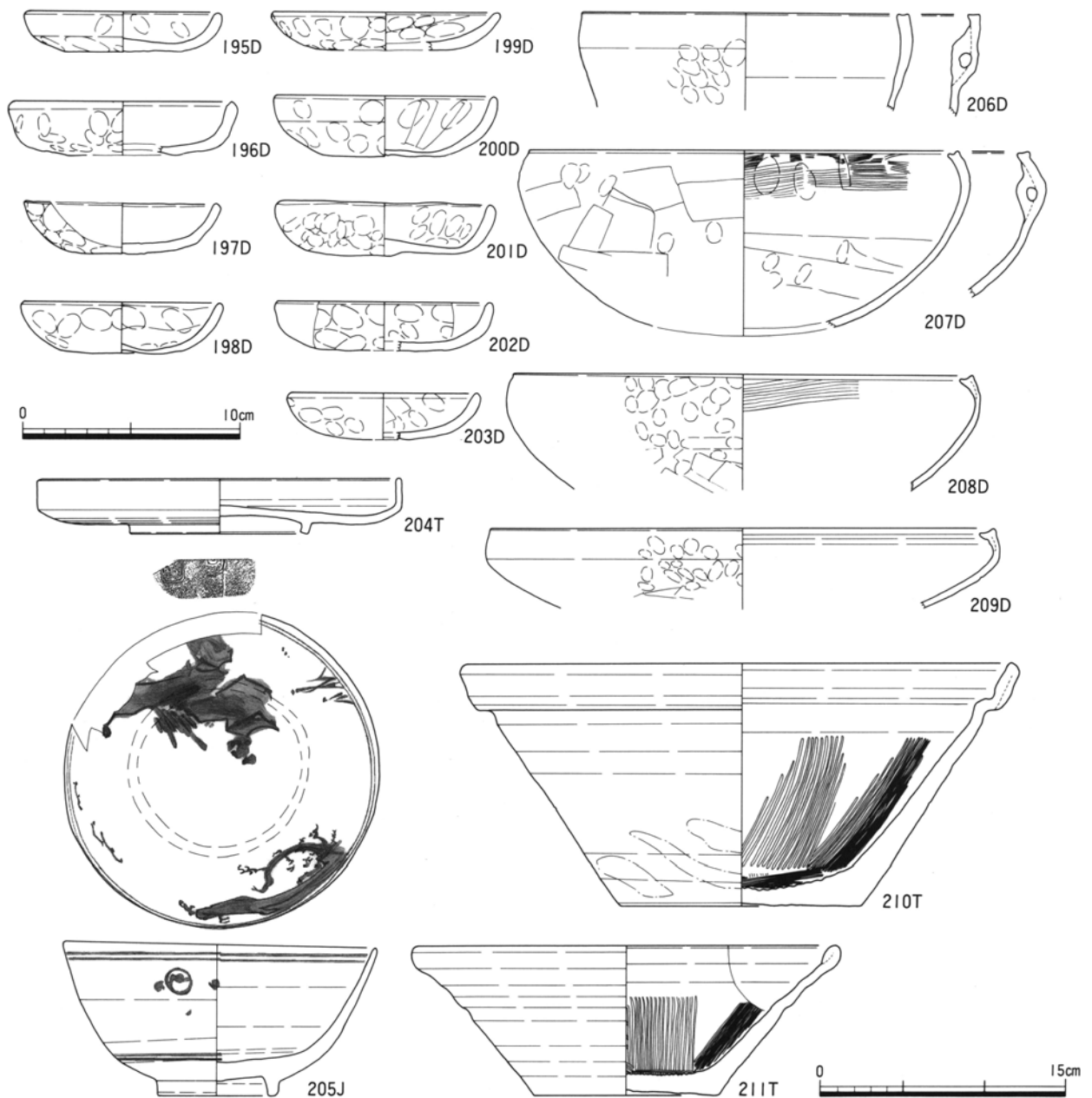
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
149	93B	SD129	供膳具	小椀	丸椀	6.8	(8.1)	—	(4.7)	—	—	肥前	染付・網目文, 高台に砂融着, 1640~1660	24	E-259
150	"	"	"	"	"	4.1	(8.1)	—	3.2	—	—	"	染付・草花文, 高台に砂融着, 1690~18世紀前半		E-260
151	"	"	"	"	"	5.0	8.0	—	3.4	—	—	肥前系	白磁, 18世紀後半	26	E-261
152	"	"	"	"	"	3.8	(6.2)	—	(2.3)	—	—	肥前	染付・山水文, 1640~1650	26	E-262
153	"	"	"	"	端反椀	4.5	(7.5)	—	3.3	—	—	"	染付・丸に変形文字, 1660~1680	26	E-263
154	"	"	"	"	"	4.4	(6.7)	—	(3.0)	—	—	"	染付・梅花文, 17世紀後半~18世紀前半		E-264
155	"	"	"	"	筒椀	7.2	(8.2)	—	4.3	鉄釉	鉄釉	瀬・美		25	E-265
156	"	"	"	"	その他	—	—	—	2.2	—	—	肥前	染付・草花文, 18世紀後半~19世紀前半	26	E-266
157	"	"	"	皿	丸皿	2.3	(11.7)	—	(6.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・笹文, 高台内にトチン痕		E-267
158	"	"	"	"	"	5.4	(11.2)	—	4.3	"	"	"	呉須絵・梅樹文	27	E-268
159	"	"	"	"	"	2.0	(11.6)	—	(6.3)	"	"	"	見込み・高台内にトチン痕		E-269
160	"	"	"	"	"	3.3	12.0	—	4.8	青緑釉	青緑釉	肥前	輪壳皿, 見込み・高台に砂目痕, 18世紀前半	27	E-270
161	"	"	"	"	"	2.8	(12.2)	—	(7.5)	—	青磁	"	青磁染付・折枝文+五弁花か, 18世紀中~末		E-271
162	"	"	"	"	"	3.7	11.8	—	5.2	—	—	"	染付・青海波に扇面散し文+花唐草文+柳高台, 19世紀前半~幕末	28	E-272
163	"	"	"	"	"	2.3	9.6	—	5.4	—	—	"	染付・草花文(コンニャク印)-折れ松葉文, 高台砂融着, 1690~18世紀前半	28	E-273
164	"	"	"	"	菊皿	3.3	(13.4)	—	(7.7)	灰釉	灰釉	瀬・美		29	E-274
165	"	"	"	"	型打皿	(2.1)	(7.0)	—	(3.6)	—	—	肥前	染付・松文+飛雲文, 高台砂融着, 1630~1640	29	E-275
166	"	"	"	"	"	—	—	—	—	—	—	"	染付・型紙摺, 高台は糸切り細工による成形, 1690~18世紀前半	29	E-276
167	"	"	"	"	丸皿	—	—	—	(10.5)	—	—	"	青磁, 押印・草花文, 高台内蛇の目軸刺ぎ+鉄錆, 1650~1660	28	E-277

第60図 近世の遺物 (10) SD129② (1 : 3)



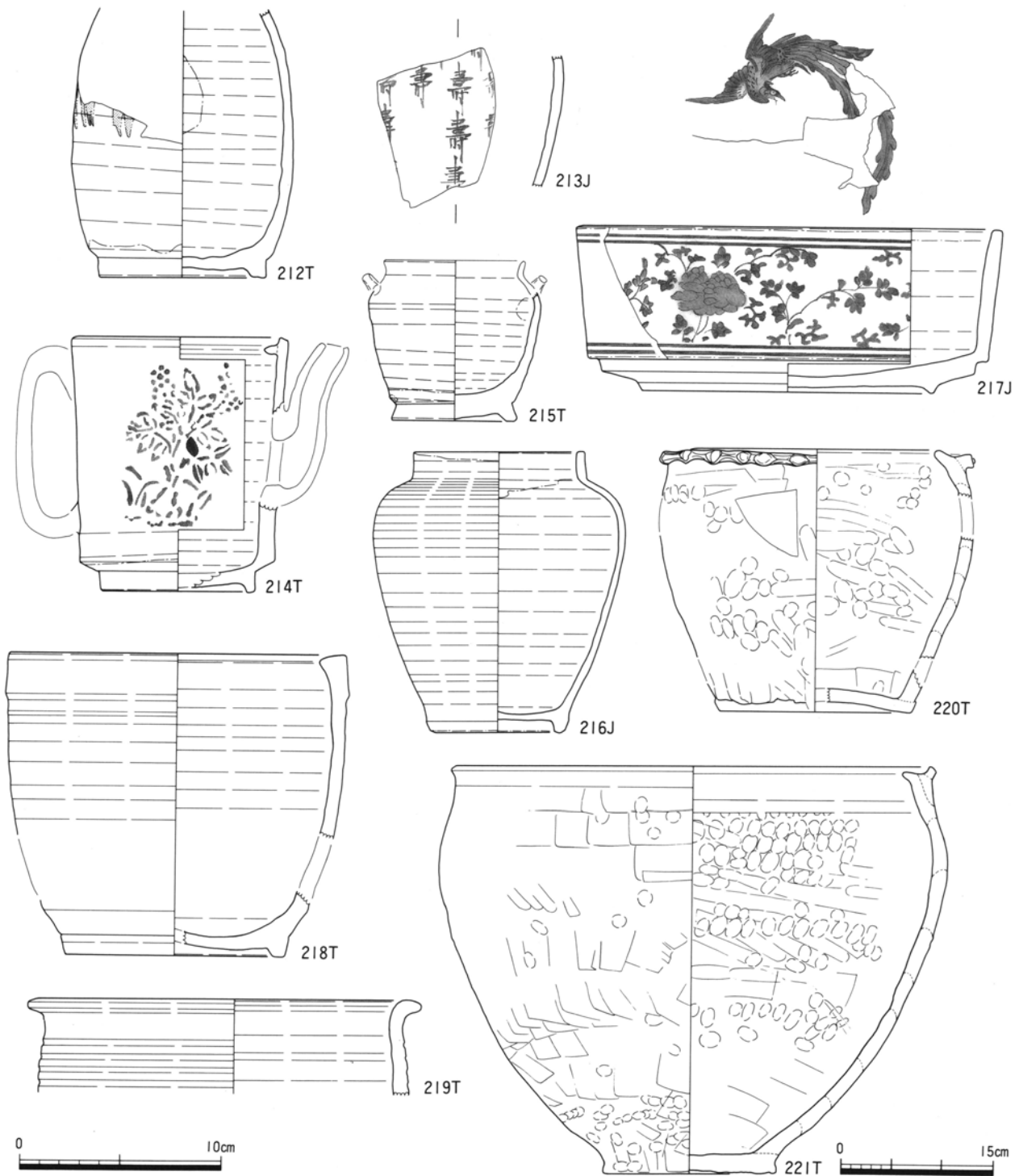
遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
168	93B	SD129	供膳具	皿	土師器ⅢA	(1.6)	(6.1)	—	(4.6)	ナデ	ナデ	不明	色調：浅黄橙色		E-278
169	"	"	"	"	土師器ⅢB	2.1	9.8	—	—	"	指押え+ナデ	"	色調：淡黄橙色		E-279
170	"	"	"	"	"	2.1	8.5	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：淡黄橙色		E-280
171	"	"	"	"	"	2.1	8.5	—	—	"	指押え	"	色調：淡黄橙色	34	E-281
172	"	"	"	"	"	1.8	(7.0)	—	—	ナデ	"	"	色調：淡橙色		E-282
173	"	"	"	"	"	2.2	9.2	—	—	"	"	"	色調：にふい橙色		E-283
174	"	"	"	"	"	2.3	8.8	—	—	"	"	"	色調：淡橙色	34	E-284
175	"	"	"	"	"	2.6	9.9	—	—	ケズリ+ナデ	指押え+ナデ	"	色調：にふい黄橙色		E-285
176	"	"	"	"	"	2.4	9.7	—	—	"	指押え	"	内面に油附着，色調：浅黄橙色		E-286
177	"	"	"	"	"	2.1	8.6	—	—	指押え+ケズリ	"	"	色調：にふい黄橙色		E-287
178	"	"	"	"	"	2.1	9.2	—	—	ナデ	"	"	色調：浅黄橙色		E-288
179	"	"	"	"	"	2.3	9.5	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：にふい黄橙色		E-289
180	"	"	"	"	"	2.3	8.3	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色		E-290
181	"	"	"	"	"	2.6	9.8	—	—	"	"	"	色調：浅黄橙色	34	E-291
182	"	"	"	"	"	2.1	8.6	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色		E-292
183	"	"	"	"	"	1.9	9.0	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色，内面明赤褐色に変色		E-293
184	"	"	"	"	"	2.3	8.3	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色		E-294
185	"	"	"	"	"	2.5	7.3	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色，内面明赤褐色に変色	29	E-295
186	"	"	"	"	"	2.4	8.6	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色		E-296
187	"	"	"	"	"	2.8	10.1	—	—	ケズリ+ナデ	指押え+ナデ	"	色調：にふい黄橙色	34	E-297
188	"	"	"	"	"	2.6	9.5	—	—	"	指押え	"	色調：浅黄橙色		E-298
189	"	"	"	"	"	1.8	9.8	—	—	ナデ	"	"	色調：浅黄橙色		E-299
190	"	"	"	"	"	2.2	9.8	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：浅黄橙色		E-300
191	"	"	"	"	"	2.6	10.2	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	色調：浅黄橙色		E-301
192	"	"	"	"	"	2.4	10.0	—	—	指押え+ケズリ	"	"	色調：浅黄橙色		E-302
193	"	"	"	"	"	1.6	7.1	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	"	色調：にふい橙色		E-303
194	"	"	"	"	"	2.0	(9.3)	—	—	ナデ	指押え	"	色調：灰黄色		E-304

第61図 近世の遺物 (11) SD129③ (1 : 3)



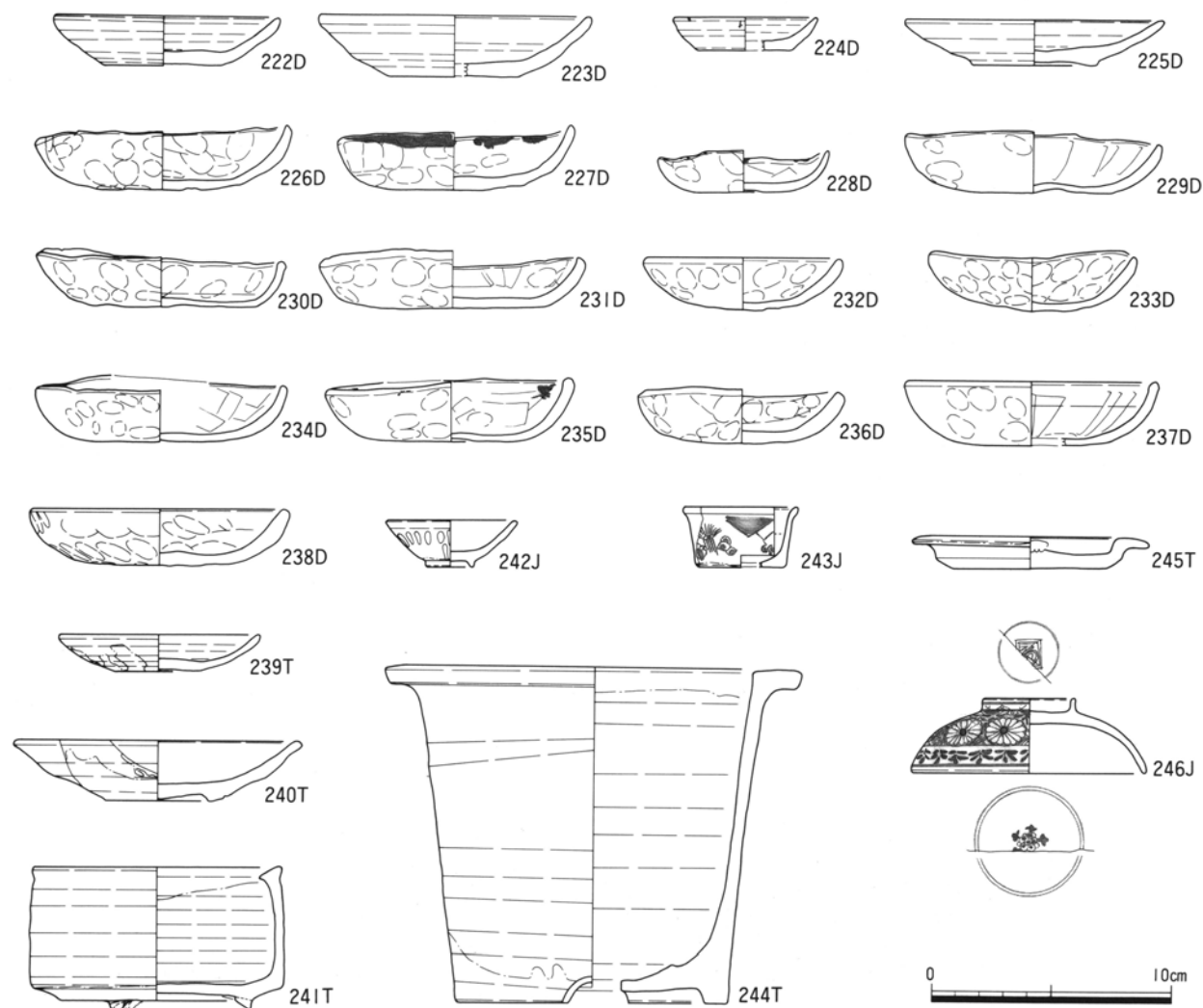
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
195	93B	SD129	供膳具	皿	土師器皿B	1.9	(8.5)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	色調：灰黄色		E-305
196	"	"	"	"	"	(2.4)	(9.9)	—	—	ナデ	"	"	色調：灰白色		E-306
197	"	"	"	"	"	(2.3)	8.6	—	—	"	指押え	"	色調：にぶい黄橙色		E-307
198	"	"	"	"	"	(2.3)	(8.9)	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：浅黄橙色		E-308
199	"	"	"	"	"	1.7	(10.2)	—	—	"	"	"	色調：橙色		E-309
200	"	"	"	"	"	2.8	(10.0)	—	—	指押え+ナズリ	指押え+ナデ	"	色調：浅黄橙色		E-310
201	"	"	"	"	"	(2.4)	(9.5)	—	—	"	指押え	"	色調：にぶい黄橙色		E-311
202	"	"	"	"	"	(2.2)	(9.6)	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：にぶい黄橙色		E-312
203	"	"	"	"	"	(2.1)	(8.4)	—	—	指押え+ナズリ	"	"	色調：浅黄橙色		E-313
204	"	"	"	鉢	その他	3.3	(21.7)	—	11.6	灰釉	灰釉	肥前采	高台内に櫛引き・押印「國」,17世紀末~18世紀初	29	E-314
205	"	"	"	丸鉢	丸鉢	9.2	19.0	—	7.0	—	—	肥前	染付・網子文+宝文,高台に砂融着,漆継ぎ痕, 1630~1640	30	E-315
206	"	"	調理具	鍋・釜	鍋	—	(19.8)	(20.4)	—	ヨコナデ	指押え+ナデ	不明	色調：にぶい黄橙色,外面煤付着		E-316
207	"	"	"	"	内耳鍋	—	(26.2)	—	—	ヨコハケ	"	"	色調：明赤褐色,外面に煤付着		E-317
208	"	"	"	"	焙烙	—	(28.0)	—	—	"	"	"	色調：にぶい黄橙色,外面に煤付着		E-318
209	"	"	"	"	"	—	(30.8)	—	—	ナデ	"	"	色調：にぶい黄橙色,外面に煤付着		E-319
210	"	"	"	播鉢	VI類	14.7	33.3	—	14.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕,櫛目数14本,1cmに4本	31	E-320
211	"	"	"	"	VIII類	9.1	(25.5)	—	(11.2)	"	"	"	櫛目数17本,1cm単位に5本,内面使用による摩滅痕		E-321

第62図 近世の遺物 (12) SD129④ (204~211は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号
	調査区	遺構	用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
212	93B	SD129	貯蔵具	瓶 德利 A	—	—	10.9	8.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美	うのふ釉流し掛け	E-322
213	"	"	"	" その他	—	—	—	—	ナデ	—	肥前	染付・壽文字文, 1640~1660	32 E-323
214	"	"	"	" 汁次 B	12.4	(9.9)	—	7.5	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・摺絵・草花文	32 E-324
215	"	"	"	壺 蓋付壺	—	—	(8.5)	6.0	ナデ	鉄釉	"	うのふ釉流し掛け	E-325
216	"	"	"	" "	(13.7)	(8.4)	(12.4)	6.1	白磁	白磁	肥前	白磁蓋付壺, 高台に砂融着, 17世紀後半	32 E-326
217	"	"	"	鉢 蓋物 A	—	(19.2)	(19.8)	—	—	—	"	染付・牡丹唐草文, 17世紀末~18世紀前半	32 E-327
218	"	"	"	甕 B 半胴 A	—	(16.4)	—	(10.7)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部にトチン痕	E-328
219	"	"	"	" 半胴 B	—	(17.0)	—	—	"	"	"		E-329
220	"	"	"	甕 A II類	(25.7)	(23.6)	(30.9)	(18.4)	指押え+ナデ	指押え+ケズリ	常滑	焼き締め	E-330
221	"	"	"	" "	39.8	(46.4)	(50.0)	16.4	"	"	"	赤物	E-331

第63図 近世の遺物 (13) SD129⑤ (220・221は1:6, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
222	93B	SD129	灯火具	皿	灯明皿	2.1	9.1	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	色調：黄橙色，内外面油煙付着，底部回転糸切痕	E-332
223	"	"	"	"	"	2.5	(11.1)	—	(5.2)	"	"	"	色調：橙色，内外面油煙付着，底部回転糸切痕	E-333
224	"	"	"	"	"	1.4	(5.8)	—	(4.8)	"	"	"	色調：橙色，口縁油煙付着，底部回転糸切痕	E-334
225	"	"	"	"	"	1.9	(10.6)	—	(5.2)	"	"	"	色調：橙色，内外面油煙付着，底部回転糸切痕	E-335
226	"	"	"	"	"	2.4	10.1	—	—	指押え+ナデ	指押え	"	色調：にふい黄橙色，内外面に油煙付着	E-336
227	"	"	"	"	"	2.4	9.3	—	—	"	"	"	口縁部に油煙付着，色調：にふい黄橙色	33 E-337
228	"	"	"	"	"	1.5	7.0	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	口縁部に油煙付着，色調：浅黄橙色	33 E-338
229	"	"	"	"	"	2.3	10.3	—	—	"	"	"	口縁部に油煙付着，色調：浅黄橙色	E-339
230	"	"	"	"	"	2.1	9.8	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：にふい黄橙色，内外面油煙付着	E-340
231	"	"	"	"	"	2.1	10.4	—	—	指押え+ケズリ	"	"	色調：にふい橙色，外面油煙付着	E-341
232	"	"	"	"	"	2.2	(7.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	"	色調：橙色，内外面油煙付着	E-342
233	"	"	"	"	"	2.2	8.1	—	—	"	指押え	"	色調：橙色，内外面油煙付着	E-343
234	"	"	"	"	"	2.3	10.0	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	色調：にふい黄橙色，内面油煙付着	E-344
235	"	"	"	"	"	2.4	9.9	—	—	指押え+ケズリ	指押え+ナデ	"	色調：にふい黄橙色，口縁油煙付着	E-345
236	"	"	"	"	"	2.1	7.9	—	—	ナデ	指押え	"	色調：にふい黄橙色，内外面に油煙付着	E-346
237	"	"	"	"	"	2.7	(10.2)	—	—	指押え+ケズリ	"	"	色調：浅黄橙色，内面油煙付着	E-347
238	"	"	"	"	"	2.3	(10.2)	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調：にふい黄橙色，内外面に油煙付着	E-348
239	"	"	"	"	"	1.5	(8.2)	—	(3.4)	鉄釉	ケズリ	瀬・美	見込みに重ね焼きの剝離痕(径約3.6cm)	E-349
240	"	"	"	"	"	2.5	(11.2)	—	4.2	鉄釉	鉄釉	"	見込みトチン痕，碁筋底，底部重ね焼きによる剝離痕	E-350
241	"	"	神仏具	香炉	筒型	5.8	(10.0)	—	(7.8)	"	"	肥前系		34 E-351
242	"	"	化粧具	紅皿	—	1.9	5.2	—	1.8	—	—	瀬・美	白磁，型打ち成形，19世紀前半～幕末	34 E-352
243	"	"	調度具	餌鉢	餌鉢	(2.5)	(4.7)	—	(3.4)	—	—	肥前	色絵(赤)・紫東文，型押し成形，18世紀後半～19世紀前半	35 E-353
244	"	"	"	植木鉢	植木鉢	13.7	14.9	—	11.0	ナデ	灰釉	瀬・美	底部切込み(2ヶ所)，穿孔(径2.3cm)，墨書	35 E-354
245	"	"	その他	蓋	蓋 B	1.3	(9.8)	—	—	ケズリ+ナデ	錆釉	"		E-355
246	"	"	"	"	蓋 E	3.1	(9.5)	—	—	—	—	肥前	染付・四方だすき文+三角満福+五弁花(手書き)，18世紀前半	36 E-356

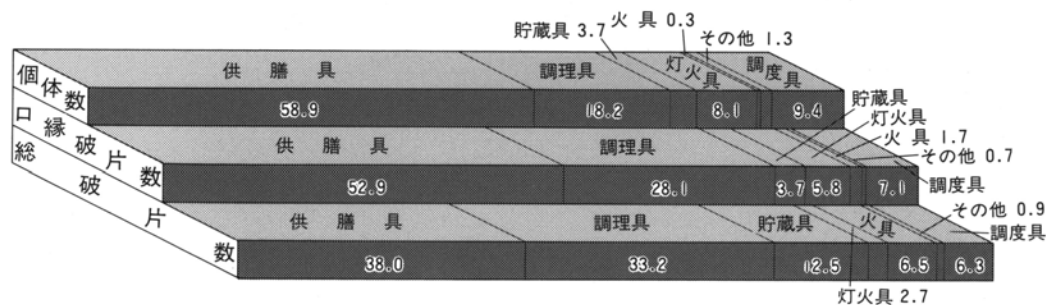
第64図 近世の遺物 (14) SD129⑥ (1 : 3)

SD102 本遺構の時期は、18世紀中葉～後葉である。

93年度調査区の南側で検出された溝で、屋敷地境を示し、SD129と直交する溝である。出土した遺物は総破片数で877点、接合前口縁破片数が305点、個体数は25.08個体である。出土量は少量ではあるが、SD129と同時期の遺構として注目される。

この内、供膳具が14.58個体・58.9%とやや低く、調理具が4.50個体・18.2%、貯蔵具が0.92個体・3.7%、灯火具が2.00個体・8.1%、火具・神仏具ともにかが0.08個体・0.3%、化粧具が0.25個体・1.0%、調度具が2.33個体・9.4%となっている。喫煙具は破片のみが出土している。調理具と調度具が多く出土しており、全体の平均値や同時期の遺構であるSD129とも組成を異にしているところがこの遺構の特徴である。また、蓋類は、総破片数で10点、接合前口縁破片数も10点、個体数は0.33個体と僅かにしか出土していない。

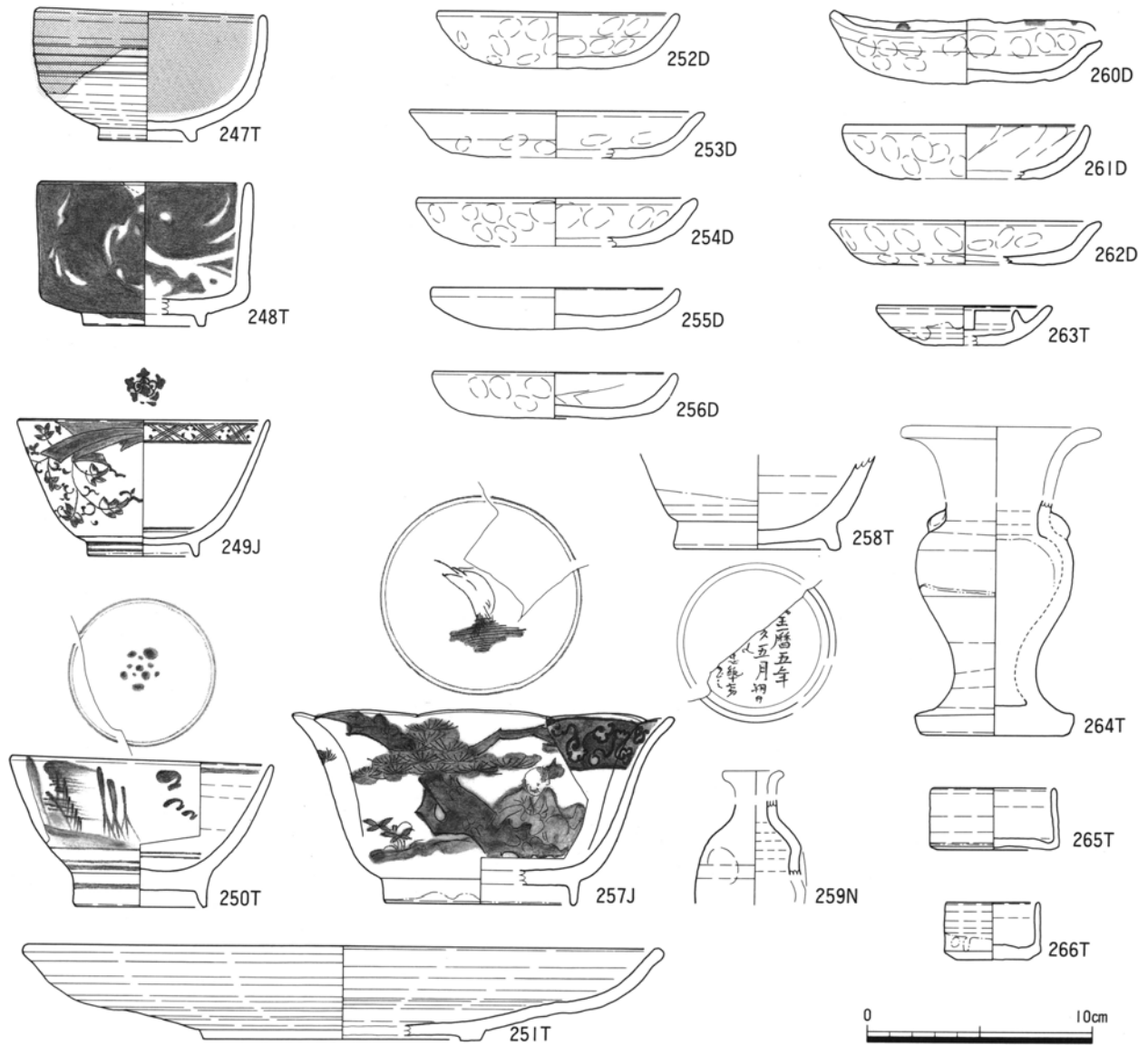
材質面においては、SD129程ではないが土師質製品が34.0%と高く、やはり供膳具の土師器皿が全土師質製品の75.2%と高い比率で出土しており、鍋・釜類をも含めると88.1%となっている。これに対し、陶磁器類は陶器製品が45.5%と増加しているが、その分磁器製品が19.2%と激減しているのである。これが、何に起因しているのか詳しいことはわからないが、SD129と同一遺構として捉えた方が理解しやすいように思われる。



第65図 SD102出土陶磁器類の用途組成

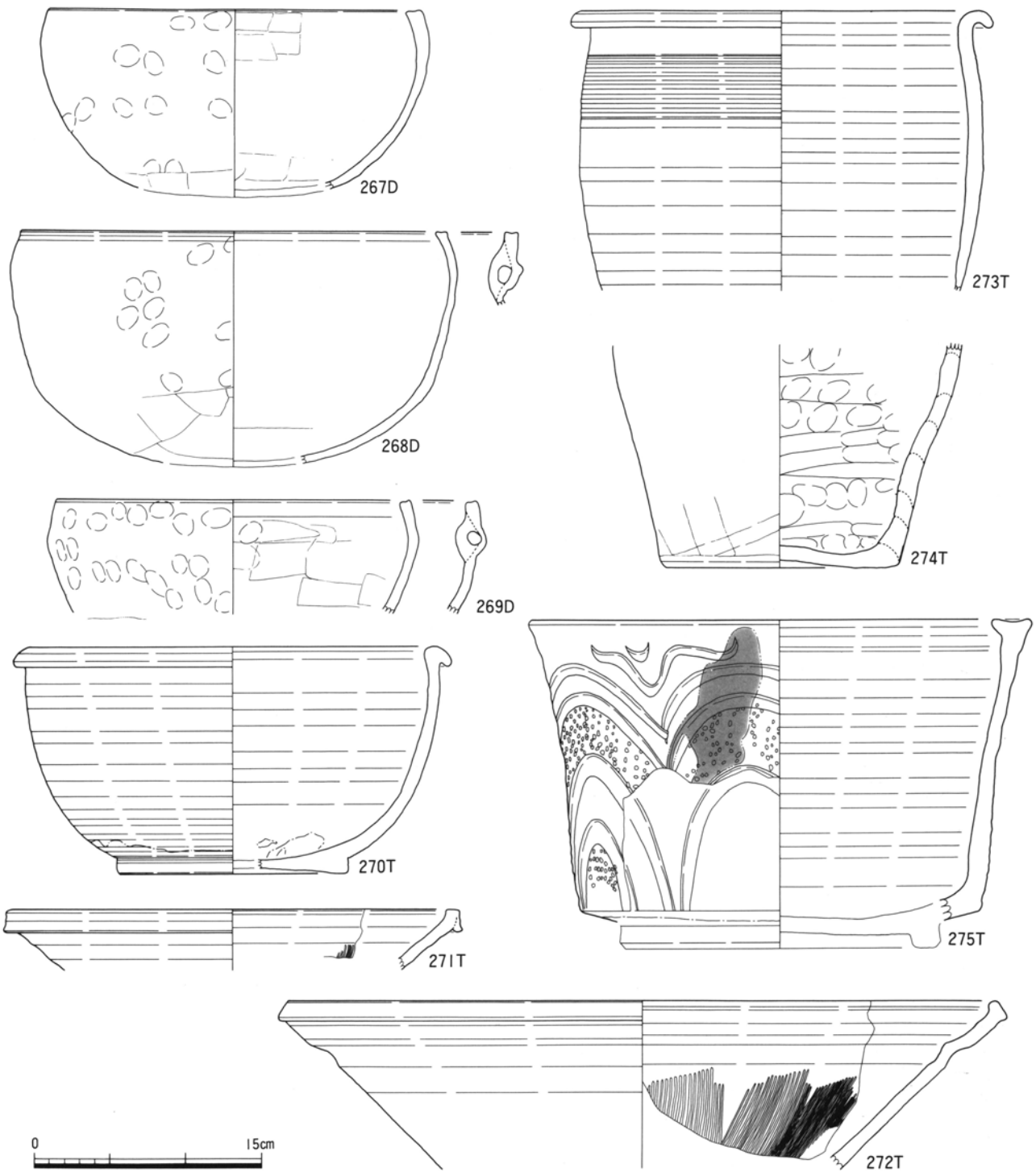
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		23	14		37		26	26		52		60	42		102
	小碗		0	35		35		1	21		22		5	32		37
	皿	76	24	1		101	59	16	2		77	129	29	14		172
	鉢			2		2			5		5		9	9		18
	その他					0					0					0
	小計	76	47	52	0	175	59	43	54	0	156	129	103	97	0	329
調理具	鍋、釜	13	7		4	24	32	7		5	44	170	17		7	194
	鉢	1	15			16	1	13			14	1	42			43
	播鉢		8			8		20			20		50			50
	瓶		6			6		5			5		1			1
	その他					0					0					0
	小計	14	36	0	4	54	33	45	0	5	83	171	110	0	7	288
貯蔵具	瓶		2			2		1			1		19		2	21
	壺		2			2		2			2		8			8
	甕A		1			1		3			3		53			53
	甕B		6			6		5			5		26			26
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	11	0	0	11	0	11	0	0	11	0	106	0	2	108
灯火具		10	14		24	7	10			17	9	14			23	
火具		1			1	4	1			5	48	4		4	56	
化粧具			3		3			1		1		1			1	
神仏具			1		1		1			1		1	4		5	
喫煙具					0					0		2			2	
調度具	蓋		26	2		28		18	3		21		51	4		55
	蓋	1	1	2		4	1	5	4		10	1	5	4		10
合計		102	136	59	4	301	104	134	62	5	305	358	396	110	13	877

第9表 SD102出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
247	93B	SD102	供膳具	椀	腰鎗椀	5.6	9.7	—	4.2	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台疊付部分に重ね焼きの剝離痕	26	E-357
248	"	"	"	"	筒椀	6.2	(9.0)	—	(5.3)	白泥+灰釉	白泥+灰釉	肥前系	白泥による刷毛目か	25	E-358
249	"	"	"	"	平椀	5.9	(10.8)	—	(4.8)	—	—	肥前	染付・梨斗文・花唐草文+割小菱・五弁花、漆継ぎ痕、18世紀前半	25	E-359
250	"	"	"	"	広東椀	6.4	(11.3)	—	5.8	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵・山水文+五弁花	25	E-360
251	"	"	"	"	皿	4.1	(27.8)	—	(12.1)	ナデ	ナデ+ケズリ	"	焼き締め		E-361
252	"	"	"	"	土師器皿B	2.5	(10.3)	—	—	指押え+ナデ	指押え	不明	色調：橙色		E-362
253	"	"	"	"	"	2.1	(12.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え	"	色調：浅黄橙色		E-363
254	"	"	"	"	"	2.1	(12.0)	—	—	指押え	指押え	"	色調：浅黄橙色		E-364
255	"	"	"	"	"	1.8	(10.6)	—	—	ナデ	"	"	色調：橙色		E-365
256	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.0	(10.5)	—	—	指押え+ケズリ	"	"	色調：にぶい橙色、内面・口縁油煙付着		E-366
257	"	"	供膳具	鉢	型打鉢	8.4	16.1	—	8.2	—	—	肥前	染付・松下人物文、1820~1860	30	E-367
258	"	"	貯蔵具	壺	蓋付壺	—	—	—	(7.0)	ナデ	鉄釉	瀬・美	高台内に墨書「宝曆五年亥五月朔日□忠純一七〇泉之」	32	E-368
259	"	"	"	瓶	德利D	—	—	(4.9)	—	"	透明釉	不明	色調：橙色		E-369
260	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.6	11.8	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	"	色調：橙色、内外面・口縁油煙付着		E-370
261	"	"	"	"	"	2.4	(10.6)	—	—	"	指押え	"	色調：浅黄色、内外面油煙付着		E-371
262	"	"	"	"	"	1.9	(11.6)	—	—	指押え+ナデ	不明	"	色調：浅黄橙色、内外面油煙付着		E-372
263	"	"	"	"	灯蒸	1.7	(7.5)	—	(3.6)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内径(4.5)cm、内区上部・底部に重ね焼きによる剝離痕		E-373
264	"	"	調度具	花生	壺型	—	—	6.9	6.0	灰釉	灰釉+鉄釉	"	底部回転糸切痕、灰釉・鉄釉掛け分け	35	E-374
265	"	"	"	餌鉢	餌鉢	2.7	(5.2)	—	5.0	灰釉	灰釉	"	底部回転糸切痕、底部重ね焼きの剝離痕か		E-375
266	"	"	"	"	"	2.5	(4.0)	—	3.1	"	"	"	底部回転糸切痕、底部に墨書		E-376

第66図 近世の遺物 (15) SD102① (1:3)



遺物 番号	調査地点	用途	器種		器高	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
			器種	器形		口径	胴径	底径	内面	外面				
267	93B SD102	調理具	鍋・釜	鍋	—	(24.4)	(25.6)	—	ヨコハケ	指押え+ケズリ	不明	色調：にぶい黄橙色，外面煤付着		E-377
268	"	"	"	"	—	(28.0)	(29.4)	—	指押え+ナア	"	"	色調：にぶい黄橙色，外面煤付着		E-378
269	"	"	"	"	—	(23.2)	(24.4)	—	"	"	"	色調：淡黄色，外面煤付着	31	E-379
270	"	"	鉢	捏ね鉢	14.8	(26.5)	—	(14.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉剥ぎ(1ヶ所残存)		E-380
271	"	"	播鉢	II類	—	(28.2)	—	—	錆釉	錆釉	"	"		E-381
272	"	"	"	VIII類	—	(46.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	"	楀目数18本・1cmに4本，内面使用による摩滅痕		E-382
273	"	貯蔵具	甕B	甕	—	(26.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	"	"	32	E-383
274	"	"	壺	土師壺	—	—	—	14.3	指押え+ナア	ケズリか	不明	色調：浅黄橙色		E-384
275	"	調度具	水甕	水甕	—	(28.4)	—	—	灰釉	灰釉	"	銅緑釉流し掛け		E-385

第67図 近世の遺物 (16) SD102② (1:4)

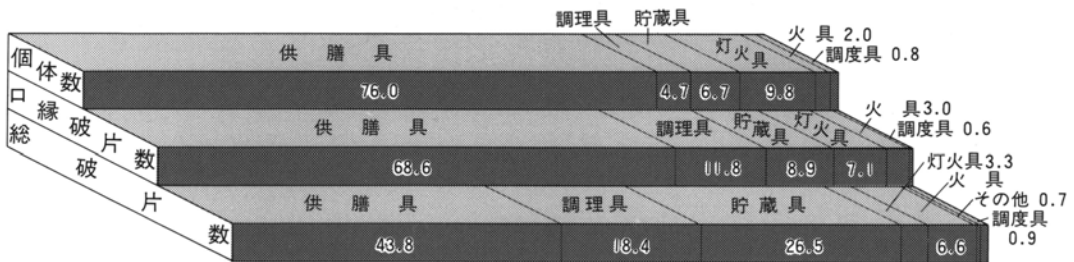


SE106 遺構の時期は、18世紀前葉～中葉と考えられる。

92年度調査区の北端で検出された井戸である。出土した遺物は総破片数で462点、接合前口縁破片数が174点、個体数は23.08個体である。出土量は少ないが、近世前期の遺構として注目される。近世陶磁器類以外にも大量の木製品が出土しており、興味深い遺構と思われる。

この内、供膳具が16.08個体・76.0%とその大半を占め、調理具が1.00個体・4.7%、貯蔵具が1.42個体・6.7%、灯火具が2.08個体・9.8%、火具が0.42個体・2.0%、調度具が0.17個体・0.8%となっている。化粧具・神仏具はともに破片のみが出土しており、喫煙具は出土していない。供膳具において、椀類対皿類の比率が2.02：1と、椀類が皿類の2倍以上出土している。これは、名古屋城三の丸遺跡において指摘されていることであるが、18世紀代に椀類の使用量が増大し皿類を凌ぐことが確認されており、これに符合するものであろう。ただし、鉢類の出土量は極端に落ち込んでいる。また、蓋類は、総破片数で5点、接合前口縁破片数も5点、個体数では1.92個体とやはりその出土量は極めて少ない。

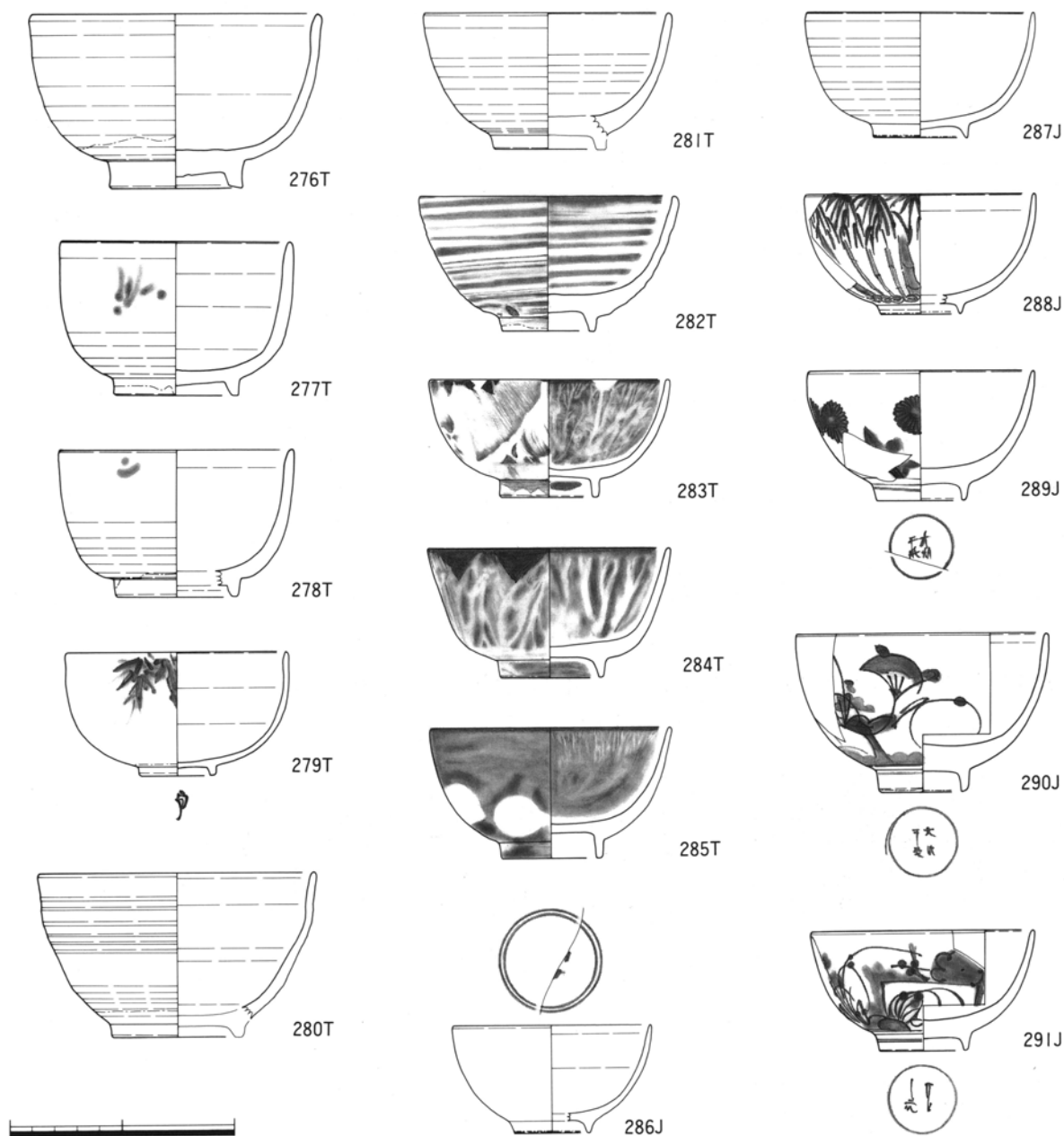
材質面においても、土師質製品が22.1%と全体の平均値に近いのに対して、陶磁器類では陶器製品が44.9%とやや多くなり、逆に磁器製品が31.1%とやや減少していることがわかる。しかし、まだまだ磁器製品の占める割合が高く、名古屋城三の丸遺跡に代表される尾張地区よりも多くの肥前磁器が流入していたことが窺われるのではないだろうか。



第68図 SE106出土陶磁器類の用途組成

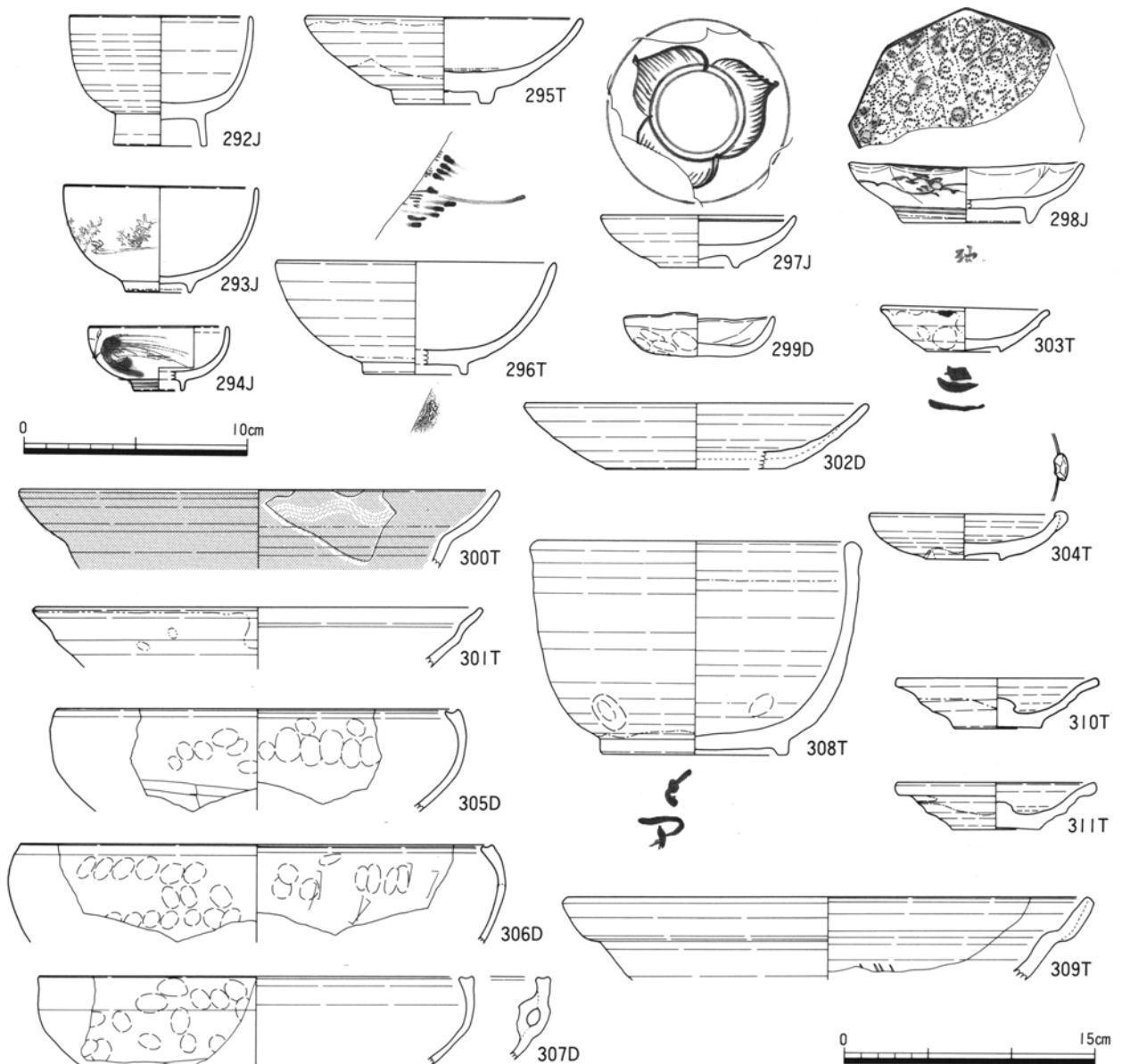
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数				計		
		土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他			
供膳具	椀		62	48			35	38			45	73		118		
	小椀		0	17			1	7			4	14		18		
	皿	38	15	10		15	9	8		23	15	16		54		
	鉢		3				3				10			10		
	その他													0		
	小計	38	80	75	0	193	15	48	53	0	116	23	74	103	0	200
調理具	鍋、釜	5				5	10				10	48		48		
	鉢		2				3				4			4		
	播鉢		3				5				9			9		
	瓶		2				2				23			23		
	その他													0		
	小計	5	7	0	0	12	10	10	0	0	20	48	36	0	0	84
貯蔵具	瓶		0				1				14	1		15		
	壺		10				6				24			24		
	甕A		2				4				62			62		
	甕B		1				3				19			19		
	鉢			4				1				1		1		
	その他													0		
	小計		13	4	0	17	0	14	1	0	15	0	119	2	0	121
灯火具		13	12			25	8	4			12	11	4		15	
火具					5	5			5	5	10	1		19	30	
化粧具					0	0			0	0		1		1		
神仏具					0	0			0	0	2			2		
喫煙具					0	0			0	0				0		
調度具		2			2	2		1		1	4			4		
蓋		18	5		23	4	1		5	4	4	1		5		
合計		56	132	84	5	277	33	81	55	5	174	92	244	107	19	462

第10表 SE 106出土陶磁器類集計表



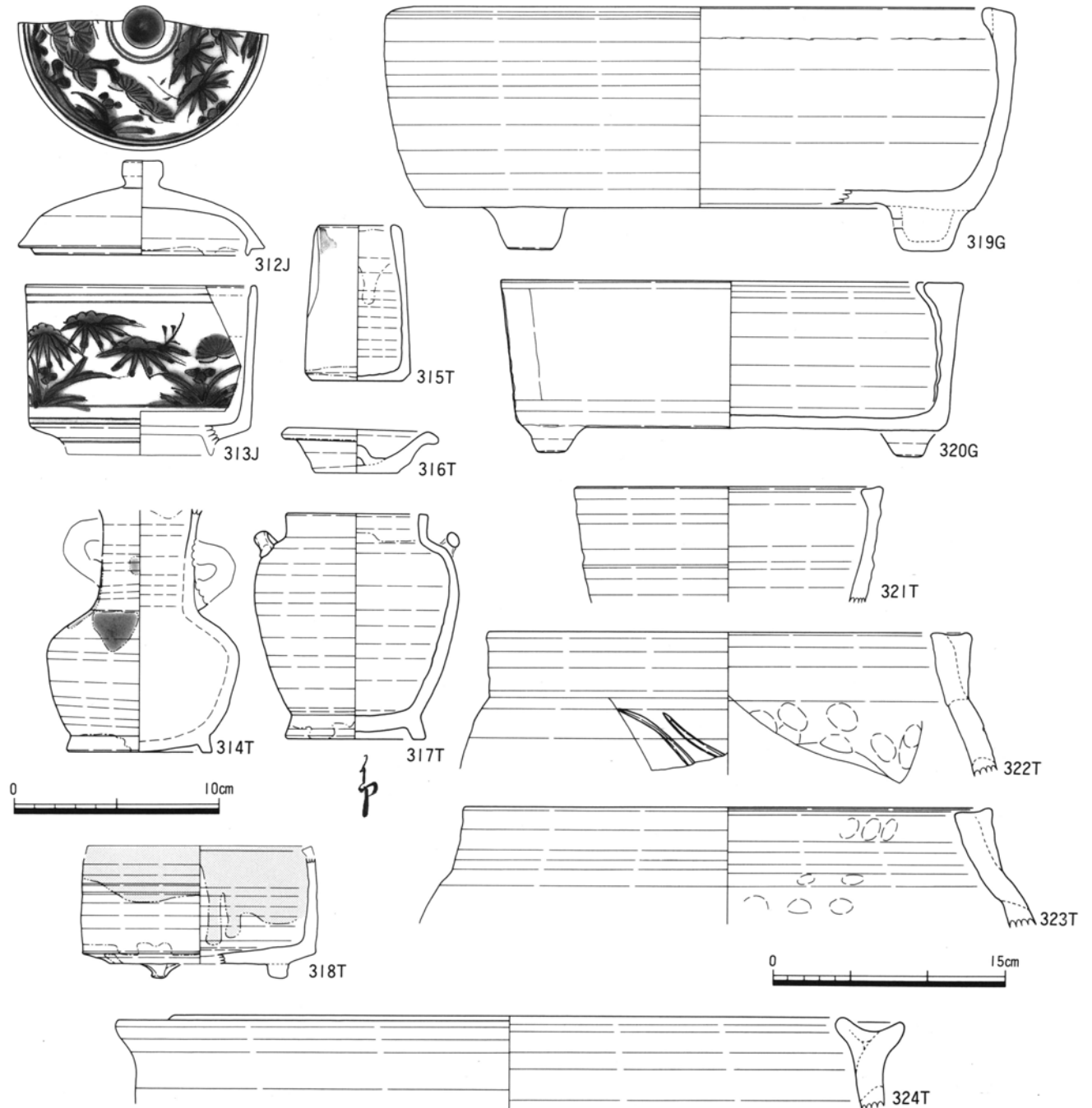
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
276	92A	SE106	供膳具	椀	丸椀	7.6	(12.5)	—	(5.7)	灰釉	灰釉	瀬・美		23	E-386
277	"	"	"	"	"	6.7	(10.0)	—	(5.4)	"	"	"	呉須絵・山水文か	23	E-387
278	"	"	"	"	"	6.5	(10.2)	—	(5.2)	"	"	"	呉須絵	23	E-388
279	"	"	"	"	"	5.4	(9.6)	—	3.2	"	"	"	鉄絵+呉須絵・笹文, 高台内墨書	23	E-389
280	"	"	"	"	その他	—	(12.1)	—	—	"	"	肥前			E-390
281	"	"	"	"	丸椀	—	(10.7)	—	—	白泥+透明釉	白泥+透明釉	肥前系	白泥による刷毛目		E-391
282	"	"	"	"	"	5.9	11.2	—	4.1	透明釉	透明釉	肥前	白泥による刷毛目, 高台内に砂融着, 17世紀末-18世紀初	23	E-392
283	"	"	"	"	"	5.2	(10.4)	—	(4.2)	白泥+透明釉	白泥+透明釉	"	白泥による打ち刷毛目, 高台に砂融着, 18世紀前半	23	E-393
284	"	"	"	"	"	5.7	10.5	—	4.4	"	"	"	白泥による打ち刷毛目, 高台に砂融着, 18世紀前半	23	E-394
285	"	"	"	"	"	5.7	10.5	—	4.4	"	"	"	白泥による打ち刷毛目・蛍手, 高台に砂融着, 1690	23	E-395
286	"	"	"	"	"	4.8	(8.6)	—	(3.2)	—	—	"	青磁染付・五弁花, 口鏽, 18世紀前~中	25	E-396
287	"	"	"	"	"	5.5	(10.1)	—	4.1	—	—	"	白磁, 18世紀前~中	24	E-397
288	"	"	"	"	"	5.3	(10.0)	—	(3.5)	—	—	"	染付・笹竹文, 18世紀前~中		E-398
289	"	"	"	"	"	5.7	(9.8)	—	3.9	—	—	"	染付(コンニャク印)・紅葉文・沢瀉文+「大明年 製」, 18世紀前~中	24	E-399
290	"	"	"	"	"	6.9	(10.9)	—	3.7	—	—	"	染付・雲の輪に梅樹文+「大明年製」, 高台砂融着, 18世紀前~中		E-400
291	"	"	"	"	"	5.3	(9.7)	—	3.8	—	—	"	染付・岩に梅樹文+「大明年製」, 高台砂融着, 18世紀前~中	24	E-401

第69図 近世の遺物 (17) SE106① (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号		
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面	
292	92A	SE106	供膳具	小碗	丸碗	5.7	(8.1)	—	(4.1)	—	—	肥前	白磁碗, 18世紀前~中	26	E-402	
293	"	"	"	"	"	4.7	8.4	—	2.8	—	—	"	色絵(赤・金)・紅葉散らし文+口化粧, 18世紀前~中	26	E-403	
294	"	"	"	"	"	2.9	(6.1)	—	(2.1)	—	—	"	染付・海老文, 見込み砂融着, 18世紀前~中		E-404	
295	"	"	"	"	皿	丸皿	3.8	12.1	—	4.2	灰釉+銅緑釉	灰釉	"	見込み蛇ノ目釉剥ぎ, 18世紀前~中	27	E-405
296	"	"	"	"	"	5.0	(12.2)	—	(4.5)	灰釉	"	"	呉須絵・樓閣山水文, 高台内に押印「清水」, 17世紀末	27	E-406	
297	"	"	"	"	"	2.3	(8.5)	—	3.5	—	—	"	染付・連弁文, 高台砂融着, 1630~1640	28	E-407	
298	"	"	"	"	型打皿	2.6	(10.2)	—	(5.6)	—	—	"	染付・型紙摺・折枝文+口銹, 18世紀前半	29	E-408	
299	"	"	"	"	土師器皿B	1.8	6.6	—	—	ナデ	指押え	不明	色調：にぶい黄橙色		E-409	
300	"	"	"	"	鉢	端反鉢	—	(21.1)	—	白泥+透明釉	透明釉	肥前	白泥による刷毛目, 18世紀前~中		E-410	
301	"	"	"	"	折縁鉢	—	(19.6)	—	—	灰釉+銅緑釉	灰釉	"	18世紀前~中		E-411	
302	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(15.0)	—	(8.1)	ナデ	ナデ	不明	色調：橙色, 内外面油煙付着		E-412	
303	"	"	"	"	"	1.9	7.4	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁部油煙付着, 碁筒底, 底部墨書	33	E-413	
304	"	"	"	"	"	2.0	(8.2)	—	(3.3)	"	"	"	碁筒底		E-414	
305	"	"	調理具	鍋, 釜	焙烙	—	(23.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	色調：にぶい橙色, 外面煤付着		E-415	
306	"	"	"	"	"	—	(27.8)	—	—	"	"	"	色調：にぶい橙色, 内外面煤付着		E-416	
307	"	"	"	"	"	—	(25.6)	—	—	ナデ	"	"	色調：灰黄色, 内外面煤付着		E-417	
308	"	"	"	鉢	片口	12.6	(18.6)	—	10.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み・高台にトチン痕, 高台内墨書		E-418	
309	"	"	"	播鉢	V1類	—	(30.9)	—	—	"	"	"			E-419	
310	"	"	その他	蓋	蓋A	3.0	(11.9)	—	—	"	"	"	回転糸切痕, 内面煤付着		E-420	
311	"	"	"	"	"	2.8	(11.8)	—	—	"	"	"	つまみ径1.6cm, 底部回転糸切痕, 内面煤付着		E-421	

第70図 近世の遺物 (18) SE106② (304~311は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
312	92A	SE106	その他	蓋	蓋D	4.5	(10.2)	—	—	—	—	肥前	染付・雪持笹文, 肩稜推定11.8cm, 18世紀前半~中	36	E-422
313	"	"	貯蔵具	鉢	蓋物A	—	(11.0)	—	—	—	—	"	染付・雪持笹文, 18世紀前半~中	32	E-423
314	"	"	調度具	花生	壺型	—	—	9.2	(6.9)	ナデ	鉄釉	瀬・美	緑釉筆散らし, 18世紀初	35	E-424
315	"	"	"	その他	筒型	7.5	(3.4)	—	4.4	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	"	上絵付(緑), 尺立てか	35	E-425
316	"	"	その他	蓋	蓋A	2.2	7.5	—	4.1	ナデ	鉄釉	"	底部回転糸切痕	32	E-426
317	"	"	貯蔵具	壺	有蓋壺	10.8	(6.8)	(9.8)	6.6	"	"	"	墨書, 高台に剝離痕	32	E-427
318	"	"	神仏具	香炉	筒型	—	—	(15.2)	(11.5)	鉄釉	"	"	灰釉流し掛け, 底部墨書		E-428
319	"	"	火具	鉢	火桶	15.6	(37.0)	—	(35.4)	—	—	不明	内外面に煤付着, 3足, 足穿孔(径0.6cm)		E-429
320	"	"	"	"	"	11.1	24.8	29.8	27.0	—	—	"	内外面に煤付着, 4足		E-430
321	"	"	貯蔵具	甕B	半胴A	—	(19.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-431
322	"	"	"	甕A	I類	—	(26.6)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	常滑	焼き締め, 色調: 赤褐色		E-432
323	"	"	"	"	"	—	(33.7)	—	—	指押え+ナデ	"	"	焼き締め, 外面自然釉		E-433
324	"	"	"	"	II類	—	(42.8)	—	—	ナデ	ナデ	"	赤物, 色調: にぶい橙色		E-434

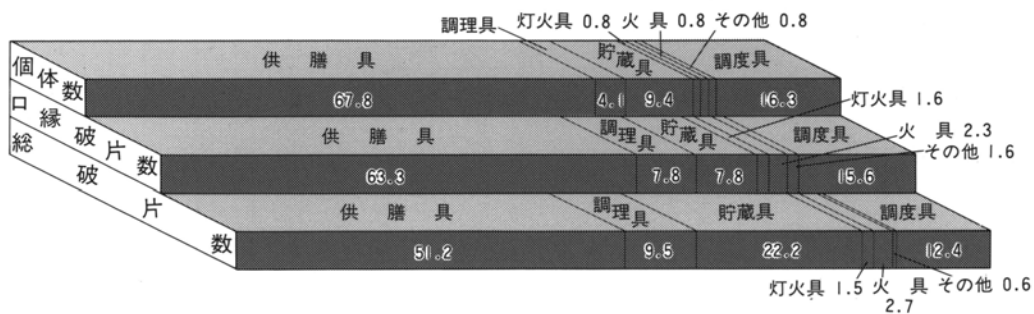
第71図 近世の遺物 (19) SE106③ (318~324は1:4, 他は1:3)

SE104 本遺構の時期は、18世紀中葉～後葉と考えられる。

93年度調査区の中央で検出された井戸である。出土した遺物は総破片数で345点、接合前口縁破片数が134点、個体数は25.75個体である。出土量は少ないが、近世前期の遺構として注目される。SE106と同様に、近世陶磁器類以外にも木製品が出土しており、重要な遺構と思われる。

この内、供膳具が13.83個体・67.8%を占めており、調理具が0.83個体・4.1%、貯蔵具が1.92個体・9.4%、灯火具・火具・神仏具がそれぞれ0.17個体・0.8%となっており、調度具が3.33個体・16.3%とかなり高くなっている。化粧具・喫煙具は出土していない。供膳具において、碗類：皿類＝1：2.09と、ここでは皿類の出土量の多さが目立っている。しかし、土師器皿を除いてみると、1.15：1とやや碗類の出土量が増えてくる。ここで調度具が高い比率を占めるのは、植木鉢がまとめて出土していることが影響しているものと考えられる。また、蓋類は、総破片数で7点、接合前口縁破片数が6点、個体数では3.67個体出土している。

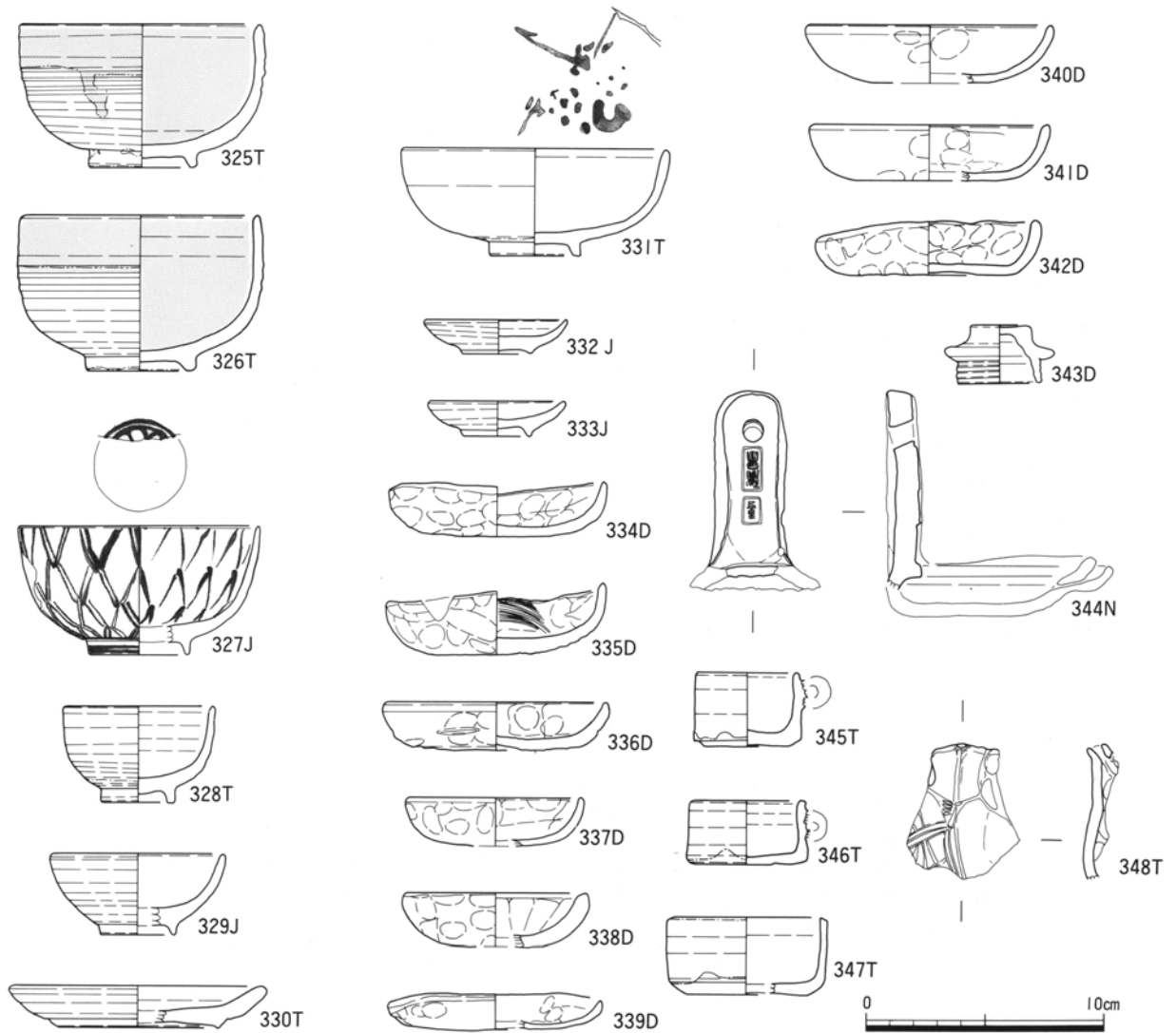
材質面においても、土師質製品が27.4%と全体の平均値に近いのに対して、陶磁器類では陶器製品が63.7%と多くなり、逆に磁器製品が9.0%と極端に減少していることがわかる。これは、同時期の同じ井戸である SE106とも様相を異にしている。これが、居住者の階級や身分によるものなのか、廃棄の仕方が異なっているのかは、明らかにはできない。



第72図 SE104出土陶磁器類の用途組成

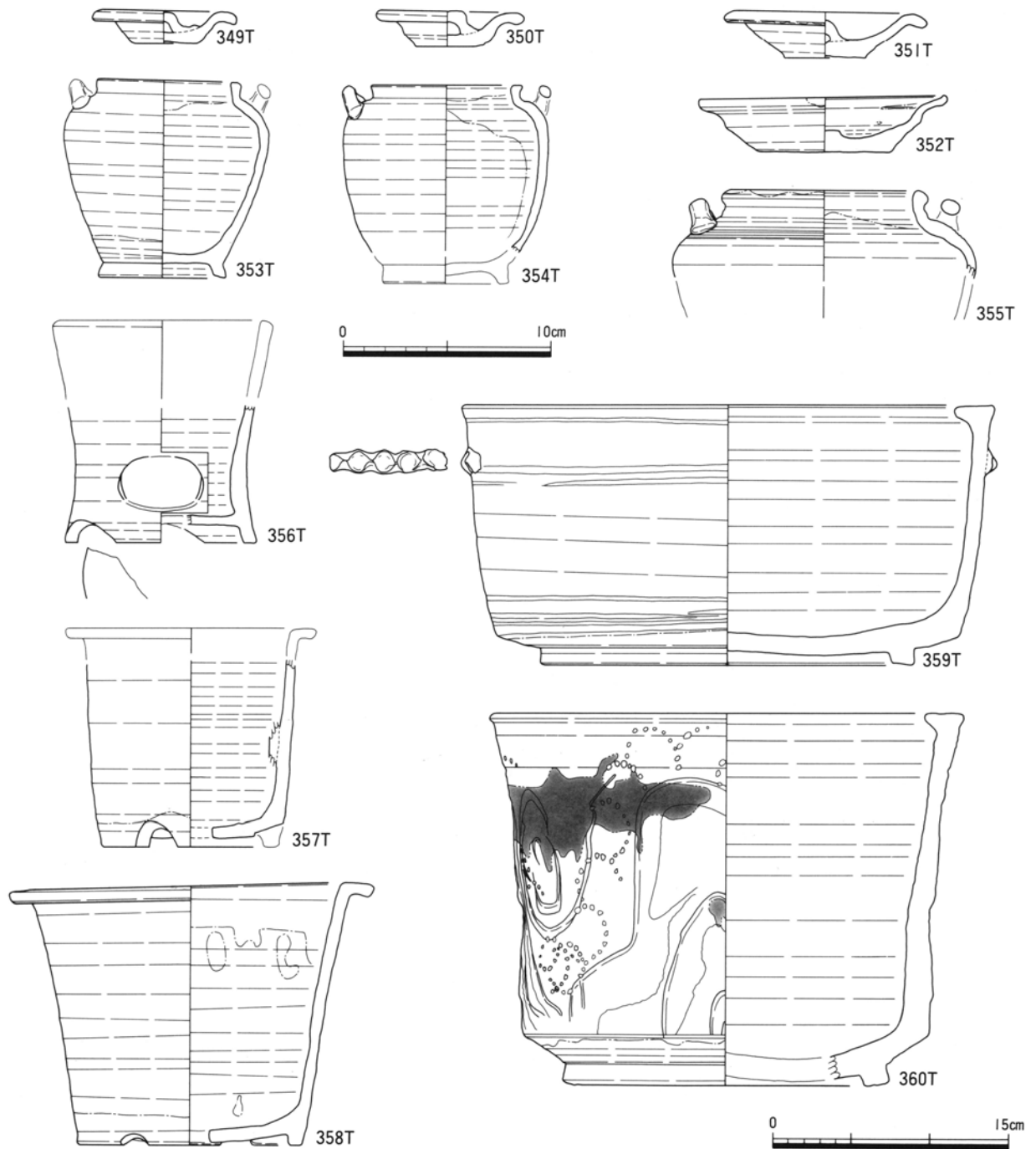
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		23	13		36		15	22		37		36	53		89
	小碗		12	5		17		2	4		6			11		11
	皿	65	44	2		111	23	8	4		35	31	19	9		59
	鉢		2			2		3			3		13	1		14
	その他					0					0					0
	小計	65	81	20	0	166	23	28	30	0	81	31	68	74	0	173
調理具	鍋、釜	1	2			3	1	2			3	3	8			11
	鉢		3			3		2			2		6			6
	播鉢		4			4		5			5		13			13
	瓶					0					0		2			2
	その他					0					0					0
	小計	1	9	0	0	10	1	9	0	0	10	3	29	0	0	32
貯蔵具	瓶		4			4		3			3		17	1		18
	壺		19			19		7			7	4	14			18
	甕A					0					0		27			27
	甕B					0					0		12			12
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	23	0	0	23	0	10	0	0	10	4	70	1	0	75
灯火具		1	1			2	1	1			2	2	2		1	5
火具		0	2			2	1	1		1	3	3	2		4	9
化粧具						0					0					0
神仏具				2		2			2		2		2			2
喫煙具						0					0					0
調度具			40			40		20			20		42			42
蓋		12	52			64	1	5			6	1	6			7
合計		79	208	22	0	309	27	74	32	1	134	44	219	77	5	345

第11表 SE 104出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
325	93B	SE104	供膳具	椀	丸椀	5.0	9.8	—	4.3	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台に使用による摩滅痕, トチン痕	26	E-435
326	"	"	"	"	"	6.5	(9.7)	—	4.4	"	"	"	高台にトチン痕, 使用による摩滅痕		E-436
327	"	"	"	"	"	5.4	(10.0)	—	(4.0)	—	—	肥前	染付・一重網目文・菊花文+二重網目文, 高台に砂融着18世紀前-中		E-437
328	"	"	"	小椀	"	4.0	6.1	—	3.0	灰釉	灰釉	瀬・美		26	E-438
329	"	"	"	"	"	3.4	(7.1)	—	(3.1)	青磁	青磁	肥前系	青磁, 高台に砂融着		E-439
330	"	"	"	皿	丸皿	1.7	(10.4)	—	(6.6)	長石釉	長石釉	瀬・美	高台内にトチン痕, 17世紀後半		E-440
331	"	"	"	"	"	4.5	(10.8)	—	3.8	灰釉	灰釉	"	呉須絵+鉄絵・梅樹文	27	E-441
332	"	"	"	"	"	1.4	5.9	—	2.9	—	—	肥前	白磁, 高台内に砂融着, 18世紀代	28	E-442
333	"	"	"	"	"	1.5	5.6	—	2.8	—	—	"	白磁, 高台内に砂融着, 18世紀代	28	E-443
334	"	"	"	"	土師器皿 B	2.1	8.8	—	—	指押え+ナデ	指押え	不明	色調: 浅黄橙色	34	E-444
335	"	"	"	"	"	2.6	8.9	—	—	"	"	"	色調: 淡橙色	34	E-445
336	"	"	"	"	"	(2.0)	(9.1)	—	—	"	"	"	色調: 浅黄橙色		E-446
337	"	"	"	"	"	(2.0)	(7.1)	—	—	"	"	"	色調: にぶい橙色		E-447
338	"	"	"	"	"	(2.2)	(7.5)	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	色調: にぶい黄橙色		E-448
339	"	"	"	"	"	(1.2)	(8.8)	—	—	指押え+ナデ	"	"	色調: 橙色		E-449
340	"	"	"	"	"	(2.4)	(10.0)	—	—	"	"	"	色調: 浅黄橙色		E-450
341	"	"	"	"	"	(2.3)	(9.8)	—	—	"	"	"	色調: にぶい黄橙色		E-451
342	"	"	"	"	"	2.0	8.9	—	—	"	"	"	色調: にぶい黄橙色		E-452
343	"	"	その他	蓋	蓋 D	2.4	3.4	—	—	ナデ	ナデ	"	色調: 浅黄橙色, 回転系切痕	36	E-453
344	"	"	灯火具	乗燭	その他	—	—	—	—	透明釉	透明釉	"	脚部基部に押印		E-454
345	"	"	調度具	餌鉢	餌鉢	6.0	4.1	—	3.6	灰釉	灰釉	瀬・美	底部回転系切痕		E-455
346	"	"	"	"	"	2.6	(4.6)	—	(4.1)	"	"	"	底部回転系切痕をナデ消している		E-456
347	"	"	"	"	"	3.2	(6.1)	—	(5.0)	"	"	"	底部煤付着		E-457
348	"	"	"	水指	水滴	—	—	—	—	指押え	"	関西系	水滴・神仏像(大黒天または布袋), 18世紀-19世紀代	35	E-458

第73図 近世の遺物 (20) SE104① (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
349	93B	SE104	その他	蓋	蓋A	1.6	6.8	—	—	ナテ	灰釉	瀬・美	底部回転系切痕	35	E-459
350	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	6.5	—	—	〃	〃	〃	底部回転系切痕	35	E-460
351	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	11.7	—	—	ナテ	〃	〃	つまみ径1.3cm, 底部回転系切痕, 重ね焼きの剝離痕	35	E-461
352	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	9.5	—	—	灰釉+ナテ	灰釉	〃	底部回転系切痕	35	E-462
353	〃	〃	貯蔵具	壺	蓋付壺	9.3	6.6	9.7	5.9	ナテ	〃	〃		32	E-463
354	〃	〃	〃	〃	〃	—	(7.0)	(9.7)	—	〃	〃	〃			E-464
355	〃	〃	〃	〃	〃	—	(8.8)	(14.4)	—	〃	〃	〃	口縁部に重ね焼きの剝離痕		E-465
356	〃	〃	火具	鉢	こん炉A	—	—	—	(12.0)	〃	ナテ	不明	底部墨書「比嘉」か		E-466
357	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	11.1	〃	灰釉	瀬・美	底部穿孔径2.6cm, 底部切込み3ヶ所, 内面に重ね焼きの剝離痕		E-467
358	〃	〃	〃	〃	〃	16.4	19.8	—	14.1	灰釉	〃	〃	底部穿孔径3.0cm, 底部切込み2ヶ所	35	E-468
359	〃	〃	〃	水甕	水甕	16.3	(33.3)	—	23.3	〃	〃	〃	貼付文, 見込みにトチン痕	35	E-469
360	〃	〃	〃	〃	〃	23.4	(25.3)	—	(18.4)	〃	〃	〃	銅緑釉流し掛け, 見込みにトチン痕	35	E-470

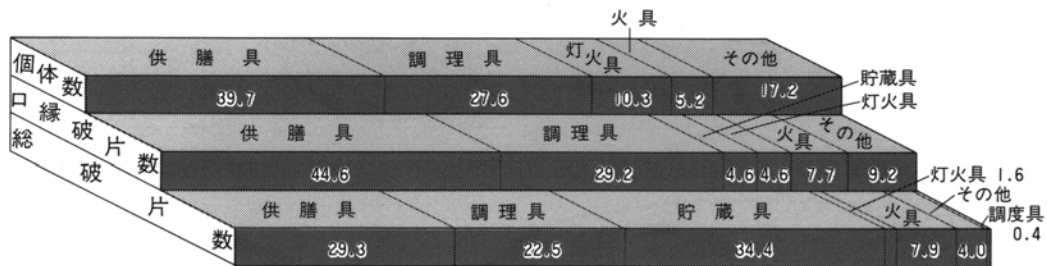
第74図 近世の遺物 (21) SE104② (356~360は1:4, 他は1:3)

SE107 本遺構の時期は、19世紀前葉～中葉と考えられる。

92年度調査区の東側で検出された井戸である。出土した遺物は総破片数で260点、接合前口縁破片数が70点、個体数は6.42個体である。出土量は少ないが、近世後期の遺構として注目される。

この内、供膳具が1.92個体・39.7%と減少しているが、調理具が1.33個体・27.6%、灯火具が0.50個体・10.3%、火具が0.25個体・5.2%、神仏具が0.83個体・17.2%と平均値に比べてそれぞれかなり高くなっている。貯蔵具は口縁部の破片が、化粧具・調度具は口縁部以外の破片が出土しているが、喫煙具については出土していない。また、第1節でも述べたが、井戸枠として常滑の赤物が4段積み重ねられて利用されており、口縁部の形態から年代を推定している。今回の近世陶磁器類の分類や集計には加えていないが、カウントした数字を紹介しておく、総破片数は732点、接合前口縁破片数は58点、個体数は2.67個体となっている。さらに、蓋類は、総破片数で7点、接合前口縁破片数が5点、個体数では1.58個体とやはり出土量は少ない。

材質面では、土師質製品が24.4%、陶磁器類では陶器製品が48.3%、磁器製品が25.9%となっている。19世紀代になれば、土師質製品の比率が減少し、磁器製品の比率が増大すると思われるが、本遺跡においては言い切れないところがありそうである。

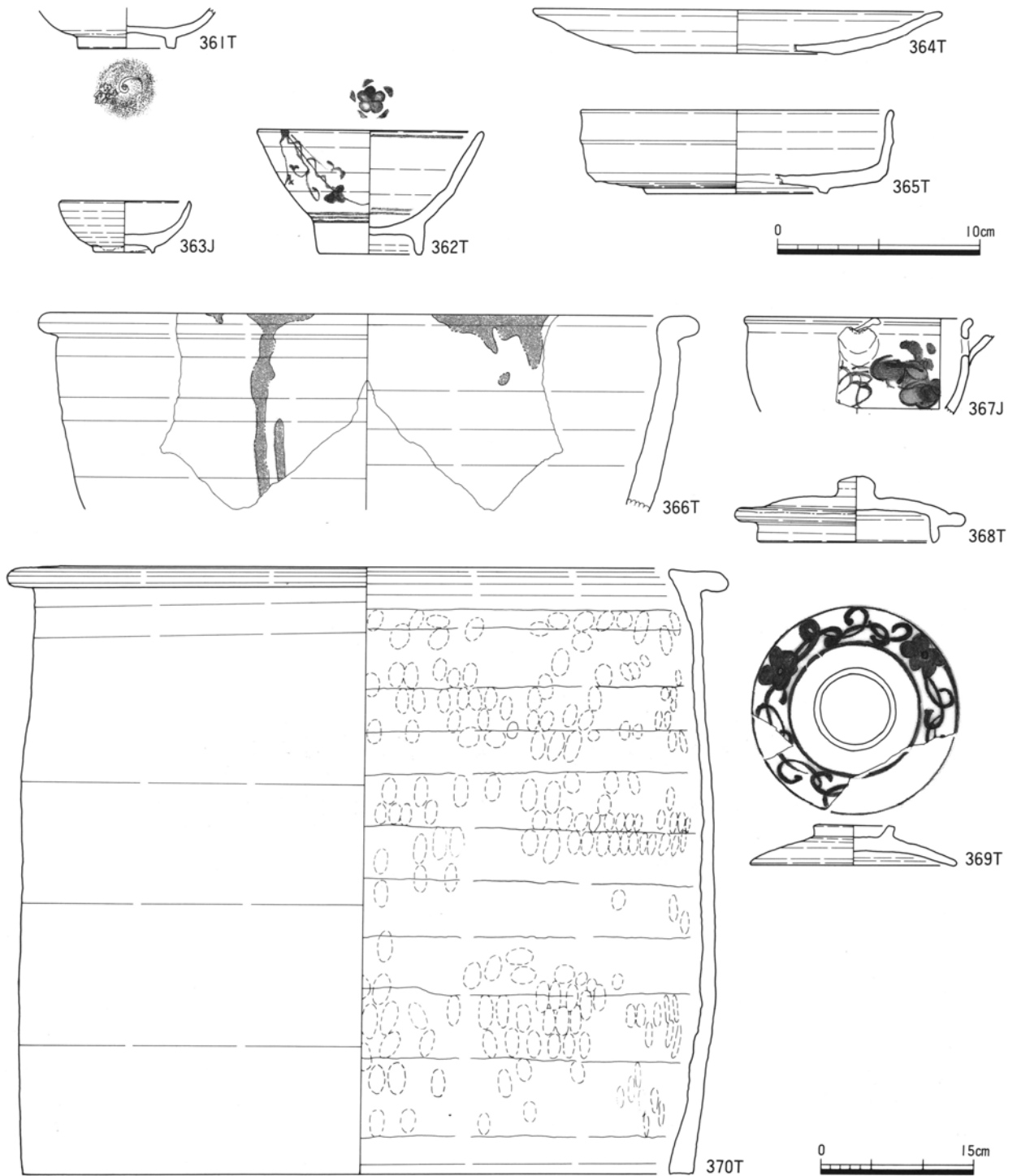


第75図 SE107出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		6	3		9		13	3		16		27	14		41
	小椀			4		4			1		1			2		2
	皿	9	1			10	7	3			10	15	7	2	1	25
	鉢					0		2			2		6			6
	その他					0					0					0
	小計	9	7	7	0	23	7	18	4	0	29	15	40	18	1	74
調理具	鍋、釜	0			1	1	2			1	3	7			4	11
	鉢		7			7		8			8		14			14
	搗鉢		3			3		5			5		26			26
	瓶		3	2		5		2	1		3		5	1		6
	その他					0					0					0
	小計	0	13	2	1	16	2	15	1	1	19	7	45	1	4	57
貯蔵具	瓶					0					0		15	1		16
	壺					0					0					0
	甕A		0			0		3			3		63			63
	甕B					0					0		8			8
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	86	1	0	87
灯火具		5	1			6	2	1			3	2	2			4
火具			3			3		5			5	2	18			20
化粧具						0					0			1		1
神仏具			4	6		10		3	3		6		3	6		9
喫煙具						0					0					0
調度具						0					0		1			1
蓋			19			19		5			5		7			7
合計		14	47	15	1	77	11	50	8	1	70	26	202	27	5	260

第12表 SE 107出土陶磁器類集計表





遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
361	92A	SE107	供膳具	碗	丸碗	—	—	—	4.7	灰釉	灰釉	肥前	高台内押印「中村金」, 18世紀前~中	E-471
362	"	"	"	"	広東碗	6.0	(10.9)	—	4.9	"	"	瀬・美	呉須絵・花唐草文+五弁花, 高台剝離痕	25 E-472
363	"	"	"	小碗	丸碗	2.5	(6.2)	—	2.8	—	—	肥前	白磁, 18世紀代	E-473
364	"	"	"	皿	丸皿	2.1	(19.8)	—	(9.8)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-474
365	"	"	"	鉢	その他	4.1	(15.2)	—	(8.9)	"	"	"		25 E-475
366	"	"	調理具	鉢	捏ね鉢	—	(31.2)	—	—	灰釉	灰釉	"	鉄釉流し掛け	E-476
367	"	"	"	"	片口	—	(10.6)	(10.8)	—	—	—	肥前	染付・草文か	31 E-477
368	"	"	その他	蓋	蓋D	3.2	8.6	—	—	ナデ	鉄釉	瀬・美	つまみ径1.8cm	36 E-478
369	"	"	"	"	蓋E	2.0	9.9	—	—	長石釉	長石釉	"	鉄絵・花唐草文・口銹, つまみ径3.9cm	36 E-479
370	"	"	"	その他	その他	59.0	59.4	68.2	65.0	摺漉しナデ	ナデ	常滑	赤物, 井戸枠	E-480

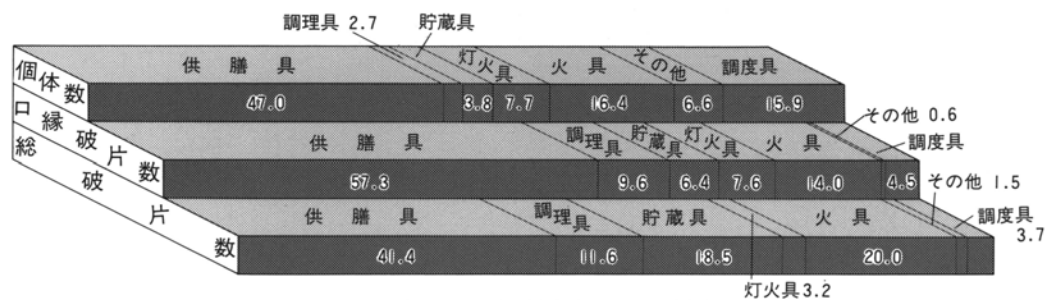
第76図 近世の遺物 (22) SE107 (370は1 : 6, 他は1 : 3)

SK180 本遺構の時期は、19世紀中葉と考えられる。

92年度調査区の南部で検出された土坑である。出土した遺物は総破片数で467点、接合前口縁破片数が160点、個体数は15.50個体である。出土量は少ないが、近世後期の遺構として注目される。本遺跡における、数少ない廃棄土坑の1つである。

この内、供膳具が7.17個体・47.0%、調理具が0.42個体・2.7%、貯蔵具が0.58個体・3.8%、灯火具が1.17個体・7.7%、火具が2.50個体・16.4%、神仏具が1.00個体・6.6%、調度具が2.42個体・15.9%となっている。化粧具は破片のみ出土しているが、喫煙具は出土していない。供膳具等の日常生活に関連する遺物群が減少し、それ以外の副次的な生活に関連する遺物群が増加しているのは、名古屋城三の丸遺跡において指摘されている19世紀代の器種組成の特徴を表しているものと思われる。とくに、火具・神仏具・調度具の増加が著しく、平均値よりもそれぞれ5.1倍・1.9倍・3.2倍となっている。また、蓋類は、総破片数で3点、接合前口縁破片数が3点、個体数では0.25個体と出土量が極端に少なくなっている。

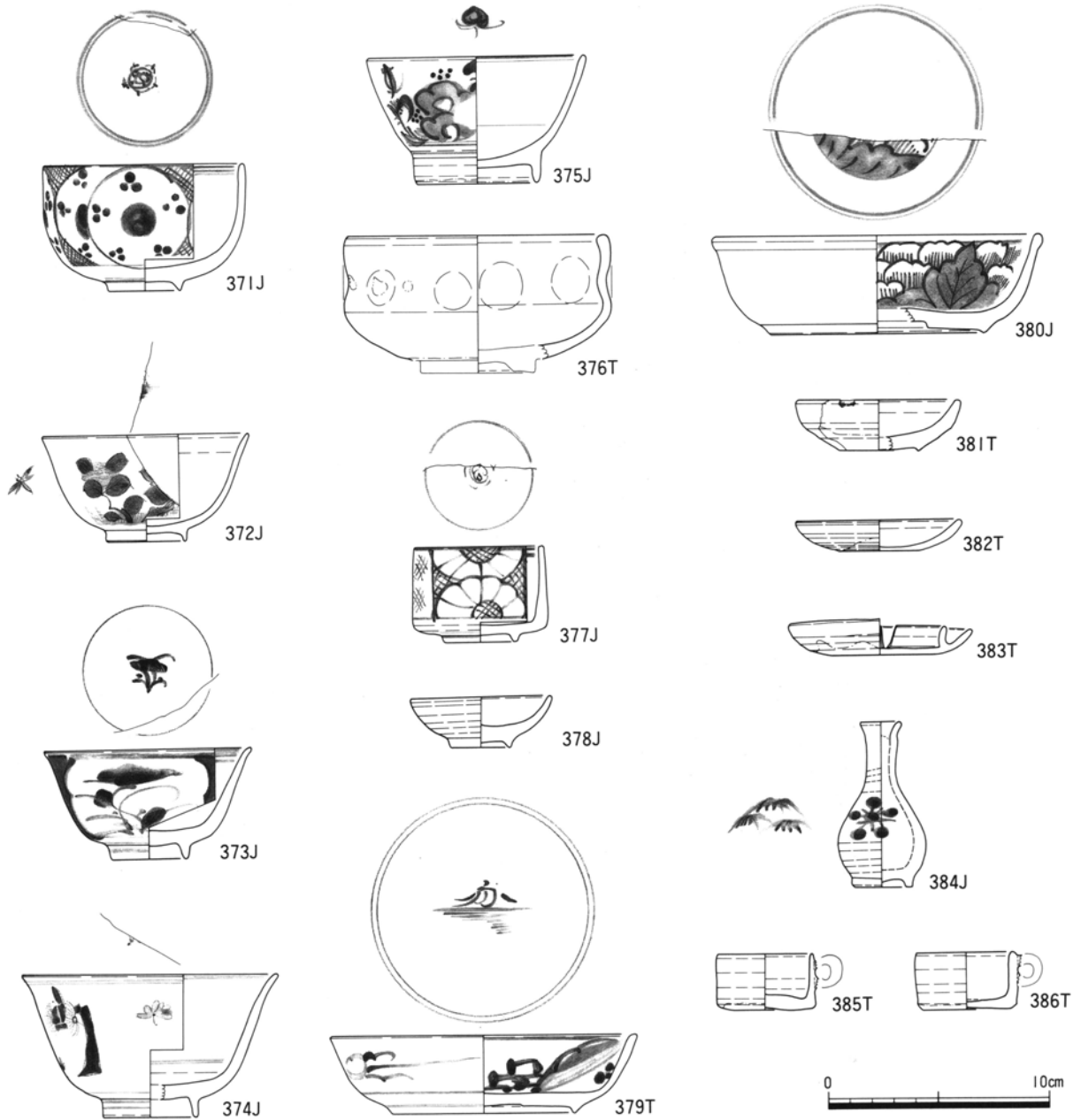
材質面では、土師質製品が個体数が0.00個体であるが、破片数から10%以下であることが読み取れる。陶磁器類では陶器製品が59.0%、磁器製品が33.9%であるが、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が7.1%と平均値の7.4倍に急増していることがこの遺構の特徴でもある。



第77図 SK180出土陶磁器類の用途組成

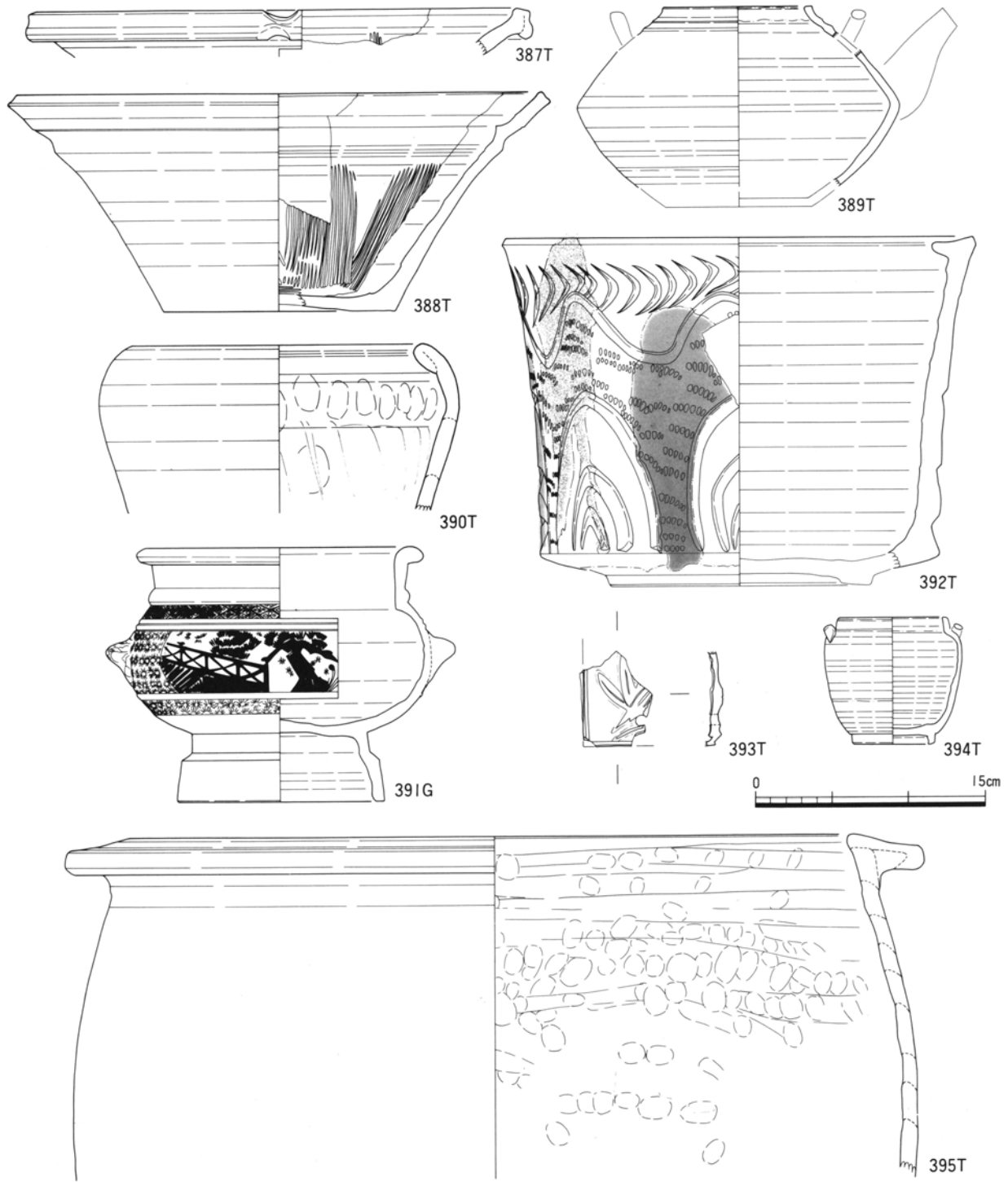
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		8	43		51		11	35		46		26	72		98
	小碗		2	14		16		9	12		21		13	21		34
	皿	0	13			13	2	8			10	21	22			43
	鉢		1	5		6		5	8		13		8	9		17
	その他					0					0					0
	小計	0	24	62	0	86	2	33	55	0	90	21	69	102	0	192
調理具	鍋、釜	0	1			1	8	2			10	26	4			30
	鉢					0		1			1		2		2	
	播鉢		4			4		4			4		16		16	
	瓶					0					0		6		6	
	その他					0					0		0		0	
	小計	0	5	0	0	5	8	7	0	0	15	26	28	0	0	54
貯蔵具	瓶					0					0		10		10	
	壺					0					0		0		0	
	甕A		6			6		9			9		58		58	
	甕B		1			1		1			1		17		17	
	鉢					0					0		1		1	
	その他					0					0		0		0	
	小計	0	7	0	0	7	0	10	0	0	10	0	86	0	0	86
灯火具		0	14			14	2	10			12	3	12		15	
火具			17		13	30		14		8	22	1	46		46	93
化粧具					0					0		1			1	
神仏具			12			12		1			1		6		6	
喫煙具					0					0					0	
調度具			29			29		7			7		17		17	
蓋			3			3		3			3		3		3	
合計		0	111	62	13	186	12	85	55	8	160	51	268	102	46	467

第13表 SK 180出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号		
			用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面						
371	92A	SK180	供膳具	碗	丸碗	5.6	8.8	—	3.2	—	—	肥前	染付・雲の輪文+五弁花, 高台砂融着, 漆継ぎ痕, 1780~1810	24	E-481	
372	"	"	"	"	端反碗	4.7	(9.1)	—	(3.5)	—	—	"	染付・花卉文+水辺に白鷺, 高台砂融着, 19世紀前半	26	E-482	
373	"	"	"	"	"	4.9	(9.2)	—	(3.2)	—	—	瀬・美	染付・花卉文, 1820~幕末	25	E-483	
374	"	"	"	"	"	6.3	(11.2)	—	(4.2)	—	—	肥前	染付・桜文, 焼き継ぎ痕, 1820~幕末	25	E-484	
375	"	"	"	"	広東碗	5.6	(9.6)	—	5.3	—	—	瀬・美	染付・岩に草花文+花卉文, 1810~19世紀中	25	E-485	
376	"	"	"	"	その他	—	(11.5)	—	—	鉄釉	鉄釉	"	長石釉筆散らしか, 凹み10ヶ所か	26	E-486	
377	"	"	"	"	小碗	4.3	(5.7)	—	3.1	—	—	肥前系	染付・菊花散らし文・幾何文+五弁花, 1780~1810	26	E-487	
378	"	"	"	"	皿	丸皿	2.3	6.1	—	2.7	—	—	"	白磁, 高台砂融着, 18世紀代	28	E-488
379	"	"	"	"	"	3.5	(13.5)	—	8.1	灰釉	灰釉	瀬・美	典須絵・唐草文+波に帆掛け舟, 蛇ノ目凹形高台, 19世紀前半	27	E-489	
380	"	"	"	"	鉢	その他	4.4	(14.4)	—	(9.5)	—	青磁釉	肥前	青磁染付・花卉文, 蛇ノ目凹形高台, 焼き継ぎ痕, 18世紀末~19世紀初頭	30	E-490
381	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.3	(7.2)	—	(3.5)	灰釉	灰釉	瀬・美	碁筒底, 口縁部油煙付着, 底部剥離痕		E-491	
382	"	"	"	"	"	1.4	(7.2)	—	(3.5)	鉄釉	鉄釉	"	見込みに剥離痕		E-492	
383	"	"	"	"	灯蓋	1.6	8.0	—	4.2	"	"	"	内外面に剥離痕, 油煙付着		E-493	
384	"	"	神仏具	瓶	神酒徳利B	7.3	1.7	3.9	2.6	—	—	肥前系	染付・梅花文+笛文, 高台砂融着, 18世紀末~19世紀前半	34	E-494	
385	"	"	調度具	餌鉢	餌鉢	2.5	(4.2)	—	2.7	灰釉	灰釉	瀬・美	底部回転糸切痕	35	E-495	
386	"	"	"	"	"	3.5	4.2	—	3.7	"	"	"	底部回転糸切痕		E-496	

第78図 近世の遺物 (23) SK180① (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
387	92A	SK180	調理具	搗鉢	II類	—	(30.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-497
388	"	"	"	"	VII類	14.1	(34.2)	—	(15.0)	"	"	"	柵目数19本・1cm単位に3本、内面摩滅破、底部ト チン痕	31	E-498
389	"	"	"	瓶	土瓶	—	(9.6)	(21.0)	—	ナデ	"	"	外面下部煤付着		E-499
390	"	"	火具	鉢	火鉢	—	(18.6)	(23.5)	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	焼き締め、色調：赤橙色		E-500
391	"	"	"	"	瓶掛	16.4	17.2	22.7	13.3	—	—	不明	貼付文・松竹梅文、型打ち成形か？	33	E-501
392	"	"	調度具	水甕	水甕	—	(30.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉・鉄釉流し掛け		E-502
393	"	"	"	水指	水滴	—	—	—	—	指押え	"	"	型押し成形、穿孔(径0.7cm)	35	E-503
394	"	"	貯蔵具	壺	蓋付壺	8.2	(6.7)	(8.9)	5.0	灰釉	"	"	口縁部釉剥ぎ		E-504
395	"	"	"	甕A	V類	—	(47.2)	(55.0)	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	焼き締め		E-505

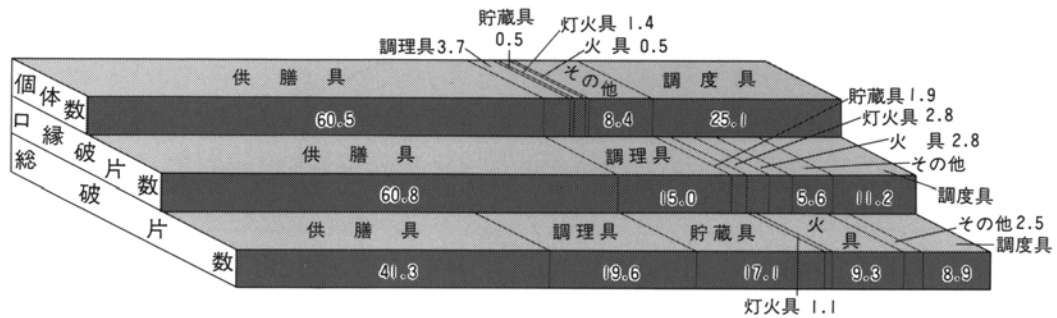
第79図 近世の遺物 (24) SK180② (1 : 4)

SK032 本遺構の時期は、19世紀中葉と考えられる。

93年度調査区の南側で検出された土坑である。出土した遺物は総破片数で290点、接合前口縁破片数が115点、個体数は20.08個体である。出土量は少ないが、近世後期の遺構として注目される。前述したSD102を切っており、一部にこの遺構の遺物を含んでいる可能性がある。

この内、供膳具が10.83個体・60.5%と多く、調理具が0.67個体・3.7%、貯蔵具・火具がそれぞれ0.08個体・0.5%、灯火具が0.25個体・1.4%と極端に減少し、神仏具が1.50個体・8.4%、調度具が4.50個体・25.1%と平均値に比べてそれぞれ2.4倍・5.1倍とかなり高くなっている。化粧具・喫煙具は出土していない。供膳具において、椀類：皿類=1.60：1となっているが、土師器皿を除いてみると、7.27：1と極端に椀類の出土量が増えている。全体的に鉢類の出土量が少ないことは概要でも述べているが、この遺構からの出土が4点しかないことも特筆される。調度具が高い比率を示しているのは、土錘がまとまって出土していることに影響しているものと思われる。また、蓋類は、総破片数で10点、接合前口縁破片数が8点、個体数では2.16個体とやはり出土量は少ない。

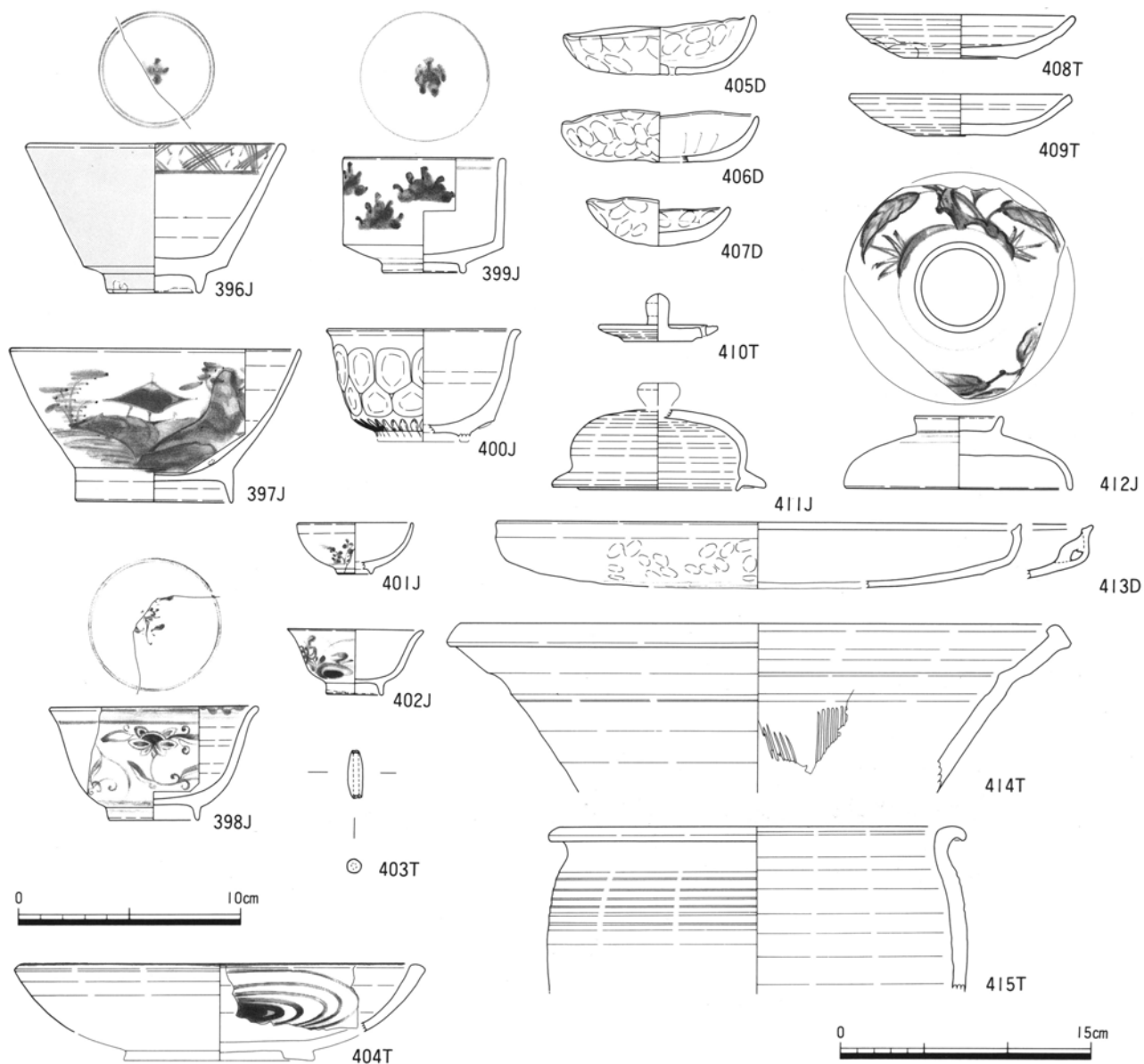
材質面では、土師器製品が土師器皿と土錘の影響で42.8%と高くなり、陶磁器類では陶器製品が22.8%、磁器製品が33.5%となっており、陶器製品が極端に低いことがわかる。その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品も、0.9%とほぼ平均値に近い割合で出土している。



第80図 SK032出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		7	20		27		10	17		27		25	23		48
	小椀		14	39		53		7	11		18		10	14		24
	皿	39	10	1		50	11	7	2		20	19	14	7		40
	鉢					0					0		3	1		4
	その他					0					0					0
	小計	39	31	60	0	130	11	24	30	0	65	19	52	45	0	116
調理具	鍋、釜	1	2			3	5	2		7	25	3		6	34	
	鉢		2			2		3		3		4			4	
	搦本		2			2		5		5		14			14	
	瓶		1			1		1		1		3			3	
	その他					0				0					0	
	小計	1	7	0	0	8	5	11	0	0	16	25	24	0	6	55
貯蔵具	瓶					0				0		2			2	
	壺					0				0		2			2	
	甕A		0			0		1		1		31			31	
	甕B		1			1		1		1		13			13	
	鉢					0				0					0	
	その他					0				0					0	
	小計	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2	0	48	0	0	48
灯火具		3	0		3		2	1		3		2	1		3	
火具		1	0		1		1		1	3	20	4		2	26	
化粧具					0					0					0	
神仏具			4	12	2	18		2	1	3		2	2	3	7	
喫煙具					0					0					0	
調度具	蓋		48	6	0	54		4	7	1	12	4	20	1	25	
	蓋			20	6	26			6	2	8		7	3	10	
合計		92	69	78	2	241	23	54	34	4	115	70	158	51	11	290

第14表 SK032出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号		
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面	
396	93B	SK032	供膳具	椀	平椀	6.6	(11.1)	—	(4.0)	—	青磁	肥前	青磁染付・割小菱・五弁花(コンニャク印), 18世紀後半	25	E-506	
397	"	"	"	"	広東椀	6.8	(12.7)	—	6.9	—	—	肥前系	染付・山水樓閣文, 見込みにハマ破, 1780~19世紀前半	25	E-507	
398	"	"	"	"	端反椀	5.0	(9.1)	—	(3.9)	—	—	関西系	染付・草花文, 焼成不良, 1820~1860		E-508	
399	"	"	"	"	小椀	筒椀	5.1	7.0	—	3.6	—	—	肥前	染付・若松文+五弁花(コンニャク印), 高台に砂融着, 1780~1820	26	E-509
400	"	"	"	"	端反椀	—	(8.3)	—	—	—	—	関西系	焼成不良, 19世紀代	26	E-510	
401	"	"	"	"	丸椀	2.3	(5.0)	—	(1.5)	—	—	肥前	染付・葦文, 18世紀後半~19世紀前半		E-511	
402	"	"	"	"	端反椀	2.9	(5.9)	—	(2.5)	—	—	瀬・美	染付・草花文, 1820~1860		E-512	
403	"	"	調度具	その他	その他	2.1	—	0.7	—	—	—	不明	土鍾, 色調: 橙色, 穴径0.3cm		E-513	
404	"	"	供膳具	皿	丸皿	—	(23.4)	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵・馬の目文		E-514	
405	"	"	"	"	土師器皿B	2.2	8.4	—	—	指押え+ナテ	指押え	不明	色調: 浅黄橙色, 底部穿孔(径0.4cm)	34	E-515	
406	"	"	"	"	"	1.9	8.5	—	—	ケズリ+ナテ	"	"	色調: 淡橙色		E-516	
407	"	"	"	"	"	1.9	6.2	—	—	指押え+ナテ	"	"	色調: 淡橙色	29	E-517	
408	"	"	灯火具	皿	灯明皿	1.9	(9.8)	—	4.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込み・底部に重ね焼きの剝離痕		E-518	
409	"	"	"	"	"	1.8	(9.7)	—	4.1	"	"	"	見込み・底部に重ね焼きの剝離痕		E-519	
410	"	"	その他	蓋	蓋I	2.1	(5.3)	—	—	—	ナテ	不明	つまみ径1.1cm, 底部回転糸切痕, 底部押印, 焼き締め		E-520	
411	"	"	"	"	蓋H	—	(9.4)	—	—	—	—	肥前	白磁, 17世紀後半~18世紀前半	36	E-521	
412	"	"	"	"	蓋E	3.2	(10.0)	—	—	—	—	"	染付・折り枝文, 内面ハマ破, つまみ径3.9cm, 1780~1810	36	E-522	
413	"	"	調理具	鍋, 釜	焙烙	—	(31.2)	—	—	ナテ	指押え+ケズリ	不明	色調: 明赤褐色, 外面煤付着		E-523	
414	"	"	"	"	播鉢	VIII類	—	(35.3)	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数不明, 1cm単位に4本		E-524	
415	"	"	貯蔵具	甕B	甕	—	(23.0)	(25.0)	—	"	"	"			E-525	

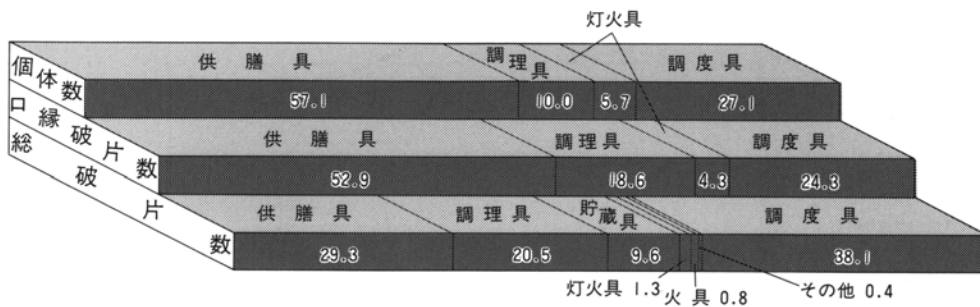
第81図 近世の遺物 (25) SK032 (404, 413~415は1:4, 他は1:3)

SK092 本遺構の時期は、19世紀中葉と考えられる。

93年度調査区の中央で検出された土坑である。出土した遺物は総破片数で254点、接合前口縁破片数が80点、個体数は8.50個体である。出土量は少ないが、近世後期の遺構として注目される。

この内、供膳具が3.33個体・57.1%と多く、調理具が0.58個体・10.0%、灯火具が0.33個体・5.7%、調度具が1.58個体・27.1%となっている。貯蔵具・火具・喫煙具については破片が出土しているが、化粧具・神仏具は出土していない。用途組成にはかなりの片寄りがみられるが、供膳具等の日常的な生活に関連する遺物群の比率が減少し、副次的な生活に関連する遺物群の割合が高くなっており、19世紀代の様相を示しているものと思われる。調度具については、平均値の5.5倍にも増えていることを読み取ることができる。また、蓋類は、総破片数で15点、接合前口縁破片数が10点、個体数では2.67個体と出土量は少ない。

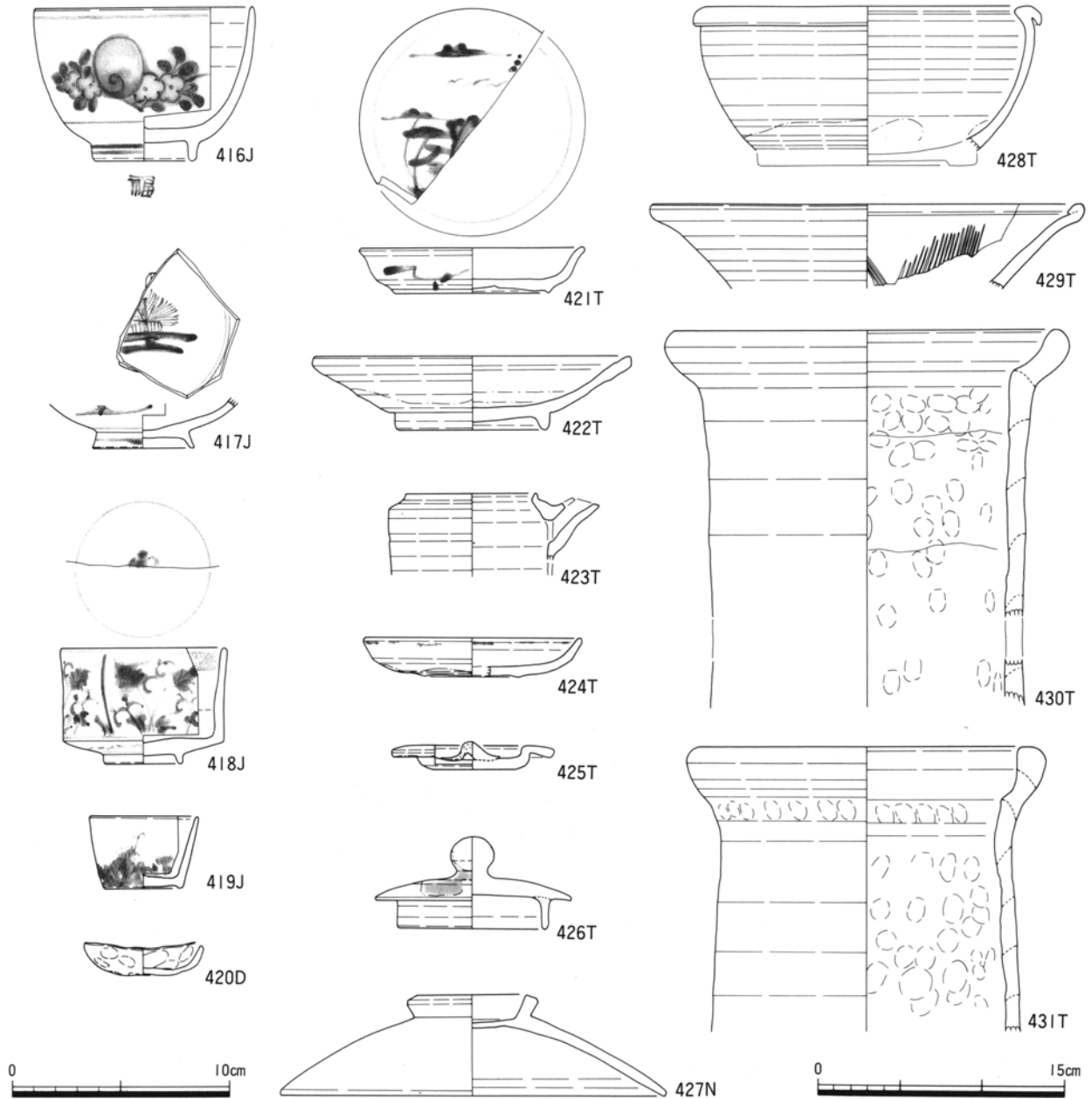
材質面については、土師質製品が21.4%とやや低くなり、陶磁器類では陶器製品が62.9%、磁器製品が15.7%となっており、磁器製品が極端に低いことがわかる。しかし、土師質製品の比率が本遺跡においては依然高く、19世紀代に土師質製品が減少する傾向にあるとしても、その割合は名古屋城三の丸遺跡よりも緩やかなのではないだろうか。



第82図 SK092出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		6	4		10		9	9		18		23	14		37
	小碗			3		3			2		2		2	2		4
	皿	15	8	4		27	6	7	3		16	14	6	7		27
	鉢		0			0		1			1		1	1		2
	その他					0					0					0
	小計	15	14	11	0	40	6	17	14	0	37	14	32	24	0	70
調理具	鍋、釜	0	1			1	2	2			4	12	3			11
	鉢		3			3		5		5		11			11	
	播鉢		2			2		3		3		9			9	
	瓶		1			1		1		1		3			3	
	その他					0					0				0	
	小計	0	7	0	0	7	2	11	0	0	13	12	26	0	11	49
貯蔵具	瓶					0				0		6			6	
	壺					0				0		0			0	
	甕A					0				0		13			13	
	甕B					0				0		4			4	
	鉢					0				0		0			0	
	その他					0				0		0			0	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	23	
灯火具		0	4			4	2	1			3	2	1		3	
火具						0				0	1	1			2	
化粧具						0				0					0	
神仏具						0				0					0	
喫煙具						0				0		1			1	
調度具			19			19		17			17	91			91	
蓋			24		8	32		2		8	10	2		13	15	
合計		15	68	11	8	102	10	48	14	8	80	29	177	24	24	254

第15表 SK 092出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
416	93B	SK092	供膳具	碗	丸碗	6.9	(9.8)	—	4.4	—	—	肥前	染付・折り枝文+「福」字文, 1650~1660	24	E-526
417	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.5	—	—	〃	染付・若松文, 18世紀第四半期~1810	25	E-527
418	〃	〃	〃	小碗	筒碗	5.2	(7.4)	—	(3.4)	—	—	〃	染付・唐草文・飛龍文+割小蓋・五弁花(コンニャク印), 1780~1810	26	E-528
419	〃	〃	〃	〃	蕎麦猪口	3.3	4.9	—	3.4	—	—	〃	染付・草文, 18世紀後半~19世紀初	26	E-529
420	〃	〃	〃	皿	土師器皿B	1.5	5.2	—	—	指押え+ナデ	指押え	不明	色調: 橙色, 底部は火を受け明赤褐色に変色	29	E-530
421	〃	〃	〃	〃	端反皿	2.1	(10.0)	—	(7.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵・山水文+折り枝文, 蛇ノ目高台, 19世紀前半		E-531
422	〃	〃	〃	〃	丸皿	3.3	(14.2)	—	6.6	〃	〃	〃	輪禿皿		E-532
423	〃	〃	貯蔵具	瓶	汁次B	—	(5.8)	(6.6)	—	鉄釉	鉄釉	〃	口縁部釉剥ぎ		E-533
424	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	1.8	(9.8)	—	(4.2)	〃	〃	〃	口縁部油煙付着, 見込み・底部に重ね焼きの剝離痕		E-534
425	〃	〃	その他	蓋	蓋B	1.3	7.3	—	3.6	〃	〃	〃	底部回転糸切痕		E-535
426	〃	〃	〃	〃	蓋D	4.2	(6.6)	8.9	—	ナデ	〃	〃	縁釉かかる, つまみ径1.9cm	36	E-536
427	〃	〃	〃	〃	蓋E	4.5	17.4	—	—	鉛釉	鉛釉	不明		36	E-537
428	〃	〃	調理具	鉢	捏ね鉢	—	(19.6)	(20.1)	—	灰釉	灰釉	〃	見込み釉剥ぎ(2ヶ所残存)		E-538
429	〃	〃	〃	播鉢	VIII類	—	(26.0)	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	櫛目数19本か		E-539
430	〃	〃	調度具	その他	土管	—	(22.6)	(19.1)	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑		35	E-540
431	〃	〃	〃	〃	〃	—	(18.6)	(18.2)	—	〃	〃	常滑	外面に指押え痕残る	35	E-541

第83図 近世の遺物 (26) SK092 (428~431は1:4, 他は1:3)

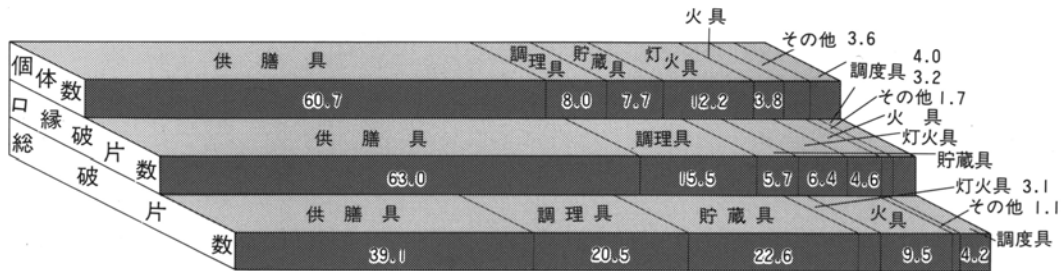


その他の遺構合計

今回の発掘調査で数多くの遺構を検出しているが、まとめて遺物を出土しているのは屋敷地境の溝や井戸がほとんどで、廃棄土坑等の大型の遺構を見ることができない。前出した遺構以外の遺構をここでまとめて見ることにしたい。集計表・組成図については、近世遺構出土分より前掲の9つの遺構分を引いたもので表している。これらの遺構は、18世紀後葉までのものと18世紀末から19世紀中葉までのものの2つの時期に分けることができる。出土した遺物の合計は、総破片数で15,313点、接合前口縁破片数は3,989点、個体数は291.42個体である。

この内、供膳具が164.33個体・60.7%、調理具が21.67個体・8.0%、貯蔵具が20.75個体・7.7%、灯火具が33.08個体・12.2%、火具が10.33個体・3.8%、化粧具が2.67個体・1.0%、神仏具が6.33個体・2.3%、喫煙具が0.67個体・0.3%、調度具が10.75個体・4.0%で、日常的な生活に関連する遺物群の比率が下がり、他の遺物群の出土量が多くなっている。これは、江戸後期の遺構が多いことに起因しているものと思われる。また、蓋類は、総破片数で207点、接合前口縁破片数が141点、個体数では20.83個体とやはり出土量は少ない。

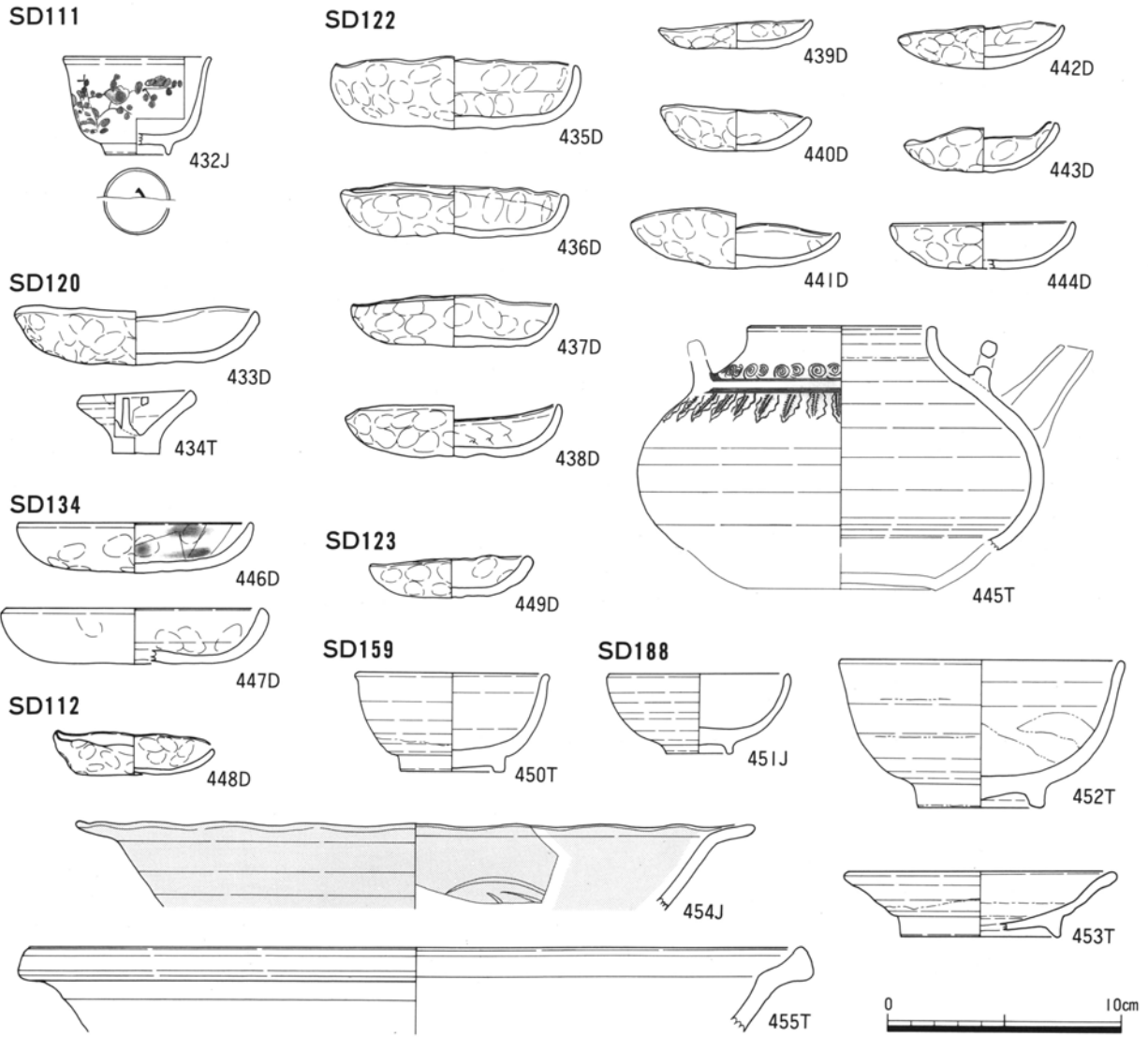
材質面では、土師質製品が31.5%に対して、陶磁器類では陶器製品が41.4%、磁器製品が26.0%となっている。その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品については、1.1%である。



第84図 その他の遺構出土陶磁器類の用途組成

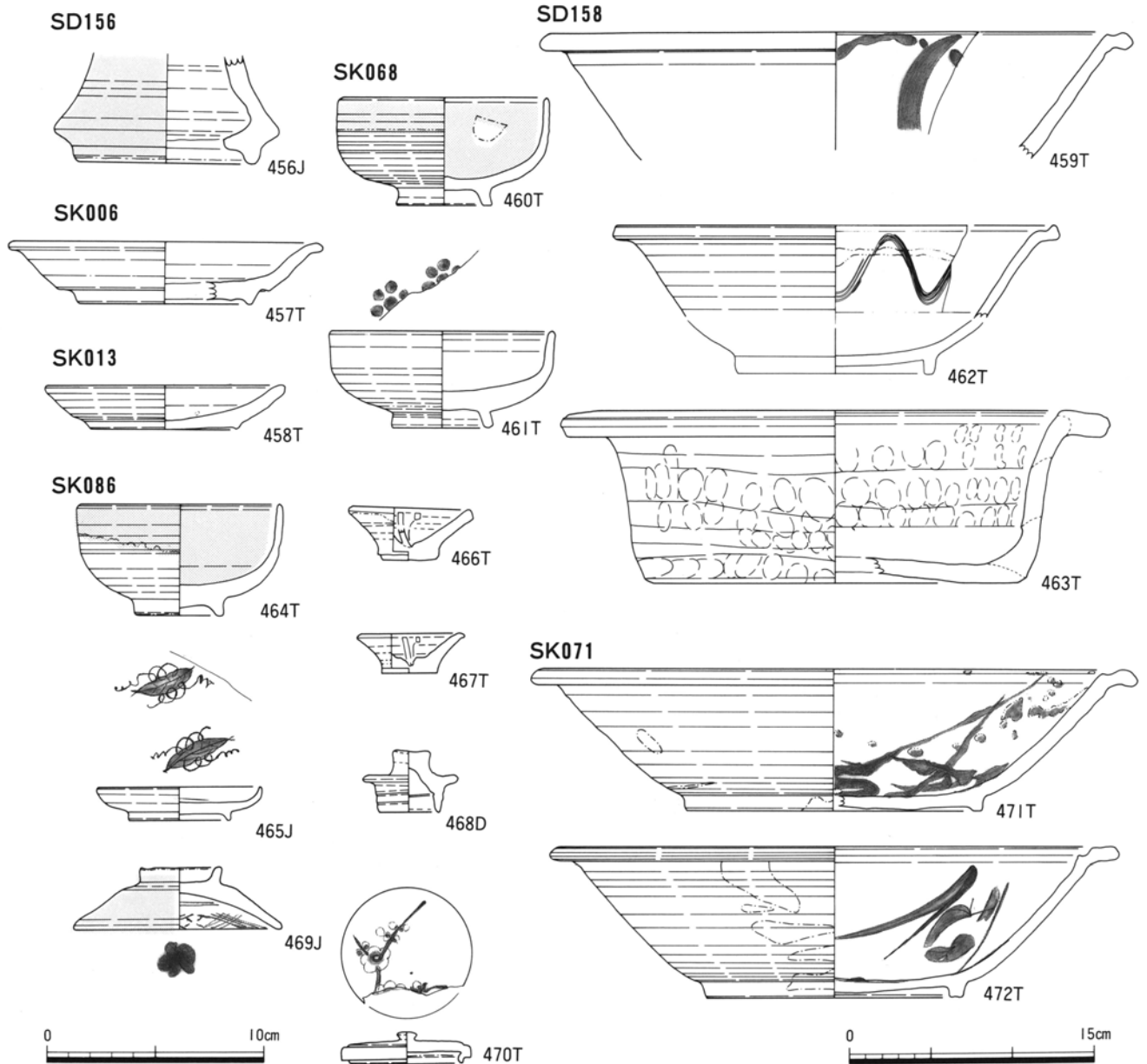
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗	0	208	308	0	516	0	360	449	0	809	0	1155	1081	2	2238
	小碗	0	65	286	0	351	0	51	251	0	302	0	102	465	0	567
	皿	746	181	113	0	1040	767	247	174	1	1189	1733	548	425	1	2707
	鉢	0	37	27	1	65	0	84	39	1	124	0	293	92	7	392
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	746	491	734	1	1972	767	742	913	2	2424	1733	2098	2063	10	5904
調理具	鍋、釜	34	30	0	2	66	255	29	0	11	295	1788	110	0	53	1951
	鉢	3	43	2	0	48	2	74	2	0	78	2	189	2	0	193
	播鉢	0	81	0	0	81	0	186	0	0	186	0	662	0	0	662
	瓶	0	37	28	0	65	0	23	13	0	36	0	231	58	1	290
	その他	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	2	0	3
	小計	37	191	30	2	260	257	313	15	11	596	1790	1193	62	54	3099
貯蔵具	瓶	0	65	4	0	69	0	9	1	0	10	0	272	27	1	300
	壺	4	49	0	0	53	3	21	0	0	24	32	128	2	0	162
	甕A	0	68	0	0	68	0	113	0	0	113	0	2570	0	0	2570
	甕B	0	35	0	0	35	0	44	0	0	44	0	329	0	0	329
	鉢	0	17	7	0	24	0	12	15	0	27	0	20	29	0	49
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	4	234	11	0	249	3	199	16	0	218	32	3319	58	1	3410
灯火具		199	182	0	12	397	167	69	0	10	246	290	144	1	27	462
火具		32	75	0	21	124	43	118	0	16	177	467	868	0	102	1437
化粧具		0	24	8	0	32	0	7	4	0	11	0	17	20	0	37
神仏具		0	32	44	0	76	0	29	15	0	44	0	60	46	0	106
喫煙具		0	6	2	0	8	0	7	3	0	10	0	16	4	0	20
調度具		4	110	15	0	129	4	114	4	0	122	38	554	37	2	631
蓋		20	166	61	3	250	3	84	47	7	141	4	135	61	7	207
合計		1042	1511	905	39	3497	1244	1682	1017	46	3989	4354	8404	2352	203	15313

第16表 その他の遺構出土陶磁器類集計表



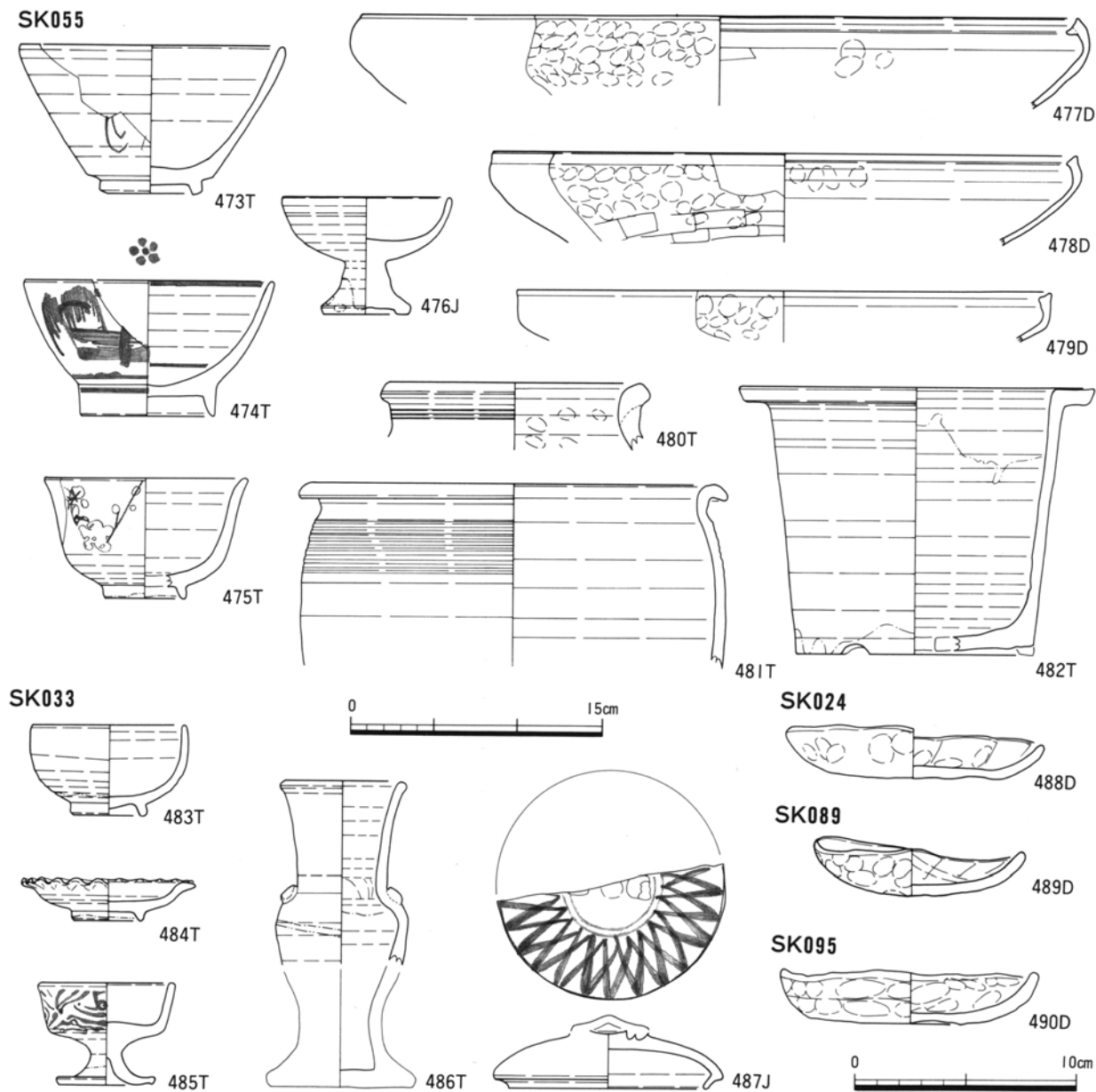
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
432	93B	SD111	供膳具	小椀	端反椀	4.1	(6.2)	—	(2.6)	—	—	肥前	染付・草花文・蝶文+変形文字, 18世紀代	26	E-542
433	"	SD120	"	皿	土師器皿B	2.3	9.9	—	—	ナテ	指押え+ナテ	不明	色調：浅黄橙色		E-543
434	"	"	灯火具	秉燭	III類	2.5	4.6	—	(2.0)	灰釉	ナテ	瀬・美	底部回転糸切痕		E-544
435	"	SD122	供膳具	皿	土師器皿B	2.7	10.0	—	—	指押え+ナテ	指押え	不明	色調：黄橙色	34	E-545
436	"	"	"	"	"	1.9	9.2	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色, 短径8.9cm	34	E-546
437	"	"	"	"	"	1.8	8.6	—	—	"	"	"	色調：浅黄橙色, 短径8.1cm	34	E-547
438	"	"	"	"	"	2.0	8.8	—	—	"	"	"	色調：浅黄橙色	34	E-548
439	"	"	"	"	"	1.1	6.3	—	—	"	"	"	色調：にふい橙色		E-549
440	"	"	"	"	"	1.7	6.0	—	—	"	"	"	色調：にふい黄橙色		E-550
441	"	"	灯火具	皿	灯明皿	1.8	8.6	—	—	"	"	"	色調：淡橙色, 内面油煙付着, 短径8.1cm		E-551
442	"	"	供膳具	皿	土師器皿B	1.6	6.9	—	—	"	"	"	色調：浅黄橙色		E-552
443	"	"	"	"	"	1.7	6.1	—	—	"	"	"	色調：浅黄橙色, 短径5.8cm	29	E-553
444	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.0	(7.6)	—	—	ナテ	"	"	色調：にふい黄橙色, 内外面油煙付着		E-554
445	"	"	調理具	瓶	土瓶	—	(7.6)	(17.2)	—	"	緑釉	瀬・美	押印・渦巻文・木の葉文		E-555
446	"	SD134	灯火具	皿	灯明皿	2.1	(9.8)	—	—	指押え+ナテ	指押え	不明	色調：灰白色, 内外面油煙付着		E-556
447	"	"	供膳具	皿	土師器皿B	2.3	(10.7)	—	—	指押え+ナテ	"	"	色調：浅黄橙色		E-557
448	"	SD112	灯火具	皿	灯明皿	1.5	6.7	—	—	"	"	"	色調：明黄褐色, 内外面油煙付着, 短径6.0cm	29	E-558
449	"	SD123	供膳具	皿	土師器皿B	1.7	6.6	—	—	"	"	"	色調：にふい橙色, 短径5.9cm		E-559
450	92A	SD159	"	小椀	天目椀	4.1	(8.0)	—	(4.3)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		26	E-560
451	"	SD188	"	"	丸椀	3.4	7.7	—	3.6	—	—	肥前	白磁, 高台内に砂融着, 18世紀代		E-561
452	"	"	"	"	椀	6.2	(11.8)	—	5.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉筆散らし		E-562
453	"	"	"	皿	端反皿	2.7	(11.2)	—	(6.8)	灰釉	灰釉	"	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	28	E-563
454	"	"	"	鉢	稜花鉢	—	(28.8)	—	—	青磁	青磁	肥前	陰刻, 1650~1660	30	E-564
455	"	"	調理具	播鉢	III類	—	(32.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美		28	E-565

第85図 近世の遺物 (27) その他の遺構① (1 : 3)



遺物 番号	調査地点	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
			用途	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
456	92A	SD156	調度具	花生 壺型	—	—	(10.3)	(8.0)	青磁	青磁	肥前	17世紀末~18世紀前半	35	E-566
457	93B	SK006	供膳具	皿 稜皿	2.8	(13.8)	—	(7.7)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み・高台にトチン痕	28	E-567
458	"	SK013	灯火具	皿 灯明皿	2.0	10.7	—	6.7	"	"	"	内面に油煙付着, 見込み・底部にトチン痕		E-568
459	92A	SD158	供膳具	鉢 折縁鉢	—	(35.5)	—	—	"	"	"	鉄絵・黍文か, 銅緑釉筆散らし		E-569
460	93B	SK068	"	碗 腰錆碗	4.9	(9.2)	—	4.3	"	灰釉+鉄釉	"	見込みトチン痕・高台登付部分重ね焼きによる 剝離痕		E-570
461	"	"	"	皿 丸皿	4.4	(10.1)	—	(4.4)	"	灰釉	"	鉄絵・梅花文	27	E-571
462	"	"	"	鉢 折縁鉢	—	(26.7)	—	—	"	"	"	銅緑釉筆散らし, 黄瀬戸鉢か		E-572
463	"	"	火具	火鉢 火桶	10.5	(28.4)	—	(22.2)	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑		33	E-573
464	"	SK086	供膳具	碗 丸碗	5.1	(9.0)	—	3.7	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台にトチン痕, 使用による摩滅痕		E-574
465	"	"	"	皿 丸皿	1.5	(7.4)	—	4.5	—	—	肥前	染付・宝文, 18世紀末~幕末	28	E-575
466	"	"	灯火具	乗燭 皿類	2.4	5.3	—	2.5	灰釉	ケズリ	瀬・美	底部回転糸切痕		E-576
467	"	"	"	"	—	1.8	4.4	—	(2.5)	"	ナデ		33	E-577
468	"	"	その他	蓋 蓋D	2.8	2.8	—	—	ナデ	—	不明	色調: 浅橙色	36	E-578
469	"	"	"	蓋 蓋E	2.8	9.2	—	—	—	青磁	肥前	青磁染付・割小菱・五弁花(コンニャク印), 18世紀後半	36	E-579
470	"	"	"	蓋 蓋D	1.4	5.0	—	—	灰釉	灰釉	関西系	鉄絵+呉須絵+白泥, 梅樹文, 19世紀代	36	E-580
471	"	SK071	供膳具	鉢 折縁鉢	8.6	(35.3)	—	(18.0)	"	"	瀬・美	鉄絵・葛文, 銅緑釉筆散らし, 見込み・高台にト チン痕	30	E-581
472	"	"	"	"	9.1	(33.3)	—	(15.6)	"	"	"	鉄絵・黍文	30	E-582

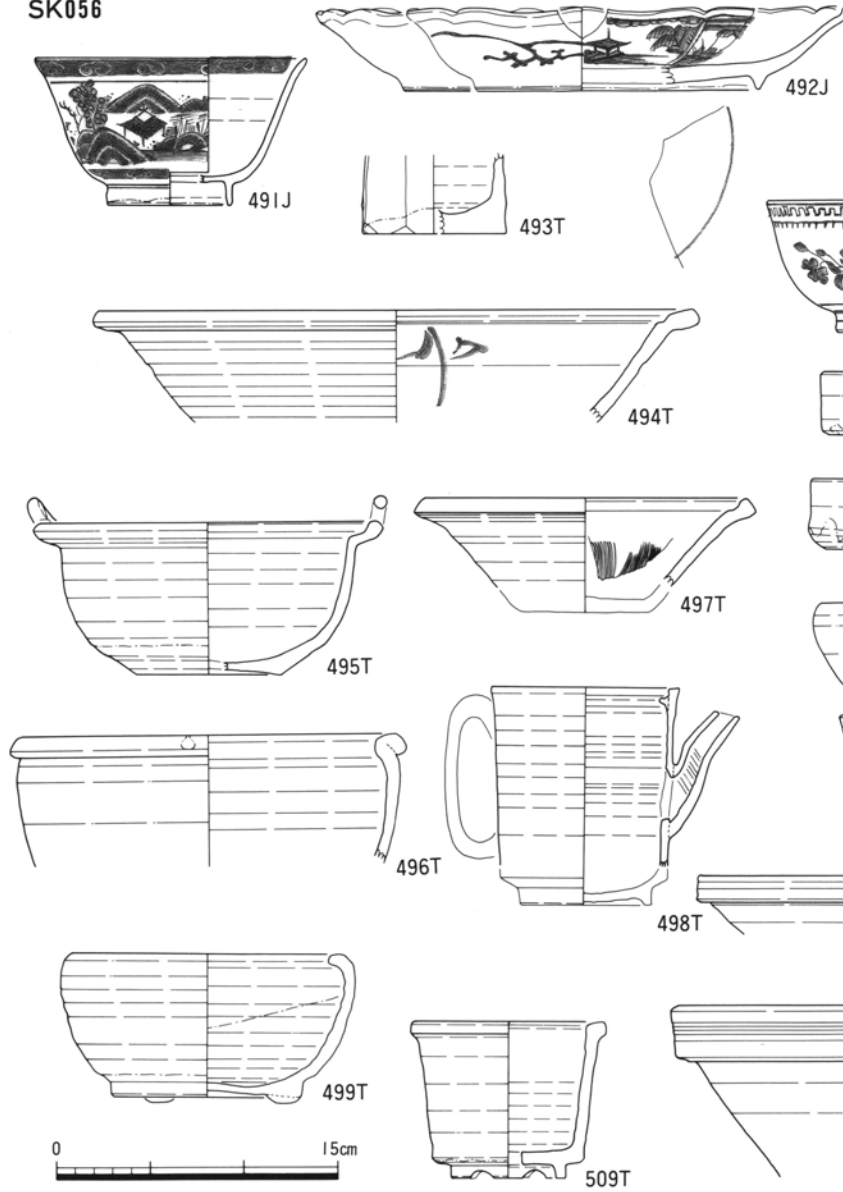
第86図 近世の遺物 (28) その他の遺構② (459・562・463・471・472は1:4, 他は1:3)



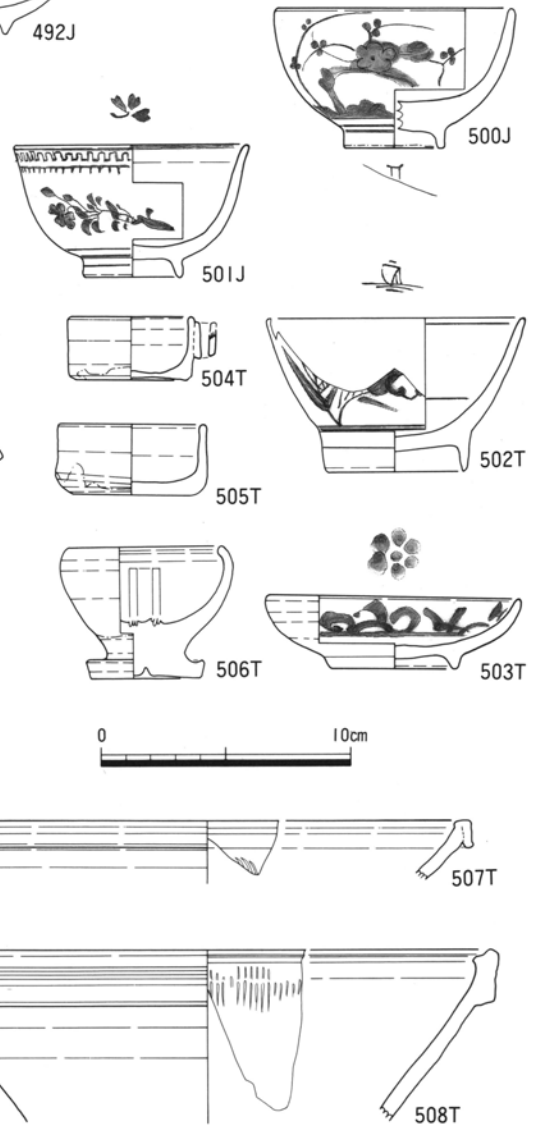
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号			
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面		
473	93B SK055	供膳具	椀	平椀	6.6	(11.6)	—	(3.6)	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・柳文	25	E-583	
474	" "	"	"	広東椀	6.1	(10.9)	—	5.8	"	"	"	呉須絵・山水文+五弁花	25	E-584	
475	" "	"	"	端反椀	5.4	(8.9)	—	(3.5)	白泥+透明釉	透明釉	関西系	白泥+鉄絵・梅樹文, 19世紀代		E-585	
476	" "	神仏具	仏飯器	—	5.3	(7.3)	—	3.8	—	—	肥前	白磁, 18世紀前半	34	E-586	
477	" "	調理具	鍋, 釜	焙烙	—	(42.8)	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	不明	色調: 浅黄橙色, 外面煤付着		E-587	
478	" "	"	"	"	—	(34.8)	—	—	"	"	"	色調: 赤褐色, 外面煤付着		E-588	
479	" "	"	"	"	—	(31.9)	—	—	ナデ	"	"	色調: にぶい橙色, 外面煤付着		E-589	
480	" "	貯蔵具	壺	無蓋壺	—	(15.0)	—	—	指押え+ナデ	ナデ	常滑	焼き締め		E-590	
481	" "	"	甕B	甕	—	(23.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-591	
482	" "	調度具	植木鉢	植木鉢	15.9	(21.0)	—	(14.1)	ナデ	灰釉	"			E-592	
483	SK033	供膳具	小椀	丸椀	4.0	6.7	—	3.0	灰釉	"	"			26	E-593
484	" "	"	皿	ひだ・桜花皿	1.9	(7.6)	—	3.0	"	"	"	口縁部を調整している		29	E-594
485	" "	神仏具	仏飯器	—	4.5	(5.7)	—	(4.2)	"	"	"	呉須絵		34	E-595
486	" "	調度具	花生	壺型	—	(5.2)	(5.9)	—	灰釉+ナデ	灰釉+鉄釉	"	灰釉・鉄釉掛け分け			E-596
487	" "	その他	蓋	蓋D	—	(8.8)	—	—	—	—	肥前	染付・格子目文, 18世紀後半~19世紀前半	36	E-597	
488	SK024	供膳具	皿	土師器皿B	1.8	11.3	—	—	指押え+ナデ	指押え	不明	色調: 浅黄橙色			E-598
489	SK089	"	"	"	2.2	9.2	—	—	ケズリ+ナデ	"	"	色調: にぶい橙色			E-599
490	SK095	灯火具	皿	灯明皿	2.4	11.2	—	—	指押え+ナデ	指押え+ナデ	"	色調: にぶい橙色, 内面油煙付着			E-600

第87図 近世の遺物 (29) その他の遺構③ (477~482は1:4, 他は1:3)

SK056

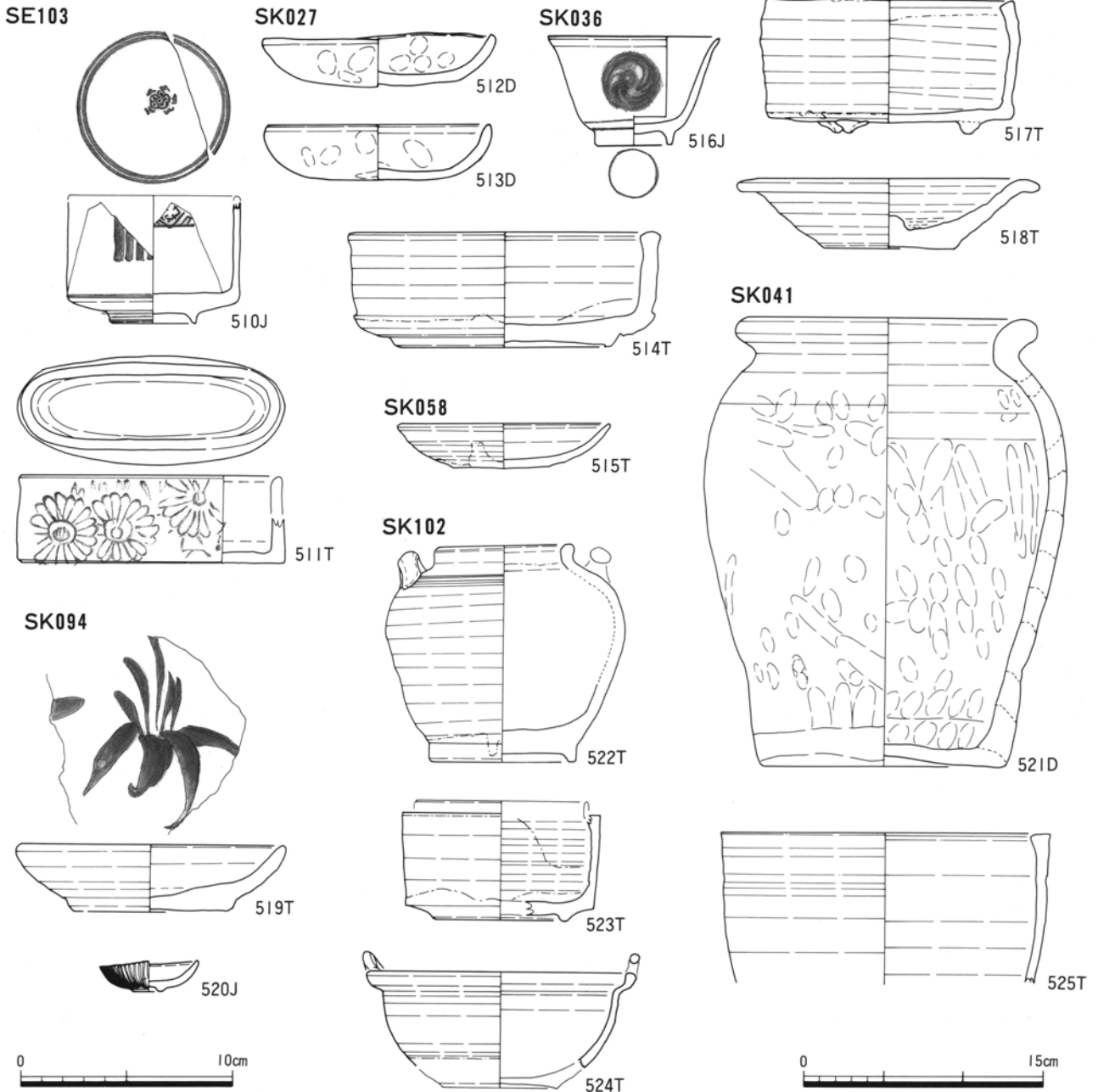


SK053



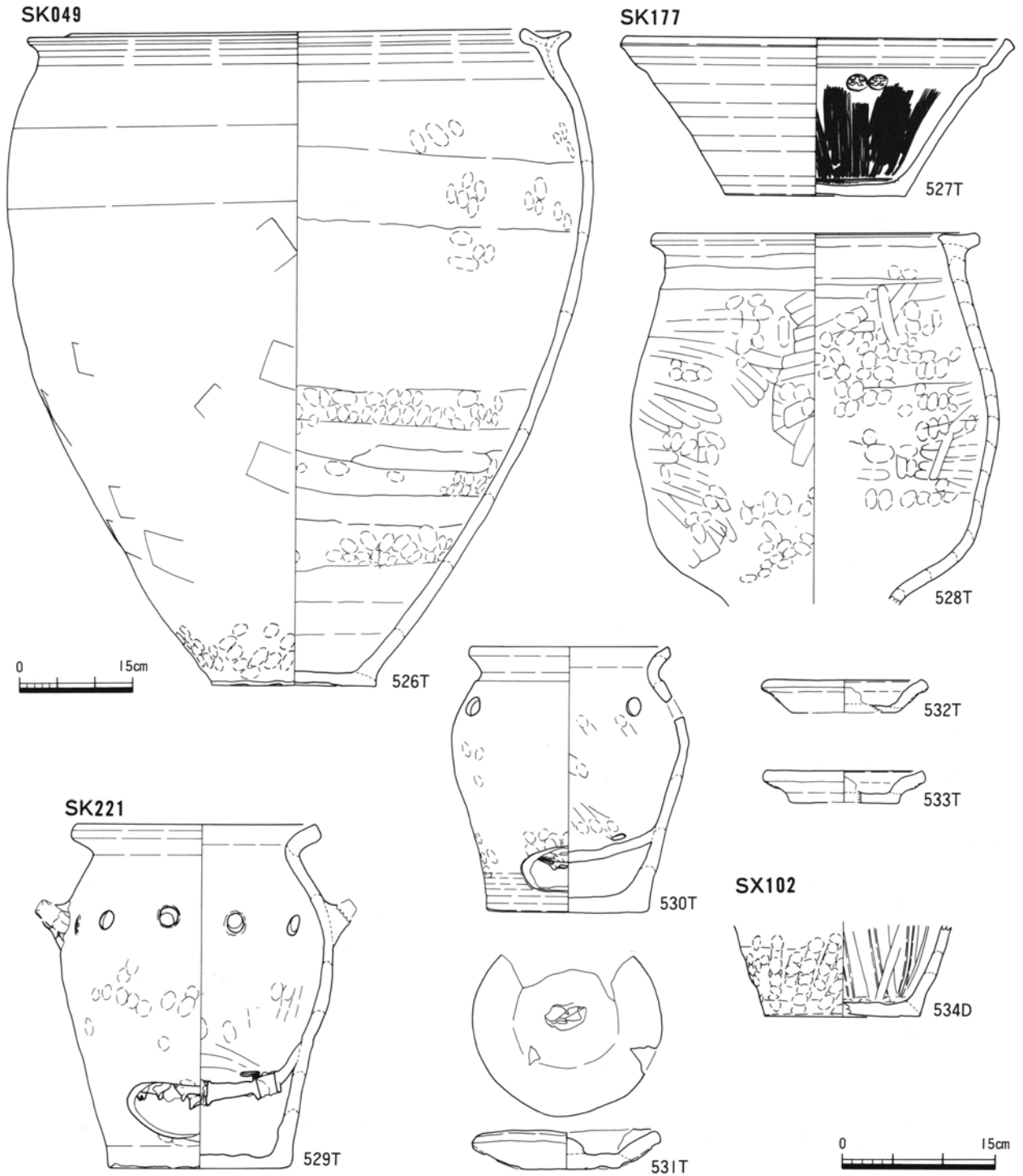
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
491	93B	SK056	供膳具	椀	端反椀	5.8	(10.6)	—	(4.8)	—	—	瀬・美	染付・山水楼閣文, 1820~1860	25	E-601
492	"	"	"	皿	型打皿	3.3	(20.9)	—	(14.0)	—	—	肥前	染付・山水楼閣文+唐草文, 1690~18世紀初	29	E-602
493	"	"	調度具	その他	筒型容器	—	—	—	(5.7)	ナデ	灰釉	瀬・美	練り込み, 八角形	35	E-603
494	"	"	供膳具	鉢	折縁鉢	—	(31.4)	—	—	灰釉	"	"	鉄絵・薦文		E-604
495	"	"	調理具	鍋, 釜	鍋	(7.7)	(17.7)	—	(7.6)	鉄釉	鉄釉	"	底部外面煤付着		E-605
496	"	"	"	鉢	捏鉢	—	(20.1)	—	—	灰釉	灰釉	"	銅緑釉筆散らし		E-606
497	"	"	"	播鉢	VIII類	—	(17.2)	—	—	鉄釉	鉄釉	"	櫛目数15本か, 1cm単位に7本		E-607
498	"	"	"	瓶	汁次B	—	(9.9)	—	—	ナデ	灰釉	"	鉄摺絵・花文	32	E-608
499	"	"	火具	鉢	火鉢	(7.9)	(14.0)	—	(9.8)	鉄釉	鉄釉	"			E-609
500	"	SK053	供膳具	椀	丸椀	5.5	(9.2)	—	(3.9)	—	—	肥前	染付・雪の輪に梅樹文・略字, 高古に砂融着, 18世紀後半		E-610
501	"	"	"	椀	端反椀	5.2	9.1	—	3.8	—	—	瀬・美	染付・桜に折枝文・幾何文+桜花文, 19世紀前半	25	E-611
502	"	"	"	椀	広東椀	6.1	(10.0)	—	(5.5)	—	—	"	染付・水辺に帆掛け舟文, 1780~1820		E-612
503	"	"	"	皿	丸皿	2.9	9.9	—	4.7	灰釉	灰釉	"	呉須絵・草花文・梅文, 高古に使用による摩滅痕	27	E-613
504	"	"	調度具	餌鉢	餌鉢	2.5	(4.7)	—	4.3	"	"	"		35	E-614
505	"	"	"	鉢	"	2.8	5.7	—	4.6	"	"	"	口縁部釉剥ぎ	35	E-615
506	"	"	灯火具	乗燭	II類	5.2	(6.0)	—	4.4	鉄釉	鉄釉	"	底部回転糸切痕, 底部穿孔(径約0.3cm)		E-616
507	"	"	調理具	播鉢	II類	—	(27.7)	—	—	錆釉	錆釉	"			E-617
508	"	"	"	鉢	IX類	—	(29.8)	—	—	—	—	堺	色調: 明赤褐色, 焼成不良, 内面使用による摩滅痕	31	E-618
509	"	"	調度具	植木鉢	植木鉢	8.3	(10.0)	—	(5.9)	鉄釉+ナデ	鉄釉	瀬・美	高古切込み2ヶ所, 見込みに重ね焼きの剥離痕		E-619

第88図 近世の遺物 (30) その他の遺構④ (494~499・507~509は1:4, 他は1:3)



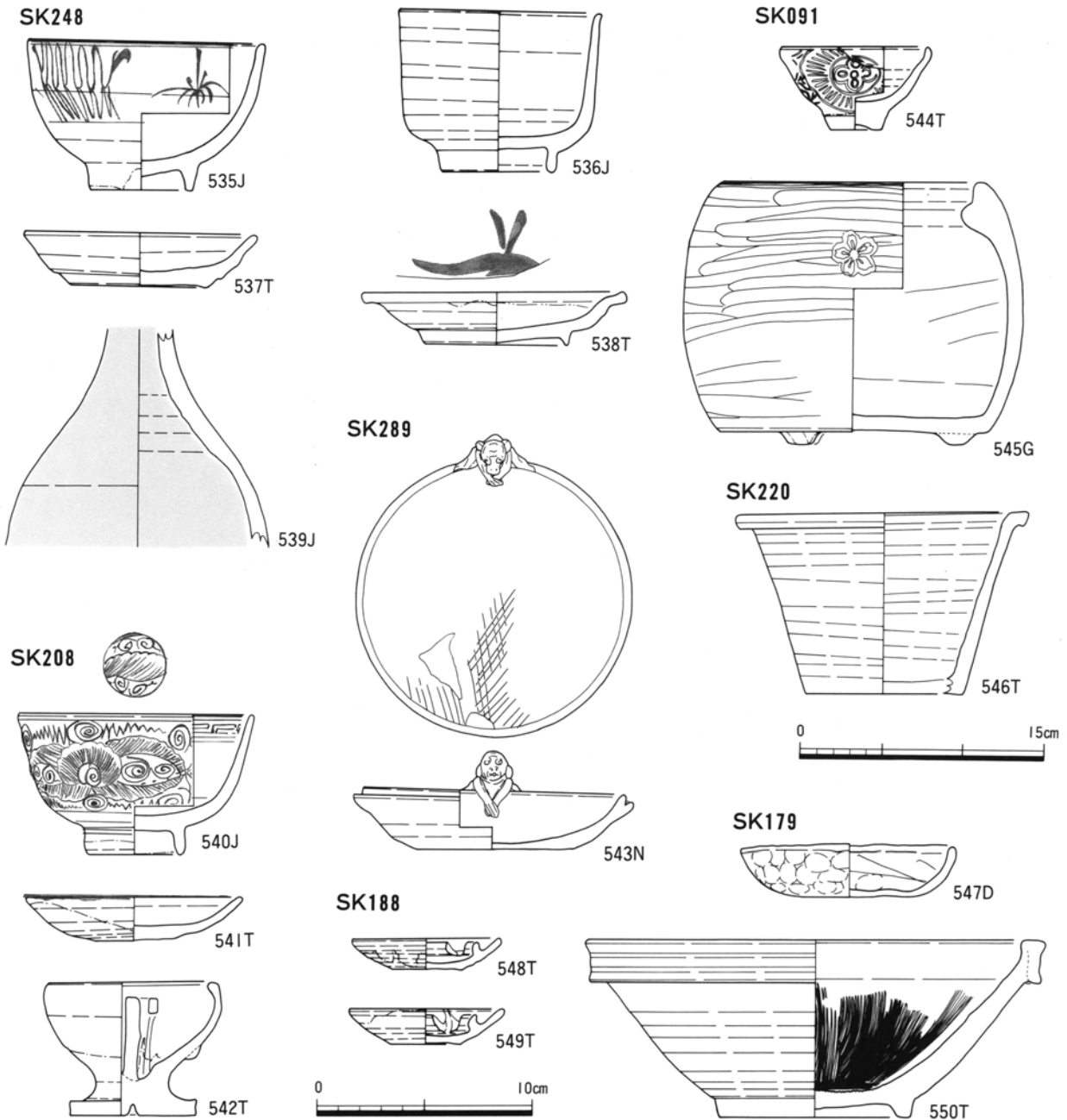
遺物 番号	調査地点	遺構	器種		法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
			用途	器形	器高	口径	底径	内面	外面					
510	93B	SE103	供膳具	小碗	筒碗	—	—	3.9	—	—	肥前	染付・源氏香文+割小蓋・五弁花(手書き), 18世紀後半	E-620	
511	"	"	化粧具	鬢盤	—	4.0	(12.1)	—	(12.2)	灰釉	瀬・美	鉄摺絵・花文, 幅:口縁部4.0cm・底部5.0cm	E-621	
512	"	SK027	灯火具	皿	灯明皿	2.3	10.5	—	—	—	不明	色調: 灰黄褐色, 内面油煙付着	E-622	
513	"	"	"	"	"	2.6	(10.3)	—	(4.8)	指押え+ナデ	指押え	内面油煙付着, 色調: 灰褐色	E-623	
514	"	"	調度具	鉢鉢	鉢鉢	5.3	(14.0)	—	(9.4)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	高台に重ね焼きの剝離痕	E-624
515	"	SK058	灯火具	皿	灯明皿	2.1	9.7	—	4.5	"	"	"	口縁部油煙付着, 見込みに重ね焼きの剝離痕	33 E-625
516	"	SK036	供膳具	小碗	端反碗	5.0	(7.8)	—	3.5	—	—	肥前	染付・コンニャク印・水仙文か, 1690~18世紀前	26 E-626
517	"	"	神仏具	香炉	筒型	6.1	(11.4)	—	(8.7)	鉄釉	鉄釉	瀬・美		34 E-627
518	"	"	その他	蓋	蓋A	3.2	(14.6)	—	—	ナデ	"	"	底部回転糸切痕, つまみ径1.4cm	E-628
519	"	SK094	供膳具	皿	丸皿	3.1	(12.1)	—	7.1	長石釉	長石釉	"	鉄絵・笹文, 見込み・底部にトチン痕, 底部に重ね焼きの剝離片融着	E-629
520	"	"	化粧具	紅皿	—	1.4	4.6	—	1.3	—	—	肥前	白磁, 型押し成形, 18世紀代	34 E-630
521	"	SK041	貯蔵具	壺	土師壺	27.8	(17.2)	—	14.5	指押え+ナデ	指押え+ナデ	常滑	色調: 浅黄橙色	32 E-631
522	"	SK102	"	"	蓋付壺	10.0	6.0	11.1	6.6	ナデ	鉄釉	瀬・美	内面鉄分付着, 御歯黒壺か, 口縁に重ね焼きの剝離痕	34 E-632
523	"	"	"	鉢	蓋物B	—	—	—	(6.0)	灰釉	灰釉	"		E-633
524	"	"	調理具	鍋, 釜	鍋	—	(16.4)	—	—	鉄釉	鉄釉	"	外面底部に煤付着	E-634
525	"	"	貯蔵具	甕B	半胴	—	(20.2)	(20.4)	—	"	"	"	口縁部にトチン痕	E-635

第89図 近世の遺物 (31) その他の遺構⑤ (521・524・525は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査区	調査地点	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
526	93B	SK049	貯蔵具	甕 A	III類	85.9	60.4	78.3	21.7	指押え+ナテ	ナテ	常滑	赤物		E-636
527	"	SK177	調理具	搗鉢	VII類	15.4	(36.7)	—	(17.7)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	拂目数16本、1cm単位に4本、押印「高」1、内面使用による摩滅痕		E-637
528	"	"	貯蔵具	甕 A	V類	—	(30.8)	(35.9)	—	指押え+ナテ	指押え+ナテ	常滑	焼き締め		E-638
529	92A	SK221	火具	鉢	蚊いぶし	33.4	(23.3)	(26.7)	16.3	"	"	"	内部煤付着、穿孔10ヶ所か	33	E-639
530	"	"	"	"	"	26.0	(19.3)	(23.3)	15.7	"	"	"	内部煤付着、穿孔6ヶ所	33	E-640
531	"	"	その他	蓋	蓋 A	3.6	17.1	—	9.5	ナテ	ナテ	"	内面煤付着	35	E-641
532	"	"	"	"	"	(3.3)	(16.5)	—	(10.0)	"	"	"	内面煤付着		E-642
533	"	"	"	"	"	(3.1)	(15.8)	—	(10.8)	"	"	"	内面煤付着		E-643
534	93B	SX102	貯蔵具	壺	土師壺	—	—	—	(14.8)	指押え+ナテ	指押え+ナテ	不明	色調：橙色		E-644

第90図 近世の遺物 (32) その他の遺構⑥ (526は1:8, 他は1:6)

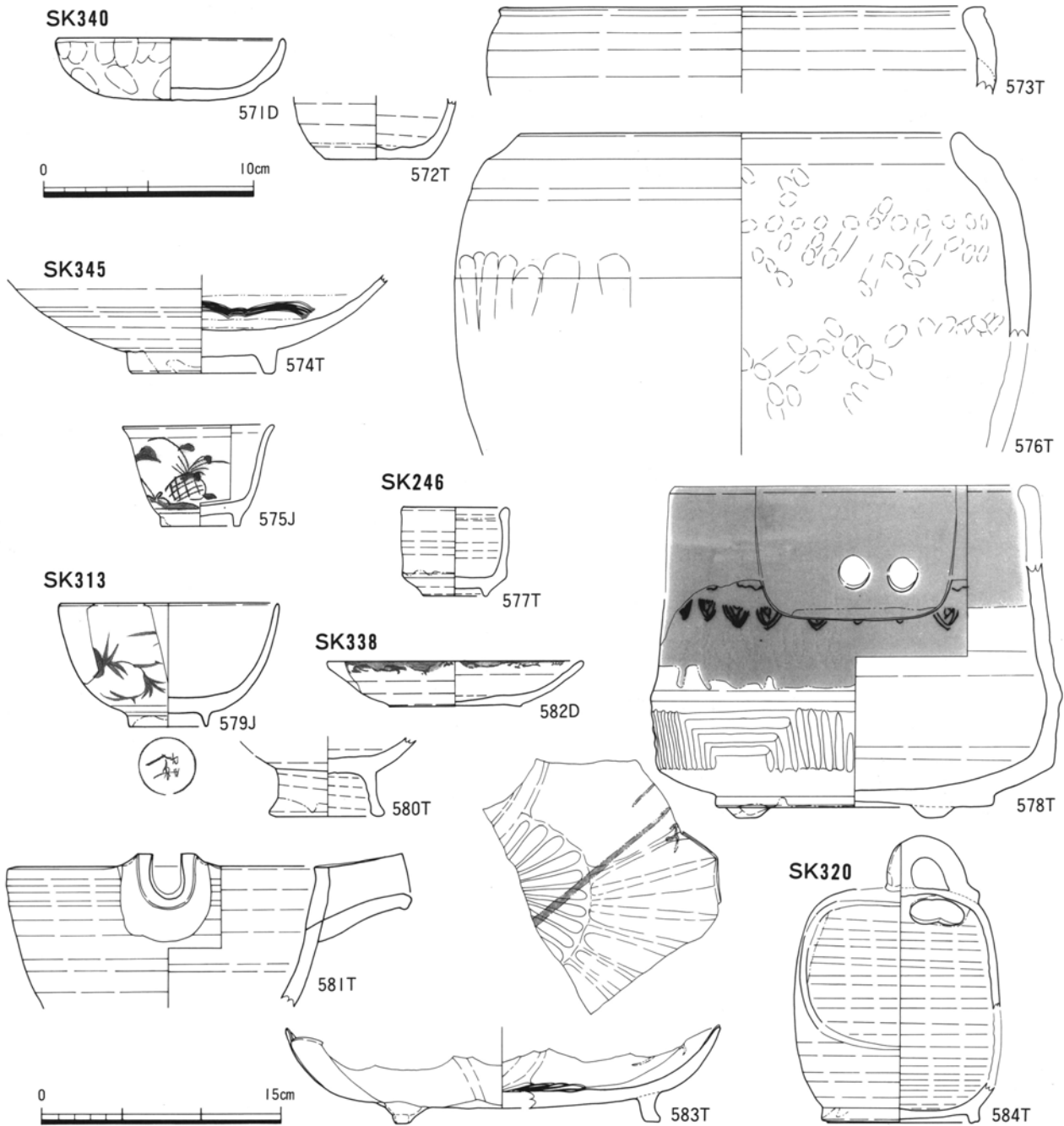


遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
535	92A	SK248	供膳具	椀	丸椀	6.8	10.7	—	4.6	—	—	肥前	染付・編目文・笹文、高台内露胎、1640~1650	24	E-645
536	"	"	"	"	筒椀	7.5	9.4	—	5.2	—	—	"	白磁か、高台に砂融着、1640~1650	24	E-646
537	"	"	"	"	皿	丸皿	2.5	10.7	—	6.3	長石釉	瀬・美	見込み・高台内にトチン痕、17世紀中		E-647
538	"	"	"	"	折縁皿	2.5	11.7	—	6.6	灰釉	灰釉	"	鉄絵、笹文、見込みに重ね焼きの刺離痕(径約6.5cm)		E-648
539	"	"	貯蔵具	瓶	その他	—	—	—	—	—	—	肥前	青磁、1630~17世紀後半		E-649
540	"	SK208	供膳具	椀	丸椀	6.4	10.6	—	4.2	—	—	肥前系	染付・花唐草文、1820~1860	25	E-650
541	"	"	灯火具	皿	灯明皿	2.0	9.8	—	3.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁油煙付着、外面底部軸拭き取り、19世紀初	33	E-651
542	"	"	"	乗燭	皿類	6.1	7.4	—	5.8	"	"	"	底部回転系切痕、底部に穿孔(径約0.4cm)、18世紀末		E-652
543	"	SK289	"	皿	灯明皿	2.8	12.0	—	7.2	鉛釉	鉛釉	不明	口縁油煙付着、樽引き、土人形(痕)、色調：橙色	33	E-653
544	93B	SK091	供膳具	小椀	その他	3.8	(6.7)	—	2.4	透明釉	白泥+透明釉	関西系	陰刻・象嵌花文、19世紀代	26	E-654
545	"	"	火具	壺	火消壺	16.1	16.0	20.9	(16.4)	ナデ	ケズリ+ナデ	不明	押印・桜文、口縁部に敲打痕	33	E-655
546	92A	SK220	調度具	植木鉢	植木鉢	11.1	17.7	—	9.6	"	ナデ	"	常滑の赤物か		E-656
547	"	SK179	供膳具	皿	土師器皿B	2.2	9.7	—	—	"	指押え	"	色調：浅黄橙色		E-657
548	"	SK188	灯火具	皿	灯蓋	1.4	6.7	—	3.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美			E-658
549	"	"	"	"	"	1.6	7.0	—	3.1	"	"	"	油煙付着、外面体部剥離痕	33	E-659
550	"	"	調理具	播鉢	その他	8.3	(19.9)	—	(8.8)	"	"	"	櫛目数20本、1cm単位に7本		E-660

第91図 近世の遺物 (33) その他の遺構⑦ (547・548は1:4, 他は1:3)

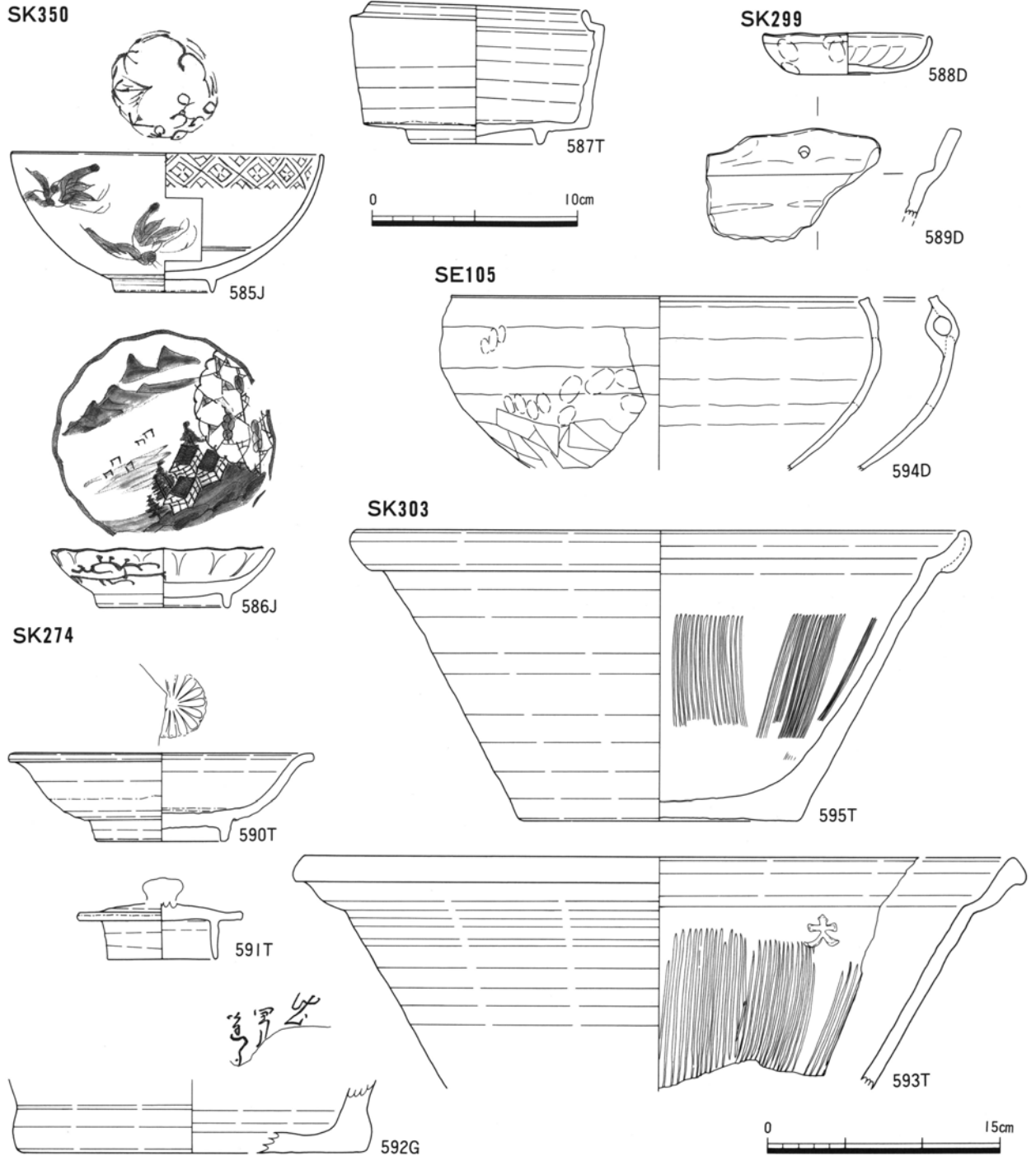






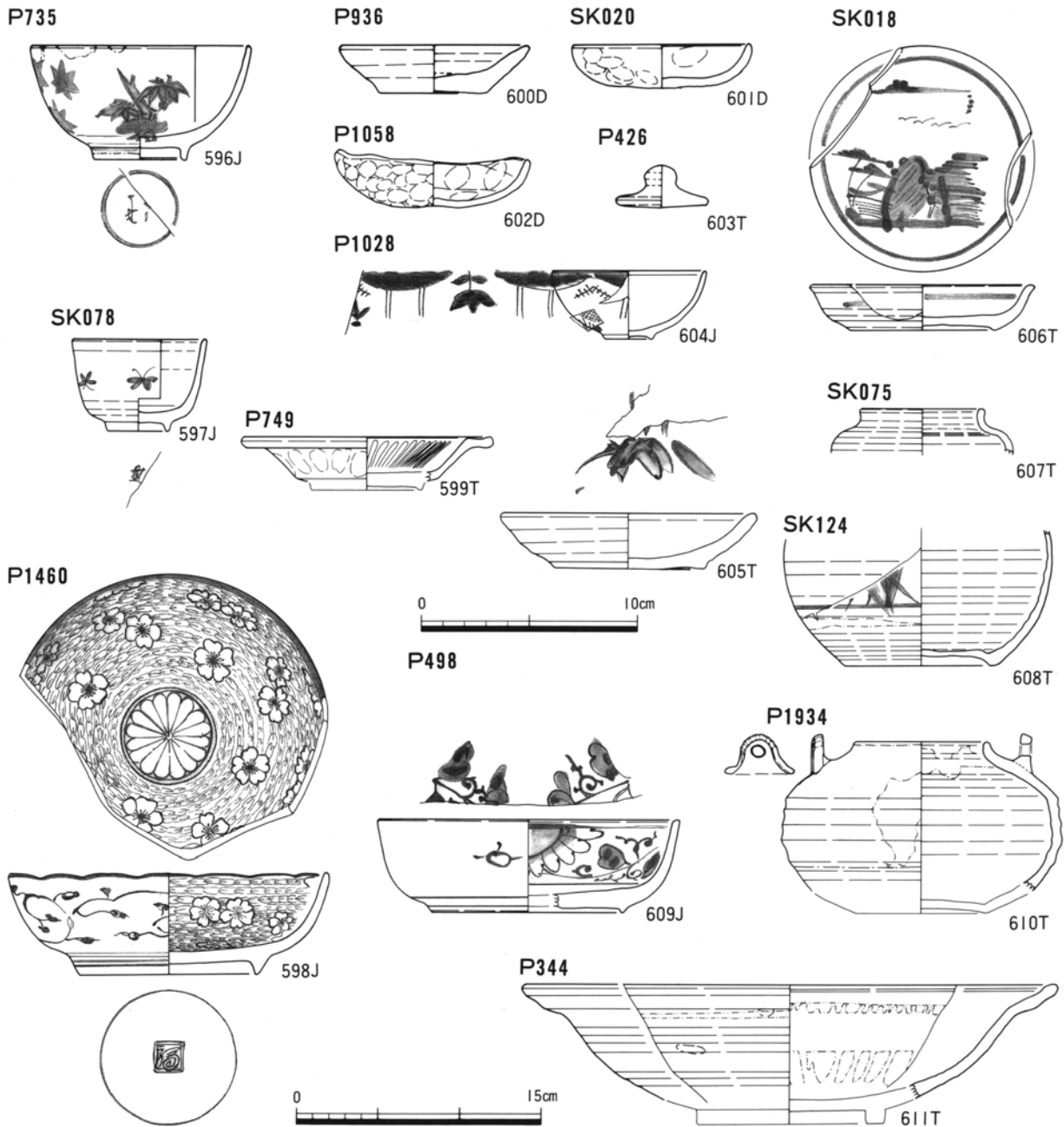
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL 登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
571	92A	SK340	灯火具	皿	灯明皿	2.9	(10.5)	—	—	ナデ	指押え	不明	色調：にぶい橙色，内外面油煙付着	E-681
572	"	"	貯蔵具	瓶	その他	—	—	—	4.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕，炭化物付着	E-682
573	"	"	喫煙具	火入れ	—	—	(29.6)	—	—	ナデ	ナデ	常滑	赤物，無蓋壺の転用か	E-683
574	"	SK345	供膳具	鉢	その他	—	—	—	6.6	白泥+灰釉	灰釉	肥前	白泥による刷毛目，17世紀後半～18世紀初頭	30 E-684
575	"	"	"	小椀	端反椀	4.8	7.1	—	3.6	—	—	"	込付・乾籠に山水文，高古に砂融着， 17世紀後半	26 E-685
576	"	"	貯蔵具	壺	無蓋壺	—	27.6	36.1	—	指押え	ナデ	常滑		32 E-686
577	"	SK246	神仏具	その他	—	4.2	4.6	—	2.8	ナデ	灰釉	瀬・美		34 E-687
578	"	"	火具	鉢	風炉	—	—	25.9	17.0	銅緑釉+鉄釉	銅緑釉+鉄釉	"	押印，ヘラによる筋彫り	33 E-688
579	"	SK313	供膳具	椀	丸椀	5.7	(10.2)	—	3.7	—	—	肥前	込付・紅葉文+「太明年製」，高古砂融着， 1690-18世紀前半	24 E-689
580	"	"	"	"	その他	—	—	—	4.5	灰釉	灰釉	不明	関西系か福岡	23 E-690
581	"	"	調理具	鉢	片口	—	(13.8)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-691
582	"	SK338	灯火具	皿	灯明皿	2.1	(11.9)	—	(6.1)	ナデ	ナデ	不明	色調：橙色，口縁部油煙付着， 底部回転糸切痕	E-692
583	"	"	供膳具	鉢	型打鉢	5.9	(27.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須筆散らし	30 E-693
584	"	SK320	火具	その他	その他	18.0	—	9.0	12.1	ナデ	鉄釉	"	火もらいか	33 E-694

第93図 近世の遺物 (35) その他の遺構⑨ (573・576・578・583・584は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
585	92A	SK350	供膳具	鉢	丸鉢	6.7	(14.9)	—	4.7	—	—	肥前系	染付・鶴文+割小菱・松竹梅文, 19世紀代	30	E-695
586	"	"	"	皿	型打皿	2.8	10.6	—	6.2	—	—	肥前	染付・桜間山水文+唐草文, 口化粧, 19世紀前半	29	E-696
587	"	"	貯蔵具	鉢	蓋物B	6.8	10.4	—	6.3	ナデ	灰釉	瀬・美	肩径12.2cm	32	E-697
588	"	SK299	供膳具	皿	土師器皿B	2.0	7.9	—	3.6	—	指押え+ナデ	不明	色調：淡橙色		E-698
589	"	"	調理具	鍋, 釜	鍋	—	—	—	—	指押え+ナデ	"	"			E-699
590	"	SK274	供膳具	皿	端反皿	4.2	(14.2)	—	(6.2)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み印花, 見込み蛇ノ目釉刺ぎ	28	E-700
591	"	"	その他	蓋	蓋D	—	5.2	—	—	ナデ	"	不明	肩径7.7cm	36	E-701
592	"	"	火具	鉢	その他	—	—	—	(16.0)	"	ナデ	"	内側底部に刻書	33	E-702
593	"	"	調理具	搦鉢	VII類	—	(45.6)	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	横目数15本・1cm単位に3本, 押印「大」, 内面摩 滅痕		E-703
594	"	SE105	"	鍋・釜	内耳鍋	—	(26.8)	—	—	ナデ	指押え+ナデ	不明	色調：赤褐色, 外面煤付着		E-704
595	"	SK303	"	搦鉢	VI類	18.6	(39.2)	—	(17.4)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	横目数16本, 1cm単位に4本, 内面・見込み摩滅 痕	31	E-705

第94図 近世の遺物 (36) その他の遺構⑩ (593~594は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
596	93B	P 735	供膳具	椀	丸椀	5.2	(9.9)	—	4.1	—	—	肥前	染付(コンニャク印)・松・竹・紅葉文+「大明年製」, 1690-18世紀前半	24	E-706
597	"	SK078	"	小椀	丸椀	4.2	(6.0)	—	2.6	—	—	"	染付・蝶文+変形文字, 18世紀代	27	E-707
598	92A	P1460	"	皿	ひだ・桜花皿	4.6	(14.4)	—	8.0	—	—	"	口化粧, 染付・菊花文・桜花文+唐草文+二角満福, 18世紀後半	30	E-708
599	93B	P 749	"	"	折縁皿	—	(11.2)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	丸ノミ調整	28	E-709
600	"	P 938	"	"	土師器皿A	2.2	8.4	—	4.7	ナデ	ナデ	不明	色調: 淡黄色, 底部回転糸切痕	34	E-710
601	"	SK020	"	"	土師器皿B	(2.0)	(8.0)	—	—	指押え+ナデ	指押え	"	色調: 浅黄橙色		E-711
602	"	P1058	"	"	"	2.4	8.5	—	—	"	"	"	色調: 淡橙色		E-712
603	"	P 426	その他	蓋	蓋C	1.9	4.1	—	—	ナデ	灰釉	瀬・美	つまみ径約1.5cm, 回転糸切痕	35	E-713
604	"	P1028	供膳具	小椀	丸椀	3.1	(6.9)	—	(2.2)	—	—	肥前	染付・羽根つき文, 18世紀末~19世紀前半	27	E-714
605	"	"	"	皿	丸皿	2.6	11.6	—	6.8	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵・番文, 見込み, 底部にトチン痕, 口縁の一部に重ね焼きの剝離痕	27	E-715
606	"	SK018	"	端反皿	端反皿	2.1	10.0	—	6.6	灰釉	灰釉	"	呉須絵・山水文, 蛇ノ目凹形高台, 19世紀前半	27	E-716
607	"	SK075	貯蔵具	壺	茶入	—	(5.2)	(8.2)	—	ナデ	鉄釉	"			E-717
608	"	SK124	調理具	瓶	土瓶	—	—	(16.4)	9.1	ナデ	白泥+透明釉	肥前系	鉄絵・草花文	31	E-718
609	"	P 498	供膳具	皿	丸皿	4.2	(13.7)	—	(8.7)	—	—	瀬・美	染付・菊唐草文+宝文, 蛇ノ目凹形高台, 1820-幕末		E-719
610	92A	P1934	調理具	瓶	土瓶	—	(7.6)	(17.0)	—	ナデ	鉄釉+灰釉	"	口縁部釉剥ぎ	31	E-720
611	93B	P 344	供膳具	鉢	端反鉢	—	(32.4)	—	—	白磁+鉄系釉+銅緑釉	鉄釉+銅緑釉	肥前		30	E-721

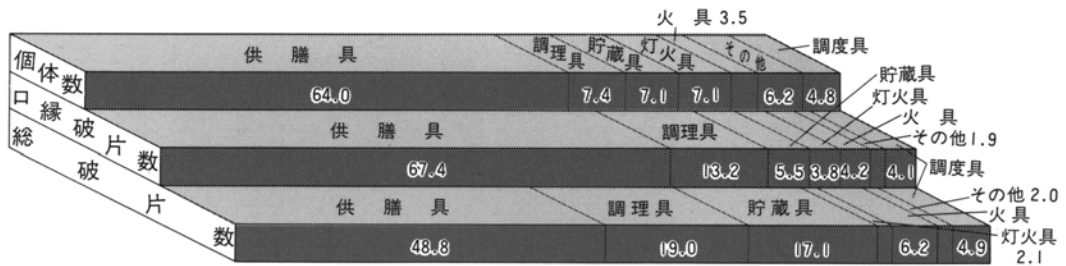
第95図 近世の遺物 (37) その他の遺構① (608・610・611は1:4, 他は1:3)

検出合計

今回の発掘調査で包含層掘り下げや遺構検出段階において出土した遺物の合計を、「検出合計」として取り扱うこととする。ただし、時間的な制約の中でカウントを基礎整理の中心に据えたため、接合等の整理作業を途中で切り上げることとなり、遺構出土遺物との接合が完全には終了していない。そのため、本来は遺構の遺物となるべきものも、この合計の中に加算されていることをここで断わっておきたい。出土した遺物の合計は、総破片数で24,083点、接合前口縁破片数が7,154点、個体数は428.08個体となっている。全出土遺物に占める割合は35.5%と高い割合を示している。

この内、供膳具が247.00個体・64.0%、調理具が28.50個体・7.4%、貯蔵具が27.42個体・7.1%、灯火具が27.25個体・7.1%、火具が13.33個体・3.5%、化粧具が6.50個体・1.7%、神仏具が15.58個体・4.0%、喫煙具が1.67個体・0.4%、調度具が18.58個体・4.8%と、数値の増減があるものの全体の平均値に近い数字を示している。これは、前出した「その他の遺構合計」とも同様であり、本遺跡における近世陶磁器類の組成を表しているものと想定される。また、蓋類は、総破片数で498点、接合前口縁破片数が338点、個体数では42.25個体出土している。

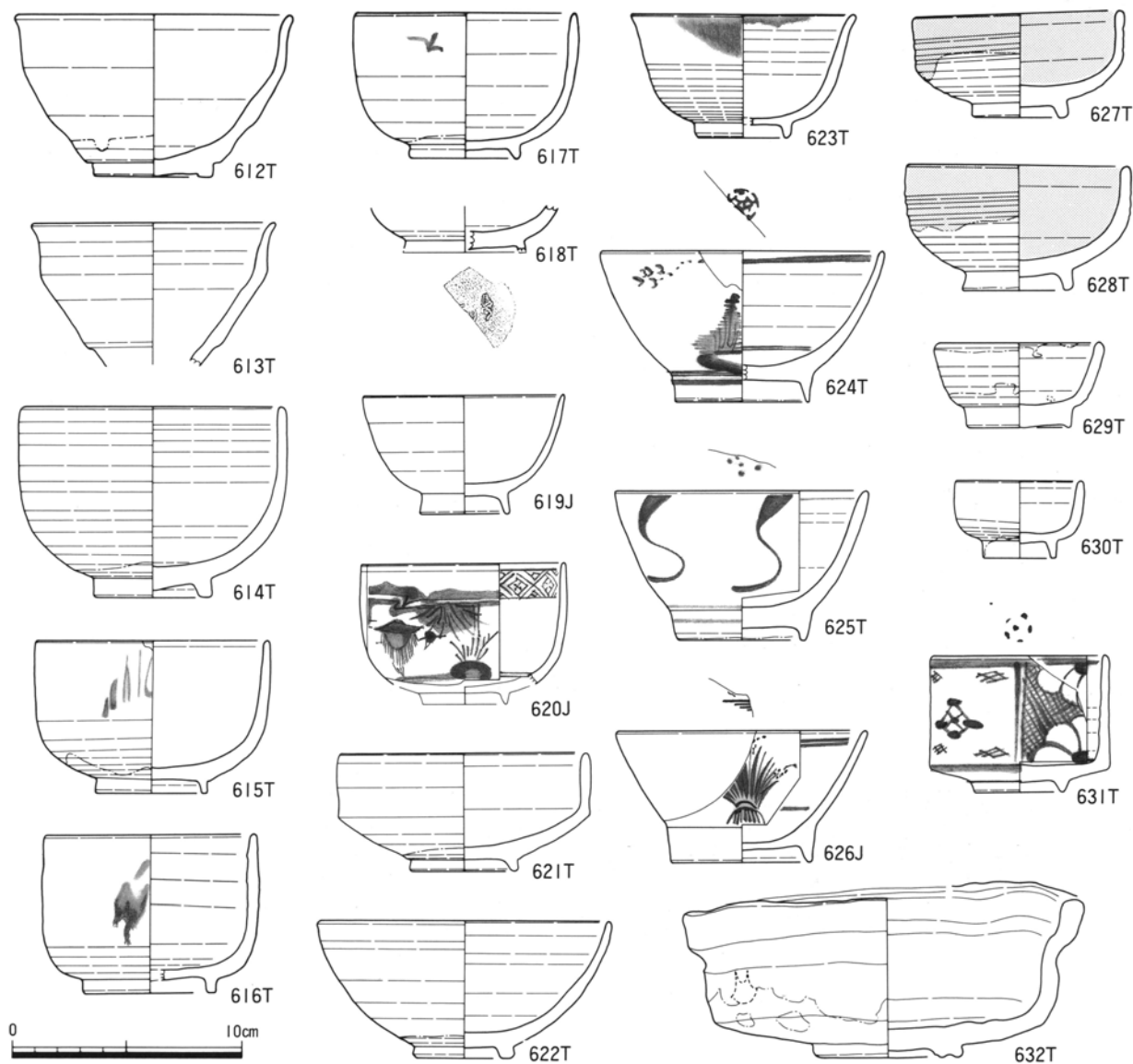
材質面では、土師質製品が15.3%と減少しているのに対して、陶磁器類では陶器製品が40.4%、磁器製品が43.5%となり、磁器製品の出土比率が急増しており、新しい時期の様相を示している。



第96図 検出合計陶磁器類の用途組成

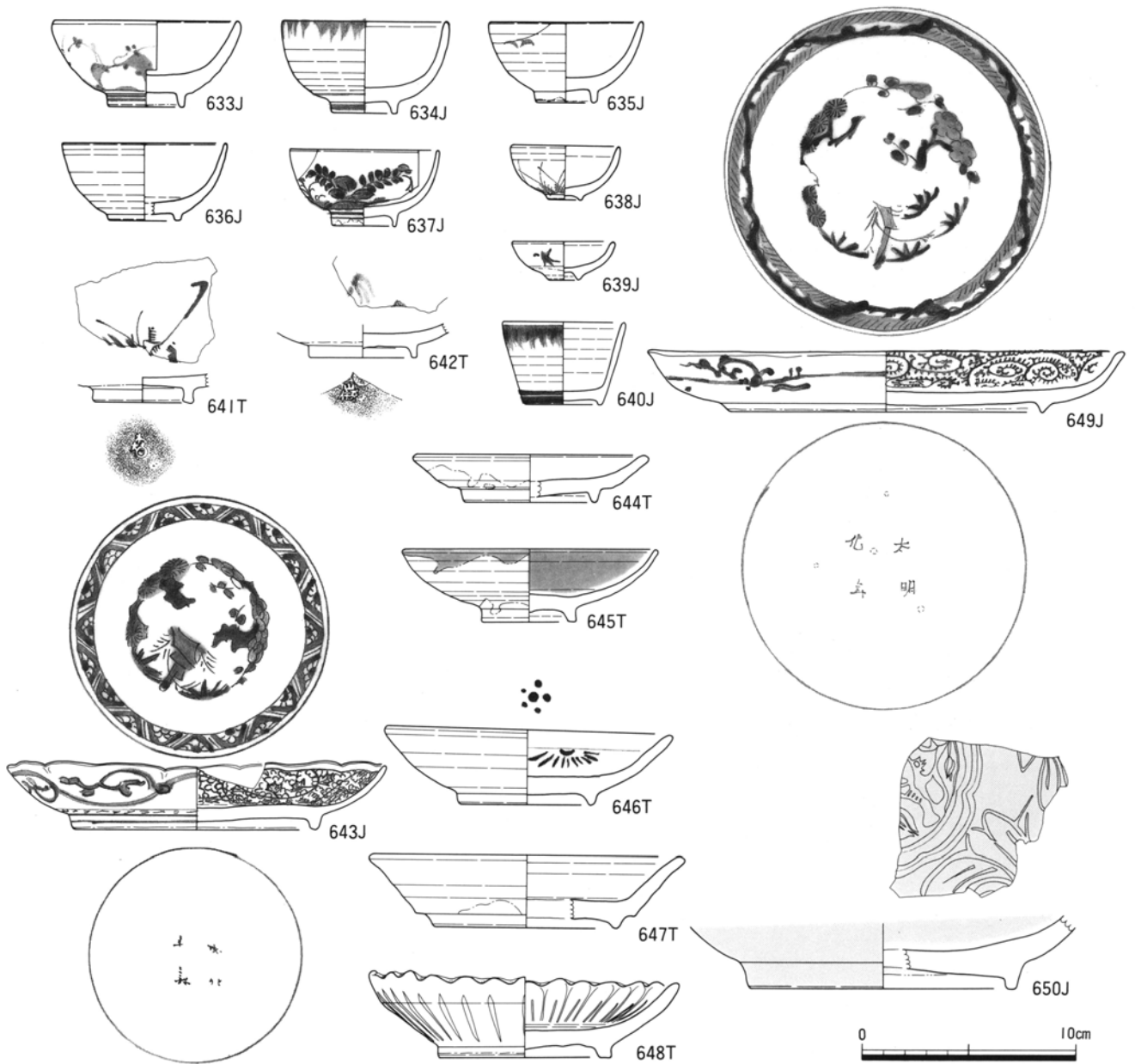
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	0	436	669	8	1113	0	813	1209	5	2027	0	2610	3045	18	5673
	小椀	0	139	634	0	773	0	181	647	0	827	0	363	1190	0	1553
	皿	515	188	263	0	966	674	404	441	0	1519	1331	1060	1137	1	3529
	鉢	0	46	65	1	112	0	124	90	3	217	0	531	220	4	755
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	515	809	1631	9	2964	674	1522	2387	8	4591	1331	4564	5592	23	11510
調理具	鍋、釜	42	46	0	20	108	333	70	0	28	431	1964	365	0	136	2465
	鉢	0	61	1	0	62	0	113	2	0	115	0	377	11	0	388
	播鉢	0	67	0	0	67	0	264	0	0	264	0	1009	0	0	1009
	瓶	0	63	39	0	102	0	63	21	0	84	1	455	158	0	614
	その他	0	0	3	0	3	0	0	2	0	2	0	6	2	1	9
	小計	42	237	43	20	342	333	510	25	28	896	1965	2212	171	137	4485
貯蔵具	瓶	0	66	22	0	88	0	30	5	0	35	0	769	107	1	877
	壺	4	75	2	0	81	6	63	2	0	71	20	428	7	0	455
	甕A	0	28	0	0	28	0	82	0	0	82	0	1779	0	0	1779
	甕B	0	44	0	1	45	0	89	0	1	90	11	704	1	1	717
	鉢	0	20	67	0	87	0	28	69	0	97	0	102	96	0	198
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
小計	4	233	91	1	329	6	292	76	1	375	31	3783	211	2	4027	
灯火具		98	225	4	0	327	111	147	3	1	262	208	253	5	17	483
火具		43	108	1	8	160	109	156	2	21	288	569	786	6	99	1460
化粧具		0	14	64	0	78	0	5	19	0	24	0	29	62	0	91
神仏具		0	36	151	0	187	0	38	53	0	91	0	99	165	0	264
喫煙具		0	8	12	0	20	0	11	1	0	12	0	88	25	0	113
調度具		5	200	15	3	223	5	254	14	4	277	30	1007	100	15	1152
蓋		1	259	230	17	507	2	188	140	8	338	6	272	206	14	498
合計		708	2129	2242	58	5137	1240	3123	2720	71	7154	4140	13093	6543	307	24083

第17表 検出合計陶磁器類集計表



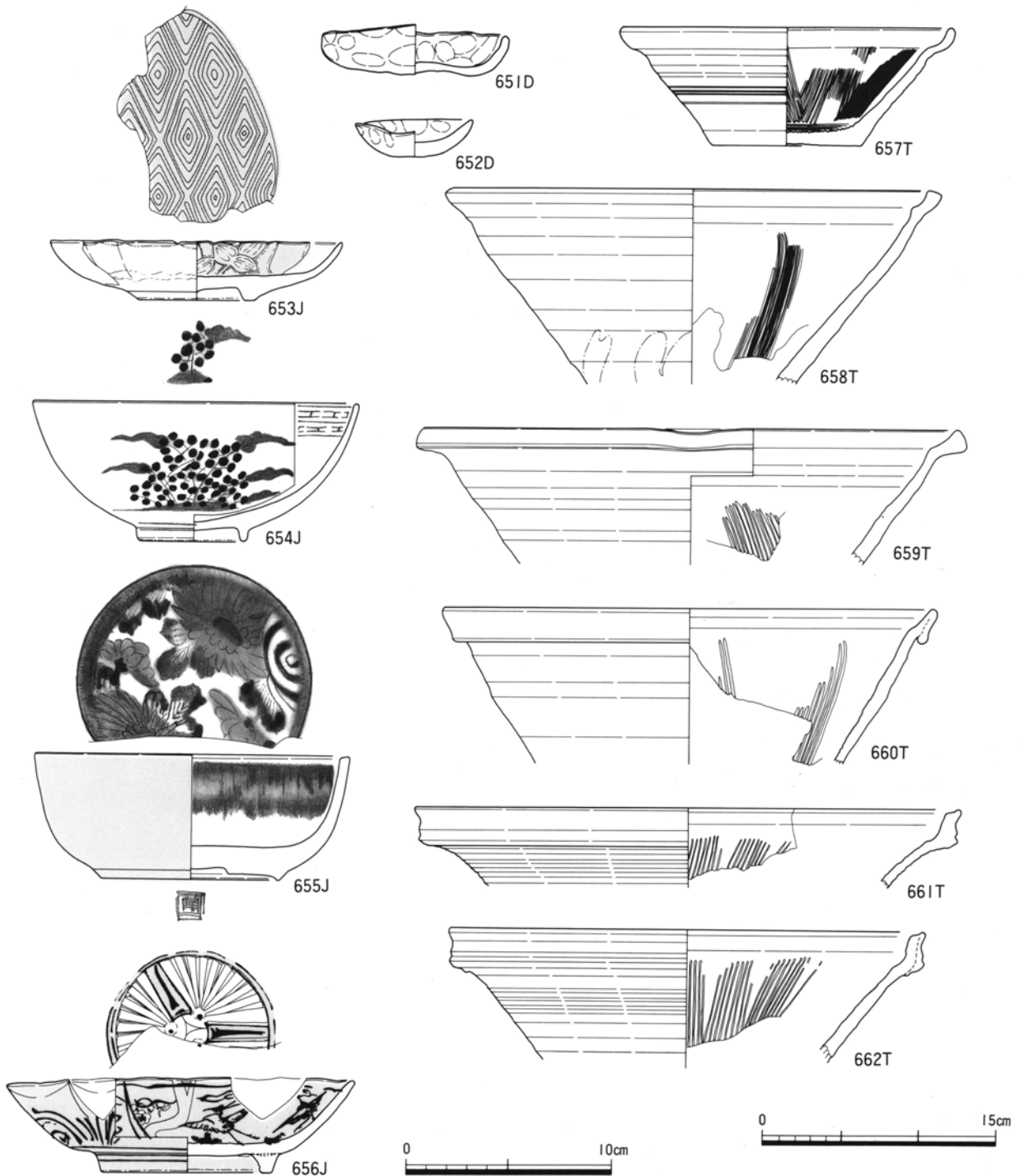
遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
612	93B	検I	供膳具	椀	天目椀	7.0	(11.7)	—	5.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美		23	E-722
613	92A	検III	"	"	"	—	(10.4)	—	—	灰釉	灰釉	"			E-723
614	93B	検I	"	"	丸椀	8.2	(11.1)	—	4.9	"	"	"	尾呂茶碗か		E-724
615	92A	検III	"	"	"	6.6	(10.0)	—	4.8	"	"	"	呉須絵・山水文か	23	E-725
616	"	検I	"	"	"	6.7	(8.9)	—	(5.6)	"	"	肥前	鉄絵, 17世紀後半~18世紀初	23	E-726
617	"	"	"	"	"	6.3	(9.6)	—	(4.7)	"	"	瀬・美	呉須絵	23	E-727
618	"	"	"	"	"	—	—	—	—	"	"	肥前	高台内に押印「清水」, 17世紀後半		E-728
619	93B	検II	"	"	"	5.1	8.6	—	3.7	—	—	"	白磁, 18世紀代	24	E-729
620	"	"	"	"	"	—	(8.6)	—	—	—	—	"	染付・竹の子掘り文, 1780~1810	24	E-730
621	"	検I	"	"	腰折椀	5.0	(10.6)	—	(4.3)	—	—	瀬・美		25	E-731
622	"	検III	"	"	平椀	5.9	(12.4)	—	4.0	灰釉	灰釉	"	柳茶碗か, 19世紀初	23	E-732
623	"	検I	"	"	端反椀	5.3	(9.5)	—	(3.8)	"	"	"	呉須流し掛け, 18世紀後半~19世紀前半	25	E-733
624	"	検III	"	"	広東椀	6.4	(12.1)	—	(5.7)	"	"	"	呉須絵・山水文+五弁花(コンニャク印か)	25	E-734
625	92A	"	"	"	"	(6.5)	(10.8)	—	(5.5)	"	"	"	呉須絵・ねじり花文+五弁花	25	E-735
626	"	検II	"	"	"	(5.6)	(10.6)	—	(6.0)	—	—	肥前	染付・東稲文+岩に波濤文, 1780~19世紀前半		E-736
627	"	検III	"	"	腰錆椀	4.5	(8.9)	—	3.8	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	高台豊付部分に剝離痕		E-737
628	"	検I	"	"	"	5.4	9.5	—	4.7	灰釉	灰釉+鉄釉	"		26	E-738
629	93B	"	"	小椀	丸椀	3.6	(6.9)	—	(4.4)	"	灰釉	"	見込みトチン痕	26	E-739
630	92A	"	"	"	"	3.3	5.4	—	3.0	"	"	"		26	E-740
631	93B	検III	"	"	筒椀	5.9	(7.2)	—	3.8	"	"	"	呉須絵・菊花散し文・幾何文+梅花文	26	E-741
632	92A	検I	"	椀	その他	7.0	15.5	—	5.8	鉄釉	鉄釉	"	沓茶椀, 瀬戸黒か	25	E-742

第97図 近世の遺物 (38) 検出① (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
633	93B	検II	供膳具	小碗	丸碗	(4.0)	8.4	-	(3.4)	-	-	肥前	染付・雪輪に梅樹文、「くらわんか」手, 18世紀後半		E-743
634	92A	検I	"	"	"	4.2	(7.6)	-	3.1	-	-	"	染付・雨降り文, 高台に砂融着, 18世紀後半	26	E-744
635	93B	"	"	"	"	3.7	(7.0)	-	2.6	-	-	肥前系	染付・草花文, 焼成不良		E-745
636	92A	検II	"	"	"	3.6	(7.5)	-	(3.3)	-	-	肥前	白磁か, 18世紀代		E-746
637	"	検I	"	"	"	3.5	(6.8)	-	2.9	-	-	"	染付・草花文, 高台内に砂融着, 17世紀末-18世紀前半	26	E-747
638	93B	"	"	"	"	2.5	5.0	-	1.5	-	-	"	染付・草文, 18世紀後半~19世紀初	26	E-748
639	92A	"	"	"	"	1.8	(4.6)	-	(1.3)	-	-	瀬・美	染付・笹文	27	E-749
640	93B	"	"	"	蕎麦猪口	3.8	4.8	-	3.6	-	-	肥前	染付・雨降り文, 18世紀前半	26	E-750
641	"	検II	"	"	皿	丸皿	-	-	(4.5)	灰釉	灰釉	"	呉須絵・楼閣山水文, 高台内押印「森」, 17世紀末-18世紀初	28	E-751
642	92A	検I	"	"	"	-	-	-	(5.0)	"	"	"	呉須絵・山水文, 高台内「山原住」	28	E-752
643	"	"	"	"	型打皿	2.9	17.4	-	11.1	-	-	"	染付・鹿子唐草文・円環松竹梅文+唐草文+「成 化年製」, 19世紀前半-幕末	29	E-753
644	93B	"	"	"	丸皿	2.2	(10.5)	-	(6.0)	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みに重ね焼きの剥離痕		E-754
645	92A	"	"	"	"	3.3	(11.8)	-	(4.4)	青緑釉	青緑釉	肥前	見込み蛇ノ目刺ぎ, 18世紀前半		E-755
646	"	検III	"	"	"	3.5	13.1	-	6.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵・菊花文+五弁花, 見込み蛇ノ目刺ぎ	28	E-756
647	"	検I	"	"	稜皿	3.3	(14.0)	-	(8.4)	"	"	"	見込み・高台内にトチン痕, 体部重ね焼きの剥離痕		E-757
648	"	"	"	"	菊皿	3.7	13.9	-	7.8	"	"	"	高台内にトチン痕	29	E-758
649	"	"	"	"	ひだ・菱花皿	2.8	21.7	-	14.3	-	-	肥前	染付・繪唐草文・円環松竹梅文+唐草文+「大明 化年」, 18世紀後半		E-759
650	93B	"	"	"	丸皿	-	-	-	(12.1)	-	-	"	青磁, ヘラ削り, 高台内鉄錆, チャツ痕, 1650-1660	28	E-760

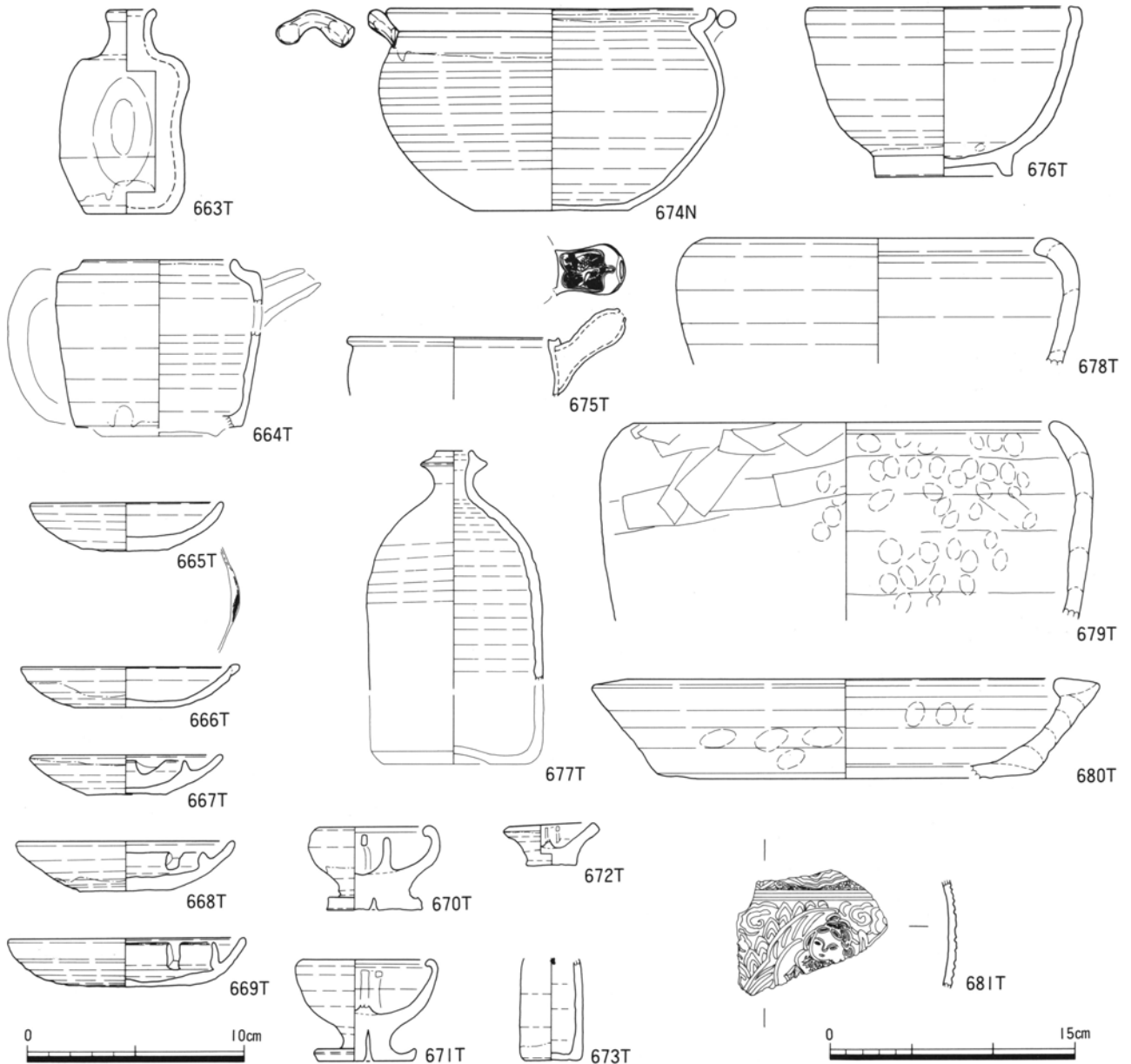
第98図 近世の遺物 (39) 検出② (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
651	93B	検II	供膳具	皿	土師器皿B	1.9	8.6	-	-	指押え+ナデ	指押え	不明	色調：浅黄橙色	29	E-761
652	92A	"	"	"	"	1.8	5.7	-	-	"	指押え+ナデ	"	色調：淡黄橙色	29	E-762
653	"	"	"	"	型打皿	2.8	(13.9)	-	5.3	青磁	白磁	肥前	陽刻・草文+幾何文、青白磁掛け分け、高台砂藏著、1630-1640	29	E-763
654	"	検I	"	鉢	丸鉢	6.7	15.4	-	4.8	-	-	"	染付・草文・蝶文、焼き継ぎ痕、19世紀初~幕末	30	E-764
655	"	"	"	"	"	5.9	(15.0)	-	(8.5)	-	-	"	染付・菊流水文+「簡江」、蛇ノ目凹型高台、18世紀後半	30	E-765
656	"	"	"	"	型打鉢	4.5	16.3	-	8.1	青磁	青磁	関西系	青磁色絵+陽刻・雲に菊・草花文+梅樹文、三田、1810-幕末	30	E-766
657	"	"	調理具	播鉢	VII類	7.6	(21.2)	-	(9.5)	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目18本、1cm単位に4本		E-767
658	"	検III	"	"	III類	-	(30.7)	-	-	"	"	"	櫛目数14本、1cm単位に5本、内面摩滅痕	31	E-768
659	"	"	"	"	"	-	(34.4)	-	-	"	"	"	櫛目数不明、1cm単位に4本	31	E-769
660	"	"	"	"	VI類	-	(31.4)	-	-	"	"	"	櫛目数不明、1cm単位に3本		E-770
661	"	検I	"	"	IX類	-	(34.8)	-	-	-	-	備前	焼き締め、櫛目数8本、1cm単位に4本		E-771
662	"	"	"	"	"	-	(30.5)	-	-	-	-	"	焼き締め、櫛目数8本、1cm単位に4本、口縁部自然釉	31	E-772

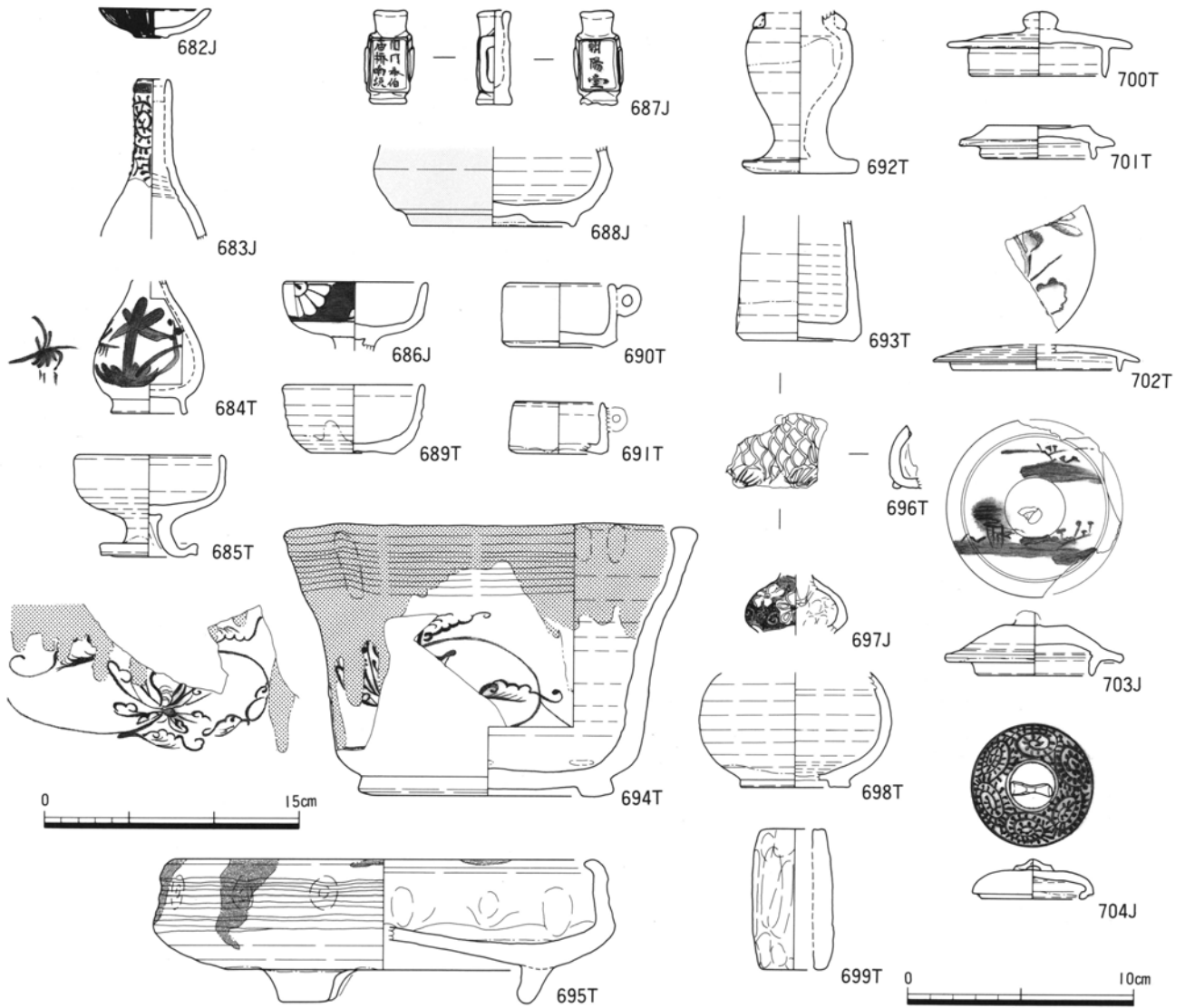
第99図 近世の遺物 (40) 検出③ (657~662は1:4, 他は1:3)





遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
663	92A 検I	貯蔵具	瓶	德利D	9.3	2.1	6.3	3.9	灰釉+鉄釉	灰釉+鉄釉	瀬・美		32	E-773	
664	" "	"	"	汁次B	-	(6.8)	(9.2)	-	鉄釉	鉄釉	"			E-774	
665	93B "	灯火具	皿	灯明皿	2.2	8.6	-	3.8	"	"	"	内外面に油煙付着, 見込み・底部に重ね焼きによる剝離痕		E-775	
666	" "	"	"	"	1.9	(9.6)	-	(4.3)	"	"	"	口縁部油煙付着		E-776	
667	92A 検III	"	"	灯蒸	1.8	(8.4)	-	(3.5)	灰釉	灰釉	京・信		33	E-777	
668	93B 検II	"	"	"	2.3	9.7	-	4.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美	内区径6.9cm, 油煙付着, 体部に重ね焼きによる剝離痕		33	E-778
669	" 検I	"	"	"	2.2	10.6	-	3.7	"	"	"	内区径7.9cm, 油煙付着, 外面体部に重ね焼きによる剝離痕		E-779	
670	" 検II	"	乗燭	II類	3.8	4.9	-	4.3	"	"	"	底部回転糸切痕, 底部穿孔(径0.4cm)		E-780	
671	92A 検I	"	"	III類	4.6	(5.8)	-	4.3	"	"	"	底部回転糸切痕, 底部に穿孔(径約0.4cm)		E-781	
672	" "	"	"	"	1.8	3.9	-	2.2	灰釉	灰釉	"	底部回転糸切痕	33	E-782	
673	" "	"	"	その他	-	-	-	(2.4)	ナテ	透明釉	不明	鉄絵		E-783	
674	93B "	調理具	鍋, 釜	鍋	12.3	19.4	21.0	9.2	透明釉	"	"	外面煤付着		E-784	
675	92A 検II	"	"	行平	-	(12.7)	-	-	灰釉	灰釉	関西系	型押し成形か・鶴と亀	31	E-785	
676	" "	"	"	鉢	片口	13.0	(15.7)	-	8.4	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みにトチン痕	31	E-786
677	93B 検I	貯蔵具	瓶	油德利	-	2.2	10.7	-	ナテ	ナテ	"		32	E-787	
678	" 検II	火具	鉢	火鉢	-	(20.8)	-	-	ナテ	ナテ	常滑	赤物		E-788	
679	" "	"	"	"	-	(26.0)	(30.1)	-	指押え+ナテ	指押え+ナテ	"	赤物	33	E-789	
680	" "	"	"	火桶	6.1	(25.8)	-	(23.2)	指押え+ナテ	"	"	赤物		E-790	
681	" 検I	"	"	その他	-	-	-	-	ナテ	"	不明	内面煤付着, へら彫りか	33	E-791	

第100図 近世の遺物 (41) 検出④ (674~681は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
			器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
682	92A	検II	化粧具	紅皿	—	1.3	4.9	—	1.3	—	—	肥前	白磁, 型押し成形, 19世紀代	34	E-792
683	"	"	神仏具	瓶	神酒徳利 A	—	1.4	—	—	—	—	関西系	染付・蛸唐草文, 19世紀初頭		E-793
684	"	"	"	"	神酒徳利 B	—	—	4.8	(3.2)	—	—	瀬・美	染付・若松に笹文, 高台に砂融着	34	E-794
685	93B	検I	"	仏飯器	—	4.5	(6.3)	—	(4.1)	灰釉	灰釉	"		34	E-795
686	92A	"	"	"	—	—	(6.2)	—	—	—	—	"	上絵付(赤)・菊花文		E-796
687	"	"	喫煙具	その他	—	4.1	1.4	—	1.4	—	—	中国	鼻煙壺, 染付・文字文, 底部に刺雕痕, 18世紀-19世紀代	34	E-797
688	"	検III	火入れ	香炉型	—	—	(10.5)	—	(7.0)	—	青磁	肥前	鉄鉢, 蛇ノ目凹形高台, 刺雕痕, 17世紀末-18世紀前半	34	E-798
689	"	"	調度具	餌鉢	餌鉢	3.0	(6.0)	—	3.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美	柿釉か	35	E-799
690	"	検II	"	"	"	2.8	(4.5)	—	4.2	灰釉	灰釉	"	底部回転糸切痕	35	E-800
691	"	検I	"	"	"	2.3	3.8	—	3.7	—	—	"	底部回転糸切痕		E-801
692	"	"	"	花生	壺型	—	—	4.7	4.3	灰釉+鉄釉	—	"	底部回転糸切痕		E-802
693	93B	検II	"	その他	筒型容器	—	—	—	4.8	灰釉	—	"		35	E-803
694	92A	検I	"	水甕	その他	15.7	22.4	—	(13.0)	—	—	"	鉄絵, 呉須流し掛け, 見込みトチン痕	35	E-804
695	93B	"	"	水指	水盤	(8.3)	(24.4)	(27.0)	(18.4)	—	—	"	鉄釉流し掛け, 凹部16ヶ所	35	E-805
696	"	検III	"	"	水滴	—	—	—	—	指押え	—	"	型押し成形, 御深井か	35	E-806
697	"	検I	"	"	—	—	—	(4.5)	—	指押え+ナデ	—	肥前	型押し成形, 染付・蛸唐草文・梅花文, 18世紀後半-19世紀前半	35	E-807
698	"	"	"	"	その他	—	—	(8.4)	(4.8)	灰釉	灰釉	関西	呉須流し掛けか, 18世紀後半~幕末	35	E-808
699	"	"	"	その他	その他	6.1	2.9	3.5	—	—	—	常滑	土鍾, 穴径1.9cm		E-809
700	92A	"	その他	蓋	蓋 D	2.8	5.9	—	—	灰釉	ナデ	不明	肩径約8.1cm・つまみ径約1.5cm	36	E-810
701	"	検II	"	"	蓋 G	1.5	4.8	—	—	—	灰釉	瀬・美	肩径6.6cm	36	E-811
702	"	検I	"	"	"	(1.1)	(7.3)	—	—	透明釉	透明釉	京・信	上絵付(青・緑)・草花文, 18世紀前葉		E-812
703	93B	検II	"	"	蓋 H	—	(4.9)	—	—	ナデ	—	肥前	染付・山水文, 1630~1640	36	E-813
704	"	"	"	"	"	1.7	4.4	—	—	—	—	"	染付・蛸唐草文, 肩径5.3cm, 19世紀前半~幕末	36	E-814

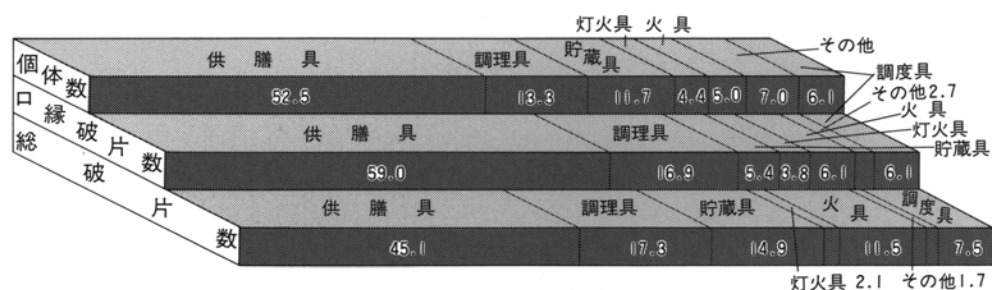
第101図 近世の遺物 (42) 検出⑤ (694・695は1:4, 他は1:3)

その他合計

今回の発掘調査で表土剥ぎやトレンチ掘削等、掘り下げ・検出・遺構以外で出土した遺物の合計を、「その他合計」として取り扱うこととする。出土した遺物の合計は、総破片数で5,411点、接合前口縁破片数が1,669点、個体数は123.83個体となっている。

この内、供膳具が58.17個体・52.5%、調理具が14.75個体・13.3%、貯蔵具が13.00個体・11.7%、灯火具が4.92個体・4.4%、火具が5.50個体・5.0%、化粧具が2.92個体・2.6%、神仏具が4.67個体・4.2%、喫煙具が0.17個体・0.2%、調度具が6.75個体・6.1%となっている。また、蓋類は、総破片数で141点、接合前口縁破片数が99点、個体数では13.00個体出土している。

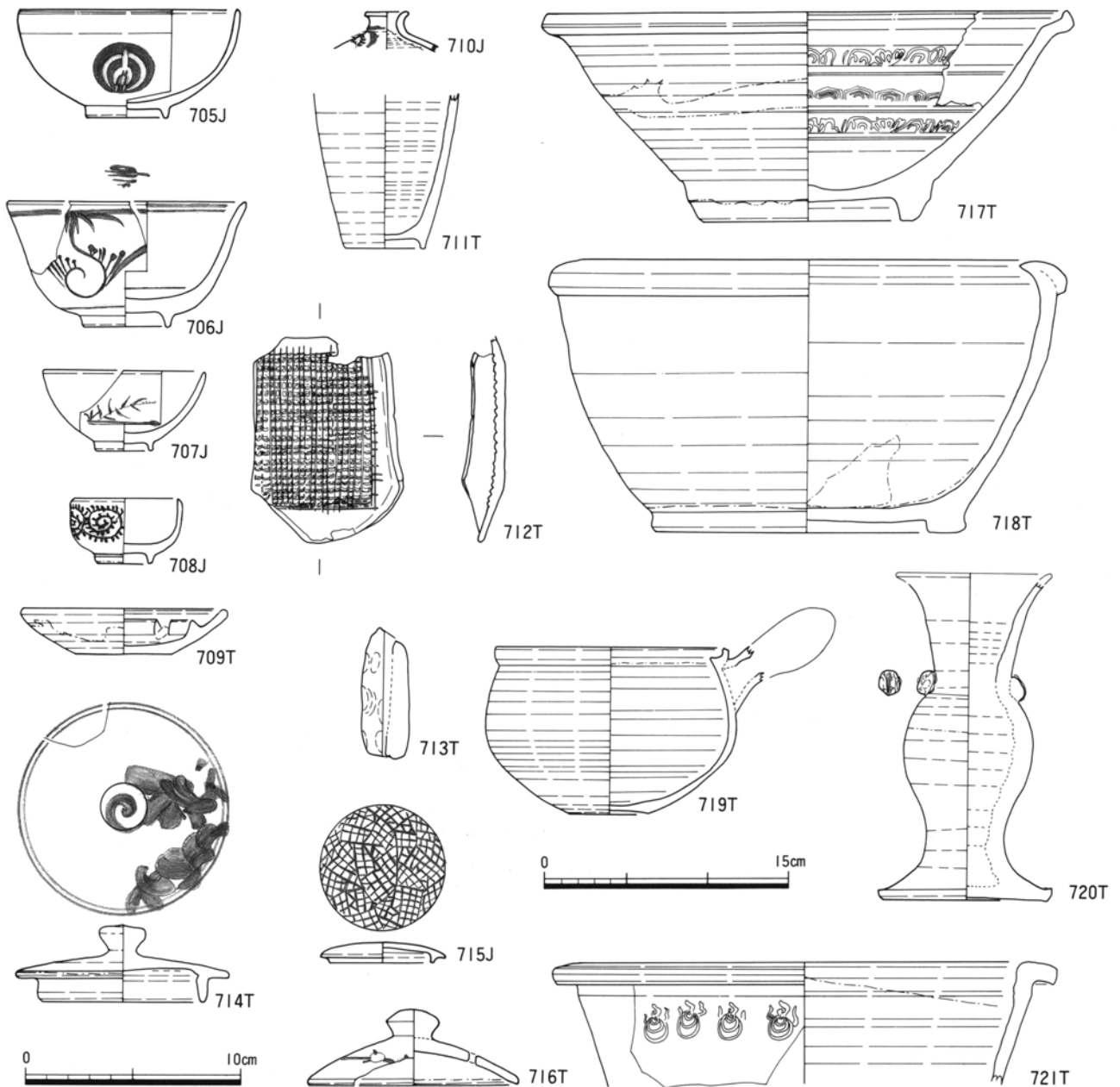
材質面では、土師質製品が8.5%と激減しているのに対して、陶磁器類では陶器製品が41.1%、磁器製品が48.6%と、磁器製品の出土比率が「検出合計」と同様に急増している。これが、全体の磁器製品の比率を引き上げているため、「検出合計」とともに注意する必要があると思われる。(小嶋廣也)



第102図 その他合計陶磁器類の用途組成

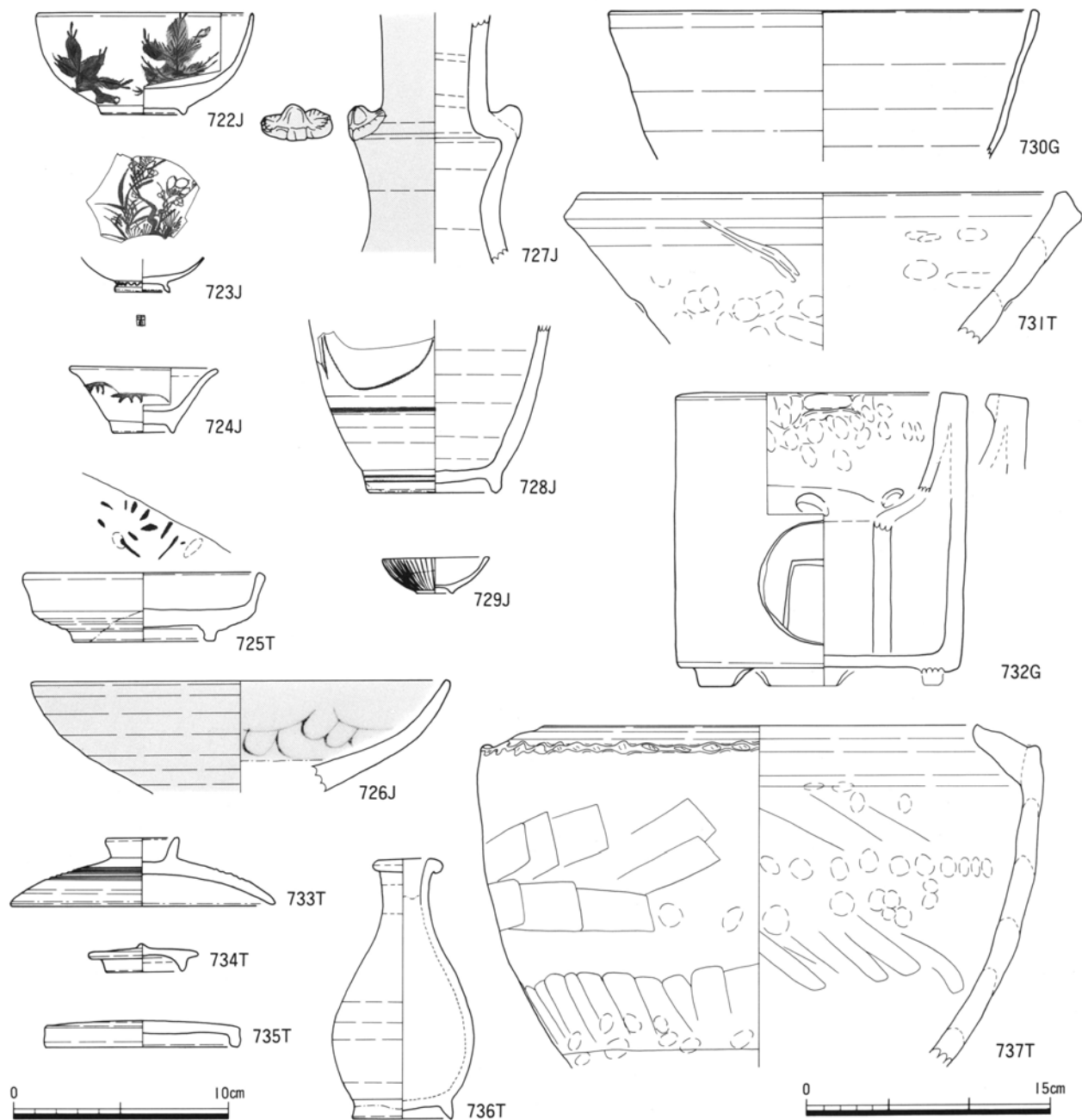
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	0	64	169	0	233	0	111	245	0	356	0	363	685	0	1048
	小椀	0	23	181	0	204	0	19	182	0	201	0	47	378	0	425
	皿	83	31	105	0	219	100	63	141	0	304	188	164	329	0	681
	鉢	0	14	28	0	42	0	28	38	0	66	0	143	81	0	224
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	83	132	483	0	698	100	221	606	0	927	188	717	1473	0	2378
調理具	鍋、釜	6	16	0	7	29	47	19	0	24	90	222	80	0	76	378
	鉢	0	26	0	0	26	0	52	0	0	52	0	122	0	0	122
	播鉢	0	31	0	0	31	0	74	0	0	74	0	169	0	0	169
	瓶	0	28	59	0	87	0	29	17	0	46	0	149	86	0	235
	その他	0	4	0	0	4	0	4	0	0	4	0	5	0	0	5
	小計	6	105	59	7	177	47	178	17	24	266	222	525	86	76	909
貯蔵具	瓶	0	94	5	0	99	0	13	1	0	14	0	325	33	0	358
	壺	0	7	0	0	7	0	9	0	0	9	5	22	1	0	28
	甕A	0	6	0	0	6	0	18	0	0	18	0	242	0	0	242
	甕B	0	14	0	0	14	0	21	0	0	21	0	116	0	0	116
	鉢	0	8	22	0	30	0	5	17	0	22	0	10	30	0	40
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	129	27	0	156	0	66	18	0	84	5	715	64	0	784
灯火具		20	34	5	0	59	27	27	4	1	59	48	58	6	1	113
火具		4	45	0	17	66	3	79	0	14	96	32	508	0	64	604
化粧具		0	1	34	0	35	0	1	8	0	9	0	4	18	0	22
神仏具		0	25	31	0	56	0	5	19	0	24	0	14	38	0	52
喫煙具		0	1	1	0	2	0	6	3	0	9	0	10	5	0	15
調度具		0	74	7	0	81	1	86	9	0	96	3	354	34	2	393
蓋		0	103	44	9	156	0	53	35	11	99	0	80	47	14	141
合計		113	649	691	33	1486	178	722	719	50	1669	498	2985	1771	157	5411

第18表 その他合計陶磁器類集計表



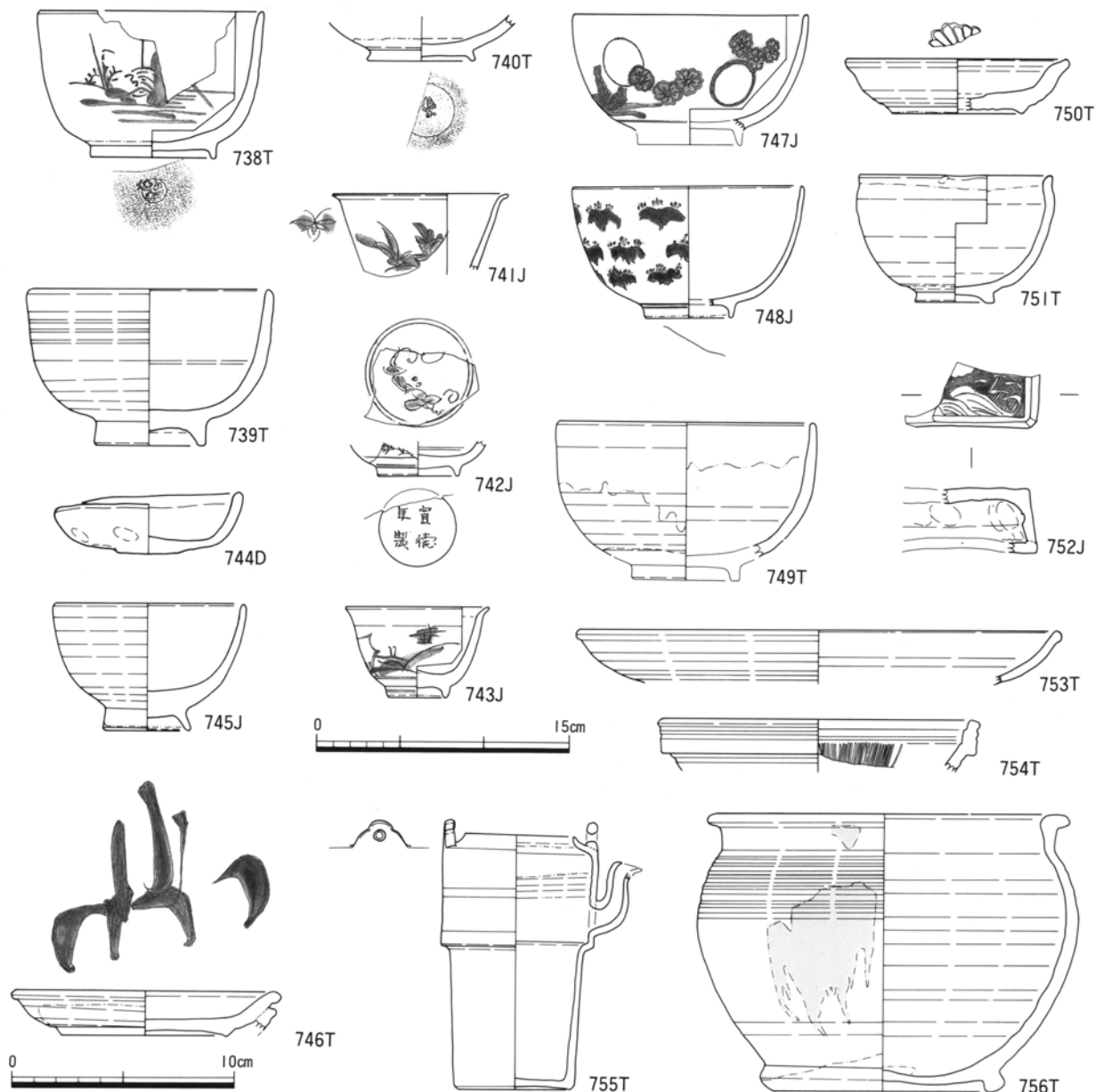
遺物 番号	調査地点	用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
					器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
705	93B	暗渠	供膳具	碗	丸碗	4.9	10.0	—	3.7	—	—	肥前	染付・丸熨斗文, 18世紀中～後半	24	E-815
706	"	"	"	"	端反碗	(5.7)	(10.7)	—	4.0	—	—	瀬・美	染付・笹竹文・岩に波濤文, 1820~1860		E-816
707	"	"	"	"	小碗	丸碗	3.6	(7.4)	—	2.6	—	肥前	染付・葉文, 高台に砂融着, 18世紀後半~19世紀前半		E-817
708	"	"	"	"	"	"	3.0	4.8	—	2.4	—	"	染付・蛸唐草文	26	E-818
709	"	"	灯火具	皿	灯蓋	2.1	(9.3)	—	(4.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	内区径(6.2cm), 内区上端・外面体部に重ね焼きの剝離痕	33	E-819
710	"	"	化粧具	壺	髪油壺	—	(1.8)	—	—	ナデ	—	肥前	染付・蛸唐草文, 18世紀後半		E-820
711	"	"	貯蔵具	瓶	その他	—	—	—	3.7	"	灰釉	関西	18世紀後半~19世紀代		E-821
712	"	"	調理具	その他	卸皿	(2.6)	—	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	最大幅(10.4)cm	31	E-822
713	"	"	調度具	その他	その他	5.8	1.2	2.2	—	—	指押え	不明	土錘, 色調: 浅黄橙色, 穴径0.5cm		E-823
714	"	"	その他	蓋	蓋D	3.5	7.4	—	—	ナデ	白泥+灰釉	関西系	呉須絵・草花文か, つまみ径2.5cm, 肩径9.8cm		E-824
715	"	"	"	"	蓋G	0.9	4.6	—	—	—	—	肥前	染付・氷裂文, 18世紀後半~19世紀前半	36	E-825
716	"	"	"	"	蓋I	3.4	(9.6)	—	—	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西系	白泥+鉄絵・梅樹文か, つまみ径2.5cm	36	E-826
717	"	"	供膳具	鉢	折縁鉢	12.8	(31.8)	—	12.8	"	灰釉+鉄釉	肥前	三島手, 見込みに重ね焼きの剝離痕, 18世紀代	30	E-827
718	"	"	調理具	鉢	捏ね鉢	16.6	27.7	—	18.3	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み釉割ぎ(5ヶ所), 高台盤付使用による摩滅痕	31	E-828
719	"	"	"	鍋・釜	行平	(10.1)	(14.0)	(15.4)	(4.8)	"	"	関西系	外面底部に煤付着		E-829
720	"	"	調度具	花生	壺型	—	—	8.1	10.1	"	灰釉+鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕, 掛け分け	35	E-830
721	"	"	"	植木鉢	植木鉢	—	(27.4)	—	—	"	灰釉	"	押印・宝珠文		E-831

第103図 近世の遺物 (43) その他① (717~721は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点 調査区	用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
					器高	口径	胴径	底径	内面	外面					
722	93B	表土	供膳具	碗	丸碗	4.7	9.9	—	3.8	—	—	肥前	染付・若松文, 高台に砂融着, 18世紀代	24	E-832
723	92A	トレンチ	〃	小碗	平碗	—	—	—	2.5	—	—	瀬・美	上絵付・草花文+変形文字, 幕末期		E-833
724	〃	〃	〃	〃	端反碗	3.0	6.7	—	2.7	—	—	肥前	染付・笹文, 高台に砂融着, 18世紀代	26	E-834
725	〃	〃	〃	皿	丸皿	3.2	(10.8)	—	(6.4)	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵(摺絵)・梅花文, 見込みにトチン剥離痕		E-835
726	〃	〃	〃	〃	〃	—	(19.0)	—	—	青磁釉	青磁釉	肥前	青磁・陰刻, 見込み蛇ノ目釉刺ぎ, 17世紀後半		E-836
727	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	—	—	ナテ	青磁	〃	貼付文, 肩径(6.6cm), 17世紀末~18世紀前半	35	E-837
728	93B	攪乱	貯蔵具	瓶	德利A	—	—	—	5.8	—	—	〃	染付, 高台砂融着, 17世紀後半		E-838
729	92A	トレンチ	化粧具	紅皿	—	1.6	4.5	—	1.6	—	—	〃	白磁, 型打ち成形, 18世紀代	34	E-839
730	〃	〃	調理具	鍋・釜	鍋	—	(25.8)	—	—	—	—	不明			E-840
731	〃	〃	火具	鉢	火桶	—	(29.8)	—	—	指押え+ナテ	指押え+ナテ	常滑	赤物, 口縁部・内面に煤付着	33	E-841
732	〃	北壁	〃	〃	こん炉A	18.0	14.8	19.2	16.8	—	—	不明	内面下に煤付着	33	E-842
733	〃	〃	その他	蓋	蓋E	3.1	12.0	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	つまみ径約3.2cm, 櫛引き7本	36	E-843
734	〃	表土	〃	〃	蓋D	0.9	3.3	—	—	—	—	不明		36	E-844
735	〃	〃	〃	〃	蓋F	1.2	(8.0)	—	—	ナテ	灰釉	瀬・美	肩径(8.9cm)		E-845
736	〃	トレンチ	神仏具	瓶	神酒德利B	11.9	3.1	6.5	4.6	灰釉	〃	〃			E-846
737	93B	攪乱	貯蔵具	甕B	その他	—	(26.7)	(34.8)	—	指押え+ナテ	指押え+ナテ	常滑	赤物		E-847

第104図 近世の遺物 (44) その他② (730~732・737は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
738	92A	攪乱	供膳具	椀	丸椀	6.6	9.8	—	5.5	灰釉	灰釉	肥前	呉須絵・山水桜蘭文、高台内に押印「小松吉」、17世紀末	23	E-848
739	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	(10.7)	—	4.8	〃	〃	瀬・美	高台畳付部分に剝離痕	23	E-849
740	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	(4.8)	〃	〃	肥前	高台内に押印「清水」、17世紀後半		E-850
741	〃	〃	〃	小椀	端反椀	—	(7.6)	—	—	—	—	〃	染付・草花文・蝶文、17世紀後半		E-851
742	〃	〃	〃	〃	その他	—	—	—	3.5	—	—	〃	染付・朝顔文+「宣徳年製」	26	E-852
743	〃	〃	〃	〃	端反椀	4.0	6.3	—	2.6	—	—	〃	染付・山水文、見込み・高台内に砂融着、17世紀後半	26	E-853
744	〃	〃	〃	皿	土師器皿B	2.4	8.2	—	—	ナデ	指押え	不明	色調：淡黄橙色	34	E-854
745	〃	〃	〃	小椀	丸椀	5.6	(8.3)	—	3.7	—	—	肥前系	白磁、18世紀代	26	E-855
746	93B	〃	〃	皿	丸皿	2.0	11.4	—	7.3	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵・莚文、見込み・底部にトチン痕、外面に重ね焼きの剝離片融着	27	E-856
747	〃	〃	〃	椀	丸椀	—	10.4	—	—	—	—	肥前	染付・丸に若松・桜花文、1690~18世紀前半	24	E-857
748	〃	〃	〃	〃	〃	—	(5.8)	—	(10.2)	—	—	〃	染付・型紙摺・桐葉文か、1690~18世紀前半	24	E-858
749	〃	〃	〃	〃	〃	—	(11.4)	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美			E-859
750	92A	〃	〃	皿	折縁皿	2.4	(9.7)	—	(5.8)	〃	〃	〃	見込み印花、底部トチン痕	28	E-860
751	93B	〃	〃	椀	その他	5.6	(8.5)	—	3.4	長石釉	長石釉	〃	口鏤	26	E-861
752	〃	〃	調理具	水指	水滴	2.9	—	—	—	指押え+ナデ	—	〃	染付・波文、型作り	35	E-862
753	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	—	(28.4)	—	—	ナデ	ナデ	〃	焼き締め		E-863
754	〃	〃	調理具	播鉢	IX類	—	(18.1)	—	—	—	—	堺	色調：明赤褐色、焼き締め、栞目数10本・1cm単位に6本		E-864
755	〃	〃	〃	瓶	燗德利B	15.8	6.4	—	6.6	ナデ	灰釉	不明		31	E-865
756	92A	〃	貯蔵具	甕B	甕	16.5	(20.3)	(22.9)	12.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け、見込みにトチン痕	32	E-866

第105図 近世の遺物 (45) その他③ (753~756は1:4, 他は1:3)

## 2. 焼塩壺

吉田城の本調査区から出土した焼塩壺は、身50点、蓋32点（個体識別）であった。身、蓋ともに成形技法が異なるタイプが出土しており、時期的にもそれぞれ時間幅が認められた。出土状況は、同一遺構からある程度まとまって出土した例がみられず、有印のものも少なかったため、各遺構の時期を判断する好資料にはなり得なかった。これらの器種分類については、渡辺誠氏によって詳細に行われているものに依拠し、これに従うこととする。

### (1) 身

身は成形技法の差などにより、4類に分かれる。

**身A類** 柱状の芯で粘土紐を輪積み成形しているもの。

**身C類** 板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘土塊を充填し、口縁部は段状に削り出された蓋受けが退化して痕跡的になったもの。

**身D類** C類の蓋受けの痕跡もなくなったもの。

**身E類** 器形全体を同時に型によってつくり、小型で器壁が厚く、蓋受けをもたないもの。

1は身A類である。円盤状粘土による底部から、粘土紐を輪積みに成形している。成形時の影響によるものか、六角柱形を呈するものと思われ、内・外面ともに角の稜線がわずかに認められる。口縁部は、内・外両側に成形時の指頭圧痕が認められる。体部内・外面には、粘土紐による継ぎ目の痕跡が認められ、接合痕は内傾である。この身A類には、時期・生産地を決定する判断材料となる刻印が押されているものが多い。しかし、遺存部分には刻印が確認できなかったため、印の有無、時期、生産地等は不明であるが、成形技法が輪積みであるため17世紀代の可能性が強い。2～7は身C類である。2には一重枠に「泉湊伊織」の刻印、4には一重枠に「泉州磨生（両脇に、サカイ・御塩所）」という3行分割して記された刻印がみられる。製作・使用年代は「泉湊～」が18世紀中頃以降、「～磨生～」が18世紀前半以降のもので、いずれも下限が不明である。8～11は身D類である。いずれも口縁部は平坦で、10を除いて体部の器壁は薄手である。13～26は身E類で、出土した身の中ではもっとも多い。内側には、成形時にわずかに回転させながら引き抜いた痕跡が多くみられる。いずれも無印で、容量が極端に少なく形態も特異であるため、不明な点が多い。

### (2) 蓋

蓋は形態上4類に大別できる。

**蓋A類** 上面がやや曲面的で、側面が緩やかに外側へ開くもの。

**蓋B類** 上面が平坦で、側面への変換点がはっきりしていて、垂下か、やや内側に傾くもの。

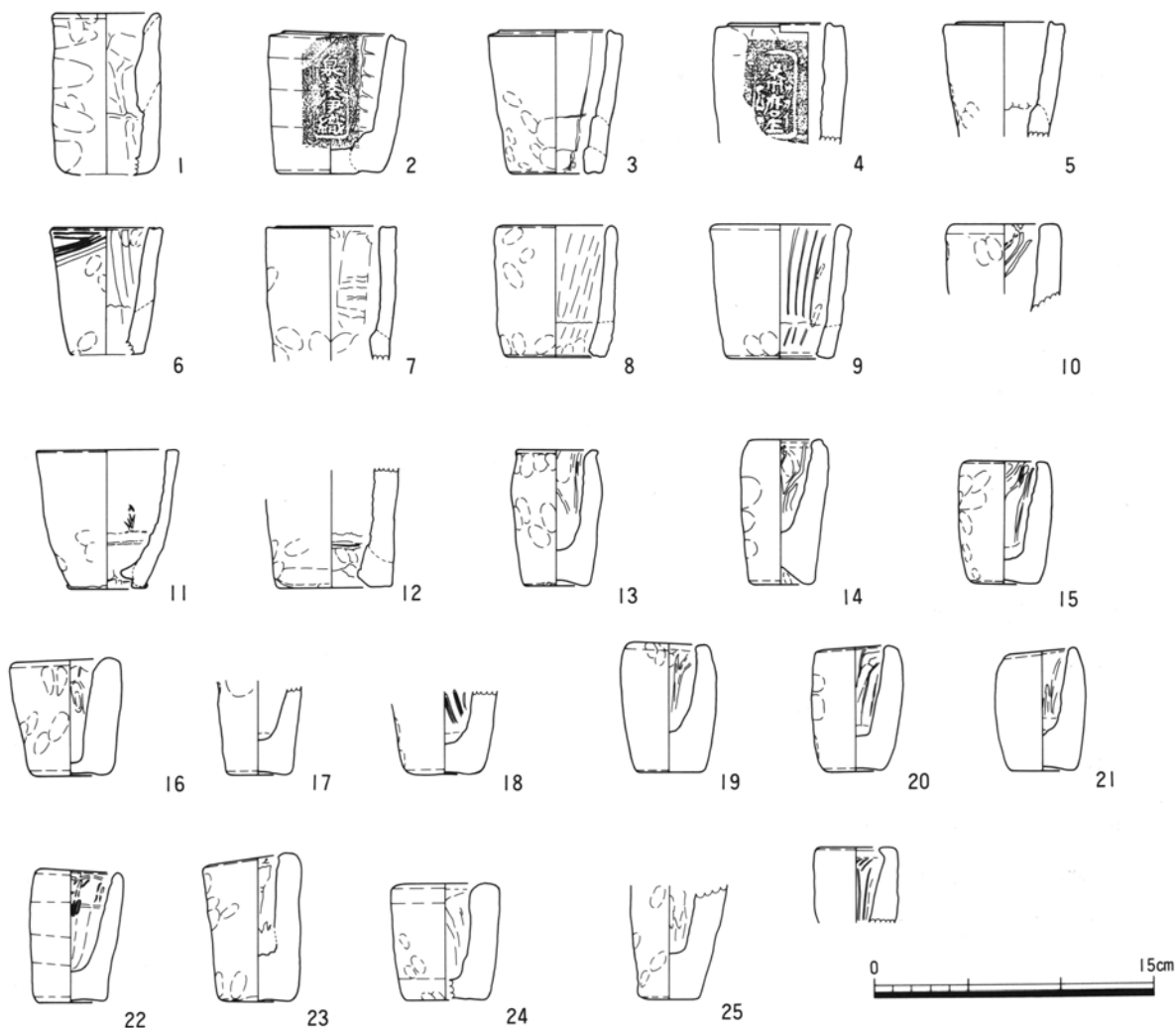
**蓋C類** B類の身にかかる部分が退化し、断面形態は内側が平坦か、わずかにくぼむもの。

**蓋X類** A類の極端に厚手なもの。（渡辺未分類）

27は蓋A類である。身A類に伴うものと思われる。34～46は蓋B類である。身C類のように蓋受けが退化する以前の身に伴うものと思われる。47～50は蓋C類である。身C類に伴うものと思われる。28～33は蓋X類である。身E類に伴うものと思われる。 (松田 訓)

#### <参考文献>

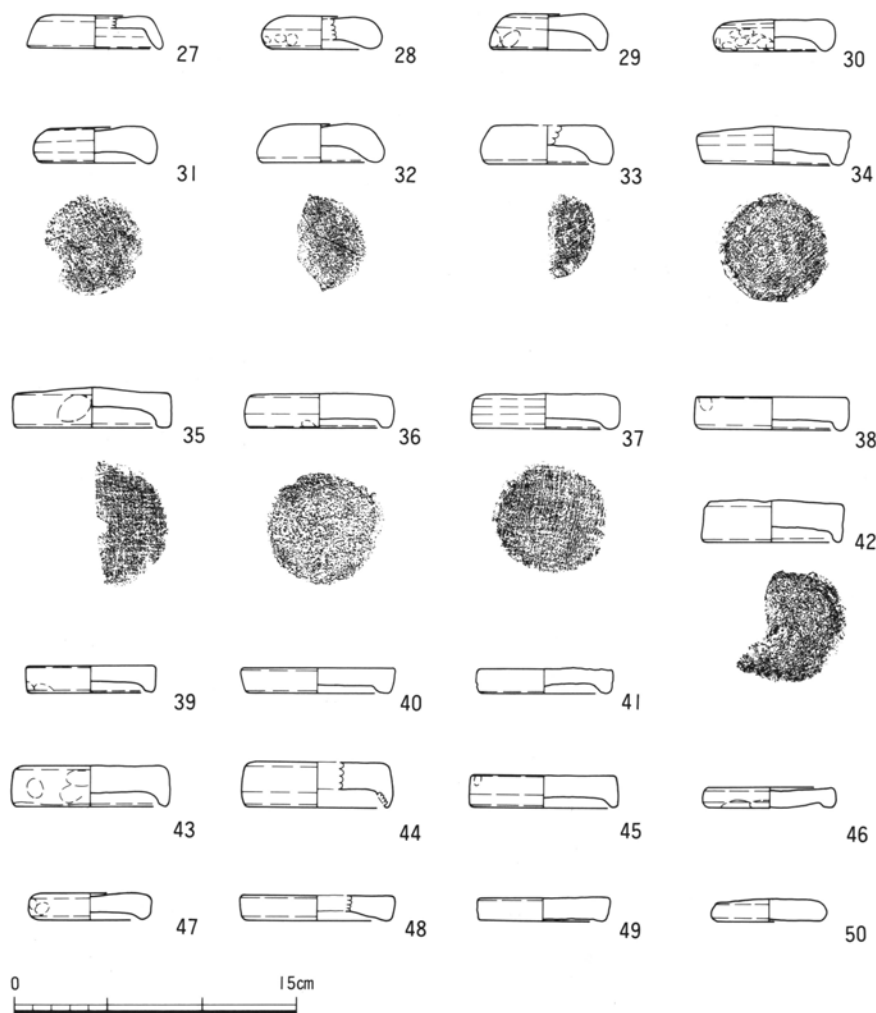
渡辺 誠 「焼塩」 『講座日本技術の社会史2 塩業・漁業』 日本評論社 1985



遺物 番号	調査地点	器種		法量 (cm・cc)					色調	釉薬・調整等		備考	PL 登録 番号	
		調査区	遺構	器種	器形	器高	口径	肩径		底径	容量			内面
1	92A	SD101	焼塩壺	身A	(8.6)	(5.5)	—	(3.0)	—	橙色	—	指押え	内面：明赤褐色	37 E-867
2	93B	SE104	〃	身C	7.5	5.7	7.5	5.5	105	にふい橙色	—	ナデ	内面：にふい赤褐色，刻印「泉湊伊織」	37 E-868
3	〃	SK055	〃	〃	(7.6)	(6.0)	(7.2)	(4.8)	—	橙色	—	指押え+ナデ	内面：縄目痕	37 E-869
4	〃	検出	〃	〃	—	(5.4)	(6.8)	—	—	〃	—	指押え	内面：縄目痕，刻印「サカイ 泉州磨生 御塩所」	37 E-870
5	〃	〃	〃	〃	—	(5.0)	(6.4)	—	—	にふい橙色	—	〃	内面：縄目痕，外面一部剥離	E-871
6	92A	〃	〃	〃	(6.8)	(4.5)	(5.8)	(3.6)	—	〃	—	指押え+ナデ	内面：橙色	E-872
7	〃	北壁	〃	〃	—	5.6	(6.8)	—	—	橙色	—	〃	〃	E-873
8	93B	SK055	〃	身D	7.0	(5.8)	—	(5.3)	—	にふい橙色	—	指押え	内面：橙色	E-874
9	〃	SK020	〃	〃	(7.1)	(6.4)	—	(5.4)	—	〃	—	指押え+ナデ	〃	37 E-875
10	〃	SD129	〃	〃	—	(5.6)	—	—	—	〃	—	指押え	内面：布目痕，赤褐色	E-876
11	〃	検出	〃	〃	(7.3)	(7.4)	—	(4.0)	—	〃	—	指押え+ナデ	内面：縄目痕	E-877
12	〃	〃	〃	身Bか	—	—	—	5.8	—	〃	—	ナデ	内面：縄目痕	E-878
13	〃	〃	〃	身E	(7.2)	(4.4)	—	(3.2)	—	〃	—	〃	内面：赤褐色	37 E-879
14	92A	SK326	〃	〃	7.7	(3.5)	—	(3.0)	30	〃	—	〃	内面：明赤褐色	E-880
15	93B	SK053	〃	〃	(6.5)	(4.0)	—	3.0	—	橙色	—	〃	内面：明赤褐色	E-881
16	〃	SD129	〃	〃	6.2	5.3	—	3.5	25	にふい橙色	—	指押え	内面：赤褐色	37 E-882
17	92A	SK180	〃	〃	—	—	—	3.0	—	〃	—	ナデ	内面：明赤褐色	E-883
18	93B	SK086	〃	〃	—	—	—	3.0	—	〃	—	〃	内面：赤褐色，断面に鉄塊附着	E-884
19	92A	検出	〃	〃	6.9	3.8	—	(3.3)	18	〃	—	指押え	内面：明赤褐色	37 E-885
20	〃	〃	〃	〃	6.6	3.6	—	2.8	25	〃	—	ナデ	内面：明赤褐色	E-886
21	93B	〃	〃	〃	6.4	3.7	—	3.4	18	〃	—	ナデ	〃	37 E-887
22	〃	〃	〃	〃	7.0	4.1	—	3.4	30	赤橙色	—	〃	内面：赤褐色	E-888
23	〃	〃	〃	〃	7.6	4.2	—	3.4	24	赤色	—	指押え+ナデ	内面：布目痕	37 E-889
24	〃	〃	〃	〃	(6.2)	(4.4)	—	(4.0)	—	明赤褐色	—	〃	内面：にふい赤褐色	E-890
25	92A	〃	〃	〃	—	—	—	2.5	—	橙色	—	指押え	内面：赤褐色	E-891
26	93B	〃	〃	〃	—	(3.8)	—	—	—	にふい橙色	—	〃	内面に布目痕，明赤褐色，外面全体に剥離	E-892

第106図 近世の遺物 (46) 焼塩壺① (1 : 4)





2



4

遺物 番号	調査地点	器種		法量 (cm・cc)					色調	釉薬・調整等		備考	PL	登録 番号
		器種	器形	器高	口径	肩径	底径	容量		内面	外面			
27	93B	SK103	焼塩壺 蓋 A	(1.7)	(7.0)	(5.0)	—	—	橙色	—	ナデ			37 E-893
28	"	SD113	" 蓋 X	(1.7)	(5.3)	(3.6)	—	—	にぶい橙色	—	指押え+ナデ			37 E-894
29	"	SD102	" "	1.9	5.8	3.7	—	—	黄橙色	—	"	内面：布目痕		37 E-895
30	"	SD129	" "	1.7	5.5	4.6	—	—	"	—	"	内面：布目痕		37 E-896
31	"	"	" "	1.8	5.7	4.7	—	—	橙色	—	ナデ	内面：布目痕		37 E-897
32	92A	SD101	" "	2.0	(6.1)	(3.4)	—	—	"	—	—	内面：布目痕		37 E-898
33	"	SD117	" "	2.0	(6.4)	(5.5)	—	—	にぶい橙色	—	指押え+ナデ	内面：布目痕		E-899
34	"	SD101	蓋 B	2.0	7.0	8.1	—	—	"	指押え	ナデ	内面：布目痕		37 E-900
35	"	"	" "	2.1	(8.0)	(8.3)	—	—	"	—	指押え+ナデ	内面：布目痕		E-901
36	93B	SD102	" "	(1.8)	(7.3)	(7.2)	—	—	橙色	—	ナデ	内面：布目痕		37 E-902
37	"	SE104	" "	1.8	7.2	7.0	—	—	にぶい黄橙色	—	"	内面：布目痕、橙色		37 E-903
38	"	SK053	" "	(1.7)	(7.4)	(7.3)	—	—	橙色	—	指押え+ナデ	内面：布目痕		E-904
39	"	SK033	" "	1.4	(6.5)	(6.9)	—	—	にぶい橙色	—	"	内面：布目痕		E-905
40	92A	SK221	" "	1.3	(7.6)	(8.0)	—	—	橙色	—	ナデ	内面一部剝離		E-906
41	"	"	" "	(1.3)	(6.8)	(7.2)	—	—	にぶい橙色	—	—	内・外面全体に剝離		E-907
42	"	検出	" "	2.2	7.2	7.1	—	—	橙色	—	ナデ	内面：布目痕、明赤褐色		37 E-908
43	93B	"	" "	(2.1)	(8.0)	(7.0)	—	—	にぶい橙色	指押え	指押え+ナデ	内面：布目痕		E-909
44	"	"	" "	2.4	(7.4)	(7.6)	—	—	"	—	ナデ	内面：布目痕		E-910
45	"	西壁トレンチ	" "	1.8	(7.3)	(7.4)	—	—	橙色	—	"	内面：布目痕		E-911
46	92A	検出	" "	1.1	(6.6)	(6.4)	—	—	にぶい橙色	—	指押え+ナデ	内面：布目痕		E-912
47	"	SK086	蓋 C	(1.4)	(5.6)	(4.8)	—	—	"	—	"	内面：布目痕		E-913
48	93B	"	" "	(1.3)	(7.5)	(8.0)	—	—	橙色	—	ナデ	内面：赤橙色		E-914
49	"	"	" "	1.3	6.5	6.8	—	—	"	—	—			37 E-915
50	"	"	" "	1.2	5.5	5.5	—	—	にぶい橙色	—	ナデ	内面：布目痕		37 E-916

第107図 近世の遺物 (47) 焼塩壺② (拓影は原寸, 他は 1 : 4)

### 3. 瓦類

今回の発掘調査において、近世陶磁器類について瓦類が大量に出土している。瓦溜りから出土した瓦類をカウントすることによって、建物の規模を推定することができるのかも知れないが、良好な遺構が存在しないこともあり、今回は実施していない。

瓦類については、明確な分類がないが、大きく本瓦である軒丸瓦・軒平瓦と、軒棧瓦・棧瓦・丸瓦等に分けられる他、特殊なものとして鬼瓦・鯨瓦・鳥衾や拝巴等がある。今回の報告では、細かな分類を実施していないことを予め断わっておく。

1は、鳥衾といわれる瓦で、鳥伏間とも書き、鬼瓦の上部に置かれて伏間に接続して葺かれる。形は、伏間の一端に鳥休という突出部がつき、鳥休にもさまざまな形がある。鳥休部分のみの残存で全体の形態は不明であるが、鳥休部がかなり反り返っており、瓦当面には連珠文と左三ツ巴文が陽刻されている。2～10は軒丸瓦であり、全体的に見てもその出土量は多くない。径は吉田城三の丸出土の軒丸瓦と同様でほぼ15cm前後であるが、6・7が11cmとやや小型である。瓦当面には、連珠文と左三ツ巴文が多いが、連珠も10個・12個・16個・18個と分けられ、巴も径や長さにより分類できそうである。6・7の瓦当面には菊花文が、8の瓦当面には連珠文と沢瀉文が陽刻されている。特に、8の沢瀉文は家紋瓦とも考えられ興味深い資料である。11～14は軒平瓦で、やはり出土量は多くない。その外区幅は吉田城三の丸で出土する軒平瓦とほぼ同様に29cm前後であるが、13がやや小さくなっている。11は断面をみると中心が灰黒色で周囲が淡灰色のサンドイッチ状を呈し、全体に焼きムラが見られることから、戦国期を想定することができる。ただし、12～14については17に類似しており、軒棧瓦である可能性がある。瓦当面には中央に葉を配しその左右に均整唐草文を陽刻したものが多く、やはり中央葉の形と子葉の組合せにより分類ができそうである。15・16～28は軒棧瓦で、16・24～28は軒棧瓦の軒丸部で、17～23は軒棧瓦の軒平部であり、出土した瓦の大半を占めている。15は、拝巴といわれる瓦とも思われる。拝巴とは、拝本掛瓦という破風板の最上部すなわち拝部分に葺かれる瓦の1種で、拝巴・拝唐草・敷平・二の平・面戸の1組で構成される瓦である。しかし、拝巴以外の瓦については、抽出できていない。軒丸部については、径がほぼ8cm前後で、16のみ9cmとやや大きめで掛瓦であるかも知れない。瓦当面には、軒丸瓦と同様に連珠文と左三ツ巴文が陽刻されている。26は右三ツ巴文であり、16は左三ツ巴文のみで連珠文は見られず、28では連珠文のかわりに唐草文が左三ツ巴文の周りに配されている。軒平部については、軒平瓦と同様に中心に葉を配し左右に均整唐草文を陽刻している。21は波のような文様が施され、新しい時期の瓦である可能性がある。29・30は棧瓦で、上部に切込みがみられる。31～33は丸瓦で、その大きさは様々である。凹面には布目痕や棒状圧痕が見られ、凸面には全体に篋磨きが施されている。

図化した遺物の他に、鯨瓦の一部や、破片資料で瓦の種類は不明であるが「川<三>牛」という刻印の見られるものがある。これが製作者を示す刻印で「三州牛川」とすれば瓦の供給元として豊橋市の牛川が想定され、地元の瓦が武家屋敷の屋根に葺かれていたこととなろう。(小嶋廣也)

#### <参考文献>

玉置豊次郎監修 坪井利弘著 『日本の瓦屋根』 理工学社 1976



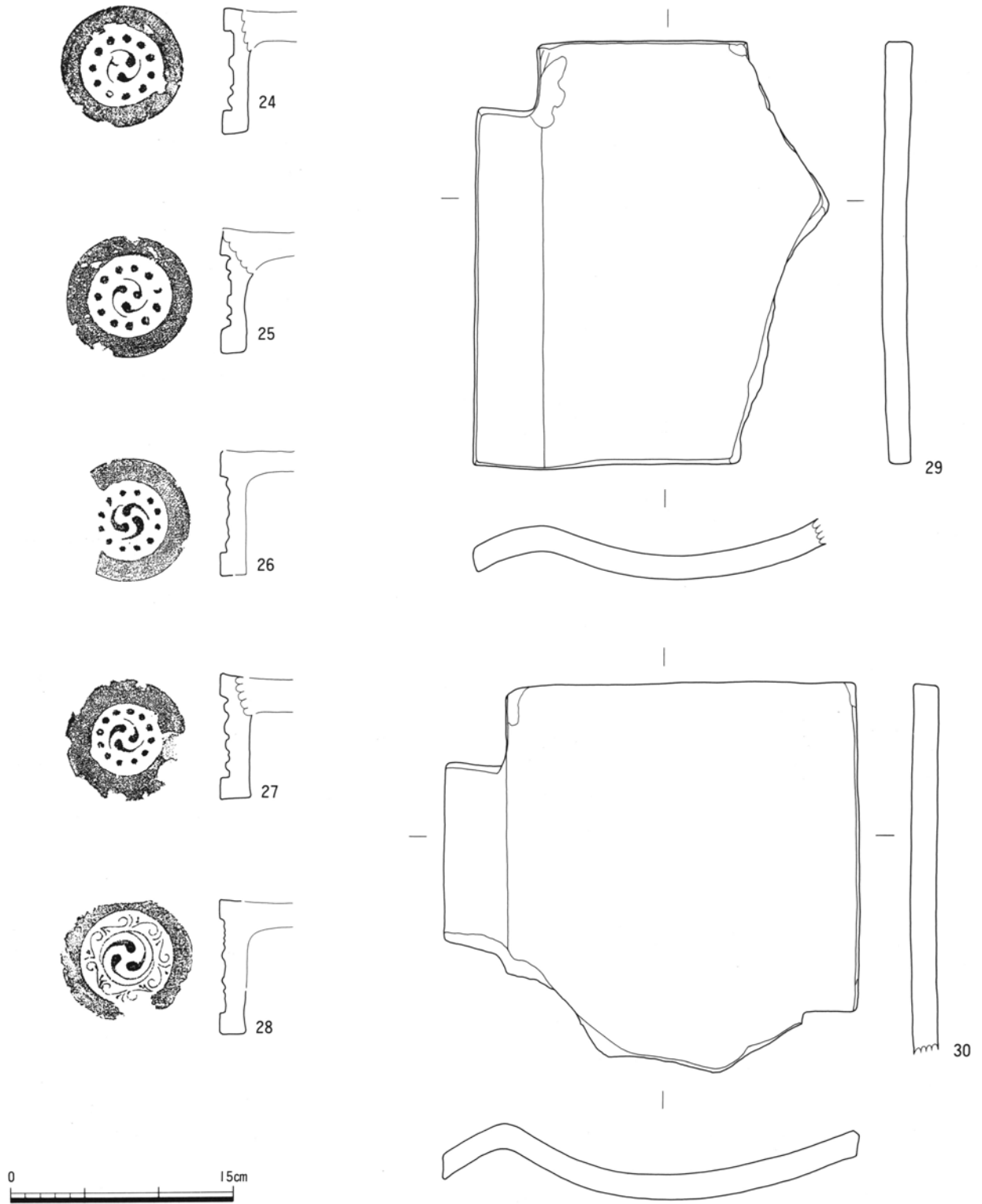
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類	軒丸部 (cm)			軒平部 (cm)				備考	PL	登録 番号
			径	内区径	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚			
1	92A 検I	鳥衾	13.0	9.5	16	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文, 鳥休部のみ残存	37	E-917
2	" SD101	軒丸瓦	15.5	12.5	16	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文	37	E-918
3	" "	"	14.7	10.4	12	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文	37	E-919
4	" 検I	"	(15.4)	(13.0)	(16)	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文	37	E-920
5	93B SK124	"	(15.0)	(10.0)	(12)	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文		E-921
6	92A SK246	"	(11.1)	(8.7)	—	—	—	—	—	菊丸文, 全長 残8.8cm	37	E-922
7	" 検II	"	(11.2)	(8.4)	—	—	—	—	—	菊丸文		E-923
8	" 検I	"	(15.4)	(10.8)	(18)	—	—	—	—	沢瀉文+連珠文	37	E-924
9	" SE107	"	(15.2)	(10.8)	(10)	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文		E-925
10	" SK274	"	(14.2)	(9.8)	(12)	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文, 全長 残16.6cm		E-926

第108図 近世の遺物 (48) 瓦類① (1:4)



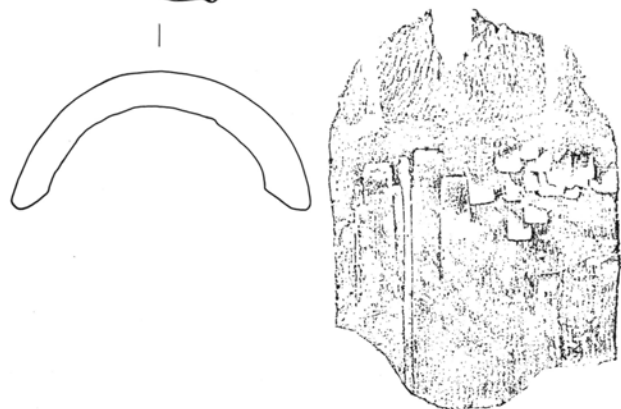
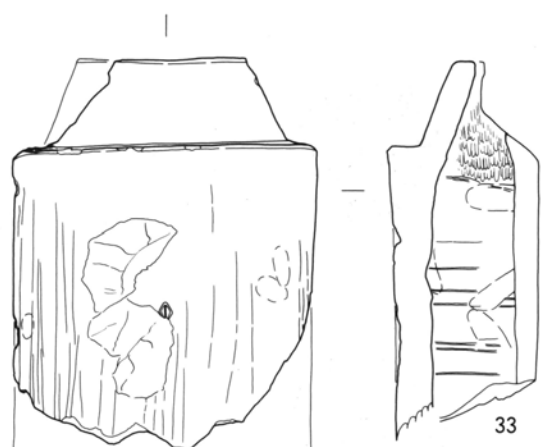
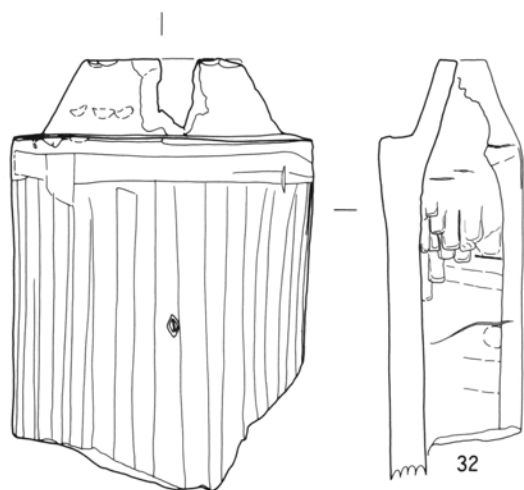
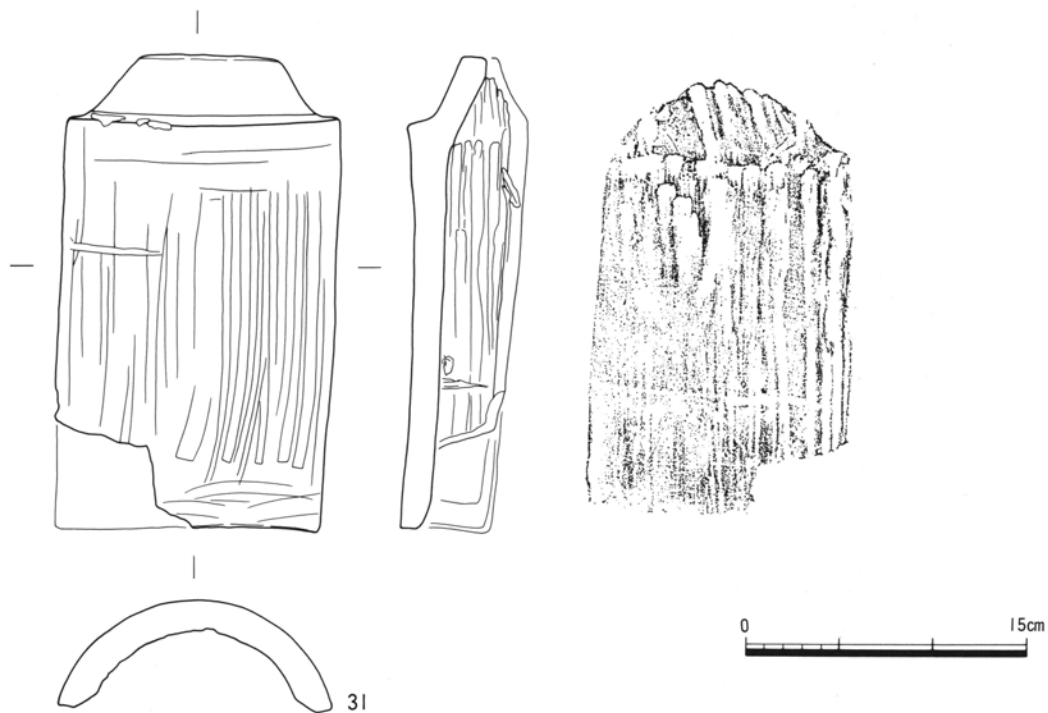
遺物 番号	調査地点		種類	軒丸部 (cm)			軒平部 (cm)				備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構		径	内区径	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚				
11	93B	SD129	軒平瓦	—	—	—	(29.6)	(21.2)	(5.2)	3.1	唐草文, 全長 残9.8cm	37	E-927	
12	92A	SK306	"	—	—	—	—	—	4.9	3.5	唐草文		E-928	
13	"	検I	"	—	—	—	23.9	13.8	3.9	2.8	唐草文, 全長 残9.8cm	37	E-929	
14	"	検III	"	—	—	—	(28.4)	(18.0)	4.5	3.0	唐草文, 全長 残13.9cm	37	E-930	
15	93B	SK124	軒棧瓦	(9.1)	(7.4)	—	—	—	—	—	左三ツ巴文, 拜巴か	37	E-931	
16	92A	SD101	"	7.7	4.7	12	—	—	4.4	2.7	左三ツ巴文+連珠文・唐草文, 掛瓦か	37	E-932	
17	"	トレンチ	"	—	—	—	—	—	(21.2)	4.5	3.2	唐草文, 全長 残14.6cm	37	E-933
18	"	SK124	"	—	—	—	—	—	(12.6)	(4.3)	(2.7)	唐草文, 全長 残10.1cm		E-934
19	92A	SK323	"	—	—	—	—	—	3.7	2.8	唐草文		E-935	
20	93B	攪乱	"	—	—	—	—	—	(13.0)	4.1	2.7	唐草文, 全長 残8.3cm	37	E-936
21	92A	SK274	"	—	—	—	—	—	(13.6)	(6.2)	(4.0)	唐草文?		E-937
22	"	SE106	"	—	—	—	—	—	4.5	3.0	唐草文, 全長 残14.1cm		E-938	
23	"	検I	"	—	—	—	—	—	(16.8)	3.5	2.4	唐草文, 全長 残16.4cm	37	E-939

第109図 近世の遺物 (49) 瓦類② (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類	軒丸部 (cm)			軒平部 (cm)				備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		径	内区径	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚			
24	92A	検I	軒棧瓦	8.3	5.5	11	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文		E-940
25	"	"	"	8.2	4.9	12	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文		E-941
26	"	SK274	"	8.1	5.1	12	—	—	—	—	右三ツ巴文+連珠文		E-942
27	93B	SK053	"	8.3	5.6	11	—	—	—	—	左三ツ巴文+連珠文		E-943
28	"	検出	"	(8.8)	(6.4)	—	—	—	—	—	左三ツ巴文+唐草文		E-944
29	92A	SD101	棧瓦	—	—	—	—	—	—	—	全長28.7cm, 幅 残24.0cm, 厚さ1.7cm		E-945
30	93B	SK104	"	—	—	—	—	—	—	—	全長 残26.2cm, 幅28.3cm, 厚さ1.8cm		E-946

第110図 近世の遺物 (50) 瓦類③ (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類	軒丸部 (cm)			軒平部 (cm)			備考	PL	登録 番号
	調査区	遺構		径	内区径	珠文数	幅	内区幅	厚さ			
31	92A	検 I	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	全長24.9cm, 幅14.6cm, 高さ5.7cm, 厚さ1.7cm	E-947
32	93B	SD129	"	—	—	—	—	—	—	—	全長残22.9cm, 幅16.1cm, 高さ7.6cm, 厚さ1.8cm	E-948
33	92A	SK179	"	—	—	—	—	—	—	—	全長残20.8cm, 幅16.3cm, 高さ7.8cm, 厚さ2.2cm	E-949

第111図 近世の遺物 (51) 瓦類④ (1 : 4)

#### 4. 人形類

今回の発掘調査において、人形やミニチュア製品が出土している。これまでに紹介してきた近世陶磁器類の分類においては、全く触れられていない製品である。ここで、人形類としてまとめて紹介しておきたいと思う。人形類の分類も、近世陶磁器類の分類同様に『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』を参考に、以下のように4つに分類して見ていきたい。

- |        |        |                                 |
|--------|--------|---------------------------------|
| 1. 人形  | 1. 人物  | 1—小僧、2—神様、3—その他                 |
|        | 2. 動物  | 1—鳥、2—馬(騎馬人物)、3—猫、4—その他         |
| 2. 器材  | 1. 建造物 | 1—家、2—灯籠、3—橋、4—船、5—その他          |
|        | 2. 調理具 | 1—鍋、2—釜、3—竈、4—土瓶、5—銚子、6—蓋、7—その他 |
|        | 3. その他 | 1—紅皿、2—文具、3—その他                 |
| 3. その他 |        | 1—合子、2—型抜き、3—鈴、4—貨幣、5—その他       |
| 4. 不明  |        |                                 |

名古屋城三の丸遺跡における人形類の分類では、上記の他に土錘や水滴等も含まれているが、本報告書では近世陶磁器類に分類している(土錘・水指・水滴は調度具にそれぞれ分類している)。そのため、近世陶磁器類の組成については単純な数値の比較は難しいかもしれないが、いずれも出土量が少量であるため影響は少ないものと考えている。

1～12が人形類、13～19、21～31が器材、20・32がその他に分類される。まず人形類であるが、1～9が人物で、1～6が神様に分類される。全て土師質製品で、型押し成形、底部に穿孔の見られるものがある。1～4は天神、5は大黒天と恵比寿、6は多聞天の頭部と推定される。ただし、天神については雛人形の男雛の可能性もあるが、出土遺物に女雛が出土していないところから天神と判断している。7～9は小僧とは断定しにくかったためにその他に分類した。特に9は、手捏ね成形で、1点のみ確認している。10～12は動物で、その内10・11は鳥、12は桃を抱いた猿を象っているものと思われる。11は中に土玉が入っており、土鈴として利用されたのだろうか。器材としては、13・14は建造物で塔と考えられる。15～17と21は調理具に分類され、15は蓋、16・17は釜、21は竈である。16には外面に緑釉が施されている。18・19・22・27～31は調理具とも考えられるがその他とした。18・19・29は椀類、27は瓶類、28は壺類、30は瓶類或いは壺類、22・31は鉢類のミニチュア製品で、特に22には内面の櫛目から播鉢を象ったものと考えられる。23～26は白磁の紅皿で、外面に菊花文や蓮弁文が施されている。20・32はその他に分類した。20は将棋の駒で、「桂馬」と染付られている。32は人形の台座で、表面には白泥が塗られ上部に朱が入っている。

なお、今回の整理において人形類のカウントは実施していない。そのために、それぞれの具体的な数値を提示することはできない。また、出土地点を確定し得る資料が少量であったために、空間的な広がりあるいは集中を捉えるまでには至っていない。(小嶋廣也)

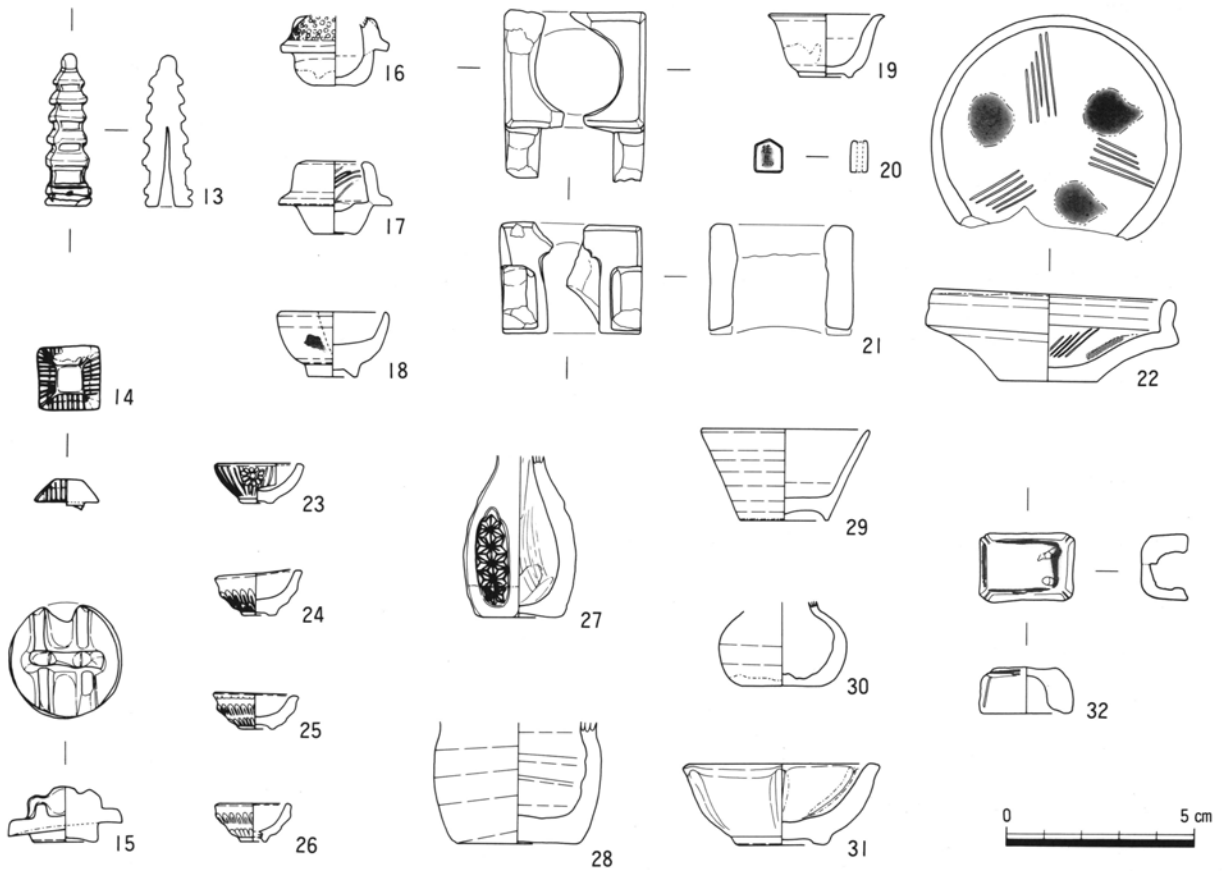
#### <参考文献>

- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡(Ⅲ)』 1992  
 (財)愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』 1993



第112図 近世の遺物 (52) 人形類① (1 : 2)





遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	材質	種類			法量 (cm)			釉薬	成形 技法	備考	PL	登録 番号
			種類	用途	形状	高さ	最大幅	その他					
1	93B SD129	土師質	人形類	人物	神様	残 4.6	6.0	最大厚 2.3	—	型押し	天神, 底部穿孔 (径1.6cm)	38	E-950
2	92A 検 I	—	—	—	—	残 2.9	2.4	最大厚 1.5	—	—	堂入り天神	38	E-951
3	93B " "	—	—	—	—	残 2.4	2.8	最大厚 1.3	—	—	天神, 底部穿孔 (径0.3cm)		E-952
4	" SK055	—	—	—	—	残 2.1	2.5	最大厚 1.1	—	—	天神, 底部穿孔 (径0.3cm)		E-953
5	" SD129	—	—	—	—	残 3.6	3.8	最大厚 1.9	—	—	大黒天と恵比寿, 底部穿孔 (径0.4cm)	38	E-954
6	92A SD101	—	—	—	—	残 3.5	残 3.0	最大厚 1.5	—	—	多聞天か, 裏穿孔径0.3cm		E-955
7	93B 検 I	—	—	—	その他	残 5.0	4.8	—	—	—	内面押圧痕	38	E-956
8	92A SD101	—	—	—	—	残 3.8	残 5.1	—	緑釉	—	西行後姿, 内面布目痕・指圧痕	38	E-957
9	93B SK011	—	—	—	—	4.3	2.5	最大厚 1.9	—	手捏ね	人型, 外面指圧痕	38	E-958
10	92A SK330	—	—	動物	鳥	3.6	残 1.9	—	—	—	外面に指押え痕残る	38	E-959
11	93B SK053	—	—	—	—	残 5.0	3.5	全長 7.1	—	—	底部穿孔 (径0.6cm), 中に土玉あり, 土鈴か	38	E-960
12	92A 検 I	—	—	—	その他	残 6.1	残 3.7	—	—	型押し	内面に指押え痕残る	38	E-961
13	93B SD129	—	器材	建造物	その他	4.0	—	底径 1.2	—	—	底部穿孔 (径0.5cm)	38	E-962
14	92A 検III	陶器質	—	—	—	残 0.8	1.7	—	白泥	—	塔の一部か		E-963
15	" SD101	—	—	調理具	蓋	1.5	3.0	口径 1.6	透明釉	—	鍋・釜の蓋	38	E-964
16	93B SD129	—	—	—	釜	—	—	底径 1.0	緑釉	—	—	38	E-965
17	92A 検 I	—	—	—	—	1.9	(1.6)	底径 (1.1)	—	—	—		E-966
18	" "	磁器質	—	その他	その他	1.7	(2.8)	底径 1.3	透明釉	ロクロ	白磁, 鉄絵か		E-967
19	93B 暗渠	—	—	—	—	1.7	(2.9)	底径 1.4	—	型押し	白磁		E-968
20	92A 検II	—	その他	—	その他	0.9	0.8	最大厚 0.5	—	—	染付・文字文「桂馬」, 将棋の駒	38	E-969
21	" 検 I	土師質	器材	調理具	籠	2.9	3.8	—	—	—	—		E-970
22	" SD101	陶器質	—	—	鉢	2.4	6.3	底径 2.6	黄釉	ロクロ	底部回転糸切痕, 緑釉掛かる, 櫛目 5本 3ヶ所	38	E-971
23	93B 検 I	磁器質	—	その他	紅皿	1.1	2.2	底径 0.8	透明釉	型押し	白磁・菊花文	38	E-972
24	" SD102	—	—	—	—	1.1	2.1	底径 0.8	—	—	白磁・蓮弁文	38	E-973
25	92A 検 I	—	—	—	—	0.9	2.1	底径 0.8	—	—	白磁・蓮弁文		E-974
26	93B " "	—	—	—	—	1.0	(1.8)	底径 (0.7)	—	—	白磁・蓮弁文	38	E-975
27	" "	陶器質	—	—	その他	—	—	底径 (2.0)	緑釉	—	—	38	E-976
28	92A 検II	土師質	—	—	—	—	—	底径 3.1	—	ロクロ	底部回転糸切痕		E-977
29	" 検 I	磁器質	—	—	—	2.4	(4.4)	底径 2.3	透明釉	—	白磁		E-978
30	93B 検II	陶器質	—	—	—	—	—	底径 2.2	緑釉	手捏ね	内面押圧痕	38	E-979
31	92A " "	—	—	—	—	2.1	(4.9)	底径 (2.2)	褐釉	型押し	—	38	E-980
32	" SD101	—	その他	—	その他	残 1.2	2.5	—	白泥	—	人形の台座か, 朱が入る		E-981

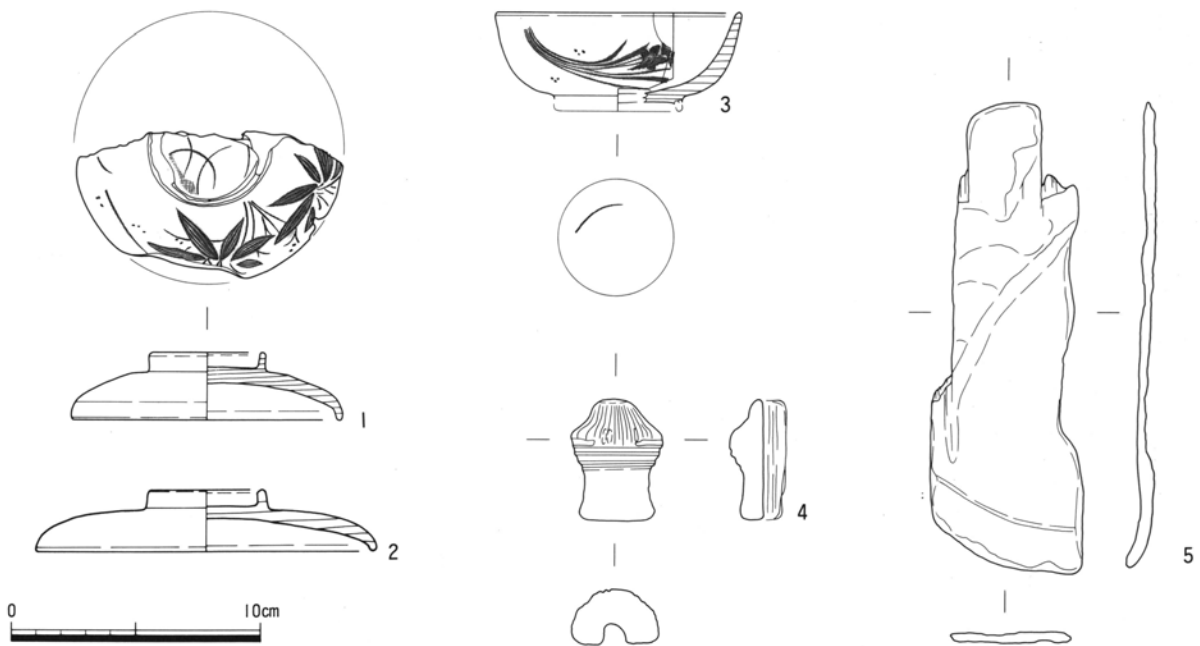
第113図 近世の遺物 (53) 人形類② (1:2)

5. 木製品

今回の発掘調査において出土した木製品は、漆碗の身と蓋等の漆器製品をはじめ、箸・櫛・曲物・下駄・箱・建築廃材等が見られる。出土遺構は、井戸や外堀に限定され、SE106からは一部に炭化した建築部材が見られ、火災により焼失したものを一括投棄した可能性があり、興味深い遺構として注目される。

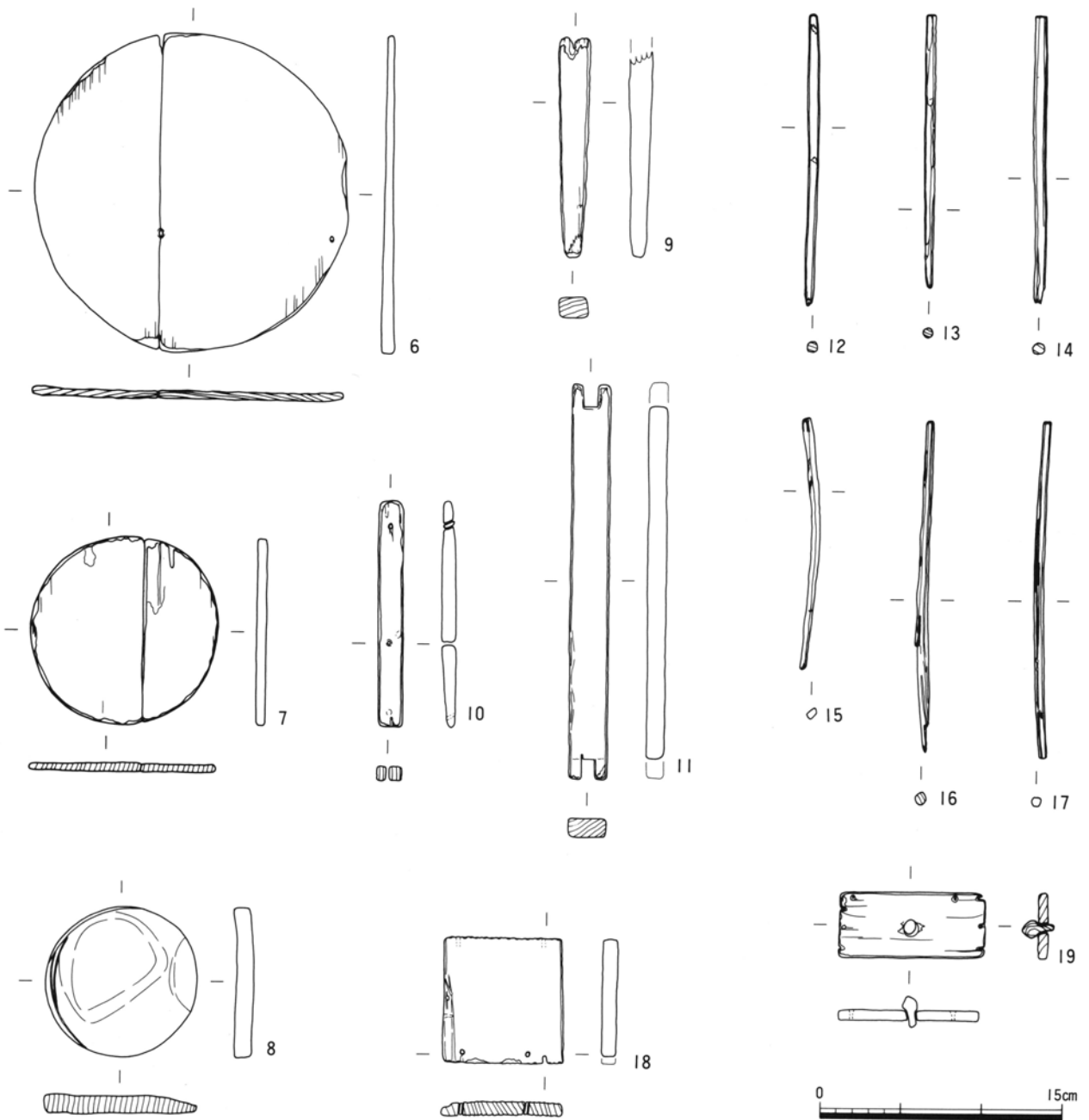
1～26は、SE106より出土した木製品である。1・2は漆碗の蓋で、1には灰色漆による文様が施されている。3は漆碗の身で、赤色漆による文様が見られる。4は、傘の軸部分で、他にも中に軸の詰まったものも出土している。5はお盆で赤色漆と黒色漆が内面で塗り分けられている。6～8は曲物の底板で、6には片面に黒色漆が残っている。9は柄杓の柄の一部、10・11は建具、12～17は箸、18・19は箱物の一部で同一個体と思われる。20～24は下駄で、差し歯のものと一木造りのものが確認されている。25は樽の上板で焼印が見られ、26は箒である。27～39は、SE104より出土した木製品である。27～29は漆碗の身、30は漆碗の蓋で、灰色漆による文様が施されている。31は櫛、32～34は曲物の底板、35は曲物の側板、36は戸車、37は不明、38は柄杓の柄、39は建具と考えられる。32・35・38で一個体になるものと推定される。40～48は、その他の遺構（SE103・SD101・SE107・SK226）より出土した木製品である。40～43は漆碗の身で、40には赤色漆の文様が施されている。SE106やSE104出土の漆碗よりも古い時期の様相を示している。45は櫛で、背の部分に灰色漆による装飾が施されている。44・46は曲物の底板、47は建具、48は曲物と思われる。

(小嶋廣也)



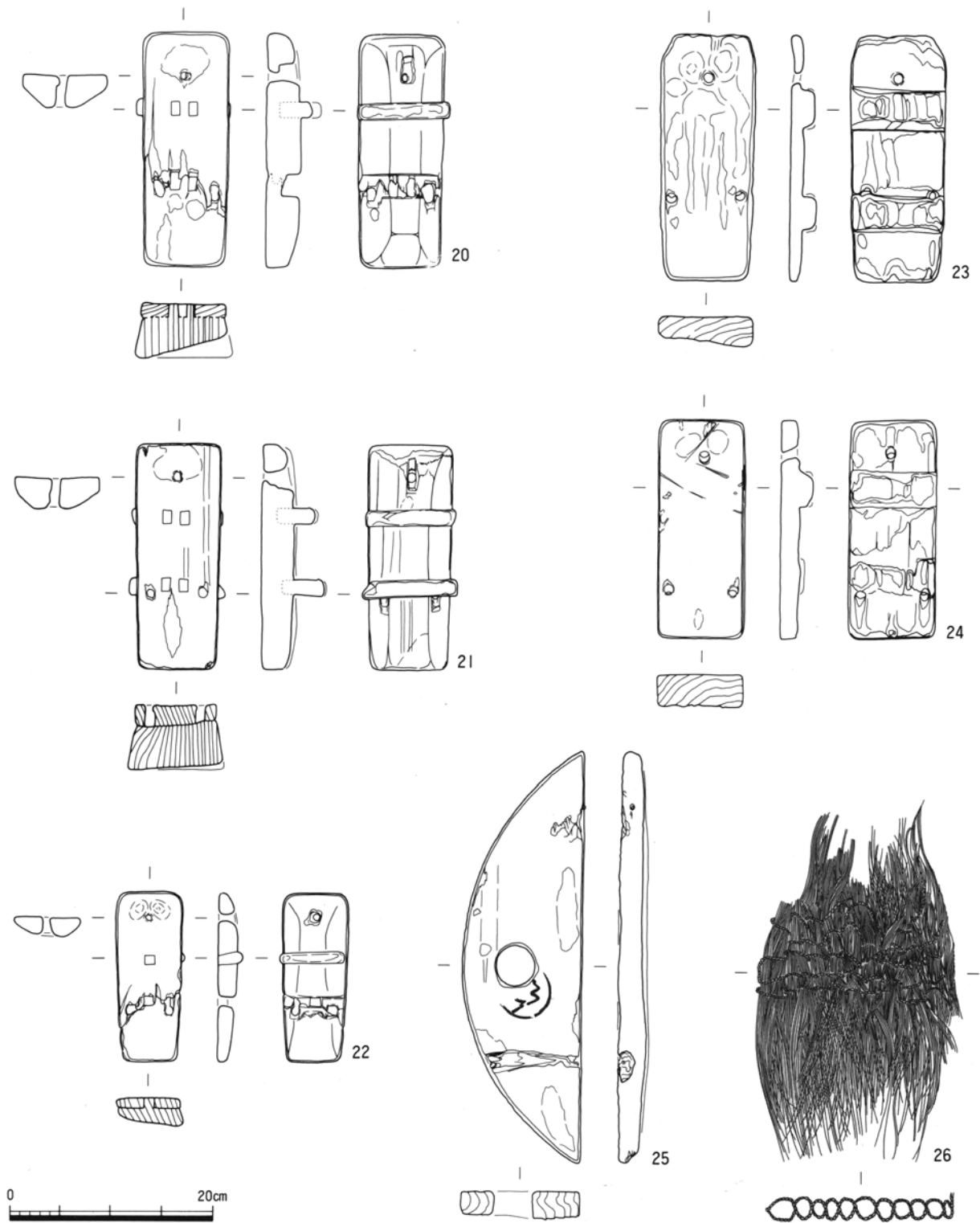
遺物 番号	調査地点		種類		法 量 (cm)			備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺 構	種類	部分	高さ	口径	つまみ径			
1	92A	SE106	漆碗	蓋	高さ (2.7)	口径 (10.7)	つまみ径 (4.4)	内面：赤色漆，外面：黒色漆，文様：灰色漆(草文か)	38	W-001
2	"	"	"	"	高さ (2.5)	口径 (13.4)	つまみ径 (4.4)	内面：赤色漆，外面：黒色漆	38	W-002
3	"	"	"	身	高さ (3.9)	口径 (9.7)	底径 (4.9)	内面：赤色漆，外面：黒色漆，文様：赤色漆(桔梗文か)		W-003
4	"	"	傘	軸部	長さ 4.8	—	最大幅 3.6	赤色漆・黒色漆塗り分け	38	W-004
5	"	"	盆	—	高さ 1.1	径 (25.6)	最大厚 0.7	内面：赤色漆・黒色漆塗り分け，外面：黒色漆	38	W-005

第114図 近世の遺物 (54) 木製品① (1 : 3)



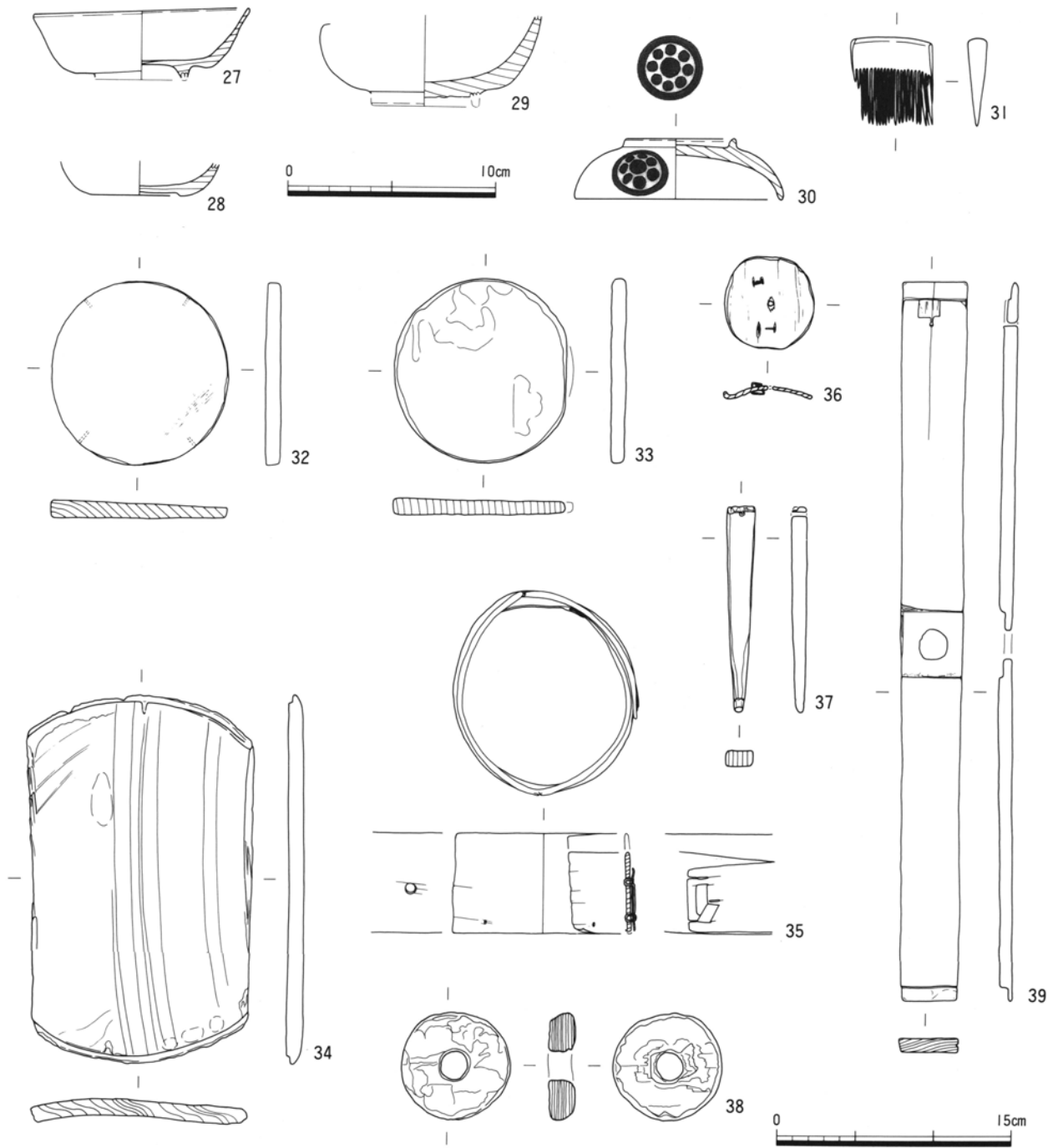
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類		法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
		種類	部分	長径	短径	最大厚	その他			
6	92A SE106	曲物	底板	長径 19.6	短径 19.6	最大厚 0.8		片面黒色漆, 端部穿孔径0.2cm		W-006
7	"	"	"	長径 11.5	短径 11.4	最大厚 0.6				W-007
8	"	"	"	長径 9.4	短径 9.3	最大厚 1.2				W-008
9	"	"	柄杓 柄	長さ 残13.5	最大幅 2.0	最大厚 1.4				W-009
10	"	"	建具	長さ 残13.9	最大幅 1.5	最大厚 0.9		両端と中央に穿孔3ヶ所(径0.2cm)		W-010
11	"	"	"	長さ 24.3	最大幅 2.3	最大厚 1.1		上下に幅1.0cm, 深さ1.3cmの切込み		W-011
12	"	"	箸	長さ 残18.0		厚さ 0.7				W-012
13	"	"	"	長さ 残16.8		厚さ 0.7				W-013
14	"	"	"	長さ 残17.8		厚さ 0.8				W-014
15	"	"	"	長さ 残15.6		厚さ 0.6				W-015
16	"	"	"	長さ 残20.4		厚さ 0.7				W-016
17	"	"	"	長さ 残20.7		厚さ 0.6				W-017
18	"	"	箱物 底板	縦 7.7	横 7.5	最大厚 2.9		表面と側面に2ヶ所づつ穿孔(径0.2~0.3cm)	38	W-018
19	"	"	箱物 前板	縦 4.1	横 9.0	最大厚0.7, つまみ全長2		両端3ヶ所づつと底部2ヶ所穿孔(径0.2~0.3cm)	38	W-019

第115図 近世の遺物 (55) 木製品② (1:4)



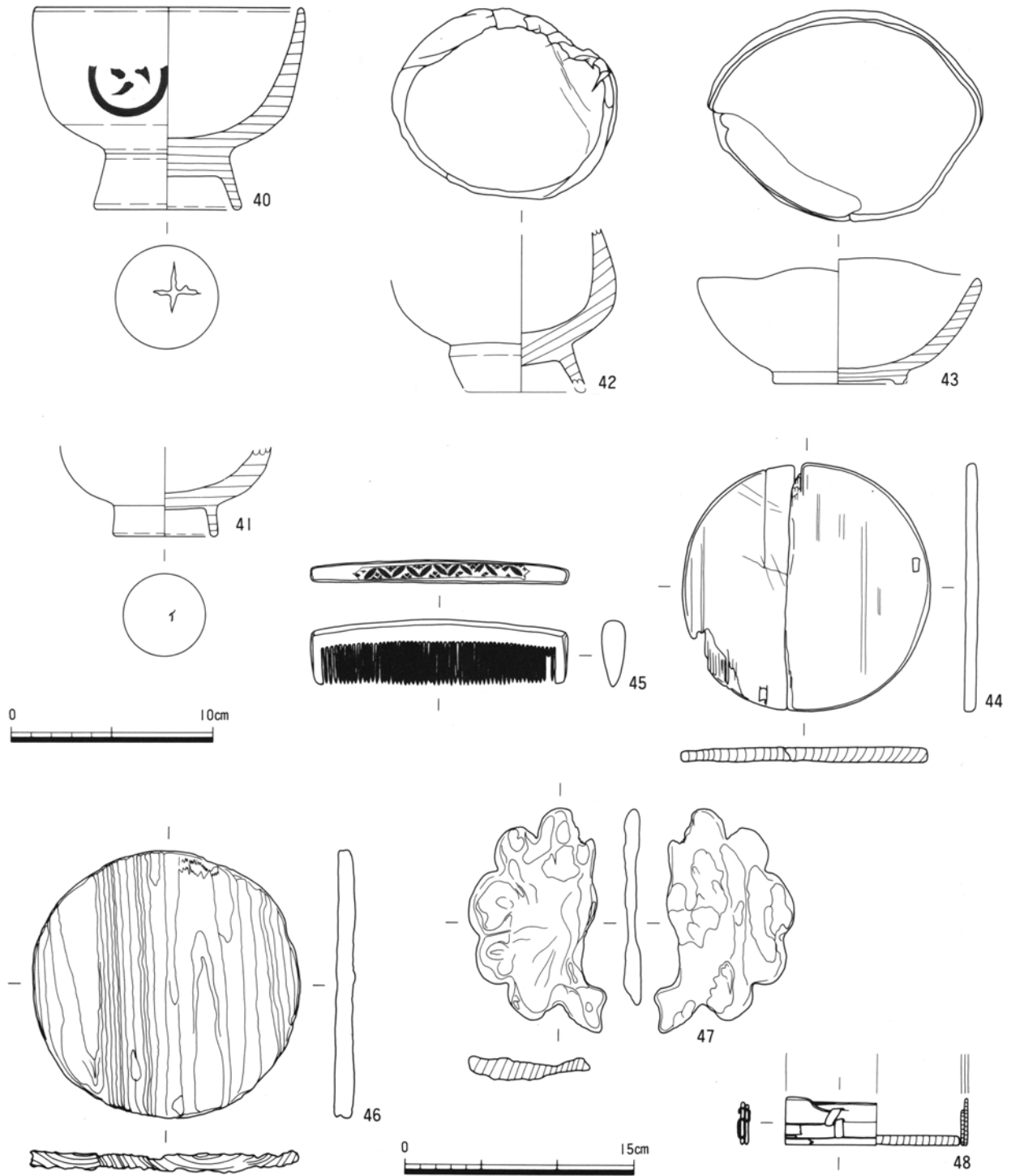
遺物 番号	調査地点		種類		法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺 構	種類	部分	縦	横	歯の厚さ	歯の高さ			
20	92A	SE106	下駄	—	縦 23.1	横 8.5	歯の厚さ 1.6	高さ 5.4	差し歯	38	W-020
21	"	"	"	—	縦 22.3	横 9.5	歯の厚さ 1.7	高さ 6.4	差し歯	38	W-021
22	"	"	"	—	縦 16.8	横 6.5	歯の厚さ 1.1	高さ 2.9	差し歯	38	W-022
23	"	"	"	—	縦 24.4	横 9.4	歯の厚さ 4.2	高さ 3.1	一木造り	38	W-023
24	"	"	"	—	縦 21.6	横 8.6	歯の厚さ 3.6	高さ 3.3	一木造り		W-024
25	"	"	樽	上板	縦 40.9	横 残11.9	最大厚 3.1		穿孔径3.9cm, 焼印		W-025
26	"	"	箒	—	縦 36.3	横 20.7	最大厚 2.3			38	W-026

第116図 近世の遺物 (56) 木製品③ (1:6)



遺物 番号	調査地点 調査区	種 類	種 類	種 類	法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
					部分	高さ	口径	底径			
27	93B	SE104	漆碗	身	高さ (3.3)	口径 (10.2)	底径 (4.4)		内外面：赤色漆		W-027
28	"	"	"	"	—	—	底径 (3.8)		内面：赤色漆，外面：黒色漆		W-028
29	"	"	"	"	高さ 残 3.9	—	底径 (4.9)		内面：赤色漆，外面：黒色漆		W-029
30	"	"	"	蓋	—	口径 (9.8)	つまみ径 5.2		内面：赤色漆，外面：黒色漆，文様：灰色漆(丸に九曜)		W-030
31	"	"	櫛	—	縦 4.2	横 残 3.9	最大厚 0.9				W-031
32	"	"	曲物	底板	径 11.6	—	最大厚 1.1		側面に止め穴4ヶ所，35と同一個体か		W-032
33	"	"	"	"	径 11.7	—	最大厚 1.0				W-033
34	"	"	"	"	径 23.4	—	最大厚 1.0		片面黒色漆，端部彫り込み		W-034
35	"	"	"	側板	高さ 6.4	長径 13.0	短径 11.6		体部穿孔(径0.7cm)，底部4ヶ所穿孔(径0.2cm)		W-035
36	"	"	不明	—	長径 6.1	短径 5.7	最大厚 0.3		中央穿孔(径0.3~0.4cm)，2ヶ所針金巻き付く		W-036
37	"	"	柄杓	柄	長さ 残13.0	最大幅 1.8	最大厚 1.0				W-037
38	"	"	戸車	—	径 7.0	—	最大厚 1.7		穿孔径1.7cm	38	W-038
39	"	"	建具	—	長さ 45.5	幅 4.1	最大厚 0.9		穿孔径1.8cm・径0.2cm，切込み		W-039

第117図 近世の遺物 (57) 木製品④ (27~30は1:3, 他は1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種 類 種類 部分	法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
			高さ	口径	底径	最大厚			
40	93B SE103	漆碗 身	高さ (10.0)	口径 (13.0)	底径 (6.9)	—	内外面：黒色漆，文様：赤色漆(丸に三ツ巴文)	38	W-040
41	" "	" "	高さ 残 4.4	—	底径 (4.8)	—	内面：赤色漆，外面：黒色漆，文様：赤色漆(文字「イ」)	38	W-041
42	92A SD101	" "	長径 11.1	短径 9.2	底径 (5.7)	—	内外面：赤色漆	38	W-042
43	" "	" "	高さ 6.2	長径 13.5	短径 10.4, 底径 (6.5)	—	内面：赤色漆，外面：黒色漆	38	W-043
44	" "	曲物 底板	径 12.2	—	最大厚 0.7	—	—	—	W-044
45	SE107	櫛 櫛	縦 3.3	横 12.7	最大幅 1.1	—	黒色漆+蒔絵(金)	38	W-045
46	" "	曲物 底板	径 17.4	—	最大厚 1.2	—	—	—	W-046
47	" 攪乱	建具 一	縦 9.6	横 6.3	最大厚 1.1	—	欄間の一部か	—	W-047
48	" SK226	曲物 一	高さ 残 3.1	口径 (11.8)	底板厚 0.6, 側板厚 0.5	—	柄杓か	—	W-048

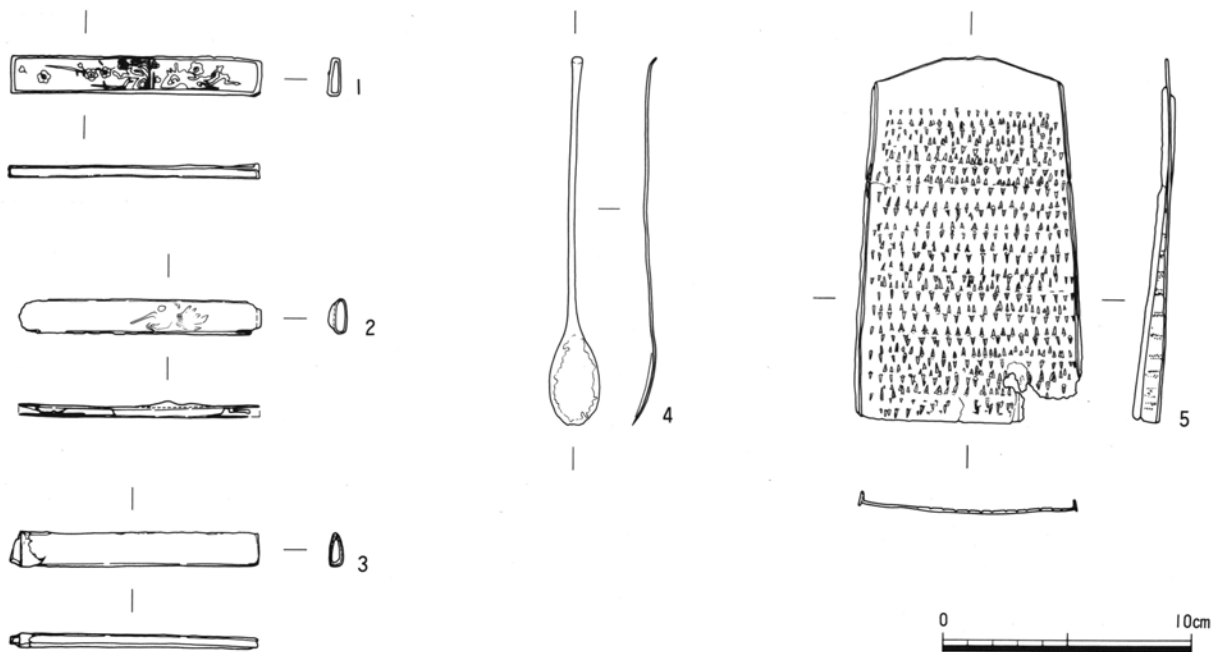
第118図 近世の遺物 (58) 木製品⑤ (40~43・45は1:3, 他は1:4)

6. 金属製品

今回の発掘調査で出土した金属製品としては、鉄製・銅製・真鍮製の釘・飾り金具・小柄・煙管・簪・皿・銭貨等の他、匙や卸金がある。今回は、細かな分類やカウント等による集計については実施していない。

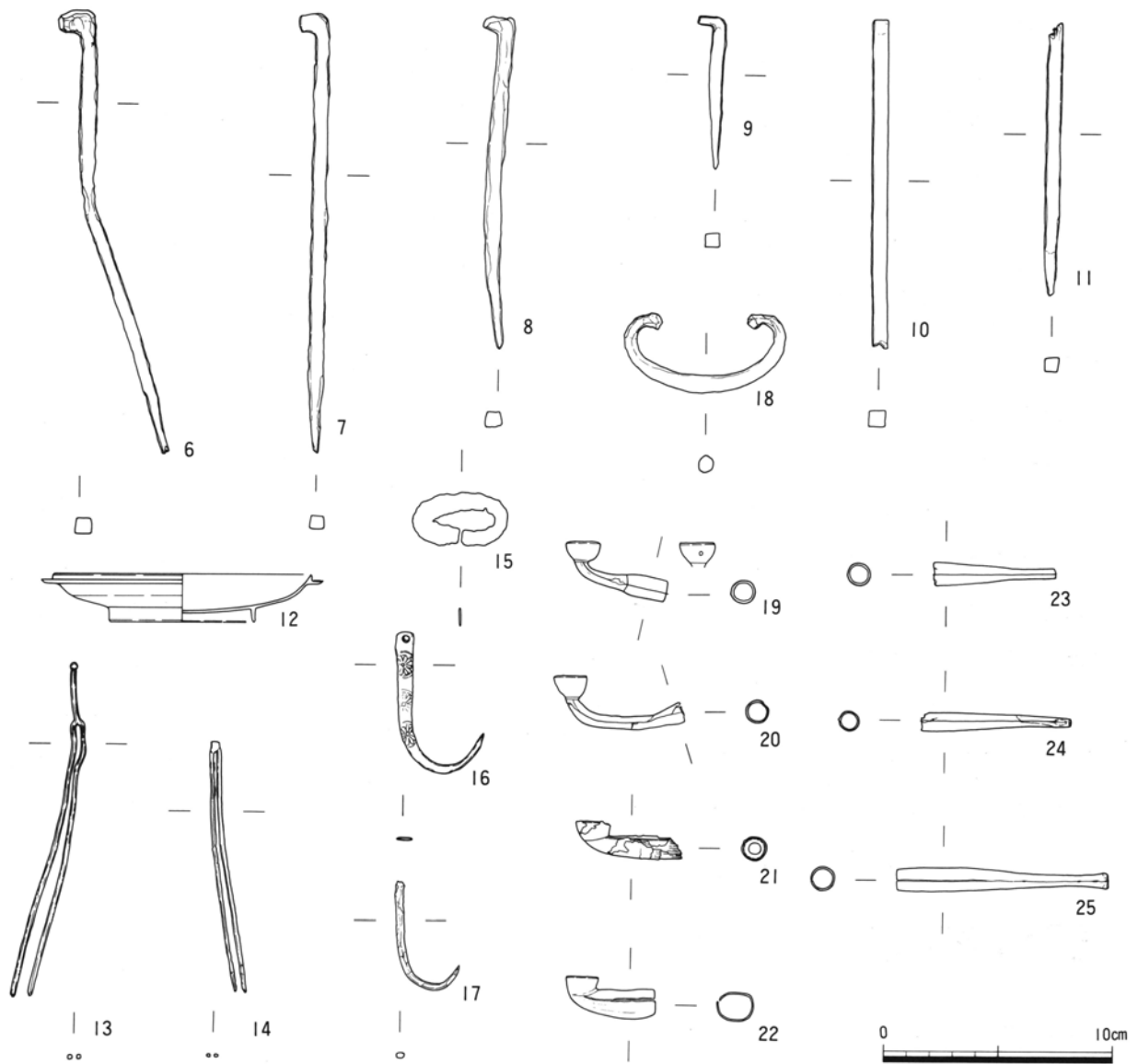
1～3は武具である銅製の小柄で、1・2には彫金による装飾が見られ、3では中に刃が入ったままで出土している。4は真鍮製の匙で、表面には金メッキが施されている。5は銅製の卸金で、上部が欠損しているが、取っ手がつくものと思われる。6～9は工具である鉄製の釘で、各種の大きさがあるようである。瓦止めとして利用されることから、瓦溜りの周辺の遺構から出土する例が多いようであるが、本遺跡においては瓦類にもそのような痕跡は見られず、瓦類との出土は確認されていない。10・11は鉄製の火箸で、同一個体のものと思われる。12は供膳具である銅製の皿と思われる。13・14は装身具である銅製の簪で、上部に花等の装飾がついていたものであろう。15は刀装具の1つである。16・17は銅製の釣り針であるが、実用品とはやや考えにくい。16には菊花の装飾がみられる。19～22は喫煙具である銅製または真鍮製の煙管の雁首、23～25は銅製または真鍮製の煙管の吸口で、年代的に幅が見られる。出土遺物の中には、ラウと呼ばれる木製品部分が残っているものもある。

26～41は銭貨である。遺構から出土したものよりも検出段階の遺物が多く、26～28のような中世の輸入銭も見ることができ。大半は「寛永通寶」で、古寛永と新寛永があり、38～41のように「文」や「元」という背文の見られるものもある。 (小嶋廣也)



遺物 番号	調査地点		種類		材質	法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	種類		長さ	最大幅	最大厚	縦 残			
1	92A	SD101	装身具	小柄	銅	長さ 10.0	最大幅 1.5	最大厚 0.5		草花文 (彫金)	39	M-001
2	〃	検III	〃	〃	〃	長さ 残 9.6	最大幅 1.8	最大厚 0.7		文様不明 (彫金)	39	M-002
3	〃	検I	〃	〃	〃	長さ 9.5	最大幅 1.4	最大厚 0.6		中に刀子の刃 (鉄製) が入っている	39	M-003
4	〃	SE106	供膳具	匙	真鍮	長さ 14.7	最大幅 2.1	—		金メッキか	39	M-004
5	〃	検II	調理具	卸金	銅	高さ 0.9	縦 残 14.6	幅 9.0			39	M-005

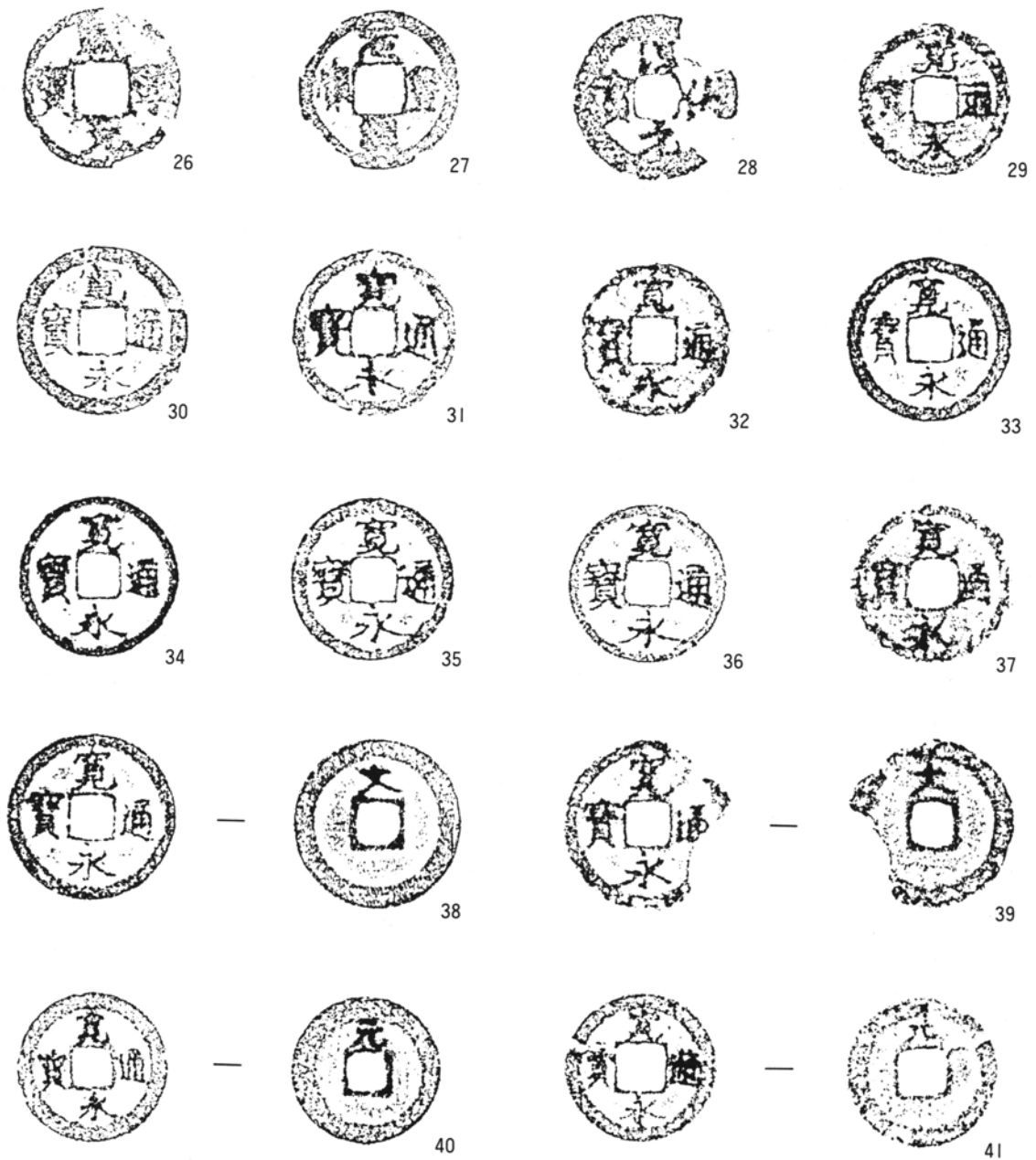
第119図 近世の遺物 (59) 金属製品① (1 : 3)



遺物 番号	調査地点		種類		材質	法 量 (cm)				備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	種類		長さ	幅	頭部径	底径			
6	93B	SD129	建具	釘	鉄	長さ 19.5	幅 0.8	頭部径 1.5			39	M-006
7	"	検II	"	"	"	長さ 19.0	幅 0.7	頭部径 1.2			39	M-007
8	"	暗渠	"	"	"	長さ 14.4	幅 0.8	頭部径 1.2				M-008
9	"	検I	"	"	"	長さ 6.6	幅 0.6	頭部径 1.1				M-009
10	"	"	火具	火箸	"	長さ 残14.2	幅 0.7	—		11と同一遺物		M-010
11	"	"	"	"	"	長さ 残11.8	幅 0.7	—		10と同一遺物		M-011
12	92A	SD101	供膳具	皿か	銅	器高 (2.1)	口径 (11.1)	底径 6.2		杯か	39	M-012
13	93B	暗渠	装身具	簪	"	長さ 14.6	最大幅 0.3	—			39	M-013
14	92A	SK279	"	"	"	長さ 残10.8	最大幅 0.4	—			39	M-014
15	"	SD187	刀装具	飾り金具	"	縦 2.3	横 4.1	最大幅 1.0			39	M-015
16	"	SD101	その他	釣り針	"	長さ 9.3	最大幅 0.8	—		菊花文	39	M-016
17	93B	検III	"	"	"	長さ 残 7.1	最大幅 0.4	—			39	M-017
18	"	SD165	調度具	引き手	鉄	縦 3.4	横 7.0	径 0.7			39	M-018
19	"	SK061	喫煙具	煙管	銅	首の長さ 4.4	火皿径 1.4	高さ 2.6		雁首	39	M-019
20	"	SK036	"	"	"	首の長さ 5.6	火皿径 1.3	高さ 2.3		雁首	39	M-020
21	92A	SD101	"	"	"	首の長さ 残3.3	火皿径 1.4	高さ 1.6		雁首		M-021
22	93B	検I	"	"	真鍮	首の長さ 3.9	火皿径 1.4	高さ 1.8		雁首	39	M-022
23	92A	SD101	"	"	銅	長さ 5.4	最大径 1.0	—		吸口	39	M-023
24	93B	検I	"	"	真鍮	長さ 残 6.5	最大径 0.9	—		吸口	39	M-024
25	"	"	"	"	"	長さ 9.2	最大径 1.0	—		吸口		M-025

第120図 近世の遺物 (60) 金属製品② (1:3)





遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類 種類 器種	材質	法 量 (cm)			備 考	PL	登録 番号	
				径	孔 径	重 さ				
26	92A	検 I	銭貨	濠寧元寶	銅	2.4	0.7	2.3	北宋, 初鑄1068年	M-026
27	"	"	"	元豐通寶	"	2.4	0.7	2.1	北宋, 初鑄1078年	M-027
28	93B	P189	"	淳祐元寶	"	2.5	0.6	1.9	南宋, 初鑄1241年	M-028
29	92A	SD118	"	寛永通寶	"	2.2	0.6	1.8	古寛永	M-029
30	93B	SK013	"	"	"	2.5	0.5	2.4	古寛永	M-030
31	92A	SD129	"	"	"	2.4	0.6	2.9	新寛永	M-031
32	"	SK246	"	"	"	2.2	0.6	1.6	新寛永	M-032
33	"	検 I	"	"	"	2.4	0.6	3.4	新寛永	M-033
34	93B	"	"	"	"	2.4	0.5	4.6	古寛永	M-034
35	"	"	"	"	"	2.4	0.6	2.6	古寛永	M-035
36	"	"	"	"	"	2.3	0.6	2.6	古寛永	M-036
37	"	"	"	"	"	2.3	0.7	1.7	新寛永	M-037
38	92A	検 I	"	"	"	2.5	0.6	3.4	新寛永, 背文	M-038
39	"	SD101	"	"	"	2.5	0.6	2.6	新寛永, 背文	M-039
40	93B	検 I	"	"	"	2.2	0.6	2.1	新寛永, 背元	M-040
41	92A	"	"	"	"	2.2	0.7	1.7	古寛永, 背元	M-041

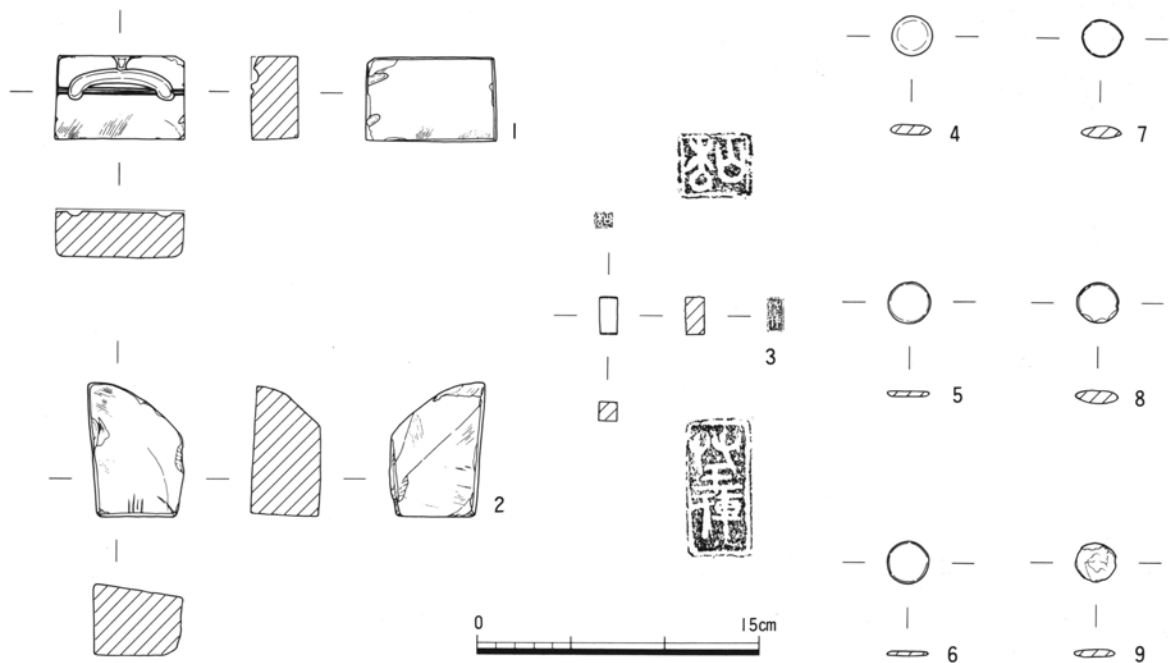
第121図 近世の遺物 (61) 金属製品③ (1:1)

7. 石・ガラス製品

今回の発掘調査において出土した石製品は、石臼・砥石・硯・碁石等の他、鋳型や印がある。どの遺構からどれだけの石製品が出土しているかについては、今回は集計していない。

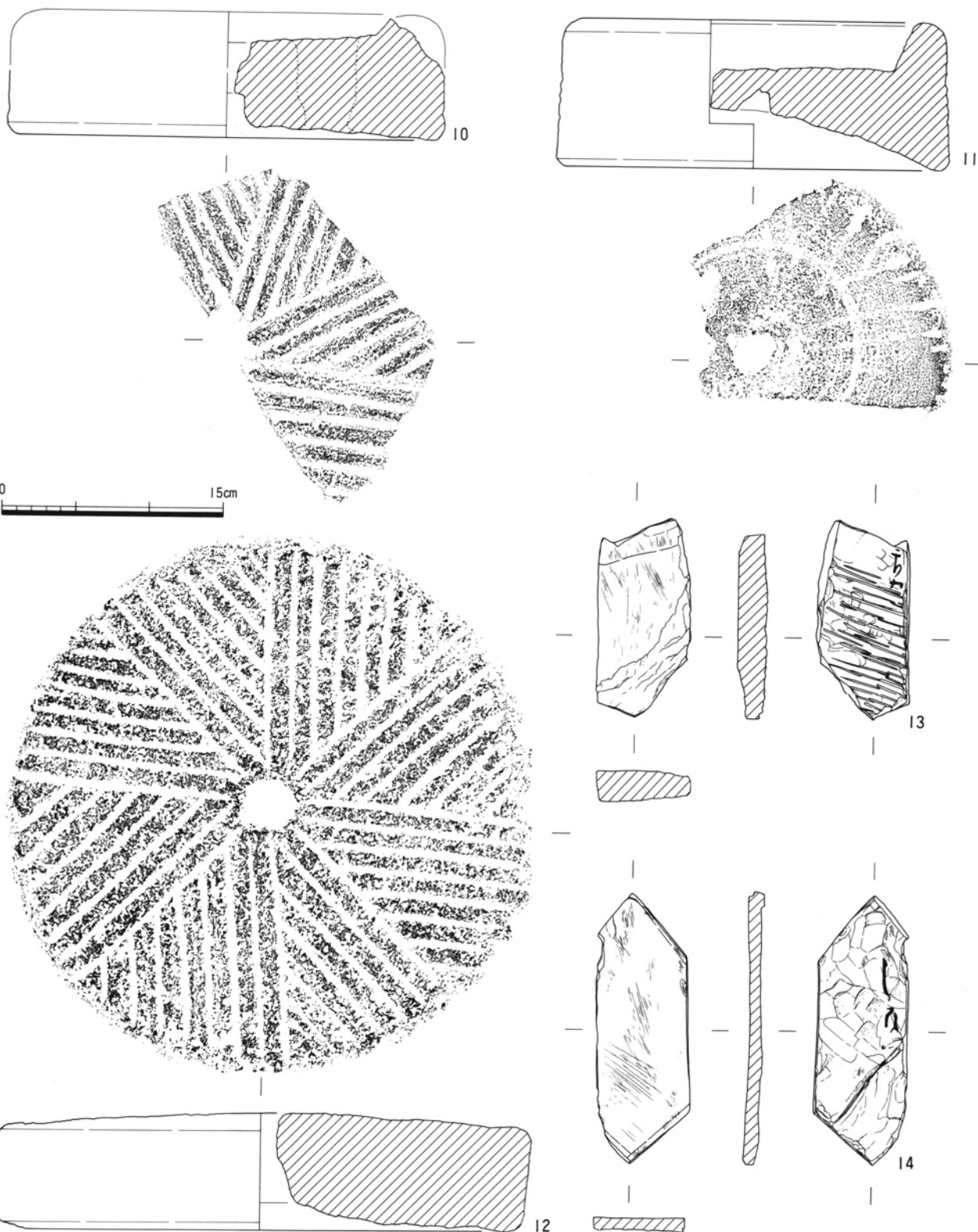
1は投網漁に使う錘を作る鋳型と考えられ、凹部には鉛が付着している。趣味で作っていたのか、或いは内職で作っていたのかはわからないが、当時の人々の生活の実態を考える上で興味深い資料である。2は用途不明であるが、砥石とも考えられる。3は印と思われるが、文字は読み取ることができなかった。鋳型同様に興味深い資料である。4～9は碁石で、黒石・白石とも確認している。黒石はすべて頁岩製であり、白石は貝製のものが多いようが、石英製のものも確認されている。10～12は石臼で、全て挽臼であるが、上臼・下臼とも出土している。13～21は砥石で、大きさは様々であるが、仕上げ用の砥石が多くみられている。中には13・14のように、墨書の見られるものも確認している。22～27は硯で、長方形をしたものが多いが、24のように装飾を施された不定形の硯も出土している。22の硯は、裏側まで使用痕が確認されている。

また、ガラス製品については、外堀や暗渠から明治期以降と思われる瓶類が多く出土しているが、ここでは取り上げることはしない。名古屋城三の丸遺跡において出土している簪等についても、本遺跡では金属製品以外には確認されていない。(小嶋廣也)



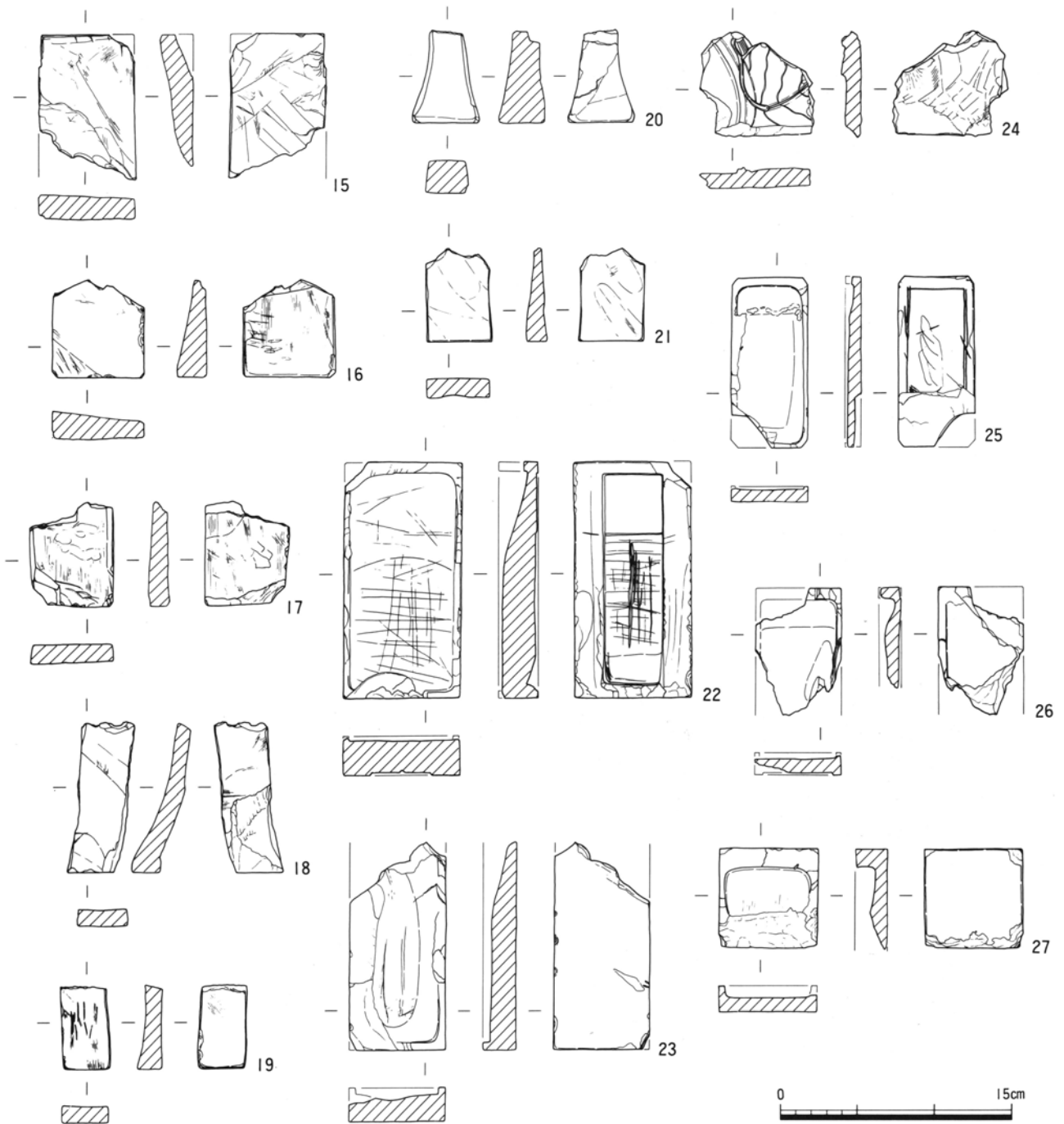
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類		法 量 (cm)				石材	備 考		PL	登録 番号	
		用途	種類	縦	横	最大厚	厚さ						
1	92A 検III	その他	鋳型	縦	4.4	横	4.4	最大厚	2.5	安山岩	投網錘の鋳型	39	S-001
2	93B SX104	"	砥石か	長さ 残	7.1	幅 残	4.8	厚さ	3.7	—			S-002
3	92A SD101	"	印	縦	2.0	横	1.0	最大厚	1.1	—		39	S-003
4	93B SK092	遊戯具	碁石	径	2.1	最大厚	0.5	—	—	頁岩	黒石		S-004
5	" SD134	"	"	径	2.2	最大厚	0.3	—	—	"	黒石		S-005
6	" "	"	"	径	2.2	最大厚	0.2	—	—	"	黒石		S-006
7	" "	"	"	径	2.1	最大厚	0.6	—	—	貝	白石		S-007
8	" "	"	"	径	2.2	最大厚	0.7	—	—	石英	白石		S-008
9	" "	"	"	径	2.1	最大厚	0.4	—	—	貝	白石		S-009

第122図 近世の遺物 (62) 石製品① (1 : 4)



遺物 番号	調査地点		種類		法 量 (cm)			石 材	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺 構	用途	種類	高さ	径	最大径				
10	92A	トレンチ	調理具	石臼	高さ 10.0	径 (22.7)	最大径 (26.5)	安山岩	上白		S-010
11	"	SK274	"	"	高さ 8.4	径 (24.8)	最大径 (27.8)	花崗岩	上白		S-011
12	93B	検 I	"	"	高さ 7.9	径 32.4	最大径 36.3	"	下白	39	S-012
13	"	SK103	その他	砥石	長さ 残13.6	幅 残 6.3	厚さ 2.1	珪質頁岩	裏面墨書, のみ痕か	39	S-013
14	"	"	"	"	長さ 残18.2	幅 残 6.3	厚さ 0.9	"	裏面墨書	39	S-014

第123図 近世の遺物 (63) 石製品② (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類		法 量 (cm)				石材	備 考	PL	登録 番号
	調査区	遺構	用途	種類	長さ	幅	厚さ	残				
15	92A	SD101	その他	砥石	長さ	残 8.6	幅	6.2	厚さ	残 1.6	頁岩	S-015
16	93B	検 I	"	"	長さ	残 6.3	幅	6.0	厚さ	1.9	"	S-016
17	"	"	"	"	長さ	残 6.8	幅	残 5.4	厚さ	1.2	"	S-017
18	"	P402	"	"	長さ	残 9.7	幅	残 3.3	厚さ	残 3.3	"	S-018
19	92A	SK208	"	"	長さ	残 5.3	幅	3.0	厚さ	1.6	安山岩	S-019
20	"	検 I	"	"	長さ	残 6.0	幅	残 4.2	厚さ	2.2	石英片岩	39 S-020
21	93B	SK055	"	"	長さ	残 6.0	幅	残 4.2	厚さ	1.2	流紋岩	S-021
22	"	暗渠	文房具	硯	長さ	15.2	幅	7.5	厚さ	2.5	頁岩	裏面も硯として利用 39 S-022
23	"	SD102	"	"	長さ	残 13.4	幅	6.2	厚さ	2.2	泥岩	S-023
24	92A	SK313	"	"	長さ	残 6.8	幅	残 7.1	厚さ	2.1	頁岩	蓮弁か 39 S-024
25	93B	SK005	"	"	長さ	10.9	幅	5.0	厚さ	1.0	"	39 S-025
26	"	SD102	"	"	長さ	残 7.5	幅	残 7.5	厚さ	5.6	—	S-026
27	"	"	"	"	長さ	残 6.4	幅	6.4	厚さ	残 2.1	頁岩	S-027

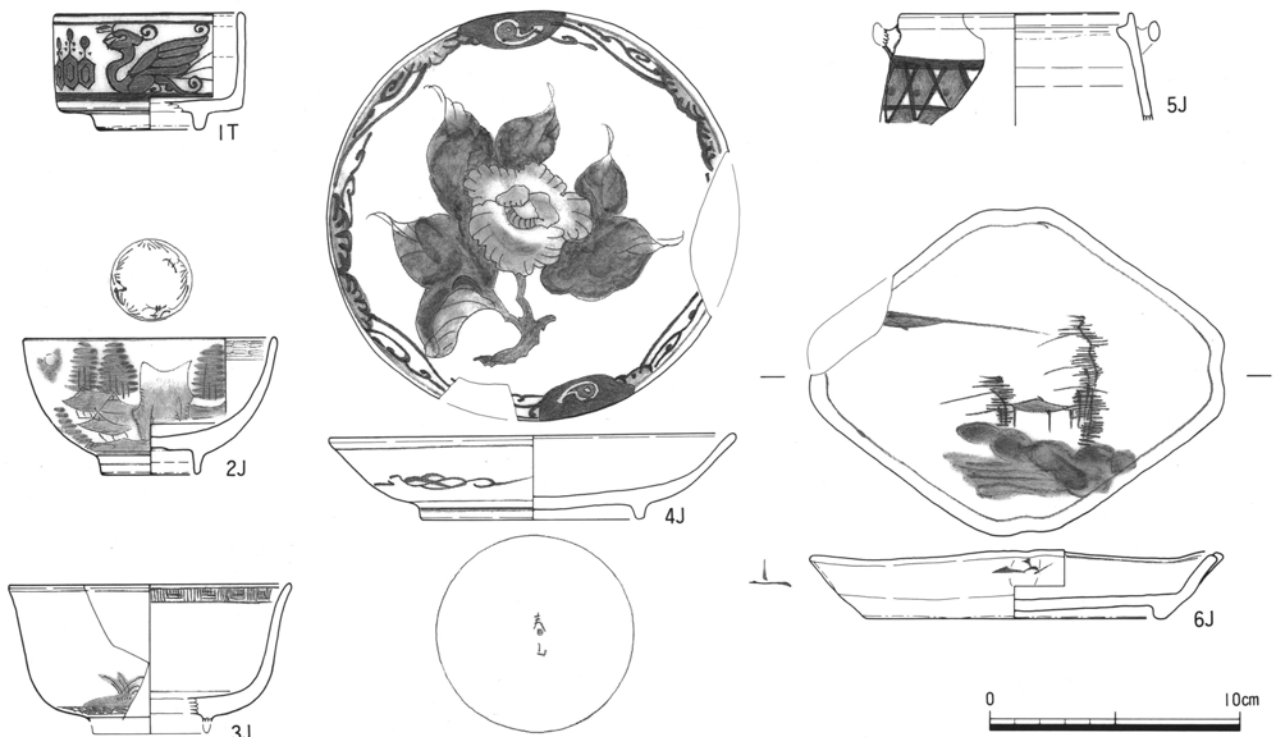
第124図 近世の遺物 (64) 石製品③ (1:4)

8. 近代の遺物

今回の発掘調査において、これまで見てきた古代・中世の遺物や近世の陶磁器類・瓦類等の他に、暗渠や外堀上層、攪乱等から、明治期以降の陶磁器類が出土している。近代の遺物については、今回のカウントからは除外しているので詳しいことはわからないが、近世と比べて肥前系のものよりも瀬戸・美濃系の磁器が急増している感がある。


供膳具である椀・皿・鉢類の出土が多く、1は陶器製品である色絵の筒椀で、緑と青で鳥と五三の桐が染色されている。2～6は磁器製品で、2は蛇の目凹型高台の丸椀で山水楼阁文と円環松竹梅文が、3は端反椀で草花文が、4は丸皿で折り枝に花文・唐草文に、高台内には「春山」と書かれている。4には染付の他に赤絵による装飾も施されている。6は型打皿で、山水楼阁文が描かれている。5は調理具の瓶類で、呉須と鉄絵で格子を描いている。ここで図示したのは出土した遺物の極一部であるが、コバルト呉須による染付が行われていたり、文様も手書きによるものは少なく、プリントやゴム印によるものが多いようである。

これ以外にも、星印のついたどんぶりや、「鉄道省」と書かれた汽車土瓶、「豊橋陸軍偕行社」と書かれた磁器製の表札や「江戸乃華」と書かれたガラス瓶等が出土している。写真図版（図版40）を参考にしていきたい。  
 (小嶋廣也)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	PL	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面					外面
1	93 B	検 I	供膳具	小椀	筒椀	4.6	7.3	—	(4.0)	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵＋色絵(青・緑)	40	E-982
2	"	"	"	"	丸椀	5.4	9.9	—	3.8	—	—	"	染付・山水楼阁文＋円環松竹梅文、蛇ノ目凹型高台	40	E-983
3	"	"	"	"	端反椀	—	11.1	—	—	—	—	肥前系	染付・山水文＋寿字文		E-984
4	"	"	"	"	皿	3.3	16.0	—	8.6	—	—	肥前	染付＋赤絵・折り枝に花文＋唐草文＋「春山」	40	E-985
5	"	"	調理具	瓶	その他	—	(9.1)	—	—	—	—	瀬・美	染付＋鉄絵・格子文		E-986
6	"	"	供膳具	皿	型打皿	2.7	(15.6)	—	11.9	—	—	"	染付・山水楼阁文	40	E-987

第 125 図 近代の遺物 (1 : 3)

An aerial photograph of an archaeological site, showing a complex grid of structures and numerous circular pits. A white rectangular box is superimposed on the image, containing the text '第V章 科学分析'. The site is viewed from an elevated perspective, showing the layout of the structures and the distribution of the pits. The grid lines are clearly visible, and the pits are scattered throughout the site, with some larger pits and many smaller ones. The overall appearance is that of a well-planned ancient settlement or a large-scale excavation site.

第V章 科学分析

## 第1節 胎土重鉍物分析

### 1. 焼塩壺

はじめに

近世の素焼きの製品の中では、瓦以上に重要視されている焼塩壺についても胎土分析を行う。これまでに当社では、大消費地である江戸の遺跡から出土した焼塩壺の分析を中心に進めてきた結果、焼塩壺の成形技法及び刻印と胎土との間に相関のあることを見出し、しかもこれまで刻印から播磨で作られていたと考えられてきた焼塩壺の胎土は、関東産であることを明らかにした（矢作ほか，1994）。本分析は、焼塩の主要な産地とされている大阪地域と大消費地である江戸との中間にある愛知県での分析例となり、その結果を重要な資料としたい。

#### (1) 試料

試料は、愛知県豊橋市に所在する吉田城遺跡の武家屋敷より出土した焼塩壺20点である。このうち身が15点（試料番号1～15）、蓋が5点（試料番号16～20）である。試料は全て無刻印であり、身は「型抜き成形」により作られたとされている器壁の厚い小型のものである。時期は概ね18世紀末～19世紀のものと考えられている。

#### (2) 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉍物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4—1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落斜光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉍物を呈示するにとどめる。

#### (3) 分析結果

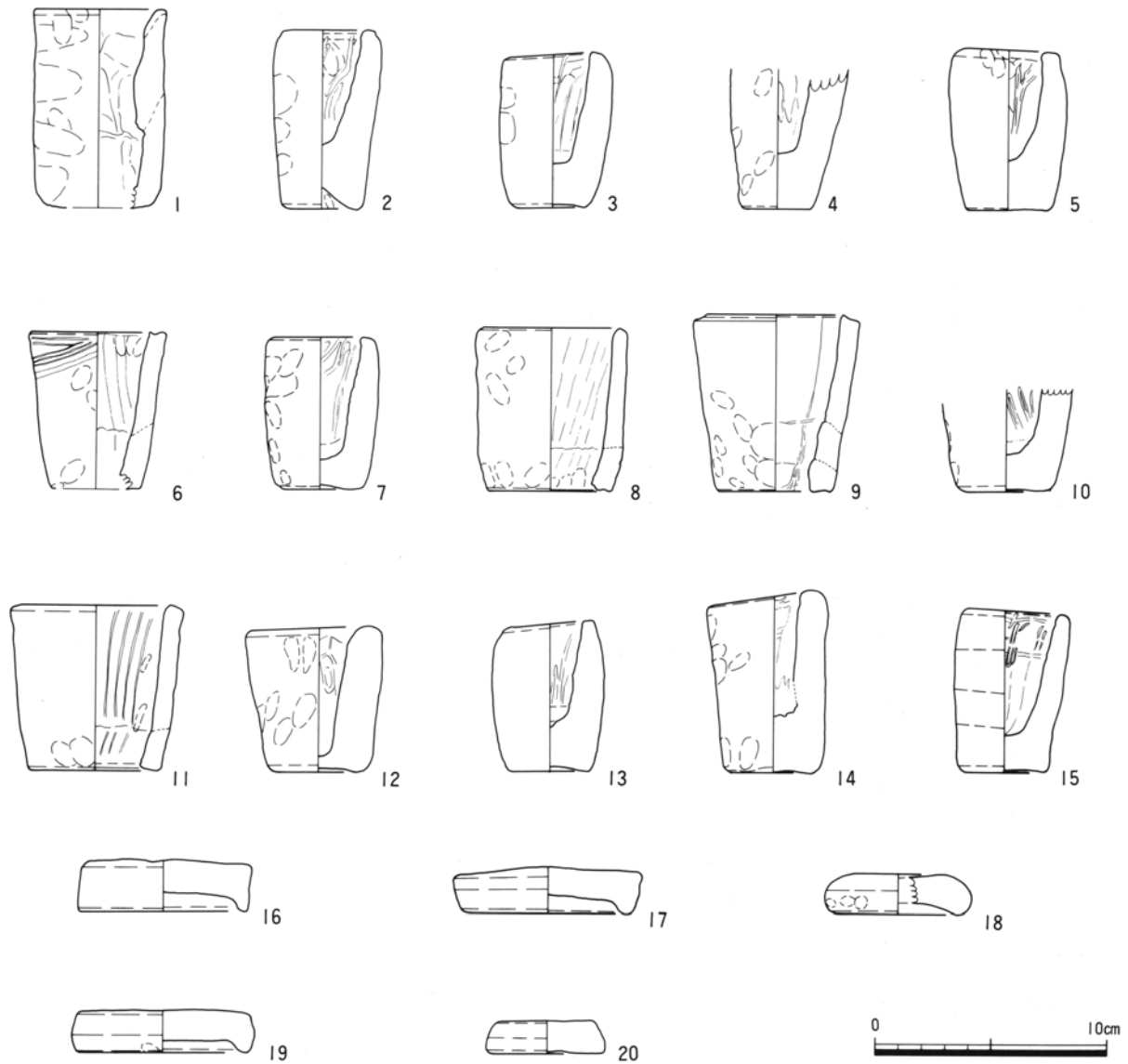
##### a) 身（試料番号1～15）

15点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは、試料番号4と9の2点のみである。これは、これまでの焼塩壺の分析例からみて、本分析の各試料の分量が少なかったためであり、特に重鉍物の含量が少ないわけではない。上記2点の試料は、他の試料よりも特に分量が多かっただけである。

上記2点の試料は、どちらも「その他」を除けば酸化角閃石が多く、少量の斜方輝石、角閃石を伴う。ただし、試料番号9には少量の黒雲母も含まれる。同定粒数100個未満の試料では、ほとんどの試料で角閃石または酸化角閃石が含まれる。

##### b) 蓋（試料番号16～20）

5点の試料のうち同定粒数100個未満の試料は試料番号20のみである。これを除く4点の試料のうち



試料 番号	調査 区	Gr.	遺構	器種		法量 (cm・cc)					色調	釉薬・調整等		備考
				器種	器形	器高	口径	肩径	底径	容量		内面	外面	
1	92A	-	SD101	焼塩壺	身	(8.6)	(5.5)	-	(3.0)	-	橙色	-	指押え	内面：明赤褐色
2	"	IF5g	SK326	"	"	7.7	(3.5)	-	(3.0)	30	にょい橙色	-	指押え+ナデ	内面：明赤褐色
3	"	IF4d	検出	"	"	6.6	3.6	-	2.8	25	"	ナデ	"	内面：明赤褐色
4	"	IF3e	"	"	"	-	-	-	2.5	-	橙色	-	指押え	内面：赤褐色
5	"	IF4e	"	"	"	6.9	3.8	-	(3.3)	18	にょい橙色	-	"	内面：明赤褐色
6	"	IF6q	"	"	"	(6.8)	(4.5)	(5.8)	(3.6)	-	"	-	指押え+ナデ	内面：橙色
7	93B	IE7j	SK053	"	"	(6.5)	(4.0)	-	3.0	-	橙色	-	"	内面：明赤褐色
8	"	IE8i-j	SK055	"	"	7.0	(5.2)	-	(5.3)	-	にょい橙色	-	指押え	内面：橙色
9	"	"	"	"	"	(7.6)	(6.0)	(7.2)	(4.8)	-	橙色	-	指押え+ナデ	内面：縄目痕
10	"	IE4l	SK086	"	"	-	-	-	3.0	-	にょい橙色	-	"	内面：赤褐色，断面に鉄塊附着
11	"	IE4g-h	SK020	"	"	(7.2)	(6.0)	-	(5.4)	-	"	-	"	
12	"	IE7-8o	SD129	"	"	6.2	5.3	-	3.5	25	"	-	指押え	内面：赤褐色
13	"	IE7g	検出	"	"	6.4	3.7	-	3.4	18	"	-	ナデ	
14	"	IE3l	"	"	"	7.6	4.2	-	3.4	24	赤色	-	指押え+ナデ	内面：布目痕
15	"	IE8n	"	"	"	7.0	4.1	-	3.4	30	赤橙色	-	ナデ	内面：赤褐色
16	92A	IF11p	"	"	"	2.2	7.2	7.1	-	-	橙色	-	"	内面：明赤褐色，布目痕
17	93B	-	SD101	"	蓋	2.0	7.0	8.1	-	-	にょい橙色	指押え	"	内面：布目痕
18	"	IE4j-k	SD113	"	"	(1.7)	(5.3)	(3.6)	-	-	"	-	指押え+ナデ	
19	"	IE8j-k	SD102	"	"	(1.8)	(7.3)	(7.2)	-	-	橙色	-	ナデ	内面：布目痕
20	"	IE9n	検出	"	"	1.4	4.0	4.6	-	-	淡黄橙色	-	"	

第126図 焼塩壺胎土分析試料実測図 (1:3)



試料番号17、18、19の3点は酸化角閃石を主体とする。ただし、試料番号17は少量の角閃石と黒雲母を伴い、試料番号18は微量の斜方輝石、角閃石、黒雲母、ジルコンなどを含む。試料番号20には角閃石が認められる。

#### (4) 考察

これまでに当社で行った江戸の遺跡から出土した焼塩壺の胎土分析では、いわゆる「ロクロ成形」以外のものは、刻印の種類にかかわらずほとんどが角閃石または酸化角閃石を主体とする組成を示すことが確かめられている。本分析の同定粒数100個体未満の試料については、その組成を正しく評価することはできないが、その出現鉱物の傾向は上述の江戸遺跡の結果とほぼ調和するものと見てよい。

同定粒数100個以上の2点の身の試料の組成は、以前分析した愛知県名古屋市に所在する名古屋城三の丸遺跡出土試料では、「泉湊」や「泉州麻生」さらに無刻印薄手の試料に認められており、また、江戸遺跡の出土例では、「泉州麻生」の多くおよび「泉湊伊織」の一部に認められている。一方、この組成は、名古屋城三の丸遺跡出土試料の「サカイ御塩所」や「泉湊伊織」、「御壺塩師」、厚手小型などにみられる角閃石を主体とする組成とは異なる。これらの角閃石を主体とする組成は、江戸遺跡では「輪積み成形」のものや「伊織系無刻印」に多く見られ、「泉湊伊織」の一部にも認められている。

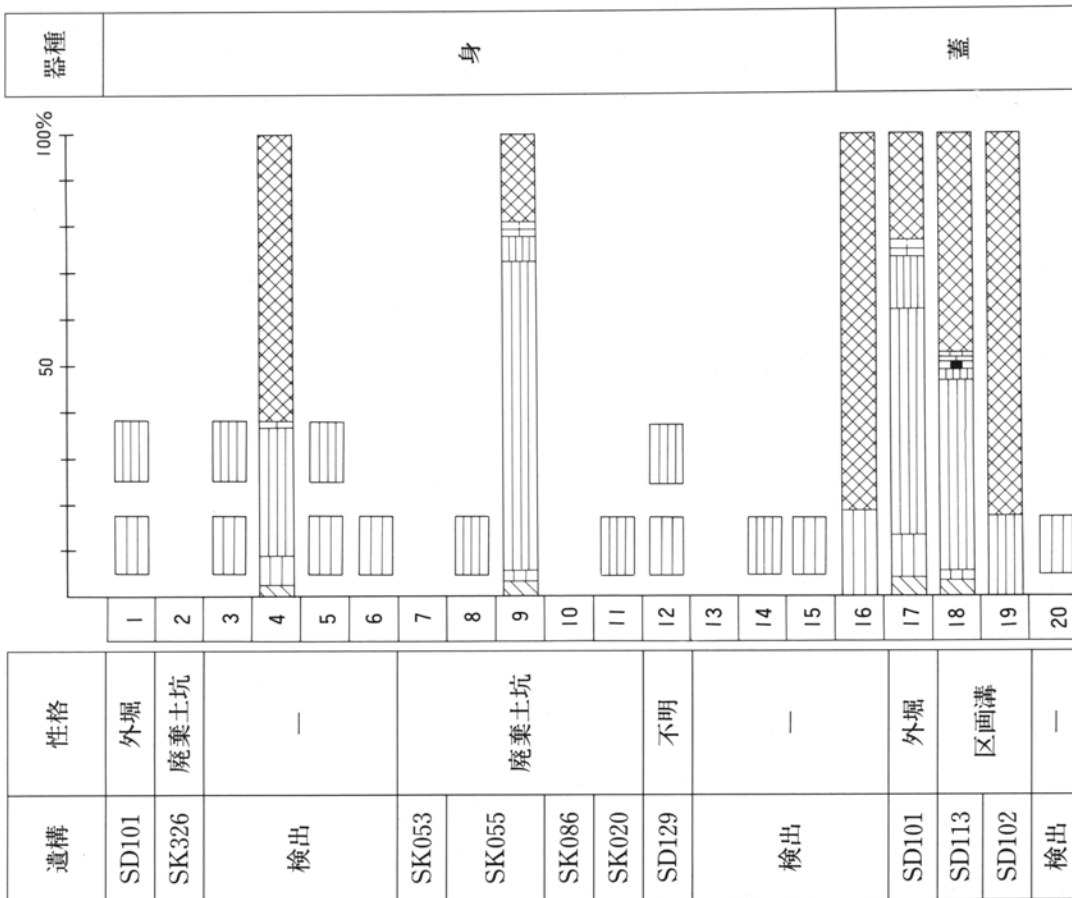
ところで、前述した矢作(1994)では、焼塩壺の胎土の特徴として重鉱物組成のほかに吸水率を指標として用いている。吸水率は、試料を水に漬け、ある一定時間後にどれだけの水を吸ったかという、いわば胎土の物理性を数字にしたものである。算出は、試料の乾燥重量と吸水重量を測定し、その差を乾燥重量で割り、百分率で表す。本分析試料についてもこれを求めた。結果は第19表に併記する。矢作ほか(1994)では、吸水率を用いることにより、おなじ角閃石を主体とする組成の「輪積み」と「伊織系無刻印」とを区別することができ、重鉱物組成の全く異なる「ロクロ成形」の胎土の違いにより明瞭にした。本分析では、重鉱物組成が十分に求められなかったが、吸水率から次のような区別をすることができる。まず、実測図から他の試料とは形態や器壁の厚さがやや異なると判断される試料番号1は、やはり吸水率でも他の試料とは離れた値を示す。また、同様に比較的器壁の薄い試料番号6、8、9、11は、18~22の範囲にあり、15~18の範囲に入る他の多くの試料とは区別される。吸水率の違いが、何に起因するものかはまだ詳細には確かめられていないが、重鉱物以外の砂粒や粘土の調整の違いが現れていると考えれば、上記で区別された試料は胎土が異なると考えて良い。

蓋の試料では、試料番号17~19の3点は、上記の2点の身の試料とほぼ同様の組成を示すが、吸水率を合わせてみると試料番号17は器壁の薄い身の方に近いと考えられ、試料番号18は他の多くの身に近いと考えることができる。試料番号19は、試料番号1に近い。この結果から、即座にそれぞれの蓋が上記の身にそれぞれ対応すると判断することはできないが、今後さらに調査例および分析例が増えることにより推定が可能となる。試料番号16の組成は、他の蓋および上記2点の身の試料とは異質であり、本分析では、これに対応する可能性のある身の試料を認めることができない。名古屋城三の丸遺跡では、「サギサカ」の刻印のある蓋の試料が全て角閃石主体の組成を示した。これらの試料との関係は、未だ解明することはできないが、身と同様に資料の蓄積が必要であろう。

冒頭に述べたように、焼塩壺は近世考古学において重要な指標になると考えられることから、その胎土分析の効果も高いと考えられる。今後は、その流通の性格から、より広範囲な地域での分析例が

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	紅柱石	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数	吸水率 (%)
1	0	1	5	3	0	0	0	0	2	0	0	66	77	12.6
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	16.3
3	0	0	2	3	0	0	0	1	0	0	0	0	6	17.7
4	6	1	16	70	0	1	0	3	2	0	2	149	250	17.6
5	2	0	10	6	0	0	0	0	0	1	0	10	29	15.3
6	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	19.9
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	17.7
8	4	0	2	9	0	1	0	0	0	0	0	12	28	18.6
9	8	1	6	167	13	0	0	4	4	0	0	47	250	19.1
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	23	7.2
11	3	1	9	26	0	0	2	0	1	0	0	41	83	21.7
12	2	0	11	17	0	0	0	1	0	0	0	13	44	16.3
13	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	4	15.4
14	0	0	0	3	1	0	0	0	0	2	0	23	29	17.7
15	2	0	8	0	1	0	0	0	1	0	0	1	13	22.1
16	0	0	46	1	2	0	0	1	2	0	2	194	250	12.5
17	10	1	23	122	28	0	0	4	5	1	0	56	250	17.9
18	6	0	4	75	4	0	3	1	2	2	1	84	182	17.6
19	1	0	1	43	1	0	2	0	2	0	0	200	250	12.5
20	7	0	18	1	0	1	0	1	1	4	0	21	54	15.1

第19表 焼塩壺試料の胎土重鉱物分析結果



(1. 斜方輝石 2. 角閃石 3. 酸化角閃石 4. 黒雲母 5. ジルコン 6. ザクロ石 7. 緑レン石 8. 電気石 9. 不透明鉱物 10. その他)

第127図 焼塩壺試料の胎土重鉱物組成

蓄積されることと重鉍物、吸水率以外にも胎土の特徴を捉えることが必要である。そしてこれまでに進められてきた刻印や成形技法等による分類、編年等との総合的な解析をすることにより、近世における生産・流通の一端を解明することができるかも知れない。

#### <参考文献>

矢作健二・植木真吾・菅原 道・中山経一 「焼塩壺の研究(その1)―胎土分析による問題提起とその検討―」 『日本文化財科学会第11回大会発表要旨集』 1994

## 2. 瓦類

はじめに

近世の城郭や武家屋敷に多量に使用されている瓦は、その生産地や流通において不明瞭な部分が意外に多い。例えば、大名の江戸屋敷に使用されている瓦が国元から取り寄せられたものか江戸で調達されたものかは、文献資料がある場合は別であるが、客観的な証拠が得られていることは少ない。瓦の刻印は産地の指標ともなるが、刻印のある瓦は全体から見れば少数であり、また当世における偽ブランド商品の横行を見るにつけ客観的な証拠とはいえない。本分析は、胎土分析の手法を瓦に応用することにより、その生産や流通を考える。解析は、本分析の試料間の比較はもちろんのことこれまでに当社が行った瓦およびその他の土器の胎土分析の結果とも比較を行う。そこから、近世の三河地域における瓦の生産流通状況を探りたい。

### (1) 試料

試料は、愛知県豊橋市に所在する吉田城遺跡、新城市に所在する島田陣屋遺跡、西尾市に所在する西尾城東之丸遺跡の各遺跡から出土した瓦30点である。内訳は、吉田城遺跡武家屋敷地点出土が12点(試料番号1~12)、同遺跡三の丸地点出土が6点(試料番号13~18)、島田陣屋遺跡出土が6点(試料番号19~24)、西尾城東之丸遺跡出土が6点(試料番号25~30)である。

各試料の出土した遺跡名、遺構及びその性格、種類は、分析結果を呈示した第131図中に併記するが、詳しくは試料実測図下の観察表を参考にさせていただきたい。

### (2) 分析方法

1. 焼塩壺の(2)と同様。

### (3) 分析結果

#### a) 吉田城遺跡武家屋敷地点(試料番号1~12)

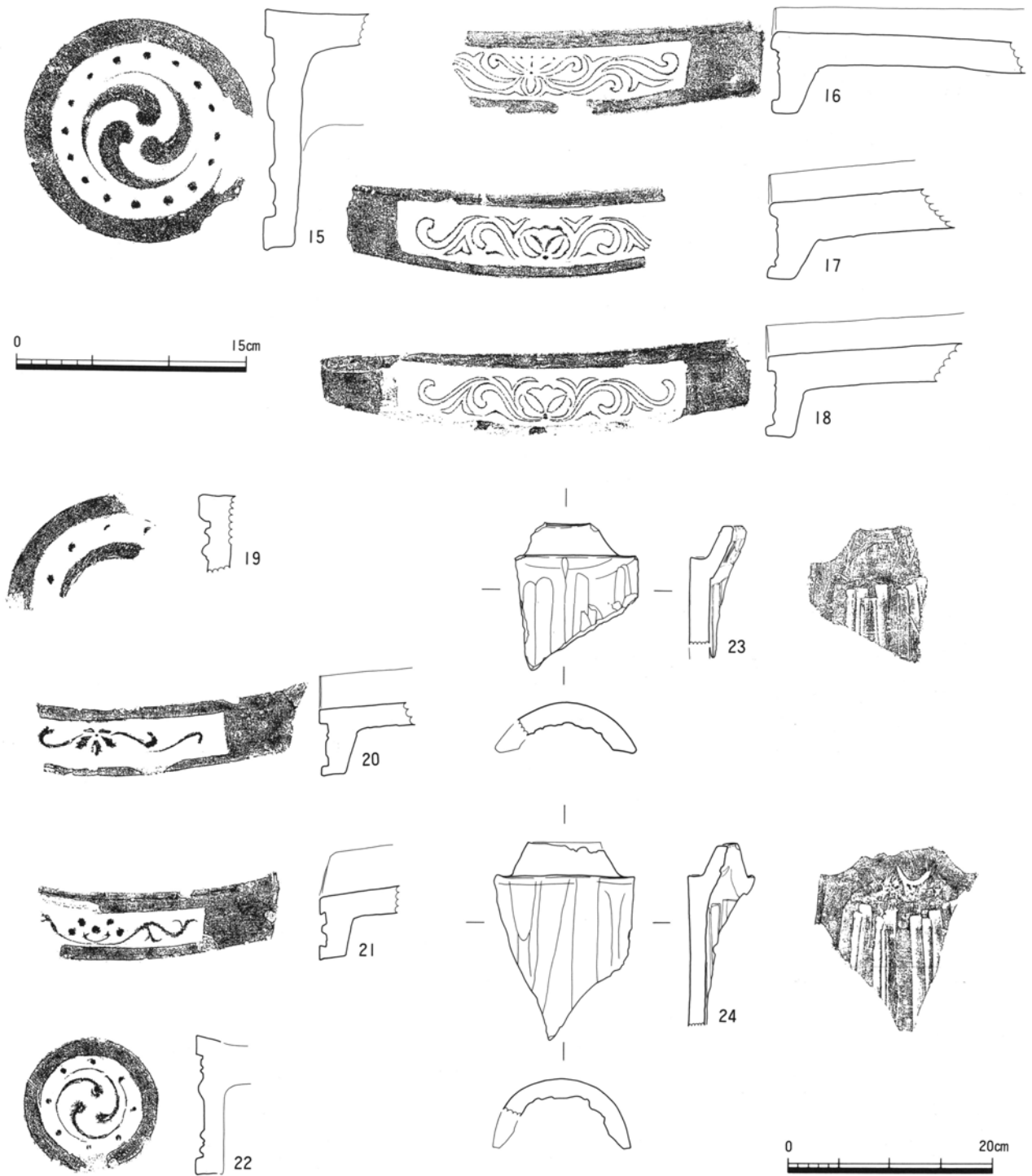
全体的に「その他」とした変質粒が多いが、それを除いた場合の鉍物の組み合わせを見ると次に述べるようなまとまりが見出だせる。

試料番号1、3、4、5は、斜方輝石、角閃石、ジルコン、ザクロ石が少量ずつあり、黒雲母を微量含むことが特徴である。試料番号2、9、10は、「その他」が非常に多く、少量の角閃石と黒雲母を含む。試料番号6、7、8は、「その他」が他の試料に比べれば少なく、角閃石を主体とする。試料番号11は「その他」が非常に多く、少量の黒雲母とジルコンが特徴となる。試料番号12は、角閃石と黒雲母、ジルコン、ザクロ石が少量ずつある。



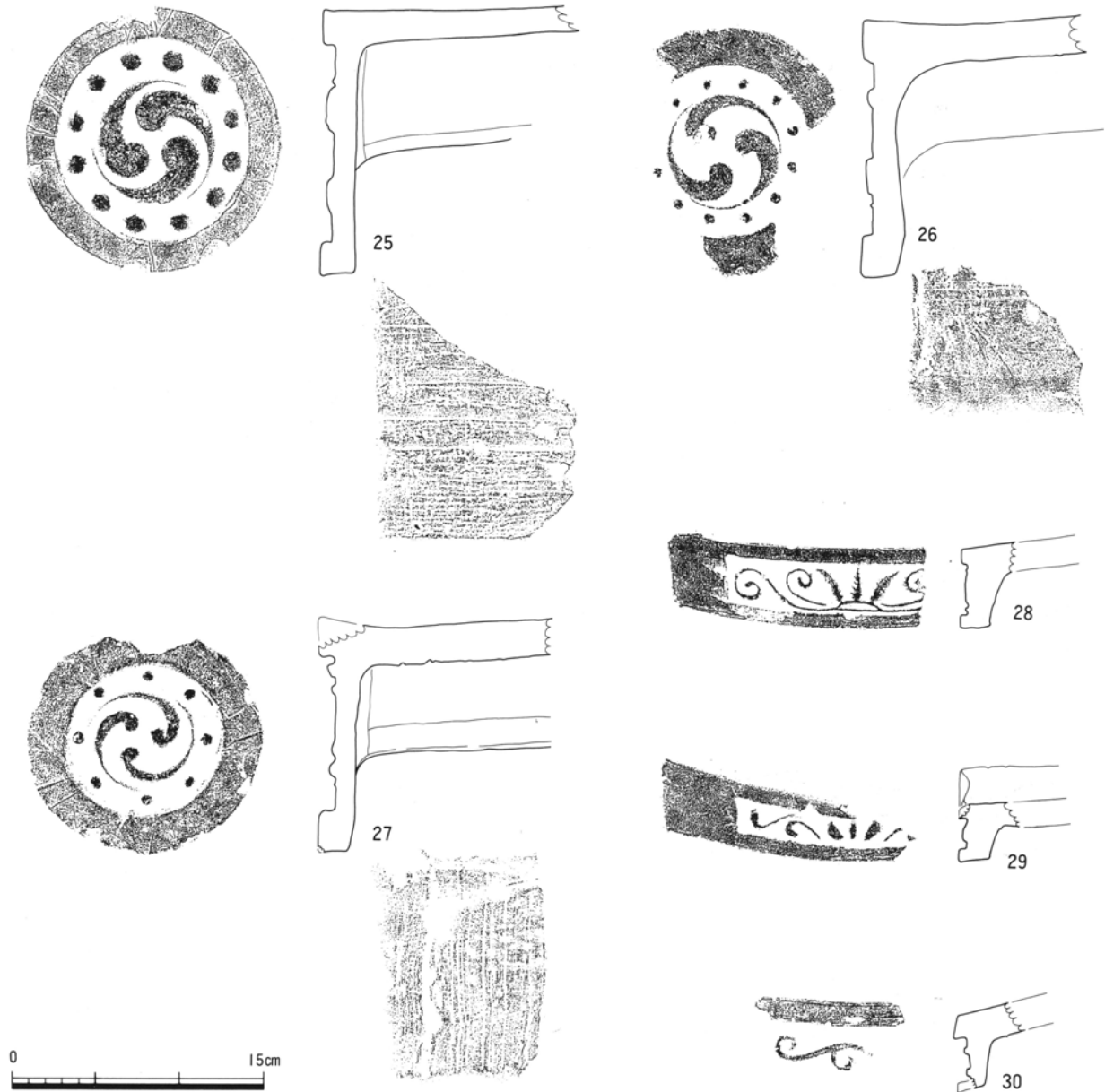
試料番号	遺跡名	Gr.	遺構	種類	軒丸部 (cm)				軒平部 (cm)				丸瓦 (cm)			備考	
					径	内区径	厚さ	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚	高さ	最大幅	厚さ		
1	IVTY92	IF51	SD101	軒丸瓦	-	-	-	(12)	-	-	-	-	-	-	-	-	右三ツ巴文に連珠文
2	"	-	"	"	-	-	-	(12)	-	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文
3	"	-	"	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	4.0	2.3	-	-	-	-	唐草文
4	"	IF6p	SD159	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	唐草文
5	"	-	SD101	軒棧瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	唐草文
6	"	IF5-6o	SK274	"	8.5	5.2	(2.2)	12	-	-	-	-	-	-	-	-	右三ツ巴文に連珠文
7	"	"	"	"	8.2	5.0	1.8	(12)	-	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文
8	"	"	"	"	(8.7)	(5.4)	1.9	12	-	-	-	-	-	-	-	-	右三ツ巴文に連珠文
9	"	"	"	"	-	-	-	-	-	-	4.2	1.8	-	-	-	-	瓦当面文様なし
10	"	"	"	"	-	-	-	-	-	-	(4.7)	(2.4)	-	-	-	-	唐草文
11	"	"	"	"	-	-	-	-	-	-	4.1	2.3	-	-	-	-	唐草文
12	"	IF6q	SD159	丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	7.1	15.2	3.1	-	唐草文,内面:玉縁部に網痕
13	YDC	K5-J3	SK01	軒丸瓦	(14.6)	(11.8)	2.3	16	-	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文
14	"	K5-J11	"	"	15.7	11.3	2.2	16	-	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文,内面:コビキB

第128図 瓦類胎土分析試料実測図① (1:4)



試料番号	遺跡名	Gr.	遺構	種類	軒丸部 (cm)				軒平部 (cm)				丸瓦 (cm)			備考
					径	内区径	厚さ	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚	高さ	最大幅	厚さ	
15	YDC	K5-Jil	SK01	軒丸瓦	15.5	11.5	2.1	16	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文, 内面: コヒキ B+叩板調整痕
16	"	"	"	軒平瓦	-	-	-	-	(31.2)	(20.8)	5.1	3.3	-	-	-	均整唐草文
17	"	"	"	"	-	-	-	-	(28.8)	(19.6)	4.8	3.3	-	-	-	均整唐草文
18	"	"	"	"	-	-	-	-	28.2	19.1	5.1	3.6	-	-	-	均整唐草文
19	IIISJ93		SK1313	軒丸瓦	-	-	-	(16)	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文
20	IIISJ92		南部落込	軒平瓦	-	-	-	-	(26.0)	(17.0)	(4.2)	2.7	-	-	-	桐に唐草文
21	IIISJ93		SD05	"	-	-	-	-	(23.6)	(14.2)	4.0	2.1	-	-	-	均整唐草文
22	IIISJ92		南部落込	軒棧瓦	9.0	6.7	-	8	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文
23	IIISJ93		SK1313	丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	4.9	(14.2)	2.0	内面: コヒキ B+叩板調整痕
24	IIISJ92		SD05	"	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8	13.6	1.8	内面: コヒキ B+叩板調整痕

第129図 瓦類胎土分析試料実測図② (23:24は1:6, 他は1:4)



試料番号	遺跡名	Gr.	遺構	種類	軒丸部 (cm)				軒平部 (cm)				丸瓦 (cm)			備考	
					径	内径	厚さ	珠文数	幅	内区幅	厚さ	内区厚	高さ	最大幅	厚さ		
25	1BNH	-	SK19	軒丸瓦	15.7	11.9	2.0	12	-	-	-	-	-	-	-	-	右三ツ巴文に連珠文,内面:コビキB+叩板調整痕
26	BNH	-	-	"	(13.9)	9.0	2.1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	左三ツ巴文に連珠文,内面:コビキB+叩板調整痕
27	"	-	"	"	15.1	10.5	2.3	12	-	-	-	-	-	-	-	-	右三ツ巴文に連珠文,内面:コビキB
28	2CNH	-	SX10	軒平瓦	-	-	-	-	(22.2)	(15.6)	4.6	3.0	-	-	-	-	均整唐草文
29	BNH	-	-	"	-	-	-	-	(22.6)	(14.0)	(3.3)	1.8	-	-	-	-	均整唐草文
30	1BNH	-	SD04	"	-	-	-	-	-	-	4.4	(2.5)	-	-	-	-	均整唐草文

第130図 瓦類胎土分析試料実測図③ (1:4)

〈註〉 観察表の遺跡名の記号等については、以下の通りである。

遺跡記号	遺跡名 (調査主体)	遺構	性格	時代	備考
IV TY92	吉田城遺跡 (財愛知県埋蔵文化財センター) 愛知県豊橋市八町通	SK274	瓦溜り	江戸時代	武家屋敷地点
		SK101	外堀		
		SD159	排水溝		
YDC	吉田城遺跡 (豊橋市教育委員会) 愛知県豊橋市今橋町	SK01	廃棄土坑	江戸時代	三の丸地点
III SJ92 III SJ93	島田陣屋遺跡 (財愛知県埋蔵文化財センター) 愛知県新城市野田字西ノ郷	落込	-	戦国時代 江戸時代	陣屋跡
		SK1313	瓦溜り		
		SD05	近世の溝		
BNH 1 BNH 2 CNH	西尾城東之丸遺跡 (西尾市教育委員会) 愛知県西尾市錦城町	-	長葺跡	江戸時代	東之丸地点
		SK19	廃棄土坑		
		SX10	廃棄土坑		
		SD04	区画溝		

b) 吉田城遺跡三の丸地点（試料番号13～18）

全体的に「その他」とした変質粒が多いが、それを除いた場合の鉱物の組み合わせは、全点ともほぼ同様である。すなわち、斜方輝石、角閃石、黒雲母、ジルコン、ザクロ石の5つである。試料によっては、斜方輝石やジルコン、黒雲母は微量か極微量になる。

c) 島田陣屋遺跡（試料番号19～24）

6点の試料のうち、試料番号19～22までの4点は、角閃石を主体とし少量の黒雲母を伴い、微量または極微量のザクロ石を含む。試料番号23は、これら4点と鉱物の組み合わせは同じであるが、黒雲母の方が角閃石よりも多い。試料番号24は、「その他」が非常に多く、少量の角閃石、黒雲母、ジルコンを含む。

d) 西尾城東之丸遺跡（試料番号25～30）

全点とも「その他」とした変質粒が多いが、それを除けば角閃石、黒雲母、ジルコン、ザクロ石の組み合わせが特徴となる。角閃石はどの試料においても比較的多いが、黒雲母は試料によって多いものもあり少量のものもある。ジルコンとザクロ石は、どの試料も少量である。

#### 4. 考察

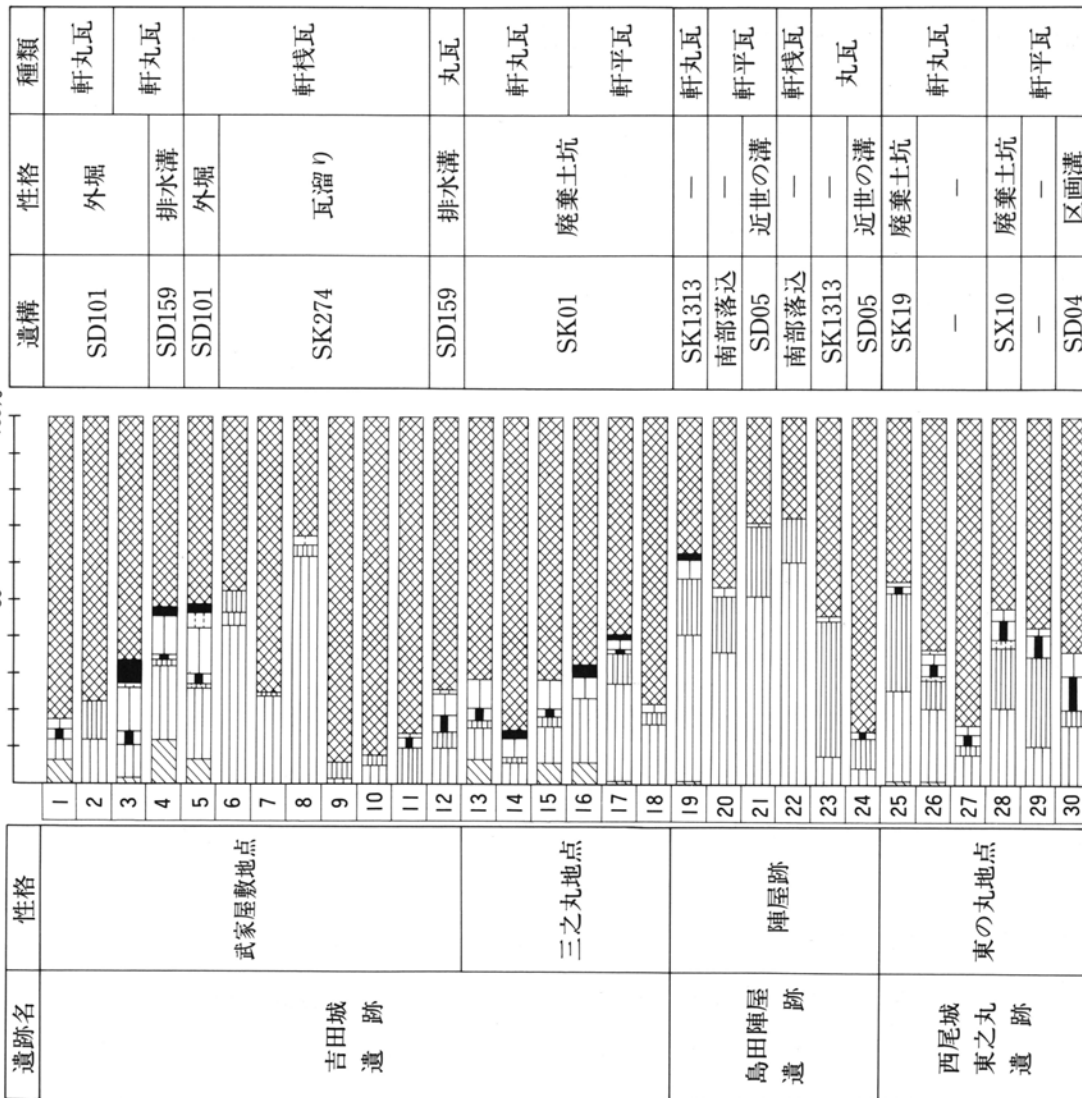
結果記載より、吉田城遺跡から出土した瓦の胎土は、少なくとも5種類程度のものが混在するといえる。三の丸地点出土試料は、武家屋敷地点出土試料に比べて胎土のばらつきが少ないように見えるが、これは、1ヵ所の土坑から出土していることによるものであろう。これらの胎土の違いは、概ね本瓦と棧瓦に対応している可能性がある。

まず、本瓦では、三の丸地点出土試料の状況から軒丸瓦も軒平瓦もほぼ同様の素地土が使われていたと考えられ、両者の間で土の使い分けはなかったと推定される。このことは、武家屋敷地点や島田陣屋遺跡、西尾城東之丸遺跡でも同様であったと考えられる。一方で、吉田城遺跡の武家屋敷では同じ軒丸瓦の中で胎土の違いが認められている。2点だけの結果ではあるが、両者には紋様の違いがあることから異なる製作者から供給を受けていたのかもしれない。

棧瓦では、出土遺構の異なる瓦も胎土が異なり、同一遺構の中の瓦にも複数種の胎土が認められる。まず、SD101出土の軒棧瓦の胎土は、同じ遺構から出土した軒丸瓦や軒平瓦および三の丸地点の軒平瓦や軒丸瓦の胎土に酷似し、SK274出土の出土の軒棧瓦の胎土とは明らかに異なっている。SK274出土の軒棧瓦は、3種類程度の胎土が混在する。しかも武家屋敷地点および三の丸地点の本瓦に多く見られた胎土とは全て異質な胎土を示す。このことは、吉田城下においては、本瓦と棧瓦との間に生産や流通事情に変化があったことを窺わせる。

ところで、吉田城遺跡、島田陣屋遺跡、西尾城東之丸遺跡の3遺跡の瓦胎土を比較すると互いにはほとんど類似するものはないことがわかる。特に、島田陣屋遺跡と西尾城東之丸遺跡では、胎土の均一性が高いように見える。これらの遺跡では、地元で製作された瓦が多く使われていたのかも知れない。吉田城遺跡では、おそらくこれら2遺跡よりも多少広い範囲から瓦が集まっていたと考えられる。しかし、上記2遺跡の瓦の胎土をそれぞれ豊川中流域と西三河地域を表すものとする、これらの地域からの搬入は多くなかったといえる。さらに、これまでの分析例から、尾張地域で多く使われている

100%  
50%



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

第131図 瓦類試料の胎土重鉱物組成  
(1. 斜方輝石 2. 単斜輝石 3. 角閃石 4. 普通角閃石以外の角閃石 5. 黒雲母 6. 紅柱石 7. ジルコン 8. ザクロ石 9. 緑レン石 10. 電気石 11. 不透明鉱物 12. その他)

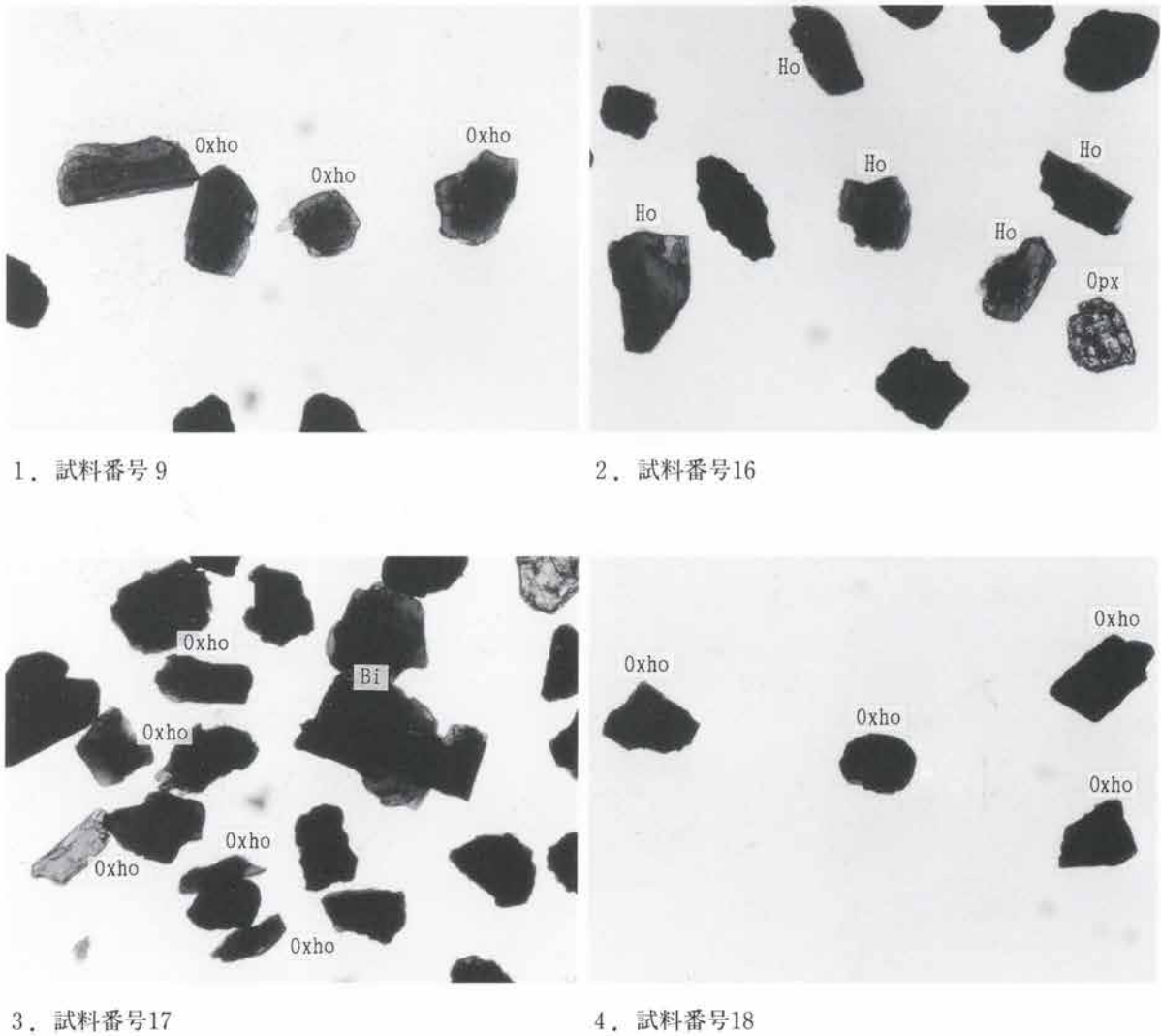
試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	紅柱石	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数
1	0	16	0	13	1	2	0	7	7	0	0	0	0	250
2	0	0	0	30	0	26	0	1	0	0	0	0	0	250
3	0	4	1	23	0	2	0	9	29	0	4	15	163	250
4	0	30	2	50	0	3	2	3	27	0	0	5	129	250
5	0	17	2	48	0	1	2	7	31	0	11	5	124	250
6	0	0	0	108	9	14	0	0	1	0	0	0	118	250
7	0	1	0	60	0	3	0	0	1	1	2	0	182	250
8	0	0	0	155	0	8	0	0	1	6	0	0	80	250
9	0	0	0	4	0	11	0	0	0	0	0	0	235	250
10	0	2	0	13	0	7	0	0	1	0	0	0	227	250
11	0	0	0	1	1	23	2	7	3	0	0	0	213	250
12	0	0	0	25	0	10	1	11	15	0	3	1	184	250
13	0	17	0	22	0	5	0	8	20	0	0	2	176	250
14	1	2	0	15	0	4	0	1	13	0	0	5	209	250
15	0	15	1	25	0	6	1	5	20	0	0	1	176	250
16	0	16	0	44	0	1	0	1	15	1	2	7	163	250
17	0	3	0	67	0	20	0	3	7	1	2	3	144	250
18	0	1	0	42	0	7	1	1	6	0	0	0	192	250
19	0	3	0	100	0	38	0	0	13	0	1	4	91	250
20	0	1	0	91	0	38	0	1	6	0	1	0	112	250
21	0	0	0	129	0	47	0	2	3	0	0	0	69	250
22	0	1	0	152	0	30	0	1	1	0	1	0	64	250
23	0	1	0	20	0	91	0	0	4	0	1	0	132	250
24	0	0	0	12	0	20	0	5	2	0	0	0	211	250
25	0	3	0	62	0	66	0	5	3	0	1	0	110	250
26	0	3	0	50	0	19	3	8	7	0	3	0	157	250
27	0	1	0	21	0	5	2	7	6	0	0	0	208	250
28	0	1	0	53	0	41	6	13	8	1	0	1	126	250
29	0	0	0	27	0	60	1	15	5	0	0	1	141	250
30	0	2	0	41	0	9	2	23	16	0	1	1	155	250

第20表 瓦類試料の胎土重鉱物分析結果



瓦もほとんど搬入されなかったと考えられる。尾張地域の瓦の胎土は、ほとんどが両輝石の多い組成を示すからである。

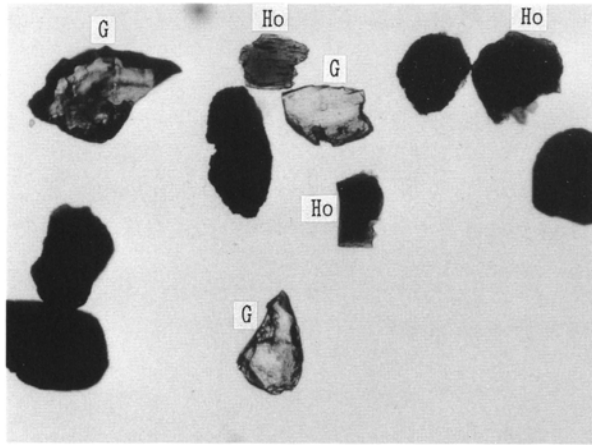
一般に考えられる瓦の量を考えれば、瓦の分析例は本分析を含めてもまだほんの一端にすぎない。本分析では、それを承知で考察をした結果であり、今後の資料の蓄積により、より確かで具体的な解析を行えると考える。  
(パリノ・サーヴェイ株式会社)



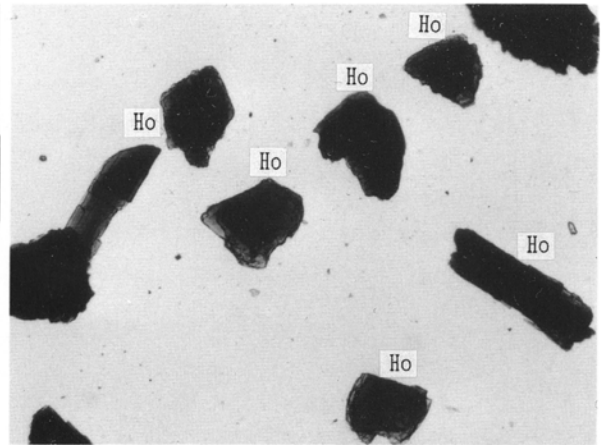
Opx：斜方輝石，Ho：角閃石，Oxho：酸化角閃石，Bi：黒雲母。

0.5mm

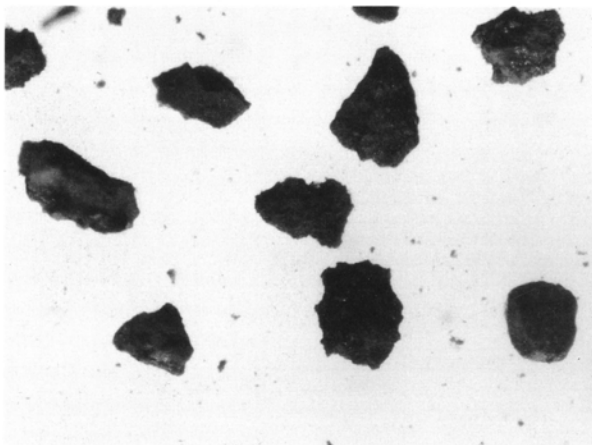
第132図 焼塩壺試料胎土中の重鉱物



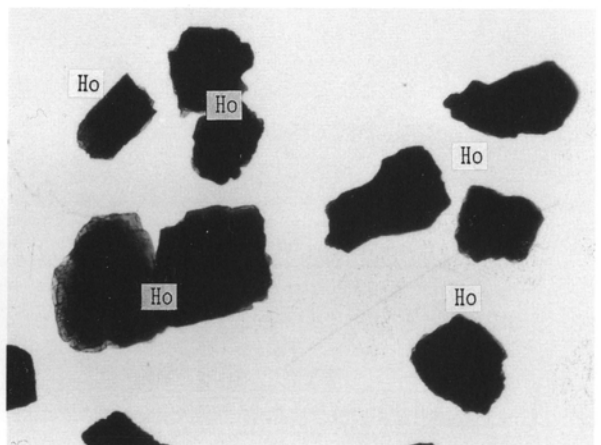
1. 試料番号 5



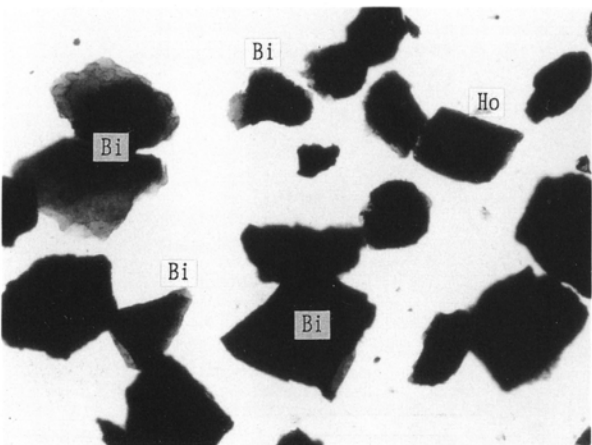
2. 試料番号 8



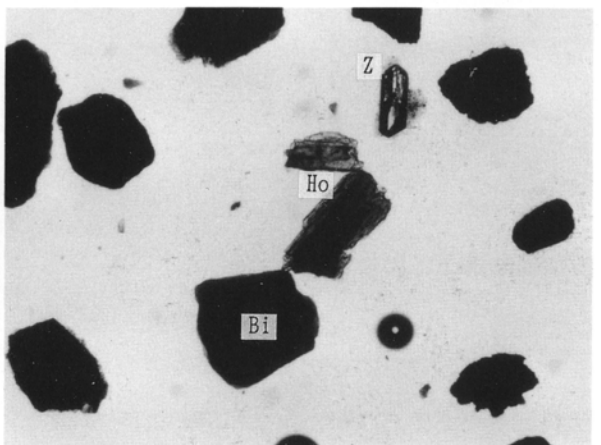
3. 試料番号 9



4. 試料番号22



5. 試料番号23



6. 試料番号28

Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Z:ジルコン, G:ザクロ石.

0.5mm

第133図 瓦類試料胎土中の重鉱物

## 第2節 中世の井戸出土の自然遺物

### 1. 試料

中世の井戸 SE001は、山茶椀類を多く含む層準と貝類を多く含む層準によって埋められていた。そこで貝類等を多く含む層準より、約25kgの土壌サンプルを採取し1mmメッシュの篩を用いて水洗選別を実施したところ、貝類・昆虫遺体・植物種子・動物遺体を得ることができた。

### 2. 貝類

総重量888.5gの試料を得た。最も多いものはハマグリで、総重量は610.9gである。右殻77個・左殻83個より最少個体数は83個と推定される。他にアサリ(3.8g)、マテガイ(7.6g)イタボガキ科の破片95.9g等が出土している(第21表)。これらの貝類で、陸生貝類以外のものはすべて食用になる貝類であることから、食した後に廃棄されたものと推定される。陸生貝類(巻貝)は殻頂が25個とかなりまとまって出土しているが、SE001が井戸の廃棄されたものであることから、土坑内に棲息していたものと思われる。

科名	種名	学名	重量(g)	殻頂数	
アッキガイ科	アカニシ	Rapana thomasi	31.4		
タマガイ科	ツメタガイ	Neverita (Glossaulax) didyma	54.8	10	
イタボガキ科		OSTREIDAE	95.9		
				右	左
マルスダレガイ科	ハマグリ	Meretrix lusoria	610.9	77	83
マルスダレガイ科	アサリ	Tapes (Amygdala) japonica	3.8		1
マテガイ科	マテガイ	Solen strictus	7.6		
タニシ科	マルタニシ?	Cipangopaludina chinensis malleata	3.7		
	陸生貝類不明		1.8	25	
	不明貝片		78.6		
	合計		888.5		

第21表 SE001出土貝類一覧

### 3. 昆虫類

昆虫遺体は総数184点であるが、種等が同定されたものは計68点である(第22表)。最も多いものは、ゴミムシ科やオサムシ科などの食肉性の地表生歩行虫(34点)である。次いでドウガネブイブイ等の食植性昆虫(19点)がみられる。

### 4. 植物種子・動物遺体

植物種子は、1~1.5mm程度の小型のものが約10cc出土した。大半がナデシコ科の種子であり、タデ科、トウダイグサ科、キク科、ナス科の種子がわずかに認められた。今回出土した種子類は、いずれも民家周辺に生えている草本類である。動物遺体は、ハタネズミと思われる齧歯目の上顎、上腕骨、頸骨、橈骨が出土している。また、カエル類の椎骨が1点出土している。(堀木真美子)

種名	学名	出土点数
ガムシ	Hydrophilus acuminatus	1
セマルガムシ	Coelostoma stultum	5
エンマコガネ属	Onthophagus spp.	1
コブマルエンマコガネ	Onthophagus atripennis	1
マグソコガネ	Aphodius rectus	1
コマグソコガネ	Aphodius pusilus	1
シテムシ科	SILPHIDAE	1
オサムシ科	CARABIDAE	5
ゴミムシ科	HARPALIDAE	24
ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	3
アリ科	FORMICIDAE	1
コガネムシ科	SCARABAEIDAE	4
スジコガネ亜科	RUTELINAE	2
サクラコガネ属	Anomala spp.	2
ドウガネブイブイ	Anomala cuprea	5
アオドウガネ	Anomala albopulosa	1
コアオハナムグリ	Oxycetonia jucunda	1
コメツキムシ科	ELATERIDAE	1
ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	3
双翅目開蝨	DIPTERA	2
不明甲虫		3
	合計	68

第22表 SE001出土昆虫類一覧

謝辞：貝類の同定は豊橋市自然史博物館の松岡敬二氏に、昆虫遺体の同定は三重大学の森勇一氏に御指導頂きました。記して感謝の意を表します。

## 第VI章 総括とまとめ



## 第1節 屋敷地の検証

### 1. はじめに

近世、江戸時代を対象として考古学が開始されたのは、ここ10数年とまだ浅い。これに対し、文献の分野においてはかなりの成果が示されてきている。そのため他の時代の遺跡と異なり、確認された遺構・遺物等から、それが何であるのか、また誰によって使用されていたのか、ということが文献資料によりある程度捉えられることがある。近世の考古学を行う場合には、このような歴史学、文献史学、建築史等の多くの学問領域の成果を踏まえた上で、今回検出された遺構がどのような性格を持ち、誰によって利用されていたのかを、残された絵図や史料によって明らかにし、当時の人々の生活の実相に近づいてみたいと思う。

### 2. 屋敷地の推定

今回検出された遺構群が近世吉田城の城下町を構成する武家屋敷であることは明かである。この城下町は、池田照政が入封した際に城地の拡大と城下町の整備をした時期にまで遡ることができるものと思われる。それは、照政以後の譜代大名たちは、財政的に照政の計画を完成することなく、明治に至っていることや、江戸時代を通じてその屋敷地の数に大きな変化が見られないこと<sup>(1)</sup>、また現在残されている絵図の屋敷割りにも大きな変化が見られないことから、ほぼ照政の時期の屋敷割りが近世を通じて幕末期まで残っていた可能性が高いものと考えられる。

名古屋城三の丸遺跡等の近世遺跡を見てみると、屋敷地の周囲に溝や柵、石垣等の遺構が確認されており、これらの構造物が隣の屋敷地との境を表していることが多い。近世城下町の町づくりには計画性を持った町割りが実施され、これらの屋敷地境はある程度の規則性が想定されてくる。本遺跡においても同様で、今回の調査で検出された外堀の持つ方向性が吉田城下町の町割りの鍵となっているようである。外堀は、N-9°-Eの方向性を示し、以前当センターにおいて調査を実施した豊橋警察署地点においても、検出された区画溝がN-8.5°-EやE-7°~12°-Wの方向性を示しており<sup>(2)</sup>、外堀の持つ方向性にほぼ一致していることが確認される。本遺跡においてもその方向性に一致する遺構としては、SD129・SD128・SD132・SD148・SD149・SA101・SA102・SA103、また、外堀の方向性に直交する遺構としては、SD102・SD120・SD133・SD134・SD109・SD178・SD180・SA104・SA105・SA106・SA107等多くの遺構があげられる。これらの溝や柵列はその規模や時期にばらつきが見られるが、これらによって区画された空間に、建物跡や井戸、土坑が展開する様相を伺うことができ、ある程度の屋敷地を想定することができるのではないだろうか。

ここで、7軒の屋敷地を想定してみたい。93年度調査区のSD129以西で3軒分、SD118以北の空間を屋敷地1、SD118・SD102に区画された空間を屋敷地2、SD102以南の空間を屋敷地3とする。また、SD129以東で4軒分、外堀の西側SD148・SA101とSD133及びSD134に囲まれる空間を屋敷地4、SD133及びSD134以南の空間を屋敷地5、外堀の東側SD178またはSD180以北の部分屋敷地6、SD178またはSD180以南の空間を屋敷地7として想定しておく。



### 3. 屋敷地の変遷

前項で呈示した7軒の屋敷地のうち、屋敷地のほぼ全域を確認しているのは屋敷地2のみで、他の6軒の屋敷地についてはその背割り部分や屋敷地の一部を確認したのにとどまっている。また、これらの屋敷地については調査当初に絵図等から想定したもので確認はなく、今後変更される可能性がある部分が残されていることも予め断わっておきたい。遺構の重複等が影響しているため、順序を追って見ていきたい。出土遺物から、18世紀後葉までの近世前期、18世紀末～19世紀中葉までの近世後期の大きく2時期に分けてまとめておきたい。

まず、屋敷地1では、その大半は調査区外に展開しており極一部を検出するにとどまり、屋敷地に直接結び付くような遺構は確認されていない。屋敷地2との境としたSD118は、その規模等から明確に区画溝とは想定しにくい。そこで新たに区画溝として考えられる遺構として、暗渠がある。これが近世後期の区画溝であり、陸軍が再利用している可能性が高いものと考えられる。

屋敷地2では、ほぼその全域を検出することができた。SB101・SB102・SB103の建物跡やSA108・SA109の建物になりそうな柵列跡、SE101・SE103・SE104・SE102の井戸、SK092・SK094・SK095・SK102等の土坑が集中している。建物跡と考えられるSB101は、径・深さともにほぼ0.6m程の柱穴の中に根石と思われる拳大の河原石が検出されているが、礎石や柱根については確認されていない。また、建物跡と想定されるSA108・SA109における柱穴についても同様の状態であった。出土遺物はないために時期の決定は困難であるが、他にこれだけしっかりした柱穴を持つ建物跡が確認されていないこと、さらにその事業の規模から照政の時期（近世前期）が想定される。残るSB102・SB103については、ベース近くまで検出面を掘り下げたこともあり、ほぼ検出面直上で根石と思われる河原石の集石を検出している。2棟の建物とも1間×2間という小さなもので、特にSB102については北側の1間四方の中央部分で甕が埋設されていたことから便所跡と考えている。2棟の建物とも近世後期の遺構と想定される。井戸についても、ある程度限定された地域に3カ所集中して検出されている。4つの井戸とも、出土遺物から近世前期に属する遺構と考えられる。後期については、井戸が存在しないとは考えられず、暗渠の南に検出された漆喰の井戸が使われていた可能性があろう（明治期に廃絶）。土坑については、近世の遺構で前述したようにゴミ穴や廃棄土坑のような大型遺構が少なく、明確な時期の決定が難しいが、近世後期に属する土坑が多いように思われる。数少ないがSK005やSK013等の近世前期の遺構も見られるが、近世後期の土坑としてSK092・SK094・SK095・SK102やSK032・SK055・SK056のように、同じ所を何度も掘り返して廃棄している様子や屋敷地全体に土坑が展開している様子を伺うことができる。また、性格不明の遺構としてSX104があるが、池のような構造物が想定される。

これらを区画している溝であるSD129・SD102については、他の区画溝と異なりその規模は群を抜いている。2条の溝とも断面観察により、数回の掘り返しを受けていることが確認されている。出土遺物は非常に多く、その時代幅もかなり広いが、18世紀中葉～後葉までと考えている。近世前期の廃棄土坑等が見られないことから、日常のゴミや廃棄物がこれらの溝に捨てられたものと想定せざるを得ない。また、SD102が近世後期の遺構と思われるSK032やSK056等に切られていることから、19世紀には完全に埋設されていたことが確認された。では、江戸後期の区画溝はというと、SD129の東側



第135図 遺構変遷図 (1 : 750)



にある暗渠と SD128・SD132、SD102の南で検出された SD120が想定される。暗渠については前述の通りで、SD132と SD128は SD129・SD102に比べかなり小規模になり、短期間のうちに2～3回の掘り返しを受けていることが断面観察により確認されている。特に、SD120については、掘り形が他の区画溝と異なり断面V字形に近い形を呈している点が気かりである。攪乱による遺物の混じりがあるかも知れないが、土師質製品が多く明確な時期の決定が困難である。

屋敷地3も、屋敷地1と同様で屋敷地の背割りラインのみ確認されただけで、明確な遺構等は確認してはいない。

屋敷地4では、屋敷地の一部を確認している。SB104・SB105の建物跡やSD011の排水溝、SE106の井戸、SK208等の土坑が展開している。SB104はコの字状の浅い溝に数cm程の礫が敷き詰められたようなかたちで検出されている。土蔵のような建物を想定することができるが、出土遺物がなく時期の決定ができない。SB105では、2つの柱穴から柱根と根石が良好に残存していた。また、北壁にも柱穴が確認されており少なくとも2間×4間程の建物が存在していたことが確認された。時期は、SB104同様不明である。井戸であるSE106からは、近世陶磁器類等の遺物とともに大量の木製品が出土しており、井戸の廃絶とともに多くの遺物が廃棄されたことを示しているものと思われる。出土した木製品の中には、炭化した建築部材と思われる遺物が含まれており、火災により消失したものを一括投棄された可能性が高い。出土遺物から、18世紀前葉～中葉の時期が想定されることから、前述した建物はそれ以降の時期すなわち近世後期の遺構とも想定されるが、不明な点が多い。SK208は廃棄土坑、SD145は排水溝で、時期はともに19世紀中葉と思われる。

区画については、SD148とSA101が検出されている。前後関係は不明であるが、切り合い関係からSA101の方が新しいものと思われる。そのすぐ東側で検出されたSD149とSA102は、塀跡と想定され、武家屋敷地と外堀あるいは馬場や矢場とを区画するための施設ではないだろうか。屋敷地5との境であるが、近世前期がSD109、近世後期がSD133とSD134と想定され、後期の2条の溝については、前述したSD128やSD132と同様の結果を得ている。

屋敷地5についても、屋敷地の一部を確認している。攪乱がかなり激しいために大半を喪失していたが、その中からSE105の井戸、SK178やSK180等の廃棄土坑、その他にも埋襲遺構が検出されており、人々が生活していた痕跡が確認されたことから屋敷地を想定している。どの遺構も出土遺物から19世紀前葉～中葉の時期が想定され、近世後期に属する遺構群である。屋敷地を区画する溝等は確認されていないが、屋敷地4で確認されたSD148・SA101・SD149・SA102等が屋敷地5にも存在したものである。

屋敷地6でも、屋敷地の一部が確認された。建物跡であるSB106、井戸と想定されるSK289、廃棄土坑であるSK326・SK334・SK336等、瓦溜り土坑であるSK274、排水溝であるSD158・SD159・SD166が展開している。SB106では、全ての柱穴において根石が確認されており、建物自体は調査区外北側に展開するものと思われるが、時期は不明である。この区画内においては明確な井戸は検出されていないが、SK289が井戸である可能性が高い。また、SK248やSK340等の他の区画では見られない大型土坑が確認されている。SK289・SK248・SK340ともに、出土遺物より近世前期の遺構と考えられる。さらに、本遺跡で唯一瓦溜り遺構であるSK274が確認されており、近世後期に属する遺構と思われる。



第136図 「吉田藩土屋敷図」(「吉田城遺跡」より転載、一部修正)

他に、SK326・SK334・SK336等の廃棄土坑も検出されている。

屋敷地7でも、屋敷地の一部を確認している。SB107の礎石建物跡、SE107の井戸、SK267やSK279等の廃棄土坑が検出されている。SB107では、調査区東端において6つの礎石が確認されており、建物の主体は調査区外の東側に展開しているものと思われるが、時期は不明である。井戸であるSE107では、常滑の赤物が井戸枠に利用されており、江戸後期に属する。廃棄土坑と思われるSK267・SK279等では、遺物とともに大量の礫が出土しており、江戸前期に属する遺構が多い。

屋敷地6・屋敷地7を区画する遺構として、SD178とSD180が想定される。建物跡や井戸等の位置関係からSD178が近世後期の区画溝として想定できるが、SD180が近世前期の区画溝として断定できる資料は得られていない。また、SA105～SA107についても明確な時期は不明である。

#### 4. 屋敷地の居住者

今回の調査においてほぼ7軒の屋敷地を確認したわけであるが、これが吉田城下町のどこに位置していたのであろうか。川井氏により現在の地図と「三州吉田城図」との照合がなされており<sup>(3)</sup>、これによれば今回検出された外堀が二重の堀の内側に当り、その周囲の武家屋敷であることが理解される(第136図のアミフセ部分が今回の調査地点)。

では、誰が住んでいたのであろうか。数十点現存している絵図の中で、居住者の氏名が書かれている絵図は意外と少なく、確認しているだけで4点のみ<sup>(4)</sup>である。4枚の絵図ともに吉田藩最後の大河内松平家の家臣と考えられ、絵図で居住者の氏名を確認し、それを「従古代役人以上寄帳」<sup>(5)</sup>・「吉田藩分限帳」<sup>(6)</sup>を基にして確認していった。年代のわかっている絵図は、「仮吉田城図」(深井正敏氏蔵)の文化5年(1822)の銘のある絵図と、「吉田藩士屋敷図」(豊橋市美術博物館所蔵)の天保6年(1835)～嘉永2年(1849)<sup>(7)</sup>の2点である。「吉田御城内惣絵図」(愛知大学総合郷土研究所所蔵)は、屋敷地の面積が他の3枚の絵図と異なっている点や居住者の氏名から、正徳2年(1712)～享保14年(1729)を描いたもの<sup>(8)</sup>と判断した。また、「吉田藩士屋敷図」(深井正敏氏蔵)については、居住者の氏名から最も新しいもので、幕末期頃を描いているものと判断している<sup>(9)</sup>。

絵図以外として「吉田藩元禄役寄帳」(橋良文庫)<sup>(10)</sup>があり、元禄10年(1697)に小笠原家から久世家へ引渡しの際の資料である。役職・石高の確認できたものをある程度まとめたものが第23表であるが、やはり収入の割には屋敷地がかなり広いことが読み取れ、照政の町割りが幕末期まである程度存続していたことが改めて確認された。

#### 5. おわりに

以上、大まかに屋敷地の変遷や居住者について確認してきた。遺構の方からほぼ18世紀後葉～末頃に屋敷割りに変化がみられている。しかし、これが大規模な変化ではなくこれまでの区画に添う形で行われているのである。この時期には、火災や地震の記録の記録が残されており、何等かの形で影響しているのかも知れないが、明確には捉えることができなかった。他の地点における発掘調査等による成果を期待したい。



## 第2節 吉田城遺跡における近世陶磁器類の組成と他遺跡との比較

### 1. はじめに

本報告書においては、出土した近世陶磁器類や土器の用途組成や材質組成を中心にまとめてきた。ただし、近世陶磁器類の分類や集計、統計処理の方法等、各報告書において異なっており、統一的なものが確立されていないのが現状である。これをどのように統一させていくのか、まだまだ多くの課題が残されているものと思われる。

今回ここで取り上げるのは、用途別の分類による統計処理を実施している愛知県内の3つの近世遺跡における用途組成・材質組成を紹介し、本遺跡と比較することによって今回得られたものが近世陶磁器類の平均的なものであるのか、地域的な差異が見られるものなのかということを確認してみたいと思う。ただし、出土遺物の絶対量が根本的に異なっていることを無視しており、単なる割合でしか比較できていないことを予め断わっておきたい。

### 2. 比較方法

これから見ていく4つの遺跡ともに用途による近世陶磁器類の分類を実施し、器形よりも使用痕を重視した集計を実施している。しかし、本遺跡と同様の分類を行っている遺跡としては外町遺跡のみで、名古屋城三の丸遺跡については家庭・簡易裁判所地点と県警本部地点の2遺跡についてもやや異なっている。そのあたりをやや修正する必要があるので、ここで簡単にまとめておきたい。

名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）においては、用途により9つに分類されているが、天目茶椀が喫茶具として独立させ、土師器皿が灯火具に、喫煙具・調度具がその他に集計されている点である。天目茶椀については供膳具に加算し直している。名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）においては、分類・統計方法ともに参考にさせていただいているので大差はないが、土師器皿がすべて灯火具に集計されている。また、水注・水滴・土鍾が分類には含まれていない点もあげられる。外町遺跡・吉田城遺跡については、名古屋城三の丸遺跡と異なり土師器皿は口縁部に油煙が付着していない限り供膳具の皿類に分類しているため、灯火具に集計し直す必要があろう。そのあたりを注意して図化したものが第137図～第145図、第32表～第37表、第40表～第42表である。

### 3. 吉田城遺跡

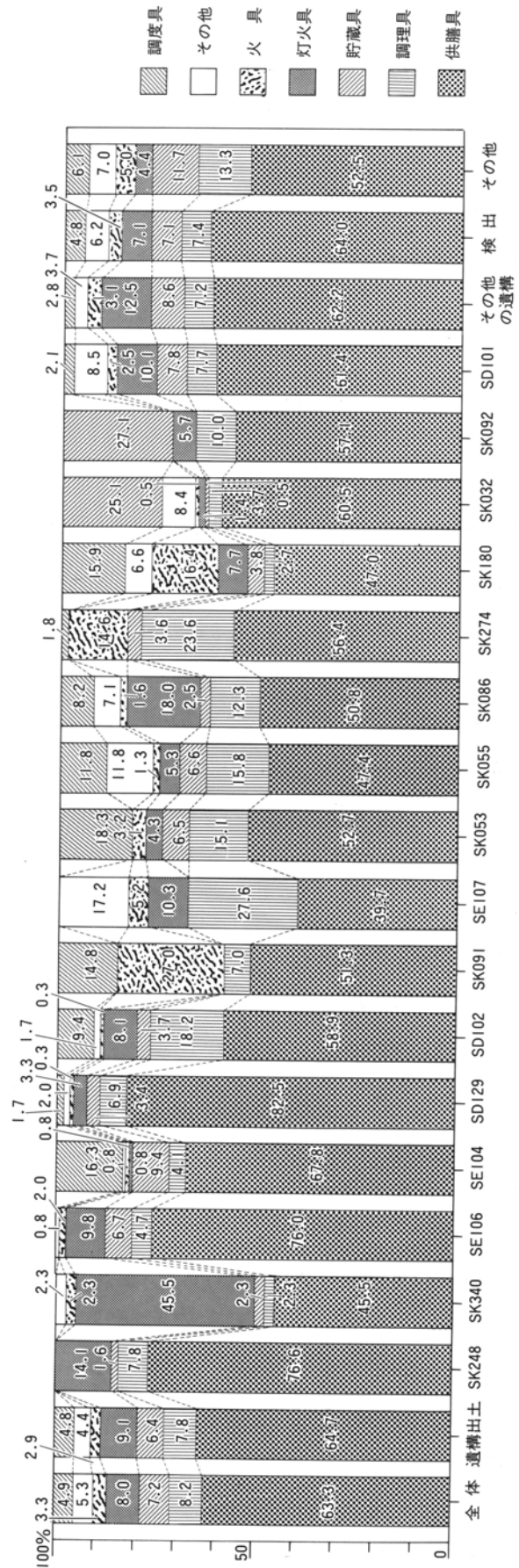
第IV章の近世の遺物で述べたように、出土遺物が多く明確な時期を決定できる遺構はほとんどなく、比較資料としては良好とは言えない。これまでに提示してきた出土陶磁器類の用途組成図と材質組成（ともに接合後の口縁残存率）に、新たに比較的出土遺物が多く時期のある程度おさえられる遺構であるSK248・SK340・SK274・SK053・SK055・SK086・SK091を加えてまとめ直したものが第137図・第139図である。そのため、その他の遺構については、SK248等の7遺構を引き集計し直してあるので、本文編とは異なっているので注意されたい。なお、比較検討のために土師器皿を灯火具として集

計し直したものが、第138図である。

本遺跡より出土した全近世陶磁器類は、総破片数で56,271点に及び、接合前口縁破片数は16,496点、推定個体数では1,292.83個体となっている。全体とは、本遺跡より出土した全陶磁器類の合計であり、本遺跡における近世陶磁器類のあり方の平均値として考えておきたい。各遺構の時期は、SK248が17世紀前葉、SK340が17世紀末葉～18世紀前葉、SE106・SE104が18世紀前葉～中葉、SD129・SD102が18世紀中葉～後葉、SK091が19世紀前葉、SK053・SK032・SK086・SE107が19世紀前葉～中葉、SK274・SK180・SK055・SK092が19世紀中葉、SD101は19世紀中葉までである。概ねSK248が17世紀代、SK340～SD102が18世紀代、SK081～SK092が19世紀代の様相を示しているものと思われる。ただしSD101は19世紀中葉までということであるが、全体または遺構出土に近いものと考えられる。また、遺構出土合計・その他の遺構合計・検出合計・その他合計も参考資料としてあげてある。なお、ここでは接合後口縁残存率(切り捨て)を利用している。以下、用途組成・材質組成について見ていくが、絶対量については考慮には入っていない。

用途組成については、供膳具が63.3%と大半を占めており、供膳具・調理具・貯蔵具等の日常的な生活に関連する遺物群が78.6%と全出土陶磁器類の4分の3以上を占めている。これに対して、灯火具・火具は11.2%、化粧具・神仏具・喫煙具等の副次的な生活に関連する遺物群は5.3%と少なく、調度具は4.9%を占めるにとどまっている。

個別に見てみると、供膳具は50～60%前後とほぼ安定した出土率を表している。しかし、SE106・SE104・SD129の3遺構については、

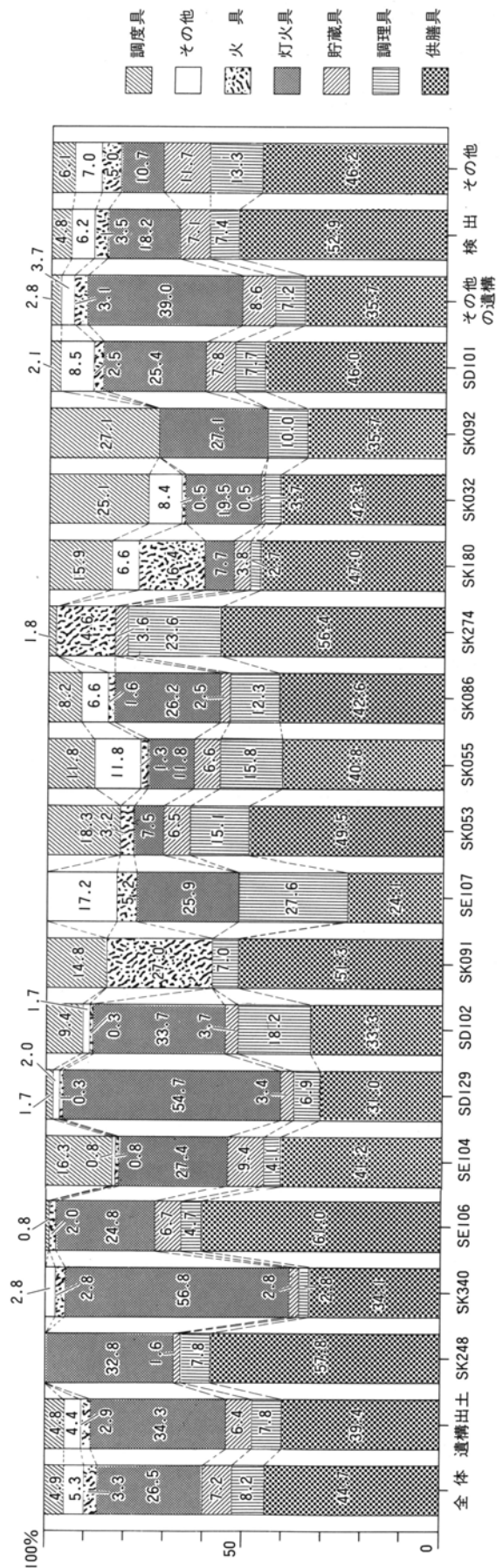


第137図 吉田城遺跡出土近世陶磁器類の用途組成

70~80%とかなり高い占有率を示している。これが年代的な差異に基づいているのか、または廃棄の仕方に差異が見られるものであるのかは、明らかにはできなかった。調理具についてもややばらつきは見られるが、年代が下がるに従い増加する傾向にある。貯蔵具も同様であるが、18世紀代にピークが見られ、19世紀には減少している。灯火具については、資料数が少ないため正確なことは言えないが、17世紀~18世紀前葉または中葉までは高い比率を示すが、それ以後は10%またはそれ以下と急速に減少している。火具については、19世紀に入り出土が目立ってくる。化粧具・神仏具・喫煙具についても、火具同様に19世紀以後の出土率が增大している。調度具については、遺構によるばらつきがかなり見られることもあり、それぞれの遺構の持つ性格によるところが多いとは思うが、18世紀以降の増加傾向を指摘することができよう。

また、土師器皿を灯火具として集計し直してみると、全体で供膳具が44.7%と減少し、灯火具が26.5%に増加して、それぞれの占有率に約20%前後の変化が見られ、他の近世遺跡とよく似た数値を示すこととなる。しかし、供膳具の出土率の安定、灯火具の減少傾向という用途組成の変化については、前述した通りである。

また、材質面において見てみると、全体で土師質製品が24.2%、陶器製品が39.7%、磁器製品が35.2%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が1.0%となっている。他の近世遺跡と比較しても、陶器製品の比率が低く、磁器製品の比率が極端に高くなっていることが確認される。これがこの地点だけの特徴であるのか、または吉田城遺跡全体のものであるのか、あるいはこれまでに提示された名古

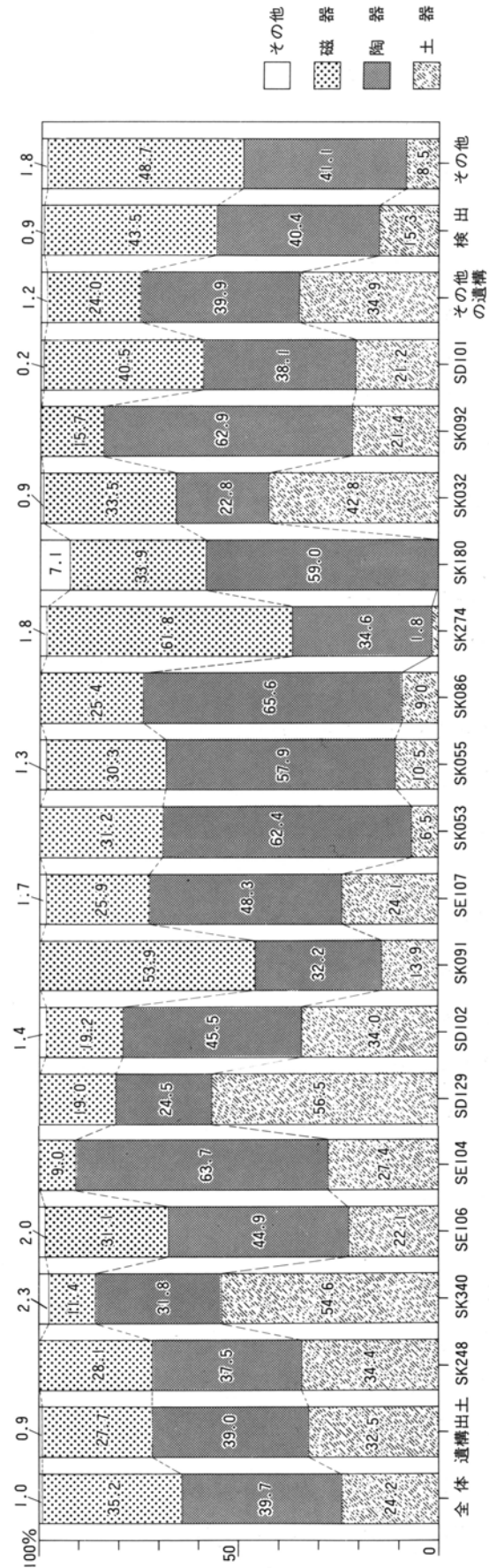


第138図 吉田城遺跡出土近世陶磁器類の用途組成 2

屋城三の丸遺跡等の尾張とは違う三河地域全体の様相であるのか、あるいは単に時期的な差異に由来しているのかは明らかにすることはできていない。

1つ興味深い資料として、前山博氏により天保6年(1835)の「伊万里津積出陶器荷高国分」という史料が紹介されている<sup>(11)</sup>。これによれば、尾張には1,500俵に対し三河には4,000俵と示されており、三河地方には肥前産の陶磁器類が尾張の2.7倍運ばれていたことがわかる。これが直接本遺跡における磁器製品の出土の多さに影響していたとは言及できないが、興味深い資料なのでここで紹介しておきたい。

個別に見ておくと、土師質製品は18世紀後葉までをピークとして、それ以後は減少傾向が見られるが、名古屋城三の丸遺跡で見られる程の急激な減少ではないようである。ただし、SK055・SK092が高い比率を示しているが、これは土師器皿と土錘が集中して出土していることが影響しているのであろう。陶器製品は、SE104・SK032・SK086・SK180のように50~60%と高い比率を占める遺構も見られるが、全体的にはほぼ40%前後で安定している。磁器製品では、やや遺構によるばらつきはあるが、19世紀以降急増しているようである。これは、瀬戸での新製焼(磁器生産)の開始に影響している可能性が高いと思われるが、その出土量は余り多くないように感じられる。特に、供膳具における磁器製品の割合が高いことがあげられよう。その他の材質の製品についても、19世紀以降増加傾向にあることも確認されている。



第139図 吉田城遺跡出土近世陶磁器類の材質組成



#### 4. 名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸に所在する古代から近世にかけての複合遺跡である。名古屋城は御三家の1つ尾張徳川家62万石の居城として有名ではあるが、三の丸廓内は一大官庁街に変貌しており、遺跡としては疑問視されていた。しかし、名古屋市教育委員会が行った試掘調査により近世の遺構・遺物が確認されたことにより、名古屋城の内堀と外堀に囲まれた地域が名古屋城三の丸遺跡として認定されたのである。名古屋市家庭・簡易裁判所地点は、外堀のすぐ北側に位置し、4軒の武家屋敷を確認している。

名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）においては、遺跡より出土した全陶磁器類の集計まではなされておらず、16の遺構のみ用途・材質・産地別に集計されている。そこで、提示された16遺構の合計を、裁判所地点における平均と想定したい。16遺構で、2,095.9個体が出土している。近世の上級武士階級の資料として注目される。報告書に掲載されている用途組成・材質組成を、前述の通り修正してまとめて図化したものが第140図と第141図である。各遺構の時期は、SK033・SK075はほぼ17世紀中葉～後半、SK080・SK149・SD008・SD012・SX004が17世紀中葉～末、SK052・SK078が17世紀末～18世紀前半、SK144・SK135が18世紀前半～中葉、SK084・SK136・SK145が18世紀末～19世紀初頭、SD003・SK056が19世紀初頭～幕末期となる。ただし、SK136・SK145は、植木鉢が埋められた特殊な遺構であることを予め断わっておく。概ねSK033～SX004が17世紀代、SK052～SK135が18世紀代、SK084～SK056が19世紀代の様相を示していることとなる。なお、ここでは推定個体数(小数点以下第二位を四捨五入)を利用している。また、絶対量については考慮していない。

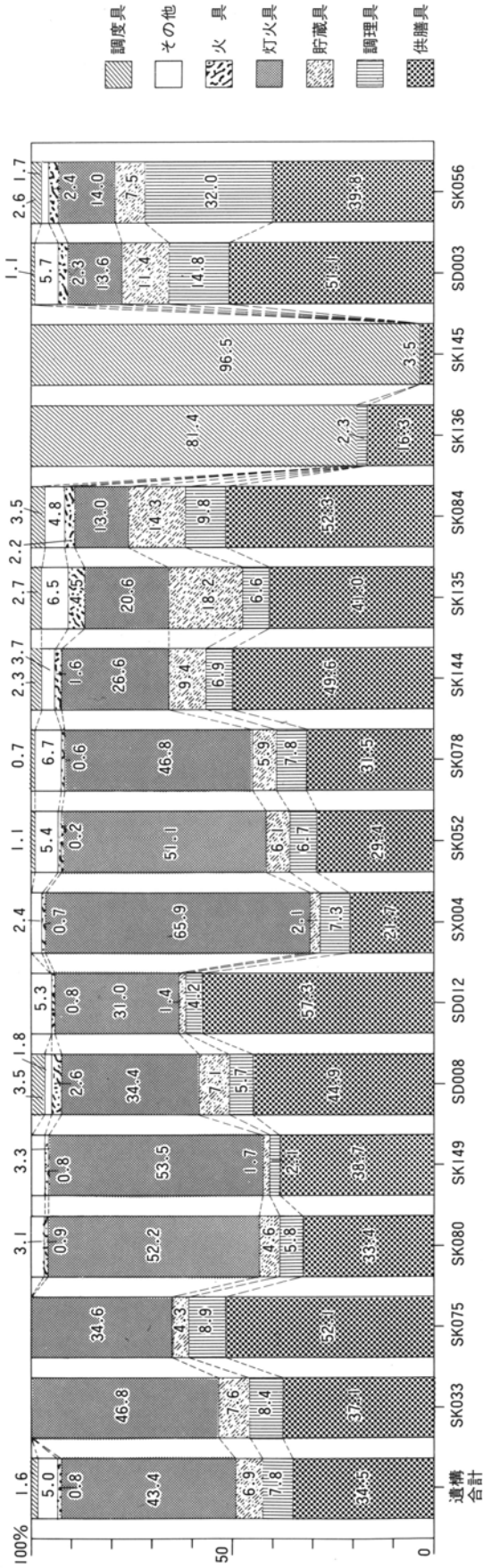
用途組成については、供膳具・調理具・貯蔵具等の日常的な生活に関連する遺物群が半数を占め、灯火具が40%程、火具や副次的な生活に関連する遺物群である化粧具・神仏具等の出土量は10%以下である。まず、灯火具の占有率が目につく。18世紀中葉までは40%以上を占め、以後急激な減少傾向を示している。供膳具はほぼ40%前後を推移し、安定した出土量を示しているようである。調理具・貯蔵具等も10%以下であるが、18世紀後半以降増加傾向を示している。その他の化粧具・神仏具等についても18世紀後半以降増大する傾向が伺われる。

材質面については、遺構全体で土師質製品が47.7%、陶器製品が37.1%、磁器製品が15.1%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が0.1%となっている。特に、土師質製品の変化が目立っている。17世紀代～18世紀前葉にかけては30～40%を占めていたものが、18世紀中葉以後減少傾向に転じ、19世紀代には10%前後にまでに大きく落ち込んでいる。陶器製品については、17世紀後葉に一時的に30%程に減少しているが、ほぼ40～50%台と安定して出土しているが、19世紀にはやや減少しているようにも思われる。磁器製品については、ほぼ10%台と安定した出土をしているが、19世紀に入り20%にまで増加している。磁器製品が増加した分、陶器製品が減少しているようである。

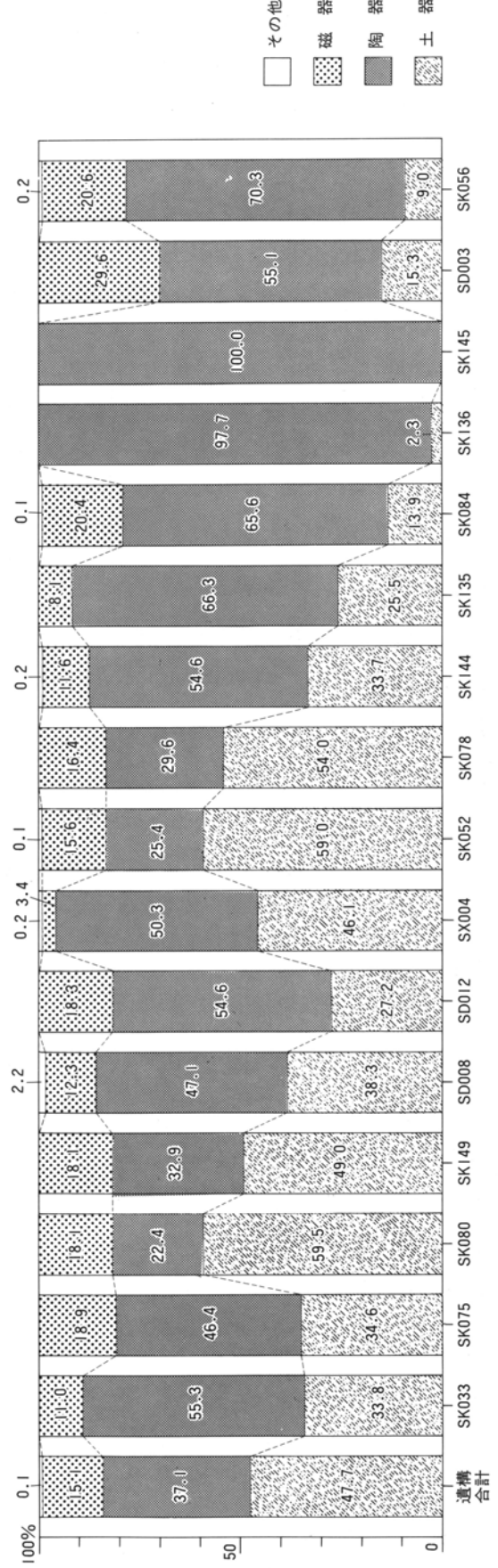
#### <参考文献>

(財)愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡III』 1992

金子健一 「名古屋城三の丸遺跡にみる陶磁器・土器の組成と灯火具の変遷について」 『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第1輯』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1993



第140図 名古屋城三の丸遺跡 (家庭・簡易裁判所地点) 出土陶磁器類の用途組成



第141図 名古屋城三の丸遺跡 (家庭・簡易裁判所地点) 出土陶磁器類の材質組成

### 5. 名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）

名古屋城三の丸遺跡については、前述の通りである。県警本部地点は、二の丸の正面に位置し西側には大手筋である大名小路が通る等、三の丸内でも重要な場所にあたり、3軒の武家屋敷が検出されている。北半には幕府から藩に直接付けられた御付家老である竹腰氏（美濃今尾領主・3万石）、南西端には家老職級の家臣である山澄氏（4千石）、南東端には物頭以上に属する熊谷氏（6百石）の拝領屋敷となっている。

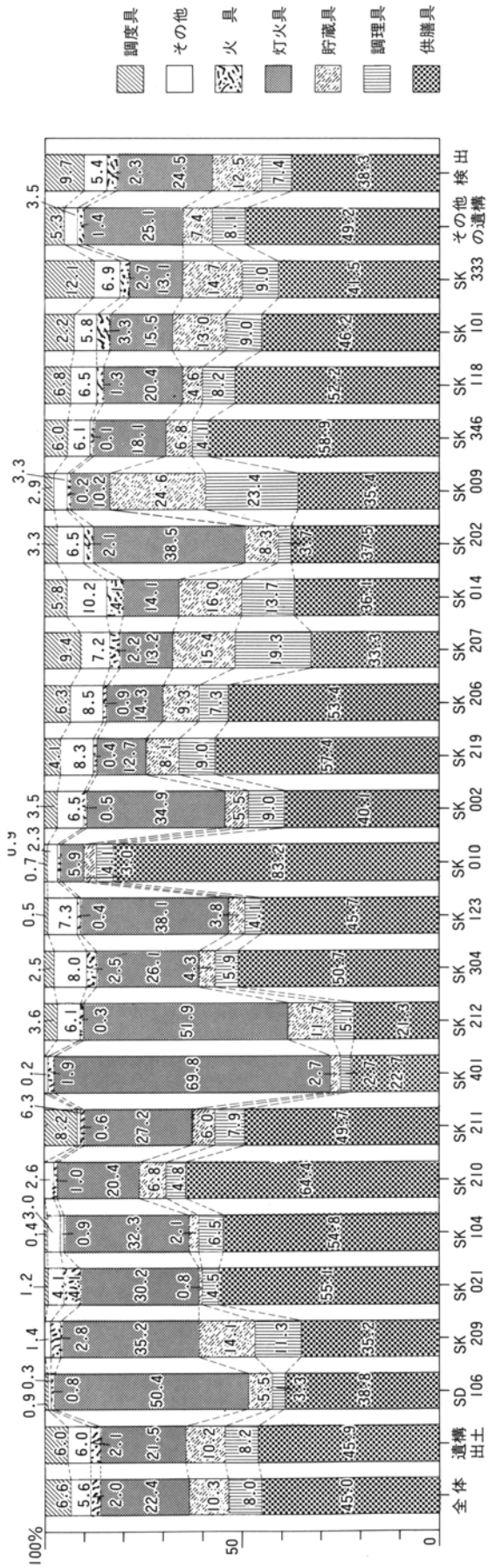
名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）において出土した近世陶磁器類は、接合前口縁破片数で37,179点、総個体数は3,686.50個体である。総破片数については集計されていない。報告書に掲載されている用途組成・材質組成をまとめて図化したものが、第142図と第143図である。全体とは県警本部地点で出土した全近世陶磁器類の合計であり、県警本部地点における平均値として捉えている。各遺構の時期は、SD106が17世紀第3四半期～18世紀前葉、SK209・SK021が17世紀末、SD104・SK210・SK211・SK401が17世紀第3四半期、SK212が18世紀後葉～19世紀初頭、SK304が18世紀前葉、SK123が18世紀中葉～19世紀初頭、SK010が19世紀前葉、SK002が18世紀後葉～19世紀初頭、SK219・SK206が18世紀中葉～後葉、SK207が18世紀末～19世紀初頭、SK014・SK202・SK009が19世紀前葉、SK346が18世紀後葉～19世紀前葉、SK118が19世紀前葉～中葉、SK101・SK333が19世紀中葉である。遺構の存続期間まで含めて考えると、SD106～SK401までが17世紀代、SK212～SK206が18世紀代、SK207～SK333が19世紀代となる。また、遺構出土・その他の遺構・検出合計については参考資料としてあげておく。なお、ここでは接合後口縁接合率（切り捨て）を利用している。また、絶対量については考慮していない。

用途組成については、供膳具が45.0%を占めており、次いで灯火具が22.4%となっている。やはり、供膳具・調理具・貯蔵具等の日常的な生活に関連する遺物群が63.3%を占めており、灯火具・火具を含めると87.8%と大半を占めることとなる。これに対し、副次的な生活に関連する遺物群である化粧具・神仏具・喫煙具については5.6%、調度具は6.6%に過ぎず、合わせても12.2%にすぎない。個々に見てみると、供膳具はほぼ安定した出土量を示し、調理具・貯蔵具は増加傾向を示し18世紀後葉にピークが認められる。灯火具・火具は18世紀代まで多いが、19世紀に入り減少している。化粧具・神仏具・喫煙具は遺構によりかなりばらつきが見られるが、19世紀に入り増加する傾向にあるように思われる。調度具については、年代を下るに従って増加傾向を示しているようである。

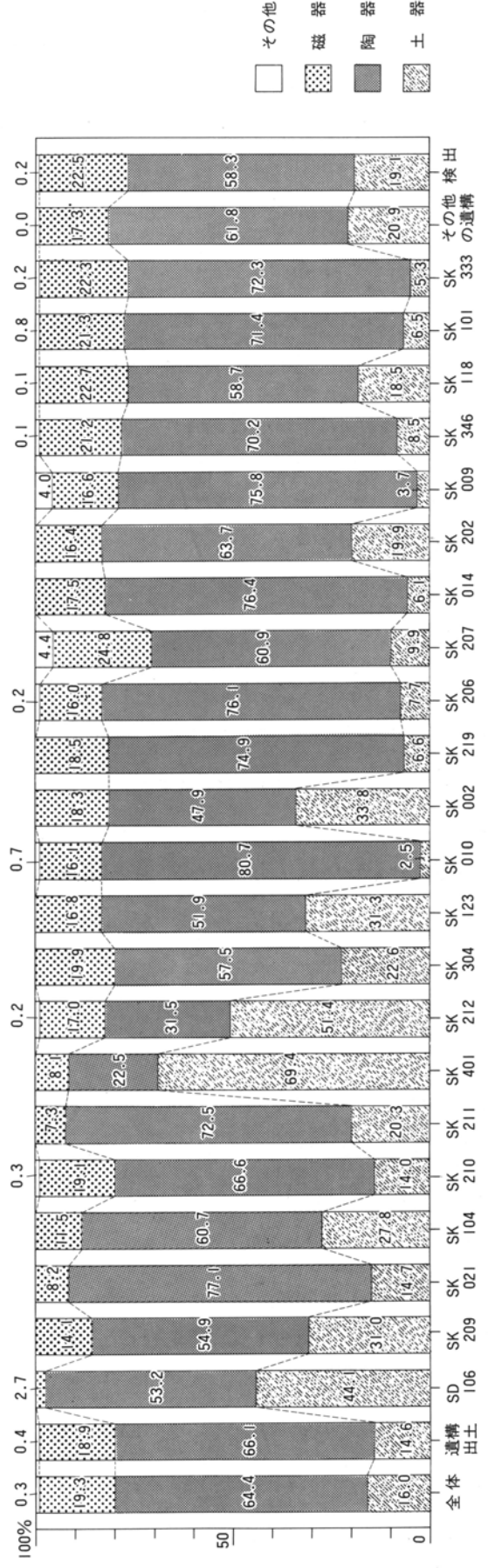
材質面について見てみると、全体では土師質製品が16.0%、陶器製品が64.4%、磁器製品が19.3%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が0.3%となっている。土師質製品は、17世紀代～18世紀中葉までは30～40%を占めているが、18世紀後半には10%台、19世紀には数%と確実に減少傾向を示している。陶器製品は、17世紀後半に一時的に減少するが、ほぼ安定した出土量を示している。磁器製品は、17・18世紀ともに10%前後から15%前後、さらに19世紀に入り約20%以上へと増加する傾向を読み取ることができる。

#### <参考文献>

(財) 愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』 1993



第142図 名古屋城三の丸遺跡 (県警本部地点) 出土陶磁器類の用途組成



第143図 名古屋城三の丸遺跡 (県警本部地点) 出土陶磁器類の材質組成

## 6. 外町遺跡

外町遺跡とは、西春日井郡清洲町・新川町に所在する江戸時代を中心とした遺跡である。織田信長の居城として知られる清須城とその城下町は、外町遺跡のすぐ北側に位置している。その城下町は、この地方の中心都市として機能し、慶長年間の「清須越し」の時期には人口数万を擁した全国でも有数の城下町となっていた。城下町期の後期には城郭が拡張され、城郭の外郭に外町が形成されている。「清須越し」以後は、美濃街道沿いの「清須宿」と農村へと変化したのである。

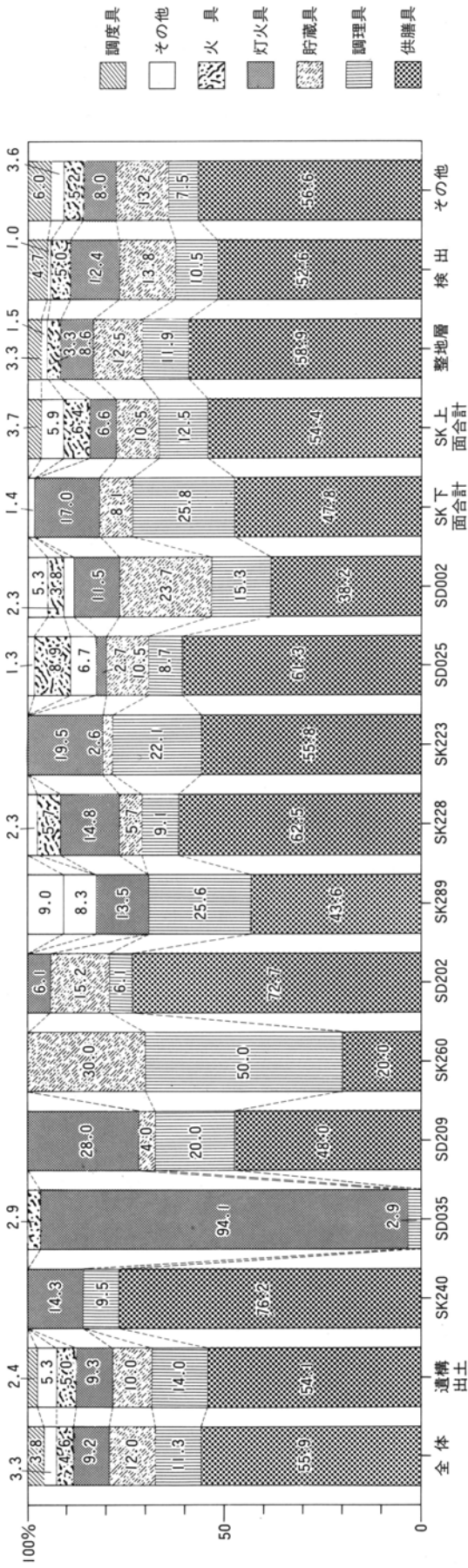
外町遺跡より出土した全近世陶磁器類は、総破片数で34,633点、接合前口縁破片数は9,488点、総個体数は688.75個体である。数量的には少量ではあるが、数少ない近世における町屋或は農村における資料として注目される。報告書に掲載されている用途組成・材質組成を、修正してまとめて図化したものが第144図と第145図である。全体とは外町遺跡から出土した全陶磁器類の合計であり、本遺跡における平均値として捉えておく。SK 合計と整地層は18世紀代と19世紀代の資料としてあげてある。各遺構の時期は、SK240が16世紀末～17世紀初頭、SD035が17世紀初頭、SD209が17世紀中葉、SK260が17世紀末～18世紀初頭、SD202が18世紀後葉、SK289が18世紀後葉～末、SK228・SK223が18世紀末、SD025・SD002が19世紀中葉である。ほぼSK240～SD209は17世紀代、SK260～SK289とSK（下面）合計は18世紀代、SK228～SD002とSK（上面）合計、整地層が19世紀代の様相を示しているものと考えられる。また、検出合計・その他合計は参考資料としてあげてある。なお、ここでは接合後口縁存率（切り捨て）を利用しているが、絶対量については考慮に入れていない。

まず、用途組成については、全体では供膳具の占める割合が55.8%と圧倒的に多く、供膳具・調理具・貯蔵具という日常的な生活に関連する遺物群が79.4%を占めている。さらに、灯火具・火具の占める割合が13.8%、化粧具・神仏具・喫煙具等の副次的な生活に関連する遺物群が3.3%、調度具が3.8%を占めている。これまでの吉田城遺跡や名古屋城三の丸遺跡と比較してみると、供膳具や調理具・貯蔵具等の日常的な生活に関連する遺構群の占める割合が高いように思われる。灯火具については、遺構によりばらつきがみられるが、18世紀代には10%台を占めているが、19世紀になると10%以下に減少していることが確認される。火具やその他の用途とした化粧具・神仏具・喫煙具については、18世紀代後半になってようやくみられるようになってくる。調度具についても、ほぼ同様である。

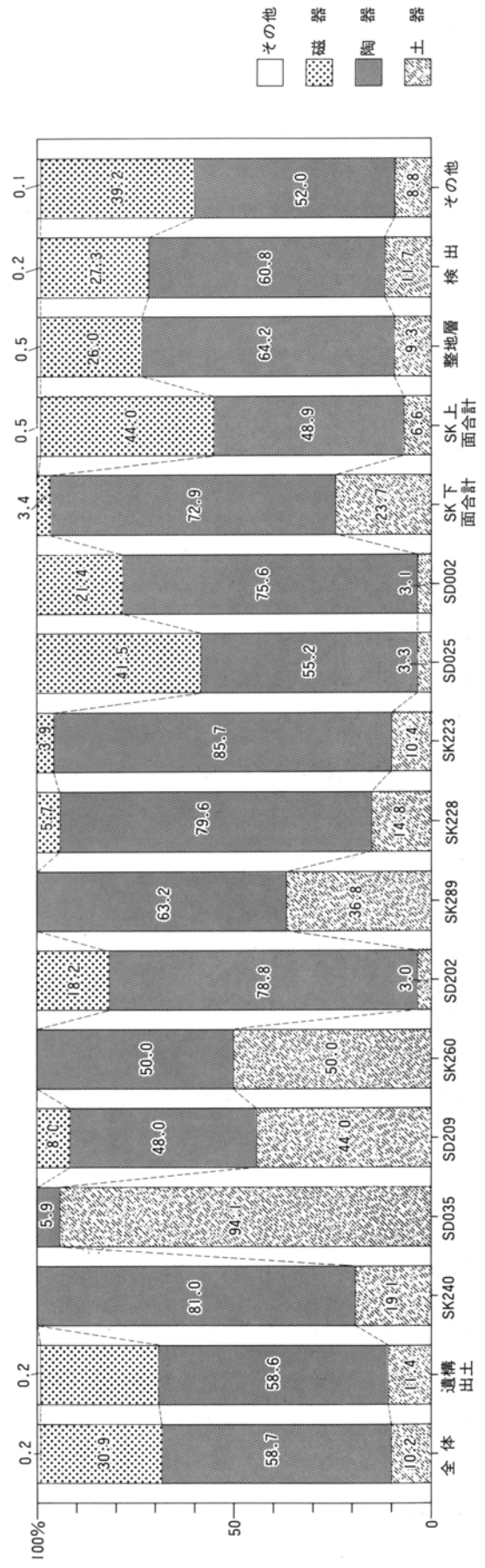
ついで、材質組成については、全体では土師質製品が10.2%、陶器質製品が58.7%、磁器質製品が30.9%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が0.2%を占めている。他の遺跡に比べ、磁器製品の占める割合が高くなっている。これは、19世紀代の遺構が多く存在していることに起因しているものと思われる。土師質製品は、他の遺跡同様に極端な減少傾向を示している。また、陶器製品は、60%台でほぼ安定した割合を占めていることが確認される。他の遺跡と比べ異なっている点として磁器製品が上げられよう。17～18世紀には破片のみの出土しかみられず、19世紀になり30%を超える出土量を示すように激増している。

### <参考文献>

(財)愛知県埋蔵文化財センター 『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』 1994



第144図 外町遺跡出土陶磁器類の用途組成



第145図 外町遺跡出土陶磁器類の材質組成

## 7. まとめと今後の課題

以上、近世陶磁器類の消費地における用途組成や材質組成の変化について、本遺跡を含め名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）、同遺跡（県警本部地点）、外町遺跡と同様の分析を行っている遺跡の例をあげて、近世陶磁器類の様相を明らかにしようとした。しかし、まだまだ4遺跡のみの成果であり、現状では分類や統計処理の方法等に検討すべき課題が多く残されている。今後同様の分析による結果が蓄積されていくことで、初めてデータとして利用することが可能となることであろう。これらのデータを比較検討することにより、年代による近世陶磁器類の様相の変化、例えば用途組成や材質組成等に特徴がみられたり、画期が想定されたり、社会的な身分や階級による格差が遺物の点から確認されたり、さまざまなことが明かとなることであろう。しかし、ここで提示した結果がすぐに近世陶磁器類の様相を忠実に反映しているとは言い難く、詳しい検討は今後のデータの増加に委ね、1つの傾向を提示できれば幸いである。

用途や材質組成について触れる前に、遠藤氏による絶対量より見た遺物分析の方法<sup>(12)</sup>を紹介しておきたい。本来、本遺跡においても分析すべきであるが、良好な一括資料が少なく、また時間的な制約もあって実施していない。分析の視点としては、近世陶磁器類の消費における用途・器種等の組成の変化を出土した近世陶磁器類の絶対量の増減との関わりで見ることにある。例えば、土師質製品について見てみると、材質組成を見る限り年代が下るに従って減少していることが確認される。これが単に土師質製品の生産が縮小していることを示しているようであるが、出土量はほぼ一定量を示しているのである。すなわち、出土する陶磁器類等の遺物量が増えることにより、あたかも土師質製品が減少しているように捉えられるのである。絶対量の変化を見る1つの目安として、編年がある程度確立されている播鉢があげられている。理由としては、播鉢はどの遺構からも出土しており、その消費される期間が短く遺構の時期が決定される重要な遺物であるからである。そのため、遺物分類においても9つに細分されている<sup>(13)</sup>。播鉢のⅨ類は備前や堺産の播鉢であり、Ⅰ類～Ⅷ類に分類された瀬戸・美濃産の播鉢のみを対象とされ、名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）の資料を基に、播鉢の類型別の消費絶対量の変化<sup>(14)</sup>、消費量基準増加率<sup>(15)</sup>、消費量増加率<sup>(16)</sup>を提示され、供膳具の椀類、皿類、鉢類や調理具の鍋・釜類や鉢類、瓶類等が播鉢に対してどのぐらいの比率で出土しているのかを求められ、絶対量の変化の指標とされている。

また、金子氏は、名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）出土陶磁器類資料を利用して遠藤氏と同様の分析を試みられ、絶対量の比較から18世紀代に遺物の増加比率がピークを示していることを見い出している<sup>(17)</sup>。遺物量の増加については、17世紀代は増加率は少なく、19世紀代は出土遺物量はかなり増えるがその比率は18世紀代のそれよりも低くなっている。また、材質の面においても、土師質製品は減少傾向、陶器製品は18世紀代にピークを示し、磁器製品は17世紀代は少ないが、18世紀・19世紀ともに同様の増加傾向を示している。さらに、用途組成においても、供膳具や化粧具・神仏具・喫煙具は減少傾向が、灯火具は半減している、調理具は増加傾向が、調度具はやや増加し、貯蔵具や火具には変化がみられないとも指摘されている。また、愛知県小牧市に所在する中宮遺跡（近世農村遺跡）との比較を試みられ、絶対量の違いが、場や階層・人口差等の本来的な違いなのか、廃棄行為のあり方の差異を示すものなのか、という疑問も残されている。

これまで、遠藤氏と金子氏の分析についてまとめて見てきたわけであるが、このような分析を行った上で絶対量の変化に留意しつつ近世陶磁器類の用途や材質の組成を明らかにすることにより、近世陶磁器類の様相が明確に浮かび上がってくるものと思われる。以下、これまで概観してきた4つの遺跡より見られる用途や材質組成についてまとめておきたい。

まず、近世陶磁器類の用途組成であるが、各遺跡より出土した遺物量が大きく異なっているために単純に比較することは難しいが、概ね次のようにまとめることができよう。まず、17世紀代には、日常的な生活に関連する遺物群である供膳具・調理具・貯蔵具と灯火具によりその大半が占められている。出土する器種も限定されてくることから、この段階においては器種の細分化が進んではないことが想定できるのではないだろうか。18世紀代になると、出土遺物量は確実に増加してくる。17世紀代に比べ、供膳具等の日常的な生活に関連する遺物群の比率が相対的に減少し、灯火具や火具等の出土量が増大するようである。これが19世紀代になると、出土遺物量は急激に増加し、これまで出土遺物の大半を占めていた供膳具・調理具・貯蔵具・灯火具・火具等がさらに減少し、副次的な生活に関連する遺物群である化粧具・神仏具・喫煙具や調度具に分類した遺物の占める割合が高くなっている。陶磁器類の多様化が、この段階になって進んできていることを示しているのであろうか。

近世陶磁器類の材質組成であるが、これも用途組成と同様で一概には言えないところが多いが、次のようにまとめることができる。17世紀代には、土師質製品と陶器製品により出土遺物の大半を占める状況であり、磁器製品の占める割合はかなり少ない。しかし、遺跡により状況がやや異なり、名古屋城三の丸遺跡では10%前後であるのに対し、外町遺跡や中宮遺跡では1%以下という数値を示している。磁器製品は、この段階では高級品として流通し、一般的な生活道具として利用されていなかったのではないだろうか。18世紀代には、土師質製品がやや減少し、磁器製品の占める割合が増加している。しかし、まだまだ外町遺跡や中宮遺跡では数%しか占めてはいない。また、吉田城遺跡においては、名古屋城三の丸遺跡よりも高い割合を占めており、これが前述したような理由によるものなのか、地域差によるものなのか、結論は出ていない。19世紀代になると、土師質製品の比率はさらに減少し、磁器製品の占める割合が増大する。名古屋城三の丸遺跡では20%台、外町遺跡や中宮遺跡でも20%前後、吉田城遺跡では30%前後を占めている。磁器製品が増大する背景の1つとしては、享和年間(1801~1804)に瀬戸で磁器製品の生産が開始されたこと<sup>(18)</sup>があげられよう。これまで、肥前でしか生産されていなかった磁器製品が、地元瀬戸で生産されるようになり、ようやく一般的な生活用具として多くの人々に利用されるようになったものと思われる。

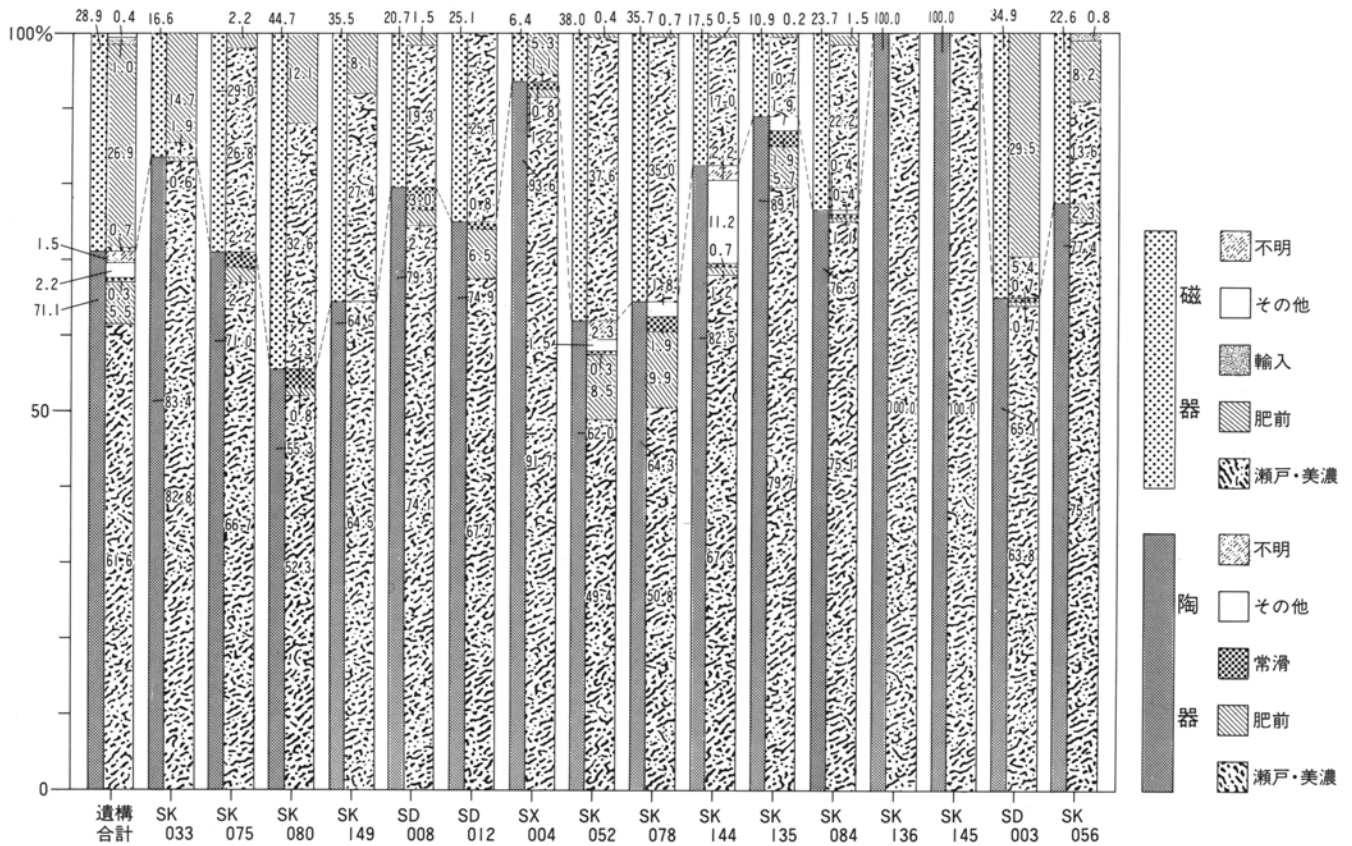
以上、年代をおって用途組成と材質組成について見てきたわけであるが、大きく2つの時期に画期を見出すことができよう。まず、1つ目としては17世紀末~18世紀前葉頃で、灯火具や火具が増加することや、土師質製品が減少し磁器製品が増加する時期である。また、2つ目としては18世紀末~19世紀中葉頃で、化粧具等の副次的な生活に関連する遺物群が増大することや、土師質製品が激減し磁器製品が急増する時期である。このような時期に、人々の生活において何等かの変化があったであろうことは窺うことはできるが、それが単に社会変化としての人口増や生活様式の変化に直接結びついていくのかは確認できてはいない。また、社会的な身分や階級による格差という点については、17~18世紀における磁器製品の比率が町屋や農村部において極端に低いことが示しているようであるが、



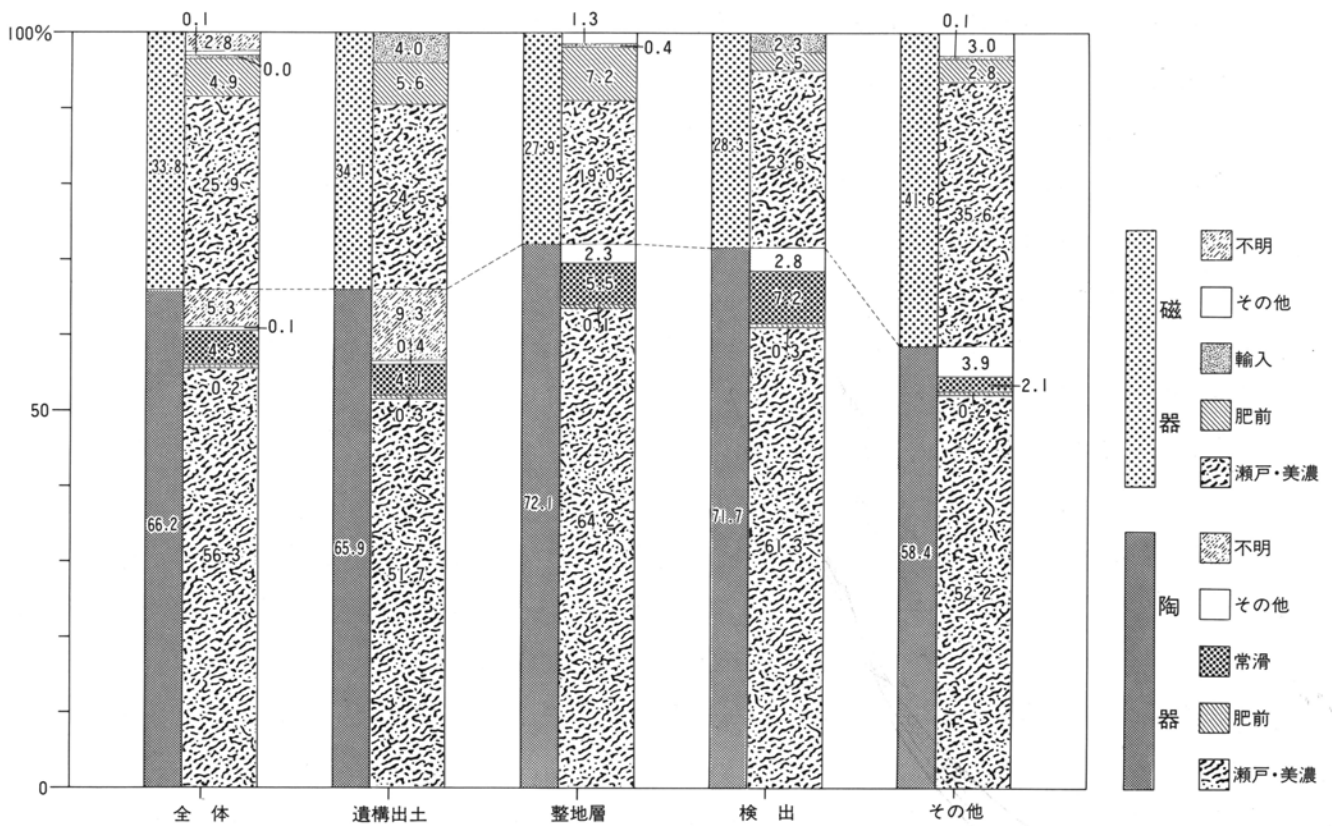
名古屋城三の丸遺跡に対して吉田城遺跡における磁器製品の割合が高い点が気になるため、ここでの判断は避けておきたいと思う。以上に示してきた結果は、4遺跡の比較における成果であり、これが近世の遺跡にそのままあてはまるものではなく、あくまでも1つの傾向を示したものにすぎない。まだまだ多くの課題や問題点が含まれていることは、前述の通りである。これからの近世遺跡における資料整理には、カウント等の統計処理が欠かせなくなるものと考えられるが、その遺跡毎に分類や統計が異なっているようでは、さまざまな点で不都合が生じてくることであろう。当センターにおいてさえも統一がとれていないのに、全国になればなおさらであろう。早く近世遺跡における分類や統計等の分析方法の統一が強く感じられるのである。

その1つの例として、これまで見てきた用途組成による分析以外の方法ではあるが、新宿区遺跡調査会の井隆夫氏により、出土遺物の器形による器種組成がある<sup>(19)</sup>。これは、遺跡毎に不統一であった陶磁器類の計測方法を統一し定量化していこうというもので、器形から椀類・皿類等124器種の器種項目、磁器・陶器・炆器・土器等の材質項目、肥前系・瀬戸・美濃系等の製作地項目を設定され、器種別・材質別・製作地別に推定個体数<sup>(20)</sup>によって集計表が作成されている。このようなデータであれば、それぞれの目的により資料化することが可能となってくる。このように各地で集計されたデータをも総合的に利用、比較、検討することによって、より近世陶磁器類の様相が明かたされていくことであろう。また、その中で「これら一括廃棄のごみに含まれるやきものとしては、四谷三丁目遺跡と同様に、“世帯”を思わせる日常生活用品としての碗や片口、灯明皿等が一通りあり、さらにその上に、各世帯の事情に合わせて特殊な器種が加わるとか、大量に集中する器種があるとか、あるいはその逆に欠落する器種がみえるとかのパターンを示す。」とされ、その組成の違いには、「そのごみの所有者・使用者、及び廃棄者の、(1)時代性、(2)地域性、(3)身分・階層性、(4)個性、(5)特殊事情等を反映したものであり、複雑な要素が絡みあっている。」と述べられている。これは、我々と同じことを提示されており、大変興味深い分析方法と思われる。

最後に、近世陶磁器類の産地による組成について見ておきたい。吉田城遺跡においては、残念ながら産地組成までの集計や分析はできていない。しかし、一部に集計されているので紹介しておきたい。1つは、名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点)であり、土師質製品やその他の材質製品を除いて見てみると、16遺構の集計で瀬戸・美濃産の陶磁器類が62.2%を示し、常滑産が0.3%、肥前産(肥前系を含む)が32.7%、貿易陶磁器が1.1%、その他・不明の陶磁器類が3.7%となっている。その他の産地としては、京都・信楽・丹波・備前等がある。もう1つ例が外町遺跡であり、全出土遺物で瀬戸・美濃産の陶磁器類が80.6%とその大半を占めており、常滑産が4.3%、肥前産(肥前系を含む)が5.1%、その他・不明の陶磁器類が9.9%、輸入陶磁器類も極僅かではあるが確認されている。その他の産地としては、やはり京都・信楽・備前があげられる。吉田城遺跡においては、名古屋城三の丸遺跡に近い割合を示しているものと考えられるが、カウントしていた様子から輸入貿易陶磁器類の出土量は少なく、肥前産(肥前系を含む)の陶磁器類の割合が多くなる可能性が高いように思われる。前出の2つの遺跡においてさえ、かなりの違いがみられている。このような産地組成の違いが、何に起因しているのだろうか。使用者による趣味・趣向という要素が強いようにも思われるが、このような産地別の組成を明らかにすることにより、新しい知見が得られるものと考えられる。

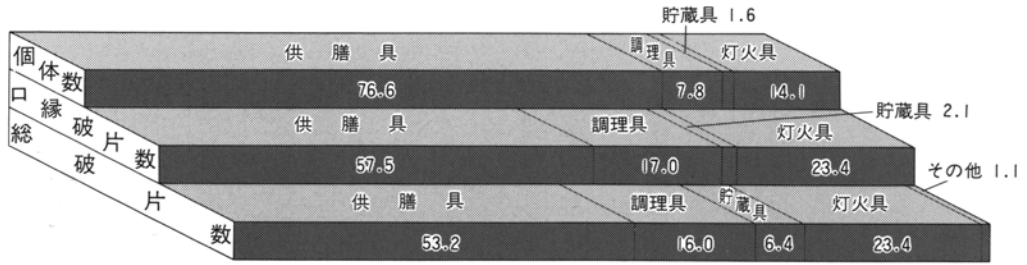


第146図 名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）遺跡出土陶磁器類の産地組成



第147図 外町遺跡出土陶磁器類の産地組成

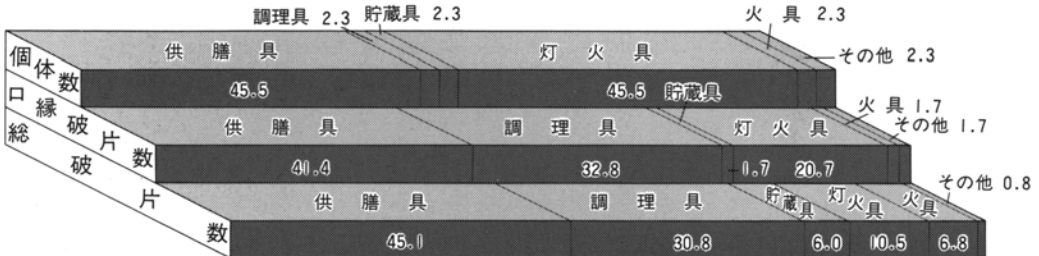
参考資料 1



第148図 SK248出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		4	15		19		2	9		11		2	17		19
	小碗			2		2		1		1			2		2	
	皿	12	16	0		28	7	7	1		15	20	8	1	29	
	鉢					0					0				0	
	その他					0					0				0	
	小計	12	20	17	0	49	7	9	11	0	27	20	10	20	0	50
調理具	鍋、釜	1				1	3				3	8				8
	鉢		1			1		1		1		1			1	
	播鉢		2			2		3		3		4			4	
	瓶		1			1		1		1		2			2	
	その他					0					0				0	
	小計	1	4	0	0	5	3	5	0	0	8	8	7	0	0	15
貯蔵具	瓶					0				0		1	2		3	
	壺					0				0		2			2	
	甕A					0				0					0	
	甕B					0				0					0	
	鉢			1		1			1		1		1		1	
	その他					0				0					0	
小計	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	3	3	0	6	
灯火具		9			9	11				11	21	1			22	
火具					0					0					0	
化粧具					0					0			1		1	
神仏具					0					0					0	
喫煙具					0					0					0	
調度具					0					0					0	
蓋			5		5		2			2		2	1		3	
合計		22	29	18	0	69	21	16	12	0	49	49	23	25	0	97

第24表 SK248出土陶磁器類集計表

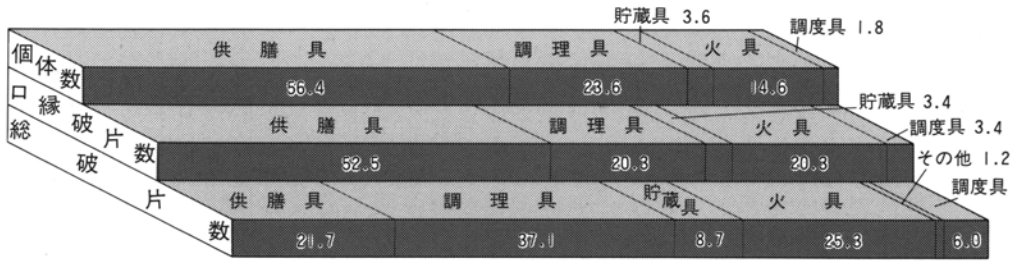


第149図 SK340出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		7			7		6	1		7		12	6		18
	小碗			1		1		1		1		1	1		2	
	皿	5	4	3		12	7	7	2		16	17	15	4	36	
	鉢					0					0		3	1	4	
	その他					0					0				0	
	小計	5	11	4	0	20	7	13	4	0	24	17	31	12	0	60
調理具	鍋、釜	1				1	17				17	32			32	
	鉢					0				0		1			1	
	播鉢					0		2		2		8			8	
	瓶					0				0					0	
	その他					0				0					0	
	小計	1	0	0	0	1	17	2	0	0	19	32	9	0	0	41
貯蔵具	瓶					0				0					0	
	壺		1			1		1		1		4			4	
	甕A					0				0		4			4	
	甕B					0				0					0	
	鉢					0				0					0	
	その他					0				0					0	
小計	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	8	0	0	8	
灯火具		18	2		20	11	1			12	13	1			14	
火具					1				1	1				2	9	
化粧具					0					0					0	
神仏具				1	1			1		1		1			1	
喫煙具					0					0					0	
調度具					0					0					0	
蓋					0					0					0	
合計		24	14	5	1	44	35	17	5	1	58	62	56	13	2	133

第25表 SK340出土陶磁器類集計表

参考資料 2

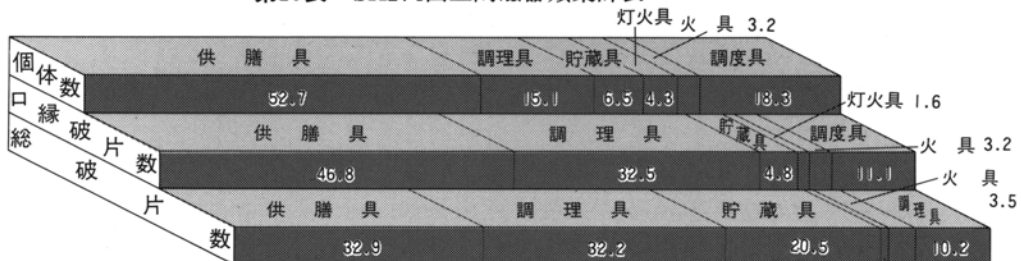


第150図 SK274出土陶磁器類の用途組成

第26表 SK274出土陶磁器類集計表

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		3	2		5		3	4		7		11	11		22
	小碗			3		3			4		4			6		6
	皿	0	3	5		8	2	5	4		11	7	10	11		28
	鉢		0	15		15		1	8		9		2	14		16
	その他					0					0					0
	小計	0	6	25	0	31	2	9	20	0	31	7	23	42	0	72
調理具	鍋, 釜	0				0	2				2	92				92
	鉢		1			1		1			1		1			1
	播鉢		3			3		6			6		14			14
	瓶			9		9			3		3		3	13		16
	その他					0					0					0
	小計	0	4	9	0	13	2	7	3	0	12	92	18	13	0	123
貯蔵具	瓶					0					0		4			4
	壺		2			2		1			1		2			2
	甕A					0					0		11			11
	甕B					0					0		9			9
	鉢			0		0			1		1			3		3
	その他					0				0					0	
	小計	0	2	0	0	2	0	1	1	0	2	0	26	3	0	29
灯火具						0					0					0
火具		1	6		1	8	5	6		1	12	38	43		3	84
化粧具						0					0					0
神仏具						0					0		3	1		4
喫煙具						0					0					0
調度具			1			1		2			2	2	18			20
蓋			11	0		11		1			4		1	3		4
合計		1	30	34	1	66	9	26	27	1	63	139	132	62	3	336

第26表 SK274出土陶磁器類集計表

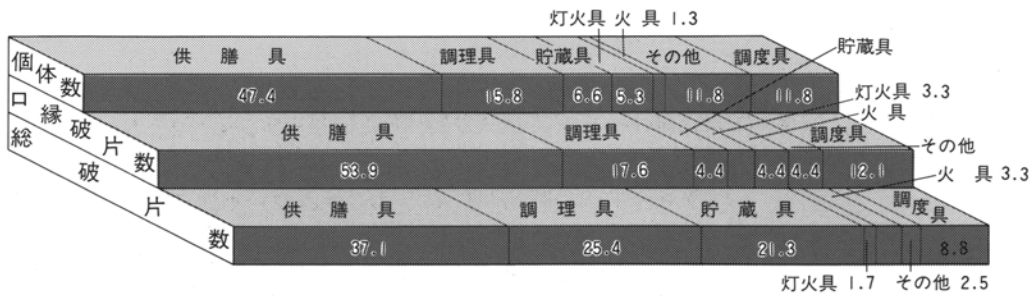


第151図 SK053出土陶磁器類の用途組成

第27表 SK053出土陶磁器類集計表

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		6	17		23		9	22		31		32	41		73
	小碗		3	10		13		4	7		11		6	10		16
	皿	3	9	0		12	5	4	4		13	9	13	12		34
	鉢		0	1		1		2	2		4		7	2		9
	その他					0					0					0
	小計	3	18	28	0	49	5	19	35	0	59	9	58	65	0	132
調理具	鍋, 釜	0	0			0	6	1		1	8	20	8		1	29
	鉢		7			7		12			12		26			26
	播鉢		6			6		20			20		57			57
	瓶		1			1		1			1		16	1		17
	その他					0					0					0
	小計	0	14	0	0	14	6	34	0	1	41	20	107	1	1	129
貯蔵具	瓶					0					0		5	3		8
	壺					0					0		5			5
	甕A		2			2		3			3		51			51
	甕B		3			3		2			2		17			17
	鉢			1		1			1		1			1		1
	その他					0				0					0	
	小計	0	5	1												

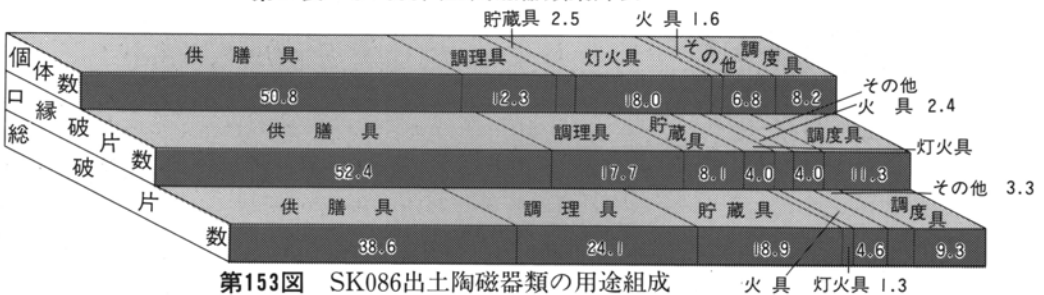
参考資料 3



第152図 SK055出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		17	8		25		17	15		32		73	38		111
	小碗		5	5		10		3	5		8		8	10		18
	皿	10	3	12		25	13	4	5		22	15	6	14		35
	鉢		0	2		2		1	2		3		10	4		14
	その他					0					0					0
	小計	10	25	27	0	62	13	25	27	0	65	15	97	66	0	178
調理具	鍋、釜	1				1	6				6	27	11			38
	鉢		2			2		1		1		17			17	
	播鉢		6			6		9		9		42			42	
	瓶		6			6		6		6		14			14	
	その他					0					0				0	
	小計	1	14	0	0	15	6	16	0	0	22	27	84	0	0	111
貯蔵具	瓶					0				0		10			10	
	壺		2			2		2		2		18			18	
	甕A					0		4		4		43			43	
	甕B		1			1		4		4		15			15	
	鉢					0				0		1			1	
	その他					0				0					0	
	小計	0	3	0	0	3	0	10	0	10	0	87	0	0	87	
灯火具		22			22		5			5		6			6	
火具		2			2		3			3	13	6		2	21	
化粧具		2			2		1			1		3			3	
神仏具		1	4		5		2	1		3		5	3		8	
喫煙具		1			1		1			1		4			4	
調度具		10			10		14			14		43			43	
蓋		11			11		4			4		7			7	
合計		11	91	31	0	133	19	81	28	0	128	55	342	69	2	468

第28表 SK055出土陶磁器類集計表

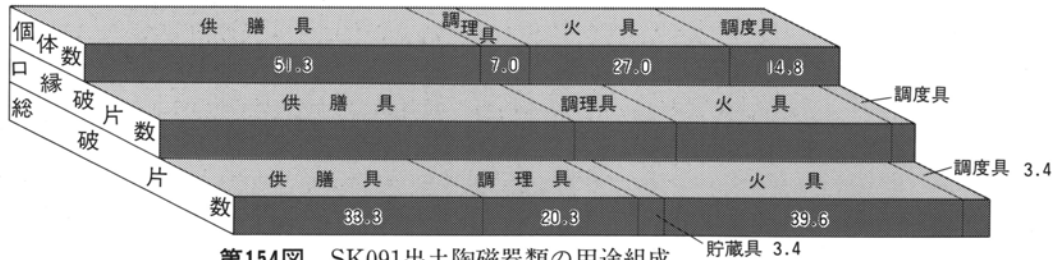


第153図 SK086出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		15	8		23		20	8		28		39	14		53
	小碗			8		8			10		10			11		11
	皿	5	0	0		5	5	2	1		8	13	4	5		22
	鉢		0			0		3			3		3			3
	その他					0					0					0
	小計	5	15	16	0	36	5	25	19	0	49	13	46	30	0	89
調理具	鍋、釜	2	1		1	4	6	1		1	8	33	3		1	37
	鉢		6			6		5		5		11			11	
	播鉢		2			2		3		3		8			8	
	瓶					0					0		5		5	
	その他					0					0				0	
	小計	2	9	0	1	12	6	9	0	1	16	33	27	0	1	61
貯蔵具	瓶		0			0		1		1		8			1	9
	壺		3			3		2		2	1	2			3	
	甕A					0				0		32			32	
	甕B		2			2		1		1		7			7	
	鉢					0				0					0	
	その他					0				0					0	
	小計	0	5	0	0	5	0	4	0	4	1	49	0	1	51	
灯火具		1	3			4	1	2		3	1	3			4	
火具		1				1		3		1	2	4			8	
化粧具				5		5			2	2			3		3	
神仏具		2	2			4		1	1	2		2	1		3	
喫煙具					0					0					0	
調度具		9			9		11			11		21			21	
蓋				2		2			1	1			1		1	
合計		8	44	25	1	78	12	55	23	2	92	50	152	35	4	241

第29表 SK086出土陶磁器類集計表

参考資料 4



第154図 SK091出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗			31		31			22		22		4	32		36
	小碗		3	19		22		1	7		8		2	8		10
	皿		0	0		0		4	1		5	1	4	3		8
	鉢			6		6			2		2		4	1		5
	その他					0					0					0
小計	0	9	50	0	59	0	7	30	0	37	1	14	44	0	59	
調理具	鍋、釜	3	5			8	4	5			9	22	10		2	34
	鉢					0				0					0	
	播鉢					0				0		1			1	
	瓶					0				0		1			1	
	その他					0				0					0	
小計	3	5	0	0	8	4	5	0	0	9	22	12	0	2	36	
貯蔵具	瓶					0				0		2			2	
	壺					0				0					0	
	甕A					0				0		3			3	
	甕B					0				0		1			1	
	鉢					0				0					0	
その他					0				0					0		
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6	
灯火具					0					0					0	
火具		13	18			31	5	14			19	16	54		70	
化粧具						0				0					0	
神仏具						0				0					0	
喫煙具						0				0					0	
調度具			5	12		17		1	1		2	2	4		6	
蓋			5	1		6		3	1		4	5	1		6	
合計		16	42	63	0	121	9	30	32	0	71	39	93	49	2	183

第30表 SK091出土陶磁器類集計表



第155図 その他の遺構2出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗	0	156	227	0	383	0	303	368	0	671	0	982	922	2	1906
	小碗	0	54	238	0	292	0	43	216	0	259	0	85	417	0	502
	皿	711	146	93	0	950	728	214	156	1	1099	1651	488	375	1	2515
	鉢	0	31	9	1	41	0	75	27	1	103	0	264	70	7	341
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	711	387	567	1	1666	728	635	767	2	2132	1651	1819	1784	10	5264	
調理具	鍋、釜	26	24	0	1	51	211	22	0	9	242	1554	78	0	49	1681
	鉢	3	26	2	0	31	2	54	2	0	58	2	132	2	0	136
	播鉢	0	62	0	0	62	0	143	0	0	143	0	528	0	0	528
	瓶	0	29	19	0	48	0	15	10	0	25	0	190	44	1	235
	その他	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	2	0	3
小計	29	141	21	1	192	213	235	12	9	469	1556	929	48	50	2583	
貯蔵具	瓶	0	65	4	0	69	0	8	1	0	9	0	242	22	0	264
	壺	4	41	0	0	45	3	15	0	0	18	31	97	2	0	130
	甕A	0	66	0	0	66	0	106	0	0	106	0	2424	0	0	2424
	甕B	0	29	0	0	29	0	37	0	0	37	0	280	0	0	280
	鉢	0	17	5	0	22	0	12	12	0	24	0	19	24	0	43
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	4	218	9	0	231	3	178	13	0	194	31	3062	48	0	3141	
灯火具		171	151	0	12	334	144	59	0	10	213	255	130	1	27	413
火具		15	48	0	19	82	31	92	0	11	134	390	752	0	89	1231
化粧具		0	22	3	0	25	0	6	2	0	8	0	14	16	0	30
神仏具		0	29	37	0	66	0	26	12	0	38	0	50	40	0	90
喫煙具		0	5	2	0	7	0	6	3	0	9	0	12	4	0	16
調度具		4	68	3	0	75	4	72	3	0	79	36	429	33	2	500
蓋		20	134	58	3	215	3	73	41	7	124	4	118	54	7	183
合計		954	1203	700	36	2893	1126	1382	853	39	3400	3923	7315	2028	185	13451

第31表 その他の遺構2出土陶磁器類集計表

## 参考資料5

	供膳具	調理具	貯蔵具	灯火具	火 具	化粧具	神仏具	その他	合 計
遺構合計	722.1	164.0	144.5	909.7	17.1	26.5	78.1	33.9	2095.9
	34.45	7.82	6.89	43.40	0.82	1.26	3.73	1.62	100.00
SK033	8.8	2.0	1.8	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0	23.7
	37.13	8.44	7.59	46.84	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK075	14.6	2.5	1.2	9.7	0.0	0.0	0.0	0.0	28.0
	52.14	8.93	4.29	34.64	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK080	10.9	1.9	1.5	17.0	0.3	0.0	1.0	0.0	32.6
	33.44	5.83	4.60	52.15	0.92	0.00	3.07	0.00	100.00
SK149	9.4	0.5	0.4	13.0	0.2	0.0	0.8	0.0	24.3
	38.68	2.06	1.65	53.50	0.82	0.00	3.29	0.00	100.00
SD008	10.2	1.3	1.6	7.8	0.6	0.2	0.2	0.8	22.7
	44.93	5.73	7.05	34.36	2.64	0.88	0.88	3.52	100.00
SD012	20.7	1.5	0.5	11.2	0.3	0.0	0.0	1.9	36.1
	57.34	4.16	1.39	31.02	0.83	0.00	0.00	5.26	100.00
SX004	26.6	8.9	2.6	80.9	0.8	0.0	3.0	0.0	122.8
	21.66	7.25	2.12	65.88	0.65	0.00	2.44	0.00	100.00
SK052	253.0	57.6	52.0	439.2	1.6	8.6	38.0	9.4	859.4
	29.44	6.70	6.05	51.11	0.19	1.00	4.42	1.09	100.00
SK078	158.9	39.3	29.7	236.3	2.8	10.0	24.0	3.6	504.6
	31.49	7.79	5.89	46.83	0.55	1.98	4.76	0.71	100.00
SK144	76.1	10.5	14.4	40.7	2.5	1.5	4.1	3.5	153.3
	49.64	6.85	9.39	26.55	1.63	0.98	2.67	2.28	100.00
SK135	29.2	4.7	13.0	14.7	3.2	3.2	1.4	1.9	71.3
	40.95	6.59	18.23	20.62	4.49	4.49	1.96	2.66	100.00
SK084	72.6	13.6	19.8	18.1	3.1	2.5	4.2	4.9	138.8
	52.31	9.80	14.27	13.04	2.23	1.80	3.03	3.53	100.00
SK136	0.7	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	3.5	4.3
	16.28	0.00	0.00	2.33	0.00	0.00	0.00	81.40	100.00
SK145	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	2.9
	3.45	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	96.55	100.00
SD003	9.0	2.6	2.0	2.4	0.4	0.4	0.6	0.2	17.6
	51.14	14.77	11.36	13.64	2.27	2.27	3.41	1.14	100.00
SK056	21.3	17.1	4.0	7.5	1.3	0.1	0.8	1.4	53.5
	39.81	31.96	7.48	14.02	2.43	0.19	1.50	2.62	100.00

第32表 名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）出土陶磁器類の用途組成表

	土 器	陶 器	磁 器	その他	合 計
遺構合計	1000.1	777.7	316.6	1.5	2095.9
	47.72	37.11	15.11	0.07	100.00
SK033	8.0	13.1	2.6	0.0	23.7
	33.76	55.27	10.97	0.00	100.00
SK075	9.7	13.0	5.3	0.0	28.0
	34.64	46.43	18.93	0.00	100.00
SK080	19.4	7.3	5.9	0.0	32.6
	59.51	22.39	18.10	0.00	100.00
SK149	11.9	8.0	4.4	0.0	24.3
	48.97	32.92	18.11	0.00	100.00
SD008	8.7	10.7	2.8	0.5	22.7
	38.33	47.14	12.33	2.20	100.00
SD012	9.8	19.7	6.6	0.0	36.1
	27.15	54.57	18.28	0.00	100.00
SX004	56.6	61.8	4.2	0.2	122.8
	46.09	50.33	3.42	0.16	100.00
SK052	506.9	218.4	133.9	0.2	859.4
	58.98	25.41	15.58	0.02	100.00
SK078	272.4	149.3	82.9	0.0	504.6
	53.98	29.59	16.43	0.00	100.00
SK144	51.6	53.7	17.7	0.3	153.3
	33.66	54.60	11.55	0.20	100.00
SK135	18.2	47.3	5.8	0.0	71.3
	25.53	66.34	8.13	0.00	100.00
SK084	19.3	91.0	28.3	0.2	138.8
	13.90	65.56	20.39	0.14	100.00
SK136	0.1	4.2	0.0	0.0	4.3
	2.33	97.67	0.00	0.00	100.00
SK145	0.0	2.9	0.0	0.0	2.9
	0.00	100.00	0.00	0.00	100.00
SD003	2.7	9.7	5.2	0.0	17.6
	15.34	55.11	29.55	0.00	100.00
SK056	4.8	37.6	11.0	0.1	53.5
	8.97	70.28	20.56	0.19	100.00

第33表 名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）出土陶磁器類の材質組成表

参考資料6

全体	土器	陶器	磁器	その他	合計
6254	25169	7555	134	39112	
15.99	64.35	19.32	0.34	100.00	
遺構出土	4136	18781	5368	122	28407
14.56	66.11	18.90	0.43	100.00	
SD106	282	340	17	0	639
44.13	53.21	2.66	0.00	100.00	
SK209	22	39	10	0	71
30.99	54.93	14.08	0.00	100.00	
SK021	36	189	20	0	245
14.69	77.14	8.16	0.00	100.00	
SD104	211	461	87	0	759
27.80	60.74	11.46	0.00	100.00	
SK210	85	404	116	2	607
14.00	66.56	19.11	0.33	100.00	
SK211	64	229	23	0	316
20.25	72.47	7.28	0.00	100.00	
SK401	360	117	42	0	519
69.36	22.54	8.09	0.00	100.00	
SK212	302	185	100	1	588
51.36	31.46	17.01	0.17	100.00	
SK304	367	933	322	0	1622
22.63	57.52	19.85	0.00	100.00	
SK123	363	601	195	0	1159
31.32	51.86	16.82	0.00	100.00	
SK010	11	355	71	3	440
2.50	80.68	16.14	0.68	100.00	
SK002	507	719	274	0	1500
33.80	47.93	18.27	0.00	100.00	
SK219	48	543	134	0	725
6.62	74.90	18.48	0.00	100.00	
SK206	117	1153	242	3	1515
7.72	76.11	15.97	0.20	100.00	
SK207	36	221	90	16	363
9.92	60.88	24.79	4.41	100.00	
SK014	51	635	145	0	831
6.14	76.41	17.45	0.00	100.00	
SK202	134	428	110	0	672
19.94	63.69	16.37	0.00	100.00	
SK009	23	475	104	25	627
3.67	75.76	16.59	3.99	100.00	
SK346	81	669	202	1	953
8.50	70.20	21.20	0.10	100.00	
SK118	212	674	261	1	1148
18.47	58.71	22.74	0.09	100.00	
SK101	537	5883	1758	63	8241
6.52	71.39	21.33	0.76	100.00	
SK333	251	3443	1064	7	4765
5.27	72.26	22.33	0.15	100.00	
その他	875	2595	725	1	4196
の遺構	20.85	61.84	17.28	0.02	100.00
検出	1243	3793	1462	11	6509
19.10	58.27	22.46	0.17	100.00	

第35表 名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）出土陶磁器類の材質組成表

全体	供膳具	調理具	貯蔵具	灯火具	火具	化粧具	神仏具	喫煙具	調度具	合計
17605	3140	4029	8770	798	518	1238	446	2568	39112	
45.01	8.03	10.30	22.42	2.04	1.32	3.17	1.14	6.57	100.00	
遺構出土	13051	2319	2906	6120	594	421	954	1717	28407	
45.94	8.16	10.23	21.54	2.09	1.48	3.33	1.18	6.04	100.00	
SD106	248	21	35	322	5	0	2	6	639	
38.81	3.29	5.48	50.39	0.78	0.00	0.00	0.31	0.94	100.00	
SK209	25	8	10	25	2	0	0	0	71	
35.21	11.27	14.08	35.21	2.82	0.00	1.41	0.00	0.00	100.00	
SK021	135	11	2	74	10	0	10	3	245	
55.10	4.49	0.82	30.20	4.08	0.00	0.00	4.08	1.22	100.00	
SD104	416	49	16	245	7	8	5	3	759	
54.81	6.46	2.11	32.28	0.92	1.05	1.32	0.66	0.40	100.00	
SK210	391	29	41	124	6	0	3	0	607	
64.42	4.78	6.75	20.43	0.99	0.00	2.14	0.49	0.00	100.00	
SK211	157	25	19	86	2	0	1	26	316	
49.68	7.91	6.01	27.22	0.63	0.00	0.00	0.32	8.23	100.00	
SK401	118	14	14	362	10	1	0	0	519	
22.74	2.70	2.70	69.75	1.93	0.00	0.19	0.00	0.00	100.00	
SK212	125	30	69	305	2	16	6	21	588	
21.26	5.10	11.73	51.87	0.34	2.72	2.38	1.02	3.57	100.00	
SK304	822	96	70	424	40	48	42	40	1622	
50.68	5.92	4.32	26.14	2.47	2.96	2.47	2.59	2.47	100.00	
SK123	530	48	44	441	5	8	56	21	1159	
45.73	4.14	3.80	38.05	0.43	0.69	4.83	1.81	0.52	100.00	
SK010	366	18	13	26	4	2	3	5	440	
83.18	4.09	2.95	5.91	0.91	0.45	0.68	1.14	0.68	100.00	
SK002	602	135	83	523	8	18	70	9	1500	
40.13	9.00	5.53	34.87	0.53	1.20	4.67	0.60	3.47	100.00	
SK219	416	65	59	92	3	18	23	30	725	
57.38	8.97	8.14	12.69	0.41	2.48	3.17	2.62	4.14	100.00	
SK206	809	111	141	216	13	25	67	37	1515	
53.40	7.33	9.31	14.26	0.86	1.65	4.42	2.44	6.34	100.00	
SK207	121	70	56	48	8	6	18	2	363	
33.33	19.28	15.43	13.22	2.20	1.65	4.96	0.55	9.37	100.00	
SK014	300	114	133	117	34	8	63	14	831	
36.10	13.72	16.00	14.08	4.09	0.96	7.58	1.68	5.78	100.00	
SK202	252	25	56	259	14	0	32	12	672	
37.50	3.72	8.33	38.54	2.08	0.00	4.76	1.79	3.27	100.00	
SK009	222	147	154	64	1	0	20	18	627	
35.41	23.44	24.56	10.21	0.16	0.00	3.19	0.16	2.87	100.00	
SK346	561	39	65	172	1	6	49	3	953	
58.87	4.09	6.82	18.05	0.10	0.63	5.14	0.31	5.98	100.00	
SK118	599	94	53	234	15	35	34	6	1148	
52.18	8.19	4.62	20.38	1.31	3.05	2.96	0.52	6.79	100.00	
SK101	3809	738	1071	1275	275	275	75	594	8241	
46.22	8.96	13.00	15.47	3.34	1.57	3.34	0.91	7.21	100.00	
SK333	1976	427	701	623	129	94	217	18	4765	
41.47	8.96	14.71	13.07	2.71	1.97	4.55	0.38	12.17	100.00	
その他	2064	340	310	1054	57	22	66	223	4196	
の遺構	49.19	8.10	7.39	25.12	1.36	0.52	1.57	1.43	100.00	
検出	2490	481	813	1596	147	75	227	52	6509	
38.25	7.39	12.49	24.52	2.26	1.15	3.49	0.80	9.65	100.00	

第34表 名古屋城三の丸遺跡（県警本部地点）出土陶磁器類の用途組成表



## 参考資料 7

	供膳具	調理具	貯蔵具	灯火具	火 具	化粧具	神仏具	喫煙具	調度具	合 計
全 体	4179	848	895	685	342	15	203	31	285	7483
	55.85	11.33	11.96	9.15	4.57	0.20	2.71	0.41	3.81	100.00
遺構出土	1437	371	266	248	132	1	125	14	63	2657
	54.08	13.96	10.01	9.33	4.97	0.04	4.70	0.53	2.37	100.00
SK240	16	2	0	3	0	0	0	0	0	21
	76.19	9.52	0.00	14.29	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SD035	0	1	0	32	0	0	0	1	0	34
	0.00	2.94	0.00	94.12	0.00	0.00	0.00	2.94	0.00	100.00
SD209	12	5	1	7	0	0	0	0	0	25
	48.00	20.00	4.00	28.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK260	2	5	3	0	0	0	0	0	0	10
	20.00	50.00	30.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SD202	24	2	5	2	0	0	0	0	0	33
	72.73	6.06	15.15	6.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK289	58	34	0	18	0	0	11	0	12	133
	43.61	25.56	0.00	13.53	0.00	0.00	8.27	0.00	9.02	100.00
SK228	55	8	5	13	5	0	2	0	0	88
	62.50	9.09	5.68	14.77	5.68	0.00	2.27	0.00	0.00	100.00
SK223	43	17	2	15	0	0	0	0	0	77
	55.84	22.08	2.60	19.48	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SD025	387	55	66	17	42	1	55	0	8	631
	61.33	8.72	10.46	2.69	6.66	0.16	8.72	0.00	1.27	100.00
SD002	50	20	31	15	3	0	2	3	7	131
	38.17	15.27	23.66	11.45	2.29	0.00	1.53	2.29	5.34	100.00
下面土坑 合計	141	76	24	50	0	0	4	0	0	295
	47.80	25.76	8.14	16.95	0.00	0.00	1.36	0.00	0.00	100.00
上面土坑 合計	476	109	92	58	56	0	46	6	32	875
	54.40	12.46	10.51	6.63	6.40	0.00	5.26	0.69	3.66	100.00
整地層 合計	1200	242	255	176	67	10	19	2	67	2038
	58.88	11.87	12.51	8.64	3.29	0.49	0.93	0.10	3.29	100.00
検 出	461	92	121	109	44	0	5	4	41	877
	52.57	10.49	13.80	12.43	5.02	0.00	0.57	0.46	4.68	100.00
その他	1081	143	253	152	99	4	54	11	114	1911
	56.57	7.48	13.24	7.95	5.18	0.21	2.83	0.58	5.97	100.00

第36表 外町遺跡出土陶磁器類の用途組成表

	土 器	陶 器	磁 器	その他	合 計
全 体	764	4390	2311	18	7483
	10.21	58.67	30.88	0.24	100.00
遺構出土	304	1556	792	5	2657
	11.44	58.56	29.81	0.19	100.00
SK240	4	17	0	0	21
	19.05	80.95	0.00	0.00	100.00
SD035	32	2	0	0	34
	94.12	5.88	0.00	0.00	100.00
SD209	11	12	2	0	25
	44.00	48.00	8.00	0.00	100.00
SK260	5	5	0	0	10
	50.00	50.00	0.00	0.00	100.00
SD202	1	26	6	0	33
	3.03	78.79	18.18	0.00	100.00
SK289	49	84	0	0	133
	36.84	63.16	0.00	0.00	100.00
SK228	13	70	5	0	88
	14.77	79.55	5.68	0.00	100.00
SK223	8	66	3	0	77
	10.39	85.71	3.90	0.00	100.00
SD025	21	348	262	0	631
	3.33	55.15	41.52	0.00	100.00
SD002	4	99	28	0	131
	3.05	75.57	21.37	0.00	100.00
下面土坑 合計	70	215	10	0	295
	23.73	72.88	3.39	0.00	100.00
上面土坑 合計	58	428	385	4	875
	6.63	48.91	44.00	0.46	100.00
整地層 合計	189	1308	531	10	2038
	9.27	64.18	26.05	0.49	100.00
検 出	103	533	239	2	877
	11.74	60.78	27.25	0.23	100.00
その他	168	993	749	1	1911
	8.79	51.96	39.19	0.05	100.00

第37表 外町遺跡出土陶磁器類の材質組成表

## 参考資料 8

	陶器					磁器					陶器・磁器 以外の製品	合計	備考(その他の産地)
	瀬戸・美濃	肥前	常滑	その他	不明	瀬戸・美濃	肥前	輸入	その他	不明			
遺構合計	673.7	60.3	3.5	23.6	16.6	7.4	294.3	11.0	3.9	0.0	1001.6	2095.9	京都・信楽,丹波, 関西,備前
	61.56	5.51	0.32	2.16	1.52	0.68	26.89	1.01	0.36	0.00	—	100.00	
SK033	13.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3	2.3	0.0	0.0	8.0	23.7	
	82.80	0.00	0.64	0.00	0.00	0.00	1.91	14.65	0.00	0.00	—	100.0	
SK075	12.2	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	4.9	0.4	0.0	0.0	9.7	28.0	丹波
	66.67	0.00	2.19	2.19	0.00	0.00	26.78	2.19	0.00	0.00	—	100.0	
SK080	6.9	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	4.3	1.6	0.0	0.0	19.4	32.6	関西
	52.27	0.76	0.00	2.27	0.00	0.00	32.58	12.12	0.00	0.00	—	100.0	
SK149	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.4	1.0	0.0	0.0	11.9	24.3	
	64.52	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	27.42	8.06	0.00	0.00	—	100.0	
SD008	10.0	0.0	0.3	0.4	0.0	0.0	2.6	0.2	0.0	0.0	9.2	22.7	丹波
	74.07	0.00	2.22	2.96	0.00	0.00	19.26	1.48	0.00	0.00	—	100.0	
SD012	17.8	1.7	0.0	0.0	0.2	0.0	6.6	0.0	0.0	0.0	9.8	36.1	
	67.68	6.46	0.00	0.00	0.76	0.00	25.10	0.00	0.00	0.00	—	100.0	
SX004	60.5	0.8	0.0	0.0	0.5	0.0	0.7	0.0	3.5	0.0	56.8	122.8	
	91.67	1.21	0.00	0.00	0.76	0.00	1.06	0.00	5.30	0.00	—	100.0	
SK052	174.1	30.1	1.0	5.2	8.0	0.0	132.5	1.4	0.0	0.0	507.1	859.4	京都・信楽, 関西
	49.42	8.54	0.28	1.48	2.27	0.00	37.61	0.40	0.00	0.00	—	100.0	
SK078	118.0	22.9	0.0	4.3	4.1	0.0	81.2	1.7	0.0	0.0	272.4	504.6	京都・信楽,丹波, 関西,備前
	50.82	9.86	0.00	1.85	1.77	0.00	34.97	0.73	0.00	0.00	—	100.0	
SK144	68.2	1.2	0.7	11.4	2.2	0.0	17.2	0.5	0.0	0.0	51.9	153.3	京都・信楽, 関西
	67.26	1.18	0.69	11.24	2.17	0.00	16.96	0.49	0.00	0.00	—	100.0	
SK135	42.3	3.0	1.0	1.0	0.0	0.0	5.7	0.1	0.0	0.0	18.2	71.3	京都・信楽, 関西
	79.66	5.65	1.88	1.88	0.00	0.00	10.73	0.19	0.00	0.00	—	100.0	
SK084	89.6	0.4	0.0	0.5	0.5	0.0	26.5	1.8	0.0	0.0	19.5	138.8	京都・信楽
	75.10	0.34	0.00	0.42	0.42	0.00	22.21	1.51	0.00	0.00	—	100.0	
SK136	4.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	4.3	
	100.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	—	100.0	
SK145	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	
	100.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	—	100.0	
SD003	9.5	0.1	0.0	0.1	0.0	0.8	4.4	0.0	0.0	0.0	2.7	17.6	関西
	63.76	0.67	0.00	0.67	0.00	5.37	29.53	0.00	0.00	0.00	—	100.0	
SK056	36.5	0.0	0.0	0.0	1.1	6.6	4.0	0.0	0.4	0.0	4.9	53.5	関西
	75.10	0.00	0.00	0.00	2.26	13.58	8.23	0.00	0.82	0.00	—	100.0	

第38表 名古屋城三の丸遺跡(家庭・簡易裁判所地点) 出土陶磁器類の産地組成表

	陶器					磁器					陶器・磁器 以外の製品	合計	備考(その他の産地)
	瀬戸・美濃	肥前	常滑	その他	不明	瀬戸・美濃	肥前	輸入	その他	不明			
全体	4186	18	321	10	391	1926	365	2	8	211	827	8265	京都・信楽,備前, 関西
遺構出土	56.28	0.24	4.32	0.13	5.26	25.89	4.91	0.03	0.11	2.84	—	100.00	
	1350	9	108	10	243	639	145	0	0	105	319	2928	京都・信楽,備前, 関西
整地層	51.74	0.34	4.14	0.38	9.31	24.49	5.56	0.00	0.00	4.02	—	100.00	
	1261	2	108	0	45	373	142	0	8	26	208	2173	関西
検出	64.17	0.10	5.50	0.00	2.29	18.98	7.23	0.00	0.41	1.32	—	100.00	
	539	3	63	0	25	207	22	0	0	20	105	984	関西
その他	61.32	0.34	7.17	0.00	2.84	23.55	2.50	0.00	0.00	2.28	—	100.00	
	1036	4	42	0	78	707	56	2	0	60	195	2180	関西
	52.19	0.20	2.12	0.00	3.93	35.62	2.82	0.10	0.00	3.02	—	100.00	

第39表 外町遺跡出土陶磁器類の産地組成表

参考資料 9

全体	土器	陶器	磁器	その他	合計
3266	5351	4745	129	13491	
24.21	39.66	35.17	0.96	100.00	
2446	2935	2086	64	7531	
32.48	38.97	27.70	0.85	100.00	
SK248	22	24	18	0	64
	34.38	37.50	28.13	0.00	100.00
SK340	24	14	5	1	44
	54.55	31.82	11.36	2.27	100.00
SE106	56	114	79	5	254
	22.05	44.88	31.10	1.97	100.00
SE104	67	156	22	0	245
	27.35	63.67	8.98	0.00	100.00
SD129	721	313	242	0	1276
	56.50	24.53	18.97	0.00	100.00
SD102	101	135	57	4	297
	34.01	45.45	19.19	1.35	100.00
SK091	16	37	62	0	115
	13.91	32.17	53.91	0.00	100.00
SE107	14	28	15	1	58
	24.14	48.28	25.86	1.72	100.00
SK053	6	58	29	0	93
	6.45	62.37	31.18	0.00	100.00
SK055	8	44	23	1	76
	10.53	57.89	30.26	1.32	100.00
SK086	11	80	31	0	122
	9.02	65.57	25.41	0.00	100.00
SK274	1	19	34	1	55
	1.82	34.55	61.82	1.82	100.00
SK180	0	108	62	13	183
	0.00	59.02	33.88	7.10	100.00
SK032	92	49	72	2	215
	42.79	22.79	33.49	0.93	100.00
SK092	15	44	11	0	70
	21.43	62.86	15.71	0.00	100.00
SD101	358	643	682	3	1686
	21.23	38.14	40.45	0.18	100.00
その他の 遺構合計	934	1069	642	33	2678
	34.88	39.92	23.97	1.23	100.00
検出	707	1870	2012	41	4630
	15.27	40.39	43.46	0.89	100.00
その他	113	546	647	24	1330
	8.50	41.05	48.65	1.80	100.00

第41表 吉田城遺跡出土陶磁器類の材質組成表

全体	供膳具	調理具	貯蔵具	灯火具	火具	化粧具	神仏具	喫煙具	調度具	合計
8534	1108	967	1073	438	195	477	662	37	4.91	13491
63.26	8.21	7.17	7.95	3.25	1.45	3.54	4.91	0.27	4.91	100.00
4872	589	482	683	216	82	234	358	15	4.75	7531
64.69	7.82	6.40	9.07	2.87	1.09	3.11	4.75	0.20	4.75	100.00
SK248	49	5	9	0	0	0	0	0	0	64
	76.56	7.81	14.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK340	20	1	20	1	0	1	0	0	0	44
	45.45	2.27	45.45	2.27	0.00	2.27	0.00	0.00	0.00	100.00
SE106	193	12	25	5	0	0	2	0	2	254
	75.98	4.72	9.84	1.97	0.00	0.00	0.79	0.00	0.79	100.00
SE104	166	10	2	2	0	2	40	0	40	245
	67.76	4.08	0.82	0.82	0.00	0.82	16.33	0.00	16.33	100.00
SD129	1052	88	43	42	4	12	22	1	22	1276
	82.45	6.90	3.37	3.29	0.31	0.94	1.72	0.08	1.72	100.00
SD102	175	54	11	24	1	3	28	0	28	297
	58.92	18.18	3.70	8.08	0.34	1.01	9.43	0.00	9.43	100.00
SK091	59	8	0	31	0	0	17	0	17	115
	51.30	6.96	0.00	26.96	0.00	0.00	14.78	0.00	14.78	100.00
SE107	23	16	6	3	0	10	0	0	0	58
	39.66	27.59	10.34	5.17	0.00	17.24	0.00	0.00	0.00	100.00
SK053	49	14	6	4	3	0	17	0	17	93
	52.69	15.05	6.45	4.30	3.23	0.00	18.28	0.00	18.28	100.00
SK055	36	12	5	4	1	4	9	0	9	76
	47.37	15.79	6.58	5.26	1.32	6.58	11.84	0.00	11.84	100.00
SK086	62	15	3	22	2	5	10	1	10	122
	50.82	12.30	2.46	18.03	1.64	4.10	8.20	0.82	8.20	100.00
SK274	31	13	2	0	8	0	1	0	1	55
	56.36	23.64	3.64	0.00	14.55	0.00	1.82	0.00	1.82	100.00
SK180	86	5	7	14	30	0	29	0	29	183
	46.99	2.73	3.83	7.65	16.39	0.00	15.85	0.00	15.85	100.00
SK032	130	8	1	3	1	18	54	0	54	215
	60.47	3.72	0.47	1.40	0.47	8.37	25.12	0.00	25.12	100.00
SK092	40	7	0	4	0	0	19	0	19	70
	57.14	10.00	0.00	5.71	0.00	0.00	27.14	0.00	27.14	100.00
SD101	1035	129	131	170	42	35	35	6	35	1686
	61.39	7.65	7.77	10.08	2.49	2.08	2.08	0.36	2.08	100.00
その他の 遺構合計	1666	192	231	334	82	25	75	7	75	2678
	62.21	7.17	8.63	12.47	3.06	0.93	2.80	0.26	2.80	100.00
検出	2964	342	329	327	160	78	223	20	223	4630
	64.02	7.39	7.11	7.06	3.46	1.68	4.82	0.43	4.82	100.00
その他	698	177	156	59	66	35	81	2	81	1330
	52.48	13.31	11.73	4.44	4.96	2.63	6.09	0.15	6.09	100.00

第40表 吉田城遺跡出土陶磁器類の用途組成表

## 参考資料10

	供膳具	調理具	貯蔵具	灯火具	火 具	化粧具	神仏具	喫煙具	調度具	合 計
全 体	6033	1108	967	3574	438	195	477	37	662	13491
	44.72	8.21	7.17	26.49	3.25	1.45	3.54	0.27	4.91	100.00
遺構出土	2969	589	482	2586	216	82	234	15	358	7531
	39.42	7.82	6.40	34.34	2.87	1.09	3.11	0.20	4.75	100.00
SK248	37	5	1	21	0	0	0	0	0	64
	57.81	7.81	1.56	32.81	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
SK340	15	1	1	25	1	0	1	0	0	44
	34.09	2.27	2.27	56.82	2.27	0.00	2.27	0.00	0.00	100.00
SE106	155	12	17	63	5	0	0	0	2	254
	61.02	4.72	6.69	24.80	1.97	0.00	0.00	0.00	0.79	100.00
SE104	101	10	23	67	2	0	2	0	40	245
	41.22	4.08	9.39	27.35	0.82	0.00	0.82	0.00	16.33	100.00
SD129	396	88	43	698	4	12	12	1	22	1276
	31.03	6.90	3.37	54.70	0.31	0.94	0.94	0.08	1.72	100.00
SD102	99	54	11	100	1	3	1	0	28	297
	33.33	18.18	3.70	33.67	0.34	1.01	0.34	0.00	9.43	100.00
SK091	59	8	0	0	31	0	0	0	17	115
	51.30	6.96	0.00	0.00	26.96	0.00	0.00	0.00	14.78	100.00
SE107	14	16	0	15	3	0	10	0	0	58
	24.14	27.59	0.00	25.86	5.17	0.00	17.24	0.00	0.00	100.00
SK053	46	14	6	7	3	0	0	0	17	93
	49.46	15.05	6.45	7.53	3.23	0.00	0.00	0.00	18.28	100.00
SK055	31	12	5	9	1	5	4	0	9	76
	40.79	15.79	6.58	11.84	1.32	6.58	5.26	0.00	11.84	100.00
SK086	52	15	3	32	2	2	5	1	10	122
	42.62	12.30	2.46	26.23	1.64	1.64	4.10	0.82	8.20	100.00
SK274	31	13	2	0	8	0	0	0	1	55
	56.36	23.64	3.64	0.00	14.55	0.00	0.00	0.00	1.82	100.00
SK180	86	5	7	14	30	0	12	0	29	183
	46.99	2.73	3.83	7.65	16.39	0.00	6.56	0.00	15.85	100.00
SK032	91	8	1	42	1	0	18	0	54	215
	42.33	3.72	0.47	19.53	0.47	0.00	8.37	0.00	25.12	100.00
SK092	25	7	0	19	0	0	0	0	19	70
	35.71	10.00	0.00	27.14	0.00	0.00	0.00	0.00	27.14	100.00
SD101	776	129	131	429	42	35	103	6	35	1686
	46.03	7.65	7.77	25.44	2.49	2.08	6.11	0.36	2.08	100.00
その他の 遺構合計	955	192	231	1045	82	25	66	7	75	2678
	35.66	7.17	8.63	39.02	3.06	0.93	2.46	0.26	2.80	100.00
検 出	2449	342	329	842	160	78	187	20	223	4630
	52.89	7.39	7.11	18.19	3.46	1.68	4.04	0.43	4.82	100.00
その他	615	177	156	142	66	35	56	2	81	1330
	46.24	13.31	11.73	10.68	4.96	2.63	4.21	0.15	6.09	100.00

第42表 吉田城遺跡出土陶磁器類の用途組成表2

### 第3節 まとめ

以上、吉田城遺跡(愛知県東三河事務所地点)5,300㎡における発掘調査によって得られた成果を項目毎に区分し、事実関係をでき得る限り詳細に報告してきた。本文中にも述べてきたように、近世吉田城下町の遺跡として調査が開始されたのであるが、それ以外に古代や中世の遺構・遺物も確認されている。最後に、明かにし得た内容をまとめておきたい。

#### 古 代

平安時代に編纂された『和名類聚抄』<sup>(21)</sup>によれば、渥美郡の郷名として幡太・和太・渥美・高蘆・磯部・大壁の6つがあげられ、この6郷が律令制度によって定められた古代の渥美郡の集落を示している。その所在地については、さまざまな説があり、1カ所に比定することは難しい。今回の調査地点の所在する八町に隣接する今橋町や飽海町は、渥美郷の比定地として最有力候補地であり、古代より大きな集落があったことが、文献の方からも確認されている。今回検出された遺構群が、これらであることを証明しているのかを窺い知ることはできなかったが、柱穴列の示す方向性が豊橋警察署地点で検出された竪穴住居跡の主軸方向ともほぼ同様であることから<sup>(22)</sup>、奈良時代の時期にある程度の広がりを持つ集落が存在していたことが確認された。出土遺物は、遺構から出土したものは少なく、近世遺構の埋土中や検出段階でのものがほとんどである。大きく2つの時期に分けることができ、1つは8世紀前半を中心とした湖西窯の須恵器が出土する奈良時代と、10世紀前半を中心とする二川窯の灰釉陶器と甕等の土師器が出土する平安時代であり、奈良時代の遺物がその大半を占めている。

#### 中 世

中世において、三河湾沿岸地域は伊勢神宮の勢力が強く、調査区の所在する周辺にも「飽海神戸」や「吉田御藪」等が設置されており<sup>(23)</sup>、この地域に住む人々と伊勢神宮とは深い関係があったことが想定されます。今回、出土遺物等から鎌倉時代の溝や竪穴住居跡、井戸等が検出されているが、これらが伊勢神宮との関係を直接に示すものではなかった。溝は全体に浅く、後世の削平を受けているものと思われるが、古代や近世の方向性とは異なっており、南北軸より東西に30～40度を示している。6条の溝は一定の方向性を持っていることから、屋敷を区画する溝ではないかと考えられる。どの遺構においても、出土する遺物は小片ばかりで、年代決定にまで至っていない。唯一、1基のみ検出された井戸において、大量の山茶碗類と多くの自然遺物(貝類・昆虫類・植物遺体・動物遺体等)が確認されている。出土遺物等から、13世紀中頃には完全に埋設されていると考えられるが、井戸としての機能を失ってからすぐに埋められたのではなく、しばらくの間はごみ穴として利用されていたことが、出土した多くの資料からも窺い知ることができる。出土遺物は、古代と同様で近世遺構の埋土中や検出段階での出土が多いが、12世紀後半～13世紀前半の渥美窯の山茶碗類が中心で、他に常滑窯の甕類や壺類、貿易陶磁器である青磁碗片も確認されている。

また、豊橋警察署地点や豊橋市教育委員会による発掘調査において、中世吉田城すなわち今橋城に関連する時期の遺構が確認されている<sup>(24)</sup>が、今回の調査においては確認されてはいない。ただし、こ

の時期の遺物は、外堀等の近世遺構埋土中や検出段階では確認されている。これが単に、今橋城の範囲がこの地点にまで及んでいなかったことを示しているのであろうか、ここだけの結果では不明なことが多いので、今後の発掘調査の成果により明らかにしていただければ幸いである。

## 近 世

「吉田藩士屋敷図」等の絵図に描かれている外堀と武家屋敷が、今回の発掘調査において地中より現実に我々の目の前にその姿を表わしたのである。これまでその存在は確認されていた外堀が、初めて検出されその規模に目を見張らされたり、また、屋敷地境が溝や柵列、または塀とさまざまな形で区画されていること、建物跡や井戸等の検出、大量の出土遺物等、当時の人々の生活の痕跡を確認し得たことは、今回の発掘調査の成果としてあげることができよう。検出された多くの遺構の中から7軒の武家屋敷地と、そこに住んでいた人々を文献資料や絵図等から推定してきた。近世の遺跡の調査において、絵図や文献資料における成果の重要性は高いが、安易に絵図や文献資料に依存するのではなく、これを検証していく姿勢が必要ではないだろうか。これまで言われてきたように池田照政の時期の町割りが近世を通じて幕末にまで続いていたことは今回の調査においても証明されている。しかし、少なくとも18世紀後葉～末葉頃に照政の町割りに合わせた形ではあるが屋敷地境がやや変更されているようである。これは、出土遺物から、18世紀後葉までの遺物群と18世紀末から19世紀中葉までの遺物群とに大きく分けられることからこのように想定されるが、同様のことが豊橋警察署地点においても指摘されていることもあり<sup>(25)</sup>、この時期に何等かの変化を窺うことができる。

また、大量に出土した遺物は、27ℓ入りコンテナ約400箱余に及んでいる。その大半を占めているのは、近世陶磁器類や土器、瓦類であるが、その他にも焼塩壺・人形類・木製品・金属製品・石製品等、さまざまな遺物がある。個々の遺物に関する記述を省略して、近世陶磁器類と土器を用途により分類し、口縁残存率・口縁破片数・総破片数を求め、遺構毎にその用途や材質による組成の変化を明らかにしようとした。しかし、良好な遺構に恵まれなかったこともありそれぞれの組成の相違を明確にし得たとは言い切れない。また、同様の分析を実施している名古屋城三の丸遺跡や外町遺跡との比較・検討についても、単なるデータの紹介に終始し、出土遺物の絶対量の変化についてにまで言及することができずに、用途や材質組成の相違、地域差、身分・階級による遺物組成の格差等、すべてが不十分なままで終わってしまっている。このような遺物分析を実施している遺跡は少なく、他の近世遺跡による分析方法もさまざまである。そのバラバラのデータをどのように利用していけばいいのであろうか。でき得れば、近世遺跡における遺物分析の統一が図れないものであろうか。統一化は困難であるとしても、さまざまな分析に対応できるような遺物分類やデータの共有が果たせないものであろうか。大量に出土する近世陶磁器類においては無理かも知れないが、そのような方向にこれから進んでいくことが強く希望される。近世考古学が現在抱えている大きな課題であろう。

さらに今回、近世陶磁器類の用途・材質組成の整理に力点を置きすぎたため、それ以外の遺物がほとんど検討されることなくなおざりにされた感がある。全出土遺物の総合的な分析により、初めて当時の人々の生活の実態に迫ることができるものと思われる。これは単に編者の力量不足に他ならず、記して謝罪しておきたい。

(小嶋廣也)



第156図 吉田城遺跡周辺の地籍図（「吉田城址（I）」より転載）

西暦	年号	歴代城主	吉田城関連事項	日本
1467	応仁元			応仁の乱(~77)
1505	永正2	牧野古白	この年牧野古白、今橋城を築くという<一説に明応5年(1496)>	
1506	永正3	戸田宣成	10月 今川氏親今橋城を攻略、戸田憲光が牧野古白を敗る	
1519	永正16	牧野成三	この年牧野成三、戸田宣成を逐い今橋城に入る	
1522	大永2	牧野信成	この年牧野信成、今橋を吉田に改めるという	
1529	享禄2		この年松平清康、吉田城を攻め東三河の主部を支配下に置く	
1532	天文元	松平家臣	5月 松平清康、牧野信成を討ち吉田城落城という	山城法華一揆
1536	天文5	大橋知尚	12月 今川氏親、大橋知尚を吉田城に置くという	天文法華の乱
1537	天文6	戸田宣成	この年渥美郡大崎在城の戸田憲光、牧野伝兵衛を逐い吉田城を奪うという	
1543	天文12			鉄砲伝来
1546	天文15	大原資良	11月 今川義元、戸田憲光を逐い吉田城を攻略する	
1549	天文18			ザヴィエル来航
1560	永禄3			桶狭間の戦い
1564	永禄7	小原鎮実	5月 吉田城代小原鎮実、松平勢と下地に戦う	
			6月 松平家康、吉田を攻め酒井忠次に吉田小郷一円を宛行う	
1565	永禄8	酒井忠次	3月 松平家康、三河を統一し後吉田城開城される	
1567	永禄10		この年酒井忠次、橋尾井堰を開鑿する	
1568	永禄11			織田信長入京
1570	元亀元		この年豊川に土橋架橋されるという	姉川の戦い
1571	元亀2		4月 武田信玄、吉田城等を攻める	
1573	天正元			室町幕府滅亡
1575	天正3			
1579	天正7		11月 酒井忠次、吉田方新田へ横須賀原切発屋敷田畠の条々を下す	
1582	天正10			本能寺の変
1584	天正12			小牧・長久手の戦い
1588	天正16	酒井家次	10月 酒井忠次、致仕して京都桜井に住し、嗣子家次封を継ぐ	刀狩令
1589	天正17		11月 徳川家康、東三河郷村に年貢定書を下す	
1590	天正18		8月 徳川家康関東に移封とともに、酒井家次下総白井に移封	小田原征伐
		池田照政	8月 池田照政美濃岐阜より吉田城主となり、15万2千石を領す	
			9月 豊臣秀吉、この頃から三河の検地を実施する	
1600	慶長5		12月 池田照政、播磨姫路52万石に移封となる	関ヶ原の戦い
1601	慶長6	松平家清	2月 松平(竹谷)家清、武蔵八幡山より吉田3万石に移封となる	
1603	慶長8			江戸幕府開府
1610	慶長15	松平忠清	12月 松平家清没し、忠清遺領を継ぐ	
1612	慶長17		4月 松平忠清没し、後嗣なく絶家となる(後、宝飯郷中に5千石で再興)	
		松平忠利	11月 松平(深溝)忠利、三河深溝より吉田3万石に移封となる	
1615	元和元			大坂城落城 武家書法度等制定
1622	元和8		11月 吉田城本丸御殿完成する	
1632	寛永9	松平忠房 水野忠清	6月 松平忠利没す 8月 松平忠房遺領を継ぎ、三河刈谷に移封となる	
			8月 水野忠清、三河刈谷より吉田4万石に移封となる(後5千石加増)	
1637	寛永14			島原の乱(~38)
1642	寛永19	水野忠善	7月 水野忠清信濃松本に転封となり、水野忠善駿河田中より吉田4万5千石に移封となる	
1645	正保2	小笠原忠知	7月 水野忠善三河岡崎に転封となり、小笠原忠知豊後杵築より吉田4万5千石に移封となる	
1654	承応3		この年向山池を築立て、城下の外堀に流入させる	
1663	寛文3	小笠原長矩	7月 小笠原忠知没す 10月 小笠原長矩遺領を継ぐ	
1669	寛文9		3月 小笠原長矩、前芝燈明台を建設する	
1678	延宝6	小笠原長佑	2月 小笠原長矩没す 3月 小笠原長佑遺領を継ぐ	
1690	元禄3	小笠原長重	6月 小笠原長佑没す 10月 小笠原長重遺領を継ぐ	湯島聖堂落成
1693	元禄6		8月 吉田城下の下水道改修されるという	
1697	元禄10		4月 小笠原長重老中となり、武蔵岩槻へ転封となる	
		九世重之	6月 九世重之、丹波亀山より吉田5万石に移封となる	
1702	元禄15		8月 九世重之、新居関番を命じられる(以後吉田藩管轄)	赤穂浪士討入

第43表 吉田城関連略年表(1)



西暦	年号	歴代城主	吉田城関連事項	日 本
1705	宝永 2	牧野成春	10月 九世重之若年寄となり(同年9月)、下総関宿に転封となり、牧野成春関宿より吉田8万石に移封となる	
1707	宝永 4	牧野成央	3月 牧野成春没す 5月 牧野成央遺領を継ぐ 10月 大地震により吉田城本丸御殿倒壊する	
1712	正徳 2	松平信祝	7月 牧野成央日向延岡に転封となり、松平(大河内) 信祝下総古河より吉田7万石に移封となる	
1716	享保元			享保の改革(~45)
1729	享保14	松平資訓	2月 松平信祝大坂城代となり、遠江浜松に転封となり、松平(本庄) 資訓浜松より吉田7万石に移封となる	
1749	寛延 2	松平信復	10月 松平資訓京都所司代となり、遠江浜松に転封となり、松平(大河内) 信復浜松より吉田7万石に移封となる	
1752	宝暦 2		7月 藩校時習館創設される	
1768	明和 5	松平信礼	9月 松平信復没す 11月 松平信礼遺領を継ぐ	
1770	明和 7	松平信明	6月 松平信礼没す 7月 松平信明遺領を継ぐ	
1779	安永 8		10月 吉田本町医師藤井宗淳方より出火、4百余軒が焼亡する	
1782	天明 2			天明の大飢饉(~87)
1787	天明 7			寛政の改革(~93)
1788	天明 8		4月 松平信明、老中となる	
1817	文化14	松平信順	8月 松平信明没し、松平信順遺領を継ぐ	
1837	天保 8		5月 松平信順、老中となる(同年8月辞職する)	
1841	天保12			天保の改革(~43)
1842	天保13	松平信宝	12月 松平信順隠居し、松平信宝遺領を継ぐ	異国船打払令
1844	弘化元	松平信璋	10月 松平信宝没す 12月 松平信璋遺領を継ぐ	
1849	嘉永 2	松平信古	7月 松平信璋没す 11月 松平信古遺領を継ぐ	
1853	嘉永 6			ペリー来航
1854	安政元		11月 大地震により城内建物倒壊多し	日米和親条約締結
1858	安政 5			日米修好通称条約締結・安政の大獄
1860	万延元			桜田門外の変
1862	文久 2		6月 松平信古、大坂城代となる	坂下門外の変
1863	文久 3			薩英戦争
1864	文久 4			長州征伐
1865	慶応元		2月 松平信古、大坂城代を辞職する	条約勅許
1866	慶応 2			
1867	慶応 3			大政奉還
1868	明治元			鳥羽・伏見の戦い
1869	明治 2		2月 大河内信古、版籍奉還を奏請する	

第44表 吉田城関連略年表(2)

## &lt;参考文献&gt;

豊橋市美術博物館 『吉田城と歴代城主』 1989

豊橋市史編纂委員会 『豊橋市史 第1巻・第2巻』 1973・1975

## &lt;註&gt;

- 1) 川井啓介 『吉田城遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992  
豊橋市史編纂委員会 『豊橋市史 第2巻 本文編 近世』 1975
- 2) 註1) 川井氏報告書
- 3) 註2) と同じ
- 4) 全部で6点確認している。他の2点は、1つは豊橋市美術博物館所蔵の絵図であるが、深井氏所蔵の「吉田藩士屋敷図」と同様であるため割愛した。もう1点は、豊橋市中央図書館所蔵の「松平豊後守資訓公時代吉田城武家屋敷図」(本庄松平氏、享保14(1729)～寛延2(1749)を描いたもの)であるが、文字が不鮮明で不明な点が多いため、今回の調査からは省いている。
- 5) 豊橋市史編纂委員会 『豊橋市史 第6巻 史料編 近世編藩史料』 1976
- 6) 註5) と同じ、「吉田藩分限帳」は大河内松平家の家臣を記したものであるが、3種類残されている。1つ目は表題に「寛延吉田藩分限帳」とあるが安永9年(1780)のもの、2つ目は表題に「松平伊豆守家中分限帳」とあり、これが上・下に分かれていて、上巻は吉田・新居・大津分で安政6年(1859)、下巻は江戸分で嘉永7年(1854)である。それに弘化2年(1845)の「吉田藩高附帳」、元治元年(1864)の「御用達連名」等が付記されている。全て、『豊橋市史』に収録されている。
- 7) 「吉田藩士屋敷図」については、郡奉行であった柴田猪助(善伸)の屋敷が新町の柳生門脇にあり、同人は天保6年(1835)に代官町より新町に屋敷替えとなり、嘉永2年(1849)には没しているため、この間の状況を描いたものであると考えられる。
- 8) 「吉田御城内惣絵図」については、その記載されている藩士の氏名から、大河内松平氏が最初に吉田藩に入封した段階を描いているものと判断される。そのため、正徳2年(1712)～享保14年(1729)が想定される。(第42表・第43表の吉田城関連年表を参照)
- 9) 「吉田藩士屋敷図」については、絵図の中に柴田収治の名前が見えている。これは、註7) で前述した柴田猪助の子供であることがわかっていることから、この絵図よりは後の時期の様子を描いているものであると、豊橋市美術博物館の増山真一郎氏、同高橋洋充氏より御教示いただいた。
- 10) 「吉田藩元禄役寄帳(仮題)」については、元々は徳国文庫に所蔵されていた史料で、元禄10年(1697)8月に小笠原家と久世家との交替を記したもので、前半は藩士屋敷図、後半には役目及び禄高について書かれた郷土史料である。昭和18年(1943)に近藤恒次氏により書き記されたものが現在は橋良文庫に残されているが、原本は昭和20年(1945)6月の豊橋空襲の際に焼失したものとされている。
- 11) 前山 博 『伊万里焼の流通—記録に求めて』 『別冊太陽 古伊万里』 平凡社 1988  
同 『近世、伊万里焼の流通—記録から探る—』 『国内出土の肥前陶磁 古唐津・伊万里の流通を探る』 九州陶磁文化館
- 12) 遠藤才文 『名古屋城三の丸における陶磁器の消費動向—遺物分析試論(1) 播鉢に焦点をあてて—』 『近世陶磁器の諸様相—消費地における17・18世紀の器種構成— 第5回関西近世考古学研究会発表要旨』 1993
- 13) 播鉢の分類については、本報告書60～61頁を参照していただきたい。
- 14) 播鉢の消費絶対量の変化とは、Ⅰ類からⅧ類に分類された播鉢を各形態毎に数値で示したものの。数値には、接合後口縁残存率、接合前口縁破片数、さらに残存率/破片数の3つで示している。
- 15) 播鉢の消費量基準増加率とは、註14) で求められた播鉢の消費絶対量の変化の数値を利用し、それぞれの数値を、Ⅲ類に分

類された播鉢を基準としてこれを100とした場合に、他の形態の播鉢がどれだけ増減をしているのかを百分率で示したものである。

- 16) 播鉢の消費量増加率とは、註14)で求められた播鉢の消費絶対量の変化の数値を利用し、古い播鉢から次の播鉢へどのぐらゐの比率で増加しているのかを百分率で示したもの。個体増加率と破片増加率を求められている。播鉢の消費絶対量の変化や播鉢の消費量基準増加率では、VI類に分類された播鉢だけが極端に落ち込んでいるように見えていたが、これによりIII類→IV類→V類→VI類と播鉢の消費量が徐々に減少していることが確認されている。
- 17) 金子健一 「名古屋とその周辺における18・19世紀の陶磁器と土器」 『近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成— 第6回関西近世考古学研究会発表要旨』1994
- 18) 服部 郁 「幕末から明治の瀬戸窯—瀬戸新製焼—」 『遺跡にみる幕末から明治 江戸遺跡研究会第6回大会発表要旨』1993
- 19) 井汲隆夫 「消費地(7) 江戸」 『近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成— 第6回関西近世考古学研究会発表要旨』1994
- 20) 器種分類については、碗類11器種、皿類11器種、鉢類31器種、甕類4器種、壺類6器種、瓶類16器種、鐘形類5器種、鍋類4器種、釜類2器種、水注類8器種、箱類2器種、杓子類2器種、乗燭類2器種、器台類10器種、その他の特殊類10器種の計124器種に分類されている。また、製作地別は材質とともに分けられ、磁器が肥前系、波佐見・平戸系、瀬戸・美濃系、他・不明の4つ、陶器が肥前系、瀬戸・美濃系、信楽系、京焼系、志戸呂系、他・不明の6つ、炆器は備前系、明石・堺系、丹波系・常滑系、他・不明の5つ、土器は江戸在地系、泉州系、播磨系、他・不明の4つに細分されている。

また、推定個体数の算出方法としては、同一遺構内の陶磁器類・土器類について個別別資料と破片資料に分ける。個別資料については、そのまま1個体として数える。破片資料については、底部の残存率を1/8単位で数え、1/8以下の破片には1/16を、1/8～2/8の破片には3/16を、2/8～3/8の破片には5/16を、3/8～4/8の破片には7/16を、4/8以上の破片には1をそれぞれに掛け合わせた数値(小数点以下四捨五入)に、個別資料数を合わせて得られた数値が推定個体数とされている。

詳細については、以下の報告書を参照していただきたい。

新宿区四谷三丁目遺跡調査団他 『四谷三丁目遺跡』1991

新宿区内藤町遺跡調査会他 『内藤町遺跡』1992

新宿区南町遺跡調査団他 『南町遺跡』1994

- 21) 承平年間(931～937)に、源順により編纂されたわが国最初の分類体百科辞典である。
- 22) 註2)と同じ
- 23) 建久三年八月「伊勢大神宮神領注文」 『鎌倉遺文 第2巻』
- 24) 註2)と同じ  
豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会 『吉田城址(1)』1994
- 25) 註2)と同じ